SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES
3 9088 01109 9900

8/1894 C

1/7

Botanical magazine

植物學雜誌

652/1596 D.

第八卷

(8)

自第八十三號至第九十四號

植物學雜誌編輯所發行

明治廿七年

QK1
.B33

*Vol. 8

植物學雜誌第八卷目錄

ARTICLES IN ENGLISH.*

On the Structure of Cystoclonium armatum, Harv. By Kintarō Okamura. 1.
On the Behaviour of the Nuclei during the Conjugation of Zygnema. (Pl. V.) By Seiichirō Ikeno. 187.
Japanese Species of Betula. (Pl. VI.) By Mitsutaro Shirai. 317.
Three Japanese Plagiogyriæ. By T. Makino. 332
Notes on the Attraction-spheres in the Pollen-cells of Ginkgo biloba. By Sakugorō Hirase. 359.
Gymnogramme Makinoi, Makin.. (Pl. IX.) By Tomitarō Makino. 481.

あ之部

青もしの木の自生地 59
あかとんぼ及ほさきやどりき 379
あきからまつ 377
あせぼ 213
アットラクションスフィヤ（公孫樹ノ受胎期前ニ於ケル花粉細胞ノ） 361
吾妻山ノ植物 29
あふひごけノ産地 61
あぶらぎり 450
あぶらつゝじ 215
あまみけうちくさう 108
ありたさう 374
Alpen ノ植物ノ葉ノ構造ト共生理上ノ關係 511
アントンヨゼフベーム氏 94

い之部

いしもちさう 369
いろいなもり 13
いろつゝじ 471
いたやかへで 144
いつさきノ辯 60
一種をのをれ 331
いさらん屬ノ奇異ナル受胎 166
いぬつげ 144.448
いぬなづな 378
ゐのこづち 434
いはざくらナリ（ささごくらハ） 173
いはせんさうさう 43
岩手山顯花植物目錄追加 483
岩手山採集顯花植物（陸中） 423
Elægnus umbellata, Thb. var. β. rotundifolia, Makino. 302
Eriocaulon 屬十二種（帝國産） 506
隱花植物實驗錄 3

う之部

Woodsia insularis, Hance 250
うきごけ 293
うけゆりノ學名 304
うこん 374
うしはこべ 143
うすばぜにごけ 293
うだいかんば 327
うつぎ 450
うつぎ屬 133
うらじろ 331
うらじろうつぎ 505
うらじろかんば 331
うりはだかへで 52
うろこごけ 293
うんぬけハ新種ナリ 90

ゑ之部

衛矛屬ノ托葉 387
Æsculus chinensis Bunge 果シテ本邦ニ産スヤ 300
ゑごのき 144.449
惠那嶽及其附近諸山ノ植物 79

ゑにしだ 374
ゑのき 194
江ノ島箱根地方植物採集紀行 143
ゐんごさくノ數品 226
煙草 374
煙草植物中ニコチンノ所在 518
ゑんじゅ 144

を、お之部

奥州地方植物採集略記 367.421.458.502
歐洲ノ蜜柑産出國 133
おかめざさ 219
おぎノ學名 90
をだまき 377
をだまき(むらさき) 377
おにへご 411
をのをれ 329
をのをれ(一種) 331
をほきじのを 335.337
おほけたで 465
おほばこ 379
おほばしらかんば 327
おほばみねばり 329
おほやまはこべ 433
おもだか(くわゐト) 137.195
おやりはぐま 302
おらんだせんにち 374
おりつるらん 89.90
おろしまちく 218
をんのうれん 329
をんのれ 329

か之部

海藻(土佐産ノ) 489
かいだう 195
海中ノ「バクテリア」 .181
かき 449
各種ノ強度ノ酒精ヲ得ル法 46
賀來飛霞君小傳 193
かしをしみ 213
合衆國ニ於ケル日本産李果ノ評判 514
樺屬ノ說(日本) 323
かほほね 377
かはらよもぎ 74
かはみさり 434
槭（カヘテ）樹花雜記 51
かやつりぐさ 380
から崎ノ孤松 46
唐崎ノ松ノ病源 376
カラヅガム植物 462
からたちばなノ學名 381
かりがねさう 434
Galphimia glauca, Cav. 507
かんしのぶほらごけ 412
廣東人參ノ學名 224
かんば 327
がんぴ 327

き之部

九州採集土産 59.102.240
九州産きけまんノ新種 303
きくこうちく 218
きけまんノ新種(九州産) 303
きさなぎたけ(冬虫夏草ノ一種) 410
ぎしぎしノ學名 174
きしのをしだ屬 70
寄生植物二種 243
寄贈金及ヒ書目 47.95.135.186.230.277.316.358
398.442.449.519.
きろざくら 173
きたよし 381
ぎづたノ學名 300
揮發油の植物体に於ける化學的研究 27.52
きば及のかはらまつば 379
きぶぢ 100
きむめいちく 218
ぎやうぎしばのをはくろ 244
凶年貧民の食用 185
蕎麥ノ研究一斑 245.288.417.451
菫菜ノ香液 392
きんしばい 101
きんさらのを 507
ぎんなんノ受胎期ニ就て 7
きんばいさう 143

く之部

くさぎ 404
くさのぼたん 304
くまざさ 216
くもたけ 340
くものすぜにごけ 293
Classfication of Hardy Bamboo ニ就キ (Bean 氏ノ) 216
くれのおも 236
黑岩恒氏採集琉球植物 370
くろちく 219
くろはりゐ 380
くろへご 411.
禾本類ノ葉 92
くわゐトおもだか 137.195

け之部

硅藻の着色 270
けいさう 101
けし 378
けぜにごけ 293
嫌雨的器官(好雨的器官ト) 385

こ之部

こいけま 301
こいはざくら 174
好雨的器官ト嫌雨的器官 385
公孫樹ノ受胎期前ニ於ル花粉細胞ノアットラクションスフィヤ 361
こゝめがやつり 380
こゝめまんねんさう 10
こつばだ 329
こつばだみればり 329
こばのぜにごけ 329
こばのみづぜにごけ 329
こふうせんかづら 415
こふぢうつぎ 379
こまつなぎ 42
ごみし(北) 223
ごみし(てうせん) 223
こめばつがざくら 213
コロシント 154
根毛ニ付テ 473
こんろんさうノ學名 302

さ之部

さいはだ 327
さいはだかんば 329
細胞核分裂ノ際細胞仁ノ行爲果シテ如何 85
細胞中ニ於ケル核ノ位置 469
細胞分裂ト外界トノ關係 384
さうしかんば 328
草木圖説ノつぼくさハ吾人ノ稱スルつぼくさニ非ス 42
さかき 100
腊葉ノ萎縮度 353
櫻島ノ植物 102
さくらたで 405
ざくろさう 434
さゞんくわ 100
さゝおもだか 379
さつきつゝじ 450
薩芋の事 184
ささいもニ就テ 156
さらさどうだん 215
さるなし 100
さんかくゐ 380
さんせうも 3

し之部

しこくいちげ 172.174
しゞみばな 194
しだ(羊齒)科 22
質問應答 134.229
しなのがき 449
Cynocrambe japonica, Makino 348
四方竹 218
しばな 142
しますなびきさう 108
しまひよどりばな 73
しまやまふぢうつぎ 379
蒸發作用ノ實驗法(植物) 468
ジユニペルス之結實 386
樹木生活ノ起原 391.430.465.516
種子及果實ノ適應 126

食鹽ノ飽和溶液中ニアリテ生長スル黴菌　471
植物葉氣孔ノ個數幷ニ大小　231
植物葉ニ於ケル開花期ト分類上ノ位置トノ關係　474
植物葉ニ於ケル鹽ノ影響　93
植物園ノ植物二三　88
植物學名一斑　377
植物家旅行　46
植物雜俎　35.81.116.164.373.432
植物名彙　46
植物蒸發作用ノ實驗法　468
植物象牙　349
植物体中水ノ上昇ニ就テ　345
植物ノ枝條ノ北向(一)(二)　276
植物ノ化學的實驗(一)(二)　206.279
植物家ノ深海探撿　518
植物ノ數　259
植物根ニ對スル銅鹽類ノ作用　86
しもくれん　143
松竹梅　315
しらかんば　12
しらたまかづら　327
しられせんきう　80
しらはしのき　52
しりふかがし及松ノ雌花ノ位置ニ就テ　427
しろざくら　327
しろはなのらふばい　101
しろどうだん　214
人躰ノ輪癬　269

す之部

Swertopsis umbellata, Makino ヲ伊豆ニ採ル　435
Suæda asparagoides, Makino.　382
Suæda maritima, Dumourt. ノ. angustifolia, Ledeb. 横濱附近ニ産ス　382
須川長之助氏　44
すかんぼ　101
Sparganium　507

せ之部

せにあふひ　378
せにごけ　293
接合藻ノ新器官　430
蘚苔植物ノ呼吸並同化作用　472
セントロゾームト細胞仁　180
せんにちさう　405

そ之部

相(豆)地方植物採集日誌　25.70.209
總房地方植物採集記行　158
そくづ　11
象皮病　244
そてつな　74
その　144
そろ　144

た之部

たうおほばこ　379
たうれすみもち　381
たうもろこしのおばけ　443
たかわらび　413
たけかんば　328
たけにぐさ　382
たこのあし　379
たぬきあやめノ新産地　59

ち之部

竹節人參　224
地藏かんば　323
ちさりのき　52
ちや　100
ちやろめろさうニ二種アリ　43
ちやんばぎくノ學名　382

つ之部

つくししほがま　349
蟏蛸（ツチグモ）圖解　373
蟏蛸（ツチグモ）ニ寄生スル冬蟲夏草ニ就テ　337
豆相地方植物採集日誌　25.70.209
つちさりもち極北産地　303
つゝじ(はこ)　132
つゝじ(ほ)　133
つのごけ一種　293
つばき　100
つりふれさう　434
つるかのこさう　143
つるうば　101

つるねこのめさう　255
つるもうりんくは　108
つるりんだう　433
つるれいしノ根ノ病害ニ就テ　499

て之部

帝國産 Eriocaulon 屬十二種　506
帝國大學植物園ノひなげしニ兩品アリ　304
帝國大學植物園來觀人　228
てうせんごみし　222.223
Deutzia discolor, Max.　305
Deutzia hypoleuca, Max. 山城ニ産ス　505
Deutzia Maximowicziana, Makino.　505
澱粉粒ノ構造　392

と之部

豆科植物ニ見ル根瘤ノ生長模樣及び其組織　168
豆科植物ノ根瘤ヲ論ズ　308.344.387
東京植物學會錄事　95.124.185.229.276.316.442
479.519.
とうしん　11
燈心草科ノ種類(日本ニ産スル)　57
どうたう草　394
どうだん(しろ)　214
どうだんつゞし　214.215
とうだん(べに)　214
冬虫夏草ノ一種(きさなぎだけ)　410
とがちぎ　10
ときはすすき　89
土佐國産地錢科植物　291
とゞくらハいはざくらナリ　173
土佐産ノ海藻　489
トノーラ　74
土馬駿類(ベシエレール氏日本産)　297
とりかぶと　206
Drymaria cordata, Willd.　349
Drymaria divaricata, H. B. et Kunth　349
Dorema Ammoniacum, Don.　343
とんがんび　328

な之部

ながはのいしもちさうノ新産地　478
ながはのいぬしで　376
なし　194
なりひらだけ　217

に之部

にがな　74
にくけい　450
二月下旬植物園植物雜記　125
二三植物ノ化學的實驗　206.279
二三植物ノ枝條ノ北向　276
にしきゞノ學名公布ノ年代　383
二株ノふうらん　37
につくわうしやくなげ　212
日光山植物目錄　46
Nitella japonica, Allen　308
にはうめ　194
にほいたで　405
日本樺屬ノ說　323
日本産のぼたん科植物　304
日本産 Plagiogyria 屬三種　332
日本産みくり屬ニ三種アリ　507
日本植物學名一斑　377
日本ニ産スル燈心草科ノ種類　57
日本藥局方植物篇　15.62.104.152.202.235.283.
343.364.406.454.497.
日本羊齒屬徵　22.67.145.282.
にれゑのき　376
にれもみノ說　399
にらばらん　172
にらばらん四國ニ産ス　172
人參ノ學名　224
竹節……廣東……　224

ぬ之部

ぬまはこべ　508
ぬまはりゐ　380
ぬるで　434

ね之部

ねこのめさう檢索譯述　251
ねこやなぎ　151
ねぢき　213
ねぶた　144
ねむのき　144
根本莞爾氏　Swertopsis umbellata. Makinoヲ伊

豆ニ採ル 435

の之部

農科大學々術報告第二卷第一號 204.354
農科大學桑園 397
のげいさう 405
野々山巳年衛氏 228
ノーバン 74
のぼたん科植物(日本產) 304
海苔ニ付着セル硅藻ノ數 209

は之部

黴菌(食鹽ノ飽和溶液中ニアリテ生ズル) 741
黴菌ニ對スル光線ノ作用 509
ばいくわいかりさう 143
はうちはかへで 51
放光植物 474
白山ノ植物 434
「バクテリア」ノ説 41.131.195.227.271.310.350.475.510.
はこつゝじ 32
箱根(江ノ島)地方植物採集紀行 143
はこべ 143
蓮ノ咲花音 392
ハテルマアチキ 12
ハテルマカモメヅル 108
ハテルマギリ 12
葉ノ向日力 92
はぶさうニ就テ 239
はまもくこく 10
ばらんニ就テ 75
はまやなぎ 142
はだかほゝづき 434
はだけあさ 305
ばんしろう 10
ばんすろ 10
Bamboo ニ就キ (Benn 氏の Classification of Hardy) 214

ひ之部

Benn 氏ノ Classification of Hardy Bamboo ニ就キ 214
ひがん花科諸屬ノ檢索表 436
ひさかき 100
砒石ニ生ズルかび 387
Histerophyto 270
びつじぐさ 378
ひとつばたごノ説 98
ひなげしニ兩品アリ(帝國植物園ニ) 304
ひはつ 414
ひめかはほね 378
ひめしやくなげ 212
ひめぜにごけ 393
ひめほたるゐ 380
百花雜記 100.142.404.448
ひろばうきごけ 293

ふ之部

冬木常盤木の事 270
ふうりんつゝじ 215
Ferula Scorodesma, Benth. et HK. 407
ふきづめまんれんさう 10
ふくじもさう 101
ふしぐろニ兩品アリ 45
富士山植物分布ノ眞景 495
富士山ノ雪及植物分布ニ就テ 256
ふぢうつぎ 379
ふぢばかま 379
ふとゐ 380
葡萄實ノ成長ニ關シ種子ノ働キ 36

へ之部

ベシエレール氏日本產土馬騣類 297
べにかはほね 278
べにどうだん 214
へらおもだか 380

ほ之部

ほうのきト厚朴 93
ほざきなゝかまど 378
ほしくさ屬襍記 506
ほろばあきのげし 74
ほろばをのをれ 330
ぼたんばうふう 11
ほつゝじ 133
ほるとのき 278
Holostemon cordata, L. 349

Holophyte 270

ま之部

まかんば 325
松ノみどりノ運動ニ就テ 148.340.445
松屬ノ植物ニ就テ 97
まつぶさ 222.223.143
まつもとノ學名 169
まひづるさう西霧島山上ニ滿ツ 303
まゝこな 133
摩耶山ノ松柏科植物ノ光景 393
マラハンカー 11
Marchantia alato-capitulata, Steph. n. sp. 293
まるばあきぐみ(新變種) 301
まるばおもだか 380
まるはおもだかノ形狀幷ニ學名 171
まるばのさはたうがらし東京近郊ニ産ス 508
まるばやはずさう 129

み之部

みこでそまトハ何ソヤ 305
みずれ 329
みすめ 328
みずめあずさ 329
みづあふひノ雄蕊 6
みづぜにごけ 293
みつでかへで 51
みればり 329
三好學氏ノ研究二件 175.383
みやまこゝめぐさ 133
みやまゝこな 133
みやまよめな 172.174

む之部

むさしあぶみ幷ニむらさきむさしあぶみ 301
むもれ木 93
むらさきとだまき 377

め之部

めだけ 217

も之部

孟宗竹 133.219
もみぢ 52
もみぢからまつ 377
もみぢどころ 172
Montia fontana, L. 日本ニ産ス 508
もんばのき 108

や之部

やうらくつゝじ 215
野外植物筆記 433
やきばざゝ 217
やだけ 218
やどりぎニ就テ 219
やばずゑんどうノ莢 37
やぶでまり 172
やぶまめノ地中莢 130
やへがや 413
八重山列島各屬島ノ植物 9.72.107
やまゑんじゅ 144
やまそてつ 333.335
やまそてつハ新種ナリ 90
やまごくさ 348
やまぶきしようま 378
やまらつきやう 142
やんばるはくか 109

ゆ之部

Eucalyptus globulus, Labill. 62
遊離窒素ヲ同化スル植物ニ就テ 275

よ之部

楊柳屬ノ識別ニ就テ 37
繇條書屋植物雜記 42.89.129.300.348.377.435.505
葉面ニ堆積セル蠟ノ功用 92
葉面ハ水分ヲ吸收スルヤ否ヤヲ論ズ 49
よぐそあずさ 329
よぐそみねばり 329
よし 381
よし(きた) 381

ら之部

らつきやう 143
蘭科植物ノ自花授精ニ就テ 122

り之部

りうきういぬたで 416
琉球産食用ノ念珠藻 305
琉球産ノ一草 349

琉球人のかうがい 104
柳花雜記 151
柳樹ノ生長 37
陸中岩手山採集顯花植物 423.461
栗果ノ位置ニ就テ 394
りんごこけ 160

る之部

るゐえふしようま 392

れ之部

零余子 269
蓮ノ咲花音 392

わ之部

わせをばなハ帝國「フロラ」ノ新品ナリ 221

や之部

やうらくつゝじ 215
やばすゐんごうノ葵 37

NOTICE:

In December last appeared
The Annual Catalogue for 1895.
of the
Botanical Exchange Club of Vienna.
(Founded in 1845).

In this cataloque about **4000** species, formes, and hybrids of interesting herbarium plants are offered for *sale* and *exchange.*—This list is very **complete** and **rich** in **new** and **rare** species.

The cataloque will be sent **gratis** and **franco** to any one who needs.

J. Dörfler.
I. Burgring 7, Vienna
(Austria).

謹賀新年

明治廿八年一月一日

會長　松村任三
幹事　大久保三郎
仝　平瀨作五郎
仝　澤田駒次郎

恭賀新年

明治廿八年一月一日

堀正太郎

理學士白井光太郎著

植物病理學　下編

紙數三百頁
定價金四拾錢
郵税金四錢

此書ハ分テ上下二巻トナシ上巻ニハ總論及各種ノ緊要ナル成長要件ノ過不足ヨリ起ル病患及突然來侵スル有害ナル無機勢力ノ作用ヨリ起ル病患及人爲ノ損害ヨリ起ル病患及其防除法ヲ説キ下巻ニハ顯花植物寄生、隱花植物寄生、雜草、虫癭等ヨリ起ル諸病及其防除法ヲ記載ス學校ノ教科用ノミナラズ農稼。林園。樹藝ノ諸業ニ從事スル實業家ノ參考ニ適用スベキ有用無比ノ良書ナリ

賣捌所
京橋南傳馬町有隣堂、神田裏神保町敬業社、日本橋區通三丁目丸善書店

恭賀新年

明治二十八年一月改正　總目錄　御入用ノ方ハ郵券四錢御送付ヲ乞フ

出版書籍目錄

菊池熊太郎君著
新撰普通物理學（全一册）
定價金一圓郵稅金八錢紙數四一二木板二五五

深井鑑一郎君輯
中學漢文（全八册以下近刻）
第一編上下發兌各册定價金二拾錢郵稅金四錢

理學士西松二郎君校閲　敬業社編纂
普通鑛物學教科書（全一册）
定價金三拾錢郵稅六錢紙數二八三木板一四七

敬業社編纂
（英文）佛國革命史（全一册）
定價金二拾錢郵稅四錢紙數百七十ページ

醫學士杉田盛君纂譯　醫　石濱掬三君校正
（通俗）海水浴論（全一册）
定價金拾五錢郵稅二錢紙數八十ページ

呑象　高島嘉右衛門君著
（增補）高島易斷（全十七册）
自第一巻至第十巻發兌定價各金二十錢郵稅金四錢以下近刻內六巻郵稅六錢

志賀重昂君著
日本風景論（全一册　再版品切　三版印刷）
定價金五拾錢郵稅八錢紙數二百二十三ページ

理學博士箕作佳吉君著
（通俗）動物新論（全一册）(近刻)

越溪　西村豐君著
朝鮮史綱（全一册）(近刻)

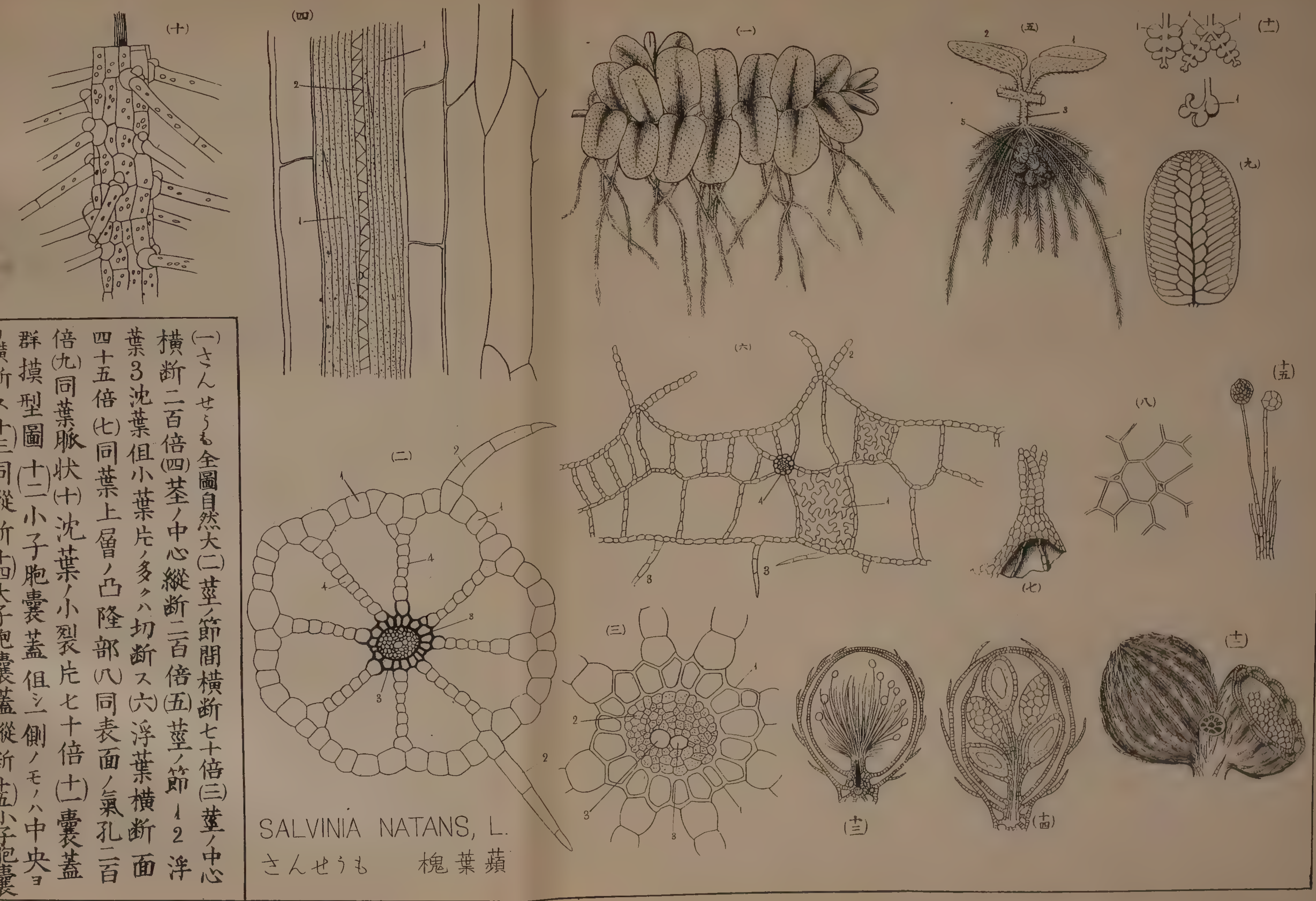
岡吉壽君著
（生徒用小學毛筆）圖畫臨本（全部揃十三册）
定價金五拾二錢五厘郵稅金拾錢

（教師用小學毛筆）圖畫臨本（全部揃九册）
定價金五拾四錢郵稅金八錢

（小學毛筆）圖畫臨本教授法（全一册）
定價金六錢郵稅金二錢

弊社ハ中學校師範學校諸專門學校其他同程度ノ敎科書及各種敎員生徒諸君ノ參考書類ノ出版ヲ專業トシテ續々發刊仕候也

東京神田裏神保町
發兌書肆敬業社

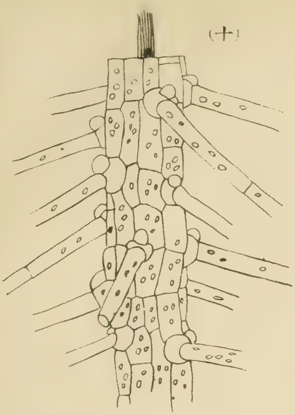


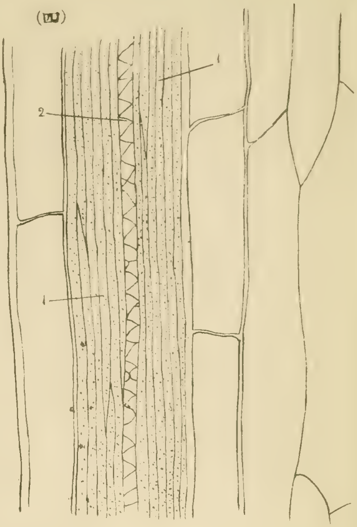
(一)さんせうも全圖自然大(二)莖ノ節間橫斷七十倍(三)莖ノ中心橫斷二百倍(四)莖ノ中心縱斷二百倍(五)莖ノ節 1 2 浮葉 3 沈葉但小葉片ノ多クハ切斷ス(六)浮葉橫斷面四十五倍(七)同葉上層ノ凸隆部(八)同表面ノ氣孔二百倍(九)同葉脈狀(十)沈葉ノ小裂片七十倍(十一)囊蓋群摸型圖(十二)小子胞囊蓋但シ側ノモノハ中央ヨリ橫斷ス(十三)同縱斷(十四)大子胞囊蓋縱斷(十五)小子胞囊

SALVINIA NATANS, L.

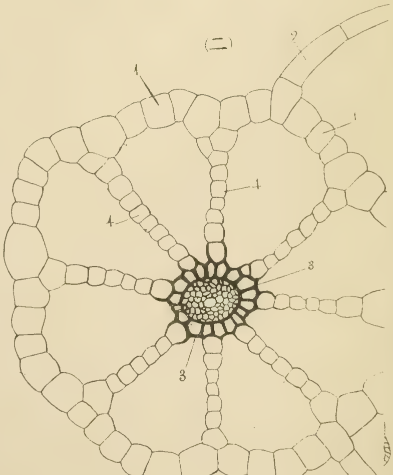
さんせうも　槐葉蘋

第一版





(一)さんせうも全圖自然大(二)莖ノ節間横断七十倍(三)莖ノ中心横断二百倍(四)茎ノ中心縦断二百倍(五)莖ノ節 1 2 浮葉3沈葉但小葉片ノ多クハ切断ス(六)浮葉横断面四十五倍(七)同葉上層ノ凸隆部(八)同表面ノ氣孔二百倍(九)同葉脈状(十)沈葉ノ小裂片七十倍(十一)囊蓋群摸型圖(十二)小子胞囊蓋但シ一側ノモノハ中央ヨリ横断ス(十三)同縦断(十四)大子胞囊蓋縦断(十五)小子胞囊



SALVINIA NATANS, L.

さんせうも　槐葉蘋

植物學雜誌第八卷第八十三號 (明治二十七年一月二十日)

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII. January 20, 1894. No. 83.]

On the structure of Cystoclonium armatum, Harv.

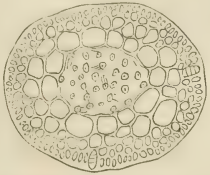
By K. Okamura.

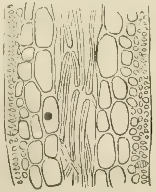
Dr. W. H. Harvey describes this Japanese alga in Gray's list of Jap. pl. p. 332. no. 19. with the following remark.:—

"This has the habit of *Gracilaria armata*, and a structure of frond not very dissimilar, but the fruit is that of a *Cystoclonium*. There is no medullary stratum of filaments."

The plants I have studied will agree with Harvey's description in their external characters, and have cystocarps and tetraspores quite like those of *Cystoclonium*. My plants may be diagnosed as follows :—

Frond filiform, compressed, 10—25 cm. high, laterally much branched, 3—4 times decompound. Main stem mostly simple, 1,5—2 mm. broad. Branches alternate or scattered, divaricately patent, long, subsimple, flexuous, tapering to a fine apex and constricted at the base. Branchlets, short, sublate, scattered along the branches and tapering to both ends. Cystocarps forming a wart like protuberances along branches, immersed in the substance of frond, often two together. Tetraspores, oblong zonally divided, situated among cortical cellules.





The Plants having the above-stated characters have a medullary stratum of filaments well presented. It consists of filaments loosely and distantly anastomosing and running through the whole length of frond. They are thicker and more compact in the stem in the older portion of frond, and are loose and few in younger subulate ramuli. The cortical layer consists of two strata of cells; the inner, of large oblong roundish angular colorless cells, gradually smaller towards the surface; the outer, of one or two layers of minute red cells. The outer cortical cells are smaller than those of American specimens of *Cystoclonium purpurascens* with which I have compared my plants. The present plant has a wide range of distribution in this country; it grows from Hakodate to Kōbe, so far as I know. The specimens I have studied are those obtained from Matsushima and Kōbe but not from Hakodate. In Marten's Ost. Asien. Tang. p. 108 *Cystoclonium armatum* is mentioned, which was collected at Yokohama; and in that book this genus is not marked with (?), and some remarks are given of its appearance, hardnes sand fruits, but not about the presence of a medullary stratum. In J. Agardh Sp. alg. vol. III p. 239, on the other hand, this species is in-

cluded among *Cystoclonium* with the mark (?) under the section "species inquirendae." I am not certain whether Marten's specimen had a medullary stratum or not.

I can not say whether the specimen which Mr. Harvey obtained from Hakodate was a variety having no medullary filaments, or was an abnormally developed one. At any rate, as my specimens have well developed medually filaments, this species hitherto regarded as a doubtful *Cystoclonium* is no longer so, and can be safely placed in the genus as a distinct species.

隱花植物實驗錄

柘植千嘉衛

第一 さんせうも槐葉蘋 Salvinia natans, L. (=S.vulgaris, Michx.)第1版ノ圖ヲ參照セヨ

槐葉蘋ハ隱花植物中ノ蘋類 (Rhizocarpeae) ニ屬スルモノニシテ夏秋ノ候多ク田溝等ノ水面ニ浮游シ一見秦椒ノ葉ノ如ク絕テ根ヲ有スルヿナク又固有ノ臭氣アルモノナリ

莖ノ形態、莖ハ圓柱狀ニシテ水平ニ横ハリ屢分枝スルヲ常トシ表面ハ有關節ノ毛ヲ以テ被ハレ節ヨリハ葉ヲ生シ根ヲ有スルヿナク淡褐色ヲ帶フ

莖ノ構造、外皮(二|1)ハ縱ニ長キ細胞單層ニ並列シテ之ヲ搆成シ處々ヨリ有關節毛(二|2)ヲ生ス莖ノ中心ニハ一ノ維管束ノ縱走スルアリテ其周圍ニハ單層ノ厚膜細胞鞘狀ニ圍繞ス之ヲ維管束鞘(二|3)(三|1)ト云フ維管束鞘ト外皮間ニハ大ナル空房存在ス其空房中ニハ單細胞層ノ縱壁(二|4)アリテ鞘ト外皮トヲ放射形ニ連結シ一大空房ヲ數小房ニ分界ス維管束ハ葉及ヒ枝ニ分枝シ長キ纖維細胞(三|2)(四|1)ト二三ノ導管(三|3)

(四2)トヨリ成ル導管ノ紋ハ螺旋狀ノ部分多ケレ𪜈處々不完全ノ觀ヲ呈シ不規則ノ網紋トナルヿ少カラス

葉ノ形態、葉ニ浮葉沈葉ノ二種アリ浮葉(五1.2.)ハ扁平橢圓形ニシテ短柄ヲ有シ表面ハ空氣ニ接シ裏面ハ水ニ接ス表面ニハ小丘狀ノ突起(七)アリテ多少羽狀ニ並列シ各丘頭ヨリ數本ノ有關節毛ヲ簇生ス裏面及葉柄上ニモ有關節ノ毛アリ沈葉(五3)ハ有柄ニメ葉身ハ數多ノ細長小葉片(五4)ニ分裂シ恰モ總狀細根ノ狀ヲ呈ス

浮葉ノ構造、葉身ノ構造ハ第六圖ニ示スカ如ク多クノ氣房上下二層ニ並列シテ成ルモノト想像スルヲ宜トス上層ノ氣房ハ葉ノ諸處ニテ數個共ニ表面ニ向テ凸隆シ前述表面ノ小丘ヲ形成シ各丘頭ヨリ數本ノ有關節毛ヲ生ス(七)(六2)氣房間ノ隔壁ハ各隣房間並ニ上下房間共ニ突起ヲ有セル不定形細胞(六1)ノ一層ヨリ成リ葉ノ下表皮即チ下層氣房ノ床壁ニ相當スル部分モ亦單層ノ不定形細胞ヨリ成リ諸處ヨリ外方ニ有關節ノ毛(六3)ヲ生ス只葉ノ上表皮即チ上層氣房ノ天井ニ相當スル部分ノミハ單層ヨリ成レ𪜈外面ヨリ觀下スレハ其細胞多角形ヲ呈シ處々ニ細小ナル間隙ヲ存ス是レ氣孔ナリ(八)氣孔ハ下ハ上層氣房ニ通シ他ノ植物ノ氣孔ニ於ケルカ如キ特別ノ保護細胞アルヿナシ葉中ノ維管束即チ葉脈ノ狀態ハ網狀ニ分賦スレ𪜈不規則ニ非スシテ第九圖ニ示スカ如ク自ラ一定ノ法則アリ維管束ノ構造(六4)ハ莖ノモノト大同小異ナレ𪜈細小ナル部分ニ於テハ導管ヲ欠如ス葉柄ノ構造ハ莖ト異ル所ナシ

沈葉ノ構造、葉柄及ヒ小葉片ハ莖ト同組織ニテ成リ中心ニ一ノ縱維管束ヲ有ス小葉片(十)ヨリ出ル有關節毛ハ其基部一ノ隆起セル細胞ヨリ起ル又其隆起セル細胞ニハ毛根ノ上方ニ必ス一個ノ小細胞ヲ附スルヲ見ル

葉ノ排置、葉ハ莖ノ各節ニ於テ二枚ノ浮葉ト一枚ノ沈葉ト三枚宛ノ輪生(五)ニシテ數節ヲ通觀スルトキハ一節ノ三葉ハ隣節ノモノトハ同縱線上ニ在ヲスシテ隔節ノモノト各々同縱線上ニ位ス故ニ浮葉ハ莖ノ背面ニ四行

ニ沈葉ハ莖ノ前面ニ二行ニ縦列スルモノナリ但シ此植物ノ幼時子葉ノ近傍ニ於ケル葉ノ排置ハ輪生ニ非スシテ單獨ニ生ス

囊蓋(Sporocarp)、囊蓋ハ沈葉ノ特別ナル裂片ニ數對々生シ(十一)其軸ナル小葉片ハ先端漸次卷上スルノ性アリ又或ル𬼂ハ軸ハ基脚部ニ近キ部分ヨリ兩岐ニ分レ各先端ハ卷上スルヲ以テ注意セサレハ囊蓋ハ不規則ニ群生スルモノト誤認シ易シ各囊蓋(五5')(十二)(十三)(十四)ハ殆ト球形ニシテ表面ニ縦溝ヲ有シ夥多ノ有關節毛ヲ生ス其壁ハ二重ノ單細胞層ヨリ成ルモノニシテ其二層間ニハ叉單細胞層ノ縦隔壁アリ以テ内外ノ層ヲ連結スルカ故ニ囊蓋ノ壁ハ横斷面ニ於テ小房ノ輪列スルカ如キ觀ヲ呈ス(十二)但シ囊蓋ノ上部ニテハ内外ノ二層ハ漸次互ニ密接シテ其間ニ房ヲ存セス

子胞囊(Sporangia)、槐葉蘋ニハ大子胞囊(Macrosporangium)及ヒ小子胞囊(Microsporangium)ノ二種アリテ各別囊蓋中ニ在リ蓋シ大子胞囊ヲ含有スル囊蓋ハ一ノ軸上ノ囊蓋群中最基脚(十一1.)ノ一對ナルヲ常トシ他ハ概ネ小子胞囊ヲ含ム然レ𪜈一對ノ大囊蓋ノ中一側ノモノハ往々發達セサルヿアリ又一囊蓋中ノ大子胞囊ハ數個(十四)ニシテ各單層ノ細胞壁ヲ有シ内部ニ只一個ノ大子胞ヲ納メ囊柄ハ囊蓋ノ底部ニ在ル軸ヨリ生シ數列ノ細胞ヨリ成ル小子胞囊(十五)ハ一ノ囊蓋中ニ其數甚タ多ク囊壁ハ單層ニテ成リ囊柄ハ一列ノ細胞ニシテ甚タ長ク囊蓋底ノ軸ヨリ生ス

子胞(Spore)、子胞ニ大子胞(Macrospore)及ヒ小子胞(Microspore)ノ二種アリテ大子胞ハ大子胞囊ニ只一個含有セラレ白色ノ物質ヲ以テ被ハル小子胞ハ甚タ小ニシテ一ノ小子胞囊内ニ數十個アリ大小二種ノ子胞ハ初冬ノ候成熟スレ𪜈共ニ囊外ニ出ルヿナク全植物体枯死スルノ後ハ囊ヲ以テ被ハレタル儘無數水面ニ浮游シ恰モ

褐色ノ粉末ヲ水面ニ散布シタルノ觀ヲナスヿアリ大子胞ハ雌性ニシテ春時ニ至レハ微細ナル植物体ニ發達シ雌性器ヲ生シ雌性器內ノ卵球ハ受精後前記ノ槐葉蘋ニ發育ス小子胞ハ雄性ニシテ單細胞ノ植物体ヲ生シ雄性器及ヒ雄精ヲ生ス

みづあふひノ雄蕋

高知縣　永沼小一郎

該種(Monochoria vaginalis Presl. var. Korsakowii Solms-Laubach.)ハ黑龍江地方ヨリ日本ニ散布セル水草ニシテ敢テ珍トスルニ足ラザレ𪜈花ノ交換受精ノ裝置ハ大ニ趣味アルモノト謂フ可シ即チ其雄蕋ハ六個ナレ𪜈就中五個ノ葯ハ淡黃色ニシテ竟ニ開裂セズ且ツ花ノ上部ニ駢列シテ發育充分ナラズ蓋シ「ラヂメント」ナラント之ヲ剖割スルニ皆花粉ヲ有セリ但シ少シク小ナリ(比較的ニ)之ニ反シテ一ノ雄蕋ハ斜メニ下側ニ向ヒ其葯ハ他ヨリモ大ニシテ色ハ濃紫色ヲ呈シ縱裂シテ花粉ヲ撒出スベシ加之其花絲ノ中途ヨリ距ヲ出シ距ハ上方ニ向ヘリ且ツ其色花瓣ト一般紫色ナリ又雌蕋ノ柱頭ハ一側ニ欹キテ雄蕋ト對向シ此二者ニテ恰モ八字形ノ態勢ヲ象レリ蓋シ此雄雌ノ位置ハ花ニ因リテ左右互ニ入リ違ヘリ故ニ花形ハ小異ナキモ此位置ノミニテ已ニ純然タル二形花ナリ即チ左雄蕋花ト右雄蕋花ナリ假ニ之ヲ甲乙ト名ケ株ニ就テ鑒察スルニ或ハ甲花乙花ヨリ多ク或ハ之ニ反スルアリ時ニ甲或ハ乙ノミナルヿモアリ又此花ハ一日花ニシテ晴雨ニ拘ハラス朝六時半ニ開キ晝三時半ニ凋衰スルヲ以テ日々新花ヲ開クナリ依テ一株ニ就テ其甲乙ノ多少ヲ撿スルニ昨日甲花多キモノハ必ズ今日乙花多クシテ其數モ亦殆ンド相等シ就テ其然ル所以ヲ撿スルニ穗上ノ一小梗每ニ二花ヲ着ケ(罕ニ一又三)一ハ甲花ニシテ一ハ乙花ナルヲ知ル即チ雄蕋ハ必ズ梗ノ方ニ偏スルナリ又蜜腺ハ絕テ有スルヿナケ

レ𪜈はなあぶ頻リニ來リ徘徊スルヲ見ル

由是觀之此花ノ構造ハ中々高尙ナルモノヽ一ニ算ス可シ即チ此花客タルはなあぶハ蜜ヲ嗜マズシテ專ラ花粉ヲ食トス而シテ五ノ不全雄蕊ハ受精ノ爲メナラスシテはなあぶノ犧牲ニ外ナラス即其色ハ淡黄ニシテ花冠ト反對ナル補色ナレバはなあぶノ爲メニ尤モ目ニ立チ易ク其位置サヘ之ニ適セリ之ニ反シテ一ノ雄蕊ハ葯及ビ花絲共ニ花冠ト同一ノ色ナレバはなあぶハ之ヲ知ラサルノミナラス黄色雄蕊ヲ目ガケ來レバ恰モ其足場トナリ且之ニ迫レバオノヅト花絲ニ附屬セル距ヲコヂルヲ以テ葯ハ槓杆的動作ヲナシテ昻起シはなあぶノ腹ニ其花粉ヲ撒布スルナリ而シテはなあぶノ右脚又ハ腹ノ右側ニ散布シタルモノハ乙花ニ往ケバ恰モ其柱頭ニ當リ而カモ自体ノ左側ニハ新ニ花粉ヲ受クルナリ加之尤奇トスベキハ柱頭ノ位置朝ハ下方ニ垂ルレ𪜈時ヲ經テ漸ク昻起シ以テ花粉ヲ受ケ易キ位置ヲナスヿ是ナリ

ぎんなんノ受胎期ニ就テ

平瀬作五郎

歐洲植物學大家ノ實驗說ニ「十月ニ至リ成熟シテ落タルぎんなんヲ驗シタルニ胚ノ形跡ヲモ認メズ意ラク是受胎セザリシ者ナルベシト然ルニ兩三月ヲ經テ貯藏セシ者ヲ再撿スレバ悉ク成育セル胚ヲ收メタリ」(Sachs) トアリ又「秋期ニ及ヒ母樹ヲ辭シテ后受胎シ其冬期中ニ胚發育ス」(Van Teighem 氏ノ說 Jour. Linn. Soc. No. 205. ニ見ユ）ト云ヘリ此他ストラスブルゲル氏等ノ說モ同樣ナリ所異ナレハ品變ル、本邦ニ於テハ如何アラントト先ツ昨年七月ニ至リ植物園ニ貯存セラレタル一昨年生ノぎんなん二拾個ヲ驗シタルニ胚ノ痕跡ヲモ存セザルモノ一個、極メテ不完全ナルモノ一個アリ而シテ

長サ七「ミリメートル」ヨリ九「ミ、メ、」ニ至ルモノ十個（内枯死セルモノモアリ、又三子葉ノモノ一個アリ）

長サ一〇「ミ、メ、」ヨリ一三「ミ、メ、」ニ至ルモノ八個アリシ

以テ該園栽植ノ公孫樹ハ能ク胚ノ成育セルヿヲ知レリ爾來昨年生ノぎんなんヲ檢スルヿ毎週一回宛ニシテ

九月十二日ニ至レハ菓肉黄熟シ卵球内モ亦始メテ受胎ノ徴候ヲ呈シタリ（但シ「フレミング」液ニテ固定シタル者ニヨリテ是ヲ認ムルヲ得タリ）

九月中旬ヨリ下旬ノ始ハ受胎期ノ最中ニシテ菓肉モ亦益黄熟シ下旬ノ終リニ至リテハ卵球内ニ細胞組織ノ充實セルヲ認メタリ（生ノマヽニテモ）是即チ胚ノ發生期ナリ

十月上旬ニ及ヒテ胚ノ形狀稍具リ下旬ニ至リテハ能ク肉眼ニテ胚ヲ認ムルヿヲ得タリ、而シテ此頃ニ至リ母樹ヲ辭スルモノ點々

十一月二日胚ノ長サヲ檢スルニ六「ミ、メ、」ニ達セルモノヲ最大トシ四、「ミ、メ、」ニ至ルモノヲ最モ多數トス

而シテ仝月九日ニ至リテ檢シタル二十七個ノ内胚ノ形跡ヲモ認メザルモノ二個アリ而シテ

長サ七「ミ、メ、」ニ至ルモノヲ最大トシ　二「ミ、メ、」ヲ最小トス

其平均四、二「ミ、メ、」强

此頃ニ至テ自然ニ墜落スルモノ相踵グ其紛失センヿヲ恐レテ皆母樹ヨリ收メテ貯藏シタリ是ヲ仝月廿二日ニ至リテ驗スルニ二十七個ノ内形跡ヲモ存セザルモノ四個而シテ

最長七、五「ミ、メ、」　最小二「ミ、メ、」　平均五、二「ミ、ヌ、」强

即チ初旬ニ於ルヨリモ平均數ニ於テ一「ミ、メ、」ノ成長ヲ見タリ

十二月十二日再檢スルニ二十三個ノ內形跡ヲ存セザルモノ五個而シテ

最長八「ミ、メ、」　最短二、五「ミ、メ、」　平均五、二「ミ、メ、」弱

即チ此二十日間ニ於テ最長ニ〇、五「ミ、メ、」ノ成長ヲ認ムレ𪜈平均ニ於テハ殆ト同樣ナリ

明ケテ廿七年一月四日三タビ點檢スレハ二十七個ノ內形跡ヲモ存セザルモノ五個而シテ

最長八「ミ、メ、」　最小三、五「ミ、メ、」　平均五、九「ミ、メ、」强

平均數ニ於テハ益々成長セルヲ認メタレ𪜈最長ハ依舊無異

是ヲ以テ推考スルニ每回胚ノ形跡ヲモ存セザルモノ數個アルハ全ク受胎セザル者モアルヿヲ證シ而シテ受胎期ハ九月中旬ニシテ歐洲ニ於ルヨリモ早キヿ一ケ月、十月初旬ニ於テハ已ニ胚ノ發生ヲ見其發育ハ各緩急遲速アリト雖𪜈十一月上旬未タ母樹ヲ辭セザル前已ニ成育セルモアリ或ハ辭シテ后緩々發達スルモアリ而シテ此冬期間ハ六乃至七「ミ、メ、」稀ニ八「ミ、メ、」ニテ成長休止シ更ニ一〇乃至一三「ミ、メ、」ニ達スルハ春陽萌發ノ期ニ於ルナランカ兎モ角モ胚ノ成育ハ頗ル遲緩ナルニ相違ナシト雖𪜈菓實落チントスル迄成熟スルニ非ザレハ受胎期ノ到ラザルニモ限ラザルヿ明ケシ此小差ハ彼我風土ノ違關リテ然ラシムルニハ非ルカ

八重山列島各屬島ノ植物（續キ第三）

田代安定

其一　黑島ノ部三

〇第二十四　薔薇科

(五十一) Rhaphiolepis japonica, S. et Z.

日本名ハマモクコク　方言トカチギ

(五十二) Rubus parvifolia, L.

日本名ナハシロイチゴ

(五十三) Photinia arbutifolia, Lindl.

日本名シマカナメ

○第二十五　景天草科

(五十四) Sedum sp.

日本名コミメマン子ンサウ又フキヅメマン子ンサウ（田代假號）

海濱ニ生シ一根叢生、葉短細多肉密生シ米粒狀ヲ呈ス莖高サ一二寸ニシテ叢株ヲ爲シ地上ヲ蔽フ花實未見

○第二十六　蟻塔科

(五十五) Haloragis micrantha, R. Br.

日本名アリノタウグサ

○第二十七　桃金孃科

(五十六) Psidium guajava, L.

日本名バンシロウ　方言バンスロ

○第二十八　野牡丹科

(五十七) Melastoma macrocarpa, Don.

日本名ノボタン　方言マラハンカー西表島

野牡丹ハ州南諸島ニテハ奄美列島ヨリ起リテ山野全部ニ自生シ沖縄列島ニ亘リテ遠ク波照間島ニ及ブ

○第二十九　繖形花科

(五十八) Peucedanum japonicum, Sh.

日本名ボタンバウフウ

(五十九) Cryptotaenia japonica, Hassk. (ex. Maxim.)

日本名ミツバ

(六十) Hydrocotyle asiatica, L.

日本名ツボクサ

○第三十　忍冬科

(六十一) Sambucus javanica, Reinw.

日本名ソクヅ　土名トウジン

八重山諸島ニテハ經年ノモノ接骨木ノ如ク木本狀ヲ爲シ人ヲシテ別種カト疑念ヲ生セシムルモノアリ先年露國ニ於テ「マキシモウイチ」氏ニ此事ヲ質疑セシニ是便チ「サムブェキュス、ジャワニカ」ニ該當スルコトヲ示説シ且印度諸島ノ標品モ示セリ然トモ尙聊カ疑念解ケス姑ク再撿ノ時ヲ期ス

○第三十一　茜草科

（六十二） Psychotria Serpens, L.

日本名シラタマカヅラ（田代新名）

（六十三） Paederia Tomentosa, Bl.

日本名ヘクソカヅラ

（六十四） Morinda citrifolia, L.

日本名ハテルマアチキ（田代假號）

布哇、サモア、フイジー、グアム其他太平洋諸島ノ普ク山野ニ生シ及ヒ熱帶地方一般ニ產スル品ニシテ本邦ニテハ小笠原群島ニモアリ灌木ニシテ高サ一丈ニ達シ一根叢生巨株ヲ爲ス葉ハ尖頭心藏狀ニシテ大サ柿葉ニ倍シ質柔厚ニシテ深綠色宛然塗ルカ如キ光澤アリ和名ノ以テ該當スヘキモノナシ但タ全形稍「アチキ」ノ趣ヲ爲スヲ以テ一時備忘ノ爲メ「ハテルマアチキ」ノ名ヲ附シ置ケルモノナリ花ハ毬狀ニ着キ一毬十餘花ヲ攢簇ス辨披針、狀五、出白色ニシテ稍「イソイナモリ」（後條ニ說アリ）ノ花ニ類似ス花謝シテ後チ其花毬宛モ「ピナンカヅラ」ノ子實ニ彷彿タル巨形毬果ヲ爲ス熟シテ深赤色極テ艶美ノ觀ヲ呈ス斯ク毬果ヲ爲スハ該屬植物ノ常標ニシテ本品ヲ殊ニ著シトス此植物ハ宮古島及ヒ沖繩島ノ南半部ニモ生ス幹材深黃色ニシテ島民稀ニ染料ニ供スルモノアリ

（六十五） Guettarda speciosa, L.

日本名ハテルマギリ（田代新名）

本邦ニテハ八重山列島ノ一部分ニ產スル木ニシテ他ノ諸島ニテハ未タ見ス純粹ナル熱帶植物ノ一ニシテ八重山

島產茜草科木中ノ最モ珍異ナルモノトス灌木ナレトモ經年ノモノハ喬木体ヲ爲ス幹質堅牢ニ〆圍尺餘ニ達スルモノアリ葉ハ濶頭楕圓ニ〆稍「ホヽノキ」葉ノ趣ヲ爲シ堅薄粗糙ニ〆鉄褐色ヲ帶フルヲ其常標トス花ハ短織穗狀ニ攅着シ長サ一寸許ノ圓筒狀喉ヲ爲シ雄蕋五莖瓣內ニ潛着シ雌蕋長ク喉頂ニ達シ柱頭小槌狀ヲ爲ス瓣端梅花狀ニ五裂白色ニ〆稍茉莉花ノ如キ態ヲ爲シ萼短小爪狀五尖起多毛其花ノ全部ニ細毛茸密布ス子實ハ扁圓ニ〆堅硬木質狀ヲ爲シ大サ「チーキ」樹實ニ等フシテ更ニ巨大ナリ微四稜角ヲ爲シ內ニ多腔隔膜ヲ分チ數小仁核ヲ收ム

該屬ハ種類數多ニ〆諸書ニ說出ツト雖トモ佛國バイヨン氏所著「イストワール、デー、プラント」ノ茜草科部ニ最モ能ク此族ノ說解ヲ盡シ且花實ノ剖撿圖等アリ又獨逸人某ノ「フロラ、ヴイチエンシス」ニモ記說アリ予ハ先年フイジー群島スバ港近傍及ヒ同群島ノ各海岸ニテ多ク此種ヲ目擊シ且ツ花實モ剖撿シ全ク我カ八重山島產ト同一種タルコトノ疑惑ヲ解キ得タリ「ベンザーム」氏ノ「フロラ、ホンコゲンシス」ニハ此近屬ナル「グエツタルデルラ」ナルモノヲ載セ本條種「グエツタルダ」屬ナシ予ノ初テ此植物ノ自生地ヲ撿知セシハ八重山列島附屬ノ波照間島ニシテ去ル明治十八年ノ夏正ニ花實ヲ着ケ居ルノ際ナリシガ茜草科植物タルコトハ當時撿得セシモ內地植物ニ比較スヘキモノナキヲ以テ唯タ備忘ニ易カラシメンカ爲メ彼ノ樟科植物「ハスノハギリ」等ノ例ニ倣ヒ「波照間ギリ」ノ名ヲ附シ置キシナリ爾後石垣島其他各所ニテ自生品ヲ目擊スルニ至レリ然トモ至テ稀小ナリ

(六十六) Oldenlandia paniculata, L.

日本名イソイナモリサウ（田代新名）

八重山列島各屬島ノ植物

又「ハマハコベ」（田中芳男氏所命） ツナレムグラ（牧野氏假號）

又「ヒロハノフタバムグラ」（伊藤氏新名）

暖熱帶地方特產ノ「イナモリサウ」近屬草ニシテ專ラ磯岸上ニ生シ叢株ヲ爲テ海濱間ヲ蔽ヒ宛然寒帶地高山生ノ「フキヅメサウ」ニ彷彿タル生殖ノ狀ヲ爲ス草高サ一寸乃至三四寸ニ達シ葉對生卵圓狀肥厚ニシテ光輝アリ花白色瓣四出短濶披針狀、四雄一雌蘂、蕚瓜狀四尖起ヲ爲シ子房二室臼狀坐ヲ呈ス其他ノ諸標ハ別ニ珍草ニモアラサルヲ以テ略ス

此草ニ就テハ多識會誌第二輯ニ伊藤氏ノ詳說ヲ載ス其一節ニ曰此品ハ東印度、瓜哇、香港等諸地ニ產スル「ヲルデンランヂア、パニキュラタ」ノ稍小ナルモノニシテ「グレイ」氏ノ〃〃、ヴァリエーテー、パルヴィフヲリア」ナルモノナルベシ又此植物ノ日本名ニ關シテハ系統學上至テ「フタバムグラ」ニ近キモノナルヲ以テ「ヒロハノフタバムグラ」ノ新名ヲ下シ置キシガ、田中君ハ新ニ「ハマハコベ」ノ名ヲ命セラレシト後ニ聞キタレバ直ニ同君ノ新名ヲ採用シテ本說ノ題名トハナセリ」ト云々

又其產地ニ就テハ同誌曰安房沖ノ島、野島、日向國各海濱ニ產スルコト及ヒ牧野君ノ土佐國各海岸ニ於テ夙ニ之ヲ撿出サレシコト等ヲ記述サレアリ是該草ノ產地ニ於ケル必要ノ說ナリ鹿兒島縣諸海岸ニ至テハ既ニ固有產地ノ一部分ニ歸スルモノヽ如シ

予ハ該草ノ新和名ニ就テ一言シ置クヘキコトアリ沖繩諸島ニ於テハ最モ茜草科草ノ種類ニ富ミ「フタバムクラ」類ニモ尙撿定ヲ經サル品一ニシテ足ラス又「ハマハコベ」ノ名ハ他ノ石竹科草名ト衝突ヲ生スルノ恐ナキヲ期シ難シ故ニ已ヲ得サレハ寧ロ「イソフタバムクラ」ノ名ニテモ撰定シ置クヘキモノカ何レニシテモ此

草ノ和名トシテハ「磯（イソ）」ノ字ヲ冠セシメ度モノナリ又「ヒロハフタバムクラ」ノ名ニ該當スヘキモノハ向來他ノ同屬植物新名ノ爲メ尙餘地ヲ留メ置クノ必要ヲ感セリ又此草ノ學名ニ就テ考查ヲ要スヘキコトアリ「マキシモウイチ」氏ノ說モアリ多識會誌ノ考說モアルトシ「ベンザーム」氏ノ香港「フロラ」ニハ變種ノコトヲ截切シテ單ニ「ミ、バニキュラタ、」ト爲シ其他斯クセシモノアリ殊ニ沖繩諸島ノ植物ハ專ラ「ライト」氏ノ撿出ニ係ルモノ多ク又「チルダーム」氏ノ撿查ヲ經テ顯ハレタルモノ夥多アリ該草亦其一ナルヘシ

予ハ先年黑島ニ於テ此「イソイナモリ」ニシテ著シキ巨葉大形ノ品ヲ得シコトアリ草高サ七八寸已上ニ達シ葉長濶子室細長一見シタル處全ク別新種ノ如キ態觀ヲ呈スルヲ以テ之ヲ普通品ト較撿セシニ是ハ少ク海岸ヲ離レル砂壤地ニシテ恰モ變則的ノ境區ニ生育セシカ爲ニシテ必竟一時ノ變形品タルニ止ルモノト當時查定シ置ケリ元來此草ハ其生育スル場處ニ因リテ隨分著シキ變態ヲ示スコト猶彼ノ牛膝（イノコッチ）、鯽魚鱗（キッ子ノマゴ）等ニ於ケルカコトキ特質ヲ具セリ乃チ沖繩諸島產必シモ小葉品トノミ定メ難ク大葉品必シモ變種ト確定シ難シ故ニ該草ノ洋名ハ「ベンザーム」氏ノ解說ニ服順シ置クナリ斯ノ如ク今記述スト雖トモ予ハ諸君ノ知ラルヽ如ク固ヨリ此道ニ於ケル專門其人タル者ニアラス但ダ一ノ會員タルガ故ヲ以テ見ルガマヽ思フガマヽヲ無用意ニ聊カノ斟酌モナク直言シ會員諸君若シヤ參考ノ一助タランコトヲ企望スルニ止ルノミ

（已下次號）

日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

日本藥局方註解ニ云石榴根皮ハ之ガ新陳ヲ鑑別シ其藥用ニ適否ヲ判別スルコト頗ル難シ故ニ茲ニハ和蘭藥局方ニ掲クル石榴皮ノ撿查法ヲ記載シ以テ讀者ノ參考ニ供ス

細微ニ粉碎セル石榴根皮十「グラム」ヲ硝子壜ニ容レ之ニ消石灰二「グラム」、水百立方「センチメートル」及那篤倫滷液（藥局方ノ）三「グラム」ヲ加ヘ振盪シテ平等ニ混和セシメ時々振盪シツヽ二十四時間放置シ爾後之ヲ白綿ヲ以テ寛ク其頸口ヲ閉塞セル漏斗ニ移シ成ルベク少量ノ水ヲ以テ其漏斗下ニ滴下スル液ノ殆ンド無色トナルニ至ル迄洗滌シ其漏斗ヲ第六十一圖（規那皮試驗ノ條ヲ見ヨ）ニ示ス如キ分液漏斗ニ容レ初メ二十立方「センチメートル」後十立方「センチメートル」ノ哥囉仿謨ヲ加ヘテ振盪シ前後兩度ニ得タル亞爾嘉魯乙度ノ哥囉仿謨溶液ヲ更ニ前ノ分液漏斗ニ注入シ初メハ鹽酸ニテ酸性トナセル水ノ過剩次ニ蒸餾水ヲ注加シテ振盪ス可シ然ル時ハ亞爾嘉魯乙度ハ哥囉仿謨ヲ脫メ水中ニ溶入ス可キヲ以テ前後二回ニ得タル水液分ヲ豫メ秤量セル瓷皿中ニ採集シ重湯煎上ニ蒸發シテ其容量ヲ些少トナスノ後乾燥器ニ容レ充分ニ乾燥シテ殘渣（鹽酸亞爾加魯乙度）ハ殆ト無色ニシテ其重量ハ〇、一「グラム」即チ一「ペルセント」ニ下タル可ラス而シテ其殘渣ハ水ニハ全ク溶解スルヲ要ス

錦熟黄楊（アサマツゲ）(Buxus Japonica) 大黄連（ヘヒノボラズ）(Berberis Vulgaris) ノ皮ハ其外見稍々石榴皮ニ類スレトモ甲ハ其表皮灰褐色ニシテ內部黄褐色ヲ現ハシ其味苦ク收斂性ナラズ之ヲ嚙ムモ唾液ヲ黄色ニ染メズ乙ハ鮮綠黄色ヲ有シ內面縱紋ヲ現ハシ其味亦苦クシテ收歛性ナラス而シテ此二種ノ皮ハ其煎汁ニ過格魯兒鐵ヲ加フルモ藍色ヲ呈セサルヲ以テ之ヲ石榴皮ト判別スルニ難カラサルヘシ」トアリ

製劑　柘榴根皮越幾斯　Extractum Granati

柘榴根皮越幾斯ハ改正日本藥局方ニハ之ヲ刪去ス舊日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

柘榴根皮越幾斯篤拉屈篤ハ

新タニ乾燥セル柘榴根皮粗末　十分
ヲ取リ
酒精　二十四分
常水　十六分
ヲ注キ三日間冷浸シテ壓漉シ又其殘滓ニ
酒精　十二分
常水　八分
ヲ加ヘ二日間冷浸シ更ニ壓漉シ漉液ヲ合シ蒸發シテ乾燥越幾斯篤拉屈篤ト爲シ製スヘシ

本品ハ暗褐色ノ越幾斯篤拉屈篤ニシテ水ニハ溷濁シテ溶解ス」トアリ又日本藥局方注解ニ云專ラ冷浸煎劑トナシテ應用ス今試ニワルデンブルク氏ノ處方ヲ記載ス可シ石榴皮（細末）三〇、〇ニ冷水三〇〇、〇ヲ注加シ十二時間冷浸スルノ後其混液ノ全量二五〇、〇ヲ得ルニ至ル迄煑沸シ之レニ薑根舍利別三〇、〇ヲ添加シ半時間ヲ隔テヽ二回ニ分服ス又英國藥局方ノ石榴根皮煎ハ石榴根皮五〇、〇水一〇〇〇、〇ヲ加ヘ漉液ノ全量五〇〇、〇トナルニ至ル迄煑沸シテ製ス云々トアリ

醫治効用　石榴根皮ハ往時ヨリ驅蟲藥トシ之ヲ用フト雖𪜈其効驗アルヲ知ル者少レナリ近來ニ至リBuchanan, Anderson等ノ諸氏之ヲ試驗シ絛蟲驅除ノ特効藥トナシ報告以來諸家其殊功ヲ稱スルニ至レリ其用法ハ食ヲ斷チ投藥後下劑ヲ用フ但シ新鮮ナルモノヲ用フルニアラザレバ其効驗確實ナラズ或云過量ニ用フレバ間マ惡心ヲ發シ下利スト或ハ赤痢ノ一良藥トス

石榴果皮ハ收歛、清涼ノ良藥ニシテ凝體諸管ノ弛弱シテ發スル下利、血利、月經過多、崩漏等ノ諸症ニ内服シ印度ニテハ赤痢ノ特効藥トス又濠洲ニテハ石榴花ヲ以テ藥用ニ供ス其効驗等ハ稍々果皮ニ均シト雖𪜈之ニ比スレハ弱劣ナリト

其他果實ハ生食シ或ハ舍利別ヲ製シ清涼飲トナシ殊ニ熱病患者ニ與ヘテ渇ヲ止メ燥ヲ潤シ清涼解熱ノ効アリ又果皮ハ鞣酸ニ富ムルヲ以テ鞣革用トス

（以下次號）

第八十二號正誤 377 ノ第七行八字目具ハ有ノ誤 378 ノ第十七行十一字目コハニノ誤 379 ノ第七行八字目溶ハ熔ノ誤

江ノ島箱根地方植物採集紀行

安田篤
市村塘

明治廿六年十二月廿三日ヲトシ原、岡、ノ二氏及ビ余等ヲ併セ都合四名各旅裝ヲ收メ採集匣ヲ肩ニシテ採集地ニ向フ此日天氣晴霽氣自ラ壯ナリ午後二時二十分新橋發ノ滊車ニ乘リ滊笛一聲砂ヲ蹴リ礫ヲ飛バシ三時五分横濱ヲ經テ墜道ヲ過ギ同四十五分大船ニ到リ四時藤澤ニ着ス乃チ路ヲ西南ニ取リ行クコト十數町ニシテ山本橋ヲ渡ル此橋ヤ私設ニ係ルヲ以テ橋錢ヲ要求ス直行スレバ右ニ引地川ヲ臨ム水滿チ流緩ナリ水草淡藻ノ生息ニ適スル如シ終ニ四時卅五分片瀨ニ達シ旅宿柏屋ニ投ス藤澤ヨリ片瀨ニ至ルマテ一里十七町ナリ片瀨ノ地タル唯三屋ノ旅宿アルノミ曰ク柏屋曰ク角屋曰ク蝦屋就中、柏屋ハ三層樓ニ〆他ハ皆二層樓ナリ抑柏屋ノ位置タル北ニ祖師堂ヲ仰キ南ニ相模灘ヲ臨ミ西ニ富岳ヲ見ル且ツ江島マデハ僅カニ十町許砂丘ヲ越ユレハ直ニ其海岸ニ出ヅ又七里濱ニモ程遠カラズ眞ニ絶景ノ地ヲ占ムルノミナラズ海藻採集ニハ好位置ト謂フベシ午後六時

ニ至リ月明ニ乘ジテ江ノ島ニ赴ク此夜ハ干潮ニシテ踏ム所ハ悉ク砂ナリ唯惜ミラクハ海藻ノ打チ上ゲラルヽモノ稀ニシテ獲物甚ダ尠ナキヿヲ

「ほんだわら」(Sargassum sp.)數種

「かじめ」(Ecklonia cava)大小數多、

須臾ニシテ江ノ島ニ達ス先ツ棧橋ヲ渡リ坂下ニ至ル坂下ニ數多ノ旅宿アリ冬季ノ故ヲ以テ寂トシテ聲ナシ之ヨリ石階ヲ或ハ上リ或ハ下リ各社ノ前ヲ過グ其社ノ多キ十有餘石階ヲ上下スルニハ殆足ヲ勞セリ、坂ノ兩側ニ夜目ニハ判然認別シ難キモ羊齒類多ク繁茂セルガ如ク見ユ途次夜番ニ遇フ渠レ余等ヲ見ルヤ直ニ來テ誰何ス則チ告グルニ片瀨ヨリ來リタルヲ以テス彼レノ疑團全ク霽レ一禮シテ去ル高處ニ至リ遠望スレバ浮玉琅々トシテ波間ニ漂ヒ水天髣髴涯ナシ恰モ仙境ニ遊ブノ思アリ踵ヲ轉シテ島ノ東南ヲ望メバ斷厓絕壁數十丈婦女子ヲシテ心戰キ身慄セシム割愛シテ歸路ニ就キ歸宿スレバ已ニ九時卅分ナリキ海磯ニ於テ拾ヒシ海藻ハ此邊ニ普通ノモノニシテ滯瀨中ニハ何時ニテモ採集シ得ベシト思ヒタレバ兎ニ角撿究ノ爲持チ歸ヘルヿトハナシタリ夜ノ更ルニ從ヒ風漸ク烈シク夜番ハ鐘鼓ヲ打チ以テ失火及ビ盜賊ヲ警戒ス其打鼓スルヤ鼓ト筐トヲ交互ニ敲ク音調ノ奇ナル始メテ之ヲ耳ニスル者ハ抱腹絕倒セザルナシ此夜ヤ鼓音未ダ耳ニ慣レザル爲メ安眠ヲ妨害セラレ夜中折々眼ヲ覺シ「幾度か結びし夢を破りにし夜守の音ぞつれなかりける」ト呟キヌ因ニ記ス余等寢ニ就ク前ニ、明日早朝江ノ島岩窟ニ到リ相共ニ藻類ヲ採集センヿヲ約ス

二十四日拂曉大ニ雨降ル吾黨ノ喜望ヲ殺グヿ幾何ゾ偶松村博士ノ本朝來ラルヽヲ思ヒ立チ午前九時四十分旅宿ヲ出デ藤澤ニ赴ク待ツヿ凡ソ三十分遙ニ轟々ノ音ヲ聞ク忽ニシテ余等ノ前ヲ過ク車窓帽ヲ振ル人アリ之ヲ

博士ト爲ス之ヨリ相携ヘ片瀨ニ歸ル、十二時三十分雨晴レ天日光ヲ漏セリ乃チ好機失ス可ラズトナシ博士ノ教示ニ從ヒ採集ノ爲、七里濱ニ沿フテ鎌倉ニ赴ク此時ヤ天氣晴レタリト雖風ハ依然トシテ强ク砂礫面ヲ覆ヒ風威人身ヲ凌グ海面ヲ眺望スレバ怒濤天ヲ突キ飛沫遙ニ岸上ニ飛ブ南東ニハ三浦半島ヲ臨ミ東ニハ逗子ヲ見ル之ヲ七里ケ濱ノ景ト爲ス今其沿海ニテ採集セシ主ナル海藻ヲ擧グレバ左ノ如シ

「ほんだわら」五種(Sargassum horneri. Ag. Sargassum sp.)

「みる」(Codium tomentosum, Stack.)

「ふくろのり」(Hydroclathrus Simiosus.)

Gigartina sp. 數種

Corallinaceae 數多

Hypnea sp. 二種等

途次ニ大館又次郎源宗氏主從十一人之墓日蓮上人ノ笠懸松アリ稻村岬ノ山路ニ Hepaticeae 及ビ Musci 多ク繁殖スルヲ見タリ採ヲ以テ檢究ノ材料ニ供ス終ニ鎌倉ニ達ス江ノ島ヨリ鶴ケ岡迄二里十八町四十八間アリ八幡宮ニ進ムニ直路アリテ兩側ニ欝蒼タル杉森アリ社詞ニ行クニ石階アリ左ニハ公孫樹アリテ數多ノ氣根（ニツブル）ヲ垂下ス少シク北向ノ態ナリ東京近傍ニテハ見難キ大樹ナリ右ニハ蘇鐵アリ冬期ト雖藁片以テ之ヲ被フコトナシ是ニ於テカ知ル此地ノ甚暖ナルヲ、數株アリテ最小ナルハ植物園ニアルモノニ似タリト評スル人モアリキ社祠ノ右側ニハ橙樹ヲ植エ其他許多ノ梅樹彼處此處ニ散植セラル、之ニ Lichens 多ク附着ス時ニ風未ダ止マズ却テ益暴ヲ加フ剩ヘ之ニ對シテ歸路ヲ取リシヲ以テ砂塵眼ニ入リ復タ頭ヲ上グル能ハズ、談話モ亦全ク相通セ

ス歩行頗ル困難ヲ極ム不取敢「つらの皮幾千枚張るりとてもかゝる風にはいかでたふべき」ト云フ狂歌ヲ詠ゼシモ耳ハ皆聾スルヲ以テ何人モ失笑スル者ナシ歸宿スレバ四時卅五分ナリ夜ハ半バ携ヘ歸ヘリタル Algae, Musci, Hepaticae ノ解剖撿究ニ就事シ半バ博士ノ獨逸國學術談ニ耳ヲ傾ク、

廿五日天氣霽朗午前九時ヨリ江ノ島ニ赴キ海藻ヲ採集ス時ニ浪高ク水充ツ乃チ島ノ南東ニ下リ跣足以テ海藻ヲ摘採ス俄然白浪ノ來テ足ヲ拂フアリ危險謂フ可ラズ今該處ニ於テ採集セシ海藻ノ主ナル者ヲ列記セン

「あをさ」(Ulva luiza.,&Uulva sp.)

「あをのり」(Enteromorpha sp.)

「ほんだわら」一種(Sargassum hemiphyllum.)

「あさくさのり」(Porphyra vulgaris, Ag.)

「うみとらのを」(Cystophyllum Thumbergii.)

Chorda lomentaria, Lyngb.

「ばふのり」(Phyllitis fascia.)

此日ヤ高潮岩窟ニ入ルヿヲ得ズ、島上ニ至リ四方ヲ眺望スレバ北西ニ皚々タル芙蓉峯アリ大山其右ニ峙チ烏帽子岳其左ニ聳エ遠海渺茫漁舟ノ扁々タル近海緑藻波浪ニ綵ヘルノ狀、風光明媚眞ニ畫クガ如シ之ヨリ歸路ニ就ク途次階段ノ間ニテ

「をりづるしだ」(Aspidium lepidocaulon.)

「まめづた」一種(Drymoglossum carnosum, var. subcodatum.)

「やぶそてつ」(Aspidium falcatum.)
「こがねわらび」(Aspidium viridescens.)等

ヲ採集ス歸宿スレバ十一時三十分ナリ、午後一時ヨリ浴室ヲ借リ海藻ヲ腊ス爲ニ該室ヲ汚シ思ハヌ茶代ノ散財ヲナセリ、是實驗處ニアラザルヨリハ必然、起ル事件ナレバ亦如何トモス可カラズ呵々之ヨリ海藻ノ顯微鏡實驗ヲ始ム、Ulva ト Enteromorpha トノ組織上ノ差違ヲ認識セシ時ナドハ不覺快哉ト呼バシメタリ此夜實驗面白キヿ多ク不知不識更ヲ深カス、

（未完）

日本羊齒科屬徵 (Generic Characters of Japanese Ferns.)

牧野富太郎

しだ(羊齒)科 FILICES.

子嚢(Sporangia)ハ單胞ナリ多クハ膜質ニシテ或ハ背生シ或ハ緣生ス有節ノ彈環(Ring)ヲ具フ其環完全ニシテ全ク子嚢ヲ一周スルアリ或ハ不完全ニシテ唯半バ然ル者アリ而シテ子嚢ハ一定セル群團(嚢堆 Sori ト云)ニ簇集シ其群ヲナスノ狀ニ各般アリ且ツ苞膜(Indusium)ヲ具フルアリ具ヘザルアリ叉子嚢ハ或ハ圓錐狀ニ簇生シ或ハ穗狀ニ排生シ或ハ時ニ疎々ニ散生スル者アリ叉子嚢ノ彈環大ニ淒衰セルアリ或ハ全ク之ヲ具ヘザルアリ或ハ唯子嚢ノ頭ニノミ僅ニ存留シテ縱痕アル冠狀トナリ以テ縱裂スルアリ叉子嚢ハ肉質或ハ枹皮質ノ多胞床中ニ沒在シテ種々ノ形狀ヲナシ上面ノ孔口叉ハ裂罅ニヨリテ開裂ノ用ヲ濟スモノアリ芽子(Spore)ハ碎微ニシテ形狀一樣ナラズ葉發ハ常ニ拳曲式(Circinate)ナレ𪜈亦僅ニ直生式(Erect)ノモノヲ見ルナリ

第一 うらじろ亞科 GLEICHENIACEAE.

囊堆ハ背生シ囊數寡少（二數ヨリ十數ニ至ル）ナリ子囊ハ縱裂シ廣環橫方ニ全周シ苞膜ナシ

(1)うらじろ屬 Gleichenia Sm.

囊堆ハ僅數（二數ヨリ四數ニ至ル時ニ五數ヨリ十數ニ至ルモノアリ）ノ無柄子囊ヨリ成リ羽片ノ下部外方ノ細脈上ニ附着ス

第二 のきしのぶ亞科 POLYPODIACEAE.

囊堆ハ背生スルアリ又緣生スルアリテ略〻球形ヲナシ子囊ハ其數多ク而メ苞膜ヲ具フルモノアリ又具ヘザルモノアリ子囊ニハ一般ニ柄ヲ有シ有節ノ彈環ハ多少完全ニ囊周ニ縱匝シ開裂ハ橫亘ス（こけしのぶ族 Hymenophylleæ ハ例外ニ屬ス）

(甲)有苞類 INVOLUCRATÆ.

囊堆ニ苞膜ヲ具フ（まるはち屬 Alsophila. ハ例外ニ屬ス）

(一)おにへご族 Cyatheæ.

囊堆ハ背生シテ球形ヲナシ多クハ脈叉ノ處或ハ其傍ニ在リ子囊ハ無數相集リ屢〻甚シク密迫セリ柄アルアリ柄ナキアリ一般ニ高起セル床上ニ在テ往々混生スルニ毛ヲ以テス形狀倒卵形ヲナシ彈環ノ廣クシテ縱方或ハ稍〻斜方ニ亘リタルモノヲ具フルヲ常トス苞膜（まるはち屬 Alsophila. ニハ之ヲ具ヘズ）ハ下生シ或ハ囊堆ヲ容ルヽアリ或ハ囊堆下ノ邊側ニ生ジテ鱗狀ヲナスアリ或ハ杯狀ヲナシテ其稚嫩ナル時多クハ囊堆ヲ掩蓋シ後遂ニ其頂ノ開綻スルアリ或ハ多少規正ナル邊緣ニ裂ケ下ルモノアリ

(2)おにへご屬 Cyathea Sm.

囊堆ハ脈上ニ在リ或ハ脈叉ノ腋ニ在リ床ハ高起シテ球形ヲナシ或ハ延長ス苞膜球形シテ下生シ囊堆ヲ全覆シ後遂ニ其頂邊破綻シテ多少杯形ヲ存留ス且又其邊緣ノ尙不正ノ狀ヲナスモノアリ

(3)まるはち屬 Alsophila Br.

囊堆ハ球形ニシテ背生シ脈上或ハ脈叉內ニ在リ床ハ多少ハ高起シテ大抵軟毛アリ苞膜無シ

(二)こばのいしかぐま族 Dicksonieæ.

囊堆ハ球形ヲナシテ脈背或ハ脈頭ニ在リ苞膜ハ下生シテ略〻球形ヲナシ且ツ獨生シ時ニ囊堆ヲ全覆ス始メ閉封スト雖𪜈遂ニ不齊ニ開裂ス又杯狀ノモノアリ全邊若クハ二唇ヲナス

(4)くさそてつ屬 Onoclea L.

囊堆ハ背生シテ球形ヲナシ有性葉ノ縮變セル羽片脈上ニ在テ全ク其邊緣ノ封入スル所ト爲ル苞腸ハ極メテ菲薄ナル膜質ヲナシ囊堆ノ下側ヨリ生ジテ半球形或ハ缺杯狀ヲ成ス或ハ亦苞膜ヲ缺如セルモノアリ

(5)いはでんだ屬 Woodsia Br.

囊堆ハ球形ナリ苞膜ハ下生シテ軟膜質ヲナシ始終杯形ナルアリ或ハ略〻球形ナルアリテ時ニ囊堆ヲ包入シ頂端遂ニ破綻ス而シテ其口緣ハ分裂不齊ナルアリ或ハ總狀ヲナスアリ

(6)こばのいしかぐま屬 Dicksonia L'Hérit.

囊堆ハ脈頂ニ在テ而シテ緣內生タリ苞膜ハ下生シテ略〻球形ヲナシ革質或ハ膜質ニシテ或ハ全邊ナル杯形ヲナスアリ或ハ多少明カニ二片ヲ具フルモノアリ

（未完）

豆相地方植物採集日誌

松田定久
安井伴市

明治二十六年十二月二十五日東京ヲ發シ伊豆及相摸ヘ植物採集ノ爲メ旅行セリ左ニ旅泊及ビ里程ノ概略ヲ錄ス但シ東京ヨリ國府津迄ノ行程ハ玆ニ省略ス

十二月二十五日豆州伊豆山ニ旅宿ス	小田原ヨリ早川石橋、エノ浦吉濱ヲ經テ伊豆山迄	里程六里半
仝　二十六日　仝八幡野ニ宿ス	伊豆山ヨリ熱海、上多賀、下多賀、宇佐美、伊東、吉田ヲ經テ八幡野迄	里程八里十八丁
仝　二十七日　仝（下川津村谷津）ニ泊ス	八幡野ヨリ赤澤、大川、楢本、片瀬、稻取、目高ヲ經テ谷津マテ	里程六里餘
仝　二十八日　仝小鍋ニ宿ス	谷津ヨリ白濱、下田町、高馬箕作、北澤ヲ經テ小鍋迄	里程八里餘
仝　二十九日　仝大仁ニ泊ス	小鍋、ヨリ梨本、天城山、湯ケ島、市山等ヲ經テ大仁迄	里程十里
仝　三十日　相州箱根宮ノ下ニ宿ス	大仁ヨリ三福、守元、南條、北條、二ツ田、上澤、桑原、山中、箱根驛、芦ノ湯ヲ經テ宮ノ下迄	里程九里餘
仝　三十一日　歸京ス	宮ノ下ヨリ塔ノ澤、湯本、小田原ヲ經テ國府津迄	里程四里半

十二月二十五日快晴　午前六時東京新橋發ノ滊車ニ乘シ車中寒氣凛烈肌ヲ襲フ仝八時廿六分國府津ヘ到リ直ニ鐵道馬車ニ乘シテ仝九時小田原驛ヘ着ス（國府津ヨリ小田原マテ）一里十丁之レヨリ各採集器ヲ肩ニシテ膝栗毛ヲ始メタリ聞ク驛中、中松ナル旅舍ハ前夜祝融ノ爲メニ灰燼ニ歸スト噫乎、之レヲ過ギテ官道ヲ左折スルヿ四五丁、不浄松アリ其下ニ宰相平成輔ノ碑ヲ樹ツ之レ南朝ノ忠臣ナリト云フ之レヨリ採集シテ進ム石橋ニテ午飯ヲ喫ス午後二時半吉濱ヲ過グ遙ニ大島ノ噴火スルヲ眺望ス途次シロタモ、ヒラギ、ヤマラツキヤウ、マルバグミ、イソギク、リンドウ、トベラ、マサキ、カタバミ、タツナミサウ、クズ、カタバミ、サネカヅラ、ハマヒルカホ、ラセイタサウ、マツムシサウ、ヤナギイチゴ、タウゲシバ、コモチシダ、ヤマクジヤクシダ、イノデ、ホラ

シノブ、ノキシノブ、オホバノ井ノモトサウ、ホシダ、タチシノブ、井ノモトサウ、イタチシダ、ハコ子サウ、ゲジゲジシダ、ツルシノブ、トラノヲシダ、ヤブソテツ、ミツデウラボシ、カナワラビ、ミゾシダ、カニクサ、ヲ採集ス午後五時半伊豆山ノ相模屋文作方ニ投宿ス當地ハ氣候暖ニシテ此夜華氏ノ五十二度ナリ

二十六日、晴　午前七時伊豆山ヲ發シテ熱海驛ニ至ル時恰モ噴泉ス其轟聲數丁ニ聞ユ同驛ヨリ網代ニ至ル迄舟アリト云フ之ニ乘セズ熱海ヲ過キテ七八丁之レヨリ山路トナリ峠ニ一茶店アリ之ヲ過キテ上多賀村ニ出ヅ海濱ニ沿フテ下多賀ニ至リ午前十一時仝村ノ清水屋ニテ午飯ヲ喫ス下多賀ト網代トハ人家相接ス（伊豆山ヨリ熱海迄）十八丁（熱海ヨリ下多賀迄）二里之レヨリ亦山路、上ルヿ一里、峠ニ達ス一茶店アリ山上ノ絶景大ニ登山ノ苦ヲ慰ム山ヲ下ルヿ一里、一村アリ此レ宇佐美ナリ海濱ヲ行クヿ一里ニシテ伊東ニ着ス時將ニ三時ナリ此地ハ伊東昌朝ノ舊趾ニシテ温泉アリ渠水モ亦暖ナリ之レヨリ老媼ニ伴ヒ右折シテ平原ヲ過グ、云フ前年山火遠村ノ山ヨリ起リ延燒シテ媼ノ村落吉田ノ如キモ全村烏有ニ屬スト途次林樹ノ焚燒シタルモノヲ多ク目擊ス黄昏ニ至リ吉田ニ達ス之レヨリ八幡野ニ至ル間茫漠タル原野ニシテ植物ニ富マズ唯所々ニワラビヲ見ルノミ路ニ負荷ノ村人（修善寺ノ人ニシテ八幡野ニ來リ居ルト云フ）ニ會シ行ヲ偕ニス爲メニ途ヲ失セザルニ至レリ午後六時過八幡野ニ達シ松屋ニ投宿ス

（宇佐見ヨリ伊東迄）一里（伊東ヨリ八幡野迄）三里（伊東ヨリ吉田迄　一里半）

此日採集セルモノハカハラドクサ、イハカ子ゼンマイ、ヨシダケ、ヤシヤブシ、ヤブカウジ、センリヤウ、アセビ、タブノキ、ハコ子サウ、シユモクシダ、クマワラビ、ワラビ、ウラジロ、マメヅタ、トラノヲシダ、ノキシノブナリ

（未完）

揮發油の植物体に於ける化學的研究

醫科大學藥學教室　小林龜松

揮發油の植物体に於ける化學的研究の進步は Tovett 氏に依て報告せられたり今之を再錄し併て余が理論上に關する卑見を附記すべし然れども此說たる敢て珍奇と稱すべきにあらざるも從來諸書に散逸して不便少なからざるを以て玆に之を蒐錄し以て讀者諸君の瀏覽に供せんと欲するのみ幸にして其陋を咎むるなくんば幸甚

揮發油はへんるうた科(Rutaceae)ふともゝ科(Mystaceae) 繖形科(Umbellifereae)菊科(Compositeae) 唇形科(Labiatae)にくけい科(Laurineae)松柏科(Conifereae) 及び其他二三の植物科中に存し比較的少數なりと雖ども是等の植物の根、幹、花、葉、種子に論なく汎く播布し而して其存在するや通常小空孔中に現存し其空隙の生成は一は Protogematisch にして一は Hysterogematisch なり今此二種に就きて細分する事左の如し

第一種即ち Protogematisch を細分すれは

(甲)分泌管(Sekretgänge) 此管の生成は Schizogene にして松柏科菊科及び繖形科に存在す其胞間は母細胞が四ヶの細胞に分離するによりて增大し其周圍に位する細胞は變形し遂に Epithel となる更に Sklerenchym より圍繞せらるゝに至る而して此 Epithel は管內に油分を分泌し Sklerenchym は玆に分泌されたる揮發油を他の細胞中に滲出するを防止す故に揮發油は漸々管に充るに至る

此管は主として皮部の Parenchym 中に存在すと雖ども時としては Mark 及び primäre Holz 中にも存する事あり例へば philodendron に於けるが如し

(乙)分泌乳（Sekretkänäle)は主にLisigeneよりなるへんるうた科、唇形科、ふともゝ科、等に存在す而して其生成の大略は先つ二ヶの細胞 Meristematische となり漸々小なる細胞に分割す玆に油を分泌し其油滴の漸々蓄積するに從ひ細胞の空間は油を以て充たされ同時に此に位せる若干の細胞は其膜を溶消せらるゝに至る是れ恐くは Enzymen. の作用ならん Hyperica（をとぎりさうの類）Encalyptus（有加利)斑點等は皆此法に由て生したるものなり

第二種即ち Hysterogenetisch に屬するものは管及ひ孔となりて存在するも甚だ稀なり

Copaiferae（骨湃波拔爾撒謨の原植物）
（龍腦の原植物）に於ては油室非常に擴大にして全木心の組織 Dryobalanops. 崩壞して生したるものゝ如し織形科及び菊科の二三種類中にも又此種の油室を發見す

又近來 Mesnar'd 氏の實驗によれば頗る珍奇の事實を見るべし（植物學雜誌第七卷第七六號一六四頁を見よ）然れども時としては Engymen（エンギーム）の爲に他の複雜なる物体の分解により揮發油の存することあり例へば苦扁桃油、杏仁油「ガウルテリア」油及び纈草油の如き是なり而して彼の松柏科の分泌管中に存在する揮發油の如きは本來揮發油として現存するや或は如斯複合体の分解により生成するやは一の研究すべき問題なり

是より揮發油の生理的作用につき論すべし但し此點に關しての今日の進歩は事實よりも寧ろ想像的にありとす

凡て有機体の營養物を攝取するや二種の部分に別る一は同化せられて自体を形成し他は如斯必要なくして体外に排泄せらるゝを常とす而して其排泄せらるゝや動物は能く体外に分泌せられ容易に自体と分離するも植

物は否らず只二三の植物例へば S. Incrustata の如きは植物体に於て特に必要あらすと雖ども分泌物を貯藏するの器を有す然れども是等は例外のみ多數の植物は何れも其体內に於て或は囊孔或は管內に貯蓄し而らざれば他の物体と化合して他の生活組織を害せざる物体に變形す例へば蓚酸石灰の如し蓋し種々の點より見れば揮發油、樹脂、「アルカロイド」等は植物生長の副產物と見做すを適當なりとす故に植物体に於ては一の必要を見ざるもの丶如し揮發油の構造は區々にして一定せず故に能く之を分類するは甚だ困難に屬すと雖ども今便利の爲め左の如く論ず

第一　單化合体として其構造既知のもの例ば苦扁桃油「ガウルテリマ」油の如し

第二　最多數揮發油の主成分なる「テルペン」類即ち炭化水素例ば「ピチーン」及「リモチーン」の如し

第三　揮發油中の他成分にして該油特異の芳香を有する一種の化合体を更に別てアルデヒード、ケトン、マルキールエン、アルコホル、ヘノール誘導体とす

（未完）

吾妻山ノ植物（第八十一號續）

粟野傳之丞

六、蘭　族

12. オニノヤガラ　Gastrodia elata, Bl.
13. シユスラン　Goodyera repens, R. Br.
14. ハクサンチドリ　Orchis aristata. Fisch.

七、禾本族

15. クマザヽ　Bambusa senanensis, Fr. et Sav.

16. スヽキ　Miscanthus sinensis, Anders.

八、樺木族

17. サウシカンバ　Betula Ermani, var. nipponica, Maxim.

18. ハシバミ　Corylus heterophylla, Fisch.

九、殼斗族

19. ブナノキ　Fagus sylvatica, L. var. asiatica, DC.

十、楊柳族

20. イワヤナギ　Salix sieboldiana, Blume.

十一、檀香族

21. カナビキサウ　Thesium decurrens, Blume.

十二、蓼族

22. イタドリ　Polygonum cuspidatum, Sieb. et Zucc.

23. オホイタドリ　P. sachalinense, Fr. Schm.

十三、芼茛族

24. ミツバワウレン　Coptis trifolia, Salisb.

25. ミヤマカラマツサウ　Thalictrum tuberiferum, Maxim.

十四、樟族

26. クロモジ Lindera hypoglauca, Maxim.

十五、厚皮香族

27 キフヂ Stachyurus praecox, Sieb. et Zucc.

十六、槭樹族

28. ミネカヘデ Acer Tschonoskii, Maxim.

29. ヤマモミチ A. palmatum, Thunb.

十七、衛矛族

30. クロヅル Tripterigyum Wilfordi, Hook. f.

十八、葡萄族

31. ヤマブダウ Vitis Coignetiae, Pulliat.

32. ノブダウ V. heterophylla, Thunb.

十九、岩高蘭族

33. ガンカウラン Empertrum nigrum, L.

二十、繖形族

34. シラネニンジン ? Angelica florenti, Fr. et Sav.?

35. オホゼリ Cicuta nipponica, Franch. et Sav.

廿一、虎耳草族

36. トリアシシヤウマ Astilbe Thunbergii, Miq:

37. ノリウツキ Hydangea paniculata, Sieb.

38. イハガラミ Schizophragma hyrangeoides, Sieb. et Zucc.

廿二、紫陽花族.

39. ガクバナ Hydrangea hortensis, Sm. var. acuminata, A. Gray.

廿三、珍珠花族

40. ヤマブキシヤウマ Spiraea Aruncus, L.

41. キヤウカノコ S. purpurea, Maxim.

42. マルバシモツケ S. betulifolia, Pall.

廿四、委陵菜族

43. キイチゴ Rubus incisus, Thunb.

廿五、石南族

44. ハナヒリノキ Leucothoe Grayana, Maxim.

45. オホバスノキ Vaccinium hirtum, Thunb, var. Smallii, Max.

46. ヤウラクツヽジ Menziesia purpurea, Maxim.

47. リヤウブ Clethra canescens, Reinw.

48. シロバナノコメツヽジ Rhododendron Tschonoskii, Maxim.
49. シロシヤクナゲ R. brachycarpum, Don.
50. エゾツヽジ R. kamtachaticum, Pall.
51. クルマバツヽジ R. sp.
52. バイクワツヽジ R. semibarbatum, Maxim.
53. アカモノ Gaultheria adenothrix, Maxim.
54. ミヤマホツヽジ Elliottia bracteata, Benth. et Hook. fil.

廿六、櫻草族

55. ツマトリサウ Trientalis europeae, L.

廿七、龍膽族

56. ミヤマリンドウ Gentiana nipponica, Maxim.

廿八、柳葉菜族

57. ヤナギサウ Epilobium angustifolium, L.

廿九、桔梗族

58. ヒメシヤジン Adenophora polymorpha, Led. var. Lamarckii, Trautv.

三十、岩梅族

59. イワカヽミ Schizocodon soldanelloides, Sieb. et Zucc.

卅一、山茱萸族

60. ゴゼンタチバナ Cornus canadensis, L.

卅二、忍冬族

61. ツクバ子ウツキ Abelia spathulata, Sieb.

卅三、菊族

62. ヤマハヽコ Gnaphalium margaritaceum, L.
63. ヤブレカサ Senecio Krameri. Fr.
64. モミヂサウ S. Zuccarinii, Maxim.
65. エゾアザミ Cnicus yesoensis, Maxim.
66. サワアザミ C. pectinellus, Maxim.
67. アキノゲシ Lactuca brevirostris, Champ.
68. イワニガナ L. stolonifera, Maxim.
69. チグルマサウ Inula britanica, D C. var. linariaefolia, Regel.
70. ミヤマコウゾリナ Hieracium japonica, Fr. et Sav.

◎雜錄

○植物雜俎

松村任三

○海水中黴菌アリ、Bacillus granulosus ト曰フ、是レ尋常ノ品、千百「メートル」ノ深底ニモ棲息ス

○海中黴菌ニ數種アリ曰ク Bacillus thalassophilus. 曰ク Bacillus granulosus. 曰ク Bacillus limosus. 曰ク Bacillus litoralis. 曰ク Bacillus halophilus. 曰ク Cladothrix intricata. 曰ク Spirillum marinum.

○三十七低度ノ海水中亦黴菌ヲ生セズ○地中海温平均十三度

○飲用水中黴菌多シ或ハ曰ク一立方「センチメートル」中ニ五萬個或ハ曰ク七個乃至三百十五個或ハ曰ク四百九十六個或ハ曰ク三萬九千個ト

○飲用水中十種ノ黴菌アリ是レ一立方「センチメートル」中ニ生捿スルノ數

○井水中ニ捿息スルノ黴菌一ニ曰ク Micrococcus ureae. 二ニ曰ク Micrococcus cinnabareus. 三ニ曰ク Bacillus putidus. 四ニ曰ク Bacillus erythrosporus. 五ニ曰ク Bacillus liquefaciens 六ニ曰ク Bacillus fuscus 七ニ曰ク Bacillus vulgatus 八ニ曰ク Bacillus tremulus 九ニ曰ク Micrococcus coronatus 十ニ曰ク Micrococcus radiatus 十一ニ曰ク Micrococcus viticulosus 十二ニ曰ク Micrococcus luteus

○或ハ曰ク井水中ニ捿ム黴菌五十五種ト

○氷中黴菌アリ一立方「センチメートル」中五百乃至七百個

○菽豆ノ根ニ生捿スル黴菌アリ Rhizobium leguminosarum ト名ク

○葡萄ニ病ヲ起ス黴菌アリ Bacillus amplopsorae ト名ク

○黴菌アリ胃腑ニ捿息シ能ク消化ヲ助ク一ニ曰ク Bacillus geniculatus. 二ニ曰ク Bacillus ventriculi. 三ニ曰ク Bacillus carabiformis.

○黴菌アリ蘆粟ヲ侵ス者曰ク Bacillus Sorghi 千八百八十七年米國ニ創見ス ○穀類ヲ侵ス者曰ク Bacillus Secales ○葱ヲ侵ス者曰ク Bacillus Hyacinthi.

（未完）

○葡萄實ノ成長ニ關シ種子ノ働キ

Müller Thurgau 氏ノ說ニ依レバ葡萄ハ元來四個ノ種子ヲ有スルモノナレ𪜈其全數悉皆成熟ナスニ至ラズシテ三個、二個若クハ一個ノミナルアリ或ハ一個ヲモ存セザルヿアルハ各種ノ葡萄ニ於テ見ル處ノモノナリ而シテ此ノ如ク種子ノ減數ヲ來スハ受精作用ノ不全ナルガ爲メニハアラズ花粉管ハ珠孔ニ進入シテ花粉核ヲ胚ニ達セシム然レ𪜈卵珠ニ眞ノ受胎作用ヲナサシムルヿ能ハサルニアルカ若クハ卵珠ニ達セザルカ或ハ卵球ノ發育不全ナルカ又ハ養料不充分ナルニ因ル養料ノ缺乏ハ實ニ花粉管ノ通達ヲ防害ナスモノナリ如此年ニ在リテハ花芽ノ脫落多キモノナリ

種子ノ減數若クハ全ク之ヲ欠クモ果實ノ成熟セルハ眞ノ受精作用ハナサヾレ𪜈花粉管ノ成長作用ニヨリ又ハ一種子ノ成長ニヨリ刺戟ヲ與フルニヨルナリ一種子ヲ有スル果實ニアリテハ其種子ノ存在セル側最モ盛ンニ果肉ヲ生ス又種子ヲ有スルモノハ成熟期ヲ長カラシム

以上ノ如キハ單ニ葡萄ノミニアラズ「カレント」類林檎、橙類「アプリコット」類及ビ桃類ニ於テモ亦然リ

大、三　報

○柳樹ノ生長

柳ノ樹カ適當ノ土地ニアルトキハ速ニ生長スルヿハ能ク知ラレタル所ナルガ今ヨリ五十三年前ニ直經僅ニ六吋ニ過ギザリシ柳アリシガ其年之ヲ伐リ取リタルニ更ニ新芽ヲ生ジテ生長ヲ始メ現時ハ二十四呎半ノ周圍ヲ有シ其枝條ハ繁茂シテ凡百五十坪余ノ土地ヲ蔭フト云フ又今ヨリ二十七年前ニ杖トシテ用ヒタル柳ノ枝ヲ土地ニ插ミ置キシニ之ヨリ發生シタル柳樹ハ現今四呎ノ直徑ニ達セリト云フ

○楊柳屬ノ識別ニ就テ

本屬中ノ植物ヲ識別スルハ頗ル困難ナリ而シテ此類ハ雌雄花ヲ各別ノ樹ニ生ジ花ヲ採集スルト同時ニ葉ヲ得ルヿ能ハザル事ノ如キモ其困難ヲ來タス一原因ナルベシ然ルニ博士 N. M. Glatfelter 氏ハ楊柳屬ノ葉脈ノ研究(A study of the Venation of Salix)ト題スル論文ヲ著シ米國ニ產スル二十四種ノ楊柳ノ葉脈ヲ研究シ之ニ因テ同屬ノ植物ヲ分類スルヿヲ企圖セラレタリト云フ若シ此企圖ニシテ成功アラバ楊柳屬ノ識別ハ大ニ簡單トナルベキナリ

○やはずゑんどうノ莢

高知縣　永沼小一郎

やはずゑんどう(Vicia sativa L.)ノ莢ヲ幼女ガ夥シク摘ミ來ツテ緣板ニ並ベ置キシガ日光之ニ中ルヤ嗶叭聲ヲ放チ非常ノ速力ヲ以テ種子ヲ彈射シ暫時ニシテ空莢ノミ累々タリキ

○二株ノふうらん (Angræcum falcatum Benth. et Hook. f.) ノ比較

仝上

昨年ノ冬東寺(土佐國)ノ境內中ノ枝樹ニ掛リタルふうらんヲ持チ歸リシガ本年常品ヨリハ四週間程早ク開花セリ且花ノミナラズ葉モ根モ總テ大ナレドモ直ニ常品ノ花（未ダ開カザル故）ト比較スルニ由ナケレバ其花ハ

「アルコホル」ニ浸シ以テ常花ノ開クヲ待テリ已ニシテ常花亦開キタルヲ以テ是ヲ比較スルニ其花ノ部分甲花ニ長キハ乙花ニモ長ク一ノ差異ヲ見ズト雖𪜈然𪜈「ポピュラー」的ニハ隨分差ヘリ甲花ハ花体大ナルノミナラズ其三上瓣ハ等シク相集リテ上ニ朝シ其狀恰モ肉叉ノ如ク乙花ハ花体ヤヽ小ニシテ三上瓣ハ稍離隔シ其狀宛モ八字草（ゆきのした屬）ノ花瓣ノ如シ今牌瓣（ラベルム）ヲ各一トシテ他部ヲ比較スルトキハ左ノ如ク大差ナキヲ見ル

	上瓣	中瓣	下瓣	牌瓣	距
甲	一、一八	一、〇九	一、二七	一、〇〇	五、〇〇
乙	一、一四	一、一四	一、二八	一、〇〇	六、〇〇

其他果實ノ差異ハ必要ノ點ノ存スル所ナレバ之ニ注意セシガ甲株ハ一果ヲ留メタルモ乙株ハ不果ナリキ然レ𪜈辛ニ去年ノ舊果アリタレバ甲果ノ熟時ニ及ンデ二者ヲ比較スルニ甲ハ肥エテ短ク乙ハ瘠テ長シ乙株ニ舊果二個ヲ存セシガ皆同一ノ形式ナリ甲ハ只一個ノミナレバ總テカヽル形狀ヲ保テルヤ否ヤ今遽カニ判シ難シ

○近頃英國ニテ Year Book of Science. ト題シ毎年其前年中ニ於ケル科學上ノ研究ノ摘要ヲ集メテ出版スル仕組ノ小本ヲ出版セリ甚手輕且ツ重寶ノモノト思ヒシ故昨千八百九十三年ニ出版セシモノヨリ植物學ニ關スル二三ヲ揭ゲ讀者諸君ニ御紹介仕ラン

は、じ、

組織學ニ關スル研究　斯部ニテ面白キ研究ハ受精ニ關スルモノナリ從來下等植物ニ就テハ此種ノ研究ハ極メテ乏シク殊ニ生殖細胞ノ核ノ作用ニ關シテ著シ Klebahn ノ出シヽ Oedogonium ノ一種ノ受精ニ就テノ論文ハ此點ニ於テ甚ダ面白キモノナリ Oedogonium ハ糸狀淡水藻ノ一種ニテ大ナル核ヲ具シ其核ハ高等植物ノ

核ト全クかりをきねてっく法ニ從ヒ分裂スルトハ永キ前ヨリ世ニ知ラレシ事ナルガ著者ハ精虫ノ核ガ卵細胞內ノ原形質ヲ通過スル樣ヲ追究シ遂ニ雌核ト合着スルヲ見タリ雄取色素（クロマテック）ハ此ノ如ク合着後ノ卵核ニテモ尙區別スルヿヲ得ト云フ又著者ハ生卵器（オーゴニアム）ノ直下ヨリ切離サルヽ細胞ハ生理上極球ノ意ヲ有シ得ルモノト考ヘリ

(Klebahn. "Studien über Zygoten,"II. Pringsheim's Jahrbuch für wissenschaftliche Botanik, xxiv. 235.)

前揭ノ場合ニ於テ雌雄ノ核ハ合着ノ際顯著ナル差ヲ有ス即チ雄核ハ雌核ヨリモ形小ニ割合ニ取色体ニ富メリ或一派ノ研究者ハ此種ノ差違ニ重ヲ置ケド Guignard, Strassburger. ノ如キ他ノ派ハ是レニ反シテソハ大切ナルモノニアラデ唯發生ノ時期ニ關スルモノヽミ性ニ關スルモノニアラズト云フ然ルニ Zacharias ハ生殖細胞核ノ化學上ノ差違アルヲ定メタリト云フ人ナルガ Guignard ノ此考ニ反對セリ Guignard ハ顯花植物ニ就テ研究シ受精シタル卵內ノ合着シタル核ハ進ンデ分裂セントスル乍始メハ兩性著キ差アリテ彼是對シ得ベキモ後ニハ分裂シタル部分ニハ少シモ差ヲ見出サズト云フ Zacharias 是レニ對ヘテソハ二核互ニ作用シカクテ元來存在セシ差別ヲハ平等トスルナリト云フ且ツ二者必ラズ差ナケレバナラズ然ラザレバ卵ハ受精ナシニ發達スルヿヲ得ザルヲ說明スルヿ能ハズト云ヘリ然レド Weismann, Guignard, Strasburger. ノ說ニテハ兩生生殖細胞核ノ相違ノ點ト云フハ必竟同種ノ兩個体ノ差ト云フヿナレバ是レガ差ヲ顯微的化學上ノ試驗ニ處セントスルハ不能ノ事ト云ハザルベカラズ Schottländer and Rosen 前者ハ羊齒及ビ地錢ノ類ニテ後者ハ百合族ニテ研究シ雌雄ノ核ハ色ノ反應ニ差アルヲ示サント務キ Aüerbach モ亦有脊椎動物ニ就テ同一ノ事ヲ試ミタリ其結果ニ由レバ雄核ハ特ニ靑色ノ染色ニ親ミ易ク雌核ハ紅ニ親ミ易キ性アリト云フ然レトモ此等ノ反應ハ處用ノ染色ノ化學的成分ニ無關係ナリト云フナレハ彼樣ノ觀察ノ意甚不明ナリ Schottländer, Berichted. deutschen bot. gesellschaft, x. 27; Rosen, Cohn's Beiträge z. Biol. d. Pflanzen, v. 443; und vi. 267.

其他ハ略シテ表題ノミヲ掲クレバ(一)Chauveandノ多胚子ヲ生ズル場合ニ受精ノ有樣ニ就テノ研究(二)Mott.ierノ胚囊母細胞ノ縱裂ノ新例(三)Crato "Physode." Gerassimoff.ノあをみどろニ見ル無核細胞ニ就テノ研究碧藻內ニ核ノ有無ニ就テ(四)Zukal及ビ(五)Hieronymusノ說及ビ(六)Zachariasノ兩說ノ批評(七)DodelノPellionia Daveauanaニテ澱粉粒ノ發生ノ有樣(八)CorrensノCupheaノ種子ノ濕氣ニ遇フテ長毛ヲ生ズル事ノ組織學上ヨリ說明セルモノ等ナリ又生理學ノ部ニハ(九)WiesnerノPlasome及ビDermatosomes.(十)Bütschliノ原形質ノ構造說(十一)Klemmノ說(十二)Hauptfleischノ原形質ノ流動(十三)Pfefferノ植物ノ呼吸体質變化及ビ光線吸收ニ關シテノ說此等ノ作用ノ「エネルギー」ニ就テノ說等見ユ尙他ニ四五ノ件ヲ記載セリ

(一)Chauveand, Competes Rendus, cxiv. 313 et 504.

(二)Mottier, Bot. Gazette xvii. 258.

(三)Crato, Ber. d. deutsch. bot. gesellschaft, x. 295.

(四)Zukal, Ber. d. deutsch. bot. gesellschaft. x. 51.

(五)Hieronymus, Cohn's Beitr. z. Biol. d. Pflanzen, v. 461.

(六)Zacharias, Bot. Zeitung, 1. 617.

(七)Dodel, Flora, 1892, 267.

(八)Correns, Ber. d. deutsche. bot. gesellschaft, x. 143.

(九)Wiesner, Die Elementar structur und das Wachsthum der lebenden substanz. Vienna, 1892

(十)Bütschli, Untersuchungen über mikroscopische und das Protoplasma.

(十一)Klemm, Flora I. 395.

(十二)Hauptfleisch, Jahrb. f. Wiss. B., xxiv. 173.

(十三)Pfeffer, Abh. d. k. Sachs, Ges. d. Wiss., xxxi. 151.

「バクテリア」ノ說

K、D・山人纂譯

第六章　黴菌ト外科的諸病

凡ソ身体ニ於ケル傷痍ハソノ偶然ニ蒙リタルト將ニソノ治療ノ際外科醫ノ過誤ニヨリテ受ケシトヲ問ハズ必ズ危難ノ之ニ伴フコトアリ即チ破傷風（ブラットポイヅニング）ト稱スルモノハ是ナリ

抑モ此ノ危難タル實ニ懼ルベキモノニシテ往昔ヨリ人カ戰爭ニ於テ小銃或ハ大砲ニヨリテ死セルヨリモ破傷風ニ因リテ死セルモノ其數尤モ多キニ居レリ而シテ此病タル輙スレバ其創口腐敗靡爛シ易キモノナルガサテ其原因ニ至リテハ多年人ノ知ラザル所ナリキ斯クテ此ノ創痍ノ破傷風トナルヤ亦極メテ不潔ニシテ一種ノ惡臭ヲ發ツモノカラ必ズ或ル種類ノ腐敗物ガ創口ニ入リテ此病ヲ釀スナラントハ認定シタリサレド果シテ黴菌ナルヤ將タ他ノ特殊ノモノカ創口ニ入リテカク災ヲ釀セルニヤ當時一人ノ之ヲ知レルモノアラザリシナリ而ルニ外科醫ノミハ其病ノ原因未タ全ク知ラレサル內ニ早ク既ニ實際其病芽ヲ防滅シ若シクハ創痍ノ腐敗ヲ防止シ得ベキ物質ヲバソノ治療上ニ適用シ居レリソヲ如何ニトイフニ水ニテ溶解セル石炭酸ハ創口ヲ洗フニ効用アルコトヲ知リシコト是レナリ

其後ヲ破傷風ハ塵ト混シテ創痍ニ入リ來レル生物ニ緣起スルモノナリトノコトヲ漸々知ルニ及ビタレハ外科

醫ノ手術モ亦漸ク改マリ乃チ其手術ヲ施シ創口ヲ療治スル時ニ當リテモ先ツ醫師ノ手腕及ヒ器械創口ノ邊ナドスベテ石炭酸ヲ撒布シ而ル後細帶ヲ以テ創口ヲ庇護スルガ故ニ一ノ生物ダモ其創口ニ入ルコトナクシテ次第ニ癒エ行ク事トハナレリサレド此病ヲ生ゼシムルモノハ黴菌トイフ一種ノ生物ナリトノコトハ當時尚ホ全ク未知ニ屬シ只想像上ヨリ此病ヲ以テ生物ノ所爲ニ歸シタリキ

然ルニ近年ニ至リテハ此病ニ關シテ精密ナル實驗ヲナシ且實際多數ノ動物ニヨリテ之カ試驗ヲ施セシヲ以テ今ハ單ニ破傷風ノミナラス膿物（アブセッセス）モ丹毒モ其他ノ焮衝等モ悉ク皆黴菌ニ起因スルモノナルコトヲ知リ加之殆ンドアラユル場合ニ於テ斯ノ如キ病症ヲ生ゼシムルモノハ時ニ二種ノ黴菌ニ限レルコトヲモ知悉スルニ至レリ

○繇條書屋植物雜記（其五）

牧野富太郎

◉こまつなぎヲ Indigofera Bungeana Walp. ニ充ツルハ非ナリ

こまつなぎハ帝國隨處ニ自生シ往々數尺ノ高サニ達シ其狀灌木ノ如ク本莖大枝ハ能ク冬ヲ凌デ枯死セズ是レ即チ Indigofera tinctoria L. ニシテ Indigofera Bungeana. ニ非ラズ Indigofera Bungeana. ハ清國ニ產ス一ニ之ヲ Indigofera micrantha Bge. ト云フ小葉多クハ三對ヲナシテ兩面ニ布毛アリ腋生花穗ハ葉ヨリ長ク莢中豆子少ナクシテ莢上ニ白毛ヲ蒙ル此品未ダ本邦ニ見ズ唯清國ニ產スルヲ知ル而已

◉草木圖說ノつぼくさハ吾人ノ稱スルつぼくさニ非ラズ

草木圖說第四卷ニ載スル所ノつぼくさハ吾人ノ稱スルおほばちどめぐさニシテ學名之ヲ Hydrocotyle javanica Thunb. ト云フ所謂つぼくさ之ヲ Hydrocotyle asiatica L. ト云フ故ニ同書ノつぼくさニ充ツルニ H. asiatica. ヲ以テスルハ非ナリ是レ同書ノつぼくさハおほばちどめぐさナレバナリ

●岩せんとうさう(新考)

是レ Carum Tanakæ Franch. et Sav. ノ和名トシテ此ニ之ヲ新考セリ草木圖說第五卷第十七葉ニ載スル所ノはそばのせんとうさう一名みやませんとうさうハ此植物ニ非ラスシテせんとうさう即チ Chamæle tenera Miq. ノ類似品ニ係ル然レ𪜈之ト同品ニ在ラズ〆全ク別種ナリ予ハ新ニ之ヲ Chamæle japonica Makino. ト稱シ他日之ヲ詳說シ以テ世ニ報告ス可シ

●ちやるめるさうニ二種アリ

草木圖說第四卷ニ既ニ兩品アルヿヲ說キ「マキシモヰッチ」氏(Maximowicz in Mél. Biol. VI. p. 203.)亦二品アルヿヲ言ヘリ然レ𪜈未ダ分置シテ二種トナサズシテ一名ノ下ニ混說セリ是レ皆少シク精覈ヲ缺ゲリ宜シク別テ全然二種トナスヘキモノナリ一ハ匐枝ヲ出サズ花穗長ク花多キモノ即チ草木圖說ノ甲種ニ〆「マキシモヰッチ」氏ノ "lobo folii terminali multo magis acuminato, scapo elongato multifloro." ト記セシモノナリ一ハ匐枝ヲ引テ繁殖シ穗上ニ花ヲ着クル多カラズ是レ草木圖說ノ乙種ニ〆「マキシモヰッチ」氏ノ "lobo terminali breviore, racemo brevi paucifloro." ト記セシモノナリ予ハ遠カラズ之レガ詳說ヲ公示セントス欲スト雖𪜈今先ヅ此ニ之レガ名稱ヲ確定シ置カン

(1)Mitella longiscapa nov. sp.

M. japonica Maxim. in Mél. Biol. VI. p. 203. pro parte.

草木圖說第四卷チヤルメルサウ甲種(說文幷ニ圖中甲及ビ一、二)

(和名)チヤルメルサウ

(2) Mitella japonica mihi.

M. japonica Maxim. c. c. pro parte.

草木圖說第四卷チャルメルサウ乙種(說文幷ニ圖中乙及ビ三)

(和名)コチャルメルサウ(新考)

●須川長之助氏

伊藤篤太郎氏編輯錦窠翁九十賀壽博物會誌ニ云

須川長之助ハ陸中ノ人、性朴素ニシテ高山幽谷ヲ跋渉シ植物ヲ採集スルヿ多年新撿スルトコロノ珍種奇品鮮尠ナラズ多クハ之ヲ歐洲ニ送致シ以テ海外植物學者ノ考證ニ供セリ泰西植學諸家ソノ功ヲ賞シ長之助ノ名ヲ取リテ直ニ植物ニ命ズ於玆乎長之助ノ名漸ク海外ニ傳唱セラルルニ至ル然ルニ本邦ニ於テハ却テソノ功績ヲ稱スルモノ無シ余常ニ之ヲ遺憾トス

ト同人ハ露人「マキシモヰッチ」氏ノ爲メニ常ニ山野ヲ跋渉シテ植物ヲ採集シ之ヲ露國帝都ノ植物園ニ送致セリ予前年同人採集ノ標品ヲ博物局ニ於テ見シヿアリシガ其調製極メテ宜シキヲ得一見直ニ其技ニ熟達セルヲ知レリ其後東京駿臺「ニコライ」氏ノ許ニ於テ始メテ同人ニ面會セリ狀貌朴素質直ニシテ田里農民ノ風アリ其後幾クモナク「マシキモヰッチ」氏ノ訃音ニ接スルニ至リ同人ハ鄕里(岩手縣陸中國紫波郡下松本村二十一番地)ニ歸リテ此ニ植物採集ノ業ト緣ヲ絕ツニ至レリ同人ハ多年植物採集ニ從事シテ其技ニ熟達セリト雖モ「マキシモヰッチ」氏歿後其手ヲ空シクシテ徒ニ鄕里ニ在リ而シテ敢テ人ノ此人ヲ稱スル鮮シ予モ亦同人ヲ惜ムモノタミ今再ヒ之ヲ起スノ便宜ヲ有セザルノミ同人ノ功績ヲ知ルモノ幸ニ一顧ノ勞ヲ執ルアラバ同人ハ恐クハ喜ン

デ之ニ應ゼンカ

同人ノ名ヲ取テ之ヲ植物ニ命ゼシモノヲ舉グレバ左ノ如シ而メ殊ニ此名稱ノ强ク吾人ノ感覺ヲ刺衝スル所以ハ其植物多クハ皆ナ珍種稀品ニ係レバナリ

Cimicifuga dahurica Maxim var. Tschonoskii Huth. Berberis Tschonoskiana Regel. Acer Tschonoskii Maxim. Pyrus Tschonoskii Maxim. Lonicera Tschonoskii Maxim. Leucothoe Tschonoskii Maxim. Rhododendron Tschonoskii Maxim. Carpinus Tschonoskii Maxim. Allium Tsch.onoskianum Regel. Trillium Tschonoskii Maxim.

●ふしぐろニ兩品アリ

ふしぐろ一ニさつまにんじんト云フなでしこ科まんてま屬 (Silene) ニ屬ス一ヲけふしぐろ（新考）ト云フ Silene aprica Turcz. (=Melandryum apricum Rohrb.)是ナリ本邦ニ於テハ Wichura 氏之ヲ横濱ニ得(forma densiflora Rohrb.) Maximowicz 氏之ヲ九州長崎ニ得タリ莖節稍ヤ肥厚ニメ白毛多ク葉亦密毛ヲ蒙ル一ヲふしぐろト云フ Silene aprica Turcz. var. β.firma Rohrb. *sub Melandryum apricum Rohrb.*(=Silene firma Sieb. et Zucc.; Silene melandryiformis Maxim.; Melandryum firmum Rohrb.)是ナリ本邦随處ニ多シ莖節高クメ毛ナク或ハタヾ下部ノ節上ニ微毛アルノミ葉亦無毛ナリト雖𪜈下部ノモノニハ少シク毛アリ之レヲ此兩品ノ異點トナス

◎雜報

○植物名彙　松村任三氏著日本植物名彙ハ既ニ十年前ノモノナリ今ヤ本邦ノ書肆之ヲ缺ク聞ク昨冬來氏ハ其改正増補ニ着手セリト

○日光山植物目錄　松村任三氏ノ著ニ關ル該目錄ハ今春中ニ出來ノ筈

○植物家旅行　昨十二月中敎授松村氏ハ動植物學二年生ヲ引率相州ノ海岸及山中ヲ巡廻セリ又植物學撰科生松田定久安井伴一ノ兩氏ハ豆相ノ諸山ヲ探討セリ

○各種ノ强度ノ酒精ヲ得ル法　m %ノ酒精ト n %ノ酒精トヲ混シ l %ノ酒精ヲ得ンニハ m %ノモノト n %ノモノトヲ $l-n$ ト $m-l$ トノ割合ニ混ズベシ例ヘバ七十%ノ酒精ト零%ノ酒精即チ水トヲ以テ五十%ノモノヲ得ンニハ酒精ト水トヲ五ト二ノ割合ニ混ズベシ

○辛崎の孤松

七月廿一日辛崎の松見んとて、未明に京をたちて白河越をす、湖水の眺望いづれはあれど、白川の嶺より見るをよしとす、三井寺これに亞く、世に近江八景の畫圖おほしといへども、まのあたり見るとははるかに劣れり、八景相去を互に遠し、白河山より見れば一瞬千里、しかれとも比良は右にかくれて堅田矢走も晴されば見わきがたし、この好景畫とも筆に及がたく述とも詞に竭しがたし、近く見てますますうれしきものは、石山とから崎の松也、北より南にすす枝三十間ばかり東より西にいたりて廿間餘幹は二圍にあまり、木の丈高からずしてまん丸に茂生す、洛陽妙心寺の松、島原角屋の松及住よし難波屋の松、いづれもよしといへども、辛崎の松に對しては同日の論にあらす、實に天下の獨松なり、傳に云、から崎の松枯たりしとき明智光秀栽か

へるとて、

　わか外にたれか植けんひとつ松こゝろしてふけしがのうら風

そのゝちこれも枯たりしかば長嘯子又うへらる、是も亦かれて今の松は、近時某侯のうへられしといふ、松のめぐりには笆をゆひ岸には石堐をしていと嚴重に見ゆ、近年枝條ます〳〵垂茂するをもて、石を築出すことしば〳〵なりとぞ、松の前面に辛崎明神たゝせ玉ふ、小社なり、或人の云、前の説非なり、この松已に四百年に及ぶ歟、その事山門の記録にありといふげにも木だちのさま百年來のものにはあらず、傳記なほたづぬべし

（著作堂一夕話）

或云水戸の儒臣に一松又之進有其曾祖淡海直壽といふもの天正元年八月の大風雨に唐崎の松の倒れしを植繼き因て姓を一松と更む松蔭錄一卷あり青蓮院尊朝法親王の記は扶桑拾葉集に入たり云々

○寄贈金及ビ書目

金拾圓也			松村任三君
帝國大學圖書館寄贈書籍表		四葉	帝國大學圖書館
東洋學藝雜誌	第百四十七號	一册	東洋學藝社（東京）
動物學雜誌	第五卷第六十二號	一册	動物學會（東京）
地質學雜誌	第一卷第三號	一册	東京地質學會（東京）
地學雜誌	第五集第六十卷	一册	東京地學協會（東京）

寄贈金及ビ書目

東京醫學會雜誌	自第七卷第廿三號 至第八卷第壹號	三冊	東京醫學會	（東京）
牧畜雜誌	自第百十八號 至第百十九號	二冊	牧畜雜誌社	（東京）
大日本山林會報告	第百卅二號	一冊	大日本山林會	（東京）
日本蠶業雜誌	第六十七號	一冊	日本蠶業雜誌社	（東京）
日本園藝會雜誌	第四十九號	一冊	日本園藝會	（東京）
國家醫學會雜誌	第八十號	一冊	國家醫學會	（東京）
北海道水產雜誌	第五號	一冊	北水協會	（北海道）
釀造雜誌	自第百三十二號 至第百三十五號	四冊	釀造雜誌社	（東京）
擴農會雜誌	第二十七號		擴農會	（岐阜）

Bulletin de L'herbier Boissier. No. 4—9. Genève.

OKI
233

廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

和漢洋 對譯 **本草辭典** 全一册

定價金六拾錢

本書ハ英語及其他數十ケ國ノ語ニ於ケル植物及藥品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩樣ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレバ苟クモ**英語**ヲ教授シ**植物學**ヲ修メ**化學、藥物、山林、農業**等ノ諸科ヲ講シ又ハ**貿易、通辯、反譯、園藝**等ニ從事セラルヽ內外ノ人士共ニ座右ニ缺クベカラザル良辭書ナリ

東京神田裏神保町一番地

敬業社

恭賀新年

堀 正太郎

一本誌廣告料五號文字 一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條 代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條 前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セズ○第三條 郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條 特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御届可申候

明治廿七年一月十九日印刷
明治廿七年一月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者 熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所 熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所 植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所 敬業社
同所
同 丸善書店
東京日本橋區通三丁目

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

明治廿一年二月三日內務省許可

Vol. 8.] January 20, 1894. [No. 83.

CONTENTS.

On the Structure of Cystoclonium armatum, Harv. **By K. Okamura.** 1

Notes on Cryptogamous Plants. **By K. Tsuge.** 3

Stamens of Monochoria vaginalis, Presl. var. Kolsakowii Solms-Laub. **By K. Naganuma.** 6

Fecundation Period of Ginkgo biloba. **By S. Hirase.** 7

Plants of Yaeyama and adjacent Islands. **By Y. Tashiro.** 9

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopaia. **By K. Sawada.** 15

Notes on the Botanical Excursions to Enoshima and Hakone. **By A. Yasuda. and T. Ichimura.** 18

Generic Characters of Japanese Ferns. **By T. Makino.** 24

Botanical Excursions to the Prov. of Idsu and Sagami. **By S. Matsuda and B. Yasui.** 25

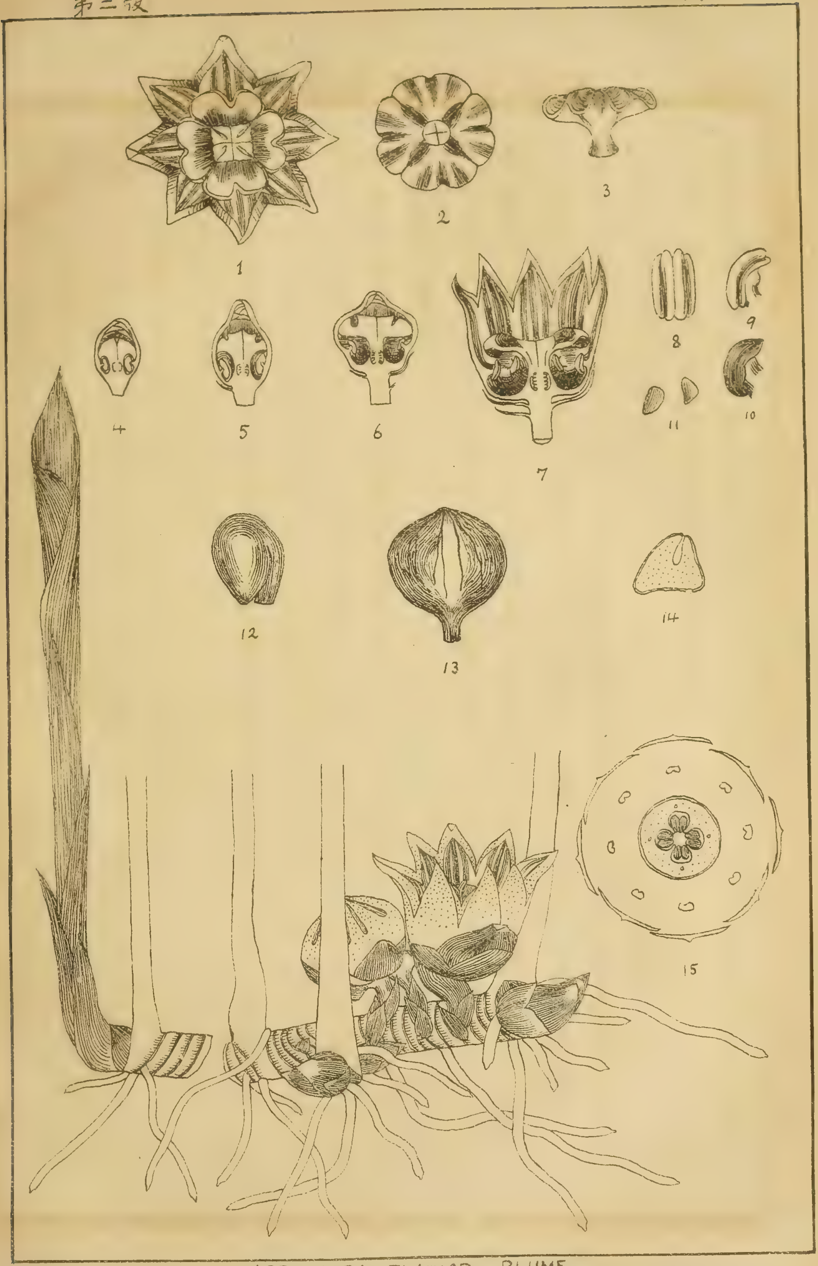
Chemical Researches on the Vegetable Volatile Oils. **By K. Kobayashi.** . 27

Plants from Mt. Azuma. **By D. Awano.** 29

Miscellaneous:—. 35

Short Notes—Influence of the Grape Seeds on the Development of the Berry.—Growth of the Willow.—Legume of Vicia sativa.—Two Forms of Angræcum falcatum.—Notes on Histology.—Bacteria.—Miscellaneous Notes on Plants of "Yōjōsho-oku."—"Shokubutsu Meii"—List of the Plants of Nikkō.—Personal intelligence.—Method of Obtaining Varions Kinds of Strong Alcohol.—Solitary Pine of "Karasaki."

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.



ASPIDISTRA ELATIOR, BLUME.

BARAN. バラン

植物學雜誌第八卷第八十四號

（明治二十七年二月二十日）

葉面ハ水分ヲ吸收スルヤ否ヤヲ論ズ　（前々號ノ續）

池野成一郎

以上記載スル所ノ研究ハ皆植物枝條ガ水分ヲ吸收スルヤ否ヤヲ確定スベク未ダ以テ葉ガ之ヲ吸收スルヤ否ヤヲ確定スル能ハザルナリ而〆本號記載スル所ハ即葉ガ水分ヲ吸收スルノ力アリヤ否ヤヲ處決スル所ノ研究法ナリ

ボンネー氏(Bonnet 佛人)ハハダンキヤウノ枝條ヲ取リ其一葉ヲ水中ニ置キ他ハ之ヲ空氣中ニアラシメタリ、然ルニ葉ノ空氣中ニアルモノハ十九日間依然新鮮ノ狀ヲ呈セリ是レ此水中ニ沈メル葉ガ其面ニ因テ以テ水分ヲ吸收シタルノ明證ナリ

サックス氏(Sachs 獨乙人)ハブダウ及ビシモツケ屬植物ノ新鮮ナル枝條ヲ少ク屈曲シ枝條ニ附屬スル葉ノ其齡中年ナル者ヲ硝酸「リチウム」ノ二「ペルセント」溶液ニ浸シ葉ノ幼稚ナル者幷ニ老成セル者ハ之ヲ空氣中ニアラシメタリ數日ヲ經テ是等幼稚ナル葉幷ニ老成セル葉ヲ分光器ニ藉テ以テ撿スルニ「リチウム」アルヲ認メタリ即是レ溶液ガ水中ニ沈ミタル葉ノ吸收スル所ト爲リ是ヨリシテ上部幷ニ下部ニ向テ運行シタルノ明證ナリ

ブルゲルスタイン氏（前出）ハ Ribes aureum（イチゴノ類）Lonicera tatarica（スヒカヅラノ類）Corylus Avellana（ハシバミノ類）、クハ、キヅタ、ベニバナインゲン等諸種植物ノ莖ヲ短ク截切シテ僅ニ完全ナル二葉ヲ遺シ而〆其一葉ヲ水中ニ沈メ他ハ空氣中ニアラシメタリ然ルニ葉ノ空氣中ニアルモノハ二日若シクハ二日以上ニ及

葉面ハ水分ヲ吸收スルヤ否ヤヲ論ズ

ブモ依然新鮮ノ狀ヲ呈シ或ハ僅ニ凋萎セル而已而メ此等植物莖ノ水無キ所ニ置キタルモノハ僅ニ二十四時ヲ經ズシテ大抵皆枯槁シタリ（溫度十八度乃至二十二度）

同氏ハ又左ノ法ニ因テ以テ葉ガ水分ヲ吸收スルノ力アルヿヲ研究シタリ是レ嘗テボコルニー氏（Bokorny）ガ植物体中蒸散流ヲ認識スル爲ニ用ヰタル法ニ基スルナリ即ブルゲルスタイン氏ハ諸種植物ノ枝條ヲ十五乃至二十五「サンチ」宛ニ截切シ之ヲ水千分ニ付二分ノ硫酸鉄ヲ有スル溶液ヲ盛リタル硝子瓶ノ縁邊ニ置キ枝條ノ數葉ヲ此溶液ニ浸シタリ時ヲ經テ莖ノ薄片ヲ造リ之ヲ黄血滷鹽（フエロチアンカリ）ノ濃厚溶液ノ少ク鹽酸ヲ含メルモノニ投ジ而シテ後之ヲ顯微鏡下ニ覗フニ莖ハ明ニ藍色ノ反應ヲ呈ス加之藍色ヲ呈スルモノ主トシテ維管束タリ然レトモ表皮下ニアル所ノ「コレンキマ」、靭皮束、厚皮「パレンキマ」ノ一部髓「パレンキマ」ノ一部モ又此反應ヲ呈スベシ是レ又溶液ノ吸收セラレタルヲ證スルモノナリ

グレゴリー氏（Gregory 英人）ハ葉ノ凋萎シタルモノヲ莖ヨリ切リ取リ其截口ニ蠟ヲ塗抹シ而シテ後之ヲ水中ニ沈メ或ハ毛筆ヲ以テ其上ニ水ヲ塗抹シタリ此試驗法ニ因ルニ Helichrysum, Salvia, Alfredia 等ノ葉ハ數分時乃至一時間ニシテ其緊張ヲ復シタリト雖𪜈 Vitis, Rubus 等ノ如キ之ヲ復スル能ハザリキ

次ニ記載スル試驗法ハ其趣前ト稍々異リ葉ヲ水中ニ投ズルノ前後ニ其重量ヲ測ルニアリ若シ果メ水中ニ投ジタル後葉ノ重量増加スルアレバ其増加ハ即吸收シタル水分ノ重量ナリ

ブッサンゴー氏（Boussingault 佛人）ハタウワタノ葉ヲ切リ取リ之ヲ十四時間水中ニ置キタルニ其重量四十「ペルセント」ヲ増加シタリ然レ𪜈タウワタノ葉ノ永ク雨ニ濕リタルモノヲ以テ試ムルニ重量ハ絶エテ増加スルヿ無シ又 Platanus 及ビブダウノ葉ヲ以テ試ムルニ其重量ハ二、三或ハ一、二「ペルセント」ヲ増加シタリ

サーズネル氏ノ研究ニ據ルニ葉ノ蠟質ヲ以テ被覆セラレタルモノト雖モ外ヨリ水分ヲ吸收スルノ力アリ例ヘバ Sedum Falaria ノ葉ハ其新鮮ナル時ハ重量〇、七五九「グラム」ナリト雖モ之ヲ十二時間水中ニ沈ムルニ（葉柄ハ之ヲ水中ニ入レズ）重量ハ增シテ〇、九五八「グラム」トナレリ即重量ノ增加ハ二十六「ペルセント」ナリ

以上ハ葉ガ水分ヲ吸收スルノ力アルヲ證スルノ試驗ナリ次號ニハ葉ノ表裏面孰レガ水分ヲ吸收スルニ力アルヤ將タ其大小如何等ヲ論ズベシ

（以下次號）

槭樹（カヘデノ）花（ハナ）雜記

松村任三

一タウカヘデ一株中雌雄兩全ノ花ヲ開クアリ或ハ雌雄ヲ異ニシテ開クアリ雌花黃色、花瓣長楔形、萼長楕圓狀、柱頭二裂左右ニ開張シテ長ク瓣外ニ出ヅ、實礎ニ毛アリ、二室ニシテ各〻一子ヲ藏ム

一ミツデカヘデ雌雄ノ花、株ヲ異ニシテ開ク、雄花黃色、五萼五瓣アリ萼綠色、瓣黃色、箆形、雄蘂四五莖アリ花絲ノ基脚膨脹ス

一コハウチハカヘデ雄花淡黃色、花瓣縮ム、雄蘂長ク瓣外ニ出ヅ、盤ニ長毛アリ、葯粗糙

一ハウチハカヘデ一株中雌雄兩全ノ花ヲ開クアリ或ハ雌雄花ヲ異ニシテ開クアリ、雄花、雄蘂ヲ長ク瓣外ニ抽ク雌蘂ナクシテ長毛アリ、雌花ニ雄蘂ナク雌蘂ノミアリ柱長ク頭短クシテ螺旋狀ヲナス、實礎ニ毛アリ二室ニシテ各〻一子ヲ藏ム、萼縮ム

一カヂカヘデ雌雄ノ花株ヲ異ニシテ開ク、雄花長梗、萼アリ瓣ナシ、雌花短梗、萼紅色楕圓形、瓣紅色箆狀

ニシテ狹、雌蘂ニ柱ナシ頭深ク二裂、左右ニ開張シテ瓣外ニ抽ク、實礎二室、各ニ一子ヲ藏ム

一イタヤカヘデ雌花ニ淡綠色ノ花瓣アリ、箆形ニシテ平滑、萼アリ楕圓形、雌蘂ニ柱アリ短、二裂シテ卷捲、瓣外ニ長ク出デズ、實礎二室、毎室一子ヲ藏ム

一ウリハダカヘデ雄花淡黃綠色、其梗ニ毛アリ、萼倒卵形、瓣卵形、其本微ニ殺ク、花序ノ軸ニ毛アリ

一チドリノキ淡綠色ノ花ヲ開ク、三瓣三萼アリ共ニ邊緣ニ毛アリ

一シラハシノキ一株中雌雄ノ兩花アリ雌花淡綠色、雌蘂ニ短柱アリ突然膨起ス、其頭二裂シテ左右ニ卷捲シ長ク瓣外ニ出デズ、實礎二室、毎室二子ヲ收ム

一モミヂ紅花ヲ開ク、其雌雄兩全花ニ在テハ萼、暗紅色微毛アリ、瓣紅色、葯紅色ナリ、雌蘂ニ柱アリ長ク瓣外ニ抽テ其頭二裂シテ左右ニ彎曲ス、實礎二室ヲ割シ毎室二子ヲ藏ム

○揮發油の植物体に於ける化學的研究　（前號の續き）

小林龜松

○第一の説明單一なる体よりなれるものは甚だ少數にして僅に Gaultheria procumbens 及び Betula lenta より得たる冬綠油及び揮發芥子油、杏仁油、苦扁桃油等なり

而して冬綠油は「アルキールエン」にして「メチール、サリチール」酸「エステル」なり其記號は $C_6H_4-(OH)-COO-CH_3$

杏仁油、苦扁桃油等は「ベンツ、アルデヒード」にして容易に安息香酸に酸化す $C_6H_5-COH+O=C_6H_5-COOH$

是等は何れも芳香体に屬すと雖ども又脂肪体に屬するものあり例は揮發芥子油の如きは Allwyl isothiocyanat $(CH_2{=}CH{-}CH_2{-}CNS)$ にして人工集造法には「アルリール、アミーン」に硫化炭素を加へ製するにあり然るときは先つ硫藏化物を生ず今之を蒸餾するときは分子の位置を變して芥子油を生成するを得る

$$CS_2 + NH_2C_3H_5 = CS : N.C_3H_5 + H_2S$$

○第二の説明 「テルペン」類は松柏科中に於ては單に一種の「テルペン」よりなると雖ども「レモン」「チームス」「アニス」油等の如きは數種の混合物よりなる其一般の記號は

$$(C_5H_8)n$$

にして頗る「チモール」に類する所あり而して其全質異性体も比較的少數にして殊に必要なるは左の三種に過ぎず

甲 「ピ子ーン」類 之は獨乙及ひ米國製の「テルペンチン」油、杜松子油、有加利油等に存在す

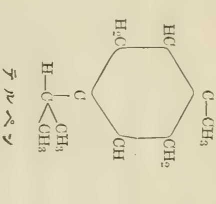
乙 「リモネーン」 是れ枸櫞及び橙皮油「ベルガモット」油中に存在す

丙 「シルベストレン」 主として「スエーデン」及ひ露矢亞の「テルペンチン」油の中に存在す

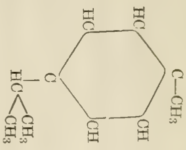
「フェルランドレン」は有加利油「エレミー」油及ひ茴香油中に存在す殊に單寧酸と化合して結晶性の複合体を化成するの性あるを以て他の「テルペン」族と區別す

是等の「テルペン」族は屢々光學上右旋及ひ左旋性を有す今此二体を混するときは能く無感旋物を生し得る」

「テルペン」族の集成は未だ確定せず從て其集造法も完全ならずと雖ども恐くは「ヂ、ヒドロ、メチール、イソプロピール、バンツオル」即ち「ヂ、ヒドロ、チモール」なるべし即ち



テルペン



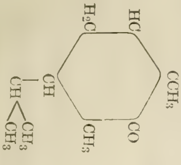
チモール

「チモール」は Wilman 氏人工上に「パラブローム、クモール」及び沃度化「メチール」より生成したりと雖ども更に之に水素を附加して「テルペン」に變することは未だ發見せず

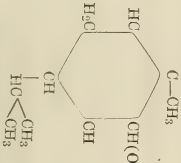
凡て「テルペン」は種々異樣の性質を以て現はると雖とも何れも「ブローム」鹽酸、及び硝酸に依て特異なる化合体を化成するを以て特徴とす

○第三の説明　揮發油の芳香成分は世人の夙に想像せしが如き多數の物体よりならざるが如し今茲に「カンフォール」一族として論せんとす

「カンフォール」の構造は未だ一疑問にして之に親密なる「チモール」より製し能はす然れども容易に青酸、「フェニールヒドラチン」酸性亞硫酸那篤倫と化合し又酸化して「カンフォール」酸となり鹽化亞鉛、或は他の吸水藥を以て處理すれば主として「パラチモール」を生ず且つ諸多の關係より見れば「カンフォール」は「ケトン」にして「ボルチチール」は之が第二の「アルコホル」たるが如し何となれば那篤僧母を以て「カンフォール」を還元すれば「ボルチチール」となり「ボルチチール」を酸化すれば「カンフォール」となるが故なり其符號は

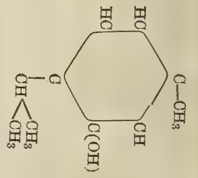


カンフォール（樟腦）

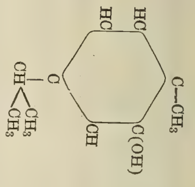


ボルチチール（龍腦）

知母爾は「アヨワン」油「やまじそ」の中に存在す貴重なる藥局方の一にして恐らくは第三の「アルコホル」ならん「カルワクロール」は容易く「カンフオール」より製するを得べく「スペーン」產忽布油の主成分にして知母爾と全質異性体なり



チモール

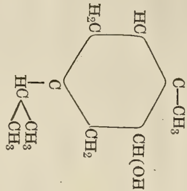


カルワクロール

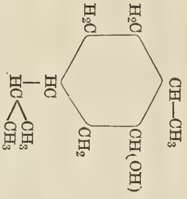
「チネチール」は多數の揮發油中に存在して種々の名稱を附せらる此の物質は其の經驗記號は前と同一なれども無水物としては「チイカリプテチール」「カヤプテチール」と仝物なるが如し此の物質は Lavendulaspicata の油中に存在す

又「メントール」は現今多量に使用する局方藥にして第二「アルコホル」なり酸化すれぱ「ケトン」となり之に「ナトロン」を加ふれぱ再び元の「メントール」に變す

其記號は



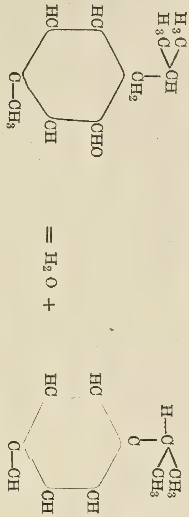
ホルチチール



メントール

次に以上述へし者より尙多數に存在する芳香物に付二三言を費さんとす

一、「チトラール」之は「レモン」「イカリプス」油中に存在す「ゲラチニチール」を酸化して生すべし故に此者は「アルコホル」に對する「アルデヒード」の如し熱すれぱ容易く「チモール」に變す



チトラール　チモール

二、「ゲラニチール」「チトラール」に對しては倚「アルコホル」の如し善良なる揮發油中には多量に存在す

三、「リナロール」

四、「ヨリアンドロール」

共に第二種と全一物なるが如し

五、「チトロネール、アルデヒード」ハ「チトロネルラ」油中に存し前の物体と同質異性体なるも全一物にあらざるが如し何となれば還元すれば「チトロネルリール、アルコホル」を生するが故なり

六、醋酸「ゲラニチール」は枸櫞「ベルガモット」「ラーヘンデル」油中に存在す

以上論する所の化合体ハ所謂芳香油の主成分と云ふべきものにして「アチトール」($C_{10}H_{12}O$)「チイゲノール」($C_{10}H_{12}O_2$)(丁子、ピペント、サッサフラス油)「サブロール」($C_{10}H_{10}O_2$)「サッサフラス油)の三種は何れも「メト、チキシー、アルリール、ベンツオル」の誘導にして其酸素の關係は頗る特異なるが如し

今此論を了るに望み全体より觀察すれば諸多の揮發油の主成分は「テルペン」にして其「テルペン」等は彼の Mesnar'd 氏の實驗によれば鞣酸質より生し鞣酸は「クロ、フヒール」より生成するを見又 Pringsheim 氏の説によれば植物体の綠色部に發見せし「ピポクロリン」なるものは其性質甚だ蟻酸「アルデヒード」に近似したる位置にありと云ひ又 J. Reinke 氏は氣中より原形質内に吸收せられたる炭酸は細胞中の水分と化合して H_2CO_3 となり次に日光の作用にて酸素の一分を失ひ蟻酸「アルデヒード」(CH_2O)を生するならんと云ひ又 Th Bohorung 氏は葉綠含有の生活細胞に「アルカリ」性の硝酸銀液を加へて黒變するを見たりと云[illegible]

へば必ず葉綠素内には CH_2O 群に存在するや疑なしとす而して此「アルデヒード」なる化合体は能く分子の疊積する作用を有し且つ「ケトン」化合体とは親密の關係を有するものなれば彼の「ケトン」化合体の一なる「アセトン」の三分子疊積して三分子の水を失ひ「メシチーレン」なる芳香炭化水素を生するが如く

$$3(CH_3)_2CO=C_6H_4(CH_3)_3+3H_2O$$

必ず葉綠内の化合体も如斯作用をなして「メシチーレン」に關係の類似せる「テルペン」を生し而して「テルペン」は「チモール」の「ヂ、ヒドロ」化合体なりとすれば其他の芳香成分たるや「チモール」に親密の關係を有するもの多き事は前掲の如くなれば其基原を尋索するに稍々便を得たりと云ふべし然れども相互の關係に至ては今日の智識を以て充分に連絡する事能はず殊に其構造の如きは不明に屬するもの頗る多く能く彼我の關係を辨明し如何なる植物の如何なる主成分は如何なる景況に據て變化するやは吾人等の正に今后勉むべき一材料なりとす

（完）

○日本ニ產スル燈心草科ノ種類

松村任三

Juncus alatus *Fr. et Sav.*（ハナビセキシヤウ）

Juncus balticus W. var. japonicus *F. Buch.*（コヒゲ）

Juncus beringensis *F. Buch*（ミヤマ井）

Juncus bufonius *L.*（ヒメカウガイゼキシヤウ）

Juncus diastrophanthus *F. Buch.*（ミクリゼキシヤウ）

Juncus effusus *L.* var. decipiens *F. Buch.* (井)

Juncus Gerardi *Loisel.* (ミヅ井)

Juncus Krameri *Fr. et Sav.* (タチカウガイゼキシヤウ)

Juncus Maximowiczii *F. Buch.* (イト井)

Juncus nipponensis *F. Buch.* (アチカウガイ)

Juncus pauciflorus *R. Br.* (イヌ井)

Juncus papillosus *Fr. et Sav.* (ホソバノカウガイセキシヤウ)

Juncus prismatocarpus *R.Br.* (コミクリゼキシヤウ)

var. Leschenaultii *F. Buch.* (カウガイゼキシヤウ)

forma pluritubulosus *F. Buch.* (ヒラカウガイゼキシヤウ)

forma unitubulosus *F. Buch.* (ハヒカウガイセキシヤウ)

Juncus xiphioides *E. Mey.* (クロミクリセキシヤウ)

Luzula campestris *DC.* var. capitata *Miq.* (スヾメノヒエ)

var. multiflora *celan.* (ミヤマスヾメノヒエ)

Luzula japonica *F. Buch.* (ミヤマクロボシサウ)

Luzula pilosa *L.* (ミヤマヌカボシサウ) 伊藤翁所命

Luzula plumosa *E. Mey.* (ヌカボシサウ)

Luzula rufescns *Fisch.*（クロボシサウ）

○九州採集土產　（前々號ノ續キ）

白井光太郎

たぬきあやめノ新產地

八月十六日午前六時同行三名（農學士關豐太郎氏池野氏及予）人力車ヲ連ネテ肥後國葦北郡水股驛ヲ發シ十八里ヲ走リテ薩州薩摩郡向田驛ニ到リ宿リヌ此日薩州出水郡阿久根ノ驛外ニ於テ關池野ノ兩氏一種ノ異草ヲ採收セリ其名ヲたぬきあやめ Philydrum lanuginosum, Banks.ト呼ビ頗ル非凡ノ種類ナリ池野氏ノ說ニ此種ノ沖繩地方ニ產スルハ已知ノ事實ナレ𪜈我内地ニ產スルノ事ニ至リテハ未ダ吾人ノ聞知セザル所ナリト以テ此種ノ稀品ナルヲ知ルベシ此種ハ巡遊中他處ニテハ絕テ見ズ

青もじの木ノ自生地

八月十七日黎明馬車ニテ向田村ヲ發シ十三里ヲ行キ晩ニ薩州鹿兒島ニ達ス此日日置郡市來驛ヨリ同郡麥生田村ニ至ルノ間ニ於テ路傍及山足ノ林叢中ニ一異木ヲ見ル樹容略白かしニ似テ葉形稍異レリ之ヲ採ラント欲スルモ車上ニテ意ノ如クナラズ既ニシテ麥生田村ニ着キ小憩ス車上ヨリ眺ムルニ耕地ヲ隔テヽ前面ノ雜木林中ニ前記ノ樹種ヲ認ム下リ立チテ之ヲ採ルニ青もじの木(Lindera citriodora, Bl)ナリ此木ハ東京大學植物園ニモ雄本一株アリ每年三月頃花アレ𪜈雄本ナルガ故ニ實ヲ結ブコトナシ故ニ予輩未ダ子實ヲ知ラズ是ヲ遺憾トセリ然ルニ今回ノ旅行ニテ其產地及子實ノ狀況ヲ詳悉スルヲ得タルハ幸ナリ伊藤錦窠翁ノ耋筵誌ヲ按スルニあをもじ一名せうがのき一名れはむらこせう肥前大村ニ產ス又筑前等ニモアリ樟科ニ屬シ樹皮ヲ削レバ香氣

アリテくろもじノ類ニ似タリ幹枝暗綠ずいゐのきノ色ニ似タリ二月新葉ニ先ツテ花ヲ着ク其梗勾リテ下垂シ枝上ニ攢簇ス他ノ樟科ニ比スレバ稍見ル可キガ如シ白苞四片アリ六瓣モ亦白ク九雄蕋黄葯一雌蕋ニシテ蜜槽六アリ又雌本アリ圓實ヲ結ブ味辛シ」トアリ以上ノ記載ニヨリ再考スルニ是ヨリ先八月六日肥前長崎ヨリ茂木ニ行キ採收セル時路傍ノ雜木間ニ一種ノ異木ヲ見タリ今ニシテ之レヲ思ヘバ此種ニ外ナラザリシガ如シ春もじの木ノ子實ハ織形ヲナシ下垂ス丸圓ニシテ胡椒ノ大サアリ果皮ニ揮發油ヲ多ク含ミ香氣頗ル芳烈ナリ citriodora ノ名ハ正シク子實ノ香氣ニ取リタルハ實物ヲ見テ能ク知ラルヽナリ

いつさきノ辨

八月二十一日此日櫻島ニ渡ラントテ朝ヨリ仕度スサレド晝前ハ風立波荒レテ船出テズ午後ニ至リ風止ミタレバ二時頃ヨリ纜ヲ解キ四時頃船櫻島ノ湯野村ニ着ク此處ヨリ上陸シ二里餘ヲ行キ有村ノ民舍ニ投宿ス此邊耕地ノ傍ニあをぎりヲ根刈作リニナシ植タル處アリ導者ニ就テ其樹名ヲ問フニいつさきト答フ其後薩摩大隅ノ各地ニテあをぎりヲ見ル毎ニ其名ヲ問フニ皆いつさきナリト答フ因テあをぎりトいつさきトハ同一ノ植物ニシテ別ニ種類アルニ非ザルヲ知リ多年ノ疑團茲ニ始メテ釋然タルヲ得タリ左ニいつさきニ關スル古人ノ所説ヲ列擧シ參考ニ供ス

いつさきトあをぎりヲ二種ノ樹木トスルノ説ハ始メテ大和本草ニ出ヅ其説ニ曰ク

> イツサキ葉モ木モ梧桐ニ似テ異ナリ葉ノウラニ光アリ梧桐ノ葉ヨリウスシ初生テ二三年苗ヲ刈レバ叢生ス其後長シタルヲ刈テ河水ニ浸シ皮ヲ剝ケバ苧ノ如ク白シ之ヲ用テ繩トシ馬具トシ筵ヲ織ル絲トス麻苧ヲ用ルガ如ク勁シ毎年刈ルコト楮ノ如シ其實ハ炒リテ食シ果トス又黒大豆ト同シク豆油（シヤウユ）ニテ煮食ス西土ノ人或ハ對馬

桐ト云フ葉ノ末岐二アリ又苗ヲ不切シテ一株其マヽ長セシムレバ喬木トナル

蘭山翁ノ花彙木部梧桐ノ條ニ曰

聳直節ナク皮青シ梢ニ至リ數枝ヲ分ツ三月葉ヲ發ス桐葉ニ類シテ兩岐ノ背ニ白毛アリ一種四岐ノ者アリ五裂（イツサキ）ト呼ブ夏日枝梢ニ長穗ヲ出シ枝ヲ分テ小花ヲ開ク嫩黄ニシテ五出長心アリ云云

喜多村子温氏ノ大和本草辯正ニ曰ク

「イツサキ」土佐ニ多シ名物ナリ葉モ木モ梧桐ニ同ジフシテ但異ル處ハ葉背ノ褐色ナルナリ皮ヲ繩トスベシ梧桐モ亦同シテ皮ヲ苧ノ如クニ用ユ葉末岐二ツアリト此ニハ云ナガラ諸品圖ノ處ニハ五尖ナル葉ヲ圖シ且五處サケタレバ五サケト云ニヤト云ヘリ此説スベテ誤ナリ葉ノ岐モ梧桐ト同シクシテ初生ハ三尖長スレバ五尖トナルナリ又五サケト云釋名アシヽ元來土佐ノ一切浦ニ多ク生スル木ユヘ即其地名ヲ以テ呼來ルサイヲ轉メ°キト云ナリ此木根ノ朽タル處ニ香氣結ブ世ニ一切香ト稱ス本邦ニテ沈香ヲ作ルハ此ヲ油ニテ煮テ作ルトイフ此法唐人ヨリ傳フト云梧桐ノ一種ナリ江戸ニモタマ〳〵梧桐ニシテ葉背褐色ナルアリ是ナリ

以上ノ諸説ニ據レバ梧桐ノ外ニ一種いつさきト稱スル樹穉アルガ如ク見ユ然レ𪜈今日吾人ノ探究スル所ニテハ梧桐ノ外別ニいつさきト稱スル異種アリトモ覺ヘズ是レハ前述ノ如ク貝原翁ガ梧桐ノ方言ヲ聞キ訛リテ別種トナシタルヨリ事ノ起リタルモノナルニ相違ナシ悉ク書ヲ信スレバ書ナキニ若カズトハ此ノ邊ノ謂ナランカモ

九州採集土產

わふひでけノ產地

ハ旋花科ノ一小草ナリ羅丁名ヲ（Dichondra repens）ト云フ東京邊ニテハ好事ノ植木屋抔ニ稀々培養スルニ

過キザレモ長崎居留地薩州鹿兒島邊同國山川港邊ニテハ癈園荒地ヨリ人家ノ垣墻ニ至ルマテ遍ク蔓延シ東京邊ニテちどめぐさヲ見ルガ如ク普通ニアリ花時ヲ過キタレバ花ヲ見ザリシト雖モ寸餘ノ花梗ノ乾縮セルモノ葉間ニ固着スルヲ見タリ此種東京近傍ニテハ房州ニ産スト云フ

（未完）

○日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

四十四　ユーカリプトス

羅甸名　Eucalyptus globulus, Labill.

千屈菜科

濠洲ニ自生スル一大喬木ニシテ高サ二百五十尺乃至三百尺若樹ハ其葉廣濶卵圓形ニシテ葉底心臟形ヲ爲シ先頂尖リ葉柄矮短ニシテ對生ス老樹ハ其葉狹細鈹鍼形ニシテ稍々彎曲シ殆ント鎌狀ヲ爲スモノアリ長サ八九寸乃至尺餘表裏兩面綠白色ヲ呈シ革質其柄長サ八九分ニシテ對生ス花ハ葉腋ニ生ジ或ハ二個或ハ三個簇生ス又往々矮短ナル花梗ヲ抽キ其頂端一花ヲ着クモノアリ萼ハ管狀ニシテ先頂擴張倒圓錐形ヲ爲シ綠色ヲ呈シ表面凸凹アリテ數多ノ油腺ヲ散布ス花瓣ハ缺如ス雄蘂許多花牀ヨリ生シ數行ニ排置シ花絲柔軟白色ニシテ葯ハ長楕圓形ヲ爲シ花時縱線ニ因テ分綻シ花粉ヲ吐出ス而シテ其内部ニ列スルモノハ稍々矮短ナリ實礎ハ筒狀ニシテ厚キ萼中ニ在ツテ之ト附着シ四房乃至五房ヲ有シ各房數多ノ卵子ヲ有ス花柱矮短ニシテ柱頭平圓ナリ果實ハ硬堅木質ニシテ褐色ヲ呈シ其外部ハ花盤及ヒ萼ヨリ成リ内部ノ子殼ハ半球形ヲ爲シ外面粗糙ニシテ四個乃至五個ノ縱線アリ種子ハ卵圓形若クハ楕圓形ヲ爲シ胚子ハ大ナル子葉ヲ有シ蛋白質ヲ有セズ

本植物ハ多數ナル有加里屬植物ノ一ニシテ一千七百九十二年ニ多私麻尼亞島ニ於テ佛國ノ植物學士 Labillardiere. 氏發見シ之ヲ歐羅巴ニ移植スト又 H. R. Göppert. 氏ノ說ニ據レバ本植物ハ高サ百三十「メートル」ニ達スル一大喬木ニシテ濠洲東部及ビ多私麻尼亞島ニ產ス而シテ本植物ハ健康ニ有害ナル泥沼ノ地ニ栽植スルトキハ其成長ノ迅速ナル爲メ水分ヲ吸收シ土地ヲ乾燥ナラシムルト他ノ原因ニ因テ其地ノ瘴氣ヲ撲滅シ氣候ヲ佳良ナラシムルト此說ノ世ニ現ハレシ以來伊國ノ或ル地方佛國ノ南部西斑牙其他埃及、亞耳塞里亞及ヒ南米諸國ニ栽植スルニ至レリ R. Broun. 氏ノ說ニ據レバ濠洲中山林ノ樹木四分ノ三ハ有加里屬種類ノ植物ヨリ成ルト

多私麻尼亞島ニテハ冬月（第十一月第十二月）開花スト

本植物ハ近來本邦ヘ移植ス就中靜岡縣下駿河國久能山ノ麓ニ栽植セシモノハ其發育旺盛ニシテ栽植ヨリ八九年ヲ經テ高サ數十尺其幹ノ直徑六七寸ニ至リ開花結實スト

藥品

第一　有加里葉　Folia Eucalypti.　有加里葉ハ本植物ノ葉ニシテ舊日本藥局方ニハ有加利布丟斯ト稱シ藥用ニ供スト雖モ改正日本藥局方ニハ之ヲ刪除ス

性狀　有加里葉ハ不同形葉ノ一ニシテ二樣ノ形狀ヲ有ス即チ稚樹ノ葉ハ其質革樣ニシテ卵圓形ヲ有シ葉柄ヲ有セズ老樹ノ葉ハ其質鞣革樣ニシテ鈹鍼形若クハ鎌狀ヲ爲シ頂端漸ク狹細トナリ矮短ナル葉柄ヲ有シ長サ二十乃至三十「センチメートル」廣サ三乃至七「センチメートル」ニ至リ葉体厚ク破碎シ易ク油線ヲ有シ帶灰綠色ヲ呈シ褐色ノ枹疣ヲ有シ邊緣厚化シ微ニ卷曲ス日光ニ透シ視レハ透映シテ斑點ヲ現ハス葉柄ハ長サ二乃至三「センチメートル」ニシテ間マ捩轉ス主脉ヨリ鋭角ヲナシテ枝脉ヲ分出シ其邊緣ニ近接シ互ニ連絡シ

テ邊縁ト並行ニ通走ス

有加里葉ハ多角性ノ上皮ヲ有シ頗ル强厚ナル表皮アリテ其上ヲ被覆ス柵狀細胞ハ葉ノ表裏兩面ニ存シ二列若クハ四列ヨリ成リ中ニ溶解性油室ヲ包有ス坊間ニ販賣セル葉ハ只老樹ヨリ採集セル葉ノミヨリ成ルナリ

本品ハ强キ芳香ヲ有シ味ハ收歛性ニシテ微ニ苦ク初メ温和ト雖モ後ヲ冷涼ナリ藥用ニハ老樹ノ葉ヲ良トス新鮮ナルモノヲ用フ可シ

成分　主成分ハ揮發油トス一千八百七十六年 Hartger 氏ハ有加里葉中ニ單寧、結晶性脂肪酸及ヒ三種ノ樹脂ノ存在スルヲ發見ス其樹脂ノ一ハ酸性ノ反應ヲ呈シ硫酸ニ因テ洋紅色ヲ呈シ依的兒ヲ注クトキハ紺青色ニ變ス又脂肪酸ノ那篤倔謨鹽類ハ依的兒ニ溶解スト又同年ニ Wayne 氏モ亦結晶性樹脂ヲ發見ス此樹脂ハ酸性ニシテ鹽化鐵ニ因テ赤褐色ノ反應ヲ呈スト生藥學ニ云フ有加利布丟斯葉ハ平均一〔ペルセント〕ノ揮發油即チ有加利布丟斯油ヲ含ム此揮發油ノ有効成分ハ Eucalyptol（チイカリプトール） ($C_{12}H_{20}O$) ナル酸素ヲ有スル化合品トス其他 Eucalpten（オイカリプテン） ($C_{12}H_{18}$) 及ビ Eucalyptolen（オイカリプトーレン） ナル二種ノ炭化水素ヲ含有スト

第八十三號正誤　16ノ第八行三十二字テノ字ノ下得ルノ二字ヲ脱ス

○江ノ島箱根地方植物採集紀行（前號ノ續キ）

安田篤
市村塘

二十六日早朝腊葉紙ヲ乾カシ終リ、天氣快晴ニ乘シ午前十時輕裝シテ鵠沼（クゲヌマ）ニ採集ヲ試ム口碑ノ傳フル所ニ據レバ昔鵠群ヲ爲シテ年々此沼ニ下ル是レ此名ノ生ゼシ所以ナリト渡舟ヲ傭フテ乘ル、舟中ヨリ遙望スレバ美雪三千丈笑フテ吾ヲ迎フルガ如キモノハ例ノ富岳ナリ之ヲ臨ミテ Kämpfer ノ "Mons excellens et singularis"

ヲ想起スルハ聯感上亦止ムヲ得ザルヿナリト一人ハ言ヒ明年夏期ニハ是非共植物採集ニ登リタシト今一人ハ叫ブ、舟ヲ出デヽ沼邊ヲ逍遙スレバ恰モ善シ漁夫相聚リテ引網ヲ爲スニ會ス漁獵少シト雖モ海藻無數アリ中ニ素手ニテハ決シテ得ベカラザル者亦少カラズ其藻屑中ヨリ各爭テ珍奇ナルモノヲ撰取スル狀ハ恰モ乞兒ノ芥器中ヲ探ルニ彷彿タレ𪜈亦海藻採集ノ最簡便法ト謂ツベシ此處ニテ獲タル主ナル海藻ヲ掲グレバ左ノ如シ

「ひらめくさ」 Phacelocarsus.	「ひじき」 (Cystophyllum fusiforme, Harv.)
Chondria crassicaulis, Harv.	Halymenia formosa, Harv.
Campylaephora Hypneoides, Ag.	Plocamium affine.
Lanardina marginata.	Scytosiphon sp.
Gracilaria sp.	Desmia sp.
Cystophyllum sp.	Dictyota dichotoma. Lama?
Nytophyllum sp.	Plocamium sp.

漸ク西方ニ進メバ沼ノ支流ハ狹小トナリ淡水ニ變ズ是ヲ以テ Fresh water algae 等ノ叢生スルヲ見ル此處ニテ

「あをみどろ」 (Spyrogyra sp.)
「しやじくも」 (Chara sp.)
「あかうきくさ」 (Azolla pinnata, var. japonica.)

ヲ採集ス已ニシテ歸宿スレバ十二時十五分ナリキ尋デ藻類ノ解剖ヲナシ書ヲ繙シテ Key ニ因リ其學名ヲ捜スニ汲々タル者モアレバ腊葉ニ餘念ナキモアリ終テ松村博士ハ祖師堂邊ニ原岡ノ二氏ハ腰起ニ余等二人ハ砂丘ヲ越エテ江ノ島ニ到ル時將ニ干潮ニ會シ岩窟入ルノ目的ヲ達スルヿヲ得タリ途次棧橋ノ設アリ一側ノ橋脚ハ岩壁ヲ以テ之ニ代ヘ他側ニ細キ木柱ヲ立テ僅ニ橋板ヲ支フ下ニハ海水ノ蒼々ト〆逆浪岩頭ヲ打ツアリ飛沫高ク橋上ニ達ス其危險推ス可カラズ市村ハ「彼方ヲ見給ヘ、綠藻紅藻ノ白浪ニ搖ラルヽヲ採集シタク思ハヌニヤ」ト問ヒタルニ安田ハ所詮採集シ難シト思ヒ戲レテ「彼等ハ皆余ノ今日採集セシモノニテ珍ラシカラズ」ト對ヘヌ市村ハ遠クニ居テ果シテ然ルヤ否ヤヲ明カニ判ジ得ザルヿハ知ルモノカラ「君ハ ÆSOP 物語ニアル狐ニモ似タリケリ渠ハ熟葡萄ノ高處ニアリ所詮力ノ及バザルヿヲ知リ「This grape is sour」ト呼ビタルニ非ラズヤ」ト笑ヒツヽ架橋ヲ渡リ終レバ晝猶暗ク余等ハ全ク岩窟ノ中ニアリ乃チ燈ヲ携ヘ案內者ヲ先導トシテ深處ニ入ル窟ハ初メ幅高共ニ廣ク起立シテ進ムヲ得レ𪜈內部ニ至ルニ從ヒ漸ク狹小トナリ終ニ屈身セザレバ進ムヿ能ハザルニ至ル洞窟二ツニ分レ一方ニハ辨財天ヲ安置シ他方ニハ天照皇大神ヲ祭ル各長サ百二十二間ト案內者ハ曰ヘ𪜈信シ難シ窟壁平滑一微植物タモ見ルヿナシ此處ヲ辭シ四時半頃歸宿スレバ既ニ藤井理學士ノ來訪セラルヽアリ是ニ於テ總員六名、流石、植物學者ノ集會ナレバ且ツ檢究シ且ツ談ズ、談ズル處悉ク植物學上趣味アルヿナラザルナシ論話偶々正月ノ飾物ニ及プ藤井學士徐ロニ口ヲ開キテ曰ク正月ノ門松或ハ生花ニ松竹梅ヲ用ユルハ勿論各緣起ニ基キタル者ナルベキモ偶然ニセヨ此三植物ハ顯花植物ヲ代表シ Angiospermia, Gymnospermia, Monocotyledones ノ三大部ニ屬スベキモノ一モ欠如セザルハ亦一奇ト謂フベシ尙鏡餠上ノ昆布、「ほんだわら」及ビ二三日經過スレバ餠面ニ生ズル黴（カビ）ノ如キハ Thallophyta ヲ代表シ鏡餠ノ間

ニ敷ク裏白ハ Archegoniatae ヲ代表ス實ニ植物世界ハ正月ノ飾物ニテ悉皆顯ハサルヽト謂フベシト一坐洪然笑聲湧キ和氣、樓上ニ充滿ス

（未完）

* * *

○日本羊齒科屬徵（承前）

牧野富太郎

（三）こけしのぶ族 Hymenophylleæ.

囊堆ハ脈頂ヨリ生ジテ或ハ頂生シ或ハ緣生ス囊床ハ延長シテ多少上ニ超出シ且ツ往々長クシテ絲線狀ヲナスモノアリ其ノ下方ニハ特ニ子囊之レカ周圍ニ逼附シテ覆瓦狀ニ重疊シ其子囊ニハ柄ナク扁圓形ニシテ略ミ楯狀アリ全周セル横環アリテ之レヲ擁シ以テ縱ニ開裂ス苞膜下生シテ其形狀一樣ナラズ而シテ其質一般ニ葉ト相同ジ

(7)こけしのぶ屬 Hymenophyllum L.

囊堆緣生シテ脈頂ニ在リ多少葉体中ニ沒入シ或ハ時ニ超出ス苞膜下生シテ多少深裂セル兩唇形ヲナシ其邊緣齒痕アルアリ總狀ナルアリ又ハ全ク全邊ナルアリ而メ其質葉ト相同ジ囊床ハ延長シテ圓柱形ヲナシ或ハ超出シ或ハ潛入ス子囊ハ多クハ圓形ニメ壓扁シ中心ヲ以テ囊床ニ合着シ廣環横亘シ頂邊不齊ニ開裂ス

(8)はらでけ屬 Trichomanes Sm.

囊堆緣生シ常ニ脈頂ニ在テ多少葉体中ニ沒入ス苞膜單片ニシテ筒狀ヲナシ筒口ハ平截セルアリ翼アルアリ或ハ微ニ兩唇ニ分ルヽアリテ其質密ニ葉ト相均シ囊床ハ延長シテ絲線狀トナリ往々遠ク苞口ノ前ニ超出ス而メ

特ニ子囊ヲ其下部ニ定着ス子囊ハ壓扁シテ柄ナク廣環全周シテ略〻横亘シ縱方ニ開裂ス

（四）しのぶ族 Davalleæ.

囊堆略〻圓形ヲナシテ緣生シ或ハ略〻緣生ス腎臟形或ハ略〻圓形ノ鱗狀苞アリテ之ヲ覆ヒ苞頂開放ス其苞底ハ廣ク緊着シ側緣ハ開離セリ

(9) しのぶ屬 Davallia Sm.

囊堆ハ緣內生或ハ略〻緣生ニシテ球狀ヲナスアリ或ハ縱方若クハ横方ニ長キモノアリ苞膜ハ脈頂ニ在テ形狀ニ種々アリ而シテ其側緣ハ離合一定セズト雖モ頂部ハ常ニ分離セリ子囊ニ柄アリ

(10) うすひめはらび屬 Cystopteris Bernh.

囊堆ハ球形ヲナシテ脈背ニ在リ苞膜膜質ニシテ略〻圓形ヲナシ其廣キ基部ハ囊堆下ニ定着シ初期ニ在テハ之ヲ掩覆シ宛モ被帽ノ如シ

（五）ほんぐうしだ族 Lindsayeæ.

囊堆ハ葉緣或ハ葉緣側ニ沿テ一線ヲ畫シ苞膜之ヲ掩フ其內側ノ片ハ膜質ナリ其外側ノモノハ葉緣之ヲ成ス

(11) ほんぐうしだ屬 Lindsaya Dryand.

囊堆ハ緣生シ或ハ略〻緣生ス而シテ二條或ハ數條脈ノ合シタル項端ニ在リ苞膜ハ相重テ開口外向シ其內片ハ膜質ヲナシ其外片ハ多少變体シタル葉緣ヲ以テ成ル

（六）わらび族 Pterideæ.

囊堆ハ緣生シ長楕圓形或ハ線形ヲナス苞膜ノ形ハ囊堆ニ等シク而シテ葉部ノ多少變形シタル反片ヲ以テ之ヲ

成シ開口ハ內向ス

(12) はこねさう屬 Adiantum L.

囊堆ハ緣生シ其形狀各般ニシテ球狀ヨリ線狀ニ至ルノ異アリ其數一般ニ多クシテ個々分立スルヲ常トスレ圧亦時ニ合体シテ長ク相連ルモノアリ苞膜ノ形ハ囊堆ト同ジク而シテ葉緣ノ反片ヲ以テ之ヲ成シ其內面ニ子囊ヲ附着ス

(13) ひめうらじろ屬 Cheilanthes Swartz.

囊堆ハ脈上ニ頂生シ或ハ稍〻然ルモノアリ始メハ其体小ニシテ略〻圓形ヲナシ後ニハ多少合体ス苞膜ハ葉ノ變形セル反片ヲ以テ成リ其形略〻圓クシテ全ク分立スルアリ或ハ多少合体スルモ混然全ク連結セザルモノアリ

(14) たちしのぶ屬 Onychium Kaulf.

囊堆ハ線狀ノ長床上ニ橫ハリ而シテ此床ハ叉數脈ノ頂端ノ連合シテ成リシモノナリ苞膜ハ葉ノ裂片ノ邊緣ト平行シテ線形ヲナシ且ツ兩片對向シテ囊堆ノ上ニ壓過シ其緣端ノ全ク中脈ニ達スルモノアリ

(15) わらび屬 Pteris L.

囊堆緣生シテ長キ線狀ヲ成シ苞膜ノ底心ニ該レル長絲狀ノ床上ニ位ス苞膜ハ囊堆ト同形ヲナシ常ニ膜質ニシテ始メ全ク之ヲ掩盡シ後遂ニ多少開放スルニ至ルナリ

(16) みづわらび屬 Ceratopteris Brong.

囊堆ハ葉中ニ縱走セル二三ノ脈上ニ在リテ殆ンド葉緣及ビ中脈ト平行ス子囊ハ床上ニ散生シ柄ナクシテ略〻

球形ヲ成シ其彈環ニハ完全ナルアリ又ハ多少其一部ヲ存セルアリ或ハ時ニ全ク廢滅ニ歸セルモノアリ苞膜ハ葉緣飜回シテ之ヲ成シ其兩側ノ邊緣相近ヅキ中脈ニ向フテ其上ニ會セリ

(17) きじのを屬 Lomaria Willd.

囊堆ハ長キ線形ヲナシテ中脈ト平行シ中脈及ビ邊緣間ノ全部ヲ占領シテ餘地ヲ殘サヾルモノ多シ苞膜ハ膜質ニシテ葉ノ反緣ヲ以テ之ヲ成ス

(七) ひりゅうしだ屬 Blechneæ.

囊堆ハ線形或ハ長楕圓形ニシテ背生シ中脈幷ニ葉緣ニ平行スト雖𪜈然レ𪜈葉緣ニハ接在スルコトナシ苞膜ハ其形囊堆ト同一ニシテ上生シ中脈ニ向ヒテ開口ス

(18) ひりゅうしだ族 Blechnum L.

囊堆ハ長キ線形ヲナシ或ハ略〻然ルモノアリ常ニ中脈ニ連續シテ之ト平行ス苞膜ハ膜質ニシテ遠ク葉緣ト離隔セリ

（未完）

○豆相地方植物採集日誌（承前）

松田定久
安井伴市

二十七日黎明強雨盆ヲ覆ス午前七時一行雨裝ヲ整ヘテ八幡野ヲ發ス路傍採集甚タ豊カニ珍卉異草應接遑アラズイヅセンリヤウ、オモト（自生）、スヰセン（重瓣）、クリハラン、ヒトツバ等三々五々意アリテ余等ノ一行ヲ慰ムルガ如シ殆ント雨中ノ困ヲ忘ル登頓屢次、ヤガテ赤澤ヲ經、暫クシテ山腹ニ達ス茶店アリ小憩時ニ午前十時、地ヲ大川ト云フコモチシダノ生ズルモノアリ長サ七尺ニ至ル八幡野ヨリ大川迄二里更ニ雨ヲ冒シテ行

クヿ一里楢本ニ抵ル極メテ一陋村僅ニ木錢宿アリ橋本屋ト呼ブ小休且ツ餉ス此地ヲ距ル八丁、海濱ニ一温泉アリあだ川ト云フ吾妻屋ハ最良ノ旅宿ヲ以テ知ラル、行クヲ果サス午後一時楢本ヲ發シ山路ヲ辿ルヿ二十七丁一漁村アリ曰ク片瀬、村中ニ大樹アリ方言アヲクス（タブノキ）ト稱ス巾一丈四尺五寸其幹本一ニシテ末三分ス恐ラクハ三樹ノ抱合スルモノナラン亦奇ト謂フヘシ更ニ海ニ沿ヒ山ヲ踰ヘ一里餘ニシテ稻取ノ村アリ屋舍鱗次一小都會ナリ片瀬稻取ノ間亦採集ニ適フ再ビ建脚ヲ驅スルヿ山路一里餘逐ニ日高ニ出ヅ程ナク河津郷中ノ谷津ニ達スレバ日既ニ沒シ咫尺ヲ辨セズ會一童ノ灯火ヲ攜ヘ來ルアリ伴ハレテまげ屋ニ投ス時午後六時半、家ニ温泉ヲ導キテ新ニ業ヲ創ム主人懇切、此地二三ノ酒樓アリ寒村ノ一良地、都人若シ此地ノ勝景ヲ探ラント欲セハ朝ニ纜ヲ靈岸島ニ解キ夕ニ日高ニ達スルヲ得ベシ日高ハ谷津ノ隣村ナリ此日採集セルモノヲ列擧セバ左ノ如シ

アシタバ、ヒメユヅリハ、メギ、ミヤマシキミ、カンアフヒ、ハマウド、オホバノイボタ、タブノキ、シヤリンバイ、マルバグミ、ツルナ、アゼトウナ、ノカンザウ、コクラン、ホトヽギス、タイトゴメ、タイミンタチバナ、トベラ、リンダウ、タツナミサウ、サイハイラン、マンリヤウ、マツカセサウ、ノサヽゲ、フユイチゴ、ハナメウガ、アリダウシ、ヒサカキ、タウパナ、ヤブカウジ、イヅセンリヤウ、オモト、スヰセン、フモトシダ、ハコ子サウ、イタチシダ、クリハラン、ヒトツバ、ノキシノブ、タチシノブ、オニヤブソテツ、コガネワラビ、ヤブクジヤク、オノマン子ングサ、

二十八日快晴午前七時まげやヲ發ス之レヨリ登降二里午前十一時白濱村ニ出ヅ村ノ南端ニ一小茶店ヲ見ル輙チ此處ニ午餉ス聞ク頃日烏賊魚ヲ捕獲スルヿ夥シト、サレハ斯魚常ニ余等カ珍膳ノ一部ヲ占有シ或ハ之ヲ調

理シ以テクロクソアヒト稱シテ余等ニ供シタリ其味美ナラズ寧ロ奇ト賞スベキカ、進ムヿ一里半下田港ヘ抵ル地ニ「ペルリ」ノ紀念碑ヲ樹ツト云フ之レニ赴カズ之レヨリ道路平坦砥ノ如ク車上天城山麓ヘ通ズベシ下田ヲ距ルヿ十丁許一僻村アリ高馬（タカウマ）ト呼ハル村ニ八幡祠アリ其傍ヨリ瀧ノ澤(?)ヘ踰ヘル山徑アリテ屠牛場ヲ設ク此邊大ニ植物ニ富ミカタヒバ、イハヒバ、クリハラン、ヒトツバ、ウラジロ(長サ五尺餘)等尤モ多ク産ス更ニいのざ川ニ沿フテ午後四時箕作村ニ達シ小憩之レヨリ捷徑ヲ撰ミテ舊道ヲ取リ斜陽小鍋峠ヲ越ユ山路蜿蜒攀ヂ易シカラス暫クシテ小鍋村ヲ經テ隣村ノ湯ケ原ニ達ス時正ニ午後七時ニ垂ントス輙チ旅宿ヲ江戸屋ニ謀ル滿客ノ故ヲ以テ謝セラレ更ニ他店ヲ叩クヿ二三、不幸ニ日暮レ峻路ヲ驅リシ旅客ハ一モ厚遇セラルヽナシ遂ニ小鍋ニ復リ辛フメ二階樓ト稱スル茅屋ニ客夢ヲ慰ムルヲ得タリ當日採集セル植物ハ

ハマオモト、ハマボッス、マンリヤウ、ヒヨトリバナ、ヤマハヽコ、イハヒバ、カタヒバ、イハヒトデ、イハカネサウ、ヤブクジヤク、オホバノアマクサシダ、クリハラン、フモトシダ、ベニシダ等ナリ

前號ニ記載セルツルシノブ、カニグサハ異名仝物ナレハ一名ヲ削去ス又カタバミハ重複セルヲ以テ其一ヲ除ク

（未完）

八重山列島各屬島ノ植物（續キ第四）

田代安定

其二　黑島ノ部四

○第三十二　菊科

（六七）Eupatorium Reewesii, Hass.

日本名　シマヒヨドリバナ（田代假號）

(六八) Boltonia cantoniensis, DC.

日本名　ヨメナ

(六九) Webera calendulacea, Less.

日本名　ハマグルマ

(七〇) Bidens Wallichii, DC.

日本名　シロバナノセンダクサ

(七一) " parviflora, Willd.

日本名　ホソバノセンダクサ

「ホソバノセンダクサ」ナルモノハ本邦之ヲ產スル至テ稀ナル所ナリ沖繩縣下ニテハ予ハ數回ノ巡歷中特リ八重山列島中ノ黑島ニ於テ之ヲ目擊ス即チ飯沼氏草木圖說所載ノ品ト同一ナリト認定シ當時ノ巡回日誌中ヨリ拔テ此處ニ揭載ス

(七二) Eclipta alba, Hassk.

日本名　タカサブラウ

(七三) Artemisia vulgaris, L. var. indica, Max.

日本名　ヨモキ

(七四) " capillaris, Th.

日本名　茵蔯（カハラヨモギ）　方言　ノーバン（西表島）

（七五）Artemisia Japonica, Th.

日本名　チトコヨモキ

（七六）Emilia sonchifolia, DC.

日本名　ウスベニニカナ

（七七）Cnicus brevicaulis, A. Gr.

日本名　ハマアサミ

（七八）Crepis linguefolia, Max.

日本名　ソテツナ又ハマナレン

方言　ニガナ

（七九）Lactuca squarrosa, Miq.?

日本名　ホソバアキノケシ

方言　トノーラ

花實ノ徵候大異ナシト雖トモ葉單狹ニシテ缺刻少ク殆ント全邊ヲ爲シ根著シキ粒塊ヲ爲スコト較萱草ノ根ニ等シキ趣ヲ爲スモノアリ島民一般朝夕ノ菜料ニ供ス

（八〇）〃 repens, Benth.

日本名　ハマニガナ

（八一） 〃 debilis, Benth.

日本名 ツルニガナ又ヂシバリ

（八二） Crepis Keiskeana, Max.

日本名 アゼトウナ

○第三十三 草扉科 Goodeniaceae

（八三） Scaevola Kœnigii Wahl.

日本名 クサトベラ

○第三十四 磯松科 Plumbagineae.

（八四） Statice arbuscula, Max.

日本名 イソマツ

（未完）

「ばらん」ニ就テ

理科大學學生 安田篤

「ばらん」ハ盆栽或ハ生花ニ供スルヲ以テ其葉ヲ見レハ殆其名ヲ知ラサル人ナシト雖之ガ花或ハ果實ニ至テハ或ハ未ダ注意シテ見ザル人モアランカ由テ左ニ其概略ヲ述ベントス

「ばらん」ハ學名ヲ Aspidistra elatior, Blume ト云ヒ漢名ヲ蜘蛛抱蛋ト云フ單子葉植物ニシテ百合科ニ屬ス莖ハ地上ニ直生スルコトナク所謂根莖ニシテ地中ニ蔓延ス多年生ニシテ根莖ノ古キ者ト雖容易ニ枯死セス根莖ノ一端ハ芽ニ終リ此芽ハ毎春大葉ヲ地上ニ抽出シ其ノ末端ニ更ニ新芽ヲ生ズ新葉ノ出ヅルヤ一方ノ緣邊ヲ

中心トシテ卷摺ス根莖ニハ數多ノ鱗片アリテ相密接ス故ニ節間ハ甚タ短シ鱗片ノ葉質ナルヿハ花芽ノ其腋ヨリ出ヅルヲ以テ知リ得ベシ根ハ根莖ノ諸節ヨリ叢生シ其太サ皆同ジク決シテ枝ヲ分ツヿナシ所謂纖維根ニシテ其若キ者ハ先端ニ許多ノ根毛アリ葉ハ葉柄頗ル長クシテ堅固ナリ葉片ハ甚大ニシテ平行脉ヲ有ス蕾ハ十一月頃根莖ニ於ル鱗片ノ腋ヨリ出デ初ハ數枚ノ鱗片ヲ以テ被ハレ全ク地中ニ埋モルト雖生長スルニ從ヒ花梗伸ビ蕾ハ土ヲ破リテ僅ニ其頭ヲ地上ニ出ス其若キ𬼂ハ花蓋ハ綠色ヲ呈スト雖漸ク褐紫色ヲ帶ビ十分生長スレバ周圍ハ土中ニ埋モレナガラ開花ス花ハ美麗ニシテ大ナリ直徑凡ソ四「センチメートル」アリ抑百合科一般ニ通ズル特徵ハ內ニ三枚外ニ三枚都合六枚ノ花蓋ヲ有シ花蓋ノ數ト同ジキ三室ノ雄蘂ヲ具ヘ子房ハ三室ヨリ成ルナリ然ルニ「ばらん」ハ例外ニシテ內ニ四枚外ニ四枚都合八枚ノ花被ヲ有シ而モ其摺メル樣ハ甚鑷合狀ニ近シ雄蘂ハ八個ニシテ子房ハ四室ヨリ成ル花蓋ハ甚厚ク恰モ花冠ニ似タリ各片ノ大部ハ下方ニ於テ相癒着ス其內面ハ褐紫色ヲ呈シ外面ニモ同色ノ斑點許多アリ各片ノ內面ヲ見レバ縱ニ走レル隆起アリ雄蘂ハ花蓋ノ下方ニ近キ處ニ於テ各片ニ相對シテ出デ花絲ハ甚短シ葯ハ二室ニシテ丁字樣且ツ內向ナリ淡黃色ヲ帶ビ縱ニ開裂シテ花粉ヲ吐ク花粉ハ淡黃色ニシテ長ミヲ帶ビ其數非常ニ多シ雄蘂ハ全ク柱頭ノ下ニ隱レ上ヨリハ之ヲ見ルヿヲ得ズ蓋シ虫媒ニ由テ授精スル者ナラン雌蘂ハ其柱頭甚大ニシテ花中ノ全体ヲ充タシ褐紫色ヲ呈ス且ツ四裂シ其各裂片ハ中央ニ於テ再ビ小裂セリ花柱ハ短クシテ上ニ柱頭ヲ載ク狀ハ恰モ傘ニ似タリ子房ハ上位ニシテ四室ナリ各室ハ六個乃至八個位ノ胚珠ヲ藏ム內角胎座ナリ胚珠ハ倒生トス果實ハ漿果ニシテ綠色ヲ呈シ表面ニ數多ノ縱ニ走レル隆起アリ種子ハ白色ニシテ堅ク Endosperm ヲ以テ充タサレ大ナル臍ノ傍ニ珠孔ノ殘リヲ明ニ認ムルヿヲ得胚乳中ニ埋モルヽ胚ハ幼根ヲ珠孔ニ向ク

第二版ノ圖中(1)ハ花ヲ上ヨリ見タル狀、(2)ハ柱頭ヲ上ヨリ見タル狀、(3)ハ雌蘂ヲ側面ヨリ見タル狀、(4)(5)(6)(7)ハ花ノ發達ノ狀ヲ縱斷面ニテ示ス、(8)ハ雄蘂ヲ前ヨリ見タルモノ、(9)ハ雄蘂ヲ側面ヨリ見タル狀、(10)ハ葯ノ開裂セル狀、(11)ハ花粉、(12)ハ倒生胚珠、(13)ハ果實、(14)ハ種子ヲ切リテ胚及ビ Endosperm ヲ示ス、(15)ハ花蓋、雄蘂ノ關係ヲ示シ且ツ子房ノ横斷面ヲモ併セ示ス

之ヨリ根、莖、葉、葉柄、鱗片、花蓋ノ構造ニ就キ其大略ヲ掲グベシ

根ハ之ヲ横斷スレバ外側ニ表皮組織 (Hautgewebe) アリ其內側ニ原本組織 (Grundgewebe) アリ中央ニ維管束組織 (Stranggewebe) アリ表皮組織ハ二層若クハ三層ノ細胞ヨリ成リ其內部ノ原本組織ニ接シタル處ニハ數多ノ細粒アリテ必竟原本組織ノ周圍ニ輪狀ヲ爲ス原本組織ハ殆圓柱狀ノ「パレンキマ」細胞ヨリ成リ其中ニ蓚酸石灰ノ針狀結晶ヲ藏ムル特別ノ細胞數多アリ次ニ一列ノ輪狀ヲ爲セル內皮 (Endodermis) アリ此細胞ハ縱ニ長ク其相接スル部分ニ於テ細胞膜ガ厚クナリ波狀ヲ爲スヲ以テ容易ニ區別シ得ベシ其內側ニ一列ノ輪狀ヲ爲シテ Pericambium アリ甚薄キ細胞膜ヲ有スル細胞ヨリ成ル維管束組織ハ管部 (Xylem) ト篩部 (Phloëm) ノ二部ヨリ成リ維管束ハ放射狀ヲ爲ス即チ管部ト篩部トハ內外ナラズシテ左右ニ相交互スルヲ見ル中央ニハ髓 (Mark) ト名クベキ部分アリ又若キ根端ニハ許多ノ根毛アリ一細胞ヨリ成ル

莖ハ其横斷面ヲ見レバ外側ニ上皮 (Cuticula) アリ其下ニ數層ノ細胞ヨリ成レル表皮アリ故ニ能ク水ノ蒸發ヲ防ギ旱魃ニ堪フルヿヲ得又氣孔ハ全ク存セズ是レ此莖ハ通常ノ莖ト異ナリ常ニ地中ニ埋沒スルヲ以テナリ其內側ハ所謂厚皮 (Rinde) ニシテ蓚酸石灰ノ針狀結晶ヲ有スル細胞諸處ニアリ之ヨリ以內ニ至レバ圓狀ヲ爲セル維管束ガ數多「パレンキマ」組織中ニ散在スルヲ見ル「パレンキマ」細胞ハ縱ニ長ク圓柱狀ヲ呈ス維

管束ハ外側ニ膜紋（Tüpfel）ヲ具ヘタル「スクレンキマ」細胞アリテ之ヲ圍繞シ内部ニハ Scalariformgefäss, Spiralgefäss, Ringgefäss, Holzparenchym アリ縱斷スレバ明ニ見ルヿヲ得ベシ

葉ヲ横斷スレバ外側ニ上皮アリ次ニ表皮アリ之ニ氣孔アリ其下ニ於テ表裏兩面ニ Palissadenparenchym アリ許多ノ葉緑ヲ含ム是レ此葉ハ直立スル傾ヲ有スルヲ以テナリ中央ニハ Schwammparenchym アリ其細胞ハ大ニシテ葉緑ノ量ハ少シ此中ニハ蓚酸石灰ノ針狀結晶ヲ有スル者アリ葉脉ハ維管束ヨリ成リ周圍ニハ「スクレンキマ」細胞アリ葉ノ表面ノ方ニ偏シテ管部アリ裏面ノ方ニ偏シテ篩部アリ之ヲ縱斷スレバ表皮細胞ハ縱ニ長ク「スクレンキマ」細胞モ同ジク縱ニ長クシテ膜紋アリ維管束中ニハ莖ノ塲合ニ於テ見タルト同ジ者アリ、

葉柄ノ横斷面ヲ見レバ上皮ノ下ニ表皮アリ周圍ニハ規則正シク維管束ガ並ビ内部ノ「パレンキマ」中ニモ亦散在ス其各維管束ヲ見レバ「スクレンキマ」之ヲ圍繞シ上方ニ管部アリ下方ニ篩部アリ其中ニ篩管（Siebröhren）ヲ見ル此ノ如ク「スクレンキマ」多キ故ニ葉柄ハ機械的ニ大ニ堅固ナリ又維管束ノ間ニアル「パレンキマ」中ニハ蓚酸石灰ノ針狀結晶ヲ有スル細胞許多アリ

鱗片ハ外ニ上皮アリ次ニ表皮アリ内ニ「パレンキマ」アリ維管束モアリ其面白キヿハ表皮ニテモ「パレンキマ」ニテモ皆細胞膜ニ Spiralverdickung ヲ有スルヿ是ナリ「パレンキマ」中ニハ針狀結晶ヲ含ム細胞アリ

花蓋ノ構造ハ外ニ上皮アリ次ニ表皮アリ内ニ「パレンキマ」アリ其外部ノ數層ノ細胞内ニハ褐紫色ノ色素ヲ含ム核ハ大ニシテ明ニ見得ベシ維管束モアレ𪜈堅固ナラズ又「パレンキマ」ニハ針狀結晶アリ

惠那嶽及其附近諸山ノ植物

森貞次郎

美濃東部ハ植物採集ノ好地ナリ特ニ飛驒信濃及三河ニ接セル處ハ深山幽谷相連リ就中惠那岳ハ海拔二二四〇米突ノ高山ニシテ其山脈ハ北方御嶽ニ連リ東南ハ信、三ノ諸嶺ニ續ク山岳縱横殆平地ト稱スルモノナク其最高處ニハ灌木帶ノ植物ヲ見ル山脈中三ッ森、水晶、笠置等ハ稍峻秀ナルモノナリ

惠那嶽ノ部

此山ハ頗峻嶮ナルカ故ニ人ノ登ルモノ幾希ナリ然レトモ頂上式內神社アリ八九月ノ交之ヲ祭祀ス此際ハ登山者少ナシトセス登山スルニハ山麓ニ住セル獵師ヲ以テ案內者トナス彼等ニ一ノ妄信アリ登山ニハ齋戒葷ヲ食ハズ若シ人ノ之ヲ背クコトアレハ神威ヲ瀆シ神怒ニ觸ルト去夏友人ト登山セシトキハ一人竊カニ一斤ノ肉ヲ懷ニシテ登リ頂上ニ達スル比之ヲ出シ一行ノ喝采ヲ博セシニ獵師等ハ顏色菜ノ如ク速ニ降山スヘシト說クコト切ナリ一行更ニ頓着セサリシカ夏天ノ常トシテ山頂疾風雷ヲ驅リ來リ樹ヲ鳴ラシ枝ヲ折リ驟雨相踵テ到ラントス衣袂悉ク濕ヒ寒慄堪ヘサルニ至リ匆惶山ヲ降レリ獵師ハ以テ神ノ崇トナス此ノ如クナルカ故ニ採集ノ植物ハ甚少ナク披露スルモ耻カシキ次第ナレトモ精細ニ採集ヲ試ムレハ奇品决シテ少ナカラザルベシ余ハ唯同山ヲ世ニ紹介スルニ止マルノミ夏期御嶽採集ヲナスノ人ハ路程遠カラス同山亦一顧ノ値アリト信ス

百合科

ノギラン Metanarthecium luteo-viride, Maxim.

アマドコロ Polygonatum officinale, All.

蓼科

イハタデ Polygonum polymorpha, var. japonicum

石竹科

サボンサウ Saponaria officinalis, L.

毛茛科

モミヂカラマツ Trautvetteria palmata, Fisch. et Mey.

牻牛兒科

フウロサウ Geranium nepalense, Sweet.

シラネセンキウ Angelica polymorpha, Maxim.

五加科

ハリブキ Fatsia horrida, Smith.

薔薇科

ダイコンサウ Geum japonicum, Thunb.

var. dilatatum, Torr. et Gray.

荳科

ヌスビトハギ Desmodium podocarpum, DC.

石南科

ハナヒリノキ Leucothœ Grayana, Maxim.

龍膽科

タウヤクリンダウ Lactuca versicolor, Schultz. Bip.

罌粟科

コマクサ Dicentra pusilla, Sieb. et Zucc.

繖形科

シラチニンジン Angelica Florenti, Fr. et Sav.

ダケゼリ Pimpinella calicina, Maxim.

山茱萸科

ゴゼンタチバナ Cornus canadensis, L.

ミヤマダイコンサウ Geum caethæfolium, Menz.

チンダルマ Geum dryadoides, Sieb. et Zucc.

フヂカンザウ Desmodium Oldhami, Oliv.

イハカヾミ Schizocodon soldanelloides, Sieb. et Zucc.

地衣

依蘭苔 Cetraria islandica.

◎雜錄

○植物雜俎（前號ノ續キ）

松村任三

○Robert kook 植物ノ細胞ヲ創見ス實ニ西暦千六百六十七年

○Robert Brown 細胞核ヲ創見ス實ニ西暦千八百三十三年

○細胞小ニシテハ 0.0007 ミリメートル大ニシテハ 10—20 センチメートル

○原形質運動ノ速力一秒時十ミリメートル

○樹木時ニ粘液ヲ流出ス是レ黴菌ノ所爲曰ク Leuconostoc Lagerheimii 曰ク Micrococcus dendroporthos.

○樹木時ニ沒食子樣ノモノヲ生ス亦是レ黴菌曰ク Bacillus Pini 曰ク Bacillus Oleæ.

○無花果、桑樹時ニ護謨ヲ流出ス Bacterium gummis ノ所爲是レ亦一種ノ黴菌○萊菔、菜豆、草綿、馬鈴薯亦此病ニ罹ル

○黴菌アリ飲食物ニ紅色或ハ碧色ヲ呈ス曰ク Bacillus syncyanus. 曰ク Bacillus cyaneofuscus 曰ク Bacillus prodigiosus.

○黴菌アリ死魚ニ燐光ヲ放ツ Photobacterium phosphorescens ト名ク

○黴菌アリ海水ニ燐光ヲ放ツ Photobacterium Pflügeri ト名ク

○黴菌アリ空氣中ヨリ酸素ヲ吸收シ「アルコール」ヲシテ酢酸ニ化セシム ($C_2H_6O+2C=C_2H_4O_2+H_2O$) 曰ク Bacillus aceti.

○黴菌アリ纖維素ニ醱酵ヲ起ス Bacillus amylobacter ト名ク

○黴菌アリ蠶病ヲ起ス曰ク Streptococcus bombycis.

○金松（カウヤマキ）葉ハ二針葉ノ合スルモノ呼テ短枝ト云フ

○松柏類ニ花ト稱スルモノ皆花被ヲ缺ク

○イチヰ、カヤ、イヌガヤ材管狀細胞ヨリ成ル其膜增厚シテ螺旋狀ヲ呈ス

○松ノ屬、落葉松（カラマツ）ノ屬、タウヒノ屬、及樅（モミ）ハ其材質中脂道アリ

○公孫樹ノ木心脂道アリ

○松柏類中獨リ一位ハ葉ニ脂道ヲ缺ク

○アスナロハ其心皮ニ四子乃至五子ヲ藏メゴロウヒバハ心皮八個ニシテ二子ヲ藏ムコノテガシハハ心皮六個ニシテ一子乃至二子ヲ藏ム

○松柏類中枝ニ長短ノ別アルモノ四屬曰ク松、曰ク落葉松、曰ク金松、曰ク公孫樹

○松ノ針葉ハ短枝ヨリ出テ落葉松ノ針葉ハ長短兩枝ヨリ出ツ

○タウヒノ針葉四稜ツガノ針葉扁平

○モミニ毬果アリ蔽片ノ鱗之ヲ成ス熟シテ脫落タウヒノ毬鱗ハ固着ス是レ二屬ノ別ルヽ所

○赤松、黑松、散布廣大、日本全土殆ト之ヲ生セサルハナシ而シテ支那、朝鮮ノ海外ニ及ブ

○イブキ俗ニ伊吹ト書ス海內ノ高山ニ生シ又支那、朝鮮、喜馬拉ノ海外ニモ播ク

○松柏類中日本ノ特產五種曰クナギ曰クアスナロ曰クヒノキ曰クサハラ曰クカウヤマキ

○シマムロ支那之ヲ刺松ト曰フ唐土、琉球、無人島ニ產ス

○松毬（マツカサ）ノ熟スルハ花後二年若クハ三年ニアリ

○松毬ノ熟スルヤ上ヨリ下ニ及ブモノアリ松ノ屬、唐檜（タウヒ）ノ屬是レナリ其下ヨリ上ニ及ブモノアリ樅（モミ）ノ屬是ナリ

○松柏類中動物ニ類テ種子ヲ散布スルモノ曰ク一位、曰ク羅漢松、曰ク榧曰ク銀杏熟シテ多漿ニ化シ紅色若クハ黄色ヲ呈ス

○松毬、樅毬ハ然ラズ熟シテ鱗片ヲ開展シ種子ヲ四散ス此種子ニ翅翼アリ能ク風ニ舞フ

○北米加里福尼ニ大樹アリ杉ニ類ス幹高キヿ百「メートル」幹圍十「メートル」樹名 Sequoia gigantea.

○南米墨西哥ニ大樹アリ亦杉ニ類ス幹高キヿ四十「メートル」其圍三十「メートル」土名 Sabino 學名 Taxodium mexicanum. 其年壽ヲ測算セシ人アリ或ハ六千年ト曰ヒ或ハ四千年ト曰フ

○玉蜀黍（タウモロコシ）ハ元亞米利加熱帶ノ產、變種頗ル多シ現今六十品ニ及ブ○花穗雌雄ヲ別ニス莖末ニ雄花ヲ居シ葉腋ニ雌花ヲ居ラシム紅毛長ク垂ルヽモノ是レ柱頭

○米、麥、竹、稗ノ類ヲ禾本ト總稱ス此科品凡ソ三千五百アリ

○禾本ニ一種藥草アリ印度人以テ虎列剌ヲ治ス曰ク Andropogon laniger, var. Iwarancusa.

○米花六雄蘂、麥花三雄蘂

○カヤツリグサ四百種スゲ五百種

○小麥ヲ Triticum sativum ト學稱シ大麥ヲ Hordeum sativum ト學稱ス

○棕櫚樹身大ナレモ花實小ナリ六片ノ花蓋六雄三雌蘂ヲ護ス外片小ニ內片大ナリ

○天南星ノ屬ハ其實礎必ス一室ニシテ數子ヲ藏ム

○半夏ノ屬ハ其實礎唯一子ヲ藏ム

○石菖ハ細花密簇シテ長穗ヲナス六片ノ花被アリ六雄蘂ヲ護ス

○薔薇ノ子實ヲ營實（英語 Rose-hip 獨語 hagebutte）ト稱シ桑ノ子實ヲ椹ト稱ス

○豌豆ノ花蛾形ヲ爲ス

○赤松ノ芽ハ赤ク黒松ノ芽ハ白シ

○赤松一ニメマツト曰フ松ノ雌本ニアラス黒松モ一ニチマツト曰フ赤松ノ雄本ニアラズ

○楊柳ニハ雄本雌本アリテ相別ル雄本ハ雄花ノミ雌本ハ雌花ノミヲ着ク○故ニ雄花ハ花後實ヲ結バズ雌花ノミ之アリ○實熟シテ二裂シ內ヨリ柳絮ヲ吐ク柳絮ハ柳子ニ生スル白毛ナリ

○竹筍ハ地中ニ橫行セル竹莖ノ芽ナリ○零餘子（ムカゴ）ハ薯蕷ノ葉腋ニ生セル芽ナリ地ニ落チテ萌發スルコト猶百合ノ葉腋ニ結ベル珠芽ノ如シ葉ハ則芽ナリト雖多肉ニ變シテ養分ヲ貯蓄スルノ異アルノミ

○山茶（ツバキ）ハ常綠ノ喬木四月紅花ヲ放キ茶ハ常綠ノ灌木十月白花ヲ放ク山茶、茶梅（サヾンクワ）、茶、皆同屬花形實狀ノ同キヲ以テ之ヲ知ル

禮記月令、孟春之月禁伐木、

周官曰、仲冬斬陽木、仲秋斬陰木

齊民要術曰、伐木四月七月、則不蟲而堅肕

カスマグサ紅紫色ノ小蛾形花ヲ開ク莢內四子ヲ藏ム

スヾメノエンドウ紫色ノ小蛾形ヲ開ク莢内二子ヲ藏ム
ヤハズエンドウ花、上ノ二種ニ似テ大、莢内十許子ヲ藏ム
ナヅナ花後匾莢アリ三弦ノ撥ノ如シ
グンバイウチハ花後莢ヲ結ブ匾圓軍配ウチハノ如シ
イヌナヅナ莖頂穗ヲナシ黄花ヲ開キ後莢ヲ結ブ略〻米粒ノ如シ
チドリコサウ梢葉腋ニ數花節ヲ圍テ輪次ス形僧帽ノ如シ
カイダウ數葉簇生ノ間數花ヲ開ク長梗五瓣、蕾ノ時ハ赤ク開ケバ半紅半白

○細胞核分裂ノ際細胞仁ノ行爲果シテ如何

細胞核ガ(「カリオキテチック」)的分裂ヲ爲スニ當リテハ細胞仁(「ヌクレオルス」)先ヅ核内ニ於テ融解シ而ヽ娘核ノ生ズルニ及デ再ビ其内ニ生ズトイフヲ以テ通說トス然ルニ「ドクトル」アー、チンメルマン氏ハ近來諸種植物ニ就テ之ヲ研究シ從來ノ說ノ大ニ誤レルコトヲ指摘シタリ其論文ハ卽昨年末出版ノ氏ガ編輯ニ係ル Beiträge, Zur Morphologie und Physiologie des Pflanzenzelle, Bd. II. Heft 1 中 Ueber das Verhalten der Nucleolen während der Karyokinese ナリ即氏ノ研究ニ因レバ細胞核ノ分裂スルヤ細胞仁ハ其内ニ溶解スルヿ無ク先ヅ多數ノ顆粒ニ分裂シテ原形質内ニ散布シ核分裂ノ程度進ムニ及デハ是等ノ仁分裂ニ因テ生ジタル顆粒ハ相合シテ稍大ナル顆粒多數ヲ成シ娘核ノ生ズルニ及デハ此等顆粒ハ其内ニ進入スルガ如シ殊ニ最モ奇ト爲ス可キハ其種ニ於テハ娘核、動物「アメーバ」ノ虛足ノ如キモノヲ出シ而ヽ顆粒ハ此虛足狀ノ者ニ因テ核内ニ引キ入ラルヽ如キ觀アルヿ是ナリチンメルマン氏ノ研究ニシテ果シテ正確ナレバ仁ハ必ズ仁ヨリ生ジ玆

ニ一個ノ仁アレバ必ズヤ其母仁アルヤ明ナリチンメルマン氏是ニ因テ論ジテ曰ク余ガ研究ニシテ果シテ當ヲ得バ夫ノフレミング氏ガ所謂 " Omnis nucleus e nucleo " ナル語ニ準ジ又 " Omnis nucleolus e nucleolus " ト唱フベシト細胞學ニ志ヤル人ハ氏ガ原文ニ就テ氏ガ研究ノ詳ヲ學習シテ可ナリ

池野成一郎報

○植物根ニ對スル銅鹽類ノ作用

本邦ニ於テモ先年來足尾銅山ノ鑛毒流レテ田圃ヲ害スルトカ害セヌトカ大分議論モアリタルガ其後如何決シタルヤ余ハ知ラズソレハ扨置キ左ニ掲グルモノハベルリンナルエル、オットー氏ガ水中培養ノ法ニ藉テ植物ヲ栽培シ硫酸銅ノ有毒作用ヲ研究シタル成蹟ナリ

氏ノ研究法タルヤ之ヲ大別シテ甲乙二種ト爲スベシ

（甲）諸種ノ植物（インゲン、タウモロコシ、エンドウ）ヲ水中ニ培養シ其根ヲシテ長時間、硫酸銅ノ溶液、蒸餾水或ハ水道水中ニ在ラシメバ根系幷ニ地上部ノ形狀果シテ如何

（乙）根ヲシテ硫酸銅ノ溶液中ニ在ラシメバ根ハ好ンデ之ヲ吸收スルヤ否ヤ將タ銅ハ之ヲ地上部ニ於テモ檢出シ得ベキ否ヤ

氏ノ試驗次ノ如シ

其一　インゲンヲ蒸餾水、水道水、幷ニ硫酸銅ヲ有スル水道水中ニ栽培シテ以テ試ムルニ硫酸銅ノ溶液稀薄ナル時ニ當テハ（水十一分ニ付酸化銅零「グラム」〇〇六九九ノ割）根ノ其内ニ沈メルモノハ少ク普通ト異ルノ狀ヲ呈スト雖𪜈大害ヲ受クルニ至ラズ然レ𪜈其溶液ニシテ水十一分ニ付酸化銅零「グラム」〇一〇ヲ含メバ其溶液ノ有害ナルヲ認ムベシ而〆インゲンノ根ノ斯クノ如キ溶液中ニ沈メルモノハ其發達不完全ニシテ病狀ヲ

呈スト雖𪜈溶液ヨリシテ多量ノ銅分ヲ攝取スルヿ無ク地上部ハ之ヲ吸收スルヿ根ニ比スレバ尚些少ナリ且根ヲシテ溶液中ニ在ラシムルヿ四週間以上ノ久キニ亘ルモ更ニ多量ノ銅分ヲ吸收スルノ徴ナシ

其二　タウモロコシヲ甲乙丙丁ノ溶液中ニ栽培シタリ

甲溶液　水道水三立方「サンチ」五一幷ニ水中培養ノ普通營養液百七十五立方「サンチ」ノ混合液

乙溶液　蒸餾水三立方「サンチ」五一幷ニ普通營養液百七十五立方「サンチ」ノ混合液

丙溶液　水道水三立方「サンチ」五一、普通營養液百七十五立方「サンチ」幷ニ硫酸銅零「グラム」〇七八（銅分零「グラム」〇一九七）ノ混合溶液

丁溶液　水道水三立方「サンチ」五一、普通營養液百七十五立方「サンチ」幷ニ硫酸銅零「グラム」一五六（銅分零「グラム」〇三九四）ノ混合液

植物ヲシテ丙溶液內ニ栽培スルヿ三週間ノ久キニ亘ルト雖𪜈其根ニハ絶エテ銅分ノ痕跡ダモアルヿ無シ然レ𪜈其根幷ニ地上部𪜈其發達ハ異狀ヲ呈シ而シテ甲乙溶液內ノ植物ハ更ニ異狀ヲ呈スルヿ無シ是ニ因テ之ヲ觀レバ丙液內植物ノ異狀ヲ呈スル者其內ニ銅分ヲ吸收スルヿ無シト雖𪜈溶液內銅分ノ存在スルニ因テ然ルヤ明ナリ

丁溶液內栽培シタルモノモ明ニ銅分ニ害セラレタルノ徴ヲ呈ス而シテ其根ハ極テ微量ノ銅分ヲ吸收スト雖𪜈其量タル極テ微ナレバ其量ヲ測定スルヿ能ハザルナリ

其三　エンドウヲ其二ノ試驗ト同一ナル甲乙丙丁ノ溶液內ニ栽培スルニ其成蹟左表ノ如シ表中絶無、痕跡ト記シタルハ銅分ノ絶無、痕跡ナリ

甲溶液	乙溶液	丙溶液	丁溶液

地下部	絶無	絶無	微少ノ痕跡	痕跡
地上部	絶無	絶無	絶無	絶無

以上ノ試驗ニ於テハ植物根ヲシテ溶液中ニ在ラシムルヿ四週間半ノ久キニ亘レリ然レ𪜈以上ノ表ニ於ケルガ如ク根ハ銅分ヲ吸收スト雖𪜈其量僅微ニシテ定量スルニ足ラズ且地上部ニハ銅分絶無ナリ然レ𪜈丙丁溶液內ニ栽培シタル植物根幷ニ地上部ノ銅分ニ害セラルヽヤ其發達ノ不具ナルニ徵シテ明ナリ

以上ノ試驗ニ據テ以テ推考スレバ植物ノ其根ヲ硫酸銅ノ溶液中ニ沈ムルモノハ其溶液稍々濃厚ナリト雖𪜈銅分ヲ殆ド全ク吸收スルヿ無ク而シテ銅分ノ植物ニ害ヲ及ボスヤ獨リ根ノミナラズ地上部ニモ至ルヤ明ナリ

在京都き、た、ら、

○植物園ノ植物（三）

松村任三

Codiaeum variegatum (L.) Bl. 歐洲ノ花戸漫ニクロトンノ名ヲ以テ之ヲ呼ブ、大戟科ノ木、性寒ヲ畏ルルガ故ニ温室ニアラザレバ生育セズ、葉形千態萬狀變化極リナシ、因テ之ヲ變葉木ト新稱スベシ

Asparagus plumosus *Baker.* 亦温室ノ植物、莖葉綠色、葉ノ細裂略〻シノブノ態アリシノブバウキノ名之ニ適スタマバウキ之ガ族百合之ガ宗

Sansevieria zeylanica *Willd.* 近年印度地方ヨリ舶載ス元南亞非利加及東印度ノ產ナリ葉ハ萬年青ノ如ク叢生シテ圓管狀綠色白斑アリ愛スベシ麥門冬ノ族チトセラント呼フ

Sansevieria cylindrica *Bojer.* 上條ノ一種ザンジバルノ產ツヽチトセラント稱ス葉圓管狀ヲナセバナリ

Nepenthes Rafflesiana (Jack) 有名ナル食蟲植物、ウツボカツラノ名旣ニアリ猪籠草（英華韻府）

Cosmos bipinnatus *Cav.* ハルシヤギクニ似テ長大、花紅色愛スベシオホバルシヤ或ハベニハルシヤト名付クベシ

Chlorophytum comosum (Thunb.) Baker. オリヅルラン百合科雞尾蘭族

Pterocarya stenoptera G. DC. 植物學雜誌七卷、七十九號 p. 274ニカンページユトシタルハ嵌寶楓ナリト云フ支那ニテ之ヲ製紙用ニ供ス

○繇條書屋植物雜記（其六）

牧野富太郎

●ときはすゝき

本草綱目啓蒙卷之九ニ曰ク在原すゝきハ四季共ニ枯ズ葉大ナリ歌ニときはすゝきト云ト本草圖譜卷之八ニ圖ヲ出シ且曰クありはらすゝき又ときはすゝきトモイフ葉長大ニシテ冬枯レズト是レ曾テ田中芳男先生ノ注意セラレタル長穗ノすゝきナリト信ズ昨年十一月同先生ノ書信中ニ曰ク安房の安房郡佐野村の邊向南の地ニ多し方言ハマスヽキ或ハワセチバナと云ふ田の風防きに植ゑ列ぬるを常とす尤野生多し此草ハ他ニ有無を知らざりしに本年相州平塚の邊相摸川末流の或る處柳島村に自生あるを見る全く同物なりし云云ト予昨年晩秋之ヲ三河國渥美郡ニ採集ス方言ヲかんすゝきト呼ベリ

此すゝきノ殊に他ノ品ト標異スベキ點ハ其穗ノ中軸極メテ長ク延長シ穗形モ亦從フテ長形ヲナスニ在リ而シテ其花時ハ常品ヨリ早ク其葉ハ能ク霜雪ヲ凌デ凋マザル等モ亦他ト異ナル標點トス

此すゝきノ學名如何曰ク Miscanthus japonicus Anderss. 是ナリ Hackel 氏之レガ異名ヲ記ス曰ク Saccharum polydactylon var. α. Thunb. Saccharum japonicum Thunb. Saccharum floridulum Labill. Erianthus floridulus Schult. Saccharum prægrande Steud. Eularia densa Munro. Miscanthus luzonensis Anderss. 是ナリ

●をぎノ學名

をぎハ郊外水濕ノ地ニ生ジ且ツ往々人家ニ栽植セラル地下莖長ク四方ニ延拖シテ苗ヲ生ジ大ニ他ノすゝきト異ナリ且つ花ニ芒ナキヲ以テ他品ト區別スル極メテ容易ナリ是レ即チ Miscanthus sacchariflorus Hackel. ニシテ Miscanthus saccharifer Benth. Imperata sacchariflora Maxim. ハ之レガ異名ナリ又 Imperata eulalioides Miq. モ亦同一ノ植物ナラント云ヘリ

●うんぬけハ新種ナリ

うんぬけハすゝき屬ノ一種ニシテ三河尾張ノ邊殊ニ多シ名古屋ノ本草家小鹽五郎氏曰ク尾張ノ邊かりやす鮮クうんぬけ殊ニ多シト其莖葉ノ狀かりやすニ類似スト雖𪜈花部ハ全ク之ニ異ナリ芒極メテ長クシテ總苞毛ハ著シク穎ヨリ短シ此ノ如キノ狀本邦ノ他品ト極メテ同ジカラズ昨年田中芳男先生大ニ此植物ニ注意セラル依テ予ハ此ニ Miscanthus Tanakæ Makino. ナル新學名ヲ新考セリ其詳狀ハ不日之ヲ世ニ公ニセン

●やまそてつハ新種ナリ

やまそてつハしだ科中 Lomaria 屬ニ屬シ殊ニ其亞屬 Plagiogyria ニ隷スベキモノナリ其下部ノ羽片ハ中部ノ羽片ヨリ短小ナルヲ以テ固ヨリ Lomaria adnata Blume. ト異ナリ予ハ不日之ヲ公ニスベシト雖𪜈此ニ先ツ Lomaria (Plagiogyria) Matsumureana Makino. ノ新學名ヲ豫設セン

●をりづるらんノ學名

此ゆり科ノ一草ハ盆栽トシテ極メテ雅致ニ富ミ且ツ梗上更ニ苗ヲ生スルニヨリテ著シ而シテ予ハ其渡來ノ年

月ヲ詳ニセズト雖モ今ハ東京ニ在テハ極メテ珍トスルニ足ラザルニ至レリ花戸ニテ之ヲてふらん又ふうてうらんト呼ブをりづるらんハ帝國大學植物園ノ稱呼ニ係ル而シテ此植物ノ學名ハ我邦ニ在テハ永ク未詳ノ中ニ在リシガ先キニ大久保三郎氏之ヲ搜索シテ Chlorophytum comosum Baker. ノ極メテ此植物ニ類セルモノナルヿヲ考定セリ予近日亦此植物ノ學名ヲ知ルノ必要ニ迫ラレ之レヲ世間ニ問フモ一人ノ之ヲ識リタルモノナク又之レヲ諸書ニ探グルモ容易ニ其學名ヲ捕捉スル能ハズ漸ク辛フジテ之ヲ得レバ豈ニ料ラン是レ先キニ大久保氏假定ノ植物ト同一ナリ乃チ尙ホ其形狀ヲ比較スルニ之レヲをりづらんトナスノ敢テ不當ヲ見ズ故ニ今之レヲ此植物ノ學名トナス Chlorophytum comosum Baker. 前ニ大久保氏ニ捕ヘラレ後ニ復タ予ニ捉ヘラル鶴ノ九天ニ翔ケルガ如ク蝶ノ花間ニ舞フニ似テ翩々再ビ余輩ノ手ヨリ脫セント欲スルモ豈ニ彼レガ自由ニ放任ス可キモノナラン哉呵々而シテ此植物ハ南亞非利加洲中「トランスバル」「ナタル」ノ原產ニシテ種々ノ異名ヲ有セリ即チ左ノ如シ

Chlorophytum comosum Baker.
=Anthericum comosum Sternb.
=Anthericum comosum Thunb.
=Phalangium comosum Poir.
=Hartwegia comosa Nees.
=Cæsia comosa Spreng.
=Anthericum Sternbergianum Boem. et Schult. fil.

=Chlorophytum. Sternbergianum Steud.
=Phalangium viviparum Reinw.

○禾本類ノ葉

Herr M. Güntz. 氏ノ研究ニヨレバ陽地ニ生スル禾本類ノ葉ハ大抵垂直ニ〆細ク多クハ上面ニ溝ヲ有シ或ハ粗皺アリ氣孔ハ毛或ハ蠟質ノ被覆層ニヨリ保護セラレ含水組織ハ善ク發達セリ之ニ反シ陰地ニ生スルモノハ其形扁平ニ〆上皮ハ發育不完全蠟質ノ被覆層ナク熱帶產ノモノヲ除クノ外ハ含水組織ノ發育又甚ダ弱シト云フ

○葉面ニ堆積セル蠟ノ功用

吾人往々葉表面全ク白色粉狀ノ物質ヲ以テ被ハルヽモノヲ見ルヿアリ是レ即チ蠟ノ分泌サレテ其ノ面ニ堆積セシモノニ〆顯微鏡下ニ之ヲ窮ヘバ棒狀粒狀或ハ塗沫セルガ如キ狀ヲ呈ス Professor. F. Delpino. 氏ハ此ノ物質ニ付テ驗究シ其ノ水ノ蒸散ヲ防キ氣孔ノ作用ヲ調節スルニ必要ナルノミナラズ昆蟲ノ此ノ表面ヲ踏ミ內部ノ重要ナル組織ヲ害スルヲ防クモノナルヿヲ發見セリ

（以上二件）　H・M・生譯

○葉ノ向日力

向地力（重力）ノ媒介ニヨラズ單ニ日光ノ力ヲ借テ其光線ヲ葉面ノ一定點ニ受クルヿハ（G. Krabbe 氏ノ唱道スル所ニ〆 A. B. Frank. 氏モ亦之ニ同意セリ此事ニ就テハ天竺牡丹、ふくしあ、小豆、天竺葵等ノ植物ニ實驗セシ所ニ〆此ノ如キ位置ヲナスハ全ク葉其物ニ固有スル向日力ニ原因シテ其重力ニ關係セズ殊ニ人工ニテ

其重力ヲ增進セシムル時ニ在テモ更ニ其性質ヲ變スルヿナシ而シテ葉面ノ向日運動ヲ生スル所ハ獨リ葉柄ノ上部ニアリ終ニ光線ハ葉面ニ鉛直線ヲナスニ至ル葉柄ニ此運動アルハ單ニ彎曲性ニヨッテ生スルモノニシテ糾繞性（トルシヨン）ニヨッテ生スルモノニハアラサルナリ彼葉柄ノ糾繞柄ナルモノハ通常兩異力ノ連合結果ニメ葉柄ノ一面ハ向日力ヲ生シ一面ハ向地力ヲ生スルニヨッテ起ルモノナレハナリ

○植物葉ニ於ケル鹽ノ影響

均シク一種ノ植物ニシテ海濱ヲ去ルノ遠近ニ由テ其葉ノ組織ニ異狀ヲ呈ス畢竟鹽ノ作用ニ因レリ固ヨリ鹽ハ植物ノ器官ニ澱粉ヲ生スルニハ必要ナルモノナレトモ其過量ナルトキハ反テ之ヲ妨クルノ傾向アリ Lesage 氏ノ經驗ニ據レハ（第一）大抵海濱ニ產スル植物ハ內地ニ產スルモノヨリ較其葉厚シト（然レトモ例外ノモノナキニシモアラスト）（第二）葉ノ柵狀細胞ハ一般ニ發達スルモ細胞間隙ハ減スト（第三）葉綠ハ減却シテ炭素ノ同化作用ハ減退スト以上ノ三件ハ全ク鹽ノ多寡如何ニ因ルモノニメ栽培ノ實驗ニ徵シテ明瞭ナリト　ノ、ヒ　譯

○むもれ木

源三位賴政の辭世むもれ木の花咲事もなかりしの歌、世俗に埋木と心得、朽たる木の義とするは誤也、無花果、和名ムモレギ、一名イチミジ、和俗名トウガキといふもの是なり、此木はなさく事なふして實を結、その實秋に至りて、腹（ハラ）さけて赤し、蓋此ものを借のみ、

○「ホウノキ」と厚朴

和のホウノキといふて、秤の覆ひ、刀の鞘に用ゆる木は、漢土に於て見證なし、此木と梅干とは大毒なり此木の上に置たる梅干を食ふべからす、必す死すといふ、本朝の俗醫、此ホウノキを以て、唐の厚朴と心ゑ、和

の厚朴と號し、藥用する事、大なる僻事也、厚朴は和產なし、ホウノキは漢土なし、故に文字なし、ホウノキは冬に至りて葉落、厚朴は冬不レ凋、たま〳〵其木の似たるのみ藥用には必ず唐なるものを撰て服すべし、惣して和產なきもの、近年唐種にして和產するもの多し、又可レ知

以上二件新井白蛾祐登着牛馬

○アントン、ヨゼフ、ベーム氏沒ス

澳國ウヰーン府大學及ヒ高等土壤學校植物生理學教授「ドクトル」アントン、ヨゼフ、ベーム氏（Anton Joseph Böhm）沒ス實ニ客年十二月二日なり抑々氏ハ有名ナル植物生理家ニシテ研究發見スル所甚多ク隨テ其論文モ甚多シ就中氏ハ植物ノ水分吸收及ヒ上昇ニ就テハ一新說ヲ公ニシ熱心是ヲ主張シタリ而ソ世ノ學者此說ニ左袒シタルモノ鮮シト雖モ氏ノ論說タルヤ決テ輕々ニ觀過スベカラザル貴重ノモノナリ氏ノ論文多シ今其數個ヲ揭グ

(1) Beiträgce Kenntniss d. Chlorophylls. 1857.
(2) Ueb. d. Ursache d. Saftsteigens in d. Pflanzen. 1863.
(3) Ueb. d. Funktion n. Genesis d. Zellen in d. Gefässen d. Holzes. 1867.
(4) Ueb. d. Respiration d. Landpflanzen. 1873.
(5) Ueb. d. Stärkebildung in d. Keimblättern d. Kresse etc. 1874.
(6) Ueb. d. Stärkebildung in d. Chlorophyllkörnern. 1876
(7) Ueb. d. Ursache der Wasserbewegung und der geringeren Lufttension in transpirirenden Pflanzen. 1881.

(8) Ursache d. Wasserbewegung in transpirirenden Pflanzen. 1890.
(9) Ueb. einen eigenthüml chen Stammdruck. 1892.
(10) Transpiration gebrühter Sprosse. 1892.

◎東京植物學會錄事

全會ハ一月二十七日午後二時ヨリ理科大學植物學敎室ニ於テ開ク席定マルヤ博士松村任三氏ハ獨逸國學事談テフ題ニテ嘗テ同國ニ留學ノ際目擊セラレタル植物學海ノ狀況及ビ留學ノ費用等適實簡明ニ說明セラレ次テ牧野富太郎氏ハ再ビ關西地方植物分布ニ就テ前回ノ演述ヲ完結セラレ全ク散會セシハ午後四時三十分ナリキ

◎寄贈書目

東洋學藝雜誌	第百四十八號	一册	東洋學藝社	(東京)
動物學雜誌	自第六卷第六十三號 至全第六十四號	二册	動物學會	(東京)
地質學雜誌	第一卷第四號	一册	東京地質學會	(東京)
地學雜誌	第六十一號	一册	東京地學協會	(東京)
東京醫學會	第八卷第二號	一册	東京醫學會	(東京)

東洋學藝雜誌

第百四十八號
明治二十七年一月二十五日發兌
◉定價一冊十錢

◉論説

○日本現行ノ大陰暦　寺尾壽
○快樂ノ種類及其性質　元良勇次郎
○石器時代人民に關するアイヌ口碑の總括　坪井正五郎
○作文の心得　物集高見

◉雜録

○物理學隨筆録（第一）　鶴田賢次

◉雜報

○磁力變動と地震○名古屋近傍の地震○帝國大學一覽○ニウトン祭○幾何學敎科書○以太利標準時○印度の人口○珈琲と茶の消化作用○理髮所の傳染病○光學講義○獨乙の理科大學○三千尺の穴○人造地震○大森房吉氏の通報○蠅園

◉寄書

○本月十日濃尾ノ强震

◉學會記事

◉應問

○遺傳質猫ノ眼球、螢、昆蟲採集書、動物分類書石川千代松、

發行所　東京神田裏神保町　東洋學藝社

動物學雜誌

第六十三號
明治廿七年一月十五日發行

一冊金拾一錢六冊前金（郵税共）六拾六錢

◎目錄

○桑樹の介殼蟲（第六十二號ノ續キ）　佐々木忠二郎君
○人腦ノ構造式（承前）　石川一男君
○相州三浦三崎近傍ノ隱鰓うみうし科（第五十七號ノ續キ）(Cryptobranchiate Dorididae)　藤田經信君
○あさり貝殼斑紋ニ就キ（第五十八號ニ一九五ノ續キ）　池田作次郎君
○受精ノ顯象　石川千代松君
○日本產ノ短尾類　松浦歡一郎君
○小笠原島產からすばと一種ニ就キテ　飯島魁君
○いはみせきれいニ就キテ　飯島魁君
◎雜録以下數十件

發賣所　東京神田裏神保町一番地　敬業社

廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

和漢洋對譯 本草辭典 全一冊

定價金六拾錢

本書ハ英語及其他數十ヶ國ノ語ニ於ケル植物及藥品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩樣ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレバ苟クモ**英語**ヲ教授シ**植物學**ヲ修メ**化學**、**藥物**、**山林**、**農業**等ノ諸科ヲ講シ又ハ**貿易**、**通辯**、**反譯**、**園藝**等ニ從事セラルヽ內外ノ人士共ニ座右ニ缺クベカラザル良辭書ナリ

東京神田裏神保町一番地
敬業社

○本誌廣告料五號文字 一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌毎月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢
○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條 代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條 前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セズ○第三條 郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條 特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御屆可申候

明治廿七年二月十九日印刷
明治廿七年二月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉 東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者 熊田宜遜 東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所 熊田活版所 東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所 植物學雜誌編輯所 東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所 敬業社 同所
同 丸善書店 東京日本橋區通三丁目

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] February 20, 1894. [No. 84.

明治廿六年六月三十日遞信省認可

明治廿一年二月三日內務省許可

CONTENTS.

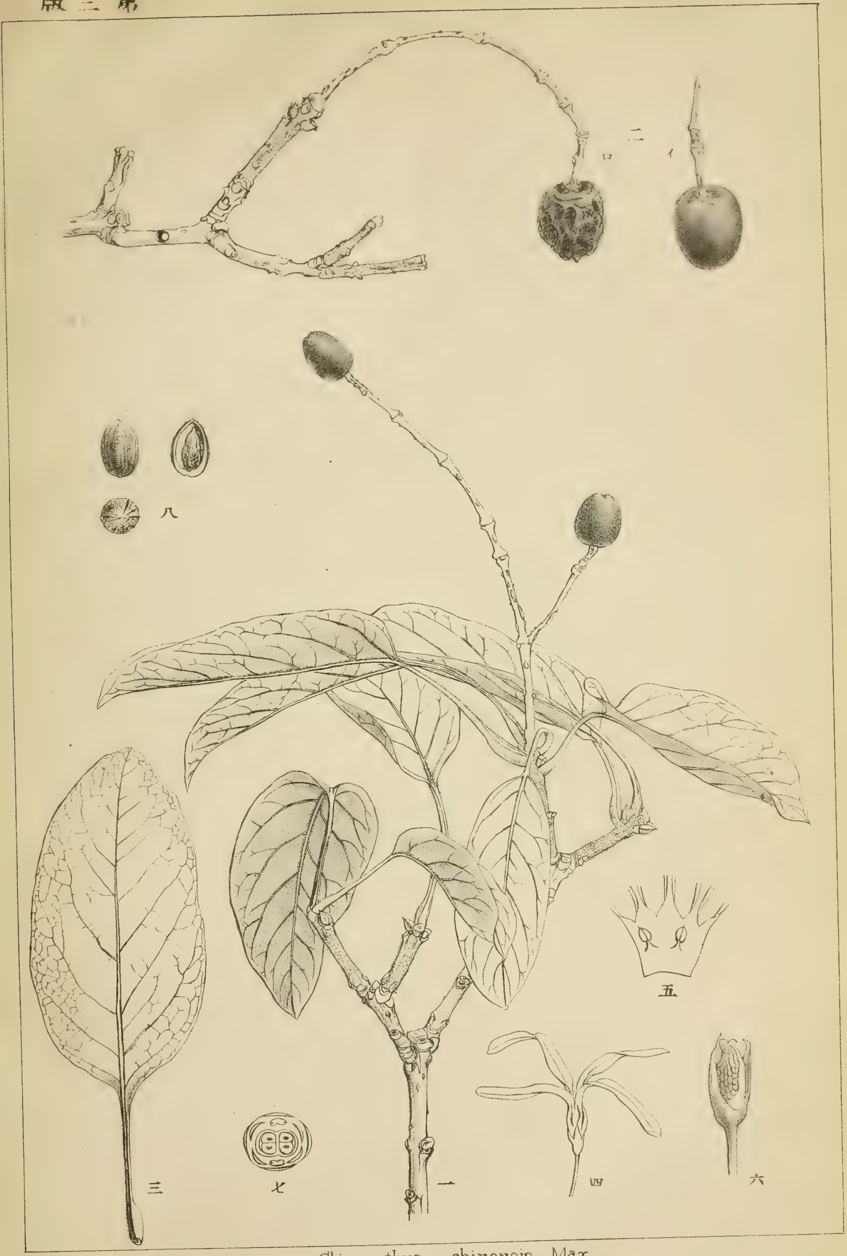
Absorption of Water by Leaves. **By S. Ikeno.** 49
Flowers of Acer. **By Prof. J. Matsumura.** 51
Chemical Researches on the Vegetable Volatile Oils. **By K. Kobayashi.** . . 52
Japanese Species of Juncaceæ. **By Prof. J. Matsumura.** 57
Plants Collected in Kyūshū. **By M. Shirai.** 59
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. **By K. Sawada.** 62
Notes on the Botanical Excursions to Enoshima and Hakone. **By A. Yasuda. and T. Ichimura.** 64
Generic Characters of Japanese Ferns. **By T. Makino.** 67
Botanical Excursions to Izu and Sagami. **By S. Matsuda and B. Yasui.** . . 70
Plants of Yaeyama and Adjacent Islands. **By Y. Tashiro.** 72
Aspidistra elatior, Blume. **By. A. Yasuda.** 75
Plants of Mt. Ena and Adjacent Mountains. **By T. Mori.** 79
Miscellaneous:—. 81

Short Notes.—Behaviour of the Nucleolus at the Nuclear Division —Action of Copper Salts on Roots.—Some Plants of the Botanic Garden at Koishikawa.—Miscellaneous Notes on the Plants of Yōjōsho-oku."—Leaves of Gramineæ.—Glaucosity of Leaves.—Heliotropism of Leaves.—Influence of Salts on Leaves.—"Umoregi."—Magnolia hypoleuca.—Late Anton Joseph Böhm—Proceedings of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

印刷所 東京熊田活版所

第三版 Plate III.



Chionanthus chinensis, Max.

植物學雜誌第八卷第八十五號

（明治二十七年三月二十日）

○松屬ノ植物ニ就キテ

齋田功太郎

松屬ハ松柏科ニ屬ス而シテ此屬ノ植物ハ常緑木本ニシテ嫩枝ハ初メ褐色鱗狀ノ始初葉ヲ生シ次ニ其葉腋ヨリ二箇乃至五箇ツヽ叢生スル緑色長針狀ノ尋常葉ヲ生シ花ハ單性ニシテ雌雄同株、雄蕊ハ二室ノ縱開葯、鱗狀ノ葯隔及極メテ短キ花絲ヲ有シ數箇集リテ穗狀ヲナシ雌蕊ハ鱗狀ニシテ其基脚ニ二箇ノ胚珠ヲ有シ數箇集リテ圓錐狀ヲナシ果實ハ毬果ニシテ二年ノ秋ニ至リ初メテ熟ス

本邦ニ於テ普通栽培シ幷ニ山野ニ自生スル松屬ノ植物ハ赤松（アカマツ）、黒松（クロマツ）、五鬚松（ゴエフマツ）及海松（テウセンマツ）ノ四種ナリトス而シテ其最簡單ナル區別ヲ左ニ掲ク

尋常葉ハ二箇ツヽ叢生ス　一
尋常葉ハ五箇ツヽ叢生ス　二

一　葉ノ樹脂道ハ緑色組織ノ外側ニ位ス　赤松
　　葉ノ樹脂道ハ緑色組織ノ內ニ位ス　黒松

二　葉ノ樹脂道ハ緑色組織ノ外側ニ位ス　五鬚松
　　葉ノ樹脂道ハ緑色組織ノ內ニ位ス　海松

松屬ノ植物ニ就キテ

○ヒトツバタゴノ說

白井光太郎

ヒトツバタゴハ慾齋翁ノ草木圖說木部ニ

ヒトツバタゴ

葉有柄楕圓稚木ニアツテハ細鋸齒アツテ互生シ老木ニ於テハ鋸齒殆ンド無キガ如ク往々對生ス三月新枝梢頭ニ細椏對生房様ヲナシテ花アリ本僅ニ筒様ニメ狹長四裂シ片々白色ナル細葉秦皮ノ花ト同フメ微大微紅暈アリ二雄蕋ソノ內ニ潛ミ葯暗紅ニメ黃粉ヲ吐キ子室柯子狀ニメ頭僅ニ延テ結頭アリ蕚鐘狀四裂ニメ尖ル又一種雄蕋ノミニメ子室ヲ不見モノ亦アリ」ト云ヒ

伊藤氏ノ多識會誌六堂木一名フタバノ木ノ條ニ

伊藤篤太郎曰　此木ハ原來本邦植物家ノヒトツバタゴト稱スル者ニシテ水谷豐文先生ノ物品識名拾遺ニ「ヒトツバタゴ秦皮一種葉ニ枝ナク一葉ノモノ」トアル即是ナリ我錦窠翁ノ說ニ「我徒此木ノ創見ハ今ヲ距ル七十餘年前水谷先生家兄大河內存眞等ト共ニ尾州二ノ宮山中採藥ノ際此木ノ多ク產スルヲ撿出シ水谷翁ソノ花ノ秦皮ノ花ニ似タルヲ以テ之ヲ劚リ來リテ各家園ニ移植セシニ此木ニ蟲白蠟ノ附スルヿ亦秦皮ト相似タルニヨリテヒトツバダゴノ新名ヲ附セラレシナリタゴハト子リコノ轉シ且訛ルナリ爾後又濃州付知村ニテモ之ヲ觀タリ」ト云ヘリ東京青山六道ノ辻ノ人家ニモ植ユ圓實ヲ結ブ秦皮ノ實ノ薄片ナルニ全ク異ナリ露人マキシモーヴヰッチ氏ハ此樹ニ命ズルニキオナンツス、シ子ンシス（Chionanthus chinensis, Maxim.）ノ新稱ヲ以テシ露國聖彼得堡府學士會院刊行生物學雜誌第九册三百九十三頁ニ揭載セリ同氏ノ說ニ據レバ支那及ビ日本ニ產ス或云臺灣ニモアリト而シテ同氏ハ未ダ其果實ヲ觀ズト謂ヘ

リ又此樹ハ英人リンドレー、パキストン兩氏ノオナンスレッサ（Chionanthus retusa, Lindl et Paxt）ト稱スルモノト同種ナリトノ說アリ今洋說ヲ按スルニ此樹ハ秦皮ト同類ニシテ共ニ木犀科ニ屬スベキモノナレバ從來用ユルトコロノヒトツバダゴノ名稱ヲ存スルモ亦可ナラン乎云云」

ト云フ所ノ植物ニシテ右伊藤氏ノ所說中ニアル東京青山六道辻ノ植物ハ今尙ホ青山練兵場ノ中央ヨリ少シク東南ニ偏リタル處ニアリテ旺ンニ生長シ年々梅雨ノ候ニ至リ白花ヲ開クコト宛モ雪ヲ被ムルガ如シ第三版ノ圖ハ予ガ曾テ同處ヨリ得タル花實ヲ備忘ノ爲ニ自寫セル頗ル不完全ナル者ニシテ敢テ讀者ニ示スニ足ラザレドモ花實ノ概形ヲ想見スル一助ニモト本誌ニ掲グルコトヽセリ

中山學圃氏ノ說ニ圖ニ示スガ如ク此ノ樹ハ大小二種ノ果實ヲ結ビ大ナル者ハ能ク發芽スレモ小ナル者ハ之ヲ播種スルモ發生スルコトナシト云フ此ト前記草木圖說トヲ合セ考フルトキハ此木ハ雄花、雌花、兩全花ノ三種ヲ開キ雌花ヨリ大實ヲ生シ兩全花ヨリ小實ヲ生スルニ非ザルカ余當時此等ノ諸說ヲ知ラズ漫ニ此圖ヲ作リシガ故ニ其詳細ヲ盡ス能ハズ本年亦此樹ノ開花近キニアレバ豫メ之ヲ同學ノ諸氏ニ報シ探究ノ結果ヲ聞カント欲スル也

圖解

(一)、小實ヲ着ケタル枝葉（自然大）　(二)、大實ヲ着ケタル枝（自然大）

(イ)果肉ノ膨滿セル狀　(ロ)果實乾縮セル狀

(三)、葉ノ脉狀　(四)、花

(五)、花筒ノ內面ヨリ雄蕋ヲ見ル　(六)、雌蕋及蕚（放大）

(七)、花ノ圖式　(八)、核及種子

○百花雜記

松村任三

一キフヂ一名マメフヂ漢名旌節花　枝上葉ニ先テ穗ヲナシ短梗、小黃花ヲ綴ル、內外八瓣アリ黃色、叉外ニ褐色ノ八瓣アリ其狀萼ノ如シ、八雄蕋アリ花瓣ヨリモ短ク其葯黃色ナリ、花心一雌蕋アリ其形德利ノ如シ子房上位、四室ヲ劃シ各〻多子ヲ藏ム旌節花科ニ屬ス

一サカキ和字榊、漢名楊桐　常綠木ナリ葉間梗ヲ抽キ花ヲ着ク俯シテ開ク白瓣、綠萼アリ各〻五、雄蕋アリ其數十三、葯頂綻ピテ花粉ヲ吐ク、花心一雌蕋アリ、子房圓ニシテ柱長ク雄蕋ノ外ニ抽ツ、其頭微ニ二裂ス、子房二室ヲ劃シ各〻數子ヲ藏ム山茶科ニ屬ス

一サルナシ一名シラクチ一名コクワ漢名獼猴桃　藤蔓長ク延キ葉腋梗ヲ抽テ白花ヲ開ク五瓣、五萼、多雄蕋、花心一雌蕋アリ、綠色卵圓ニシテ柱短ク其頭多裂、獼猴桃科ニ屬ス

一ツバキ漢名山茶　花外綠色ノ數瓣アリ其狀萼ノ如シ內ニ艷紅ノ五瓣アリ其本相合ス、多雄蕋、內者短、外者長、其本亦相合シテ筒狀ヲナス、中心一雌蕋アリ柱長ク延ビテ其頭微ニ三裂、子房ニ三室アリ、每室二子ヲ收ム山茶科ニ屬ス

一ヒサカキ漢名柃　凌冬不凋ノ灌木、雌雄ノ花、幹ヲ異ニス、葉腋二梗ヲ出シテ雄花ヲ開ク、五瓣、五萼、十三雄蕋アリ花開テ臭氣アリ山茶科ニ屬ス

一サザンクワ漢名茶梅　常綠木ナリ、花外綠色ノ瓣アリ其狀萼ニ似タリ、內ニ淡紅色ノ五瓣アリ頗ル潤ニシテ捲皺、多雄蕋アリ其本相合セズ中心一雌蕋アリ柱三裂、子房三室ヲ作シ各〻二子アリ山茶科ニ屬ス

一チヤ漢名茶　常綠ノ灌木、葉腋ニ五瓣ノ白花ヲ開ク點頭ス、綠萼圓、多雄蕋アリ其本相合セズ、一雌蕋ア

リ柱深ク三裂スレ𪜈子房ノ頭ニ達セズ三室アリ各〻一子ヲ收ム山茶科ニ屬ス

一キンシバイ漢名金絲梅　紅莖綠葉ヲ對生スルノ頭梗ヲ三叉シ中梗先ツ花ヲ開ク黃色五瓣頗ル美ナリ、多雄蕋アリ五束ヲナス黃色金絲ノ如シ、柱頭五裂、子房五室、各〻多子ヲ收ム、金絲桃科ニ屬ス

一ケイトウ漢名雞冠花　紅花萬簇、穗狀ヲナス、花蓋アリ五片紅色ニシテ尖、五雄蕋アリ之ト對生ス、紅色ノ花糸アリ本廣ク末狹シ、花心一雌蕋アリ亦紅色、柱長クシテ頭分レズ、子房一室多子、莧科ニ屬ス

一ツルソバ漢名赤地利　梢葉ノ間、梗ヲ分テ白花ヲ簇生ス花蓋五裂、瓣頂一缺アリ、雄蕋八莖、葯碧色、一雌蕋ニ三柱ヲ分ツ蓼科ニ屬ス

一スカンボ一名スイバ漢名酸模　雄花ト雌花ト別、雄花ニ內外六瓣ノ綠花蓋アリ六雄蕋ヲ護ス、雌花ニ綠色ノ花蓋六瓣アリ三瓣ハ離レ三瓣ハ三稜ノ雌蕋ヲ擁ス三柱頭アリ其形扁圓紅毛毿々頗美ナリ

一シロバナノラフバイ　植物園ニアリ、二月中旬葉ニ先テ花ヲ開ク、花形蠟梅ニ似テ內瓣黃白色、其數八九、大小均シカラズ、各〻短爪ヲ具ス、外瓣亦八九アリ長楕圓形ニシテ其色黃白、其外ニ褐色ノ鱗片十餘許アリ瓦敷、蕚狀ヲ呈ス然レ𪜈瓣蕚ノ間劃然境界ナシ、雄蕋七八條外ニ位シ假雄蕋十二條、內ニ位ス雌蕋十個アリ花軸內ニ潛ミ長柱纖細、軸外ニ出ツ子房ハ各〻一子ヲ收ム蠟梅科ニ屬ス

一フクジユサウ漢名側金盞花　三月上旬莖頭黃花ヲ開ク蕚五片アリ淡綠黃色ニシテ薄ク頭ニ缺鋸アリ花瓣十三許、蕚ト同形ニシテ稍長ク金黃色ナリ多雄蕋アリ葯黃色、多雌蕋アリ綠色ニシテ花心突出ノ一軸ニ密布ス短柱アリ外ニ鉤曲ス

○九州採集土産（承前）

白井光太郎

櫻島ノ植物

櫻島ハ海中ニ湧出セル火山ナレバ中央ニ御嶽高ク聳ヘ檑盆ヲ覆ヒタルガ如ク海岸迄裾ヲ引キ平地トテハ殆ンド無シト云フテ可ナリ地盤ハ燒石ヨリ成リ砂ノミニシテ土ナシ山ノ裾ヲ廻リテ村アリ就中古里、有村、黒神ノ三處ニハ海岸ニ温泉ノ出ツル處アリテ浴場ヲ設ケ入浴ニ便セリ搆造極メテ粗末ニシテ波打際ノ上ニ湯壺ヲ堀リ茅屋根ヲ覆ヒ雨露ヲ防グニ過キズ湯ハ赤銹ヲ浮ベ一浴スレハ手拭忽チ赤色ニ變ズ温度ハ可成高シ鹿兒島ノ士民避暑ノ爲ニ來リテ多ク滯留セリ有村ニハ旅店一軒アリ古里ニハ別ニ旅店ナシ黒神ハ巡遊セザレバ如何ナルヤ知ラズ

櫻島ハ大根ノ名所ナレドモ余輩ノ至リシ頃ハ時節後レタレバ見ルヲ得ザリシ此頃ハ甘蔗ヲ多ク栽培セリ島中所々ニテあこうノ木ヲ見ル始メテ上陸セル湯野村停船場ノ前面ニ一大木アリ古里村浴場ノ傍ニモ大樹アリ其他有村ノ近傍所々ニ此木多シあこうの木ハ高キ枝ヨリ氣根ヲ下シ印度ノ「バンヤンツリー」ノ如キ形狀ヲナスモノト思ヒ居タルハ想像ノ誤リニテ此木ノ氣根ハ本幹ニ沿フテ下行シ多クハ分岐シ網狀ヲナシ成長スルニ過キズシテいてふノ乳枝ノ如ク幹ヲ離レテ成長スルモノナシ其根始メハ白色纖細ニ〆糸ノ如キモ漸々成長シ變色シ木質トナルガ如シ

予ハ旅行前ヨリ櫻島ニハ一種ほろ／＼の木ト稱スル異木アルヲ聞キ居タレバ上陸スルヤ先ツ第一ニ此木ヲ採取センモノト土人ニモ問ヒ自己モ及ブ丈ケ注意シテ探索シタレドモ之ヲ得ル能ハズ空シク同島ヲ去リシハ實ニ遺憾ノ至ナリほろ／＼の木ヲ櫻島ノ方言ニテシトタコト云フ由兼テ聞キ居タレバ此名ヲ云ヒテ土人ニ問フ

モシトタコナド曰フハ聞キタルコトナシト云ヒテ更ニ是ヲ知ルモノナシ予ガ探索ノ不充分ナリシニヤ將タ傳聞ノ誤ニテ此島ニハ元ヨリ此木ナキニヤ識者ノ教示ヲ仰キタキナリ人家近傍ニテ見タル樹木ノ二三ヲ記セバ

ヤマモヽ　アラカシ　タラノキ
キツタ　ビナンカヅラ　フシノキ
カンコノキ　ハゼ　ムラサキシキミ
アカメガシハ　ネムノキ　ノリノキ
トビラ、　クヌキ　ギヤウジヤノミヅ
ニンドウ　ハマクサギ　ヤシヤブシ
クサキ　オホバイボタ　イヌサンシヨ
フヂウツギ一種圓莖ノ者　アキグミ　ウツギ
エビヅル

御嶽ハ上リ三里下リ一里ト稱ス二十二日朝ヨリ案內ヲ雇ヒテ登山ス山ニハ木いちごノいばらノ類繁茂シ大木ヲ見ズ中央以下ノ道ハ山ヲ掘リ窪メ人ノ丈ヨリ深クナシ其間ヲ通行スル樣ニセリ中央以上ハ荊棘途ヲ塞キ殆ンド通リ難シ兩手ニテいばらヲ搔キ分ケ搔キ分ケテ上リ行クナリ辛フジテ山巓ニ達スレバ頂上ニ大ナル窪處アリ此穴ハ古代ノ噴火坑ト見ヘ埋リテ底淺シ其傍ニ近代ノ噴火坑アリ坑口馬蹄狀ヲナシ底ハ漏斗ノ如ク尖リ甚深シ坑底及側壁ノ處々ニ罅隙アリテ今尙ホ其處ヨリ白煙ヲ噴出シツヽアリ坑ノ口ニ腹這ヒテ其底ヲ望ムニ

恐シサ言ハン方ナシ坑口ノ邊ノ地上ヲ見ルニ苔蘚ノ間ニもうせんごけ、なんばんぎせる、いたどり、やしやぶし、こをとぎりさう？一種ノにんどん、一種ノすげ等ヲ生セリ

琉球人のかうがい

此木ハ薩摩國給黎郡喜入村及前ノ濱村ノ中河流ノ海水ニ注グ出口ノ淺渚ノ處ニはまぼうはまでう等ト伍ヲナシテ蕃生ス低潮ノ時ハ其根水上ニ出テ滿潮ノ時ハ水中ニ沒ス枝根ハ水際ヨリたこのきノ根ノ如ク叢生シ地中ニ入リ氣根狀ヲナセリ然レ𪜈此根ハ後ニ至リ發生セル者ニアラズシテ成長ノ後漸次ニ水ノ爲ニ土ヲ洗ヒ去ラレ露出セル者ニ外ナラザルガ如シ予輩ノ至リシ頃ハ方ニ開花中ニテ白花枝ニ滿テリ子實ヲ索メタレ𪜈枝上ニハ唯一箇前年ノ者ノ脫落セズシテ附着スルヲ見タルノミナリ根邊ノ水中ニハ前年ノ子實多ク流レ寄リ棍棒狀ノ幼根頭ヨリ細根ヲ池中ニ下シタル者及已ニ生長シテ小木ヲナシタル者抔アリ子實ノ形ハ棍棒狀ヲナシ人血ヲ多ク吸ヒタル水蛭ノ狀ノ如シ大島ノ方言ニヒロキノ名アルハ子實ノ形似ニ取リタルコト疑フ可カラズ田村藍水氏ノ琉球產物表ニ大蛭木ト記スル者是ナリ喜入村ニテハ琉球人のかうがいト呼ベリ羅丁名ハ Kandelia Rheldei ナリ此木ノ圖說ハ曾テ本紙三十三號齋田氏ノ圖說アリ參考スベシ

（未完）

○日本藥局方植物篇　（前續ノ號キ）

澤田駒次郎

第二　有加里油　Oleum Eucalypti.

有加里油ハ本植物及ヒ他ノ有加里屬植物ノ生葉ヨリ蒸餾シ得タル揮發油ニシテ日本藥局方ニハ藥用トス

本品ハ專ラ濠洲ニ於テ製造ス

性狀　有加里油ハ無色澄明或ハ淡黄色稀薄ノ液ヲ爲シ特異樟腦樣ノ香氣ヲ有シ中性ノ反應ヲ徵シ分極光線ノ平面ヲ右旋シ大氣ニ接觸スレバ漸次褐色ニ變シ其一部分ハ脂化ス比重〇、九〇〇乃至〇、九五沸騰ハ百三十度ヨリ二百度ニ至ル

本品ハ沃度ニ逢フモ爆噴セス酒精ニハ隨意ノ比例ニ於テ混和スル等ヲ以テ特異ナル性徵トス又久シク貯藏スルトキハ濃稠ト爲リ稍々濃色ヲ呈スト云フ

成分　Cloëz 氏ノ説ニ據レバ有加里油ハ主トシテ有加里布丟兒ノ抱合物ヨリ成ル此抱合物ハ百七十八度ニテ沸騰シ燐酸ノ作用ニ因リ二種ノ炭化水素ヲ生ス其一ハ Eucalypten ト云ヒ百六十五度ニテ沸騰シ一ハ Eucalyptolen ト稱シ三百度ニテ沸騰ス此二種ノ炭化水素ハ $C_{12}H_{18}$ ナル記號ヲ有スト又 Fanst, Homeyer 兩氏ハ的列並底六十「ペルセント」ヲ得 Cymol 氏ハ三十「ペルセント」ヲ得タリ此的列並底 (Terpene) ハ $C_{10}H_{16}$ ナル記號ヲ有シ百七十二度乃至百七十五度ニテ沸騰ス但シ Cymol 氏ノ説ニ從ヘバ其記號ヲ $C_{10}H_{14}$ トス其他百五十度ニテ沸騰スル一種ノ的列並底ヲ有スト日本藥局方注解ニ云主トシテ Eucalyptol ($C_{12}H_{18}O$) ヨリ成リ少量ノ「テルペン」ヲ傍有スト

製劑　有加里丁幾

有加里丁幾ハ改正日本藥局方ニハ刪除ス舊日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

有加利布丟斯丁幾丟兒ハ

新タニ乾燥シ搗碎セル有加利布丟斯	一分
稀酒精	五分

ヲ取リ五日間冷浸シ壓搾シ濾過シ製スヘシ

本品ハ澄明帶褐色ノ液ナリ

生理的作用　動物

有加里葉ハ醱酵及ヒ腐敗ヲ抑制スル性ヲ有スルコト稍々規尼涅ヨリ强シトス

有加里葉及ヒ有加里油ヲ動物ニ與フレバ全身ヲ刺衝ス過量ニ用フルトキハ神經ノ官能ヲ痿痺シ呼吸不整ト爲リ中絶シ心臟ノ需動停止スル前既ニ休止スト又 Siegen 氏ノ說ニ據レバ有加里油ノ體温ヲ減退スルコト規尼涅ヨリ著シク嘗テ此油二十瓦ヲ家兎ニ與ヘシニ體温ヲ減スルコト華氏ノ三度ニ及フト又家兎ニ有加利葉ノ多量ヲ與フレバ諸運動筋ヲ弛緩反射機能ヲ減退シ呼吸緩弱不整ト爲リ痙攣或ハ呼吸窒息シテ斃ル又有加里葉酒精丁幾ヲ狗ニ皮下注射シタル后チ解剖シテ之ヲ檢視スレハ規尼涅ヲ用ヒシ如ク脾臟萎縮スルヲ認ム又三十瓦ヲ狗ニ與フレバ酩酊ノ狀ヲ現ハシ瞳孔散大スト云フ一千八百八十年ニ於テ Bernard Berens 氏ハ有加里油ヲ蛙ニ試ミ其成蹟ニ因リ次ノ決定ヲ爲セリ

第一　有加里油ハ初メ呼吸ノ數ヲ增進スト雖モ漸次緩慢ト爲リ其數ヲ減退シ終ニ斃死ス

第二　痙攣ヲ發スルコト無シ

第三　諸筋及ヒ背髓ヲ刺衝シテ衰弱ヲ來タス

第四　全身ノ衰弱ヲ來タシ諸筋ノ彈力機能ヲ停止ス

第五　局所ニ外敷シ或ハ內服スレバ諸筋ノ收縮力ヲ減シ或ハ之ヲ停止ス

第六　神經ニハ著シキ感覺ヲ現ハスコト無シ

第七　少量ニ用フレバ血液ノ壓迫ヲ增進シ脉搏ヲ弛緩ナラシム

第八　大量ニ用フレハ血液ノ壓迫ヲ減退シ脉搏初メ頻煩ナラシム過量ニ在テハ脉搏直チニ緩慢ト爲レリ

第九　體温ヲ減少ス

第十　瞳孔ニ變狀ナシ

第十一　肺臟、皮膚及ヒ腎臟ヨリ該油ヲ蒸散ス

健　體

有加里油ヲ內服スルトキハ喉頭及ヒ胃部ヲ温和ナラシメ流涎ヲ生シ噯氣ヲ發スト雖𪜈十五氏乃至二十氏ノ小量ニ在テハ速カニ復常ス此油ハ頭腦及ヒ脉管ヲ刺衝シ肺臟ヨリ蒸散スルモノヽ如シ過量若クハ丁幾劑ヲ用フルニアラザレバ尿液中ニ其臭氣ヲ有スルコト無シト又 Guibert 氏ノ說ニ據レハ多量ノ尿素ヲ分泌スト

有加里油ハ毛細管ヲ膨脹シ血液ノ循環ヲ旺盛ナラシムルニ因リ脉搏ノ數モ亦增進ス Siegen 氏ハ有加里油百二十滴ヲ用ヒ體温殆ンド一度ヲ減少スト或云此油二十滴ヲ用ヒテ全軀ヲ興奮シ身體輕捷、精神活潑、心部爽快ト爲リ運動力ヲ興起シ食ヲ增シ身體ヲ强壯ナラシムルノ効アリ過量ニ用フレハ諸筋麻痺スト雖𪜈衰弱スルコト無シト云フ

（以下次號）

八重山列島各屬島ノ植物（前號ノ續キ）

田代安定

○第三十五　櫻草科 Primulaceæ.

(八十五) Lysimachia lineariloba, Hook. et Arn.　日本名　ハマボッス

(八十六) Anagallis arvensis, L.

日本名　ルリハコベ

○第三十六　紫金牛科　Myrsineæ

(八十七)　Ardisia formosana, Rorf.

日本名　モクタチバナ

○第三十七　山欖科　Sapotaceæ

(八十八)　Sideroxylon ferrugineum, Hook. et Arn.

日本名　アカテツ

○第三十八　夾竹桃科　Apocyneæ

(八十九)　Cerbera odollum, Gaertn.

日本名　アマミケウチクトウ田代新名

能ク海岸ニ生スル熱帶地方喬木中ノ一ニシテ幹圍三四尺ニ達ス此植物ノ記說ハ先年來既ニ數回本會雜誌ニ揭載セシヲ以テ今回ハ省略ス

○第三十九　白前科　Asclepiadeæ

(九十)　Tylophora Tanakæ, Max.

日本名　ツルモウリンクハ

(九十一)　未詳

日本名　ハテルマカモメヅル田代新名

○第四十　紫草科

(九十二)　Tournefortia argentea, L.

日本名　モンパノキ田代新名

(九十三)　Cynoglossum micranthum, Desf.

日本名　シマスナビキサウ田代新名

○第四十一　旋花科　Convolvulaceæ.

(九十四)　Calystegia soldanella, R. Br.

日本名　ハマヒルガホ

(九十五)　Ipomoea biloba, Forsk.

日本名　グンバイヒルガホ

(九十六)　Dichondra repens, Forst.

日本名　アフヒゴケ

○第四十二　茄科　Solaneæ

(九十七)　Solanum biflorum, Lour.

日本名　メジロホヽヅキ

○第四十三　玄參科　Scrophularineæ.

（九十八） Veronica murorum, Max.

日本名 イシガキクハガタ

○第四十四 芳莨科 Acanthaceæ.

（九十九） Justicia procumbens, L. ?

日本名 キツネノマゴ

（百） Codonacanthus pauciflorus, Max.

日本名 アリモリサウ（田代新名）

○第四十五 馬鞭草科 Verbenaceæ.

（百一） Lippia nodiflora, Michx.

日本名 イハダレサウ

（百二） Vitex trifolia, L.

日本名 ハマゴウ

（百三） Premna glabra, A. Gr.

日本名 トウクサキ

灌木ニシテ枝條長ク延出シ半藤狀ヲ爲ス葉稍圓軟薄ニシテ輝光アリ全邊ニシテ長サ三四寸幅二三寸花半穗狀ニ着キ瓣淡綠白色ニシテ五出シ直ニ一二分五出蕚爪狀五尖起ヲ爲ス

（百四） Callicarpa japonica, Th.

日本名 ヤブムラサキ

○第四十六 唇形花科 Labiateæ

（百五） Scutellaria indica, L.

日本名 シソバタツナミ

（百六） Leucas mollissimæ, Wall.

日本名 ヤンバルツルハクカ

江ノ島箱根地方植物採集記行 （承前）

安田篤
市村塘

廿七日拂曉初雪降リ積ルヿ五分許寒キヲ厭ハス昨日採集セシ海藻ヲ腊ス十一時二十分午飯ヲ喫シ旅裝ヲ整ヘ

塔ノ澤ニ向フ片瀨ヨリ藤澤ニ至ルノ間共有荷物ハ腕車ニ載セ衆其前後ニ徙歩ス或ハ博士ニ植物ノ學名ヲ聞クアリ或ハ圃老ニ桑株ノ不定芽ノ今年生ナルカ將タ昨年生ナルカヲ問フアリ十二時四十五分藤澤ニ達シ滊車ノ來ル猶三十分早シ、乃チ待合室ノ内外ヲ漫歩逍遙ス端ナク茲ニ此室ノ玄關前ニ敷キ詰メタル切株ニ就テ一場ノ議論起レリ甲ハ以テ松材トナシ乙ハ以テ杉材トナシ丙ハ以テ檜材トナシ其孰カ是ナルヲ知ラス博士曰ク松杉檜各特徴アリ其 Section ヲ顯微鏡下ニ窺ヘハ一目瞭然其何タルヲ知ルヘシト藤井君透カサズ小刀ヲ取出シ其微片ヲ切リ採集匣ニ藏ム、一時十九分藤澤ヲ發シ同四十分平塚ニ至リ二時大磯ニ赴キ同十五分國府津ニ着ス之ヨリ鐵道馬車ニ乘ル途次酒勾橋ヨリ酒勾川ヲ臨ム其川幅頗ル廣ク川ハ殆ト河原ニシテ唯諸處ニ水流ノ潺々タルヲ見ルノミ橋上ヨリ函嶺ヲ臨メハ白帽ヲ戴キ宛然「此寒氣ヲ意トセズ來テ我植物ヲ採集シ以ヲ撿究ノ材料ニ供セントス嗟卿等亦元氣ノ輩ナリ」ト語ラントスルモノノ如シ實ニ遠望ノ絶佳ナル左右ノ廣濶ナル自ラ神氣ヲ壯爽ナラシメタリ三時半小田原ニ着シ四時頃塔ノ澤ニ達シ洗心樓玉ノ湯ニ投宿ス氣候ハ華氏四十六度ニ降ルヲ以テ時節柄不相應ニ寒冷ヲ覺ユ乃チ癒勞ノ爲メ直チニ入浴ス温泉湯槽ノ一偶ヨリ流々湧出シ清潔ニシテ一點ノ濁ナシ食後藤澤問題ヲ確メン爲メ夫ノ木片ヲ切リテ顯微鏡下ニ窺フ木質 tracheid ニシテ脂道アリ因テ杉箸ノ薄片ト比較スルニ脂道ノ模樣等毫モ其異ナル點ヲ見ズ尚松板ノ薄片ヲモ造リ比較スルニ自ラ差違アリ由テ之ヲ博士ニ謀ル博士曰ク明ラカニ杉材ナリト茲ニ於テカ疑團氷解得色、失色、一坐洪然更深ナルニ從ヒ只飜書ノ音ト學論ヲ戰ハス聲ノミ高シ

廿八日早朝降雨ノ音囂々頻リニ余等ガ鼓膜ヲ擊ツ乃チ一驚ヲ喫シ衾ヲ蹴テ立チ窓戸ヲ推シ天ヲ仰ゲバ朝陽漸ク山頂ヲ照シ碧空萬里片雲ノ蟠ルナシ、知ル本日天氣快晴ノ疑ナキヲ、此半信半疑ノ際ニ當リ伏テ川流ノ逆奔

スルヲ見テ始メテ彼ノ囂々ノ音ハ其實降雨ニアラザルヲ悟レリ釣橋ヲ渡リ對側ニ至レバ山裾直立數千尺峻急タル絶壁ヲナス其基脚ニ温泉湧出シ傍邊淨水瀧ヲナシテ墜落ス實ニ夏日納涼ノ好地タリ山ニハ階段ヲ設ケ迂廻シテ巓頂ニ昇攀シ得ベシ此邊大ニ羊齒類ニ富ム其主ナルモノハ左ノ如シ

こもちしだ (Woodwardia orientalis)
ゐのもとさう (Pteris serrulata.)
はこねしだ又はこねさう (Adiantum monoclamys)
ゐので (Aspidium aculeatum)
やぶそでつ (Aspidium falcatum)
いたちしだ (Aspidium varium)
みぞしだ (Asplenium Japonicum)等

其他 Polyporus sp. Selaginella Hepaticeæ, Musci; 數種ヲ採集ス、直ニ菌類蘚苔類羊齒類ニ就テ顯微鏡的解剖實驗ヲ始ム、松村博士ハ勿論藤井學士ノ教示大ニ余等ノ疑惑ヲ解ク、晝飯後木賀宮城野邊植物採集ノ爲メ準備ヲ凝シテ旅宿ヲ出ヅ行路漸ク高ク山腹ヲ卷キ左ハ峭壁屛風ノ如ク右ハ深谷幽々トシテ溪流潺々其底ヲ流ル是ゾ獅子ガ其幼兒ノ力量ヲ欲スル好適地ナルベシ進行ノ間、崖壁ニ多ク Lichens 附着スルヲ視ル乃チ爭テ其異種ヲ集メ餘スヿナシ時ニ陰雲日光ヲ鎖シ將ニ雨降ラントス吾人ノ勇氣ヲ殺グ夥シ然リト雖モ降雨ノ爲メニ豈ニ空シク半途ニシテ歸ヘルニ忍ンヤ奮テ山中ノ小徑ヲ探リ深林淺濕ノ地ヲ跋渉ス至ル處ニ Geaster ノ並列スルヲ見ル此森ニハイヌツゲ、ヤシヤ、ハンノキ多ク、之ニテイカカヅラ、イタビカヅラ等纏綣ス、羊齒類モ

亦少ナカラズ

おほばのゐのもとさう (Pteris cretica. L.)
こがねわらび (Aspidium viridescens, Miq.)
じうもんじしだ (Aspidium tripteron, Kze)
みつでうらぼし (Polypodium hastatum, Thunb.)
くまわらび (Aspidium lacerun, Sw)
べにしだ (Aspidium erythrosorum, Eax.)
ほしだ (Aspidium sophoroides, Sw.) 等

途次余等博士ニ井ノモトサウトオホバノ井ノモトサウノ著シキ區別、クマワラビトイタチシダノ明カナル差違ヲ聞クヲ得タリ行クヿ一里半小雨降ル然レ𪜈天公ノ渥惠ナル忽チ黒雲ヲ排シテ日輝ヲ漏ス是ニ於テ勇躍措ク能ハズ尋テ本道ニ出ヅ此時ヤ殘雪ノ溶融益々盛ニシテ泥土濘濼歩行頗ル難シ偶〻路傍ノ石碑ヲ見ル刻ムハ是「われを見よ深山ニ花ぞ咲きにける眞心起せ人知らずとも」の一句ナリ以テ春期開花ノ光景ヲ察スベシ是レヨリ先ハ行路新道ニシテ私開墾ニ係ル因テ踏地料ヲ要ス樵夫數名アリ一心不亂ニ松杉ノ良材ヲ挽ク略數十幹其側ニ積メリコノ横斷面ヲ見ルニアカミ (Komholz) トシラタ (splintholz) ノ境界一目瞭然タリ試ニ其年輪ヲ數フルニ皆數十年ヲ經タルモノナリキ博士曰ク輪數ハ必ズシモ生活年數ト一致セズ時ニ外界ノ事情ニ由リ稀ニ一年ニ二輪ヲ生スルヿ亦ナキニシモアラズト已ニシテ宮ノ下ニ着ス此地湯本ヲ去ルヿ一里廿一町四十六間ナリト云フ

前號 Phacelocarpus ヲ「ひらめくさ」ト譯セシハ誤ニシテ「ひらめくさ」ハ Gelidium subcostatum, Okamura. ト云フ別種ナリ又 Halymenia formosa, Harv. ノ終ニ？ヲ脱落シタルヲ以テ茲ニ正誤ス

○富山縣新庄邊ノ植物

日野五七郎

余ハ夏期ヨリ秋期ニ至ルノ際我ガ町村近傍ヲ散歩シツヽ目撃シタル開花植物ヲ採取ス此ノ記載中漏洩ノ者ハ他日ヲ待ツテ補遺セントス

第一回

毛莨科

(1) センニンサウ Clematis paniculata. Thunb.
(2) ホタンヅル ,, apiifolia. DC.
(3) シウメイギク Anemone Japonica, Sieb et Zucc.
(4) キンパウゲ Ranunculus acris, L.
(5) キツネノボタン ,, ternatus, Thunb.
(6) タガラシ ,, sceleratus, L.
(7) カブトハナ Aconitum Fischeri, Reich.
(8) ムラサキヲダマキ Aquilegia atropurpurea, Willd.
(9) ハナヅル Aconitum uncinatum, L. var. Japonica.

蠟梅科

(10) ラフバイ Chimonanthus fragrans, Lindl.

木蘭科

(11) シキミ Illicium religiosum, Sieb. et Zucc.

罌粟科

(12) ケシ Papver Somniferum, L.
(13) タケニグサ Bocconia cordata. Willd.
(14) クサノワウ Chelidonium majus, L.

十字科

(15)	ナヅナ	Capsella Bursa-pastoris, Moench.
(16)	カブラ	Brassica campestris, L.
(17)	ナタチナ	,, chinensis, L.
(18)	ダイコン	Raphanus sativus, L.
(19)	タネツケバナ	Cardamine sylvatica, Link
(20)	カラシナ	Sinapis cernua, Thunb.

菫菜科

(21)	スミレ	Viola Patrinii, DC. var chinensis, Ging.

石竹科

(22)	カハラナデシコ	Dianthus superbus, L.
(23)	カラナデシコ	,, chinensis, L.
(24)	ムシトリナデシコ	Silene Armeria, L.
(25)	ハコベ	Stellaria media, Vill.
(26)	ムギナデシコ	Lychnis Githago, Lam.
(27)	オホヤマフスマ	Arenaria lateriflora, L.

睡蓮科

(28)	カハホ子	Nuphar japonicum, DC.

馬齒莧科

(29)	マツバボタン	Portulaca grandiflora, Hook.

厚皮香科

(30)	サカキ	Cleyera japonica, Thunb.
(31)	ヒサカキ	Eurya japonica, Thunb,
(32)	ツバキ	Camellia japonica, L.
(33)	ササンクワ	,, Sasanqua, Thunb.
(34)	チヤ	,, Theifera, Griff.

金絲桃科

(35)	キンシバイ	Hypericum patulum, Thunb.

酢漿科

(36)	カタバミ	Oxalis corniculata, L.

牻牛兒科

(37)	ゲンノシヤウコ	Geranium nepalense, Sweet.

風露草科

(38) ノウゼンハレン Tropaeolum majus, L.
(39) ホウセンクワ Impatiens Balsamina, L.

芸香科

(40) サンセウ Zanthoxylum piperitum, DC.

楝科

(41) センダン Melia azedarach. L. var. subtripinnata. Miq.

冬青科

(42) ウメモドキ Ilex Sieboldi, Miq.

衛矛科

(43) ニシキギ Euonymus alatus, Thunb.
(44) コマユミ ,, alatus, Thunb. var. subtriflora, Fr et Sav.

葡萄科

(45) ノブダウ Vitis hetelophylla, Thunb.
(46) ツタ ,, inconstans, Miq.

無患樹科

(47) フウセンカヅラ Cardiospermum Halicacabum, L.
(48) ムクロジ Sapindus Mukorosi, Gaertn.
(49) モミヂ Acer palmatum, Thunb.
(50) ハウチハカヘデ ,, japonicum, Thnnb.
(51) ミツバウツギ Staphylea Bumalda, Sieb, et Zucc

漆樹科

(52) ハゼノキ Rhus succedanea, L.
(53) ツタウルシ ,, Toxicodendron, L. var radicans, Miq.

（未完）

◎雑　録

○植物雑俎

松村任三

○胚珠ニ皮ナキ植物アリ曰ク檀香科（ビヤクダン）曰ク蛇菰科（ツチヤマモチ）

○胚珠其形ヲ成サヽルモノアリ曰ク槲寄生科（ヤドリキ）

○胚ニ子葉ナキモノアリ曰ク蛇菰科

○槲寄生ノ胚嚢ハ子房ノ組織ニ埋没ス故ニ胚珠ナシ

○海藻ハ支那音 hai-tsao.（ハイツワオ） 學名 Sargassum siliquastrum.

○香蕈ハ Hiang-sin（ヒヤンシン） 學名 Agaricus Bretschneideri.

○爾雅注琉ノ榹桃山桃ハ一説ニ曰ク Persica Davidiana *Carr.*

○顯理曰ク杜仲ハ Eucommia ulmoides *Oliv.* 大戟科ノ大木、木皮ヲ生藥トス

○又曰ク

黄芪ハ Astragalus Henryi *Oliv.*

○黄連ハ Coptis teeta *Wall.* 胡黄連ハ Picrorrhiza Kurroa *Royle.*

○牙皂ハ Gleditschia officinalis *Hemsl.* 肥皂ハ Gymnocladus chinensis *Baillon.*

○黨參ハ Codonopsis Tangshen *Oliv.* 清國湖北ニ產ス

○藁本ハ Ligusticum sinense *Oliv.* 一説ニ曰ク川芎モ同物

○烏藥ハ Lindera strychnifolia *Vill.*

○鈎藤ハ一名米鈎ハ Nauclea sinensis *Oliv.*

○當歸ハ Angelica polymorpha *Mx.* var. sinensis *Oliv.*

○川貝ハ Fritillaria Roylei *Hook.*

○欵冬花ハ Tussilago Farfarea *L.*

Tilia Miqueliana *Mx.* ハ和名ボダイジユ清國之ヲ椴樹トイフ

菩提樹ハ梵語ニ Bodhidruma トイフ學名 Ficus religiosa 無花果ノ屬

Carpinus cordata *Bl.* ハ和名サハシバ常陸方言イシゾネ清國之ヲ鵞耳櫪トイフ

Carpinus laxiflora *Bl.*和名アカシデ一名コシデ野州方言ホンソネ清名見風乾

清國湖北クスノハカヘデヲ見風乾ト呼ブ

クスノハカヘデハ琉球ノ產、葉ハ樟（クス）、子ハ槭（モミヂ）學名Acer oblongum *Wall.*

Cornus macrophylla *Wall.* 和名ミヅキ上、野ノ方言ミヅクサ清名涼子木一名燈臺樹

Stewartia monadelpha *S.Z.*和名ヒメシヤラ花戶ニ赤梅檀ト曰ヒ清國ニ馬榴光ト曰フ

梓ハ Lindera Tzumu *Hemsl.* ハ支那ノ湖北山中ニ生シ楸ハ Catalpa Kaempferi *S.Z.*宜昌ニ生ス

一種Catalpa Bungei *G. T. Mey.*アリ亦楸

支那ニブナノキアリ米心樹ト曰フ一名米心椆學名Fagussylvatica *L.* var. longipes *Oliv.*

椆ハ皇國ノシラガシ東京マルバガシ愛知クマガシ筑前學名Quercus glauca *Th.*鐵椆ト曰ヒ寳椆ト曰フ

檀ハ Dalbergia hupeana *Hance.*清國湖北ニ產ス荳科ニ屬ス

櫻（サクラ）ハ支那ニ Ying-tao（櫻桃）ト曰フ Prunus pseudocerasus *Lindl* ナリ

エイシタウ「野櫻桃」アリ、マウインタウ「毛櫻桃」アリ曰ク Prunus Maximowiczii *Rupr.* 曰ク Prunus hirtipes *Hemsl.*

クタウツ（苦桃子）ハ「ミヤマイヌザクラ」Prunus Ssiori *Fr. Schm.* ナリ

○ウリカヘデ Acer crataegifolium 日光ニ「イヽヅ㋕」ト曰ヒ常陸ニ「イヽヅ㋗」ト曰フ

○ハリギリ Acanthopanax ricinifolium 北海道之ヲ「セ(ン)ノキ」ト曰ヒ仙臺之ヲ「セ㋨キ」ト曰ヒ日光之ヲ「セ㋦キ」ト曰フ

タラノキ Aralia spinosa 北海道タラボ常陸タラボウ仙臺タラボ丹波タラウ筑前ダラノキ

紫珠（ミムラサキ）秩父ニ「ナマイ」トイヒ日光ニ「ナンメイラ」トイフ

粗榧（イヌガヤ）北海道ニ「ヒヨウブ」トイヒ常陸ニ「ヒユウブ」トイフ

羊婆奶（ヤマバツシ）秩父及日光ニ「ヤマグハ」トイヒ常陸ニ「ヤマンガ」トイフ

アワブキ Meliosma myriantha 秩父アワブクダラシ日光アブクダラシ

荏（エゴマ）仙臺ニテ「ジウネン」常陸ニテ「ジウネ」

紫花地丁（スミレ）仙臺ニテ「カゲピキバナ」常陸ニテ「カゲッピキ」

イヌツゲ Ilex crenata 筑前ニ「ビンカヾリ」トイヒ箱根ニ「ビンカ」トイフ

○「ソロ」ハ「ソネ」トイヒ「ソノ」トイフ東京ニアリ高尾山ニアリ筑波山ニアリ日光ニアリ鹽原ニアリ鎌倉ニアリ富士ニアリ

○東京近傍山野ノ樹木五十五六種日光山ノ樹木二百十二三種

○東京山野ノ樹早ク花ヲ開クモノハンノキ晩ク花ヲ開クモノシロダモ、ハンノキハ一月下旬シロダモハ十一月中旬

○東京ノ植物一月上旬ヨリ三月下旬ニ至リ黃花ヲ開クモノ二十一種

○東京植物中衆ニ先テ花ヲ開クモノ曰ラフバイ曰ハンノキ曰イヌノフグリ曰ヤマネコノメサウ曰ナヅナ曰タンポヽ曰タチツケバナ

○東京ノ植物中衆ニ遲クレテ花ヲ開クモノ曰ヤマシロギク曰アブラギク曰ラツキヤウ曰ナハシログミ曰ヤツデ曰ツハブキ

○エンコウサウ、キンバイサウ、セツブンサウ、毛莨科ノ品、莖ノ組織ニスクレンキマナシ

○クロタネサウ、ヒメウヅ、ワウレン、ルヰエフシヨウマ毛莨科ノ品、莖ノ組織ニフクレンキマアリ

○丹鉛續錄或問、花蔕何以曰㆑跗、曰、蔕者花足也、故字從㆑足

○物理論菽者、衆豆之總名

○廣雅豆角、謂㆓之莢㆒

○毛詩注灌木者、叢生之木也

○楚辭大招注五穀、稻、稷、麥、豆、麻

○蜀都雜鈔棗、杏等、謂㆓之核果㆒、梨、柰等、謂㆓之膚果㆒、椰子、胡桃等、謂㆓之殼果㆒、松子、柏仁等、謂㆓之檜果㆒、大小豆等、謂㆓之角果㆒

○檉柳（ギヨリウ）、寬保年間支那ヨリ渡來

○楓（フウ）、享保年中漢種ヲ移ス

○天台烏藥、享保年中漢土ヨリ移ス

○衡州烏藥、享保年中漢土ヨリ移ス

○オホヤマレンゲ或云、延寶年中唐土ヨリ渡ルト

○南瓜（タウナス）、慶長、元和年中、又延寶、天和年中舶來

○草綿（ワタ）、永錄、天正ノ間、又文錄年中、舶來

○タウワタ天保十三年ノ頃舶來

○タウラフパイ享保年中舶來

○蠟梅、後水尾帝ノ時、朝鮮ヨリ來ル

○苜蓿、享保年中舶來

○老鎗穀、文政十二年舶來

○烏木（コクタン）十一種曰 Diospyros Ebenaster. 曰 D. Ebenum. 曰 D. melanoxylon. 曰 D. montana. 曰 D. peregrina. 曰 D. ramiflora. 曰 D. silvatica. 曰 D. Tupra. 曰 D. hirsuta. 曰 D. multiflora. 曰 D. pilosanthera

○松柏材中脂道アリ肉眼能ク之ヲ認ムルモノ曰アカマツ曰クロマツ曰ゴエフマツ曰ヒメコマツ曰テウセンマツ曰ハヒマツ

○松柏材中脂道アリ肉眼能ク之ヲ認メサルモノ曰イラモミ曰トウヒ曰マツハダ曰シラビ曰モミ曰フジマツ

○松柏材脂道ナキモノヒノキ曰サハラ曰ヒバ曰ツガ曰イテウ曰マキ曰スギ曰カヤ曰ムロ曰ネズコ曰イチヰ曰

カウヤマキ曰キヤラボク曰ナギ曰コメツガ曰イプキ曰アチボウ曰カウエフサン曰シマムロ

Ajuga boninsimae *Max.* シマカコサウ島夏枯草ニ作ル無人島ニ産ス

Gahnia boninsimae *Max.* クロガヤ莎草科ノ大草、無人島ニ産ス

Glaux maritima *L.* シホマツバ是櫻草科ノ小草 Helianthus argophyllus *A. Gr.* シロタヘヒマハリ米國ノ産、東京植物園ニアリ

Gentiana nipponica *Mx.* ミヤマリンダウ白山ニ産ス

Gentiana Thunbergii *Gris.* var. minor *Mx.* コミヤマリンダウ亦白山ニ産ス

○優曇鉢羅、梵語 Ficus glomerata 無花果ノ屬

○旃簸迦、梵語 Michelia Champaca 和名キンカウボク

○多伽羅、梵語 Tabernaemontana coronaria

○ Shorea robusta. 梵語ニ沙羅トイフ

○ Bignonia suaveolens. 梵語ニ波吒釐トイフ

○ Bassia latifolia 梵語ニ末杜迦トイフ

○梵語 Kusa 矩奢 Poa cynosuroides

○梵語 Khadira 竭陀羅 Mimosa catechu

○梵語 Kovidara 拘鞞陀羅 Bauhinia variegata

○阿恕迦トイフ梵語アリ Jonesia asoka 是無憂樹也

○梵語「アヅキ」ハ荳科植物、學名 Cajanus indicus 琉球之ヲ木豆ト呼ブ

○蘭科植物ノ自花授精ニ就テ

市村塘

抑モ植物界ニ於テ雄蕋先熟（プロタンドラス）、雌蕋先熟（プロトギナス）、花柱長短（ヘテロステリズム）、等ノコトアル所以ノモノハ何ゾヤ曰ク他ナシ啻ニ自花授精（アウトガミー）ヲ避ケンカ爲ノミ唯是而已然ラバ則チ自花授精ノ不利益ナルハ今更喋々スルノ必要ナカルベシ試ニ蘭科植物ノ花式ヲ見ルニ頗ル複雜ニシテ容易ニソノ何タルヲ解スル能ハズト雖モ其生殖機關タルヤ妙ニメ花蓋ノ基底ニ柱頭アリテ雄蕋ハ遙ニ上方ニ位シ花粉ハ熟スル頃ニ至レバ葯房ヨリ露出ス其狀恰モ昆虫或ハ外物ノ爲メニ奪去サレンヿヲ願フガ如シ況ンヤ Orchidium 屬ニ見ルカ如ク花粉若シ自己ノ柱頭ニ落ツル片ハ一種ノ毒液ヲ分泌シ終ニ其儘腐敗スルモノアルニ於テオヤ自花授精ヲ避ケントスル手段是ニ至テ窮マレリト謂フベシ然ルニ近着ノ "Bulletin of the Torrey Botanical club" ニ載スルトコロノ「レーマス、モロング」氏、述ノ "Self fertilization of the Orchids" 一篇ヲ看ルニ蘭科植物中ニハ自花授精ヲ爲シ猶能ク良果ヲ結ブモノアリト記セリ氏ノ所論難スベキ點少ナカラズト雖モ兎ニ角珍報ナレバ姑ク抄譯シテ以テ未聞諸君ニ告グト云爾

ダーウヰン氏ハ蘭科植物ヲ以テ自花授精ヲ爲ス能ハザルモノトセリ然レ𪜈氏ハ敢テ此說ヲ固守シテ動カズト云フニハアラズ只今日、最モ勢力アル說ナリト唱フルニ過ギズ凡ソ蘭科植物ノ受胎ヲナスニ當リ昆蟲媒介ノ必要ナルハ言ヲ待タズ今熟々蘭科植物ノ數種ニ就テ其花器ノ構造ヲ見ルニ、誠ヤ雄蘂ノ花粉ハ昆虫助動若シクハ人工加力ナクンバ決シテ雌蘂ノ柱頭ニ達スルヲ得ザルノ態アリ蓋シ葯隔（ロステラム）ト稱スルモノアリテ葯房ト柱頭ノ間ヲ遮レバナリ乍去、其二三種ニアリテハ其構造自花授精ヲ爲スニ適シ且ツ實際該作用ノ行ハルヽ證據ニ

ハ乏シカラズ

夫ノ Naiadaceae ノ多種ニハ子孫繼續法ニ二樣アリ曰ク舊根ヨリ嫩芽ヲ出シテ繁殖スル法、曰ク種子ヨリ萌芽シテ繁殖スル法是ナリ假令孰レカ一法損害ノ爲メ停止ノ境遇ニ立チ至ルモ尚他法ノ存スルアリテ恰モ是レ二弦弓ノ一弦切斷スルモ尚他ノ一弦ニテ事足ルガ如キ歟、故ニ此二法同時ニ損害停止ヲ蒙ムルニ非ザレバ子孫繁殖ハ依然繼續シ得ルモノトス却說元來花粉（ポーレン）ナル者ハ數多小粒ノ集合体ニシテ其凝聚性ハ通常可ナリ强キモノナレ𪜈種類ノ異ナルニ從ヒ稀ニ弱キヿアルナリ即チ Leptorchis 屬ニ於テハ花粉塊（ポーレンマス）ノ凝聚性弱クシテ小粒團結自ラ弛緩ナリ是レ花粉ニ支柄（コーデクル）ナク且ツ分泌腺及ビ連聯絲ヲ缺如スルニ歸因セズンバアラズ故ニ斯ヽル花粉塊ハ風雨ノ爲メニ崩壞シ易ク從フテ花粉小粒ハ自己ノ雌蘂柱頭ニ達スルノ機、會多シ此屬ニテ自花授精ハ毫モ珍ラシカラズ現ニ米國ニ產スル其二種ノ如キハ此結果トシテ他花授精（チエノガミー）ニ因テヨリモ一層豐熟セル蒴果ヲ結ブヲ常トス二種トハ何ゾヤ曰ク L. Liliifolia 曰ク Archro anthus sp. 是ナリ前者ハ米國北地ノ森林ニ於テ屢〻見ルモノニシテ余ハ昨年晚秋多ク採集シタリ而乄一ト乄自花授精ノ良果ヲ荷ハザルナシ後者モ蒴果ヲ結ブモノ二三ヲ得タリ是レ果シテ自花授精ノ結果ナルヤ否ヤハ嘗テ花粉ノ支柄及ビ分泌腺ヲ有セザル數種ノ蘭科植物ニ於テ其花粉小粒ガ花唇、花柱、柱頭ノ嫌ヒナク一面ニ散布セルヲ見タルヿアルニテ確知セラル可シト思フナリ其散布ノ状、一瞥、楊柳ノ花粉ガ其花序ニ亂懸スルニ彷彿タリキ

抑又自花授精ノ面白キ方法ト云フベキハ倫敦ノロヤルソサイチーニ於テサージョン、フーカー氏ノ演舌セシモノナルベシ氏ノ檢究セシ蘭ハ Listra ovata トテ米國產ノ L. cordata ニ似タル一種ナリ氏曰ク此植物ノ花粉ガ最早成就スル頃ニ於テ吾人若シ其葯隔ニ觸ルヽカ或ハ之ヲ搖振スルトキハ爆裂ヲ起シ二個ノ白色粘質塊カ

葯隔頭部ノ左右ヨリ跳躍シテ互ニ相癒合シ花粉囊ノ基底ニ付着スルナリ然ルトキニ內部ノ花粉ハ外皮ヲ破リ露出スルモノトス斯クシテ露出シタル花粉小粒ハ葯隔ノ端邊ヲ越エテ雌蕊柱頭ノ表面ニ達ス、序テ受胎作用行ハル自花授精ノ方法ハ概ネ以上ノ如シト、是ヲ以テ蘭科植物ニハ通常ノ受胎方法タル昆蟲媒介ノ外、更ニ自花授精ノ許サルヽヿハ明了ニシテ余モ時々奇異ナル場合ヲ實驗シタリ、曩キニ氏ノ述ベタル、外界ノ刺激ニ因テ起ルトコロノ受胎現象ハ Gyrostachys, Peramium, Epipactis, Cathea, Arethusa, Pogonia 諸屬ニアリテハ未タ充分觀察セザレドモ花粉ノ支柄板（コーデカルデスク）ハ葯隔ノ背部ニ固着スルハ事實ナリ其固着スル狀態奈何ハ葯隔ヲ下方ニ彎垂セズンバ決シテ花粉塊ハ外皮ヲ破リ跳出シ其小粒ヲ散布スルニ至ラザルヲ見テ推知シ得ベシ故ニ昆蟲來リテ葯隔ノ上面ヲ跂フカ或ハ外力アリテ之ヲ彎垂セシムレハ花粉小粒ハ必ズ多少雌蕊柱頭ニ達スルヤ疑ヲ容レズ前記數屬中最初三屬ハ昆蟲ノ助ケニヨリ自花授精ヲナシ隨分豐熟ナル果實ヲ結ブヲ以テ愈〻余輩ノ自花授精論ヲ確固ナラシム

然リ而シテ自花授精ノ最モ確摯ナル例ハ Habenaria 屬ノ數種ニ見ルトコロタリ則チ H. tridentata ニ於テハ他種ト異ニシテ葯隔ガ楯壁トナリテ葯房ト下方ノ柱頭トノ間ヲ遮絕ス之ガ三箇ノ棒狀柱ニ裂割シ其二箇ハ葯房ノ兩側ニ、他ノ一箇ハ其中間ニ、立チ葯房ト同高ナリ、此兩側ニアル二箇ノ棒狀柱ノ上面及ビ內面ハ粘質ヲ帶ビ明カニ柱頭ノ作用ヲナスモノヽ如シ且ツ此植物ノ花粉ハ細粒微末ニシテ飛散スルトキハ近接セル該柱頭ニ達スベキハ理ノ當然ト云フベシ茲ニ殊ニ奇妙ナルヿアリ即チ葯房ノ將ニ裂開セントスルヤ三箇ノ花柱ハ其內方ニ彎曲シテ花粉囊ニ向ヒ恰モ花粉ヲ受ケント待チ設クルノ狀アルヿ是ナリ時ニ猶未ダ花ノ開カザルノトキニ於テ既ニ花粉管ハ進ンデ自ラ雌花柱頭ヲ穿ツヿサヘアルハ先輩 Gray 氏モ唱フルトコロニシテ晩近ニ至リ

漸ク知ラレタルニアラズ是ハ余輩ガ閉花ヨリモ開花ニ於テ一層普通ニ見ルノ現象ナリキ又 Habenaria integra 及ビ H. nivea ノ生殖機關モ多少前者ニ似タル構造ヲ有シ大差ナシ、之ヲ要スルニ凡ソ蘭科植物ノ受胎作用ハ唯一法ニ限ラルヽモノニ非ラザルコヲ余輩ハ斷言スルニ敢テ躊躇セザル者ナリ

○二月下旬植物園植物雜記

松村任三

オニシバリ、マンサク、ウメ、ラフバイ、ヤマハンノキ花アリ

チガタマノキ、サンシユユ將ニ新粧ヲ試ムトス、

ハシバミ葇荑アリ未花粉ヲ吐クニ至ラズ、

シダレザクラ　樹皮縱ニ龜裂シテ粗糙、自ラ櫻樹ト別

モミヂ　樹皮ニ淺キ縱裂アリ殆ト平滑ノ觀アリ

カラスザンセウ　樹皮ニ疣ヲ滿布ス、疣ニ刺針アリ觸ルベカラズ

サンセウバラ　樹皮縱裂片々落ツ

ナニハイバラ　冬葉不落

ゴンズイ　樹皮ノ色灰白樣、縱裂アリ淺シ

トチ　樹皮白色樣、コルク多シ

ウハミヅザクラ　樹皮ニ皮孔アリ横裂細長

カヂノキ　樹皮ニ褐色ノ點々滿布ス瓣アリ昂然

コブニレ　樹皮縱裂深シ

アカメガシハ　樹皮灰白色、縱裂長クシテ淺シ殆ト平滑
クマシデ　樹皮ニ皮孔アリ褐色、縱ニ續々タリ
シラカバ　樹皮白堊ヲ塗ルガ如シ薄皮橫裂片々、諦視スレバ一字樣ノ皮孔ヲ滿布ス
ヨグソミチバリ　樹皮暗色、皮孔アリ唇形ヲナシテ橫ニ長シ
アベマキ　樹皮參差縱裂コルク多シ
リヤウブ　樹皮片々脫落
ミツバウツギ　幹叢生、樹皮殆ト白色、縱裂淺シ
ヤマハンノキ　樹皮ニ縱裂アリ淺キガ故ニ粗糙ナラズ
ミヅキ　樹皮灰白樣、縱裂淺ク平滑ノ觀アリ
イヌエンジユ　樹皮暗色、皮孔アリ菱ヲ縱ニセルガ如シ
ハクウンボク　樹皮縱裂細淺、平滑ナルガ如シ
ヘツカニガキ　樹皮ニ皮孔アリ菱ヲ橫ニスルガ如クシテ中心一縱裂アリ
カキ　樹皮縱橫龜裂

○種子及果實ノ適應

(J. w. Folsom 氏論文抄譯)

種子及果實ノ千種萬態ナルヿヲ觀察シテ其何故ナルヤヲ穿鑿スルトキハ各自ニ外圍ノ事情ニ適應スル爲ニ然ルモノナルヲ見ルベシ而シテ此適應ハ遺傳及變化ノ兩法則ノ並ビ行ハルヽ結果ニ因ルヿハ多言ヲ要セザルナリ今爰ニ種子及果實ノ適應ニ關スル事實ヲ示シ因テ以テ自然界ノ觀察者ガ自ラ其適例ヲ增加セラレンヿヲ望

マントス

未熟ノ種子果實ハ何レモ保護ヲ要スルモノニシテ例ヘバ未熟ノ果實ガ緑色ヲ呈スルハ葉ト其色ヲ同フシテ動物ノ侵害ニ對シ自己ヲ防グモノナリはしばみノ如キ果實ニテハ葉状ノ附部アルニ因テ殊ニ此目的ヲ達スルナリ未熟ノ果實ガ一般ニ不快ノ味ヲ有スルモ亦動物ニ對スル保護タルヲ見ルベシ其他未熟ノ際ニ芒刺ノ類ヲ具シテ同一ノ目的ヲ達スルモノアリ

特別ノ運動ニ因テ未熟ノ果實ヲ保護スル植物アリたんぽゝノ類ニテハ開花ノ後其花叢ハ閉鎖シテ種子ノ成熟ヲ待チ更ニ開放スルヲナス且直立セル花梗ハ花ノ凋ム頃ヨリ地面ニ下向シ種子飛散ノ時ニ方リテ花梗再ビ直立スルヲ見ル（是レ米國産ノたんぽゝノ一種ニ就テ云フ本邦ノモノニテハ花梗ニ著シキ運動アルヲ見ズ）ひつちぐさノ類ニテハ水上ニ開花シ水中ニ果實ヲ成熟セシメぶたのまんちう（Cyclamen）ノ一種ニテハ開花ノ後ニ花梗巻縮シ其果實ヲ地面ニ接セシメ以テ其成熟ヲ待ツモノアリ（落花生ノ地下ニ實ヲ結ビぎんまめモ此ノ如キコトアルハ亦此例ニ加フベキモノナラン）

成熟シタル果實ニ於テハ裂開ニ因テ種子ヲ風ニ托スルアリ彩色アル種子ヲ露出シテ鳥類ヲ誘引スルアリをだまきノ種類ニテハ花時ニ下向セル纖弱ノ花梗ハ種子ノ熟スルニ隨ツテ直立シ微風ノ搖動スルヲ待テ裂開セル蒴中ヨリ種子ヲ遠方ニ投散スルモノアリけしノ種子ヲ散ズルモ亦之ニ類スル所アリ且其蒴ノ小孔上ニ位スル庇状ノ小体ハ雨天ニ逢ヘバ小孔ヲ閉鎖シテ種子ノ逸出ヲ許ザスト云フすみれノ果實ハ三個ノ小片ニ開裂セリ而シテ其一種ニ於テハ各裂片ノ側壁乾縮シ之レガ爲ニ種子ヲ壓迫シテ數尺ノ距離ニ投散スまんさくノ類ニハ三十尺ノ距離ニ種子ヲ投グルアリつりふねモ亦能ク種子ヲ散飛セシム南歐ニ産スル投子瓜（Squirting cucumber）ニ於テハ更ニ奇異ナル所アリ其果ノ成熟スルニ方リ動物ナドノ之ニ觸ルヽコトアレバ爪ハ其莖ヨリ離レ去リ斯クシテ其基底ニ生ズル傷孔ヨリ粘濃液中ニ存在スル種子ヲ壓出ス此壓力ハ果實ノ側壁ニ存スルモノニシテ種子ヲ二十乃至三十尺ノ距離ニ達セシムルニ足ルト云フ

にれ、もみぢ、まつ等ノ種子又ハ果實ハ翅狀ノ附部アルニ因テ能ク飛散ス此ノ如キ附部アル果實ハ喬木又ハ丈ノ高キ灌木ニ限リ矮短ノ草本ニハ之ヲ見ズ蓋シ高處ニ懸垂セザル果實又ハ種子ニハ翅狀ノ附部アルモ其用少ナキニ因ルナランモ毛ハ翅ト同一ノ目的ヲ達スルナリたうわた類ノ種子ハ著シク毛ヲ發生スたんぽゝ、あざみノ類ノ果實亦然リ此等ノ菊類ガ繁殖スルハ偶然ニアラザルヲ知ルベシゐるで類ノ一種ニハ錯綜シタル花叢中ニ果實ノ成熟スル小花梗ハ僅少ニシテ他ノ小花梗ハ變成シテ毛狀ヲナシ之ニ因テ成熟シタル小數ノ種子ヲ飛散セシムルニ便スト云フ

流水ハ果實ヲ運搬スルコト多ク河岸ニ生ズル樹木ノ種子ニ對シテ然リトス又許多ノ果實ハ海水ニ漂フテ能ク散布ス特ニ著シキハ椰子樹ノ果實ガ外皮ニ因テ充分ニ保護セラルヽ爲ニ海水ニ浸サルヽモ生活力ヲ失フコトナク洋流ニ漂フテ遠地ニ達スルコト是ナリ

氷霜ノ作用ハ堅果ヲ其被覆物中ヨリ離脫セシムルコトアリ氷河氷山モ果實及種子ヲ運搬スルノ用ナシトセス

果實及種子ノ散布ハ自然力ニ因テ助ケラルヽノ外動物ニ助ケラルヽコト頗ル多シトス而シテ動物ヨリ此ノ如キ助ヲ假ランニハ果實ノ香味色彩等ニ因テ動物ヲ誘引スルノ必用ナシトセズ此等ノ形質ガ果實ニ生ジ來ルハ固偶然ニアラズ變化遺傳ノ兩法則ニ基因セルモノナリ

六脚虫ハ特ニ花粉ノ運搬ヲ務ムルノミナラズ又能ク果實ノ播布ヲ助クルナリダーウイン氏ノ觀察ニ因レバ蝗

虫ノ糞中ニハ發生スルニ適セル種子ヲ有セリト云フ元來蝗虫ハ大群ヲ生ジテ植物ヲ食害スト雖又能ク種子ノ散布ヲ助クルニ因テ幾分カ其害ヲ償フト謂フベシ

魚類モ諸種ノ種子ヲ嚥下スルニ因テ又播布ヲ助クルノ功ナシトセス

鳥獸ハ好ンデ果實ヲ食スりべすノ如キぶだうノ如キ桃、李、林檎ノ如キ皆鳥獸ニ嗜食セラル而シテ種子ノ腸胃中ヲ通過シ去ルモノハ消化液ノ爲ニ其生活力ヲ消滅セラルヽコトナク却テ適度ノ濕氣溫度ヲ得テ發生ニ適スル有樣トナルモノナリ

（未完）

○繇條書屋植物雜記（其七）

牧野富太郎

●まるばやはずさう

まるばやはずさうハやはずさうノ一變種ニシテ學名ヲ Lespedeza striata Hook. et Arn. var. stipulacea Makino. ト云フ予ハ本植物ニ就キ本誌第七十六號ニ於テ聊カ記述スル所アリシガ當時予ハ未ダ之レガ和名アルコトヲ知ラズシテ遂ニ自ラ揣ラズ之レヲまるばやはずさうト新考セリ然ルニ其後偶マ牧畜雜誌ヲ閲スルニ中ニ一報告文ヲ載ス文中ニまるばやはずさうノ名アリ予ハ此ニ至テ此名ノ旣ニ予ガ命名ニ先ツテ世ニ公ニナリタルヲ知リ其何人ノ命名ニ出デ且今日ヨリ幾年前ニ此名ノ生セシヤヲ知ラント欲シ遂ニ田中芳男先生ヲ煩ハスニ至リ此ニ始メテ其名ノ由來ヲ知ルコトヲ得タリ深ク以テ先生後學ヲ訓廸スルノ懇篤ナルヲ鳴謝セズンバアラズ先生ヨリノ書信中ニ言ヘルコトアリ曰ク「マルバヤハズサウ　明治廿二年頃外國よりヤッパンクロバと申し注文あるより急に實を集め蒔くに細葉濶葉の二品を得たり是れは農務局にて試作せしめたるものにして小野孫三郎擔當せり故に昨日同人へ問合せ置たれば不日明了すべし」ト

後チ幾モナク再ビ先生ノ信書ヲ得封中果シテ小野氏ノ答書アリ今左ニ之レガ全文ヲ載ス之ヲ讀ムモノ直ニ此植物名稱ノ由來ヲ解スルニ足ラン此ニ採錄スルモ亦敢テ贅事ニ非ザルナリ

拜呈陳者マルバヤハズサウの義に付御問合に付左に其件々御答申上候

一明治廿二年一月頃壕洲クヰンスランド政府より東京駐劄英國公使を經てヤハズサウの種子五十磅を吾政府に請求せり

右樣請求し來りたるも牧草とし作付せし所なきを以て農務局は左の年月に荏原郡に試作をなせり

一明治廿二年四月頃野生のヤハズサウ苗を南北豐島の兩郡中殊に北豐島郡板橋近傍に於て採集し荏原郡松澤村大字上北澤村の亡老農鈴木久太夫に委囑して五反歩の畑に栽培せしめたり

右試作の監督は原田清太郎君なされたり而して右作付中原田君は丸葉と長葉との差異あるを見認められたり因て原田君は丸葉ヤハズサウの名を付したるなり

一報告書には右樣巨細の記事はなけれども大概は農務局出版の畜產部試驗報告書中の二葉目に記載あり又米國大博覽會へ出品せし牧草の解說にも記載あり

右の通に有之候得共作付步數五反步より種子を收穫せし事壹石五斗餘なりし事其後試作して其收葉量等の事は畜產部試驗報告書に記載有之候間御一覽有之度候若し御手許に右書無之候得者可及御送附候也

十一月廿二日(明治廿六年)　小野孫三郎

田中芳男殿

●やぶまめノ地中莢

やぶまめ地中ニ在テ能ク莢ヲ結ブ同好ノ士矢野勢吉郎氏土佐ニ於テ之レヲ見ル其記事載セテ本誌第七十四號ニ在リ去年宮部金吾氏北海道ヨリ東京ニ歸省セラルヽヤ談偶マ此地中莢ノ事ニ及ブ而シテ同氏ニヨリテ始メテ田中芳男先生ノ此レニ就テノ説話ノ疾ク既ニ大日本農會報告ニ登載シアルヲ知レリ其後同先生ノ好意ニヨリテ該報告ヲ得ルニ至リ予ハ始メテ其詳細ヲ知ルヲ得タリ該報告ハ其第百十八號ニシテ明治廿四年五月ノ發刊ニ係ル今其詳細ヲ知ラント欲セバ此ニ之ヲ閲覽スルヲ要スルナリ

宮部金吾氏著北海道有用植物説明一篇載セテ昨年八月發行ノ北海之殖産第三十八號ニ在リ予ハ亦同氏ノ厚意ニヨリテ該册ノ寄贈ヲ忝フシ閲讀以テ殊ニ我學ニ裨補アリシ篇中又やぶまめアリ今此ニ其一節ヲ抄出シ以テ此地中莢ノ既ニ北海土人ノ民用ニ供セラレツヽアルヲ示ス可シ

ヤブマメ（荳科） アハラ 又アハチヤ （土人名） 原野微濕の地に生ず各所にあり此草通常の花實の外に地下に構造簡單にして決して開かざる花を生じ實を多く結ぶ土人此地下豆を「アハ」と稱し好みて食す味栗の如しと云ふ地下に生ずる豆は地上のものに比すれば其の重殆んど七倍あり圓形莢に豆通常一個稀に二個を生ず地上の莢には豆三四個を入る土人亦之を採り食す

○「バクテリア」ノ説

K・D・山人纂譯

是等二種ノ黴菌ハ共ニ球狀ヲナシ。ミクロコツクス。ニ屬スルモノナリ即チ其一種類ハ成育スルニ當リテ連鎖ノ形ヲナスカ故ニ之ヲ。ストレプトコツクス。ト稱ヘ他ノ一種ハ自ラ集合シテ葡萄ノ如ク房狀ヲ呈ス故ニ之ヲ。スタフヰロコツクスト。イフ

サテ是等二種類ノ黴菌ハ人々ノ集合セル場處殊ニ不潔ノ場處ニ多ク時トシテハ健康ナル人々ノ集合セル處ニ

モ生スレドモ大抵病院ノ如ク病人ノ相集レル處ヲ多シトス是等ノ黴菌ハ常ニ塵埃多キ空中ニ在リテ之ト相混淆シテ浮動スルカ故ニ人々ノ口中若クハ衣中ニ存在スルコトモ間々是アルナリ

サレハ破傷風ノ如キ創痍ヨリ起レル病ハ如何ニシテ生ズルヤソノ理自カラ明カナルヲ得ベシ何トナレバ塵埃カ創痍ノ表面ニ落チ若クハ創痍ト相觸ルヽモノヽ上ニ落チ而モ其中ニ黴菌ヲ含有スルニ於テハ之ヲ消滅スルニ非レバ直ニ生育スヘク隨テ其有毒ナル物質ニ因リテ創痍ノ治癒ヲ妨クルハ勿論果ハ血中ニ入リテ身体ノ各部ヲ通行シ時トシテ不慮ノ惡果ヲ發出スヘキハ最モ覩易キ道理ナレハナリ

近世學理ノ實行行ハレテヨリ外科醫ハ大ニ其手術ヲ改良増進シ啻ニ破傷風ヲ治療スルノミナラス數年前マテハ學識經驗共ニ備ハレル外科醫サヘモ容易ニ手ヲ下サヾリシ治療法ヲ今ハ盛ニ行ヒソノ生命ヲ助ケ若クハ之ヲ持續スル必要アルニ於テハ身体ヲ鑿開スルカ如キ大手術モ敢テ顧慮スル處ナク之ヲ施スニ至レリ而シテ以前ニ在リテハ是等ノ事ニハ必ス危難ノ附屬スルヲ免レサリシガ今日ニ至リテハ其覆轍ヲ履ムモノ殆ントソノ跡ヲ絶テリ

昔時ニ在リテハ蓐熱ノ爲メニ無數ノ生命ヲ失ヒ其慘狀殆ント言フニ忍ヒサリキ而シテソノ餘殃ハ往々延イテ病院ニ閉居セル產後ノ婦人ニ傳染シ以テソノ慘毒ヲ逞クシタルコトアリキ然ルニ今日ニ至リテハ以前ノ如ク此事ノ起ルヲ見ザルニ至レリ是レ全ク醫師ガ此病ノ特殊ナル元素ヲ知リ得テ之ヲ避ケ且ツ之ヲ制スルノ道ヲ得タレハナリ即チ蓐熱ハ猶破傷風ノ如ク黴菌ニ因リテ發生セラルヽモノナルコト今ヤ既ニ明カナルニ因レリ

○ハコツヽジ等

ハコツヽジトホツヽジ　總狀花ニシテ極梗長ク延キ楕圓形或ハ披針狀ノ苞ヲ有スルモノヲハコツヽジト稱シ

複總花ニシテ極梗甚短ク針狀ノ苞ヲ有スルモノヲホツヽジト名ク

マヽコナトミヤマヽコナ（マヽコナタツナミ）蕚ニ毛アルモノヲマヽコナト云ヒ蕚ニ毛ナキモノヲミヤママヽコナト云フ

コミメクサトミヤマコミメグサ　甲ハ葉緣ノ鋸齒長ク延ビ鬚狀ヲナス乙ハ緣ニ鋸齒ナク頂端ニノミ數鈌刻アリ鬚狀ヲナサズ

ウツギ屬（Deutzia）葉面平滑ニシテ毛茸ナキヲヒメウツキト稱ヘ葉柄短ク粗皺アルヲウツギト名ケ上部ノモノハ葉柄ナク二葉相聚テ莖ヲ擁スルモノヲマルバウツギト呼ブ又一種葉裏白色ヲ帶ブモノアリウラジロウツギ（D. bicolor, Max.）ト名ク近年發見ノ一新種土佐ニ產スト云フ

マ・ヒ・

○孟宗竹

近頃は江戸に大なる竹籔、諸所に出來たり、明和の頃は、皆人珍らしく思ひし竹にて有しなり、四五年以來、笋も太く一尺四五寸、二尺廻りの大なるが夥しく出て、八百屋毎に賣事なり、何地より出るにやしらす、薩摩國にては、此笋を紙に漉（スク）よしなり、寛政十年午六月、出版せし西遊記續篇に云、薩摩の邊に唐孟宗竹あり、人家に多し、此竹冬笋を生す、味甚美也、寒中にも平皿一ぱいの笋を生る事、他國にはいまた見ずとみへたり（塵塚談）

○歐洲ノ密柑產出國

凡ソ果樹ノ中其果實ノ收穫最モ多キモノハ蜜柑樹ヲ以テ第一トス現今伊太利ニ於ケル蜜柑樹ノ總數ハ無慮五百四十萬本ニシテ毎年十六億箇以上ノ收穫アリ即チ一本ニ附キ平均三百箇ヅヽノ割合ナリトス而シテ歐洲ニ

於ケル最大果園ヲ有スルセヴイラ州ニ培養セル蜜柑樹ハ一本ニ附キ毎年六百箇マテノ收穫アリ又アゾール諸島中ノミセル島ニ於ケル蜜柑樹ノ栽培地積ハ八萬五千「デシヤチーナ」（一「デシヤチーナ」ハ一町一段四歩八合）ニシテ毎年二億五千萬箇ノ收穫アリ同島産ノ蜜柑ハ重ニ英國ニ輸出セリ要スルニ歐洲中第一ノ蜜柑産出國ハ西班牙ニシテ毎年諸外國ニ輸出スル高十億箇以上ナリ其次ハ伊太利ニシテ希臘ノ蜜柑産高ハ五千萬箇アゾール諸島同四億箇ナリトス

（二月十三日　官報）

◎質問應答

（問）裸子植物胚嚢中ニ出現イタシ候反足細胞ハ如何ナル成立（根源）ノ者ニシテ如何ナル効用アル者ナルカ

陸中國　清水時郎

（答）裸子植物ノ胚嚢内ニハ反足細胞ナシ何カノ誤解ナラン御再考ノ上幾度ニテモ御質問アレ

松村任三

◎東京植物學會錄事

明治二十七年二月廿四日帝國理科大學植物學教室ニ於テ月次會ヲ開ク當日數多ノ顯微鏡標品、腊葉、書籍、及ヒ新着ノ外國雜誌ヲ陳列シテ自由ニ會員ノ閲覽ニ供シタリ第一席ハ大久保三郎氏、氏ノ數種ノ顯微鏡的標品ニ於ケル説明甚タ精密、次席ハ牧野富太郎氏、氏ノ石南科植物ニ就テノ談話、亦タ懇到、其日開會ハ午後正二時退散ハ仝四時半

◎東京植物學會ノ例會ニ於テ可成的各自所有ノ顯微鏡的標品、腊葉、書籍及ヒ新着ノ外國雜誌等每會展列スルコトヽナレル由ト云フ

◎寄贈書目

東洋學藝雜誌	第百四十九號	一册	東京學藝社	(東京)
地質學雜誌	第五號	一册	東京地質學會	(東京)
地學雜誌	第六十二號	一册	東京地學協會	(東京)
東京醫學會雜誌	自第三號至第五號	三册	東京醫學會	(東京)
牧畜雜誌	自第百二十號至第百二十四號	五册	牧畜雜誌社	(東京)
大日本山林會報告	自第百三十三號至第百三十四號	二册	大日本山林會	(東京)
日本蠶業雜誌	自第六十八號至第六十九號	二册	日本蠶業雜誌社	(東京)
日本園藝會雜誌	自第五十號至第五十一號	二册	日本園藝會	(東京)
國家醫學會雜誌	第八十一號	一册	國家醫學會	(東京)
北海道水產雜誌	自第六號至第七號	二册	北水協會	(北海道)
釀造雜誌	自第百卅六號至第百四十一號	六册	釀造雜誌社	(東京)
日本藥業新誌	自第二百五十二號至第二百五十三號	二册	衞生社	(東京)
擴農會雜誌	第二十八號	一册	擴農會	(東京)

寄贈書目

農事試驗成蹟第四報	第四報	一册	農事試驗場（東京）
大日本農會報	第百四十八號	一册	大日本農會（東京）
（宮城縣仙臺市）愛宕山植物目錄	第一集	一册	西原一之助氏

The Journal of Botany. No. 371. 372. 373.

The Gardeners' Chronicle.

No. 357. 359. 360. 362. 363. 364. 370.

Botanisches Centralblatt. 他二部 三好學氏

Band LVI Nr. 6.

Monatsschrift für Kakteenkunde.

Mr. J. Neumann.

* * *

動物學雜誌 第六十四號

明治廿七年二月十五日發行○一冊金十錢郵稅金壹錢○六冊前金六十六錢（郵稅共）十二冊前金一圓三十二錢（郵稅共）あさり貝殼斑紋ニ就キ池田作次郎君○歐米諸邦ニ於ケル臨海實驗場ノ景況（一）岩川友太郎君○日本産ノ短尾類（承前）松浦歡一郎君○受精ノ顯象（承前）石川千代松君○北海道産鞘翅類松村松年君◉寄書昆蟲學熱心家ニ希望ス高階於菟次誌◉相馬地方動物實驗雜記○鳳蝶實驗記○シロコアブラムシ○コフキアブラムシ○信濃に於て食する六脚蟲○コホロギ嬰兒を殺す（？）○鳥と蟲との關係一實例○稻の螟蟲冬季蟄伏の一小實驗○アメリカ蠟（方言に就て）○畸形蠶兒○からす○鯉と蛹○季氏日本及朝鮮翅類目錄（承前）東京動物學會例會

發賣所 敬業社

地質學雜誌 第一卷第六號

明治廿七年三月十五日發行一冊金十錢郵稅金一錢

目錄○第九版黄鐵鑛奇晶圖版◉論說○濃尾地震概報（前號の續き）理學士大森房吉君○黄鐵鑛の新晶形に就て比企忠君○沖繩島に就て（續稿）黒岩恒君○千厩御影石の薄衣粘板岩に於ける接觸變質に就て西和田久學君◉雜錄○岩石の出來方理學博士小藤文次郎君○金屬及其礦石（承前）山田邦彦君○鋸山は何故に鋸牙狀を呈するや佐藤傳藏君○「ニユーヘブライト」島地質一斑石井八萬次郎君○莊內に於ける文化の大地震菅谷熊一郎君○金澤地方の建築材なる戶室石に就て清水實隆君◉質問○二件◉應答○一件◉雜報○鋸山山脈中心軸に於ける一大斷層の有無に就て○肥後の甲佐岳○旅中見聞鎖談、丸尾、小倉山、雁の穴、劍丸尾、御胎內○八王子府中邊の旋風○岩石石理に關する套語○再び肥前國産輝石に就て○外數件○批評

發賣所 東京市神田裏神保町一 敬業社

地學雜誌 第六集第六拾貳卷

明治廿七年二月廿五日發兌●一部金拾錢郵稅一錢

◎論説

●本邦石炭の供給は如何（承前） 理學士 和田維四郎君 六一
●大坂四近桑滄の變（圖入） 理學士 山下傳吉君 六七
●寶加勝鑛山（圖入） 理學士 中島謙造君 七〇
●土性及植物の關係 農學士 鴨下松次郎君 七二
●加能兩國海岸の砂丘に就て 農學士 三成文一郎君 七五
●陸前大島の中生層に就て（承前、圖入） 理學士 脇水鐵五郎君 八〇
●日本交通一斑（承前） 理學士 金田楢太郎君 八三

◎雜錄

●地質原論第四回（圖入）理學博士橫山又次郎君八六●千島巡檢記（圖入）農學士橫山壯次郎君九二●地球の年齡石川一男君九七●河內國古市郡古市村所産の泥炭に就て農學士松岡操君一〇一●豐後地變彙報理學士金田楢太郎君一〇三●玄武石記千葉昌胤君一〇四●地學通論（承前、圖入）岐陽學士君一〇五

◎雜報 一〇七

東京地學協會の演說●理學博士菊池安氏の逝去●ブラウンス氏の訃音●故三浦西山兩氏の油畫像成る●石見の斷魚溪●淡路島に白堊紀の化石あり●福岡縣下筑前及豐前炭田の炭量概算●琉球人の生活程度●本邦鳥の數●木曾街道の櫛業●千島報效義會々員の出京●離島の馬は何故に體小なるや●鑛山探偵器の發明●穴虫の金剛砂●瑪瑙の林●世界最大金剛石●南極探撿●船にて達し得たる最高緯度●航海速力の進步●亞弗利加旅行者厄難に遇ふ●ペルシャの大震●僞火山●死亡數の統計●布哇の人口●歐州諸國の離婚數●地方通信●新刊書◎質疑五件◎應問二件

發賣所 東京市神田裏神保町一 敬業社

農學士　菊池熊太郎君校閲　濱田俊三郎君著

博物示教

全一冊

定價金二十五錢（郵税金二錢）

紙數百十六ページ
精密木板五十二

本書は多年教育に從事せらるゝ濱田俊三郎先生の著書にして動物植物及礦物を簡單明瞭に記述したるものなり蓋中等教育の初程にある學生をして博物學の眞味を知らしめんと欲せば啻に事實を列記するに止まらず彼是の關係を明にせざる可からず是を以て本書は學生をして實物を檢し易からしめんが爲め季節に注意し且最も普通にして最も得易きものを掲て講述し動物植物及礦物の關係を明にし歸納的の觀念を得せしめんが爲め事實を先にし理論を後にしたり加之行文流暢印刷鮮明にして製本美麗實に中學校教科書として又高等小學校の參考書として最も適切の書なり

發兌書肆　東京神田區裏神保町一番地（電話二百五十八番）
敬業社

博士ペッテンコーフェル之像（アートタイプ）○同氏之傳緒方正規○快樂ノ種類及其性質（承前）元良勇次郎○「チブチカルリーバー」ヲ用ヰテ球面ノ半徑ヲ測ル一法（圖入）中榮徹郎及奥田竹三郎○雷及避雷針ノ說（圖入）水野敏之丞○石器時代人民に關するアイヌ口碑の總括（承前）坪井正五郎◎雜錄○大婚廿五年之慶事歷年考田山實

東洋學藝雜誌　第百四十九號　明治二十七年二月二十五日發兌定價一冊十錢

○物理學隨筆錄第二（圖入）鶴田賢次◎雜報○深井○標準時○四元法新書○女博士○ヘッケル○理學博士菊池安氏逝矣○宗教界○ガベレンツ氏○學者の種類○インフルエンザ患者の尿水等◎應問○社日

發行所　東京神田裏神保町　東洋學藝社

廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

和漢洋對譯 本草辭典 全一册

定價金六拾錢

本書ハ英語及其他數十ケ國ノ語ニ於ケル植物及藥品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩樣ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレバ苟クモ英語ヲ教授シ植物學ヲ修メ化學、藥物、山林、農業等ノ諸科ヲ講シ又ハ貿易通辯、反譯、園藝等ニ從事セラルヽ內外ノ人士共ニ座右ニ缺クベカラザル良辭書ナリ

東京神田裏神保町一番地

敬業社

○本誌廣告料五號文字 一行（二十五字詰）一回金五錢 三回以上割引仕候

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢

○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條 代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條 前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セズ○第三條 郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條 特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御届可申候

明治廿七年三月十九日印刷
明治廿七年三月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉 東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者 熊田宜遜 東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所 熊田活版所 東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所 植物學雜誌編輯所 東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所 敬業社 同所
同 丸善書店 東京日本橋區通三丁目

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] March 20, 1894. [No. 85.

CONTENTS.

Japanese Species of Pinus. **By K. Saida.** 97

Chionanthus chinensis, Maxim. **By M. Shirai.** 98

Notes on Flowers. **By Prof. J. Matsumura.** 100

Plants Collected in Kyūshū. **By M. Shirai.** 102

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. **By K. Sawada.** 104

Plants of Yaeyama and Adjacent Islands. **By Y. Tashiro.** 107

Botanical Excursions to Enoshima and Hakone. **By A. Yasuda.** and **T. Ichimura.** 109

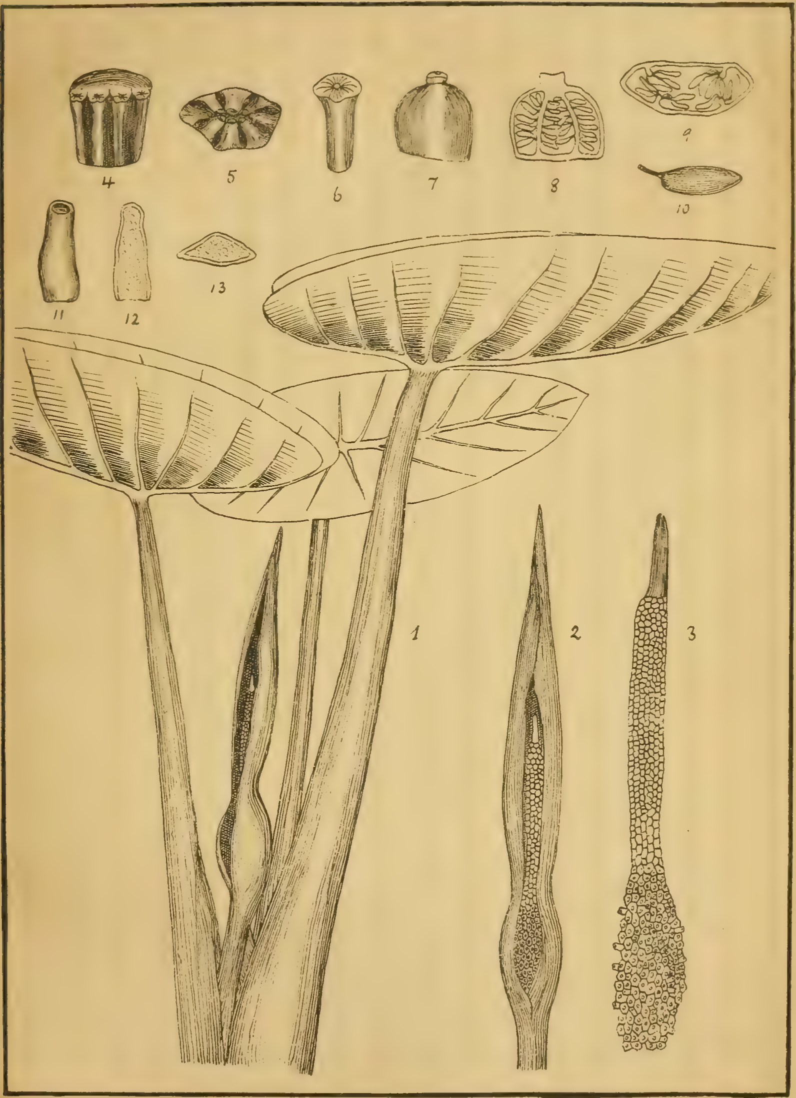
Plants from Shinshō in Toyama Prefecture. **By G. Hino.** 113

Miscellaneous:—. 116

Short Notes on Plants.—Self-fertilization of the Orchideæ.—Plants of the Botanic Garden at Koishikawa at the end of February.—Adaptation of Seeds and Fruits.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yōjōsho-oku."—Bacteria.—Elliottia paniculata and bracteata.—Deutzia.—Bamboo.—Oranges.—Proceedings of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

明治廿一年二月三日内務省許可
明治廿六年六月三十日遞信省認可
印刷所 東京市神田區錦町三丁目十七番地 熊田活版所



COLOCASIA ANTIQUORUM, SCHOTT. サトイモ
BY A. YASUDA.

植物學雜誌第八卷第八十六號
（明治二十七年四月二十日）
THE BOTANICAL MAGAZINE.
[Vol. VIII.　April 20, 1894.　NO. 86.]

○くわゐトおもだか

松田定久

くわゐハ其球莖ヲ食用ニ供スルヲ以テ親シク人ノ知ル所ナリおもだかノ方ハ人ノ親シク之ニ接スルコト稀ナリト雖或ハ「モンドコロ」トシテ之ヲ衣服ニ染メ付ケ或ハ日本流ノ畫家ハ好ンデ水草ノ中ニ之ヲ雜ヘ畫ケリ又明治ノ初メ頃ニ文部省ヨリ刊行シタル讀本中ニハおもだかハ其形くわゐニ類似ス云々ノ記事アリタル如ク余ハオボロニ記憶シ居レリ此ノ如ク其名ハ吾人屢之ヲ耳ニスレドモ其實物ハ如何ナルモノナリヤ頗ル之ヲ知ルニ苦メリ因テ此類ノ植物ニ就キ聊カ余ガ見聞スル所ヲ記シ疑ヲ讀者諸君ニ質セントス若指敎ヲ吝マルヽコトナケレバ幸甚

くわゐハ水田ニ之ヲ培養ス東京近傍ニ多ク之ヲ見ル其球莖ハ食品トシテ頗ル珍重セラル此植物ハ數條ノ地中莖ヲ發シテ泥土ノ中ニ匍匐シ其長サ三四尺ニ達シ太サハ指大トナル地中莖ノ先端ニ當リ二乃至三ノ節間膨大シテ養料ヲ貯藏シ直徑寸餘ノ球ヲ形成ス是即食用ニ供セラルヽモノナリ地中ニ匍匐スル莖ハ概シテ分岐スルコトナシ而シテ其球狀ヲナサヾル部及球狀ヲナス部ニモ褐色ノ膜ヲ被フル是レ葉ノ變形スルモノナルベシ此球部ハ匍匐莖ニ因リテ一面ハ本幹ニ連リ一面ハ其中央ニ芽ヲ有ス其長サ二寸許ニシテ少シク鉤狀ヲナス俗ニ

くわゐトおもだか

「トッテ」ト稱スルモノ是レナリくわゐノ球莖ヲ泥土中ニ埋メ置クトキ發芽スルハ此「トッテ」ニ因ルモノナリ其發生スル狀ヲ觀察スルニ始メテ發スル葉ハ箭形ヲ呈セズ單一ナル尖長ノ葉ニシテヤヽうりかわ（くわゐ屬中ノ一種）ノ葉ニ近似シ次ヲ逐フテ發スル葉ニハ其先端ニ近ヅキテ左右ニ小缺刻アルヲ見ル此缺刻ヨリ先キノ方ハ蓋シ箭形葉ノ葉片ニ一致スルモノナラン之ニ次ギテ生ジ來ル葉ニハホヾ葉片葉柄ノ區分ヲ具スルト雖其葉片ハヤヽ楕圓形ヲ呈スルニ止マレリ更ニ後レテ發生スル葉ニ至リテ始メテ完全ナル箭形葉トナルモノナリ此ノ如ク葉ノ發生スルニ隨ヒ糸狀ノ根モ亦次第ニ發生ス其發スル位置ハ「トッテ」ノ下方ニ近キ部分ヨリスルモノナリ勿論くわゐノ發芽スル際「トッテ」ノ下部モ延長ス而シテ根ハ此邊ヨリ發生シ且葉ノ多ク發生スルニ隨ヒ葉柄ノ下部ヲ遠慮會釋モナシ穿貫スルヲ見ル（此ノ如キ狀態ハ他ノ水草ニモ多ク見ル所ニシテ本雜誌第五卷五十五號ニ記セルみづあふひノ根ノ塲合ノ如キ是レナリ）故ニくわゐノ球莖ノ球狀部ハ發芽ノ際養料ヲ供給スルノ用アルモ根ヲ發スルハ此部ニ於テセザルナリ

（くわゐヲ發生セシムルニハ泥土ノ中ニ埋ムルモ可ナレドモ根ノ發生等ヲ觀察スルニハ玻璃瓶中ニ水ヲ貯ヘ此中ニ球莖ヲ絲ニテ釣リ下ゲ置クコト便ナリ而シテ此水ニハコトサラニ養料ヲ供セントシテ藥品ヲ加フルヲ要セズ）

偖又東京ノ近郊ニハおもだかト稱セラルヽ植物多ク存ス固リ特ニ培養シタルモノニアラズシテ水田ノ中池沼ノ淺處等ニ多ク之ヲ見ル是レ其名稱ハ正確ナルヤ否ヤハ詳ニセザレドモ兎ニ角田夫野人ハ普通ニおもだかト稱シテ之ヲ雜草ト見做セリ其莖葉等ノ狀態ハくわゐト殆ド區別スベカラズタヾくわゐノ方ハ培養セラレタルヲ以テ肥大トナルヲ異リトスルノミ此植物ハ余ガ常ニ敎示ヲ受クル先輩諸氏くわゐト同一物トセリ而シテ大

學所藏ノ標品ニモ同一ノ學名 (Sagittaria sagittifolia L.) ヲ付セリ此おもだかナル植物モ地中莖ヲ有シ其先端ハ膨大シテ球狀ヲナシ且「トッテ」ヲ有スルコト毫モくわゐノ球莖ニ異ナルコトナシ其球ハくわゐノ球ニ比スレバヤヽ細長ノ觀アレドモ極メテ能ク發育シタルおもだかニ於テハ其球莖モくわゐノ球ノ如ク球狀ニ近ヅクヲ見ルナリ又おもだかノ地中莖ニハ往々分岐スルモノアリテ其枝ノ先端ニ球ヲ具スレドモ此ノ如キコトハくわゐニテハ余之ヲ認ルヲ得ザリキサレドモ此ノ如キ些少ノ差異ハ培養ヲ受ルト否サルトニ歸スルモノナラン歟又おもだかニ於テ發生ノ初期ニ生ジタル葉ハ恰モくわゐノ發生ノ場合ニ於ケルガ如ク完全ノ箭形ヲ呈セズホヾ精圓形ヲナスヲ見ル其球莖ハ勿論くわゐノ如ク食用トスルニ妨ゲナシ此おもだかナル植物ハくわゐト同一トスルニ疑ヲ容レザレドモ更ニ此事實ヲ確實ニセンニハおもだかノ球莖ヲ培養シテ肥大セシムルカ或ハくわゐヲ瘠土ニ栽エテ瘦小セシムルモ一ノ方法ナルベシ偖おもだかヲ以テくわゐト同一ト認メタル後モ尚疑問ノ存スルアリ即池澤等ニ自生スルおもだかハくわゐノ原植物ニシテ之ヲ培養シタルニ因リくわゐヲナセルカ或ハくわゐハ他ヨリ移植シ來リ其培養セラレタル場所ヨリ逸脫 (escape) シタルモノガ處々ニ散在シ所謂おもだかトナリテ存在スルカ此疑問ヲ決スルニハくわゐ及おもだかノ兩語ニ就テ何レガ最モ古クヨリ知ラレタルヤヲ穿鑿スルモ一助ナルベシト雖余ノ淺學ナル此ノ點ニ就テハ茫トシテ手ヲ着クル所ナシ但源順ノ和名類聚鈔中已ニくわゐナル語ヲ載セ清少納言ノ枕ノ草紙ニモおもだかヲ記ストニフヲ見レバ此等ノ名稱ハ千年程前ヨリ已ニ知ラレ居ルナラン

東京ノ近郊ニハ尚又おもだかニ近似スル一種ノ植物アリ實際田夫ハ之ヲおもだかト同樣ニ見做シ居ルモ爰ニハおぎなしノ稱ヲ用ヒテ之ヲ記スベシ其形狀ハホボくわゐ又ハおもだかニ近似スレドモ葉ノ形狀概シテ細狹

ナリ今此類ノ植物ノ葉片ノ形ヲA字ヲ以テ代表スルトセンニ其二等邊三角形ヲナセル部ノ高サ（即其三角形ノ高サ）ト脚ノ長サ（即其三角形ノ邊ヲ引長シタル部ノ長サ）トノ割合ヲ見ルニあぎなしノ方ニアリテハ一般ニ三角形ノ高サ脚ノ長サヨリモ大ニシテおもだか又ハくわゐニ於テハ此割合反對トナリ居ルナリサレドモ是ハ概シテ云フモノニシテ悉皆ノ場合ニ適スト云ヒ難シ又あぎなしニハ地中莖ヲ發生シテ其先端ニ球莖ヲ生ズルコトナキモ其葉柄ノ下部ノ内面ニ許多ノ珠芽ヲ包藏スルヲ見ルナリ（珠芽ノ名ハ適當ナリヤ否ヤヲ知ラザレドモ其色、大サ、形狀等おにゆりナドノ葉腋ニ生ズル珠芽ニヤヽ近キヲ以テ假ニ此名ヲ下セリ）即葉腋ニ夥多ノホヾ糸狀ヲナセル白色ノ細柄ヲ簇生シ其先端ニ黒褐色ノ細粒（即珠芽）ヲ戴ケリ柄ノ長キモノハ一寸ニ近シ而シテ長短不齊ノモノ簇生セリ秋季珠芽ノ熟スル頃ニ方リ葉柄ヲ剝ギ去リテ之ヲ見ルトキハ其細塊鱗次重疊シテ頗ル奇異ノ狀ヲ呈スルヲ認ムベシ一個ノ葉腋ニ存スル珠芽ノ數ハ精シク算セザレドモ蓋シ數十顆ニ下ラズ而シテ每葉腋ニ概ネ之ヲ包藏スルヲ以テ一株ノあぎなしニ生ズル珠芽ノ夥多ナルコトハ一株ノくわゐ又ハおもだかノ有スル球莖ノ數ニ超過スルコト甚シ珠芽ハ發育シテ新植物ヲ生ズ此モノハくわゐ又ハおもだかノ球莖ニ相當スルモノニシテ其柄ハ此等ノ球莖ニ連續セル地中莖ニ相當スルモノナルコトハ疑ヲ容レザルナリ一個ノ珠芽ヲ取リテ細ニ撿スルニ一枚ノ薄膜ヲ被フレリ是亦くわゐ又ハおもだかノ球莖ニ存スル薄膜ニ比スベシサレドモあぎなしノ珠芽ニハくわゐノ球莖ニ於ケル如ク節ノ存在スルヲ認メズ（くわゐニハ通例二乃至三ノ節間ヲ有スルハ前ニ述ベタル所ナリ）此珠芽ニハ著シキ「トツテ」ノ如キモノヲ具セズサレドモ其尖端ヲ截リテ顯微鏡下ニ撿スレバ芽ノ幼稚ナルモノナルコトハ明カニシテ生長點ノ存在ヲモ認ムルヲ得ベシ且主ナル生長點ノ外ニ數個ノ生長點ノ側方ニ偏シテ存在スルヲ見ルベシ是レ珠芽ノ發生スルニ方リ根ヲ發スルモ

ノニハ非ルカ已ニくわゐノ球莖ニ於テ「トッテ」ノ下部ニ方リテ根ヲ發スルヲ見レバ此側方ニ偏スル生長點ハ其位置ヨリ推考スレバ根ヲ發スルモノナルガ如キモ更ニ研究スルヲ要スルナリあぎなしの能ク發育シタルモノハ其植物体ノ大サ殆ドくわゐニ近ヅケリ又其地中ニ發スル根ハくわゐ、おもだか等ニ見ルモノニ異ナル所ナキガ如シ其發育ノ初期ニ發スル葉ハ箭形ヲナサズシテ楕圓狀ヲ呈スルコト亦くわゐ、おもだかニ於ケルガ如シ

あぎなしハ昨年十月頃渡邊協氏東京近郊ノ荒井藥師近傍ニテ採集セラレタリ其後余モ同地ニ赴キテ之ヲ得タリ其生ズル所ハ稻田ノ畔ニシテ其近邊ニハおもだかモ雜ハリ生ジ居レリ余ハ其年ノ五月頃東京四ッ谷邊ノ某家ニテ玻璃瓶中ニ培養シタル植物ノ葉ガくわゐニ似テヤヽ細狹ナルヲ認メ之ヲ乞ヒ歸リテ泥土中ニ植ヱ置キシガあぎなしヲ採集シタル後此植物ヲ掘リ出シテ撿シタルニ其葉腋ニ珠芽ノ存在スルヲ見タルニ因テ亦あぎなしナルコトヲ知レリ此植物ハ始メ淀橋（四ッ谷ヨリ一里程）邊ノ農夫ノ賣リニ來リタルモノヲ購求シタルナリト余ノ知人ハ語レリ其後余ハ近郊ノ他所ニテあぎなしヲ採集セントシタレドモ見當ラズおもだかニ比スレバ其散在スルコト頗ル稀ナルガ如シ其葉ハおもだかノ葉ト共ニ十月頃ニ至レバ枯乾シ而シテ珠芽ハ此際完熟シ居ルナリ又余ノ培養シタルモノニ就テ撿シタルニ初期ノ葉ハ完全ノ箭形ヲナサヾルノミナラズ更ニ八九月頃此植物ノ衰ヘントスル際ニハ再楕圓形ノ葉ヲ生ジタルヲ見タリ偖あぎなしヲ採集シタル際近邊ノ農夫ニ其名ヲ尋ヌルモヤハリおもだかト稱セリ而シテあぎなしノ名ハ全ク之ヲ知ラズ余ハ又下總ノ眞間邊ニおとがひなしト稱スル植物アルコトヲ學友ヨリ聞キ居リシ故あぎなしノコトヲ斯ク稱スルナランカト疑ヒ同地ニ赴キテ之ヲ尋ネタルニ此名稱ヲ付シタル植物ハ區々ニシテ定マレル所ナシ土人ニ尋ヌレバ尋ヌルホド混雜スルノ

くわゐトおもだか

ミナレドモみづあふひノコトヲ稱シテおとがひなしト稱スルモノ往々アリ更ニおもだかニ付テ其方言ヲ尋ネタルニ之ヲおとがひなしト稱スルモノニハ出遇ハザリキ而シテ余ハ同地ニ於テ能ク發育シタルおもだかハ多ク之ヲ見ルコトヲ得タレドモあぎなしは採集スルコトヲ得ザリキ之ヲ要スルニ東京近郊ノ土人中ニハあぎなしト云フ方言ハ存シ居ラヌ樣ニ思ハルヽナリあぎなしノ標品ノ大學ニ貯藏シアルモノハ函館ニテ採集セラレタルモノナリ同地ニハ此方言アリヤ否ヤ其後此植物ニ就テ牧野富太郎氏ニ質シタルニ氏ハ以前其鄕國土佐ニ於テ之ヲ採集シ且其おもだかト異ナル所アルヲ以テ其變種ト考定シ置ケリト告ゲラレタリ

（以下次號）

○百花雜記（承前）

松村任三

一ハマヤナギ　綠莖多ク枝ヲ分チ大ナル者ハ二尺餘ニ及ブ花蓋綠色、其瓣末紅色ヲ點ス光澤アルノ瘦果ハ其面ニ細點アリ蓼科ニ屬ス十月下旬安井生ノ採集ニ係ル

一シバナ　深綠色ノ葉ハ多肉質ニシテ鈍三稜、宛然韭葉ノ觀アリ香ナシ葉間蔕ヲ抽キ穗ヲナシテ花ヲ開ク十月下旬實アリ其形楕圓ニシテ縱溝アリ六心皮ヨリ成リ六室ヲ劃シテ各〻細長ノ一子ヲ藏ム芝菜科ニ屬ス安井生之ヲ橫濱ニ採ル

一アキノミチヤナギ　花蓋白色ニシテ綠紅ヲ帶ブ結實ニ及テ花色紅ヲ增ス八雄蘂アリ黃葯、瘦果平滑莖ヲ擁スルノ鞘ニ六條乃至八條アリ十月下旬安井生ノ採集ニ係ル

一ヤマラツキヤウ　莖頭繖狀ニ多梗ヲ出シ六瓣ノ紫小花ヲ開ク六雄蘂アリ瓣外ニ抽出ス葯赤褐色熟シテ黑色ニ變ス花糸ノ本ニ齒叉ナシ、葉扁長其背ニ一隆起アリ百合科ニ屬ス十一月中旬相州邊向陽ノ山原ニ生ス

一ラッキヤウ　十月下旬ヨリ十一月中旬ニ至リ圃園ニ花アリ花色織形ヤマラッキヤウニ似テ稍〻粗大、花糸ノ本ニ齒叉アルヿ是レ此殊標

一ハコベ　白花五瓣、瓣ニ深缺アリ三柱六雄蕋乃至十雄蕋アリ葯初紅色ナリ

一ウシハコベ　上ニ似テ五柱十雄蕋アリ

一キンバイサウ　花被アリ五瓣金黃色ニシテ濶、密瓣二十許アリ其形細長雄蕋ノ如クニシテ頭一缺シ其本ニ小突起アリ多雄蕋、雌蕋十五莖許、子房內數子アリ二列ヲナス

一ツルカノコサウ　三月下旬ヨリ花アリ方莖鰭葉ヲ對生シ五裂ノ小筒花ヲ開ク蕚ナシ三雄蕋アリ筒ヨリ生ス花心一柱アリ筒外ニ抽ク其頭三裂ス子房下位ニシテ內ニ一子ヲ垂下ス

一バイクワイカリサウ　雄蕋殆ト無糸、葯ハ瓣ヲ以テ綻ブ花心一子房アリ一室ニシテ數子ヲ藏ム二列ヲナス子房ニ短柱アリ

一マツブサ　莖頭數葉ヲ簇生シ其下ニ梗ヲ抽キ花ヲ開ク一梗一花、七八瓣アリ內位ノ二瓣ニ紅條アリ

一シモクレン　花ニ九瓣アリ外ノ三瓣ハ細小ニシテ色彩ナク蕚狀ノ觀アリ內ノ六瓣ハ形大ニシテ紫色ナリ多雌蕋アリ花心突起ノ一大柱ニ密布ス各〻紫色ニシテ子房內ニ二子ヲ收ム

* * *

○江ノ島箱根地方植物採集紀行　（承前）

市村塘
安田篤

宮ノ下ノ旅宿ハ「ならや」、「ふぢや」ヲ良トス此邊人家稠密ニシテ繁榮自ラ一市ヲ爲ス之ヨリ道路堅ク歩行困難ナラズ途次岩壁ヲ被覆セル蘚苔、地衣十數種ヲ集ム遙ニ見ル孤家殘屋ノ狀之ヲ昨春祝融ノ威ヲ逞フセシ以

來猶再興ニ至ラザル木賀市ノ景ト爲ス之ヨリ歸路ニ就ク道傍ニ一ノ挽物屋アリ許多ノ木片ヲ俵中ニ藏ム乃チ就テ異種ノ木片數十個ヲ撰出シ其方言ヲ聞キ之ヲ鬻ガンコトヲ求ム主人肯ス此ニ於テ之ヲ携ヘ歸リ博士ニ質シ以テ其學名ヲ知ルヲ得タリ

やしやぶし（Alnus firma, Sieb. et Zucc.）

いぬつげ（方言びんか）（Ilex crenata, Thunb.）

ゑごのき（方言こはぜ）（Styrax japonicum, Sieb. et, Zucc.）

うりのき（方言こうりかへで）（Marlea platanifolia, Sieb. et Zucc.）

いたやかへで（方言れはぱかへで）（Acer Mono. Maxim.）

ねむのき（方言ねぶた）（Albizzia Julibrissin, Boivin.）

そろ（方言その）（Carpinus laxiflora, Bl.）

やまゑんじゆ（方言ゑんじゆ）（Sophora platycarpa, Maxim.）

やまざくら（Prunus Pseudo-cerasus, Lindl.）

あをはだ（Ilex macropoda, Miq.）

此紀行モ餘リ長ビキタレバ之ニテ筆ヲ止ムルコトスベシ終ニ臨ンデ生等一同懇篤ナル敎示ニ預リシコトヲ松村博士ニ多謝ス

同じこゝろにてよめる　篤

かく霜にむら〳〵たてる千草さへ色うつろはぬ松の下蔭

〇日本羊齒科屬徵　（第八十四號ニ續グ）

牧野富太郎

(19) こもちしだ屬 Woodwardia Sm.

囊堆ハ線形或ハ線狀長楕圓形ヲナシテ葉ノ凹處ニ沒在シ羽片幷ニ小羽片ノ中脈ト連續シテ此ト平行シ單列ヲナス苞膜ハ略〻革質ニシテ形狀囊堆ニ同ジ而シテ凹所ノ上ニ横掩シテ宛モ蓋ノ如シ

(八) いぬわらび族 Asplenieæ.

囊堆ハ細脈ニ附着シ中脈ニ向フテ斜メニ其位置ヲ占メ或ハ稍ヤ之ト平行スルモノ間〻之レアリ其形或ハ線形ヲナシ或ハ長楕圓形ヲナス苞膜ノ形ハ囊堆ト同ジク而シテ一片ナルトキハ中脈ニ向フテ開口ス時ニ二片ナルモノアリ

(20) いぬわらび屬 Asplenium L.

囊堆ハ背生シ或ハ略〻縁生ス形ハ線形ナルアリ或ハ長楕圓形ナルアリ苞膜ハ囊堆ト同形ニシテ直ナルアリ或ハ間〻彎曲スルアリ一片ナルアリ二片ナルアリ又平面ナルアリ或ハ脹起セルモノアリテ外縁ニ沿フテ開裂ス

(九) こたにわたり族 Scolopendrieæ.

囊堆ノ狀ハいぬわらび族ニ同ジ唯〻苞膜相對向シテ位置ヲ占メ兩方ヨリ相向ヒテ開裂スルノミヲ異ナリトス

(21) こたにわたり屬 Scolopendrium Sm.

族徵ニ於ケルガ如シ

(十) ゐので族 Aspidieæ.

囊堆ハ背生シ略〻球狀ヲナス又罕ニ楕圓形ノモノアリ苞膜ハ上生シテ其形囊堆ト同シク而シテ或ハ其中心ヲ

以テ合着スルアリ或ハ其一方ノ缺處ヲ以テ合着スルアリ

(22) ゐので屬 Aspidium Sw.

嚢堆ハ略〻球形ヲナシテ細脈上ニ背生シ或ハ頂生ス苞膜ハ圓形ニシテ中心ヲ以テ定着スルアリ或ハ心臟様腎臟形ニシテ其一方ノ缺處ヲ以テ定着スルアリ

此心臟様腎臟形ヲナシ其一方ノ缺處ヲ以テ定着セル苞膜ヲ有スルモノハ殊ニをしだ屬 Nephrodium Rich. ト稱シテ獨立セル一屬トナスモノアリ

(23) たましだ屬 Nephrolepis Schott.

嚢堆ハ圓形ナリ上部ニ分岐シタル細脈ノ頂ニ在テ一般ニ羽片ノ邊緣ニ近邇ス苞膜ハ腎臟形ナルアリ或ハ稍〻圓形ナルアリ

(乙)無苞類 EXINVOLUCRATÆ.

嚢堆ニ苞膜無クシテ裸出ス

(十一) のきしのぶ族 Polypodieæ.

嚢堆ハ葉ノ裂片ノ背ニ着生シ圓形ナリ叉罕ニ長楕圓形ノモノアリ然レトモ其長徑ハ其幅徑ノ二倍長ニ超ユルコトナシ

(24) のきしのぶ屬 Polypodium L.

族徵ニ於ケルガ如シ

(十二) しはがねさう族 Grammitideæ.

囊堆ハ葉ノ裂片ノ背ニ在リテ長徑ハ幅徑ノ二倍長ニ超過シ一般ニ線形ヲ成ス

(25) いはがねさう屬 Gymnogramme Desv.

囊堆ハ葉裏ヲ通過セル脈上ニ在テ線形ヲナシ或ハ線狀長楕圓形ヲナス單一ナルアリ分叉セルアリ

(26) かうもりしだ屬 Meniscium Schreb.

囊堆ハ長楕圓形或ハ線形ヲナシ横過シテ兩者相合シタル細脈ノ上ニ在リ

(27) たきみしだ(新稱)屬 Antrophyum Kaulf.

囊堆ハ脈ヲ追フテ生ジ不齊ナル網狀ヲ呈ス

(28) しゝらん屬 Vittaria Sm.

囊堆ハ連續シテ長線ヲナシ葉ノ邊縁若クハ微ニ縁內ノ處ニ在リ脈ハ獨生シテ互ニ連結セズ

(29) くらがりした屬 Tænitis Sw.

囊堆ハ線形ヲナスト雖モ其線ハ時ニ切斷セルコトアリ中央ニ位置ヲ占ムルコトアリ或ハ略〻縁生セルアリ細脈ハスベテ網狀ヲナス

此屬中本邦ニ產スルモノ唯一種アリくらがりしだト呼ブ狀貌極メテ能クしゝらん屬 Vittaria ノ諸種ニ似タリト雖モ其脈狀ハ却テ此植物ヲシテ籍ヲ Tænitis 屬ニ置カシム本誌第三十二號ニ三好學氏ノ詳細ナル圖說アリ就テ見ル可シ是レ從來知ラレ得タル Tænitis 屬諸種中ノ最モ狹瘠ナル「フロンド」ヲ有スル一種ニ係ル予ハ Tænitis Miyoshiana ノ新學名ヲ之ニ命ゼン而シテ近ク之ヲ Notes on the Flora of Japan. ノ中ニ解釋シ以テ世ニ公ニセン

(30) まめづた屬 Drymoglossum Presl.

囊堆ノ狀ハくらがりしだ屬 Tænitis ト殆ンド相同シ然レドモ葉形ニ兩般アリ

(31) あみしだ屬 Hemionitis L.

囊堆ハ脈ニ沿フテ連續シ繁ク網狀ニ結成シ時ニハ尙其間ニ現出スルヲ見ル

（未完）

○松ノみどりノ運動ニ就テ （第八十號ノ續キ）

藤井健次郎

「松ノみどりノ運動ニ就テ」ハ久シク中止セシガ松ノみどり其物ハ早既ニ再度運動ヲ初メ觀察ノ好時期トナレリ依テ此ニ再度舊稿ヲ繼ガントス

前ニ大樹古木ノ爲メニ外圍ノ影響ヲ受クルヿ少ナキ木ト云ヒタルヲA樹ト名ケ外圍ニ曝サレタル樹ト云ヒシヲBト名クベシ

五月三日雨天ニシテみどりハ總テ樹ノ中心ニ向ヘリ

A 五月六日午後四時風ハ南或ハ南東ヨリ吹キみどりハ大抵北西ニ屈垂セリ

A 五月七日零時四十五分天氣快晴大陽ハ南、南西ニ方リ風ハ南又ハ南東ニシテみどりハ各其頂端ニ於テ著シク南東ニ屈垂セリ依テ此時北東即チ屈垂ノ方向ニ直角ナル方位ニ臺ヲ据ヘ其屈垂ノ狀ヲ寫眞セリ

此ニ屈垂ノ度ヲ表スベケレ𪜈今囘ノ觀察ハ只此運動現象ハ一定ノ狀ヲ呈スルモノナルヤ或ハ不規則ニシテ容易ニ其原因結果ヲ究メ得ベカラザルベキヤヲ見ンガ爲メニシテ今之ヲ以テ直チニ研究問題ニ宛テタルニ非ズ改言スレバ一ノ研究問題ト爲シ得ベキヤ否ヤヲ見ルノ爲メナリシヲ以テ大体ノ觀察ニ止マリ屈垂ニ於ケル

Radius of Curvature ナドヲ度ラザリシ故ニ此ニ之レヲ記シ難シ

月七日午後六時天少ク曇リ風ハ南ニシテ屈垂ノ方向ハ零時四十五分ニ於ケルト變化無キガ如ク若シ多少ノ變化アリトセバ南方ヘ偏セリ而シテ屈垂ノ度ハ前ノ半ナリキ（即チ Radius of Curvature 增大セリト云フベシ）

A　五月七日午後九時夜晴朗南風微ニシテ屈垂ノ方向南、南西ニシテ屈垂ノ度ハ稍減シタリ

A　五月七日正午十二時（夜）　夜晴朗風南温度攝氏十三、五屈垂ノ方向南西ニシテ少シク南南西ノ氣味アリ

此ニ單ニ屈垂ノ方向或ハ度ト云ヒ此樹ノ何ノ部分ノみどりト云ハザルハ同ジ木ノみどりハ奇妙ニ一致シテ大概一定ノ方向ヲトレバナリ

五月六日午后四時ニ近傍ノ松樹中甚敷北ニ屈垂シタルモノアリシガ七日ノ正午十二時ニ至リ稍南ヘ屈シ七日正午十二時（夜）ニ甚敷南ヘ屈セルヲ見タリ

A　五月八日午前五時大陽上リツヽアリ天大概晴レ月尚見ヘ風無ク温度攝氏八、八みどりノ屈垂略北向ニシテ中ニハ方向揃ハズシテ放射狀ニ亂レタルモアリ屈垂ノ度ハ稍減シタレ𪜈尚直立ニハ至ラズ

（之レ或ハ午前五時前ニ既ニ垂直ノ狀ヲ經過シテ今北方ヘ屈シツヽアルモノナランカ）

A　五月八日午前七時半大陽輝キ風無シ温度攝氏十八、二みどり屈垂ノ方向幷ニ其度見ルベキ變化ナシ

工科大學ノ前ヨリ赤門ニ至ル間高サ一間乃至二間ナル松木數十本アルガ全園ノ松木其みどりノ屈垂ノ方向ニ於テ屢々一致ヲ表スルヿアリ即チ五月六日ノ夕全園ノ摸樣概シテ北向七日ノ正午ニハ概シテ南向八日朝七時半ニハ概シテ直立ナリキ

B　五月八日午前八時十五分大陽輝キ温度攝氏二十みどりノ屈垂ノ方向南、南西屈垂ノ度强シ此時西、北西、

ニ臺ヲ据ヘ其狀ヲ寫眞ス

A　五月八日午后二時半大陽輝キ西（午後三時）ニ方レリ溫度攝氏廿四風弱ク風南、南西ニシテみどり屈垂ノ方向北、北東屈垂ノ度稍增加セリ此日早朝方向及ヒ屈垂ノ度不揃ノみどりアリシモ此時ニ至リ大概一致セリ

仝午后二時半全圖松木ノみどりモ亦概シテ北、北東ナリ

B　五月八日午后二時四十五分大陽輝キ木ノ西ニ方レリ溫度攝氏廿四、風强クシテ間斷ナシ風大体南ニシテ稍南東ノ氣味アリ木ノ全觀此時强風ノ爲メ亂レタルニ似テ中ニハ朝ニ於ケルト全ク反對ノ方向ヲ保ツモアリ多數ハ各頂端ニ於テハ朝ノ位置ヲ保チ各自其基底ニ於テハ曲リヲ戾シ就中一二ハ直立セリ下方ノ枝ニシテ殆ンド地面ニ接シ外圍ノ影響ヲ受クルヿ少ナキモノハ其容亂レズ相並ンデ北北東ニ向テ屈垂セリ

此日午后六時半全圖ノ松ノみどり全然其方向ヲ轉ジ全觀急ニ一變セリ

A　五月八日午后六時五十分曇天溫度攝氏十六、二風南みどりハ南、南西ニ屈垂シ其度增加セリ

此ニ著シキみどりノ變化ハ此日二時半ヨリ六時五十分ニ至ル僅々四時間餘ニシテみどりハ正反對ノ方向ヲ取ルニ至レリ之レヲ回轉セルモノトセバ四時間餘ニシテ百八十度ヲ回轉セリト云フベシ而ソ此間外圍ノ變化ハ正シク日沒ニ際シテ起レルモノニシテ前時ト比較セバ天曇リ溫度著シク下降シ風力稍減シタルノミナリ

B　五月八日午後七時曇天溫度攝氏十六、五南風强シ（此木ハAヨリモ風ヲ受クルヿ多シト知ルベシ）屈垂ノ方向一定セズ稍亂レタルニ似タリ去レ𪜈一般ノ傾向ハ南、南東ニアリ屈垂ノ度モ亦みどりニヨリテ異レリ或ハ著ク屈シタルモアリ又直ナルモアリ去レハ此木ニ於テモ亦午后二時四十五分ヨリ仝七時ニ至ル四時間餘ニシテ急ニ百三十五度ヲ回轉セルモノヽ如シ

（未完）

○柳花雜記

松村任三

一シダレヤナギ　雄ノ葇荑ニ短柄アリ四五葉ヲ散布ス葇荑ヲ成スノ鱗苞楕圓形淡綠黃色ニシテ踈毛アリ二雄蕋ヲ擁ス葯黃色、時ニ三雄蕋ナルヿアリ其本ニ黃色ノ密腺二個アリ　雌ノ葇荑ニモ亦短柄アリ子房ニ極メテ短キ柄アリ殆ト無キモ同シ、淡綠色ニシテ平滑、柱ナシ頭微ニ二裂シテ淡黃白色、蜜腺アリ扁平且短濶、踈毛アルノ鱗苞ハ子房ヨリモ短シ

一シバヤナギ　雌ノ葇荑ニ短柄アリ三四葉之ニ散布ス葇荑ヲ成スノ鱗苞ハ綠色ニシテ長形其頭鋭ナラズ子房ニ柄ナシ綠色ニシテ、平滑短柱アリ頭二裂シテ紅色ヲ帶ブ短小ノ蜜腺アリ總軸ニ毛アリ三月下旬花アリ

一クロヤナギ　雄ノ葇荑ニ梗ナシ葉ニ先テ發生ス一雄蕋アリ葯初紅色、之ヲ擁スルノ鱗苞長鋭ニシテ黑色ナリ三月下旬花アリ (Salix purpurea.)

一タチヤナギ　雌雄ノ兩葇荑共ニ長梗アリ三四葉之ヲ護ス雄ノ葇荑ニ三雄蕋アリ葯黃色、淡黃色鋭頭ノ鱗苞之ヲ擁ス內ニ一片ノ蜜腺アリ葇荑ノ軸ニ毛アリ雌ノ葇荑ニ雌蕋アリ其雌蕋ニ柄アリ其柱頭ハ二裂ス淡黃色ニシテ毛アルノ鱗苞之ヲ擁ス內ニ黃色ナル一個ノ蜜腺アリ雌蕋ノ柄ヨリモ短シ三月下旬花アリ

一キヌヤナギ　雄ノ葇荑短クシテ梗ナシ毛多キ黑色ノ鱗苞ハ纖細ノ二雄蕋ヲ擁ス其雄蕋鱗ヨリ長キヿ倍餘、葯黃色ナリ三月中旬花アリ

一ネコヤナギ　雌ノ葇荑長クシテ梗ナシ毛多キ黑色ノ鱗苞ハ毛多キ一雌蕋ヲ抱ク其雌蕋ニ無毛ノ長柱アリ頭ハ微ニ二裂ス內ニ一個ノ蜜腺アリ其長サ鱗苞ニ半バス雌蕋ニ殆ト柄ナシ雄花ニ一雄蕋アリ葯初紅色ナリ黑

色ノ鱗苞之ヲ護ス雌雄兩本共ニ枝ニ灰白ノ密毛アリ

一ヤマネコヤナギ　白毛アルノ子房ハ柄ヲ有スト雖鱗苞ノ長サニ及バズ柱頭黄色ニシテ四裂ス鱗苞黒色、毛多シ一個ノ蜜腺アリ其長サ子房柄ノ半ニ至ラズ

一マルバヤナギ　雄ノ葇荑ニ長梗アリ四五葉之ニ散布スルノ狀タチヤナギニ彷彿タリ雄蕋四莖（時ニ六雄蕋ナルコトアリ）アルト蜜腺二個アルトニ至テハ大ニ異ナレリ鱗苞淡黄色ニシテ內面ニ毛アリ鱗頭鋭ナラズ

Salix subfragilis *Anders.* 四月中旬花アリ

一コリヤナギ　雄本ハ莖紅色ヲ帶ブ初生葉ノ背ニ絹ノ如キ毛アリ雄ノ葇荑ニ短梗アリ鋭頭ノ鱗苞ハ末黒色本紅色ニシテ白毛ヲ生ス一雄蕋アリ葯初メ紅色ニシテ美麗、後黒色トナル一個ノ蜜腺アリ扁平鈍頭　雌本ハ莖白色ニシテ平滑、葇荑ニ短梗アリ鱗苞黒色ニシテ白毛アリ短白毛アル卵圓形ノ子房ヲ護ス柱ナシ其頭四裂ノ狀ヲナス一個ノ蜜腺アリ三月下旬花アリ

一ホソバコリヤナギ　鈍頭ノ小鱗苞ハ末黒色本紅色ニシテ美麗ナリ無柄有白毛ノ子房ヲ護ス無毛ノ柱アリ長カラズ其頭四裂紅色ニシテ美ナリ

一カハヤナギ　雄花ニ一雄蕋アリ其葯初ハ紅色ナリ黒色ノ鱗苞之ヲ擁ス雌花ノ子房ニ短柄アリ黒色鈍頭ノ小鱗苞之ヲ護ス

○日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

醫治効用　有加里葉ハ解熱ノ特効藥ト爲シ瘧、間歇熱、窒扶斯熱ニ用フ或云治療上ノ經驗詳カナラズ數年以

來諸家泥瘴熱間歇熱ニ試用セシニ其解熱ノ効確實ニシテ且其効ノ迅速ナルコト規尼涅ニ劣ラズシテ反テ優レリト或云有加里葉ノ解熱ノ効アルコト遠ク規尼涅ニ及ハズト又ケルネル氏統計書ニ間歇熱患者四百三十貳人中有加里葉ニテ治セシ者三百拾八ニシテ之ニ因テ治セザル患者ニ規尼涅ヲ用ヒテ全治セシ者百人ニ二十八人ノ割合ナリトス Curnow 氏ハ有加里葉酒精丁幾ヲ熱病患者ニ用ヒテ功驗アリト二回之ヲ報告セリ或云一日ニ三乃至四茶匕宛熱時ニ與フト又 Fedeli 氏ハ有加里葉殊ニ其丁幾劑ハ熱病ニ特効アルノミナラズ衰弱症及ヒ貧血症ニ殊効アリトス或ハ氣管枝炎ニ用ヒテ効驗アリ○衝動鎭痙ノ一良藥トス又此葉ヲ卷烟草ニ製シ常ニ飲用スレバ氣管枝炎、喘息、百日咳等ヲ治ス又 Gimbert 氏ハ有加里葉ヲ以テ繃帶スルノ新法ヲ報告ス此法ハ葉ヲ以テ疵傷ニ貼用スルニ在リ此レ疵傷ノ癒合ヲ促スノミナラズ惡臭ヲ消滅スルノ効アリト

有加里油ハ其主治略ホ有加里葉ニ同ジ濠洲ニテハ瘧及ヒ肢痛熱ニハ三十滴乃至六十滴ヲ半酒盞ノ水ニ和シ其發作期ニ用ヒ通常强壯藥ニハ二十滴乃至三十滴ヲ酒或ハ水ニ和シ一日三回服用ス又泥瘴熱ニ用ヒテ解熱ノ効ヲ奏シ神經系統ニ害アルコト無シ○此藥傳麻窒斯ニ外敷シテ効驗アリ又此油一写乃至三写餘ヲ鋸屑一斗五六升ニ混和シ防腐藥トス

樹皮ハ解熱ノ一藥トス又幹ヨリ分泌スル樹脂ハ大氣ニ觸レテ褐赤色ノ塊ト爲リテ頗ル光輝アリ其味收斂性ニシテ吉納ニ似タリ故ニ之ヲ有加里吉納ト稱シ濠洲ニテハ藥用ニ供ス

其他葉ヲ粉末トナシ之ヲ撒布シ或ハ煎汁ヲ灌キテ蔬菜等ノ害蟲ヲ驅除スト兵庫勸業新報ニ云蔬菜ニ裸蟲發生セシ𬼀該葉ヲ水煎シ濺キシニ裸蟲忽チニ斃死セリ」ト

皮部ハ染料ト爲シ或ハ鞣革用トシ內皮纖維ヨリハ白紙ヲ抄製ス

木部ハ堅牢緻密ニシテ昆蟲ノ蝕害ヲ受ルコト無ク且濕氣ニ耐フ此材ハ其質美麗ナルニ因リ建築用或ハ裝飾用トシテ用フ濠洲ニテハ此材ヨリ得ル所ノ板ハ長サ百六十尺幅一尺四五寸厚サ五寸餘ヲ通常トス

四十五　コロシント

羅甸名 Citrullus Colocynthis, Schrader.

Syn. Cucumis Colocynthis, Linn.

葫蘆科

亞弗利加北部等ニ自生スル宿根蔓草ニシテ廣濶ナル根頭ヨリ莖ヲ生シ地上ニ匍匐シテ延長シ類灰色ヲ呈シ纖長柔軟ナル枝抄ヲ分岐ス而シテ莖及ヒ枝抄ノ表面矮短ナル剛毛ヲ密生ス葉ハ互生ニシテ葉柄纖長毛茸ヲ帶ヒ其側方ニ蔓鬚ヲ有ス葉面ノ外線三角形ヲ爲シ其ノ長サ均等ナラズ八分四五厘ヨリ三寸二三分ニ至リ殆ンド掌狀ニ缺裂シ其裂片或ハ缺刻シ或ハ波濤狀ヲ有シ其邊緣間マ返卷シ表裏兩面殊ニ其裏面ニ於テ矮短猪毛狀ノ刺ヲ有シ其質粗糙表面暗綠色ニシテ裏面ハ類灰色ヲ呈シ其形狀宛モ西瓜ノ葉ニ似テ細小一家花（一株ニ雌雄兩花ヲ有ス）ニシテ花ハ稍々大ナリ花梗ハ葉腋ヨリ抽出シ其頂端一花ヲ著ク雄花ハ其萼鐘狀ニシテ外面毛茸ヲ有シ先頂五個ニ缺刻シ其截片狹隘ニシテ銳尖ヲ有ス花冠ハ單瓣盃形其下部ニ於テ萼ノ脚部ト附着シ先頂五個ニ缺刻シテ半バニ達シ暗黃色ヲ呈シ脈絡顯著ニシテ外面軟毛ヲ帶フ雄蘂三個花冠ノ下部（筒狀部）ヨリ生ジ花絲矮短球形ニシテ葯ハ扁平廣濶且延長シタル囊帶ヲ有シ其一個ハ單房ニシテ他ノ二個ハ二房ナリ雌蘂ハ或ハ痕跡ヲ有シ或ハ全ク之ヲ缺如ス雌花ハ其萼ノ筒狀部ニ於テ實礎ト附着シ或ハ雄花ト同一ナル萼ヲ有スル者アリ花冠ハ稍々細小雄蘂三個細小ニシテ其發育完全ナラズ實礎ハ下立性肥厚球卵圓形ニシテ單房ヲ有シ外面毛茸ヲ帶フ胎盤三個

肥大肉質壁立性ヲ爲シ內方ニ突出シ中心ニ至リ二股ニ分裂シ實礎ノ表面ニ接近シテ返曲シ許多ノ卵子ヲ附着ス花柱矮短ニシテ柱頭三個ノ缺刻アリ花後漿果ヲ結フ球圓形ニシテ平滑其直徑二寸餘乃至三寸縱溝渠樣類灰色ノ斑點ヲ有ス子殼ハ菲薄硬堅ニシテ單房ヲ有シ瓢肉（果肉）ハ柔軟海綿樣多汁ノ組織ヨリ成リ三個ノ胎盤ハ果實ノ中心ニ至リ二股ニ分裂シ果壁ニ接近シテ空間中ニ返卷シ多數ノ種子ヲ附着ス故ニ其橫斷面ニ於テハ六個ノ擬房ヲ現ハシ各擬房中ニ胎盤ノ股脚ヲ彎入ス種子ハ扁平卵圓形ニシテ長サ大約二分八厘許平滑ニシテ暗褐色ヲ呈シ其邊緣隆起セズ胚子ハ平面凸圓形ノ子葉ヲ有シ根芽ハ矮小ニシテ蛋白質ヲ有セズ根ハ木質ニシテ肥大延長分岐シ黃色ヲ呈ス

本植物ハ亞弗利加北部、亞拉毘亞ノ南部、西里亞、及ヒ前印度西北部ニ於ケル砂漠地ニ自生スチペルス島、西斑牙ノ南部ニ於テ培養ス又明治十八年內務省衞生局藥草試植園ニ於テ坊間ニ鬻賣スル古魯聖篤實ノ種子ヲ採リ播下セシニ發生シ漸次成長シテ開花結實ス然レドモ降霜ノ候ニ至リ凋萎枯死ス

亞弗利加東部、地中海ノ沿岸諸國等ニ於テ專ラ栽培スル Citrullus vulgaris, Schrader. (Cucumis Citrullus, Linn.) ハ本植物ニ極メテ類似スト雖ドモ一年草ニシテ其葉殆ンド平滑且大ナリ而シテ稍ヽ大ナル肉質ノ果實ハ黃色若クハ赤色ノ瓢肉ヲ以テ充盈シ通常苦味ヲ有セズ故ニ食用ニ適應ス此レ本植物ト異ナル所ナリ

Citrullus vulgaris, Schrader. ハ必ズ亞弗利加熱帶地ノ產ニシテ往時埃及人之ヲ栽培スト

Citrullus amarus, Schrader. ノ果實ハ味ヒ苦クシテ食用ニ適應セズ

藥品　古魯聖篤實　Fructus Colocynthidis.

日本藥局方ニハ本植物ノ果實ヲ以テ藥用ニ供ス

收穫　古魯聖薦實ハ秋時ニ於テ採集シ外皮ヲ剝除シ爐火ヲ以テ速カニ乾燥スルヲ通常トス又或ル場合ニ在テハ日光ニ曝露シ徐々ニ乾燥スルコトアリ罕ニハ外皮ヲ剝除セズシテ速カニ乾燥スト云フ　（以下次號）

○「さといも」ニ就テ（第四版附キ）

理科大學　安田篤

前々號ニ於テ「はらん」ヲ述ベタレバ今度ハ「さといも」ノ花ニ就テ陳ブル所アラントス

先ヅ「さといも」ノ分類上ノ位置ヲ示セバ左ノ如シ

Divison. Phanerogamæ.　顯花植物
Subdivision. Angiospermæ.　被子類
Class. Monocotyledonæ.　單子葉門
Order. Spathifloræ.　苞花群
Family. Araceæ.　天南星科
Subfamily. Colocasieæ.　芋亞科
Colocasia antiquorum, Schott.　サトイモ

此植物ハ通常人ノ知ル如ク粉質ノ塊根ヲ有シ葉片ハ廣ク且ツ大ナリ單葉ニシテ楯狀ヲ爲シ基底ニ截込アリ隨テ箭形トナル葉脉ハ網狀ヲ爲シ多數ノ單子葉植物ニ於ケル如ク並行セズ葉柄ハ太ク且ツ長クシテ其葉片ニ附着スルヤ葉片ノ中央部ヨリモ下方ニ偏ス花ハ無被ニシテ全ク蕚及ビ花瓣ヲ缺キ相集マリテ肉穗花(Spadix)ヲ作リ佛燄（Spathe）ト名クル苞ノ種類ニ由テ圍繞セラレ之ヨリ下部ニ長梗アリ佛燄ハ直立シテ捲旋シ內部ニアル肉穗花ヨリモ長シ其先端ハ尖リ下方ハ雌花ノ始マル所ニ至テ少シク縊レ之ヨリ下部ハ更ニ膨大ス盖シ內

部ニアル肉穗花ノ形ニ摸フナリ佛餤ノ色ハ上部ハ淡黄色ニシテ縊レタル所ハ紅色ヲ帶ビ之ヨリ以下ハ淡黄色ニシテ基底ハ再ビ紅色ヲ呈ス肉穗花ハ雌雄花ヲ異ニシ上部ニ雄花ノ群アリ下部ニ雌花ノ群アリ又雌花ニ混ジテ許多ノ發育不完全ノ花アリ肉穗ノ頂ハ尖リ無被ニシテ白色ヲ呈ス雄花ハ淡黄色ニシテ八室ヲ有スル無柄ノ葯ヲ具ヘ其中ニアル花粉ハ球狀ヲ爲ス雌花ハ淡黄色ノ柱頭及ビ短柱ヲ有シ子房ハ大ニシテ綠色ナリ一室ニシテ側膜胎座ヲ具ヘ直生胚珠ヲ藏ム漿果ヲ結ブ又發育不完ノ花ハ雄花ト同ジク淡黄色ヲ帶ビ之ヲ横斷若クハ縱斷スルモ只多肉ナルヲ見ルノミ

凡ソ「さといも」ハ十月頃開花スト雖其花ヲ見ルヿ甚稀ナリ蓋シ此植物ハ廣ク塊根ヲ食用ニ供スルニ由リ其人爲培作ノ爲ニ種子ノ繁殖法ハ退歩セシ者ナルヿ言ヲ俟タズ

第四版ノ圖中(1)ハ「さといも」ノ全圖、(2)ハ佛餤及ビ其內部ニアル肉穗花ヲ示シ、(3)ハ佛餤ヲ去リ肉穗花ノミヲ出シタル者ニシテ上部ニ雄花アリ下部ニ雌花アリ又雌花ニ混ジテ少シク長キ發育不完全花アリ、(4)ハ雄花ヲ横ヨリ見タルモノ(5)ハ同上ヲ下ヨリ見タルモノニシテ八室ヲ示ス、(6)ハ同上ノ一室、(7)ハ雌花ヲ横ヨリ見タルモノ(8)ハ同上ノ縱斷面、(9)ハ同上ノ横斷面、(10)ハ直生胚珠、(11)ハ發育不完全花、(12)ハ同上ノ縱斷面、(13)ハ同上ノ横斷面ヲ示ス

○總房地方植物採集紀行

市村塘
安田篤

明治廿七年三月廿五日天霽ル余等松平齋氏ト共ニ午前八時東京越前堀ヲ拔錨シ十時三十五分上總國櫻井近海ヘ着ス之ヨリ艀船ニテ二十町許ノ處ヲ渡ル此邊猶淺海ナルヲ以テ來リ迎フル人力車ニ乘リ以テ彼岸ニ達ス時

ニ十一時四十分ナリ乃チ櫻井宿角松ニ於テ午飯ヲ喫ス庭前ニ「りうぜつらん」(Agave americana, L.)ノ巨大ナル者數株ヲ見ル午後一時鹿野山ニ向フ途次採集物許多アリ今櫻井ヨリ鹿野山ニ至ル間ニテ採集セシ植物ヲ擧グレバ左ノ如シ

Stellaria media, L.	ハコベ
Cerastium vulgatum, L. var. glandulosum, Koch.	ミミナグサ
Rhodea japonica, Roth.	オモト（果實）
Eritrichium pedunculare, DC.	タビラコ
Stellaria uliginosa, L.	ノミノフスマ
Ranunculus ternatus, Thunb.	キツネノボタン
Cardamine sylvatica Link.	タネツケバナ
Veronica agrestis, L.	イヌフグリ
Vicia sativa, Koch.	ヤハズエンドウ
Fragaria indica, Andr.	ヘビイチゴ
Brassica chinensis, L.	ナタネナ
Taraxacum officinale, Wigg. var. corniculatum, Koch. et Ziz.	タンポポ
Pisum sativum, L.	エンドウ
Viola odorata, L.	ニホヒスミレ
Viola Patrinii, DC. var. chinensis, Ging.	スミレ
Viola sylvestris, Kit. var. grypoceras, A. Gray.	タチツボスミレ
Carex Morrowii, Boott.	カンスゲ
Potentilla fragarioides, L. var. stolonifera, Lehm.	キジムシロ
Lampsana apogonoides, Maxim.	コオニタビラコ
Isopyrum adoxoides, DC.	ヒメウズ
Stachyurus præcox, Sieb. et Zucc.	キフヂ
Eurya japonica, Thunb.	ヒサカキ
Petasites japonicus, Miq.	フキ

Camellia japonica, L. ツバキ

Euphorbia helioscopia, L. トウダイグサ

Sonchus oleraceus, L. ノゲシ

Poa annua, L. イチゴツナギ

Ajuga decumbens, Thunb. var. sinuata, Fr. et Sav. キランサウ

Gentiana squarrosa, Ledb. コケリンドウ

Mazus rugosus, var. macranthus, Fr. et Sav. サギゴケ

Chrysosplenum Grayanum, Maxim. var. nipponicum. Fr. et Sav. ミヅネコノメサウ

Vicia tetrasperma, Mœnch. カスマグサ

Alopecurus geniculatus, L. スヽメノテッポウ

Astragalus lotoides, Lam. レンゲサウ

Veronica peregrina, L. ムシクサ

Arisæma japonicum, Bl. テンナンセウ

Lindera sericea, Bl. クロモジ

Cephalotaxus drupacea, Sieb. et Zucc. イヌカヤ

Rumex acetosa, L. スカンポ

Gnaphalium multiceps, Wall. ハヽコグサ

Ranunculus sceleratus, L. タガラシ

Valeriana flaccidissima, Maxim. ツルカノコサウ

Chrysosplenium alternifolium, L. var japonicum, Max. チヨノメサウ

Edgeworthia papyrifera, Sieb. et Zucc. ミツマタ

Gerbera anandria, Schultz. センボンヤリ

Anemone cernua, Thunb. オキナグサ

Woodwardia orientalis, Sw. コモチシダ

Asplenium incisum, Thunb. トラノヲシダ

Davallia tenuifolia, Sw. ホラシノブ

Pyrus Maulei. クサボケ

Lomaria nipponica, Kunze. シヽガシラ

Rubus Buergeri, Miq. フユイチゴ

午後七時鹿野山ニ達シ丸屋ニ投宿ス櫻井ヨリ鹿野山マデ凡ソ三里許ナリ

廿六日曇、午前七時過鹿野山ヲ出發シテ行クヿ八町許或ハ木ヲ攀ヂ或ハ岩ヲ傳ヒ以テ瀑布ヲ採ル十一時五分市宿ニ着シ小倉屋ニテ晝飯ヲ終ヘ二時過ヨリ三本松ニ向フ途スガラ雨降ル六時十五分豐桝屋ニ投宿ス鹿野山ヨリ市宿迄凡ソ二里、市宿ヨリ三本松迄モ凡ソ二里ナリト云フ左ニ鹿野山ヨリ三本松ニ至ル間ニテ採集セシ植物ヲ掲グ

Illicium religiosum, Sieb. et Zucc.	シキミ
Buxus japonica, Müll.	アサマツゲ
Chamaele tenera. Miq.	セントウサウ
Erigeron Thunbergii, A. Gary.	アズマギク
Nanocnide japonica, Bl.	カテンサウ
Lycopodium serratum, Thunb.	タウゲシバ
Nepeta glechoma, Benth.	カントリサウ
Draba nemoralis, L.	イヌナヅナ
Euphorbia lasiocaula, Boiss.	タカトウダイ
Dumnacanthus indicus, Grætn.	アリドウシ(果實)
Marsdeniat omentosa, Morr. et Decne.	キジヨラン
Coptis orientalis, Maxim.	ワウレン一種 (果實)
Ophiorrhiza japonica, Blume.	ジヤコウサウ
Daphne kiusiana, Miq.	コセウノキ
Mitchella undulata, Sieb. et Zucc.	ツルアリドオシ(果實)
Aucuba japonica, Thunb.	アヲキ
Spiræa Thunbergii, Sieb.	ユキヤナギ
Salix purpurea, L.	カハヤナギ
Bartramia pommiformis.	リンゴゴケ
Weisia viridula.	
Hypnum sp.	
Pogonatum sp.	

廿七日曇、午前七時過三本松ヲ出立シ十時十分藏玉ニ着シ吉本屋ニテ晝飯ヲ喫シ之ヨリ安房國清澄山ニ向フ鶯聲頻リニ余等ヲ迎フル者ノ如シ此間道路宜シカラス午時六時過清澄山ニ達シ山口屋ヘ投宿ス三本松ヨリ藏玉迄凡ソ二里、藏玉ヨリ清澄山迄三里十八町アリ三本松ヨリ清澄山ニ至ル間ニテ採集セシ植物ハ左ノ如シ

Gentiana Thunbergii, Griseb.　ハルリンドウ
Prunus communis,　スモヽ
Malva pulchella, Rerhn.　フユアフヒ
Euptelaea polyandra, Sieb. et Zucc.　フサザクラ
Gleichenia glauca, Hook.　ウラジロ
Andromeda japonica, Thunb.　アセビ
Carex vulgaris, Fries.　アゼスゲ
Omphalodes japonica, Maxim.　ヤマウグヒス
Helinopsis glandiflora, Fr. et Sav.　シヤウジヤウバカマ
Anemone hepatica, Gort.　ミスミサウ
Asarum Blumei, Duch.　カンアフヒ

Asarum albivenium, Regel.　ランエウアフヒ
Pylora, potundifolia, L.　イチヤクサウ
Adiantum monochlamys, Eat.　ハコネサウ
Asplenium lanceum Thunb.　ヘラシダ
Polypodium hastatum, Thunb.　ミツデウラボシ
Polypodium lingua, Sw.　ヒトツバ
Daphane Pseudo-mezereum, A. Gray.　ナツボウズ
Goodyera velutina, Maxim.　ビラウドラン(果實)
Goodyera Schlechtendaliana, Reich.　ミヤマウヅラ(無花)
Polypodium lineare, Thunb.　ノキシノブ

廿八日雨、措葉ヲ終ヘ九時二十分樵夫一名ヲ傭ヒ「せきこく」、「むぎらん」、「かしのきらん」、「まめづたらん」等ノ蘭科植物ヲ採集ノ爲摩尼、如意ノ二峯ニ上ル採集物少ナカラス午飯ヲ山中ニテ喫シ午後二時過歸宿ス之ヨリ小湊ニ向フ六時五分該處ニ着シ清海屋ニ投宿ス此日ハ全ク雨中ノ採集ナリキ清澄山ヨリ小湊迄二里九町六間ナリ其間ニテ採集セシ植物ヲ左ニ示ス

Mæsa doræna, Bl.　イヅセンリヤウ
Saccolabium sp.　カシノキラン(果實)
Bulbophyllum inconspicum, Maxim.　ムギラン(無花)
Bulbophyllum Drymoglossum, Maxim.　マメヅタラン(無花)
Machilus longifolia, Bl.　アヲガシ
Rubus palmatus, Thunb.　モミヂイチゴ
Iris japonica, Thunb.　シヤガ
Akebia quinata, Decne.　アケビ
Lysimachia linearloba, Hook et Arn.　ハマボッス
Crinum, asiaticum. L. var. declinatum, Kunth.　ハマオモト(無花)
Loranthus Kæmpferi, Maxim.　マツグミ(果實)
Raphanus sativus, L.　ダイコン
Lomaria euphlebia, Kunze.　キヂノヲ
Ardisia crispa, DC.　マンリヤウ(果實)
Dendrobium moniliforme, Sw.　セキコク(果實)

廿九日晴、六時過小港ヲ出立シ天津ヲ經午後三時和田ノ金子屋ニ着シ暫時休息ノ後チ倉ニ向フ六時四十五分千倉温泉ニ投宿ス圖ラザリキ該旅宿ハ肺病患者ノ定宿ナラントハ此夜安眠ヲ貪ルコト能ハズ小港ヨリ天津迄凡ソ一里天津ヨリ千倉迄九里二十一町三十四間ナリ其間ニテ採集セシ植物ハ左ノ如シ

Lathyrus maritimus, Bigel. ハマエンドウ
Polygonum aviculare, L. ニハヤナギ
Carex macrocephala, Willd. コウボウムキ
Kenothera biennis, var. Lamarckiana, Ser. ツキミサウ

Lotus corniculatus, L. var. japonicus, Regel. ミヤコグサ
Juniperus littoralis, Maxim. ハヒネズ
Sedum oryzifolium, Makino. ダイトゴメ(無花)
Pisum sativum, L. エンドウ
Vicia Faba, L. ソラマメ

三十日例ノ措葉ヲ終ヘシ後八時廿五分千倉ヲ出發シテ布良ニ向フ此日烈風砂ヲ飛バシ面ヲ撲ツコト甚シキニ關ラズ或ハ海岸ニ出デ、海岸植物ヲ尋ネ或ハ本道ニ戻リテ通常植物ヲ採ル此邊海岸ヲ以テ牛ノ牧場ニ充ツル處アリテ午後六時過布良柏屋ニ投宿ス千倉ヨリ布良ニ至ル三里十二町其間左ノ植物ヲ採集ス

Piper Futokadzura, Sieb. et Zucc. フウトウカヅラ
Plantago asiatica, L. オホバコ
Nasturtium palustre, DC. スカシタゴボウ
Melilotus arvensis, Wall. シナガハハギ
Medicago denticulata, Willd. ウマゴヤシ
Sagina maxima, A. Gray. ツメクサ
Thlaspi arvense, L. グンバイウチハ

Dianthus japonicus, Thunb. ハマナデシコ
Polygola sibirica, L. ヒメハギ
Ixeris debilis, Gray. ツルニガナ
Orobanche ammophila, C. A. Mey. ハマウツボ(果實)
Salsola soda, L. チカヒジキ(無花)
Wedelia calendulacea, Less. forma. ハマグルマ
Corydalis Wilfordi, Regel. キケマン

Arabis Stelleri, DC. var. japonica, Fr. Schm. ハマハタザホ

Acorus gramineus, Ait. セキシヨウ

Lithospermum Zollingeri, A. DC. ホタルカヅラ

Tetragonia expansa, Ait. ツルナ

Convolvulus japonicus, Thunb. ハマヒルガホ

Myrica rubra, Sieb. et Zucc. ヤマモヽ

Solanum Dulcamara, L. var. ovatum, Dunal. マルバノホロシ

Lithospermum arvense, L. イヌムラサキ

Avena fatua, L. カラスムギ

三十一日五時布良ヲ出發シテ館山ニ向フ布良ヨリ館山ニ至ル二里二十八町ナリ午後十時解纜シテ東京ニ向フ館山ヨリ浦賀迄ノ間ハ風強ク波濤頗ル荒クシテ船客皆横轉ス午後七時東京越前堀ニ上陸ス

◎雜　録

○植物雜俎

松村任三

○變形菌類四百種、○裂殖菌類（バクテリヤ）六百五十種

○小苔アリ水面ニ浮ブ Ricciocarpus natans (L.) *Corda.* ト云フ和名 ムラサキウキクサ

○藤黄（シワウ）ヲ供スルモノ曰 Garcinia cambogia 曰 G. Morella 曰 G. Roxburghii 曰 G. Wightii 曰 G. heterandra 曰 G. Hanburyi 曰 G. Gaudichaudii 曰 G. pictoria 皆金絲桃科ノ植物

○木綿（パンヤ）ノ生纖維長キコト纔カニ一センチメートルヨリ三セ、ニ至ル

○草綿（ワタ）ノ生纖維長キコト一セ、ヨリ四セ、ニ至ル

○亞麻（ヌメゴマ）ノ生纖維長キヿ二十セ、ヨリ百四十セ、ニ至ル

○大麻（アサ）ノ生纖維長キヿ百セ、ヨリ三百セ、ニ至ル

○黃麻（ツナソ）ノ生纖維長キヿ百五十セ、ヨリ三百セ、ニ至ル

○梵天花ノ生纖維長キヿ百セ、ヨリ百二十セ、ニ至ル

○植物ノ絹トハ Asclepias curassavica ヲ云フ蘿藦科ノ植物

○植物ノ象牙トハ Phytelophas macrocarpa ヲ云フ棕櫚科ノ植物

○植物ノ蠟トハ Rhus succedanea ヲ云フ漆樹科ノ植物

○構（カミノキ）ノ靭皮纖維長キヿ一センチメートルヨリ二セ、ニ至リ廣キヿ二ミリメートル

○支那、樹ヲ產ス、木通 (Fatsia papyrifera) ト稱ス、八手（ヤツテ）ノ屬、木髓ヲ採テ紙ヲ製ス

○支那人竹ノ纖維ヲ以テ紙ヲ製ス (Bambusa arundinacea.)

○埃及ニカミ井アリ Cyperus Papyrus ト云フ古代之ガ纖維ヲ採テ紙ヲ製セリ

○宮部曰北海道リンチサウ (Linnaea borealis.) ヲ產ス茜草科ノ植物

○宮部曰北海道一種ノ草ヲ產スウルツプサウト稱ス (Lagotis glauca) 玄參科ノ植物

○宮部曰千島、一種ノ草ヲ產スチシマサウト云フ (Lloydia serotina) 百合ノ族

○ Lindera hypoleuca *Mx.* 和名ウラジロクロモジ

○信州ノ駒岳、加州ノ白山一種ノ草ヲ產スアラシグサ（物品識名ニアリ）ト云フ學名 Boykinia lycoctonifolia 虎耳草科ニ屬ス

○桑、梵語ニ Toola ト云フ

○植物園ニ一樹アリ支那ノ楓ニ類ス西洋楓ト云フ學名 Platanus orientalis 西洋楓科

○草綿ハ二千六百有餘年前ヨリ印度及亞剌比亞ニ栽培ス

○ヤンチク オカメザサ メダケ 三雄蕋

○合歡（ネムノキ）ハ西蕃其葉ヲ茶トシ飲用ニ供ス

○ツエツテセス ハ Cytisus ノ轉訛

○レダマ ハ Retema ノ轉訛

○エニシダ ハ Genista ノ轉訛

○コエンドロ 胡荽ハ Coriander ノ轉訛

○フシタシウ 阿月渾子ハ Pistachio ノ轉訛

○タガヤサン ハ Tagayee 杉ナランカ (Careya arborea) 東印度ニ產スル玉蕋花科ノ植物(Lecythidaceæ.)

○「イトラン」屬ノ奇異ナル受胎

マ、サ、抄譯

「イトラン」屬 (Yucca) ノ植物ハ北米ノカリホルニア、メキシコ近傍ニ多ク生ズ而シテ其受胎ハ特別ナル蛾類ノ媒助ヲ要スルモノニシテ頗ル奇異ナル所アリ昨年十月發兌ノ Popular Science Monthly ニ H. L. Clarke 氏其摸樣ヲ詳述シタルヲ以テ爰ニ之ヲ抄譯ス本邦ニハ此屬ノ植物ヲ產セザレトモ其屬中少ナクトモ兩三種ハ己ニ移植セラレ且頗ル能我風土ニ適應シテ其開花スルヲ見ルナリ然レ𪜈其能果實ヲ結フヤ否ヤハ余之ヲ知ラズ又結實スルモノアラバ其受胎ヲ助クルニ適スル蛾類ノ本邦ニ存在スルヤ否ヤ此等ノ事實ニ

就テ觀察セラレタル諸君アラバ之ヲ本誌ニ掲ケラレンヿヲ切望ス

「イトラン」屬ノ受胎ニ就テハ Engelmann 及 Riley ノ兩氏之ヲ研究セリ實ニ Riley 氏ガ意ヲ此事ニ注ギタルハ二十餘年ノ前ニアリシモ漸ク近時ニ至リテ兩氏ノ研究其功ヲ奏シ受胎ノ秘密ヲ探明スルヲ得タリト云フ元來「イトラン」屬ノ花ノ構造ヨリ考察スルトキハ其粘リ氣アル花粉ハ短キ雄蕋ノ頂上ニ位スル小形ノ葯中ヨリ移リテ雌蕋ノ尖端ニ於テ僅ニ開口スル纖細ノ柱頭管 (Stigmatic tube) ニ達スルヿハ殆ト出來難キモノナリ故ニ之ニ達センニハ蛾類ノ媒助ヲ要スルモノニシテ特ニ此役目ヲ勤ムルモノハ Pronuba 屬ノ小形ノ蛾ニ限レリ此屬中ニ數種ノ蛾アリテ各種ハ夫レ夫レニ「イトラン」屬ノ一種又ハ數種ヲ尋ネ來ルモノトス而シテ此等ノ蛾中最普通ナルモノハ「イトラン」(Yucca filamentosa) ノ花上ニ徘徊スル Pronuba yuccasella ナリ此類ノ小蛾ハ黄昏ノ後ニ方リ「イトラン」類ノ花叢上ヲ飛廻シ居レリ而シテ雄蛾ハ通常飛翔ヲ止メザルモ雌蛾ハ花被中ヲ這ヒ廻ハリテ漸ク雄蕋ノ頂上ニ攀チ上ルトキハ鈎狀ヲナセル一双ノ腮鬚 (Maxillary palpi) ヲ以テ葯中ヨリ花粉ヲ搔キ出シ終ニ之ヲ團シテ圓形ノ小塊トナスナリ此塊ハ雌蛾ノ頭ノ大サノ三倍程ニ達スルコトアリ其蛾ハ之ヲ携ヘテ他ノ花ニ到リ徘徊スルコトヤヽ久シ其狀恰モ花ノスミズミヲ尋ネ廻ルモノヽ如シ然ル後終ニ其意ニ滿チタル所アレパ其脚ヲ二本ノ雄蕋ニ懸ケ腹部ヲ其中間ニ押シ付ケテ栖息シ腹部ノ先端ヨリ長且鋭利ニシテ其精巧驚クニ堪ヘタル産卵器ヲ突キ出シ之ヲ雌蕋ノ組織中ニ挿入シ其卵ヲ胚珠ノ間ニ産下ス此ノ如クニ卵ヲ産ミ付ケルコトハ同一ノ雌蕋ニ數回之ヲ行フコトモアリ更ニ一層奇トスベキハ已ニ産卵シタル後雌蛾ハ恩慮スル所アルカ如ク雌蕋ノ項上ニ上リ舌及腮鬚ヲ用ヒテ花粉ノ小塊ヲ柱頭管中ニ押シ込ムコトヲ務ム實ニ之ニ因テ花ノ受胎ヲ遂ゲシムルヲ得ルナリ之ヲ押シ込ムノ際蛾ハ意ヲ用ヒテ少時ノ間其舌ヲ管中ニ上

下セシムルコト恰モ喞筒ノ活塞柄ヲ働カラシムルニ似タルアリ此ニ述ベタル如キ作用ハ常ニ一定ノ順序ニ從ッテ夜深ニ到ルマデ屢次之ヲ行フヲ得ルナリ元來蛾ノ好ンデ尋ルハ新ニ開キタル花ニシテ未ダ他蛾ノ之ニ產卵セザルモノニ限レリ此ノ如クニシテ受胎シタル花ノミガ結實スルコトヲ得ベキガ故ニ「イトラン」屬ノ果實ニハ常ニ二三ノ縊レ目ノ存スルアリ此部ハ即雌蛾ガ產卵スルニ方リテ瘢痕ヲ留メタル所ナリ蛾ノ幼虫ハ果實ノ內部ニアリテ種子ト共ニ發育シ時トシテハ數多ノ種子ヲ食害スルコトアリ蒴ノ熟スルニ方リ幼虫ハ其組織ヲ喰ヒ破リテ出路ヲ作リ纖糸ヲ以テ其体ヲ懸下シ夜中ニ地面ニ達ス然ル後更ニ土中ニ潛入シ强靱ナル繭ヲ纏フテ蟄伏ス稀レニハ數年間繭中ヨリ蛾ノ出デ來ラザルコトアリサレトモ蛾ノ成育シテ顯レ出ルハ恰モ「イトラン」屬ノ開花スルト其季節ヲ同フスルハ奇トスルニ餘リアリ而シテ蛾ハ其短キ生涯ノ間ニ「イトラン」屬ノ花ヨリ食料ヲ取ルコトヲナサズ即蜜モ花粉モ柱頭ヨリ分泌スル汁液モ一トシテ蛾ノ養料ニ供スルコトナシ實ニ一方ニハ特種ノ蛾ナケレバ其種子ヲ生スルコト能ハサル一種ノ植物アリ又一方ニハ其植物ナケレバ子孫ヲ繼續セシムルコト能ハザル一種ノ昆蟲アリ此昆蟲ヤ其植物ノ受胎ヲ媒妁スルニ意ヲ用フルカ如キモ之ヨリ直接ニ利ヲ得ル所ナシ此兩者ハ眞ニ奇怪ノ關係ヲ有スルモノト謂フベシ

○荳科植物ニ見ル根瘤ノ生長模樣及ビ其組織

市村塘

荳科植物ニ見ル所ノ根瘤（ルート、ツーベクル）ハ一種ノ黴菌（假令ヘバ Rhizobium mutabile）ノ所爲ニシテ後者ハ含窒物ヲ前者ニ供給シ前者ハ後者ニ他ノ消化養分ヲ授與ス即チ互ニ共生（シンビオセス）ヲナセルモノナルヿハ夙ニ學者ノ知ルトコロナリ爾來該黴菌ニ就テハ大ニ撿究サレタリト雖モ根瘤ノ發達生長模樣ニ至テハ未ダ撿究シタル人ナカリシハ遺憾ナリキ果セル哉アルベルト、シナイデル氏茲ニ感アリケン一篇ノ論文ヲ著述シ以テ其撿究結果ヲ世ニ公

ニス一讀後試ニ其要旨ヲ摘萃スレハ概ネ左ノ如シ

一、根瘤ハ外長的（エキソゼナス）ニ發生ス

二、根瘤ハ「メリステム」ヨリ生長ヲ始メ先ヅ黴菌浸漬部ヲ圍繞シ後厚皮組織ト浸漬部トヲ隔離セシム

三、「コルク」幷ニ呼吸孔組織（レンテキユラル、テツシユ）ハ境界ノ分明ナル篩部（フエローゲン）ヨリ發生ス

四、根瘤ハ能ク發達セル緯管束ヲ具有シ根ト自ラ其趣ヲ異ニス

五、荳科植物ノ二種 Phaseolus vulgaris 及ビ Amphicarpæa comosa ハ其根ニ於テ能ク發達セル呼吸孔組織ヲ有スル根瘤ヲ付着ス尤モ其莖ノ組織ト稍〻異ナル狀態ヲ呈ス

六、根瘤中ニハ多少澱粉ヲ蓄存ス是レ一種ノ黴菌 Rhizobium mutabile ノ產出セシモノニ外ナラズ

七、此黴菌ハ時ニ非常ノ屈折的物体ヲ含有ス其性質ハ果シテ如何ナルモノナルカ未ダ確定サレズ

八、根瘤ノ組織ハ解剖上根ヨリモ寧ロ莖ニ類似セリ

九、根瘤ハ發育時代ノ終期ニ於テモ概ネ空虛トナルコナシ

十、荳科植物ハ黴菌リゾビアガ具有スル原形質樣ノ含有物ヲ決シテ再ヒ吸收セザルガ如シ

十一、荳科植物ノ一種 Phaseolus vulgaris 根瘤中ニ存スル細胞核ハ黴菌ノ爲ニ大ナル變化ヲ受ク

○綠條書屋植物雜記　（其八）

牧野富太郎

●まつもとノ學名

まつもと一ニまつもとせんのうト呼ブなでしこ科ニ屬スル多年草ニシテ處々ノ庭園ニ栽植シ以テ花ヲ賞ス草木圖說第八卷ニ之レヲ圖說シ且曰ク「或云此種ハ信州松本ノ邊多ク自生ス故ニ其名アリ」ト而シテ此植物ノ

學名ニ至テハ從來能ク吾人ノ間ニ瞭然タラザリシナリ

Franchet 氏彼レノ著書 Franchet et Savatier, Enumeratio plantarum Japonicarum, I. p. 49. ニ於テ草木圖說第八卷第五十七葉ノまつもとヲ其書中ニ引用シ之ヲ Lychnis grandiflora Jacq. (即チ L. coronata Thunb. ニシテがんぴ是ナリ) ノ名下ニ置キ以テ "forma calicibus pilosis." ト記セリ然レ𪜈是レ當ヲ失セリまつもと固ヨリ Lychnis grandiflora Jacq. ト同一ノ種ニ非ザルナリ

Lychnis fulgens Fisch. ト稱スル者アリ中ニ二變種ヲ含ム一ヲ之レガ原種トス即チ α. typica Regel. 是ナリ一ヲ β. cognata (Maxim.) Regel. トス今之ヲえぞまつもとト呼バントス（帝國大學標品ニハ之ニえんびせんのうノ和名ヲ附セリ又同標品中えぞえんびせんのうト標記セルモノハ即チ普通ノえんびせんのうニシテ學名ヲ Lychnis Wilfoldi Maxim. ト稱ス）

此 α. typica Regel. ハ更ニ二個ノ異ナリタル品種ヨリ成ル今 Rohrbach 氏ガ Linnæa XXXVI. pp. 184-185 ニ於テ記セシ所ニ據レバ其兩品ノ區別次ノ如シ

α. typica Regel

lusus 1: caules foliaque dense et crispule villosa, calyx ½-vel fere 1-pollicaris; petala coccinea vel rubra lobis interioribus oblongis.

lusus 2: caulis retrorsum hirtulo-pubescens; folia margine et nervo mediano subtus molliter ciliata; calyx 1-pollicaris; petala semper alba lobis interiorius late ovatis, exterioribus brevibus dentiformibus.

此兩品ノ最モ睹易キ識別點ハ花瓣裂片ノ廣狹ニ在リ而メまつもとノ屬スル所ハ實ニ此 lusu 2 Rohrb. ニ在リ lusus 1 Rohrb. ハ予未ダ之ヲ本邦ニ見ズ

予ハ今之レガ稱呼ニ便ナラシメンガ爲メ命名ノ必要ニ迫ラルヽニ至レリ故ニ今姑ク之レヲ lusus 1 oblongiloba Makino. 幷ニ lusus 2 ovatiloba Maxino. トナス然リト雖トモ更ニ後日ノ精査ニ由テ之ヲ變更スベキ時ニ逢着スルモ亦未ダ知ル可カラザルナリ今ハ則チまつもと其學名ヲ Lychnis fulgens Fisch. α. typica Regel lusus 2 ovatiloba Makino. ト謂フナリ

此ニ尚一言ノ加フ可キ事アリ Rohrbach 氏ハ此 lusus 2. ノ目徴ヲ規定シテ “petala semper alba” ト言ヘリ然レ𪜈是レ重要且ツ永遠不動ノ標識ニ非ラズシテ決シテ之ニ拘泥ス可カラザル事アルヲ見ル當時記者ノ見シ植物適マ白花ナリシヲ以テ此ノ如キノ記述ヲ永ク靑編ノ上ニ留メシト雖𪜈我邦ニ在テ赤花ノ品却テ普通ニ多クシテ白花ノ品ハ獨ダ園裏ノ變態ニ過ギズ Van Houtte 氏ノ Flore des Serres x. t. 980. ニ Lychnis Sieboldi. ノ名ヲ伴フテ揭出セル者ハ即チ此白花ノ園生品ニ係ルナリ

●まるばおもだかノ形狀幷ニ學名

まるばおもだかハ腎臟狀圓形或ハ腎臟狀楕圓形ノ葉ヲ有シ葉頭尖ラズ葉脈十七條ヨリ十九條ヲ引ク而シテ長葉柄アリ葶ハ葉ヨリ高ク抽キ三方ニ對出シタル枝梗ヲ岐チ更ニ復タ二三四ノ小梗ヲ叉出シテ小花ヲ開ク三萼三瓣瓣色白シ六雄蕋ニシテ心皮七數ヨリ九數ヲ有シ柱頭ハ子房ノ長ヨリ微シク長シ此種本邦ニ在テハ胎芽ニ由テ冬ヲ越ヘ且ツ其株ノ數ヲ增ス（本誌第二十四號第七十一頁參照、此ニ過テさじおもだかノ學名 Alisma Planlago L. var. parviflorum (Beck.) Torr. ヲ此學名トス故ニ今之ヲ正誤ス）

Alisma reniforme Don Prodr. Flor. Nepal. p. 22.—Wight Ic. t. 322. —Benth. Fl. Austral. VII.p. 186.—Kunth. Enum. Pl. III. p. 151. Hook. fil. Brit. Ind. VI. p. 560. *A. parnassifolium* Bassi *β. majus* Micheli in A. D. C. Monogr. Phanerog. III. p. 36. ナル一植物アリ南ハ濠洲ニ産シ西ハ東印度ニ見ルまるばおもだか即チ是ナリ乃チ知ル此種地理上散布ノ更ニ遠ク本邦ニ及ブヲ

本邦土産植物ヲ收錄シタル洋書中一モ此植物ノ我邦ニ産スルコヲ記セシモノアルナシ

●にらばらん四國ニ産ス

伊豫ノ人奥平氏ノ同國ニ於テ採集セル植物標品若干種ヲ友人井上虎馬氏ヨリ遠ク送致シ來リ以テ鑑査ノ事ヲ托セラル予承テ之ヲ觀ルニ其品數寡ナシト雖トモ中ニ二三ノ珍種ヲ含メリ今先ヅ其植物ノ名稱ヲ臚列スレバ實ニ左ノ如シ

Droser peltata Sm. var. lunata Clarke.　いしもちさう
Dioscorea septemloba Thunb.　もみぢどころ
Viburnum tomentosum Thunb. α. typicum Maxim.　やぶてまり
Primula kisoana Miq.　きそざくら(新稱)　別項ヲ見ヨ
Aster Savatieri Makino.　みやまよめな　別項ヲ見ヨ
Anemone narcissiflora Linn. var. sikokiana Makino.　しこくいちげ(新稱)　別項ヲ見ヨ
Microtis parviflora R. Br.　にらばらん

此にらばらん即チ Microtis parviflora R. Br. ハ帝國版圖内ニ在ヲハ先キニ明治廿年五月十三日大久保三郎

氏之ヲ八丈島大賀鄕ニ採集シにらばらんノ新稱此時同氏ニ由テ此植物ニ命セラレタリ其狀貌蕞爾タリト雖トモ蓋シらん科中ノ一奇種タルヲ免レズト謂フ可シ而シテ料ラザリキ今之ヲ四國伊豫ノ國溫泉郡江戸山ニ得ントハ是レ今日ニ在テ該植物最北ノ產地ト知ル可キナリ海外ニ在テハ濠州、新カレドニア島、東印度群島、支那南部ニ之ヲ產セリ G. Bentham 氏同氏著述ノ Flora australiensis 第六卷中ニ之ヲ標記シテ Eastern species ト云ヘリ

此種ハ極メテ能ク Microtis porrifolia Spreng. ニ肖似ス然レトモ其脣瓣ノ狀ハ之ヲ瓣別スベキノ標識タリ A. Engler 氏著 Beiträge zur Flora des südlichen Japan und der Liu-kiu-Inseln. ヲ按ズルニ Döderlein 氏之ヲ大隅國櫻島ニ得、田代安定氏之ヲ薩摩國阿久根鄕ニ得テ而シテ F. Kränzlin 氏之ヲ鑑定シテ Microtis unifolia Reichb fil. トナシタル植物アリ Microtis unifolia Reichb. fil. ハ即チ Microtis porrifolia Spreng. ト同品ニシテ又別稱シテ Microtis rara B. Rr. ト云ヘリ此モノ果シテ Kränzlin氏ノ說ノ如ケレバ本邦ニ此屬ノ植物二種ヲ見ルニ至ル然レモ予ハ該植物地理散布ノ上ヨリ之ヲ考ヘテ聊カ Kränzlin 氏ノ鑑定ニ釋然タル能ハズ他日標品ノ精查ヲ經テ其如何ヲ知ラント欲スルナリ

●きそざくら(新稱)

きそざくらトハ今日新ニ Primula kisoana Miq. ニ命ジタル和名ナリ草木圖說第三卷ニかつこさうアリ是レ同屬異種ノ植物ニシテ Primula kisoana Miq. ニ非ラズ

●とさざくらハひはざくらナリ

矢田部良吉氏曾テさくらさう屬ノ一種ヲ圖說シ植物學雜誌第四十五號ヲ以テ之ヲ世ニ公ニセラル是レ即チ

Primula tosaensis Yatabe. ニシテ同氏とさゞくらノ和名ヲ之ニ命セリ然レ𪜈いはざくらノ和名既ニ舊時ヨリ之レ有リ本草諸家ノ普ク用ウル所ナリ

●こいはざくら（新稱）

こいはざくらハ新和名ナリ Primula Reinii Fr. et Sav. 即チ其品ナリ

●みやまよめなノ學名

Hisutsua cantoniensis DC. ハ即チ Matricaria cantoniensis Lour. ニシテ Hemsley 氏之レヲ Aster indicus L. ニ合セリ Aster indicus L. (=*Boltonia indica Benth.*) ハ斷シテみやまよめなニ非ザルナリ且ツ Loureiro 氏其著 Flora cochinchinensis. ニ於テ Matricaria cantoniensis. ノ形狀ヲ記述セシト雖モみやまよめなト符合セザル點アリ予ハ之ヲ新種ナリト考フルニ由リ之ヲ命ズルニ Aster Savatieri Makino. 即チ Boltonia Savatieri Makino. ノ新學名ヲ以テセリ其記文ハ近日公ニスベキ Notes on the Flora of Japan. 中ニ之ヲ掲グ可シ

●しこくいちげ（新稱）

しこくいちげハ新和名ナリ而シテはくさんいちげさうノ變種ニ係ル苞葉ノ中ヨリ抽出セル數花梗ノ中ニハ梗項復ビ三個ノ小梗ニ分ルヽモノアリ是レ自ラ標異ナル目徵トス故ニ之レガ學名ヲ新定シテ Anemone narcissiflora L. var. sikokiana Makino. ト云フ其記文ハ載セテ前述 Notes on the Flora of Japan. ニ在リ

●ぎしぎしノ學名

予ハぎしぎしノ學名ヲ Rumex crispus L. var. japonica Makino (=*R. japonicus Meisn.*) トスルニ躊躇セザル可シ何トナレバ此品之ヲ Rumex crispus L. ニ比スレバ莖葉壯大ニシテ果萼片並ニ小瘤亦從ツテ大ナレ

バナリ Rumex crispus L. 亦東京ニ產ス呼デながばぎしぎしト稱ス

○三好學氏ノ研究二件

獨乙國ライプチッヒ大學ニ在學ナル理學士三好學氏ハ頃日氏ガ研究ニ係ル論文二篇ヲ余ニ惠投セラレタリ余今其大意ヲ本誌ニ揭ゲ以テ氏ガ研究ヲ本邦諸氏ニ紹介シ併セテ氏ガ寄贈ノ好意ヲ謝スト云爾

池野成一郎誌

氏ガ研究論文左ノ如シ

(一) Ueber Chemotropismus der Pilze. (Bot Zeit. ヨリ別刷)

(二) Ueber Reizbewegungen der Pollenschläuche. (Flora ヨリ別刷)

(一) 菌類ノ向化性(「ヘモトロピスムス」)

此論文ノ大意ハ氏嘗テ之ヲ官報第三千百四十五號(昨年十二月二十一日)ニ登載シタリ余ガ氏ノ原文ニ就テ安ニ其大意ヲ摘譯スルヨリハ寧ロ氏ガ官報紙上ニ揭グル所ヲ其儘拔載スルノ優レルヲ信ジ左ニ之ヲ拔載ス

今ヲ距ルコト十一年前西曆千八百八十三年獨逸國チュービンゲン大學ノ植物學教授フェッファー氏ハ始テ生物體カ化學的刺擊ニ感應シテ運動ヲ起ス顯象ニ就キテ詳細ナル研究ノ成蹟ヲ公ニセリ氏ハ主トシテ羊齒（シダ）類、卷柏（クラマゴケ）類及蘚（コケ）類ニ就キ各自ノ精蟲カ卵囊口ヨリ入リテ卵球ニ達スルニ至ルハ卵囊口ヨリ泌出スル特別ナル物質ニ依リテ誘引セラルヽニ在ルコトヲ證明セリ即チ羊齒、卷柏、二類ノ精蟲ハ林檎酸及其鹽類ニ依リテ感應シ蘚類ノ精蟲ハ薯糖ニ依リテ誘引セラレ各〻其刺擊源ノ方向へ運走ス此事實ハ氏カ數多ノ實驗ニ據リテ證明セシ所ニシテ實際右等植物ノ卵囊內ヨリハ此等ノ物質ヲ分泌シ以テ各自ノ精蟲ヲ化學的ニ刺擊シ其目的トスル所ニ達セシム氏ノ實驗ニ據レハ羊齒及卷柏類ノ精蟲ハ〇・〇〇〇%ノ如キ稀薄ナル林檎酸溶液ヲ充セル玻璃毛細管內ニ走向シ蘚類ノ精蟲モ亦〇・〇〇〇%ノ薯糖溶液ニ依リテ誘引セラル氏ハ又「バクテリア」及水生菌ノ一種ナル「サプロレグニア、フェラクス」ノ遊走子（ゾオスポール）ニモ同一ノ性質アリテ或ル種類ノ物質ノ方へ誘引セラルヽコトヲ證セリ此顯象ヲ名ケテ「ケモタクシス」(走化性)ト稱ス即チ自由ニ運動シ得ヘキ生物體カ化學的刺擊ニ應シテ走向スルコトヲ言フナリ然レトモ是レ獨リ刺擊源ノ方向ヘノミ走趨スルノミナラス又刺擊源ヲ遠リテ逃走スルコトアリ即チ前者ヲ陽性（ポシチーフ）ノ「ケモタクシス」ト云ヒ後者ヲ

陰性（チガチーフ）ノ「ケモタクシス」ト云フ種々ノ物質中或ハ陽性ノ「ケモタシクス」ヲ起サシムルモアリ又陰性ノ「ケモタクシス」ヲ發セシムルモアリ又何レヲモ起サヽルモアリ之ヲ中性ト云フ氏ハ更ニ此研究ヲ次キ同顯象ヲ種々ノ「バクテリア」、水藻類滴蟲（インフーソリア）類ニ發見シ其結果ハ更ニ千八百八十年ニ至リテ公ニセラレタリ

抑ミ「ケモタクシス」トハ自由運動ノ機能ヲ具ヘタル生物體カ化學的刺擊ニ應スル顯象ナレトモ此ニ又一歩ヲ進メテ彼ノ自由運動ノ機能ヲ具ヘサル生活體ニ就キテ考フレハ同似ノ性質ヲ具ヘ得ヘキノ理ハ敢テ想像シ難キニアラス現ニ高等顯花植物中ナル啖肉植物例セハ茅膏菜（モウセンゴケ）ノ如キモ化學的刺擊ニ依リテ其粘毛ヲ運動スルノ機能アリ又降テ下等植物中菌類、藻類ニ於テモ從來種々ノ植物學者カ觀察スル所ニ據レハ此等ノ植物體カ化學的刺擊ニ感應スルノ性アルハ疑ナキカ如シ殊ニ菌類ニ在リテハ其生活ノ現狀ハ孰モ死物又ハ活物ニ寄生シ他ヨリ養分ヲ吸收シテ生活スルモノナルカ故ニ自己ノ養料ト爲ルヘキ物質ニ逢ヘハ其化學的刺擊ニ由リテ菌絲カ其方向ヘ特ニ屈曲シテ生長スルノ特性ヲ具フヘキハ何人モ信スル所ニシテ夙ニデバリー氏ハ其著書（千八百八十二年）中ニ想像セル所ナリ

此問題（卽チ菌絲カ外來ノ化學的刺擊ニ應シテ成長ノ方向ヲ變換スルコトノ研究）ニ就キテハ從來種々ノ觀察セラレタル事實モアリ又一二ノ此研究ニ從事セシ者ナキニアラスト雖モ孰モ消極的ノ成蹟ヲ得或ハ右化學的刺擊ノタメニ菌絲局部ノ繁蔓ヲ致セル等ノ結果ヲ見タルマテニシテ未タ十分ニ此問題ヲ解明スルニ至ラス蓋シ菌絲局部ノ繁蔓ヲ致スモ猶ホ是レ化學的刺擊ノ結果ニハ他ナラスト雖モ彼ノ菌絲自己カ故ラニ屈曲シテ生長ノ方向ヲ變換スル顯象、卽チ「ケモトロピスム」（向化性）トハ全ク其性質ヲ異ニセルモノニシテ兩者決シテ相混同スヘカラス

余ハ余カ教師ナル現任ライプチヒ大學植物學教授ゲハイムラート、ドクトル、プェッファー氏ノ命ニ依リ同大學植物生理學實驗場ニ於テ明治二十五年一月ヨリ來該問題ノ研究ニ從事シ氏ノ指導ノ下ニ種々ノ實驗ヲ爲シ本年一月ニ至リテ成蹟ヲ得ルニ至レリ今此ニ其大要ヲ記スヘシ

茲ニ豫メ區別シ置クヘキコトアリ卽チ「ケモタクシス」ナル語ハ自由運動ノ機能ヲ具有セル生物體カ化學的刺擊ニ感應シテ運動ヲ起スコトノ意味（故ニ余ハ假ニ走化性ト譯セリ化學的刺擊ニ應シテ全體カ趨走スルノ意ナリ）ニシテ他ノ自由運動ヲ具有セサル生物體カ同刺擊ニ感應シテ其生長ノ方向ヲ變換スルコトハ「ケモトロピスム」（余ハ假ニ向化性ト譯セリ生活體カ化學的刺擊ニ應シテ單ニ生長ノ方向ヲ變スルノ意ナリ）ト稱ス猶ホ他ノ類似ノ語ナル「ヒドロタクシス」、「ヒドロトロピスム」、「ゲオタクシス」、「ゲオトロピスム」、「エレクトロタクシス」、「エレクトロトロスピム」、「レオタクシス」、「レオトロピスム」、「アエロタクシス」、「アエロトロピスム」等ノ例ニ於ケルカ如シ

余カ研究ノ材料ニ供セル菌類ハ主トシテ左記六種ノ死物寄生菌及三種ノ活物寄生菌ナリ

（死物寄生菌）

「ムコル、ムセド」
「ムコル、ストロニフェル」
「フィコミセス、ニテンス」
「ペニシリウム、グラウクム」
「アスペルギルス、ニゲル」
（かび）

（活物寄生菌）

「ボトリチス、パシアナ」（蠶兒ニ寄生ス）
「ボトリチス、テネラ」（甲蟲ノ一種「マイケーフハー」ニ寄生ス）
「ウレド、リネアリス」（麥葉ニ寄生ス）

「サプロレグニア、フエラツクス」(水牛菌)

此等ノ諸菌類ハ孰モ純粹培養ヲ爲シ絶エス新鮮ノ子實ヲ得テ實驗ニ用ヒタリ

余カ一般ノ實驗ニ應用セル方法ハ次ノ如シ(第一)試驗溶液ヲ注射セル「トラヂスカンチア」葉片　溶液注射後ハ淸水ヲ以テ葉面ヲ洗除シ吸墨紙ニテ拭ヒ葉ノ裏面(卽チ氣孔ヲ有セル方)ニ菌子ヲ蒔ケリ此方法ハ至テ簡單ニシテ且ツ充分適宜ノモノナレトモ稠厚ナル溶液若クハ有毒ナル溶液ヲ以テ試驗セント欲スルニハ適セス何トナレハ之カタメニ葉細胞ノ死ヲ招キ其分解セル物質却テ化學的刺擊ヲ起セハナリ故ニ後者ノ場合ニ於テハ第二、第三ノ方法ヲ用ヒタリ(第二)穿孔「コロヂウム」膜　膜面ニ穿テル數多ノ孔口ハ微小ニシテ尋常氣孔ノ大サニ過キス膜面ニハ菌子ヲ蒔キ而シテ裏面ハ直ニ試驗液若クハ試驗液ヲ含メル「ゼラチン」層ニ觸接セシム(第三)穿孔雲母片　孔口ハ微小ナルコト前者ニ於ケルカ如ク且ツ其裝置モ之ト同シ、此兩法共ニ各〻其利用アリ卽チ「コロヂウム」ニアリテハ試驗溶液ハ孔口ヨリ流出スル他ニ猶ホ膜質ヲ浸透スヘキモ雲母ニ在リテハ單ニ孔口ヨリ流出スルノミ(第四)フエツフハー氏毛細管試驗法　此法ハ氏カ「ケモタクシス」ノ研究ニ於テ應用セルモノニシテ玻璃毛細管ノ一端密蔽セルモノニ大半試驗溶液ヲ充タセ之ヲ實驗セント欲スル生物體ノ近圍ニ置クニ在リ此法ハ「ケモタクシス」ノ實驗ニハ最良ノモノナレト「ケモトロピスム」ニハ適宜ナラス

此等ノ諸法ニ依リ裝置セル「プレパラート」ハ皆十分、濕潤、暗黑ナル所ヘ貯藏シ且ツ成ルヘク一定ノ溫度(攝氏十八度乃至二十一度)ニ保チタリ

以上ノ諸法ニ依リ今一定ノ滋養液(例セハ二%ノ牛肉「エキス」)ヲ以テ試驗スルニ葉面、古魯胄謨膜面若クハ雲母片面ニ蒔ケル菌子發芽シテ其菌絲多少ノ長サニ達スルヤ菌絲端ハ必ス當初生長ノ方向ヲ一轉シテ葉、膜ノ表面ニ穿テル孔口ニ向ヒテ生長シ遂ニ其裡ニ枉入ス又毛細管ヲ用ヒテ試驗スルニ管口ヨリ漸次流出セル溶液正シク管口近圍ニ在ル菌絲ニ刺擊ヲ及ホセハ菌絲ハ著シク屈曲シテ其裡ヘ枉入ス蓋シ此「ケモトロピスム」ノ顯象タルヤ此等ノ孔口若クハ管口ヨリ流出スル溶液徐々ニ外界(菌絲ノ生長スル表面)ヘ波及シ以テ菌絲ニ觸レ化學的刺擊ヲ與フルニ由リテ起ルモノニシテ卽チ菌絲端ハ最初生長ノ方向ヲ轉シ刺擊源ノ方ヘ屈折シテ生長スルニ至ル而シテ此顯象ヲ起サシメンニハ刺擊ハ單ニ一方ヨリ來ラサルヘカラス又其來ルヤ徐々ナラサルヘカラス若シ然ラスシテ同一類ノ刺擊諸方ヨリ來ルカ又ハ一ノ刺擊急ニ一方ヨリ來ルトキハ菌絲ノ存在セル表面ノ各部俄ニ同一ノ狀態ト爲リテ菌絲ヲ感應セシムルニ至ラス前記ノ諸法中、葉若クハ古魯胄謨膜ヲ用フルトキハ試驗溶液全面ヨリ浸出スルカ故ニ時トシテハ全表面ノ各部ニ稠度ノ差ヲ保チ難クシテ期望セル結果ヲ得難キコトアリ然レトモ雲母片ヲ用フルトキハ此不利アルコトナシ

菌絲カ孔口若クハ管口ヘ屈入スルノ狀態ハ試驗溶液ノ稠度ニ由リテ種々ナリ概スルニ適度ノ稠度ニ於テハ其顯象最モ著シ

「ケモトロピスム」ノ顯象ハ固ヨリ菌ノ種類、試驗液ノ種類及溶液ノ稠度ニ依リテ一樣ナラス卽チ或ル種類ノ菌絲ハ某々ノ物質ニ依リテ誘引セラレ他種ノ菌絲ハ亦他ノ物質ニ依リテ誘引セラル、次ニ或種類ノ溶液ハ一種ノ菌絲ニ對シテ盛ニ誘引シ他種ノ溶液ハ之ニ反シテ反撥シ又更ニ他種ノ溶液ハ毫モ反應ヲ起サシメス次ニ稠度モ亦大ナル關係アリ概言スレハ稠度極テ稀薄ナレハ反應モ極テ微弱ニシテ殆ト知ルヘカラス稠度ノ漸次增加スルニ隨ヒ反應モ亦次第ニ著明ト爲ル而シテ稠度更ニ加リテ一定ノ限界ヲ超過スルヤ反應ハ却テ微弱ト爲リ或ハ遂ニ反撥

ノ顯象ヲ惹起スニ至ル余ハ三十有餘ノ物質ヲ用ヒ種々ノ稠度ニ依リテ實驗シ一々其反應ヲ檢セリ今左ニ最良ノ誘引液（菌絲ヲ誘引スル溶液）ヲ擧クレハ（第一）安母尼亞化合物（例、硝酸安母尼亞、鹽酸安母尼亞、林檎酸安母尼亞、酒石酸安母尼亞等）、（第二）燐酸化合物（例、燐酸加里、燐酸曹達、燐酸安母尼亞等）、（第三）蔗糖、葡萄糖、「デキストリン」、牛肉「エキス」、「ペプトーン」等ナリ此等ノ溶液中酸性若クハ亞爾加里性ナルモノハ何モ中性ト爲シテ用ヒタリ今其稠度ト反應ノ關係ニ於テ一二ノ例ヲ擧クレハ牛肉「エキス」カ「サプロレグニア、フェラックス」ニ於ケル反應ハ已ニ〇•〇〇五%ノ如キ稀薄液ニ始リ稠度ノ增加ト共ニ反應モ旺盛ト爲リ四或ハ五%ヨリ十%ニ至ルマテハ最モ著シク十%以上ニ至リテ却テ微弱ト爲レリ又葡萄糖カ「ムーコル、ストロニフェル」ニ於ケル反應ハ〇•〇一%ニテ已ニ極微ノ兆ヲ呈シ漸次ニ旺盛シ二%乃至十%ニテ最モ著甚ト爲リ是ヨリ稠度ノ增加ト共ニ反應ハ漸次微弱ト爲リ五十%以上ニ至リテハ却テ反撥ノ顯象ヲ生スルニ至レリ

次ニ酸類、亞爾加里類、亞爾箇保兒、或ル鹽類（例セハ硝酸加里、硫酸痲倔涅矢亞）、有毒物類ノ如キハ反撥ノ顯象ヲ惹起セリ（陰性「ケモトロピスム」）例セハ〇•一%ノ炭酸曹達、〇•〇五%ノ鹽酸カ「サプロレグニア」ニ於ケル〇、〇五%ノ亞爾箇保兒カ「ムーコル、ムセド」ニ於ケル何レモ多少ノ反撥顯象ヲ呈セリ此等ノ反撥性物質ハ他ノ良好ナル誘引液ト混合シテ實驗ニ供シ以テ後者ノ作用ノ消除セラルヽニ由リテ知レリ此他ニ又最良ナル誘引液モ其稠度一定ノ限界ヲ超過スレハ却テ反撥作用ヲ起ス例セハ牛肉「エキス」二十%以上ニ至レハ「サプロレングニア」ニ反撥ノ顯象ヲ生セシメ又蔗糖及葡萄糖カ五十%以上ニ至レハ「ムーコル」及他ノ菌類ニ反撥作用ヲ及ホスカ如シ

右反撥作用ノ起因スル所ハ第一各物質ノ化學的特性ニ依リ第二ハ溶液稠度濃厚ノタメニ生セル理學的顯象（滲透力）ニ由ルモノナリ卽チ酸類、亞爾加里類、亞爾箇保兒、有毒物質ノ如キ僅少ノ分量ニテモ反撥ヲ起スハ甲因ニ基キ或ル種類ノ鹽類（例、硝酸加里）カ一定ノ稠度ニ達シテ後始テ同作用ヲ呈スルハ乙因ニ由ルモノナリ

次ニ又或ル種類ノ物質ハ殆ト反應ヲ呈スルコトナシ（中性）、例ヘハ偏里設林、「アラビア、グミ」ノ如キモノ是レナリ

今姑ク他ノ生物體ニ就キテ化學的刺擊ニ感應スル顯象ヲ比較センニ已ニプェッファー氏ノ證明セル如ク諸種植物ノ精蟲ノ如キ一定ノ位置（卵囊）ニ達シテ特異ノ機能（授精作用）ヲ遂ケント欲スルモノハ特別ノ物質アリテ之ニ刺擊ヲ及ホスヲ見ル（本文首ヲ見ヨ）然レトモ通常腐敗物ニ存在スル種々ノ「バクテリア」又彼ノ變形菌（ミキソミセテス）（一ニ動物菌ト云フ）ノ如キハ種々ノ物質ニ由リテ刺擊セラル而シテ菌類ニ於テモ之ト同シク別ニ特種ノ刺擊物質アルコトナシ又「バクテリア」ニ於テ硝酸加里、硝酸曹達、鹽化加里ノ如キ物質盛ニ誘引作用ヲ呈スレトモ菌類ニ於テハ之ニ反シテ却テ反撥ノ顯象ヲ呈スルヲ見ル

玆ニ特記スヘキハ凡百ノ滋養液ハ必シモ誘引液タラス語ヲ換ヘテ言ヘハ一物質ノ滋養分ノ多寡ハ決シテ其誘引力ノ强弱ニ比例スルコトナシ此事實タルヤ已ニプェッファー氏カ氏ノ前記ノ研究ニ於テ論證セル所ニシテ余モ亦之ヲ余カ實驗ニ就キテ證明スルヲ得タリ例セハ偏里設林ノ如キハ或ル種類ノ菌（例、「ペニシリウム」）ニハ良好ノ滋養分タレトモ其化學的誘引力ハ殆ト無キカ如シ又硝酸加里ハ菌類培養液ノ必要ナル成分ヲ爲セトモ毫モ化學的誘引力ナキノミナラス却テ反撥作用ヲ起スカ如シ

菌絲ヲシテ「ケモトロピスム」ノ顯象ヲ起サシメンニハ前項ニ記セル如ク試驗ニ供セル膜面又ハ葉面ニ於ケル溶液ノ稠度固ヨリ葉內又ハ膜裏ニ存セル溶液ノ稠度ヨリ充分ノ差違（稠度ノ差）ナカラサルヘカラス而シテ今菌絲カ二溶液ノ稠度ノ差幾倍ニ達スレハ始テ感應ヲ起スニ至ル

ヤノ點ニ關シ余ハ「サプロングニア」ノ菌絲ニ於テ薯糖溶液ヲ用ヒテ試驗セリ是レ固ヨリ一例ニ過キサレトモ亦約ソ一斑ヲ知ルヲ得ヘシ即チ先ツ一面ノ溶液ヲ〇•一％トシ他面ヲ〇•三％（即チ稠度ノ差、三倍）トナシ其間ニ該菌絲ヲ置ケルカ毫モ稠度ノ差ニ感應セス次ニ一面ヲ〇•一％、他面ヲ〇•五％（稠度差、五倍）ト爲セシカ猶ホ感應セス而シテ第三次ニハ一面ヲ〇•一％、他面ヲ一％（稠度差十倍）ト爲セシニ菌絲ハ始テ一方（稀薄ノ溶液）ヨリ他方（濃厚ノ溶液）ヘ向ヒテ運動セルコトヲ見タリ次ニ同比例ヲ用ヒ一面〇•五％、他面一•五％（三倍）、一面〇•五％、他面二•五％（五倍）、一面〇•五％他面五％（十倍）ト爲シテ試驗セルニ其結果ハ前試ノモノト異ナルコトナシ即チ該菌ニ於テハ薯糖液二面ノ稠度ノ差十倍以上ニ至ラサレハ「ケモトロピスム」ノ顯象ヲ起サヽルコトヲ知レリ

此實驗ノ結果ニ就キテ見レハ彼ノウェーバー氏ノ法則（感應ハ刺擊ノ對數ニ比例スルコト）ヲ菌類ノ「ケモトロピスム」ノ顯象上ニ應用シ得ヘキヤ明ナリ蓋シ此原則ハフェッファー氏カ前記ノ「ケモタクシス」ノ研究ニ於テ其應用スヘキヲ論證シ（千八百八十四年）タル以來現今ニ至リテハ植物生理學上種々ノ顯象ニ應用シ來ルニ至レリ例セハマッサー氏ハ之ヲ「フイコミセス、ニテンス」（菌）ノ向光性（ヘリオトロピスム）ノ顯象ニ應用シ（千八百九十一年）、コレンス氏ハ之ヲひらぎなんてんノ花絲カ變化スル氣壓ノ刺擊ニ應スル顯象ニ應用スルニ至レルカ如シ（千八百九十二年）以上一般ノ實驗ニ於テ余ハ菌絲ヲシテ葉、古魯胄謨膜、若クハ雲母片ノ如キ固形體ノ表面ニ生長セシメタレハ此際固ヨリ接觸刺擊力（コンタクト、ライツ）其作用ヲ呈スルコトナシト言フヘカラス然レトモ單獨ニ此種ノ刺擊ノミニテハ菌絲ヲシテ微弱ナル孔口ヘ屈入セシメ難シ必ヤ別ニ化學的刺擊ニ依レル方向力（リヒト、クラフト）其勢力ヲ逞クスルニ由ラスンハアラス余ハ特ニ數回ノ實驗ヲ施シ菌絲ヲシテ細砂粒層ヲ通過シテ層底ニ觸接セル滋養液內ヘ生長セシムルコトヲ得タリ是レ縱令接觸刺擊力ハ存在スルト假定スルモ以テ化學的刺擊ヨリ起レル方向力ヲ妨碍スルニ足ラサルヲ見ルヘシ余ハ亦別ニ「ゲラチン」ノ二層ヲ造リ穿孔古魯胄謨膜ニテ相隔離シ一層ニハ滋養物質ヲ充シ一層ニハ之ヲ缺キ後者ノ方ヘ菌子ヲ蒔キ以テ實驗セルニ菌絲ハ皆古魯胄謨膜面ノ孔口ヲ通過シテ滋養層ノ方ヘ進入セリ余ハ又次ニ三層ノ「ゲラチン」層ヲ爲リ同似ノ方法ニテ驗スルニ其結果ハ常ニ一致セリ此實驗ニ於テハ菌絲カ一層ヨリシテ他層ヘ屈入セルハ單獨ノ化學的刺擊ニ起レル方向力ニシテ毫モ接觸刺擊力ノ作用ヲ借ラサルヤ明ナリ

余ハ一般ノ實驗ニ於テ「プレパラート」ヲ地心ニ對シテ種々ノ位ニ置キタルモ其結果ハ常ニ異ナル所ナキヲ見レハ地心ノ引力モ別ニ「ケモトロピスム」ノ顯象ニ影響ヲ及ホスコトナキヲ見ル又余ハ常ニ余ノ「プレパラート」ヲ濕潤ナル暖室ヘ保存シタレハ日光及水濕ノ作用ヲ省除セリ

余ハ同實驗ヲ有害寄生菌類ニ及ホシ此等ノ菌絲モ他ノ普通ノ黴菌（カビ）ト同シク「ケモトロピスム」ノ顯象ヲ呈セルコトヲ知レリ例セハ蠶兒ニ寄生スル「ポトリーチス、バシアナ」及「マイケーファー」（甲蟲ノ一種）ニ寄生スル「ポトリーチス、テネラ」ノ菌絲ハ牛肉「エキス」及「ペプトーン」ニ誘引セラレ又麥葉ニ寄生スル「ウレト、リネアリス」ハ麥葉浸出液、李浸出液等ニ依リテ誘引セラレ又桃金孃科植物ニ寄生セル「ポトリーチス、シネレア」ハ葡萄糖、薯糖等ニ依リテ誘引セラルヽヲ見タリ

余ハ亦菌絲殊ニ活物寄生菌絲カ種々ノ膜質ヲ穿通スル顯象ニ就キテ研究ヲ爲セリ一二ノ例ヲ擧クレハ「ペニシリウム、グラウクム」、「ポトリーチス、バシアナ」、「ポトリーチス、テネラ」、「ポトリーチス、シネレア」等ノ菌絲ハ滋養液ヲ注射セル葉體ニ穿入シテ細胞膜ヲ透通シ又ハ滋

養物質ヲ蔽ヘル種々ノ膜質ヲ穿通セリ是レ亦膜質ヲ滲透セル滋養液カ菌絲ニ化學的刺擊ヲ與ヘタル結果ニ由ルナリ

以上記載セル種々ノ實驗中「ケモトロピスム」ノ他ニ又菌絲ノ局部繁蔓ノ結果ヲ起セルコト多シ此兩顯象共ニ化學的刺擊ニ起因スルモノナレトモ其性質タルヤ大ニ相異ナレルコトハ已ニ本文ノ首頭ニ辯スルカ如シ而シテ此局部繁蔓ノ顯象ハ使用セル溶液ノ稠度濃厚ナルトキニ殊ニ多シ

菌絲ニ於ケル「ケモトロピスム」ノ研究ト同時ニ余ハ亦同似ノ方法ニ依リ顯花植物ノ花粉管ニ於テ同一ノ研究ヲ爲セリ其成蹟ノ概要ハ卽チ花粉管ニモ亦「ケモトロピスム」ノ性質ヲ具ヘ一定ノ溶液（例ヘハ砂糖類「デキストリン」）ニ由リテハ陽性「ケモトロピスム」ヲ起シ又他ノ溶液（例ヘハ酸類或ル鹽類）ニ由リテハ陰性「ケモトロピスム」ヲ起スコトヲ證明セリ此研究タルヤ實ニ花粉管カ柱頭ヨリシテ子房ニ達スルマテノ顯象ノ因由ヲ講明スル第一步ニシシ其先途ハ現今猶接續シテ逐究スル所ナリ後日成蹟ヲ得ルノ日ヲ竢チ更ニ報告スヘシ

以上記述セル所ハ余カ研究ノ概要ナリ今更ニ其成蹟ヲ約言スレハ左ノ如シ

（一）菌絲ニハ化學的刺擊ニ應スル性アリテ「ケモトロピスム」ノ顯象ヲ起ス卽チ當初生長ノ方向ヲ轉換シテ或ハ刺擊源ノ方向ニ趣キ（陽性「ケモトロピスム」）或ハ之ニ反シテ刺擊源ト反對ノ方向ヘ生長ス（陰性「ケモトロピスム」）此レ皆刺擊ヲ起ス物質ノ種類ニ由リテ異ナレリ

（二）化學的刺擊ニ由リテハ右「ケモトロピスム」ノ他ニ亦刺擊源ノ方向ヘ新芽ヲ生シ遂ニ菌絲局部ノ繁蔓ヲ起スコトアリ

（三）善良ノ誘引物質ハ安母尼亞、化合物及燐酸化合物、牛肉「エキス」、砂糖、「デキストリン」等ナリ

（四）反撥顯象ハ酸類、亞爾加里、亞爾箇保兒、有毒物質及或ル種類ノ鹽類、土類、竝ニ濃厚ノ溶液ニ由リテ起ル

（五）菌絲カ二溶液稠度ノ差ニ感應スルコトニ就テハウェーバー氏ノ法則ヲ應用シ得ヘシ

（六）菌絲ハ化學的刺擊ニ由リテ膜質ニ穿入スルノ機能アリ

（七）蓋シ菌絲ニ於ケル「ケモトロピスム」ハ生存競爭上ノ一大要素ニシテ殊ニ某々ノ活物寄生菌ニ於テハ一層特用ヲ爲スモノナリ

（八）花粉管ニモ亦「ケモトロピスム」ノ顯象アリテ砂糖類、「デキストリン」等ニ由リテ誘引セラル

第二論文ノ大意ハ次號ニ讓ル

○「セントロゾーム」ト細胞仁

池野成一郎

ゲー、カルステン氏マツバランノ芽胞母細胞核ノ分裂ヲ研究シ細胞仁ハ其分裂ニ當テハ核ヨリ出デヽ原形質內ニ進入シ玆ニ「セントロゾーム」ヲ形成スルヿヲ論述シタリ詳ハ Ber. d. deuts. Bot. Ges. *Jahrg.* XI. 第五百五十五頁以下 G. Karsten, Ueber Beziehungen der Nucleolen zu den Centrosomen bei Psilotum triquetrum

ナル論文ニアリ就テ見ルベシ

○花ノ色ヲ異ニセル植物ノ割合

オンタリオ及クエベツキ (Ontario and Quebec) ノ兩地ニ於テ五百三十九種ノ植物ノ花色ヲ研究シタルドルモンド (A. T. Drummond) 氏ノ報ズル所ニ據レバ此等ノ植物中白色ノ花ハ最モ多クシテ全數ノ三分一ヲ占メ黄色ノ花ハ之ニ次キテ凡ソ四分ノ一ヲ占メタリ而シテ此色ヲ呈セルハ主トシテ菊花類ニ屬セリ紫色及青色ノ花ハ其割合甚少ナクシテ即紫ハ全數ノ九分ノ一、青ハ其十分ノ一ニ過ギズト云フ又季節ニ就テ調査スルニ四、五及六ノ三ヶ月ニハ白色ノ花多ク七、八及九ノ三ヶ月ニハ黄色ノ花多ク九、十ノ兩月ニハ紫色及青色ノ花多カリシト云フ

マ、サ、摘譯

○海中ノバクテリア

河湖泉井等ノ中ニ存スルバクテリアニ關シテハ研究頗ル行キ屆キタリト雖海中ニ存スルモノニ就テハ比較的ニ其調査遍カラザルガ如シ此調査ニ先鞭ヲ著ケタルハ蓋 Giaxa 氏ニシテ海水ハ淡水ニ比スレバ極メテバクテリアニ富マザルコトヲ證セリ即氏ハネープルス灣ニ於テ海岸ヨリ凡一哩半ノ處ニテ實驗セシニ一立方セ、メ、ノ水中ニ僅々十個ヲ認メシノミ Russell 氏ハ又同灣ニ於テ調査セシニ海岸ヲ離ル、二哩半ノ所ニ於テハ一立方セ、メ、ノ水中ニ六十四個ヲ得九哩ノ所ニテハ僅ニ六個ヲ得タリ然レ𪜈海底ノ泥土中ニハ水中ヨリモ多クバクテリアヲ含有スルモノニシテ一百六十四呎ノ海底ヨリ得タル泥 (Slime) ノ一立方セ、メ、中ニハ二十四萬四千五百個ノ存在ヲ認ムルモ同シ深サノ所ヨリ得タル同容積ノ水中ニハ一百二十個存スルノミ又一千六百四十呎ノ深サヨリ得タル泥ノ一立方セ、メ、中ニハ一萬二千五百個存在スレトモ同シ深サヨリ得

タル同容積ノ水中ニハ二十二個ヲ認ムルノミ Russell 氏ハ又近時マサチウセツト(Massachusetts)ノ海岸ニ於テ實驗セシニネープルス灣ニ比スレバ一層北ニ偏シテ氣候涼冷ナル此地ノ海中ニハバクテリアノ數大ニ減少スルヲ見タリ即バツザルド灣(Bazzad's Bay)ヨリ得タル泥中ニハ一立方セ、メ、中平均一萬個乃至三萬個ニ過ギズ是レネープルス灣ニ於テ同一ノ深サヨリ得タルモノニ比スレバ小部分ニ當ルノミ又メキシコ灣ヨリ發スル洋流ニ近接セル合衆國ノ沿岸ニ於テ陸地ヲ離ルヽ凡一百哩ノ所ニテ一百尋(フアゾム)ノ深サヨリ得タル泥中ニモ多數ノバクテリアヲ發見セリ是レ陸地ヲ遠ク離レタル所ニテバクテリアヲ研究シタル場合ナリト云フ(下略)

○種子及ヒ果實ノ適應 (承前)

未熟ノ果實ハ葉ト其色ヲ同フスルモ其成熟スルヤ手早ク種々ノ色彩ヲ呈シテ綠葉ノ中ニアルモ識別シ易カラシメ以テ動物ヲ誘引セントス蒴ノ白色ニシテ内ニ黑色ノ種子ヲ貯ヘ赤色ノ莢中ニ青色ノ種子ヲ存スル如キ皆此目的ヲ達スルニ外ナラズ

許多ノ果實ハ其表面ニ蠟華(Waxy bloom)ト稱スル物質ヲ以テ被覆セラルヽアリ冬瓜ノ如キ柿子ノ如キ其一例タリ是レ皆其果實ヲ保護スルノ用アルモノニシテ之ナケレバ濕氣或ハ黴菌ニ侵害セラルヽノ患ナシトセズ

動物ニ果實ヲ嗜食セラルヽハ植物ニ取リテ利益アリトセバ何物ニアル植物ハ有毒ノ果實ヲ生ズルモノナルヤグラントアルレン(Grant Allen)氏ハアル有毒ノ果物ニ就テ說ヲナシテ曰ク之ヲ食スル鳥ハ中毒シテ死スルニ相違ナシ而シテ其屍ノ腐敗セルモノハ其種子ノ發生ヲ助クルナラント此說ハ是ナルガ如シト雖之ヲ疑ハ

ザルヲ得ズ蓋シ哺乳類ニ對シテ毒アル果實ト雖鳥類ニハ毫モ害ナキ場合ナキニ非ズ彼ノ美ニシテ林檎ニ似タルまんちにーる (Manchineel) 果ノ如キハ其毒劇甚ナリト雖熱帶ノ諸鳥ハ之ヲ食シテ毫モ中毒セサルヲ見レバ果實ニ存スル毒性ハ保護的ノ用アルモノト看做ス方穩當ナルベシ

果實ハ特ニ小虫ノ形狀ヲ摸倣シテ食虫鳥ヲ欺キ以テ之ヲ誘引スルノ場合ナシトセズ而シテ此ノ如キ摸倣ハ亦以テ食草鳥類ノ害ヲ免カルヽヲ得ルナルベシ幼虫ヲ摸シ又ハ蜘蛛ニ擬スル莢果アリ甲虫ニ酷似スル蓖麻子アリ

果實ノ腺毛ヲ生ジテ他物ニ粘着シ易キモノ或ハ芒刺ヲ具シテ之ニ附着スルモルモノハ主トシテ四足獸ヲ媒介トシテ其播布ヲ謀ルモノ芒刺ニハ極メテ能ク附着スルアリやぶじらみノ衣服ニ附着シテ拂ヒ去リ難キハ人ノ能ク知ル所ナルモはるぱごふひとん (Harpagophyton) 果ニ至リテハ更ニ甚シキ所アリ獅子ノ体ニ附着スルトキ之ヲ去ラント欲シテ却テ之ヲ其口中ニ入ルレバ苦痛ニ耐ヘズ死ニ至ルコトアリト云フ鉤アリテ能ク附着スル果實ハ矮短ノ植物ニ生ジ喬木ニハ之ヲ見ルコトナシ又地質時代ニ於テモ鉤ノ類ハ陸棲哺乳類ト時ヲ同フシテ出現シタルハ深キ意味ノ存スルモノナラン

人類ノ果實ヲ播布セシムルニ關係アルハ喋々ヲ要セズ貿易ニ戰爭ニ皆能ク播布ヲ助クルナリ鐵道ノ通ズル所ハ新植物移住シ來ルアリ毛布製造所ノ近傍ニハ異邦ノ植物ノ發生スルヲ見ル是レ主トシテ其原料タル毛ニ伴隨シ來レルナリ

種子ハ種々ノ方便ニ因テ運搬シ去ラルヽトキハ其儘地中ニ存在スルモノアリト雖更ニ巧ヲ弄シテ生存ヲ計ルモノナキニアラズ槲寄生ノ種子ノ如キハ鳥類ニ放棄セラルヽニ方リ種子ノ外面ノ粘性物ニ因テ樹枝ニ粘著シ

以テ地面ニ墜ツルヿヲ免ルみぞでんどろん（Mysodendron）ノ種子ハ三條ノ長靭ナル附部アリテ其到達シタル適宜ノ樹枝ニ纏著スルヲナス而シテげんのしようこ類（Erodium or Cranesbilly）ニハ其種子ヲシテ能ク地中ニ穿入セシムルモノアリ其種子ヲ撿スルニ小且尖ニシテ多ク毛ヲ生ズ而シテ種子ノ一端ニハ毛ヲ具シテ螺旋形ヲ呈セル刺狀ノ附部アリ此附部ハ濕氣ノ多少ニ隨テ一方ニ卷キ又ハ卷キ戻ルノ力アリ刺狀部ノ遊離スル端ニハ羽狀ノモノアリテ後方（種子ノ尖端ニ對シテ云フ）ニ向ヒタル毛ヲ具セリ今若シ其種子ガ濕地ニ落チタルトキハ種子ノ有スル毛ハ竪立シ種子ノ尖端ヲ地面ニ向ハシメ且刺狀部ノ螺旋ハ次第ニ卷キ戻ラントス此際羽狀部ハ其有スル後方ニ向フ毛ニ因テ近傍ニアル物体ニカヽリ爲ニ種子ノ上方ニアガルヿヲ妨グ故ニ種子ノ尖端ハ地中ニ入ラザルヲ得ズ次ニ刺狀部ノ螺旋ガ乾燥スルニ因リ收縮シ且卷キ込ムニ方リテハ羽狀部ハ他物ニカヽルヿナク容易ニ引キ下ゲラル是レ其面ニ生ズル毛ハ後方ニ向ヒ居レバナリ此ノ如クシテ種子ハ羽狀部ノ收縮スルガ爲ニ地中ヨリ引キ上ゲラルヽヿナシ次ニ又濕氣ヲ得ルトキハ種子ハ更ニ地中ニ向テ幾分カ穿入スルヲ得ベシ此ノ如ク逐番ニ濕潤シ乾燥スルニ因テ種子ハ十分ニ地中ニ埋マルニ至ルナリ

其他種子ノ生活力ヲ有スル時ノ長短ニ就テハ種々ノ差異アリト雖今之ヲ省略ス

以上述ルガ如ク果實及種子ハ外圍ノ事情ニ對シテ適應センガ爲ニ種々ノ巧ヲ呈スルヲ見ルベシ而シテ其形狀構造ニ關シテ現今ハ未ダ説明シ得ザルモノアルモ究竟適應ノ理ニ基キタルモノト信ゼザルヲ得ザルベシ且他日知識ノ增進スルニ至ラバ此等ノ諸點モ更ニ明瞭トナリ且一層錯綜セル關係モ自ラ説明シ去ラルヽノ日アラントス

○薩摩芋の事

日本には寶永元申年より、琉球芋薩摩より種來る、長崎にて專ら種たるよしなり、青木文藏名敦書、號崑陽（當時百五十俵、青木岳太郎祖父か曾祖父なるべし）蕃藷考といふ書を著し享保二十年乙卯二月十五日上書す、書中に薩摩よりも蕃藷種藏の法を上書せし事を載たり、最初唐土より琉球へ渡り來り琉球へ渡りて、三十四五年程に相成よしに見へたり、同年三月、文藏に植立候樣被仰付、小石川養生所內へ圃をこしらへ造り、元文元辰年御止になり、同二巳年三月三日、養生所勤役の者へ芋割渡し、芋畑引拂被仰付、其後諸國へ流布して人每に食し朝夕の助となれり、寶曆年間に至りては、上總下總銚子岩槻伊豆大島、其外諸所より多く作りて江戶へ運送す、銚子を上とし大島より出るを島芋といふて絕品なり、近歲に至り大なる國益といふへし（塵塚談）

○凶年貧民の食用

塵塚談に云く此節藤澤宿貧賤の者、食物稗糠麥二番糠、かしめところ、百合根藤の葉桑の葉榎の葉まゆみの葉、松の皮、草の芽は何によらす、是等の類を食物とせり、予が親く見聞せし所也とあり

◎東京植物學會錄事

明治二十七年三月廿四日午後二時ヨリ帝國理科大學植物學敎室ニ於テ例會ヲ開キ澤田駒次郎君ハホンナンノ性狀等ニ就テ演セラレ次ニ大久保三郎君ハ淡水藻及ビ海藻ノプレパラートノ製法ニ付テ談話アリ例ニヨリ當日出品セラレタル顯微鏡的標品及ビ腊葉等ヲ會員ノ閱覽ニ供シタリ其顯微鏡的標品ハタチシノブ（羊齒類）ノ根ノ生長點ノ頂細胞、（池野氏出品）テツポウユリ花粉母細胞核ノ分裂及アカマツノ糊粉（平瀨氏出品）、

Polysiphonia（藻類）ノ藏精器及ヒ風船藻（大久保氏出品）、カクランノ澱粉及馬錢子ノ毛（澤田氏出品）、硅藻土、（原氏出品）Dictyota dichotoma（海藻）ニ付着スル Arachnoidiscus sp.（硅藻）（安井氏出品）、Cosmarium Botrytis（鼓藻）及 Tetraspora lubrira（淡水藻）（松平氏出品）、腊葉ハ毛茛科植物ナリト云フ

◎寄贈書目

東洋學藝雜誌	第百五十號	一册	東洋學藝社	（東京）
地質學雜誌	第六號	一册	東京地質學會	（東京）
地學雜誌	第六十三號	一册	東京地學協會	（東京）
動物學雜誌	第六十五號	一册	動物學會	（東京）
東京醫學會雜誌	第六號	一册	東京醫學會	（東京）
牧畜雜誌	第百二十五號	一册	牧畜雜誌社	（東京）
大日本山林會報告	第百三十五號	一册	大日本山林會	（東京）
日本蠶業雜誌	第七十號	一册	日本蠶業雜誌社	（東京）
釀造雜誌	第百四十二號	一册	釀造雜誌社	（東京）

明治廿七年四月十五日發兌第七號

地質學雜誌

一冊金十錢郵税一錢六冊前金五十四錢

目次 第十版箱根火山研究錄附圖

論說 濃尾地震概報（前號の續き）大森房吉君◉箱根火山研究錄石井八萬次郎君◉沖繩島に就て黑岩恒君

雜錄 ◉噴出岩變質論 (On the Metamorphism of Eruptive Rocks) 佐藤傳藏君◉地殼の温度に就て相原修君◉鑛床分類及其譯語　比企忠君

雜報 小藤博士の論文に就てベツク氏の批評◉自慶長至安政、津輕地方の地震◉寶曆年間八戸大地震並洪水◉水晶の奇ある結晶面に就て◉方解石の抹條に就て◉エチゾーンの時代◉ヒマラヤ山の中生紀化石◉大安價アルミユーム製造新法◉黃金の出所は何處あるぞ◉湯本村玉簾の瀧◉明礬液中の奇現象◉一昨年中に於ける火山の噴出調べ◉火山の熔岩の種類◉金を含有する温泉沈澱物◉震災調查會の新顯微鏡◉肥前普通蛋白石◉我國無類の雌黃及雞冠石◉阿蘇山の噴出◉霧島山◉根室の地震◉大森理學士の出張◉東京地質學會第八月次會

發賣所 東京神田區裏保町 **敬業社**

本社製造販賣品

○プレパラート○火酒漬○乾製○剝製○骨骼○解体○模型○義眼○鳥卵保存用器械○昆虫採集及保存用器具○海產動物採集器○解剖用皿○火酒漬用硝子壜○動物標本調製用材料

○本社ハ從來下等動物ノ好標本ナクシテ諸賢ノ常ニ少ナカラザル不便ヲ感ゼラルヽニ注目仕此點ニ於テ最モ力ヲ盡シ可申候間何卒續々御注文被成下度候

○本社ハ多年動物採集ニ從事仕十分ノ經驗ヲ有シ候ニ付御便利ヲ圖リ出張採集ノ御需ニ相應ジ可申候

東京市神田區五軒町壹番地

動物標本社

動物學雜誌 第六十五號

明治廿七年三月十五日發行○一冊金拾錢郵稅金壹錢

◉目次○れぷどぷらニ就テ北原多作君○北海道產鞘翅類（續き）松村松年君○日本產蝶類ノ氣候上ノ變形ニ就キテ石川千代松君◉雜錄○相馬地方動物實驗雜記（前號ノ續キ）○母ノ性質ヲ具有セザル生物○膃肭獸及猫虎○動物豢養の話（ツ、き）○蚜虫の種類○温床中のギフラフ○水蛭の消化器管を研究する方法○ビー、シエーパン、ベネーテン氏逝ク○バイスマン氏の賀の祝○日本產の葉脚類○季氏日本及ヒ朝鮮產鱗翅類（承前）○弘田貞氏ノ書翰○內國湖沼一覽表

發賣所　東京市神田裏神保町　敬業社

發賣雜誌並ニ代價表

●東洋學藝雜誌毎月廿五日一回發兌○壹册拾錢郵稅壹錢六册前金五十四錢郵稅共

●動物學雜誌毎月十五日一回發兌○壹册金拾錢郵稅金一錢六册前金（郵稅共）金六拾六錢

●植物學雜誌毎月廿日一回發兌○壹册金拾貳錢郵稅金一錢六册前金（郵稅共）金七拾六錢

●東京物理學校雜誌毎月八日一回發兌○一册金六錢郵稅金五厘六册前金三拾六錢

●裁判粹誌毎年一月七月ノ兩月中ノ十日廿五日發兌民刑各上下兩卷ヲ以テ一年度ヲ完結セシム一册定價金四十錢一ケ年分金一圓六拾錢

●精神毎月廿五日一回發兌○一册金六錢郵稅共○六册前金卅六錢

●日本園藝會雜誌毎月廿五日發兌一册金十錢郵稅五厘○六册前金五十四錢

●哲學雜誌毎月十日一回發兌一册金九錢郵稅金一錢

●教林毎月二十日一回發兌○一册金六錢郵稅金一錢六册三拾錢

●文武叢誌毎月十五日發兌一册金七錢十册六十五錢

●日本人毎月三日十八日二回發兌○一册金八錢（郵稅共）六册前金四拾二錢十二册前金八拾四錢郵稅共

●速記彙報毎月十五日一回發兌○一册金八錢郵稅金貳錢六册前金四拾五錢拾二册前金九拾錢

●地學雜誌毎月二十五日一回發兌○一册金拾錢郵稅一錢六册前金五拾四錢十二册前金一圓八錢

●地質學雜誌毎月十五日一回發兌○一册金拾錢郵稅金一錢○六册前金五十四錢（郵稅共）

東京市神田區
裏神保町一番
敬業社
○電話番號
no. 258.

◯本號ニハ帝國大學ノ圖（アートタイプ）ヲ挿入ス

●論說○東洋學藝雜誌ノ百五十號ニ至レルヲ祝シ併セテ今日ノ少年子弟ニ忠告ス加藤弘之○東洋學藝雜誌の第百五十號の祝詞井上哲次郎○雷及避雷針の說（承前）水野敏之丞○下等植物一斑松村任三○貝塚土偶の面貌の奇異なる所以を說明す坪井正五郎●雜錄○越歷ノ陰影水野敏之丞○ストラウス氏新案角ノ等分法浦口善爲○將門兵亂考三浦周行●雜報○帝國大學の圖に付て○帝國大學の賀表○學士會の賀表○東京工業學校○液化空氣と一萬圓の補助金○低温度に於ける生活○大學通俗講談會○懸賞一束○英語普通數學雜誌○倫敦地質學會賞牌○電氣運河○萬國東洋學會○とばゑ○外國語の教授法○植物雜編○緬甸の森林外數件●發行所東京神田東洋學藝社

東洋學藝雜誌

第百五十號

明治廿七年三月廿五日發兌
一册金十錢郵稅金一錢

新刊廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄

全一冊

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校ノ教員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田裏神保町　敬業社
東京日本橋通三丁目　丸善書店

○本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候

○本誌毎月一回發兌一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢

○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御屆可申候

明治廿七年四月十九日印刷
明治廿七年四月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　熊田宜遜　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　植物學雜誌編輯所　東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所　敬業社
同　同所　丸善書店　東京日本橋區通三丁目

314179

明治廿一年二月三日内務省許可

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] April 20, 1894. [No. 86.

CONTENTS.

On Sagittaria. **By S. Matsuda.** 137

Notes on Flowers. **By Prof. J. Matsumura.** 142

Botanical Excursions to Enoshima and Hakone. **By T. Ichimura and A. Yasuda.** 143

Generic Characters of Japanese Ferns. **By T. Makino.** 145

Movement of Shoots of Pinus. **By K. Fujii.** 148

Flowers of Salix. **By Prof. J. Matsumura.** 151

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. **By K. Sawada.** 152

Colocasia antiquorum, Schott **By A. Yasuda.** 156

Botanical Excursions to Kazusa and Awa. **By T. Ichimura and A. Yasuda.** . 157

Miscellaneous:—. 164

Short Notes on Plants.—Fertilazation of Yucca.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yojōsho-oku."—Dr. Miyoshi's Investigations.—Centrosome and Nucleolus.—Different Colors of Flowers.—Bacteria in Sea-water.—Adaptation of Seeds and Fruits.—Sweet Potato.—Proceedings of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

植物學雜誌第八卷第八十七號 （明治二十七年五月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[**Vol. VIII.** May 20, 1894. **NO. 87.**]

On the Behaviour of the Nuclei during the Conjugation of Zygnema.

By

S. Ikeno.

With Plate V.

The fusion of nuclei of two cells during the conjugation-process of several species of *Zygnema* has been established by Dr. **H. Klebahn.**(1) It is a well-known fact that we distinguish two modes of conjugation in *Zygnema*: firstly, that in which zygote is formed within one of the two conjugating cells, and secondly, that in which it is formed, not within any of these cells, but within the common canal formed between them. **Klebahn's** observations refer exclusively to *Zygnema* belonging to the first class. It is the purpose of this paper to establish the fusion of two nuclei in one species belonging to the second class and to describe their somewhat peculiar behaviour during the process.

---

(1) **Klebahn,** Ueber die Zygosporen einiger Conjugaten. *Ber. d. deuts. bot. Ges.* Bd. VI, 1888.

Now firstly as to the mode of preparation. My observations have almost exclusively been executed on materials which were hardened, stained, and imbedded in Canada-balsam, because fresh materials give but an imperfect image. Algal filaments are hardened and stained in either of the two ways mentioned below: firstly, they are hardened and stained simultaneously by means of **Pfitzer's** *Picro-nigrosin*(1), in which they lie at least for one night and are then washed with very dilute glycerin; secondly, they are hardened by 1 % chromic acid, washed during several hours with running water, stained with **Delafield's** *Haematoxylin*, in which they lie at least for one night, washed with 2 % alum solution, and then washed repeatedly with distilled water. Algae hardened and stained in either of these two ways are then transferred to 20-50 % alcohol, which is then made to concentrate gradually almost to 100 % by diffusion method(2), then again transferred to 10 % solution of turpentine in absolute alcohol; Overton's arrangement(3) is then made to make this solution gradually change into almost pure turpentine, after which algae can safely be imbedded in Canada-balsam in turpentine (not too much concentrated) with no contraction at all. Thus I have obtained beautiful specimens of *Zygnema*, in which only pyrenoids, nuclei, and nucleoli are stained and other parts are almost colourless.

---

(1) **Pfitzer,** Ueber ein Härtung und Färbung vereinigendes Verfahren für die Untersuchung des plasmatischen Zellleibes. *Ber. d. deuts. bot. Ges.* Bd. I, 1883.

(2) **Strasburger,** Botanisches Practicum, 2. Aufl., 1887, p. 515.

(3) **Overton,** Mikrotechnische Mittheilungen etc. *Zeits. f. wiss. Mikroskopie.* Bd. VII. Heft 1.

The specific name of *Zygnema* in question could not be determined. For its structure I refer the readers to the middle cell (on the left side and not concerned in conjugation) in *Fig.* 4 a.

The first step of the conjugation is the formation of two processes, one from each cell (*Fig.* 1), which then meet and fuse with each other (*Fig.* 2). Then follows the disappearance of the common wall which separates the two processes (*Fig.* 3). Up to this stage we see no change at all in both nuclei. The next stage is represented by the upper pair of cells in *Fig.* 4, where the nuclei of the two cells are already concerned in the process of fusion. At this stage, it seems as if both nuclei are connected by a very fine thread (*t*), but this so-called "thread" part seems to be nothing more than a part of the nuclei specially thinned during the conjugation. I was not fortunate enough to be able to follow the development of this "thread," but its formation is not difficult to be comprehended and proceeds probably as follows: Each nucleus produces a thin process tapering inwards and these two processes meet to form the "thread." This view is made highly probable by the fact that each nucleus tapers inwards very gradually and the "thread" is therefore finest at its middle part, which indicates the meeting point of the two processes of nuclei. In the next stage (*Fig.* 5), the "thread" becomes broader, its width being almost equal to that of the body of the nucleus; in this stage, the two nucleoli do not yet come into fusion. Then the "thread," which may now rather be called a "band," becomes shorter and the two nucleoli approach each other (*Fig.* 6). When this stage is over, two chromatophores pass from each cell into the common canal, which widens and becomes bladdery; now, the real fusion of the two nuclei takes place, for both nucleoli become fused into one, and the resulting nucleus takes the normal shape (*Fig.* 7.) For the formation of zygote, it remains then nothing but to form a thick coat around the whole apparatus of these chromatophores and nuclei.

In short, during the conjugation of this species of *Zygnema*, after the fusion of the two processes of cells, one of the nuclei produces a thin slender process which advances inwards and meets with that produced similarly from another and thus the so-called "thread" is formed. The latter then becomes wider, the two nucleoli approach each other and fuse together, and the nucleus takes the normal shape. This is the whole process relating to the fusion of the two nuclei.

It may here be remarked that chromatophores (pyrenoids as well as starch-granules) seem to grow in those cells concerned in conjugation. For this I refer the readers to the *Fig.* 4a in which cells concerned and those not concerned are found both in one and the same filament.

In conclusion, I have to add that I could follow also almost all successive stages of the behaviour of nuclei during the conjugation of a species of *Zygnema* belonging to the first class above mentioned. I append here figures (*Fig.* 8, *a-g*) explaining some of these stages, of which *c*, *e*, and *f* correspond respectively to *Figs. 11*, *12*, and *13* of **Klebahn**(1)(2). These figures explain themselves, but I refer those readers who want further information to the Explanation of Plate affixed below.

Botanical Laboratory,
Agricultural College,
Imperial University, Tōkyō.

---

(1) **Klebahn,** l. c.

(2) Of course, various stages represented in my figures are drawn in fresh state in common systematic books, such as Cooke's *British Fresh-water Algae* (e. g. Pl. 31, fig. 2 b) or Wolle's *Fresh-water Algae o the United States* (e. g. Pl. CXLIII, fig. 5), but in these works cell-contents are coloured entirely green, so that I can distinguish neither chromatophores nor nuclei.

明治二十七年五月二十日發兌

Explanation of Plate V.

All figures drawn from *Picro-nigrosin* preparations (except Fig. 8, which is drawn from *Chromic-Haematoxylin* preparations) with Abbe's camera lucida under the magnification by Zeiss, Homog. Immers. $\frac{1}{12}$ + Ocular 2.

Fig. 1. Cells preparing to conjugate; two processes produced from them about to meet each other. p signifies *pyrenoid;* c, *chromatophore;* n, *nucleus;* k, *nucleolus.*

Fig. 2. Two processes fused, and common wall yet present.

Fig. 3. Common wall already disappearing.

Fig. 4. Nuclei connected by the so-called "*thread*" (processes of two nuclei) (t).

Fig. 4 a. In the uppermost and the lowest pair of cells, which are concerned in conjugation, chromatophores are large, whereas in the middle cell not concerned in conjugation they are small.

Fig. 5. Thread now becoming a band; two nucleoli yet distinct.

Fig. 6. Two nucleoli approaching each other.

Fig. 7. Chromatophores passing into the common bladdery canal; two nuclei, together with their respective nucleoli, fusing.

Fig. 8. Represents various stages of conjugation in a species of *Zygnema* belonging to the first class:—

- **a.** Cell not concerned in conjugation;
- **b.** Contents of one cell on the way of passing towards the other cell; two nuclei distinct;
- **c.** Contents of two cells found together in one of them; both nuclei yet distinct;
- **d, d.'** Nuclei coming into contact with each other;
- **e.** Nuclei fusing together, both nucleoli yet distinct;
- **f.** Nuclei and nucleoli fusing;
- **g.** Abnormal form, in which both nuclei and nucleoli fuse together already before the contents of one cell have not yet completely passed away into the other cell.

○賀來飛霞君小傳

君諱ハ曉之、憚ル所アッテ飛霞ト號ス號ヲ以テ世ニ行ハル字ハ季和、豐前國宇佐郡佐田ノ人ナリ文化十四年丙子ノ正月、高田ニ生ル幼ニシテ父ヲ亡フ先考、諱ハ驥、字ハ千里、小野蘭山翁ニ從テ本草學ヲ修メ醫ヲ以テ業トス兄、佐之氏、長崎ニ遊ヒ蘭人シーボルド氏ニ從ヒ西洋醫術ヲ學ビ傍ラ本草學ヲ修ム兄歿シテ君其業ヲ承ケ儒書ヲ帆足萬里翁ニ學ブ天保十四年京師ニ遊ビ山本亡羊翁ノ門ニ入リ本草學ヲ修ム而シテ此學ニ關スル所ノ書籍ハ君自カラ手寫シテ倦マス其勤勉思フ可シ君甞テ曰ク畫ヲ學バザレバ物ノ眞ヲ寫スヿ能ハズ必ズヤ後年悔ユル所アラント因テ畫ヲ十市石谷翁ニ學ビ其奧妙ヲ極ム殊ニ草木花卉ヲ寫スヤ眞ニ接スルカ如シ石谷翁常ニ歎シテ曰ク飛霞ノ草木花卉ヲ寫スハ實ニ天性ニ出デ予ノ及ブ所ニアラズト弱冠、奧羽、北陸ヲ漫遊シテ植物ヲ採集シ從テ得レハ從テ寫シ異花奇草ノ寫生スル所一千五百餘種ノ多キニ及ベリ

嘉永三年秋西國大ニ飢ウ島原侯、君ノ本草ニ精シキヲ聞キ命シテ救荒本草、所載ノ物ニ就キ形狀ヲ説キ且ツ調理ノ法ヲ錄セシメ以テ救荒ノ一助トナス名ケテ救荒本草略説トイフ此ニ由テ士民ノ餓死ヲ免ルヽ者尠シトセズ幾クモ無シテ仕ヲ辭シ故山ニ歸リ醫ヲナス治ヲ乞フ者常ニ門ニ滿ツ人ト爲リ温厚甞テ怒ヲ遷サズ平居自カラ抑遜シテ人ニ傲ラズ明治十一年東京大學小石川植物園ニ奉職シ專ラ植物取調及ヒ編輯ニ從事ス十四年植物學會ヲ興スニ當テ君與テ力アリ十九年非職トナリ老ヲ郷里ニ養ヒ醫業ノ傍ラ畫ヲ以テ娛樂トナス人ノ草木ヲ質スルアレハ書籍ヲ引キ懇々説明シテ厭色ナシ今茲廿七年三月流行感冒ニ罹リ遂ニ起タス溘然トシテ長逝ス享年七十有九著ス所ノ日州採藥記、油布嶽採藥記、島原採藥記、救荒本草略説、小石川植物園草木圖説等アリ配ハ増田氏、三男三女ヲ生ム次男、粲次郎氏家ヲ嗣グ頃君カ訃音ニ接シテ追慕已ム無ク年來見聞スル所ト

後嗣ノ郵送スル所トヲ折衷シテ君ガ事蹟ヲ傳フルヿ率ネ此ノ如シ嗚呼悲哉

澤田駒次郎

○百花雜記（承前）

松村任三

一シジミバナ　褐色ノ細枝上新葉ト共ニ四五條ノ細梗ヲ叢生シ重瓣ノ小白花ヲ開ク綠蕚五裂白色ノ二十六瓣アリ花心雌雄蕋ナシ却テ綠蕚數片アルヲ見ル四月上旬花アリ

一スモモ　枝上葉ニ先チ或ハ新葉ト共ニ三四ノ短梗ヲ簇生シ五瓣ノ白花ヲ開ク瓣ハ廣橢圓形ナリ四月上旬花アリ蕚鐘狀五裂淡綠色、雄蕋三十一莖アリ長短不同、皆蕚ヨリ生ス花心一雌蕋アリ平滑、子房黃色柱頭分レズ

一エノキ　新枝ヲ發生シテ雄花ト雌雄兩全花トヲ雜生ス雄花ハ枝ノ中途ニアリ雌雄兩全花ハ新葉ノ腋ニアリ花蓋アリ四片淡黃綠色ニシテ紅暈アリ四雄蕋之ト對生ス雄花ニハ雄蕋ノミヲ生シ雌雄兩全花ニハ四雄蕋アルノ外中心ニ一雌蕋ヲ居ス子房綠滑、粗大ノ二柱頭ヲ具ス左右ニ開張、雄花ハ三梗ヲ叢生シ兩全花ハ梗分枝ス四月中旬花アリ

一ナシ　粗大ノ枝頭、新葉ト共ニ七八梗ヲ抽キ五瓣ノ白花ヲ開ク頗ル大ナリ瓣圓形、蕚五裂、開花盛ナルニ及テ外反ス雄蕋二十二莖アリ葯淡紫紅色、蕚ヨリ生ス花心五個ノ細柱ヲ抽ク子房下位ナリ四月上旬花アリ

一ニハウメ　枝條葉ニ先テ紅花ヲ密布ス頗ル美ナリ蕚鐘狀五裂紅色ヲ帶ヒテ外反ス其邊緣ニ腺毛アリ雄蕋二十三莖許、白糸黃葯、花心一雌蕋アリ白柱平滑、頭分レズ多ク二梗ヲ叢生ス梗長カラズ其本ニ鱗片アリ之

ヲ圍繞ス子房ニ隆起アリ四月上旬花アリ

一種白花ノモノアリ花梗稍〻長クシテ上ノ如ク密布セス綠蕚外反セズ其邊緣ニ腺毛アリ二十八雄蕋アリ

一カイダウ　短枝ノ頭末數葉ヲ簇生シ其間ヨリ四五莖ノ暗紅色ナル長梗ヲ抽キ淡紅色ノ大花ヲ開ク蕚暗紅色ニシテ鐘狀其內面ニ白毛ヲ布ク雄蕋二十三莖アリ白糸黃葯、花心紅色ノ三柱アリ其本一ニ相合シテ白毛ヲ密布ス子房下位ナリ四月上旬花アリ

* * *

○くわゐトおもだか（承前）

松田定久

以上記シ來ル如クくわゐ、をもだか、あぎなしノ和名ニ付テハ頗ル混雜シ居ルヲ見ルナリ即世間ニテハ同一種ノ植物ニ異名ヲ付シアルガ如ク又異リタル植物ニ同一ノ名ヲ下シアルガ如ク了解シ難キ所アリ因テ本邦ノ植物家ガ著ハサレタル二三ノ書ニ就テ此等ノ植物ヲ記サレタル所ヲ尋ヌルニ左ノ如キ異同アルヲ見ルナリ

本草圖譜慈姑ノ條ニ云ク

慈姑　なまゐ　本草和名
　くわゐ　和名抄

水田ニ栽ユ葉ハ剪刀或ハ燕尾ノ如シ(下略)

一種、吹田くわゐ　まめくわゐ

攝州吹田村ヨリ産ス形狀慈姑ト同シ

一種　おもだか　和名抄ニ澤瀉ト書スルハ誤ナリ

はなくわゐ

田野水中ニ生ズ葉ハ慈姑ニ似テ小ニシテ細ク花又小ナリ

（按ズルニ和名抄ニハ澤瀉ノ和名ヲ奈萬井ト記セリなまゐハさじおもだかノ古名ナリト大槻氏ノ言海ニ見ユサレドモ本條ニハ直ニ和名抄ヲ誤トセラレタルハ他ニ說アルナラン）

一種　やゑおもだか

花ノ形毬ノ如ク白色蕋ナシ葉ハおもだかノ如クニシテ頗ル肥エタリ前條ト共ニ根ニ小塊アリ小指頭ノ如クニシテ其大ナルヲはかりぐわゐト稱シテ賣ル味苦シ

本草圖譜ノ記載ハくわゐトおもだかトニ係レリ而シテ此兩名ハ究竟同種ノ植物ニ歸スル如シ又やゑおもだかト稱スルモノハ其蕋ヲ失フタルモノニシテ培養等ノタメニ變ゼルモノナラン

本草綱目啓蒙ノ慈姑ノ條ニ云ク

慈姑　水田ニ栽ウ葉長クシテ尖リ下ハ二ツニ分レ剪刀ノ如シ故ニ剪刀草燕尾草ノ名アリ

一種おもだかアリ一名ハはなぐわゐ葉ノ形狀くわゐニ異ナラズ只瘠小ナリ（中略）此根狹小食用ニ堪エズ只種エテ花ヲ賞スルノミ池澤ニ自生多シ

一種細葉ノおもだか池邊ニ自生アリ葉廣サ三四分長サ一尺許花モ亦小シ之ヲ鳥羽繪ぐわゐト云フ一名おぎなし（筑前）おとがひなし（仙臺）ソノ初出ノ葉岐ナクシテ竹葉ノ長キガ如シ故ニ名ク

啓蒙ニ載スルくわゐ及おもだかハ其記載ヲ見ルニ同種ノ植物トスルニ妨ゲナキ如シ而シテ特ニおぎなしヲ記セリ此植物モ亦通常ハおもだかノ名稱ノ下ニ包含セラレ居ルモノニシテ其おぎなし、おとがひなしノ名アル

ハ方言ニ過ギズトスルモノヽ如シ

草木圖説ニハくわゐニ關シ次ノ説アリ

くわゐ　吾郷(尾張)水田中ニ多ク之ヲ植ウ又溝瀆小河ノ中亦多ク生ズレドモ本然ノ自生ナルヤ種子ノ流レテ生ズルニ係ルヤ不詳(中略)啓蒙ニ塊根ノ有無ヲ以テくわゐおもだかノ二種ヲ分ツ吾郷ニアッテハ只一種ニシテ無根ノおもだかナル品ナシ姑ク他日ノ撿ヲ期ス

でわゐ又すいたぐわゐ　水田中ニ多ク自生ス形くわゐノ如クシテ小ナリ高サ僅ニ一尺葉狹細花亦稍小ニシテ生殖部ニアッテモ一般異ナシ根塊ハ至テ小ニシテ大ナルモ無患子ニ超ヘズ小ナルハ豆粒ノ如ク其形ヲ訂視スレバくわゐト同ジカラズ別種タルニ論ナシ亦採テ專ラ食餌トス一種草狀根形一般ニシテタヾ花瓣細小重複毬狀ヲナスモノアリ花戸之ヲ八重おもだかト云フ即本條ノ重瓣ナルモノニ係ル又按ニ從前所稱ノおもだかノ名ハ指ス所何品ナルヤ未詳或ハくわゐノ花葉ヲ指スノ名ナルカ若否レバ本條ヲ指スナラン本條ノ根塊至小ニシテくわゐノ著キガ如クナラザルニ因リくわゐノ根塊ナキモノヲおもだかナリト云フ説ニ近シ倘識者ノ考ヲ俟ツ

(飯沼氏ハ本條ニ記スルでわゐヲ以テおもだかト考定セラレタルモノヽ如シ而シテ此種ハ又其記載ヨリ推スモ東京近郊等ニ見ルモノト同一ナルモノナルベシ即くわゐト同種ト看做スベキモノナルベシ氏ハ已ニでわゐハ生殖部ニアッテモくわゐト一般異ナシト記サレタリサレドモ又下文ニ至リくわゐト別種タルニ論ナシト記サレタルハ余ノ疑ヲ免レザル所ナリ植物名彙(第一版)ニハでわゐヲ以テくわゐノ別稱ト定メアルナリ)

くわゐトおもだか

くわゐトおもだか

あぎなし　山足池邊濕洳ノ處ニ生ズ全草でわゐヨリ差小ニシテ葉尤狹細尖長ノ異アリ花蕋ニ於テハ一般異ナシ秋冬ニ至テ莖下根鬚ノ上ニ圓尖ノ扁片黑褐ニシテ尖アル細塊鱗次重疊シ後分折シテ各一苗ヲナス鬚根ノ端ニアッテハ更ニ一塊アルコトナシ

草木圖說ノ記載ハくわゐ、でわゐ及あぎなしニ係ルモノニシテ其くわゐトでわゐトハ同一種ト看做スヲ得ベクおもだかノ名ハ時ニでわゐニ適用シ得ル如シ又此書ニ據レバあぎなしノ名ハ尾張邊ニモ行ハルヽヲ推知スルヲ得ベシ

大和本草ノくわゐおもだか及あぎなしノ條ニ云フ

くわゐ　其子ハ根蔓ノ末ヨリ生ズ舊本ハ枯レテ母子ハノコリテ又來春生ズ水田ニ多クウヘテ利トス(中略)おもだかハ是ト別ナリ(中略)一種すいたくわゐト云フ物アリ葉モ根モ慈姑ニ似テ小ナリ花ナシ味佳シ慈姑ヨリ味濃ナリ攝州吸田ノ邑ヨリ出タリ

おもだか　葉ハヨク慈姑ニ似テ異リ莖葉慈姑ヨリ小ナリ葉セハク長ク葉ノキレコミ長シ五六月單白花ヲ開ク三片アリ根小ナリ慈姑ノ如ナラズ食フ可ラズ舊根ヨリ生ズ子ハ母ニ付テ生ス慈姑ノ根ノ蔓ノ末ヨリ子生スルニ異ナリ一種千葉おもだか葉小花千葉ニシテ白シはうずきノ大ノ如し賞スベシ一處ニモ上下ニモ多ク花開ク(下略)

(按スルニ本條ノ記載ニ子ハ母ニ付テ生ジ根蔓ノ末ニ生ゼズト云フヲ見レバ此ニ稱スルおもだかハ葉柄ノ下部ノ內面ニ珠芽ヲ生ジ地中莖ノ端ニ珠芽ヲ生ゼザルあぎなしヲ指スニ似タリ又千葉おもだかト稱スルモノハ本草圖譜及草木圖說ノやえおもだかト同一ノモノヲ指スナラン)

あぎなし　おもだかノ葉ニ似タル小草七月(陰暦)花ヲ開ク三出ナリ凡草ニ大小アリ是小おもだか歟

大和本草ハくわゐ、おもだか、あぎなしノ三種ヲ記ス而シテ其おもだかノ名稱ハ範圍狹クシテ今稱スルあぎなしニ一致スルモノヽ如シ故ニ其あぎなしを記スル條ニハ之ヲおもだかト同一ナラントセシハ固リ然ルベキナリ

廣大和本草ニ云ク

水慈姑、剪帥、苦帥ハ三品同物ニシテ葉ノ異ニ因テ名ヲ分ツナリ苦草ハ和名あぎなし剪帥モ亦あぎなしト云フナリ

此記事ハ頗ル明瞭ナラザレドモ兎ニ角くわゐ、あぎなし等ノ名稱ガ混雜シテ用ヒラレ居ルコトヲ推知スルニ足ル

有用植物圖說(田中芳男氏著)ニ云ク

慈姑　くわゐ又しろくわゐ

澤瀉科ノ球根草ニシテ水田ノ耕作物ナリ云々

野慈姑　すひたぐわゐ又おもだか又でわゐ

慈姑ト同種ナリ池沼又ハ水田中ニ自生スレドモ又之ヲ栽培シテ其球根ヲ收ム大サ四五分煮テ食ス味慈姑ニ似タリ

本書ハくわゐ及おもだかヲ以テ同一トスルモノニテ二者ノ學名モ同一ニ記シアリ

大槻修次氏著ノ言海ハ元來植物ニ關スル書ニアラザレドモ往々普通ノ植物ニ關スル解釋アリ其くわゐ及お

くわゐトおもだか

もだかノ條ニ云ク

くわゐ　菜ノ名舊キ根塊ヲ水田ニ植ウ（中略）秋稍ニ花ヲ開ク三瓣ニシテ白クおもだかノ花ニ似テ大ナリ

おもだか　池澤ニ生ズル草、葉ノ形くわゐニ異ナラズシテ但瘦セテ小シ夏莖ヲ出シ二三枝ヲ分チテ三瓣ノ白花ヲ開ク根狹小ニシテ食フニ堪ヘズ植エテ花ヲ賞ス一名はなくわゐ

言海ハおもだかヲくわゐト別物トセリ又此書中あぎなし及おとがひなしノ語ヲ收メザルヲ見レバ此兩語ハおもだかくわゐナドノ如ク普通ノ語ニアラズシテ通用ノ範圍狹キ語ナルヲ推知スベシ

諸家ノ所說以上記スルガ如シ今之ヲ比較シ之ヲ約言スレバ概ネ左ノ如キ數項ニ歸着スベシ

（一）くわゐトおもだかトハ全ク同一ナルコト又ハ同一ト明言セザルモ其記載等ヨリ推ストキハ同一ト看做スヲ得ベキコト本草圖譜本草啓蒙草木圖說有用植物圖說等ハ此說ニ屬ス

（二）くわゐトおもだかトヲ別物トスルコト大和本草言海ハ此說ニ屬ス

（三）くわゐナル語ハ之ヲ耕作物ニ適用シおもだかナル語ハ之ヲ自生品ニ適用スルコト此點ニ付テハ諸家皆一致ス

（四）本草啓蒙ハあぎなしヲ以テおもだかノ一品トシ草木圖說ニハ二者ヲ別種トス大和本草ハ二者ヲ同一トス（而シテ大和本草ニ稱スルおもだかハくわゐニ一致スルモノニアラズ今稱スルあぎなしニ一致スル植物ナリ）

以上ノ四項ヲ大謬ナキモノト看做シ之ニ據テ考フレハくわゐ及おもだか兩語ノ意義ハ自ラ定着スル所アリ即くわゐナル語ハ狹キ意義ノおもだかト同一ノ植物ニシテ特ニ耕作セラレタルモノヲ指シ而シテおもだかナル

語ハ其廣キ意義ニテハくわゐト同種ノ野生植物並ニ之ニ近似セル野生ノ植物(あぎなし)ヲ汎稱シタルモノト考フルヲ得ベシ元來植物ヲ研究スルコト精密ナラザル時代ニアリテハ著シキ差異ナキ植物ハ同一ノ種類ト看做シ同一ノ名稱ヲ附スルコトハ敢テ怪ムニ足ラズ故ニ今稱スルあぎなしモおもだかノ中ニ包含セラレタルヤ疑ヲ容レザルナリ(現ニ東京近郊ナドニテモ農夫等ハあぎなしヲ指シテおもだかト稱シ居ルナリ)因テ之ヲ改言スレバくわゐナル語ハおもだかナル語ノ一部分ト一致シおもだかナル語ハくわゐ及あぎなしヲ包含シ居ルモノト見做スベキナリ之ニ反シテ大和本草ニくわゐトおもだかトヲ別物トシタルハおもだかナル語ノ意義ヲ狹クシテ特ニあぎなしニ之ヲ適用セシニ因ルト雖實際ニ於テハおもだかナル語ハ此ノ如キ狹キ意義ニ適用シ居ラレザルナリ又言海ニくわゐトおもだかトヲ別物トセルハ本書ノ著者ガ世間普通ノ觀念ニ基キタルニ因ルモノナルベシ且精密ニ種類ノ異同ヲ辨ズルハ固ク同書ノ目的トスル所ニアラザルヲ以テ二者ヲ別物ノ如ク記シタルナラン以上述べ來ル如クおもだかナル語ハ是レ迄ハ頗ル廣キ意義ニ適用シ來リタルナリサレドモ今後ハ其意義ヲ狹クシテ混雜ヲ防グコト固ク至當ナルベシト思ハル即此名ハくわゐニ一致スル野生ノ植物ノミニ限リテ之ヲ適用スベク且あぎなしナル語ハ之ヨリ全ク別ノ植物ニ限リテ之ヲ適用スルコト草木圖說ニナスガ如クスルコト穩當ナルベシト信ズルナリ

くわゐトおもだか

本邦ノ畫家ハ好ンデおもだかノ花葉ヲ畫ケリ之ヲ畫クトキハ多クハばん(田雞)ヲ併セ寫スト云フサレドモくわゐハ其花葉ヲ畫クコト殆トナク之ヲ畫クハ先ヅ其球莖ニ限レリト云フ其畫家ハ余ニ語リテ曰クくわゐトおもだかトノ葉ハ自ラ之ヲ畫キ分クル訣アルモノニシテ是レハ其肥瘠ノ度葉ノ切レ込ミノ深淺等ニ基クモノナリト因テ余ハあぎふし及おもだかノ腊葉ヲ其人ニ示シタルニ直ニ之ヲ區別シあぎなしノ葉ヲ以テ恰モ畫家ノ

くわゐトおもだか

稱スルおもだかノ葉ニ適合スト云ヘリ此所說ハ大和本草ニおもだかヲ以テ今稱スルあぎなしニ一致スルモノト定メタル說ニ符合スルガ如シト雖單ニ此事實アルガ爲ニ遽ニおもだかノ意義ヲ狹バメテあぎなしニ一致スルモノト輕忽ニ斷定スルヲ得ザルベシ

本編ニ論述シタル所ハ實物ノ硏究ト云ハンヨリハ寧ロ名稱ノ區別ニ關スルノミ之カ爲ニ貴重ノ紙面ヲ塡塞シタルハ余ノ讀者諸賢ニ謝スル所ナリ且其所說ハ疎漏杜撰ヲ免レザルヲ以テ特ニ諸賢ノ指敎ヲ切望ス

終ニ臨ンデ數言ヲ附ス本邦ニ知ラレタル慈姑屬(Sagittaria)ノ植物ハくわゐ(即おもだか)及あぎなしノ二種ノ外更ニうりかはノ一種アリ此三種ハ球莖又ハ之ニ類スル器關ニ因テ繁殖スルハ奇ト云フベシ即くわゐ又ハおもだかニハ著明ノ球莖アリあぎなしニ珠芽アリ而シテうりかはニモ地中莖ノ先端ニ球狀部ヲ生ズルコトハ本草圖譜ノ記載(うりかはノ條ニ曰ク根塊極メテ小サク吸田くわゐヨリ又小ナリ)幷ニ松平齊氏ノ採集セラレタル標品ニ據ルモ明ナリ

又くわゐ等ノ根ヲ透視スルトキハ明ニ許多ノ橫紋アルヲ認ムベシ是レ其体ニハ一般ニ細胞間空隙多ク而シテ處々ニ之ヲ橫切スル平板ノ存在スルニ因ルナリ此平板ハ蜂窠細胞組織(Parenchymatous tissue)ヨリナリ且其組織ヲナセル各細胞ハ其膜壁平坦ナラズ許多ノ突起ヲ出シテ之ニ近接スル他ノ細胞ノ突起ト相接觸セシメ頗ル奇異ノ狀ヲ呈ス(其圖ハSachs氏植物敎科書組織篇等ニ載セテアリ)根ノ外葉柄ヲ透視スルニ明ニ見ユル橫紋モ略同一ノ構造ヨリ起ルナリ

○日本藥局方植物篇　（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

性狀　古魯聖篤實ハ開綻セザル球圓形ノ瓠果ニシテ其直徑一「デチメートル」ニ過キズ坊間ニ鬻賣スル品ハ殆ンド全ク外殼ヲ剝除シ處々ニ瓤肉及ヒ種子ヲ露出シ其瓤肉ハ海綿質ニシテ極メテ輕ク間々多少破壞ス種子ハ褐色或ハ帶黃白色ヲ呈シ扁平卵圓形ニシテ其邊緣隆起セザルヲ以テ他ノ類似ノ植物ト異ナリ而シテ種子ノ重量ハ果實ノ全量殆ント四分ノ三ヲ占有ス本果實ノ生鮮ナルモノヲ取リ橫斷スレバ內部ハ主トシテ三個ノ胎盤ヨリ成リ各胎盤ハ中心ニ至リ二股ニ分裂シ果壁ノ表面ニ接近シテ空間中ニ返曲シテ六個ノ擬房ヲ現ハシ各擬房中ニ胎監ノ股脚ヲ彎入シ多數ノ種子ヲ附着スルコト胡瓜等ニ似タリ子殼ハ硬堅ニシテ數層ノ細胞ヨリ構成セラレ果肉（瓤肉）ハ廣キ薄壁性細胞ヨリ成リ脈管ヲ存シ果肉ノ外層ニハ石核細胞層ヲ有ス

古魯聖篤實ハ果肉種子共ニ强烈ナル苦味ヲ有ス藥用ニハ種子ヲ除去シテ用フベシ改正日本藥局方ニ云古魯聖篤實ハ外皮ヲ剝除シ乾燥シタルモノニシテ其色白ク球圓形ヲナシ瓤肉ハ海綿樣輕鬆ニシテ類白色ヲ有シ中ニハ扁卵形多數ノ種子ヲ包藏ス臭氣ナク味極メテ苦シ

本品ハ種子ヲ除去シテ用フヘシ

°°注意シテ貯フヘシ」トアリ又日本藥局方注解ニ云古魯聖篤實ハ果肉、種子共ニ强キ苦味ヲ有ス、醫藥用ニハ殆ド下利ノ効力ナキ種子ヲ除去シテ用ユヘシ

埃及ヨリ輸出セル古魯聖篤實ハシリヤ及ヒチペルン產ノ者ニ比シ肥大ニメ種子少ナク上品トス」トアリ又英國ニテ土耳古產古魯聖篤實ト稱スルモノハ主トシテ西班牙及ヒ西里亞ヨリ輸入シ通常外殼ヲ剝除シ乾燥シタルモノナルヲ以テ無皮古魯聖篤實ノ名アリ然レドモ少レニハ外殼ノ儘乾燥セシモノアリ其外殼ノ表面ハ平滑ニシテ黃褐色ヲ呈シ頗ル强剛其直徑二「インチ」ニ過キズ又モガドール產古魯聖篤實ハ土耳古產ノモノヨリ

ハ稍々大ニシテ其直徑三「インチ」以上ニ達シ品位稍々劣レリ此モノハ平滑黃褐色强剛ノ皮部ヲ有ス故ニ有皮古魯聖篤實ト云フ

成分　古魯聖篤實ノ有效成分ハ「コロシンチン」(Colocynthin)ナル化合体ニ歸ス然レドモ未ダ其純粹ナルモノヲ製出スルコト能ハス種子ハ脂肪大約十七「ペルセント」ヲ含有ス

製劑

第一　古魯聖篤越幾斯　Extractum Colocynthidis. 改正日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

古魯聖篤越幾斯ハ

種子ヲ除キ粗ニ剉截セル古魯聖篤實	二分

ヲ取リ

酒精	十分
常水	五分

ヲ注キ六日間冷浸シ壓漉シ又其殘滓ニ

酒精	四分
常水	六分

ヲ注キ更ニ三日間冷浸シ壓漉シ漉液ヲ合シ濾過シ蒸發シテ乾燥越幾斯トナシ製スヘシ

本品ハ黃褐色ニシテ水ニハ溷濁シテ溶解ス

注意シテ貯フヘシ

日本藥局方注解云本條ノ越幾斯ヲ製出スルニハ須ラク種子ヲ除去セル古魯聖篤實ノ果肉ヲ用ユヘシ是レ種子ハ多量ノ脂肪ヲ含有シ之レヨリ得ル越幾斯ハ瀉下ノ効力弱ケレバナリ良好ノ古聖魯篤實ニ在テハ其全量ノ大約三分ノ一ハ果肉自餘ノ三分ノ二ハ種子ヨリ成ルモノナリ其收穫量ハ大約二十「ペルセント」トス」本品ハ黄褐色ニシテ味極メテ苦シ水ニハ溷濁シテ溶解ス其有効成分ハ Colocynthin（コロシンチン）($C_{56}H_{84}O_{23}$) ト名クル配糖質（グリコシード）トス（中略）

劇藥ニ屬ス注意シテ貯フヘシ

第二　古魯聖篤丁幾 Tinctura Colocynthidis. 改正日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

古魯聖篤丁幾ハ

種子ヲ除キ剉截セル古魯聖篤實	一分
酒精	十分

ヲ取リ五日間冷浸シ壓搾ニシテ濾過シ製スヘシ

本品ハ澄明黄色ノ液ニシテ比重〇、八三五乃至〇、八四五ナリ

注意シテ貯フヘシ

第三　古魯聖篤菲沃斯丸 Pillulae Colocynthidis et Hyoscyami. 改正日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

古魯聖篤末	十分	蘆薈末	二十分
葯刺巴根末	二十分	菲沃斯越幾斯	二十五分
硫酸加僧謨	三分	丁香油	一分

テ取リ酒精ヲ加ヘテ研和シ適宜ノ丸劑塊ヲ得ルニ至リ大約〇、一五「グラム」ノ重量ヲ有スル丸子トナシ製スヘシ

注意シテ貯フヘシ

生理的作用　動物

古魯聖篤質ハ大量ニ用フルニアラザレバ牛馬羊豚ニ中毒症ヲ發スルコトナシ狗及ヒ家兎ニ在テハ烈シキ下痢ヲ生シ腸ニ焮衝ヲ起シ全軀衰弱ス

健體

古魯聖篤質ハ小量ニ在テ蠕動機ノ運動ヲ速カナラシメ粘液及ヒ胆汁ノ分泌ヲ增加シ通常粘液ヲ瀉シ水液ヲ下シ疝痛ヲ續發ス過量ニ在テハ吐下ヲ起シ其瀉下物中ニハ血液ヲ混和シ炎症性疝痛劇烈ニシテ諸筋痙攣シ腹膜炎ヲ續發シテ終ニ斃死スト又古魯聖篤質ノ溶液ヲ下腹ノ皮膚ニ塗抹スレハ下痢ヲ生ス殊ニ皮膚剝離シタル部分ハ下痢ヲ生シ易シ

（以下次號）

〇二三植物ノ化學的實驗　（第七十三號ノ續キ）

醫科大學教授　下山順一郎口演
澤田駒次郎筆記

とりかぶと(Aconitum Fischeri)ハ山野ニ自生シ又其花ヲ賞センガ爲メ人家ニ栽培ス苗ノ高サ間々一「メートル」ニ超ヘ葉ハ散生シ各葉長キ葉柄ヲ具ヘ莖ノ下部ニ附着セル葉ハ其葉面殆ンド基礎部ニ至ルマデ指掌狀ニ

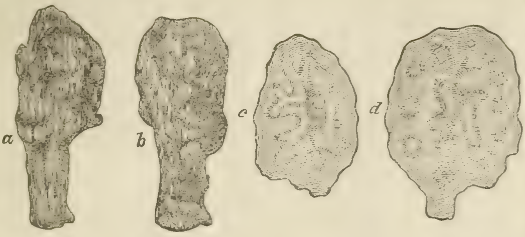
五裂シ上部ノ葉ハ短キ葉柄ヲ有シ葉面三裂ス而シテ其各分裂葉片ハ略ホ翼狀ニ缺裂シ其瓣ハ尖鋭ナリ秋ニ至リテ花ヲ開ク華本ハ有梗穗花ヲ爲シ頂端ノ華本ハ下部ノ葉腋ニ於ケル華本ニ先テ花ヲ開ク花ハ不整形ニシテ花梗比較的ニ長ク高葉二片ヲ着ケ深藍色ヲ呈シ五葉ヨリ成ル其後部ニ於ケル一蕚葉ハ兜狀ヲナシ殆ンド全花ヲ被包シ其長徑横徑ニ比スレバ遥ニ長クシテ前邊漸ク狹隘トナリ稍々尖鋭ニ走レリ左右ノ兩蕚葉ハ倒卵圓形ヲ爲シ前邊即チ下部ノ二蕚葉ハ長卵圓形ニシテ艇狀ニ相擁合ス花冠ハ本來八葉アレ𪜈其中二葉ハ有梗性ノ蜜槽ニ變形シテ上記兜狀ノ蕚葉中ニ潜伏ス他ノ六箇ハ發育停滯シテ認知シ難シ雄蕊甚タ多數實礎上立性ニシテ大抵三片ノ果葉ヨリ成リ熟スルニ及ヒ三箇ノ覆果トナル其各覆果ハ腹縫ニ沿フテ破綻ス本種 Aconitum ト歐洲諸國藥局方ニ掲クル Aconitum Nepellus トノ主要ナル區別ハ後邊ニ存スル蕚片ノ形狀ト葉面ノ形狀ニアルガ如シ即チ前記植物 (Aconitum Fischeri) ノ後邊ノ蕚葉ハ其長徑横徑ニ比スレバ遥ニ延長スレドモ Aconitum Nepellus ニ在テハ其蕚葉横徑長徑ニ超過ス又乙種植物ノ葉面缺裂ハ甲種植物ノ葉面ニ比スレバ深ク缺入シ其裂瓣狹細ナリ

球根ノ解剖學ニ關スル特徴

草烏頭ト白川附子トノ差ヒハ已ニ上文ニ述ブル如ク稚根ヲ以テ草烏頭トナシ老根ヲ以テ白川附子トナス草烏頭ハ Aconitum Nepellus ノ根ニ比スレバ概ネ稍細小ニシテ蘿蔔形ヲ有シ長サ大約二乃至四仙迷ニシテ間々圓形ヲ爲スモノアリ上部ニ殘莖ヲ戴キ外部ハ縮紋ヲ有スレトモ Aconitum Nepellus ノ球根ニ比スレハ縮收セス淡褐色ヲ有シ往々其母根ト連着セシ瘢痕及ヒ脉管束ノ殘痕ヲ明瞭ニ認視スルヲ得ベキモノアリ副根ハ大抵盡ク之ヲ除去シ只其殘痕ヲ存スルノミ其解剖學的構造ハ概シテ Aconitum Nepellus ト規模ヲ同フシ其異狀ヲ

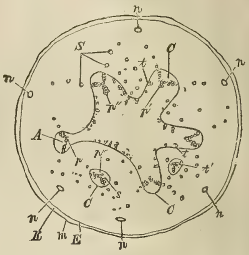
ナセル新生組織ノ彎陷部ニ多數ノ第二期脉管ヲ箝在スルノ差ヒアルノミ

老根即チ白川附子ハ草烏頭ニ比スレバ遙ニ肥大ニシテ蘿蔔形ヲ有シ下部ニ至ルニ從ヒ漸ク狹小トナリ上部ニ殘莖ヲ戴カズ多少彎曲シ處々ニ疣贅狀ノ隆起アリ草烏頭ハ老フルニ從ヒ其新生組織ノ形狀ヲ變スル者ニシテ白川附子ヲ取リ其下部ニ於テ横斷スル片ハ常ニ正當ノ草烏頭ニ固有スル解剖學的構造ヲ認ムレ𪜈其上部ヲ横斷スル片ハ上圖cdニ示ス如ク其星狀ヲ爲セル新生組織ノ外邊ニ間々星狀ノ圈輪ヲ現ハス者アリ此異常ノ紋理ハ新生組織ノ作用ニ由テ生スル者ニシテ初メ星狀ヲ爲セル新生組織ノ二股互ニ近接セラレ甚シキハ其二股相密接スルニ至ルヿアリ此場合ニ於テハ其局部ヨリ新生組織ノ一部分ヲ絞扼セラレ其主新生組織再ヒ癒着閉鎖シ其前邊ニ一ノ細小ナル獨立小新生組織(S第二圖)ヲ生成スルニ至ルモノナリ是レ即チ前文ニ揭クル新生組織ノ外邊ニ於ケル圈輪トス第二圖(A)ニ於テハ星狀新生組織ノ隣接セル二股相近接シ將ニ小新生組織ヲ絞扼セントスルノ狀ニシテ其下部右方ニ於テハ小新生組織ノ絞扼已ニ結局シ其主新生組織絞扼部ニ於テ癒着閉鎖セシ狀ヲ示ス同圖中P′及ヒP″ノ第一期ノ脉管ニシテ之ニ接シ外方ニ向ヒ開放セル角ヲナシテ排置セル第二期ノ脉管ヲ見ルヘシ(C)ハ新生組織ニシテ外邊ニ於ケル(S)ハ總テ第二期ノ篩管即チ新生組織ノ作用ニ由テ生成シタル篩管ニシテ周圍ニ近接シ存スル(n)ハ總テ第一期ノ篩管トス新生組織線中ニ箝在セル(t)ハ總テ第二期ノ小脉管簇、小字ヲ以テ記セル主新生組織ノ外ニ於ケル(S)ハ絞扼ニ由テ



第一圖

第二圖



生ジタル持立小新生組織其（c）ハ新生組織（P'''）ハ第一期ノ脈管ニシテ（t'）ハ主新生組織ノ（t）ニ當タル第二期ノ小脈管簇ヲ示ス而シテ（E）ハ木鞘（R）ハ第一期ノ皮部（m）ハ外皮ヲ示ス

（未完）

○豆相地方植物採集日誌　（第八十四號ノ續キ）

松田定久
安井伴市

二十九日午前七時二十分將サニ小鍋村ヲ發セントス偶〻二名ノ樵夫名古屋ヨリ來ルアリ同伴ヲ促スマヽニ打連レテ勇ミ出ツ、樵夫ハ前年ヨリ天城山ニ來リ伐木ニ從事スルモノナリ、樣々物語セリ中ニ曰ク彼等ノ從屬スル會社ハ小田原ノ商某ノ所有ニ係リ其規摸甚タ廣大、伐木ニ從フ彼等ノ仲間ハ數百人ヲ超ヘ上役アリ下役アリテ之ヲ指揮管理スルモノアリト彼等ハ又諸種ノ樹枝ヲ指示シテイシケヤキ、ツケケヤキノ別ヲ說ケリ又曰ハク近傍ニタルノ溫泉アリ風光絕佳溪間ニマツバランヲ生スト程ナク梨本ニ到リ山徑ヲ辿ルヿ二里余遂ニ天城山顚ニ達ス時正ニ午前十一時午餉ヲ了スルノ後再ビ健脚ヲ驅リ、ヤガテ湯ケ島（湯ケ野ヨリ六里）ニ着キシハ午後四時是ヨリ市山ヲ過レバ斜陽全ク沈ミテ大仁（湯ケ島ヨリ四里）ニ到ルノ間ハ暗夜ノ旅程、昇リツ降リツ山又溪、流石僞勇ノ一隊二八日暮レテ後ノ行軍ニハ虛勢ヲ裝フノ勇モアラバコソ辛フシテ大仁ナル池田屋ニ陣取リシハ午後七時四十分、此日ノ採集昇リ路（湯ケ野ヨリ梨木ヲ經テ登山スル道）ニハ至テ乏シ山林皆伐採シテ赭、途次岩石ニ生スルイハコキノシタヲ得タリ降リ路ニハ羊齒類收獲豐カニ溪間ニハワサビ多ク生ズ屈指一番京地ヲ

辭セシヨリ五日ヲ重ネヌ集ムル所ノ植物積ンデ堆シ之ヲ整理スルハ叉斯日ノ夜課蓐ニ就キシハ正ニ三更、當日採集セル植物ハ左ノ如シ

ウンゼンツヽジ、　イハユキノシタ、　ダイモンジサウ、　アブラチヤン、　カンアフヒ、　ランヤウアフヒ、
マンリヤウ、　ヤブカウジ、　ツルマサキ、　ツルリンダウ、　イマメガシ、　テンナンセウ、　ワサビ、
キヅタ、　フユイチゴ、　ヨメナ、　カウヤノマンネングサ、　イハオモダカ、　マメヅタ、　イハヒバ、
ヒメサジラン、　サジラン、　シケチシダ、　コガネワラビ、　ヨロヒラン、　シヽガシラ、　オニヤブソテツ、
クジヤクシダ、　ヤブソテツ、　イハヘゴ、　ミヤマクマワラビ、　イノデ、　チシダ、?　ハコネサウ、
フモトシダ、　クマワラビ、　イタチシダ、　キジノヲ、　オホバノアマクサシダ、　ベニシダ、　シユモクシダ、
オホバノヰノモトサウ

三十日午前七時半大仁ヲ發シ馬車ヲ驅シテ仁田（大仁ヨリ三里）ニ至ル此レヨリ徒歩上澤ヲ經テ山中驛ニ向フ沿道ノ諸山多クハ禿ニシテ風光甚タ奇ニ駿河灣ノ遠眺亦甚タ佳ナリ正午山中驛（仁田ヨリ二里強）ニ着キ笹屋ニ投スレハヤガテ午飯ニハ餅ノ珍膳一行下口ナレバニヤ容色先ヅヽヽヽ驛ハ極メテ荒寥舊ニ依リテ燕巣アルモ壁壞レ柱傾キ亦往日ノ觀ナシ是レ足柄山ヲ通過スル鐵道ノ其繁華ヲ奪去テ之ヲ他驛ニ散布スルノ致ス所時運ノ推遷止ナシト雖モ誰カ天道ノ厚薄ヲ疑ハザラン山中ヲ距ル二十八丁茶店アリ是レ巡禮ノ行旅ヲ慰ムルノ休息所、茶釜ノ銘ニ曰ク下總國香取郡長部村八石性理敎會所、明治十二年乙卯七月ト、二時四十分函根ニ着ス破風屋ニ松村博士ヲ訪フ不在、湖上ニ小休スル後、權現坂ニ出テ蘆ノ湯（箱根驛ヨリ二十八丁）ニ入ルトキハ滿目皎々雪景甚タ奇ナリ時ニ四時半墓地ノ邊ニ採集シオホクボシダヲ採リテ黄昏ニ至ルモ竟ニ見出ス能ハ

ス寒骨ニ徹ス途中一茶店ニ投シテ暖ヲ取リ餅ヲ喫シテ勇ヲ養フ偶農夫小地獄ニ行クモノアリ輙チ倩フテ余等ノ先導タラシメ命シテ篝火ヲ取ラシム遂ニ夜更ケ四邊寂寥ノ間ヲ進ムヿ數丁宮ノ下（蘆ノ湯ヨリ一里半强）ニ達スならやに到リ再ヒ松村博士ヲ訪ヒ未タ博士ノ此地ニ來訪ナキヲ知ル止ムナク遂ニコヽニ投ス此宿接待甚タ厚ク余等一夜ノ客夢ヲ暖メントスルハ裝飾イトモ數奇ヲ凝シタル一室「中ノ間」、膳羞衾帳亦之レニ適テ甚タ好シ此行投宿六回最モ厚ク客情ヲ慰メタルハ斯夕ニアリキ、當日採集セル植物ヲ左ニ列擧ス

ヒムロ、　カハラナデシコ、　ヒサカキ、　ヤマツヽジ、　クラマゴケ、

三十一日午前八時宮ノ下ヲ發シ新道ヲ下ル路濶ク且ツ坦路傍ニ番小屋ヲ設ケテ行人ニ修路錢ヲ求ム此邊採集多カラズオサシダ等ヲ得ルノミ十時塔ノ澤ニ着ス新玉湯ニ又松村博士ヲ訪フ不幸逢ハズ學生諸氏ノ余等ニ宛遺サレタル一封ニヨリ博士ノ一行前日既ニ此地ヲ發足セラレタルヲ審ニセリ湯本ニ出テ木材標品ノ資料ニ供セントテ數種ノ細工物ヲ購タル後ニ小田原行ノ馬車ヲ傭ントシテ時已ニ遲ク意ヲ果サズ空シク車轍ヲ遂フテ小田原ニ徒歩シ此レヨリ馬車旅行一里余、國府津ニ到リ午餐ヲ了ヘテ休憩少時ヤカデ滊笛一聲國府津ヲ見捨テ一瞬疾走驛又驛、玆ニ數十里程ノ遠征ヲ了シテ復タ新橋ニ京地ヲ踏ミシハ正ニ午後五時過、此日採集セル植物ヲ左ニ掲ク

ハンノキ、　マメヅタ、　オサシダ、　イノデ、　ホラシノブ、　オホバノ井ノモトサウ、　イハガネゼンマイ、

ヤブクジヤク、　オホバノアマクサシダ、

○ANDROMEDA, PIERIS 幷ニ ENKIANTHUS 三屬ノ日本植物所屬ノ訂正

牧野富太郎

(Revision of the Japanese Species of Andromeda, Pieris, and Enkianthus.) By T. Makino.

Andromeda, Pieris 幷ニ Enkianthus ノ三屬ハ ERICACEÆ 即チしやくなん科ニ在テ共ニ Andromedeæ 即チひめしやくなげ族ニ屬セリ

此三屬ニ屬スル日本植物ニハ其所屬ノ整理ヲ要ス可キ者アリ殊ニ吾人ノ注意ス可キ事項ハ其中ノ一植物ハ遂ニ其屬ス可キ屬ノ標徵ヲシテ從來ノモノヨリ更ニ範圍ヲ廣カラシムルノ止ムヲ得ザルニ至ラシメシ事即チ是レナリ此一事ハ殊ニ世界ノ學者ニ向フテ之ヲ通告スルノ價値アルモノト確信スルヲ憚カラズ

此三屬屬徵ノ區域ニ就テハ G. Bentham et J. D. Hooker 兩氏合著ノ Genera Plantarum ニ憑據ス然レドモ Enkianthus 一屬ノ屬徵ニ就テハ已ニ其書ニ規定セルモノヨリ尙其區域ヲ擴ゲタリ是レ已ニ前ニ述ブルガ如ク殊ニ吾人ノ注意ス可キ要點ナリトス

I. ANDROMEDA Linn. pro parte.　ひめしやくなげ屬

花絲ニ鬚毛アリ然レ𪜈附屬物ナシ葯ハ短矮鈍頭ニシテ大形ナル二裂孔ヲ有シ裂孔ノ後ニ二刺ヲ成ス葯背ノ中央部ヲ以テ花絲ニ連ル種子ハ平圓シ細微ニシテ其數多ク種皮ニハ光澤アリ

(1) **Andromeda polifolia Linn.** (= Rhododendron polifolium Scopol.) 和名ひめしやくなげ一名にっくわうしやくなげ

葉ニ廣狹アリ花梗ニ長短アリ本邦ノ産其葉線狀披針形ヲ成ス

(產地)下野日光(大學標品幷ニ予)

II. PIERIS D. Don. かしをしみ屬

花絲ノ葯ニ接スル處或ハ其稍〻下ニ在テ斗出シタル二曲距アリ或ハ時ニ之ヲ缺如ス(Maria 區是ナリ此區ノ植物本邦ニ之レ無シ) 葯ハ廣楕圓形ヲ成シ其背ノ下部ヲ以テ花絲ニ連ナリ頂ノ裂孔ハ大ニシテ卵形ヲ成ス

(a) Eupieris. かしをしみ區

葯ニ剌ヲ具ヘズ花絲ハ纖長ニシテ頂點或ハ稍〻下リテ兩側ニ各一距ヲ有ス

(2) **Pieris** (Eupieris) **ovalifolia D. Don** (=Andromeda ovalifolia Wall.; Andromeda elliptica Sieb. et Zucc.) 和名かしをしみ一名ねぢぎ

(產地)下野日光、肥後百貫石、大和大峯山、攝津布引山、阿波箸藏山、豐前岩嶽(共ニ大學標品)土佐佐川村幷ニ五臺山(予)

(b) Portuna. わせぽ區

花絲ニ距ナシ葯ハ其背ノ花絲ニ着ク處ニ於テ斗出シタル二距ヲ有ス

(3) **Pieris** (Portuna) **japonica D. Don** (=Andromeda japonica Thunb.) 和名あせぽ一名あせび

(產地)大和春日山、紀伊十丈峠、伊勢菰野山、武藏秩父大日向山(共ニ大學標品)相摸箱根(大學標品幷ニ予)土佐上分村、同篠ゲ峯(予)

(4) **Pieris** (Portuna) **nana Makino** (=Andromeda nana Maxim.) 和名はせざくら(草木圖說木部第三卷第百三葉)一名こめばつがざくら

（產地）加賀白山、羽前月山（共ニ大學標品）下野日光（大學標品幷ニ予）陸中栗駒山（予）

III. ENKIANTHUS Lour.　どうだんつゝじ屬

葯ハ長楕圓形ニシテ葯胞ノ頂後ニ二刺アリ裂孔ハ前面ニ向ヘリ蒴中一顆乃至寡數ノ長種子アリテ三乃至五翅ヲ具フ或ハ罕レニ之ヲ缺如スルモノアリ

此「或ハ罕レニ之ヲ缺如スルモノアリ」ノ數句ハ今予ノ追加補修スル所ニ係リ從來規定セラレタル本屬ノ標徵ヲシテ更ニ完備ノ域ニ達セシム從フテ Bentham et Hooker 兩氏ノ大著 Genera Plantarum vol. II. p. 589. ニ記スル所ノ本屬ノ屬徵中 " testa membranacea 3-5-alata, alis crispatis erosis " ノ後ニ接續シテ " vel alis obsoletis " ノ一句ヲ追補スベキヲ至當トス

（甲）　種子ニ翅ヲ具フ　Semina alata.

（一）　花ハ下垂總狀花ヲ成ス

（イ）　花冠ノ裂片ハ各三齒ヲ成ス

(5) **Enkianthus cernuus Benth. et Hook. fil.** (= Meisteria cernua Sieb. et Zucc.; Andromeda cernua Miq.; Tritomodon japonicus Turcz.)

α. **typica Maxim.**　和名しろどうだん

β. **rubens Maxim.**　和名べにどうだん

（產地）しろどうだんハ相模箱根、肥前溫泉岳等べにどうだんハ豐前犬ヶ岳、土佐大窪村（共ニ大學標品）同野名川村（渡邊協氏）同横倉山（予）

（ロ）　花冠ノ裂片ハ全邊ナリ

（6） **Enkianthus campanulatus Hook. fil.** (=Andromeda campanulata Miq.) 和名さらさどうだん一名やうらくつゝじ一名ふうりんつゝじ

(產地)加賀白山、信濃戸隱山(共ニ大學標品)下野日光(大學標品幷ニ予)土佐佐川村、同横倉山(予)

（7） **Enkianthus subsessilis Makino** (=Andromeda subsessilis Miq.) 和名未詳

此植物ハ Miquel 氏ノ記文 (Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi vol. I. p. 32.) ニ據レバ極メテ能ク前種ニ類肖ス只其主ナル異點ハ葉ノ側脈分明ナラズト云フニ在リ然レモ此植物ハ特ニ一種ノ者ニ非ズシテ蓋シ前種ノ異品ナラン吾人ハ未ダ本邦各地ヨリ蒐集シタル標品中ニ該品ヲ目擊セズ

(產地)日本(Miquel氏)

（8） **Enkianthus japonicus Hook. fil.** 和名どうだんつゝじ

（二） 花ハ開出セル繖形花ヲ成ス

(產地)下野日光(大學標品ニ據ル)武藏東京（培養品）(大學標品幷ニ予)

(乙) 種子ニ翅無シ Semina exalata. (或ハ亞屬 Sub-genus ヲ建設スベキ乎)

（9） **Enkianthus nikoensis Makino** (=Andromeda nikoensis Maxim.) 和名わぶらつゝじ

此植物ハ種子ニ翅ヲ具セズ唯其面ニ低平ナル小瘤ヲ布ク此特ニ標異ナル目徵ハ從來ノ Enkianthus 屬ノ屬徵屬ト一致セズ然レモ予ハ敢テ此一致セザル目徵アルガ爲メニ之レガ隷屬ヲ拒ム可キニ非ラズト何トナレバ其植物ノ全狀ハ全ク此屬ニ屬ス可キ資性ヲ有スレバナリ故ニ此植物ヲ以テ此屬中ニ在ラシムルト同時ニ此屬從來ノ屬徵ヲ改更スルヲ以テ其正鵠ヲ得タルモノトナス可キナリ徒ニ不備ノ目徵ヲ株守シテ此植物ヲシテ適從ス

ルヿ能ハザラシム可ケン哉

（産地）下野日光、駿河富士山、紀伊那智山（大學標品）武藏秩父八見山（予）

◎雜錄

○Bean氏ノ Classification of Hardy Bandoo ニ就キ

大久保三郎

竹族ハBentham及ビHooker兩氏ノGenera Plantarumニ由レハ四亞族廿三屬Durand氏著書ニハ廿三屬ヲ載セリ而メ本那自生若クハ栽培品ハArundinaria, Phyllostachys及ビBambusaノ三屬トス、Arundinariaハ小穗（スヒキ）狀花總（ユラ）狀様若クハ圓錐狀ノ穗ニシテ花數極メテ夥多雄蕊三個アリ下部穎苞一又二、殖器欠如ス半灌木若クハ喬木狀ヲナス、Phyllostachysハ小穗狀花一乃至四花ヨリ成リ雄蕊三個下部ノ穎苞二或ハ三、殖器ヲ欠ク、喬木狀、Bambusaハ二乃至夥多ノ花ヨリナル雄蕊六個下部ノ穎苞三或四、殖器ナシ、蕚頴ノ稜ニ細毛アリ翅判然セズ、子房ノ頂ニ絨毛アリ喬木狀罕ニ半灌木或攀緣セルアリ以上記スル處ノ形狀ヲ以テ竹類ヲ區別セント欲スルモ本邦ニテハ花ヲ生ズルヿ極メテ罕ナルヲ以テ三者何レノ屬ニ入ルヤ明瞭ナラザルモノ多々アルハ吾人ノ常ニ殘念トスル處ナリ然ルニ本年出版ノThe Gardners' Chronicle no. 372ヨリ384及ビ376.378ニテW. J. Bean氏ハ竹ノ種類數品ヲ載記セリ氏ノ説ハ未ダ完備ニ至ラザルモ已ニ出セシモノニシテ本邦ニ關スル分ノ洋名ヲ拔萃シ以テ讀者諸君ノ一覽ニ供セン

くまざさハ學名ヲBambusa tessellata, Munroトイフ歐洲園藝家ハB. Rangamowskiト稱ス

るりひらだけハ Riviéri 氏命ズルニ Arundinaria Simoni ノ名ヲ以テス Carrière 氏ノ Bambusa Simoni ハ其一名ナリ又一種葉ニ白色ノ縱條アルハ A. Simoni, var. albo-striata, Bean トイフ（ボタニカルマガシーン第七千百四十六版ノ A. Simoni, var. variegata, Hook. ハ蓋シ同品ナラン然レ𪜈 Bean 氏ハ同圖ヲ引用セズ）

やのはざさハ A. Veitchii, N. E. Br. ニシテ異名三アリ曰 A. kurilensis, Rupr. var. paniculata, Schmidt 曰 Bambusa Veitchii, Carrière 曰 B. albo-marginata ナリ西洋園藝家ニテ此品ヲ B. tessellata ト誤稱セリト

附言宮部金吾氏ハ Ruprecht 氏ノ Arundinaria kurilensis ヲ Bambusa kurilensis トシ附記シテ曰 A. kurilensis, var. spiculosa, Shmidt ハ「マキシモウヰクズ」氏ノ報ニ六雄蕊アリ故ニ Bambusa ナリトアリ N. E. Br. 氏ノ A. Veitchii ハ果シテ三雄蕊ナリヤ

Franchet 及ビ Savatier 兩氏ノ Bambusa senanensis ハ Arundinaria kurilensis, var. speciosa, Bean ナリト然レ𪜈宮部氏ハ氏ノ著書 On the Flora of the Kurile Islands 二百七十二頁中ニ左ノ如ク記セリ “One of the original specimens of var. paniculata, F. Schm., in the Gray Herbarium, does not differ from Bambusa senanensis, Fr. et Sav.” トアリ（var. paniculata トハ A. kurilensis ノ var. ノ事ナリ）

Bambusa Metake, Sieb. 即チめだけハ Arundinaria japonica, Sieb. et Zucc. ナリ

Arundinaria Fortunei, Rivière ニ三變種アリ第一ハ A. Fortunei, fol. variegata（ちござゝナラン）ナリ Van Houtte 氏ハ Bambusa Fortunei ノ名ヲ以テス葉ニ白色ノ間道アリ裏面ニ短柔毛アリ緣邊及ビ嫩鞘ノ基部モ亦有毛第二ハ A. Fortunei, var. aurea（わうごんちくト考フ）葉前者ニ似テ幅廣ク間道黃色裏面短毛ヲ有シ表面ニ僅少ノ毛ヲ存ス第三 A. Fortunei, Hort.（Hort. ハ花戸ノ略ナリ人名ニアラス以下皆同シ）一名 Bambusa gracilis, Hort. ハなりひ

らだけニ似テ倭小ナリ葉ニ條斑ナク兩面平滑幅狹クシテ頂端漸次狹長ス、葉鞘ハ赤銅色、有毛ナリ

Bambusa pumila, Hort. ビイン氏曰「倭小ノ種ニシテ綠葉ノ Arundinaria Fortunei ニ近シ云々我國（英國）ニ在リテハ高サ一呎九吋莖ハ編物針ノ太サニシテ基脚ノ外ハ無枝ナリ葉ハ長サ四半吋幅四分ノ三吋アリ細微毛ヲ以テ覆ハル故ニ A. Fortunei ト異ナリ又其ノ如ク長漸尖トナルコナシ云々」因云フ昨年十月牧野富太郎氏ハ帝國大學ノ命ヲ帶ビ三河國ニ出張セラレシ際同地ニ於テ竹類四品ヲ採集セラレタリ今假リニ此四品ニいろはにノ附號ヲ以テセン而シテ(い)ハ高サ一尺四寸乃至一尺五寸七分葉ノ長サ三寸五分乃至四寸七分下面平滑上面亦殆ンド平滑側脈各方ニ四條、葉鞘ハ緣邊ニ細毛アリ(ろ)ハ高サ凡一尺八九寸葉ノ長サ三寸七分乃至四寸五分脈各方ニ五條兩面ニ短粗毛アリ葉鞘有毛ナリ(は)ハ高サ五寸乃至二尺四寸葉ノ下面柔毛アリ上面ニハ極メテ細毛アリ葉鞘有毛ナリ(に)ハ前三品ヨリ小形高サ凡四五寸余葉ノ長サ一寸四分以上二寸五六分脈ハ分中肋ノ各側ニ三若クハ四條平行ス葉鞘ノ緣邊ニ細毛アリ以上四品皆花ヲ欠ク而シテ Bean 氏ハ B. pumila 及ビ A. Fortunei ノ記事中亦花部ヲイハズ然レトモ共記載ノ形狀ヨリ考フル時ハ牧野氏採集ノ(い)ハ A. Fortune var. ニ屬シ(ろ)(は)(に)ハ B. pumila ニ屬スルモノナラント考フ

きむめいちくハ Bambusa castillonis, Hort. ナリ

四方竹ハ Bambusa quadrangularis, Fenzi.

きくこうちくハ Bambusa heterocycla, Carrière

れろしまちくハ B. pygmaea

やだけハ Phyllostachys bambusoides, Sieb. et Zucc.

Phyllostachys kumasasa, Munro ハ花戸ノ Bambusa viminalis ナリ和名おかめざさ

もうそうちく Phyllostachys mitis, Rivière ニシテ Poiret 氏ノ Bambusa mitis ナルモノモ同種ナランカトハ「ビイン」氏ノ解ク處ナリ

Phyllostachys niger, Munro ハ くろちく

Bambusa sterilis, Kurz. ハ Munro 氏ノ說ニ從ヘバ B. nana, Roxb. ト同品ナリト此竹ハ土用竹ト稱スルモノナラン

○ヤドリキニ就テ

佛人ゲリン氏ハヤドリキニ就テ一論文ヲ草シ之ヲ世ニ公ニシタリ論文ハ之ヲ十一章ニ區分ス

第一　ヤドリキ漿果ノ粘液ハ其用果シテ如何　從來學者ノ唱道スル所ニ據ルニヤドリキ漿果ノ落下スルヤ其粘液之ヲ其落下セル所ニ粘着セシムル者ナリト然レ𪜈是レ不可能ノ事タリ何トナレバ漿果ノ皮膜タルヤ極テ強靱ナレバ假令之ヲ壁ニ向テ劇シク投射スルモ絕エテ皮膜ハ破ルヽヿ無シ隨テ漿果ノ落下スルモ皮膜ハ破レズ粘液ハ外ニ出ルヿ能ハザルナリ蓋ヤドリキ種子ノ散布タルヤ主トシテ是等粘液ヲ呑食スル所ノ鳥類ニ是レ因ルモノナレバ即是等鳥類ガ漿果ヲ呑食スルヤ漿果ハ下劑ノ如キ作用ヲ爲シ爲ニ呑食セラルヽヤ時ナラズ粘液ノ大部分ハ種子ト共ニ消化セラルヽヿ無クシテ鳥ノ体外ニ脫出スベシ然レ𪜈若シ鳥ノ之ヲ呑食スルヤ消化シ難キ物質ト共ニ之ヲ食ヘバ粘液ハ鳥ノ体中ニ於テ全然消盡シ種子ハ体外ニ脫出スルモ既ニ發芽力ヲ亡失スルモノトス

抑〻粘液ノ用タルヤ其吸水力強キヲ以テ空氣中並ニ雨水ヨリ水分ヲ吸收シ之ヲ發芽種子ニ輸送スルニアリ

粘液ハ多量ニ水分ヲ含有スル時ト雖𪜈其初メハ粘着力甚ダ強カラズ故ニ雨降ル時ハ種子ハ往々樹木ノ皮上ヲ滑利シテ以テ枝ノ下面ニ到ルヿアリ然レ𪜈空氣ニ觸ルヽヿ愈々久ケレバ粘液ハ愈々軟弱ト爲リ遂ニ種子ノ發芽スルモノヲシテ能ク木皮ノ一定部ニ固着シテ敢テ其位ヲ變ゼザルニ至ラシムルナリ

尚ホ茲ニ一言スベキハ漿果ノ果肉ハ全然氷結スルアルモ其種子ハ絶エテ其發芽力ヲ亡失スルヿ無シ

第二　光線並ニ温熱ノ發芽ニ對セル影響　ヤドリキノ種子ハ光線内ニ非ザレバ發芽セズ而カモ藍色光線ヲ好マズシテ黄色光線ヲ好ムガ如シ而シテ一タビ發芽スルヤ後暗黒中ニ在ルモ胚根ハ盛ニ生長シ且下部ヨリ上部ニ向テ生長ス其根ノ色ハ先端淡緑色ニシテ漸次純黄色ニ推移ス叉莖ハ假令暗黒中ニ在ルモ其緑色ヲ永ク保持ス例ヘバ或ルモノハ之ヲ一年間半バ暗黒ナラシメタルモ其色尚ホ緑黄色ナリシト謂フ

胚根ハ光線ニ對シ其關係頗ル複雜ヲ極ムト雖𪜈諸種ノ實驗ニ徵シテ考フルニ胚根ハ陰性向光性ヲ存スルガ如シ

第三　種子ニ多數ノ胚アリ　漿果ヲ撿スルヿ其數一百而シテ其内三十一個ニハ一種子ニ一個ノ胚アリ六十三個ニハ一種子ニ二個ノ胚アリ六個ニハ一種子ニ三個ノ胚アリ稀ニハ一種子ニ四個ノ胚アルモノアリ

第四　ヤドリキノ蕃殖ヲ妨害スル鳥類、昆虫幷ニ蝸牛類

第五　ヤドリキ、ヤドリキニ寄生ス　天然ニハヤドリキノ他ノヤドリキニ寄生スルモノアル無シ然レ𪜈人工的ニ種子ヲ播ケバ此現象ヲ呈セシムルハ敢テ難キニ非ズ

第六　光線ノ枝ノ方位幷ニ色ニ於ケル作用　ヤドリキノ枝ニハ之ヲ包圍スル所ノ光線八方同一樣ナレバ八方同一樣ニ發射シ全体球狀ヲ爲スト雖𪜈若シ一方明クシテ一方暗ナル時ハ爲ニ屈曲ヲ生ズベシ

枝ハ其幼稚ナルニ當テハ常ニ陰性向地的ナルガ故ニ上方ニ向テ屈曲シ後ニハ眞直ト爲ル

又ヤドリキノ色ニ就テハ雄本ハ雌本ニ比シテ濃黃色ヲ呈スルガ如シ又光線ニ作用セラルヽヿ强キ方ハ其黃色濃ナルガ如シ

第七　ヤドリキト宿主植物トノ關係　ヤドリキハ冬季ニ於テモ寄主ヨリ多量ノ水分ヲ吸奪ス故ニヤドリキノ果樹ニ寄生スルヤ其枝ノ全然枯死スルヿハ稀ナリト雖𪜈果實ノ成熟大ニ其時ヲ晩クスルガ如シヤドリキ雄本ハ雌本ニ比スレバ其發育大抵常ニ微弱ナリ

第八　ヤドリキガ寄主ヲ撰擇スルヿニ就キ

第九　ヤドリキハ接木ノ法ニ因テ蕃殖セシムルヲ得ルヤ　ヤドリキハ接木ノ法ニ因テ蕃殖セシムル能ハズ又二本ノヤドリキノ枝ヲシテ數年間相密接セシムルモ絕エテ合着スルヿ無シ

第十　榮養部ノ變異

第十一　畸形　枝ノ先端ニ三、四乃至之ヨリ以上ノ葉ヲ具スルモノアリ雄花ノ二、三、五、或ハ六葉ノ花瓣ヲ具スルモノアリ雌花ノ其授精器官變ジテ微細ニシテ其形狀ノ不正ナル葉ト爲レルモノアリ其他ノ畸形ハ一ニシテ足ラズ

○繇條書屋植物雜記　（其九）

牧野富太郎

●わせをばなハ帝國「フロラ」ノ新品ナリ

繇條書屋植物雜記其六（本誌第八十四號）ときはすゝきノ項中「是レ曾テ」ヨリ以下「全く同物なりし云々ト」ニ至ルノ百餘言ハときはすゝきノ條下ニ在ル可キ者ニ非ザレバ其處ヨリ之ヲ芟除シ去ル可シ而シテ此房州方言

はますゝき一名わせをばなハ本邦「フロラ」ノ新品ニシテ田中芳男先生ノ採集ニ係リ爲メニ本邦「フロラ」ニ一新屬ヲ加フルニ至レリ今 Eduardo Hackel 氏ノ著書 Andropogoneæ (A. DeCandolle 氏 Monographiæ phanerogamarum 第六卷) ニ參照シ其學名ヲ驗案スルニ是レ即チ Saccharum spontaneum Linn. (= *Imperata spontanea Beauv.*) subsp. a. indicum Hack. var. α. genuinum Hack. ニシテ此屬ニ屬セル植物ハ從來一モ本邦ニ在テ發見セシコト無カリシナリ從テ本邦ノ「フロラ」ヲ記セル書中一モ眞正ナル本屬ノ本邦植物ヲ掲載セズ Saccharum officinarum Linn. 即チ甘蔗之ト屬ヲ同ジクスト雖ドモ然ドモ是レ固ヨリ本邦土產ノ植物ニ非ザルナリ

今田中先生ノ標品ニヨリ其形狀ノ梗概ヲ擧グレバ葉ハ狹瘠ナル線形ヲナシ中脈ハ肥厚ニシテ下面ニ高起シ乾腊セルモノハ其邊緣外卷ス花穗ハ瘦長ナル圓錐形ヲナシ穗軸幷ニ椏梗ニ白毛ヲ帶ブ椏梗小梗ニハ關節アリ小穗ハ唯一花ヨリ成リテ披針形ヲナシ頂端尖銳ナリ絹質白色ノ總苞毛多數其基部ヲ擁シ其長約ソ穎ニ三倍ス第一第二ノ兩穎ハ下部硬質ニシテ上部膜質トナリ中部或ハ上部暗褐色ヲ呈ス第一穎ニハ二脈アリ第二穎ニハ一脈アリ而シテ第三穎ハ全部白膜質ニシテ且ツ無脈ナリ雄蘂三數ニシテ花柱兩岐シ柱頭ハ暗紫色ノ羽毛ヲ密生ス小穗ハ花後ニ至テ容易ニ散落シ且ツ椏梗小梗モ亦關節ヨリ折離シ易シ

田中先生標品ニ貼附セル小箋ニ記シテ曰ク「安房國安房郡安房神社近村ノ產、方言はますゝき又わせをばる」ト又曰ク「明治廿二年八月三十日撿シ九月四日採ル此時既ニ實トナレリ」ト又曰ク「此芒高五六尺アリ山生ナレ𪜈之ヲ田畔ニ植列ネテ防風ノ備トシ又堅固ナラシム枯莖ハ其儘ニシテ冬月麥ヲ護セシム」ト

◉まつぶさハてうせんでみしト別ナリ

まつぶさハてうせんごみしニ非ザルナリ是レ元來別種ニ屬ス然𪜈往々世人ニ混視セラルヽヲ免カレズ今之レガ區別ノ要點ヲ擧グルモ亦敢テ無用ノ事ニ非ザル可シ

○まつぶさハ學名ヲ Schizandra nigra Maxim. ト云ヿ葉ハ厚柔ニ〆兩面滑澤坦平一モ毛ヲ帶ビズ卵形ニ〆葉頭尖出シ嫩莖ノ葉ハ殊ニ著シク鋭尖ヲ成ス葉縁ニハ微凸頭齒疎在シ葉脈ハ生葉ノ上面ニ分明ナラズト雖𪜈裏面ニ緑色ノ網狀ヲ呈セリ然𪜈決シテ表面上ニ隆起スルヿ無シ生葉ヲ揉潰セバ松氣アリ漿果ハ黑熟ス故ニ又うしぶだうト呼プ別ニまつぶだう、やはらづる、やはらかづら、わたかづら及ビもちかづらノ異名アリ

○てうせんごみし即チ北五味子ハ學名ヲ Schizandra chinensis Baill. (= *Kadsura chinensis Turcz.; Maximowiczia chinensis Rupr.; Maximowiczia amurensis Rupr.*) ト云ヿ葉ハ寧ロ薄クシテ倒卵形或ハ楕圓狀倒卵形ヲ成シ葉脈ハ其裏面ニ隆起シテ其上面ニ凹在シ脈間上ニ膨起シ葉ノ全面爲メニ粗皺ヲ成ス而シテ上面ニハ毛ナシト雖𪜈裏面ニハ脈上ニ微毛アリ葉緣ノ微凸頭齒ハまつぶさノ如ク疎在セズ生時揉ンデ松氣ナシ熟果ハ赤色ナリ

生植物ノ上ニ觀ル者誰レカ此兩品ヲ辨識スルニ苦マン然レ𪜈乾腊セル標品ニ在テハ之ヲ區別スル之ヲ生時ニ比スレバ稍々困難ヲ覺ユト雖𪜈細心其異同ノ點ニ注意セバ庶幾クハ之レガ混同ヲ避クルヲ得ン殊ニ生時此兩品ヲ親驗セシ士ニ在テハ則チ一見直ニ之ヲ鑑別ス可キノ眼ヲ得ルニ難カラズ

理科大學所藏ノ標品此屬ニ屬スル者六個アリ就中其三個ハまつぶさニシテ越中立山、下野日光幷ニ信濃碓氷峠ニ採集シタルモノナリ而シテ他ノ三個ハてうせんごみしニ〆北海道日高サルヽ、同道小沼及ビ信濃和田峠ニ採集シタルモノナリ此種朝鮮五味子ト呼ブト雖𪜈本邦諸所ニ自生スル固ヨリ罕レナラズ

まつぶさノ圖本草圖譜第廿五卷ニ出デてうせんごみしノ圖亦同卷ニ在リ又 Maximowicz 氏著 Primitiæ floræ amurensis 第一圖、一千八百六十二年刊行 Regel 氏 Gartenflora 第三百八十二圖幷ニ Van Houtte 氏 Flore des Serres 第十五卷第一千五百九十四圖ハ共ニ此てうせんごみしノ圖ニ係ルナリ

●竹節人參、人參幷ニ廣東人參ノ學名

竹節人參トハ即チとちばにんじんヲ謂フ根莖橫行シテ節アリ眞ノ人參ノ直下スルト同ジカラズ五小葉一柄ニ著テ掌狀ニ排生ス又三小葉ノ異品アリ熟實全ク赤色ニ染ム或ハ頂ニ黑點ヲ印スルモノアリ呼ンデ相思樣人參ト云フ

Araliaceæ 即チうこぎ科中花瓣覆瓦襞ヲ成ス者悉ク皆ナ Aralieæ 群ニ入リ Panaceæ 幷ニ其他ノ諸群ハ花瓣正サニ鑷合襞ヲ成スとちばにんじん花瓣覆瓦襞ヲ成ス Aralieæ 群中ノ者タル固ヨリ論勿キナリ

Aralieæ 群中 Aralia 屬アリ屬自ラ兩區ニ別ル(一)ヲ Ginseng 區ト云フ Decaisne 及ビ Planchon 兩氏ノ命名ニ係レリ曩時之ヲ Araliastrum 又ハ Aureliana ト稱シ Panax 屬中ニ一區ヲ成セシモノ今時ハ移シテ其籍 Aralia 屬中ニ在リ而シテ更メテ之ヲ Ginseng 區ト稱スルニ至ル區中ノ植物皆草本ニシテ掌狀葉ヲ有シ花柱ニ二數ノモノアリ三數ノモノアリ(二)ヲ Euaralia 區ト云フ羽狀葉或ハ復生葉幷ニ五花柱(或ハ四)ヲ有スル草本、灌木、喬木之ニ隷スたらのき(Aralia spinosa L. α. glabrescens Fr. et Sav. = *A. élata Seem.*)めだら(Aralia spinosa L. β. canescens Fr. et Sav. = *A. canescens S. et Z.*)幷ニうど(Aralia racemosa L. β. sachalinensis Regel = *A. cordata Thbg.*; *A. edulis S. et Z.*)ハ即チ此區中ノ者ニ係ル而シテ(一)Ginseng 區ニ屬スル本邦土產植物唯ゞ一アリとちばにんじん即チ是レナリ

とちばにんじん其學名ヲ Panax (Araliastrum Vaill.) repens Maxim. (Mélanges biologiques 第六卷第二百六十四頁) ト云フ Maximowicz 氏舊時ノ如ク依然 Araliastrum 區ヲ Panax 屬中ニ置キとちばにんじんヲ此ニ入レ以テ Panax repens ノ學名ヲ附セリ同氏之ヲ Araliastrum 區ニ配ス固ヨリ當サニ適當ノ措置タルナリ然レ𪜈此區ハ現時 Ginseng 區ノ名ヲ擔ヒ一轉シテ Aralia 屬ニ隸屬スルニ至レリ從フテ Panax repens ノ名稱ヲ變更ス可キノ時期ニ際會セルヲ以テ予ハ今之ヲ改メテ Aralia (Sect. Ginseng) repens Makino. トナス然レ𪜈尚精査ノ要ス可キモノアリテ存ス何トナレバ此植物ヲシテ果シテ一種特立ノ地位ヲ保セシムルニ足ル可キヤ又更ニ之ヲ Aralia quinquefolia var. repens トナス可キヤ聊カ疑ヒナキ能ハザルヲ以テナリ

Maximowicz 氏ハ Panax repens Maxim. (l. c.) ノ項下ニ於テ A. Gray 氏著 On the Botany of Japan 及ビ Miquel 氏著 Prolusio floræ japonicæ ヲ引用シ此兩書ニ擧グル所ノ名稱ヲ以テ其異名トス然レ𪜈予ハ遽カニ之レニ左擔スル能ハズ何トナレバ此兩氏ノ記事簡略ニ失シテ果シテとちばにんじんノ標品ヲ基トセシヤ又ハ從來韓種ヲ傳ヘテ播培セル眞正ノ人參ノ標品ヲ基トセシヤ予ハ今之ヲ知ル能ハザレバナリ

にんじん(人參)即チおたね人參ハ原ト本邦ノ植物ニ非ラズト雖𪜈今ハ其種ヲ傳ヘテ諸州ニ栽植セリ而シテ滿州、朝鮮ノ土之レガ原產地ナリ學名ヲ Aralia quinquefolia Planch. et Decne. var. Ginseng Regel et Maack. (=*Panax Ginseng C. A. Mey.*) ト云フとちばにんじんト共ニ Ginseng 區中ノ品種ニシテ所謂 Corean Ginseng 是ナリ小葉ハ楕圓狀長楕圓形ヲ成シ銳尖頭ヲ有シ重齒牙緣ヲ成ス花梗ハ高ク抽キテ著シク葉柄ヨリ長シ Panax quinquefolium β. coreense Sieb. 幷ニ Panax Schinseng var. coreense Nees ナル名稱アリ B. Seemann

氏ハ彼レノ著 Revision of the Natural Order Hederaceæ (in Journal of Botany) ニ於テ之ヲ Panax Ginseng C. A. Mey. ノ異名トス然ルニ予ハ今不幸ニシテ其形狀ヲ稽査ス可キノ書籍ヲ有セズ故ニ此ニ之ニ就テ評記スルヲ得ズ

西洋人參アリ邦人呼ンデ廣東人參ト稱ス然レ𪜈是レ廣東ノ產ニ非ズシテ北米合衆國ノ東北部幷ニ「カナダ」地方ニ出ヅルナリ形狀亞細亞ノ產ト少異アリ小葉ハ長楕圓狀倒卵形ニシテ缺刻鋸齒緣ヲ成シ花梗ハ葉柄ヨリ短矮ナリ之レヲ Aralia quinquefolia Planch. et Decne. (= *Panax quinquefolium L.; Aureliana canadensis Lafit.*) ト云フおたね人參ト同種ニシテ異變種タリ所謂 American Ginseng 即チ是ナリ

◎えんでざくノ數品

頃日えんでさく即チ延胡索ノ數品ニ就テ研査シ左ノ如ク對照スルヲ得タリ然レ𪜈此等ノ植物固ト變態多シ甲ニ屬セシメンカ乙ニ從ハシメンカ頗ル疑似ノモノ多ク到底劃然タル境界ヲ其間ニ設ク可カラザルモノアリ强テ之ヲ細別セバ此ニ無數ノ名稱ヲ生ゼン之レニ觀ルモノ其無益ノ煩ヲ避ケ約シテ以テ之ヲ數名ノ下ニ綜ブルニ至レリ

Corydalis ambigua Cham. et Schlechtd. α. genuina Maxim. ではえんでさく(新稱) 予ガ所藏ノ標品ハ長澤利英氏ノ寄贈ニ係ル

——β. amurensis Maxim. lusus 1. genuinus Maxim. えぞえんでさく(新稱) えんでさく(理科大學標品)

——— lusus 2. linearilobus Maxim. (= *C. ambigua var. angustifolia Yatabe*) ほそばえんでさく(理科大學標品)

Corydalis bulbosa DC. (=*C. solida* Sw.; *C. remota* Maxim.) α. typica Regel (=*C. remota* α. *genuina* Maxim.; *C. laxa* Franch. et Sav.) やまえんごさく（理科大學標品）

―― β. lineariloba Maxim. (*C. lineariloba* S. et Z.; *C. orthoceras* S. et Z.; *C. solida* L. var. *linearis* Miq.; *C. solida* L. var. β. *orthoceras* Miq.; *C. senanensis* Fr. et. Sav.) さゝばえんごさく（理科大學標品）

延胡索一種（本草圖譜第七卷第廿八葉表）

―― γ. rotundiloba Maxim. (= *C. solida* L. β. *rotundiloba* Reg.; *C. jezoensis* Sieb.; *C. Vernyi* Fr. et Sav.)

えんごさく「延胡索」（本草圖譜第七卷第廿六葉裏） おほばえんごさく「牡丹葉」（草木圖說第十三卷第五葉裏） じらうぼう「延胡索」（花彙草之二第十葉）

形狀稍小ナル者ヲこばのえんごさく（草木圖說第十三卷第六葉表）ト云フ是レ即チ延胡索一種（本草圖譜第七卷第廿七葉裏）ト同品ナラン

○バクテリアノ說

K. D. 山人纂譯

博士オリヴアー、エンヂル、ホルムスハ醫術研究ノ際蓐熱ノ病毒ハ醫師ノ衣服ニ附着シテ一ノ病者ヨリ他ノ病者ニ傳染スルモノナリトノコトヲ見出シタリ然レドモ博士ハ只此事實ニヨリテ斯アラント信ジタル迄ニテ未タ其毒ハ如何ナルモノナルヤニ至リテハ明カニ思ヒ定ムルコトヲ得サリキ而シテ博士ノ此說ヲナスヤ殆ンド反對ト嘲笑ノ間ニ身ヲ置キシ有樣ナリシガ毫モ之ニ屈撓セズシテ更ニ其意見ヲ主張シ以テ之ヲ實際ニ行ヒ竟ニ多數ノ生命ヲ救ヒタリ實ニ今日ニ至リテハ曾ニ博士ノ說ノ眞正ナリシノミナラズ當時博士ガ一片ノ想像上ニ止リテ尙未ダ見ルコト能ハザリシ病毒モ全ク黴菌ニ因レルモノナルコト世上ニ表白シ且ツ其黴菌ヲ管中

ニ生殖セシメテ以テ之ヲ絶滅スルニ最モ力アルモノハ抑モ何ナリヤトイヘル事マデモ知リ得ルニ至レリサレバカノ文學世界ニ在リテ天資ノ英才敏腕ヲ備フルニ非ラザレバ大文學家タルヲ得ズトイヘルガ如ク科學ニ於テモ猶ホ其發達ノ偉勳ヲ壯年ノ醫師ナリシ此ノ天資英邁ナル博士ノ熱心ト忍耐トニ歸シ以テ深ク其厚意ヲ謝セサルベカラス當時博士ハ己ヨリモ年齡高ク而モ其名社會ニ藉甚タリシ多クノ醫師ヨリ反對不遜ノ語ヲ受ケ殆ンド嘲罵ノ圍中ニ陷落シ時ニ孤城落日ノ觀ナキニアラザリシモ此等ノ爲ニ毫モ沮喪スルコトナク愈其持說ヲ變ゼザリシハ實ニ吾人ノ敬服スル所ナリ

吾人ハ尙ホ是ヨリ一步ヲ進メ是等微小ノ有機物ガ炎症膿々並ニブラットポイゾニングヲ起ス方法ニ就キ一精微ナル硏究ニ從事セント欲ス既ニ第一章ニ於テ人体ヲ組成スル細胞ノ多クハ初生ノ時期ヨリ漸々身体ノ發育スルニ從ヒ一種特有ノ形狀ト作力トヲ有シ且ツ或ル他ノ細胞ニ至リテハアメバノ如キ一細胞ヨリ成レル單純ナル有機物時代ヲ經過セズシテ止ムモノアルコトヲ說ケリ抑人体ニ於ケル是等劣等ノ細胞ハ白血細胞(未完)

○帝國大學植物園來觀人員

帝國大學植物園去月中ノ來觀人員ハ四千五百四十八人ニシテ內特許證持參ノ者二十二人、外國人五十一人ナリ

(五月八日官報)

○野々山巳年衛氏

東京植物學會會員野々山巳年衛氏ハ去三月廿八日逝去セラレシ由氏ハ曾テ理科大學簡易講習科第二部ノ優等卒業證書ヲ領セラレ爾來職ヲ長野縣尋常中學校飯田支校ニ奉ゼラレテ良師ノ聞アリシニ悼シキカナ

◎質問應答

片岡氏ヨリ送ラレタル備後鞆津海邊ノ植物ハ Ficus erecta, Thunb. いぬびは、鄉分村ノ分ハ Ficus nipponica, Fr. et Sav. いたびかづらナリ

大久保三郎

◎東京植物學會錄事

東京植物學會ト名ケ其第一會ヲ東京大學植物園ニ開キシ實ニ明治十五年二月廿五日ノコニシテ指ヲ屈スレハ十又二季開會幾百ヲ重テ茲ニ第十三季ニ入リ明治廿七年五月五日午後二時帝國大學植物學講義室ニ於テ例會ヲ開クニ至レリ（去月下旬ノ例會ヲ都合アリテ本日ニ延會ス）因テ先ツ幹事大久保三郎氏ヨリ前季ノ會務幷ニ會計報告アリ次テ役員ノ改選投票ヲ執行ス、　其當選者

會長　松村任三君

幹事　大久保三郎君　澤田駒次郎君　平瀨作五郎君

次テ藤井健次郎君ハ松柏科植物ノ紅葉ニ就テ且同君ノ出品ニ係ル顯微鏡標品車軸藻ノ精虫ニ就テ說明セラレ、去月下旬獨國ヨリ歸朝セラレタル丘淺次郎君ハ該地博物學界ニ於ル近況ニ就テ懇話セラレ終ニ顯微鏡的標品

○車軸藻ノ精虫（藤井君出品）○ドラパルナルジア（大久保君出品）○かくらんノ澱粉原体（鹽化黃金蟻酸ニテ染色ス　池野君出品）○仝上（アシドフクシンニテ染色ス　平瀨君出品）

○おほあみがさたけノ八裂子（安井君出品）○わかまつノ卵球（平瀨君出品）

幷に腊葉（木蘭科）寄贈書籍等ヲ會員ノ閱覽ニ供シ午後五時ヲ過ギテ散會

◎寄贈書目

北海道水産雜誌 第八號 北水協會 ○農事試驗成蹟 第五報 農事試驗場

植物學雜誌現在部號（明治廿七年四月調）第五、六、九ヨリ十四、十六、十七、三十二ヨリ四十九、五十二ヨリ五十八、六十、六十二ヨリ八十六號、全欠本第一ヨリ四、七、八、十五、十八ヨリ三十一、五十、五十一、五十九、六十一號

廣告

池野成一郎譯

顯花植物分科撿索篇

全一册 正價二十錢 郵税四錢

此書ハ植物學雜誌第六十九號ヨリ第八十號ニ附錄トシテ連載セル顯花植物撿索表ヲ集メテ一册トナシ別ニ詳細ナル和洋科名ノ見出シ表ヲ附シタルモノナリ殘部有之候ニ付御入用ノ方ハ至急申込アレ

東京市神田區裏神保町一番地

東京植物學雜誌編輯所

理科大學教授博士松村任三先生著

和漢洋對譯 本草辭典 全一册

定價金六拾錢

本書ハ英語及其他數十ケ國ノ語ニ於ケル植物及薬品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩様ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレバ苟クモ英語ヲ教授シ植物學ヲ修メ化學、薬物、山林、農業等ノ諸科ヲ講シ又ハ貿易、通辯、反譯、園藝等ニ從事セラル、内外ノ人士共ニ座右ニ缺クベカザル良辭書ナリ

東京神田裏神保町一番地

敬業社

『小日本』は記事の精確を以て鳴り議論の公平を以て鳴り小說の優美を以て鳴り繪畫の奇警を以て鳴り俳諧發句の高雅を以て鳴り册子附錄の斬新を以て鳴る今や天下多事報道殊に迅速を要するの時に際し毎月曜日に休刊するは實に讀者諸君に負く所多し依て『小日本』い大に業務を擴張して本月十五日以後

年中無休刊

小日本

無休刊 と爲し益ゝ日刊新聞たるの實を盡さんとす大方の君子請ふ愛讀を給へ

●改正定價（一ケ月前金三十錢 地方郵稅共四十錢）

小日本新聞社　東京神田淡路町一丁目一番地

明治廿七年五月十五日發兌第八號

地質學雜誌

一册金十錢郵稅壹錢六册前金五十四錢

◎目錄

◎第十一版淺間山及噴石圖（石版着色圖）

◎論說及報文

◎明治廿七年四月淺間山噴出記事　山崎直方
◎箱根火山研究錄（前號の續き）　石井八萬次郎

◎雜錄

◎岩石の出來方（第六號の續き）　理學博士小藤文次郎
◎豐後國內の口鑛山鑛物一班　篠本二郎
◎噴出岩變質論（承前）　佐藤傳藏
◎鑛床分類及其譯語（承前）　比企忠
◎蛇紋岩中の銅鑛床　西和田久學

◎質問及應答

◎東海に就て　理學士山上萬次郎

◎史傳

◎チッテル博士（亞鉛版肖像入）　値賀威一郎

◎雜報

◎「グリイン」氏地質學に關する故菊地博士の評言◎氷原時代の溫度◎成層岩と塊狀岩との化學成分の比較研究◎水成岩の砂岩、噴出岩の花崗岩中に迸入す◎長石の變性と蛇紋石成生の關係◎墨西哥の大地震◎伊勢產鑛物◎上野渡良瀨川櫻石露出の模樣◎虎石◎日光近傍輕石層◎足尾銅山の疏水隧道◎石膏◎小夜の中山夜鳴石◎紅簾剝岩中の滿俺鑛◎萬國地質學大會◎理學士神保小虎氏◎又◎エマルソン教授◎東京地質學會第九次會

發賣所　東京神田區裏神保町　敬業社

越溪 西村豐君著

（東京府立城北尋常中學校／日本中學校教科書）

支那史綱

全二冊 上卷發兌 下卷（六月上旬發兌）

定價金三拾五錢郵稅金八錢◎紙數二百四十五ページ◎精密石版圖一葉挿入

本書ハ獨ノウエルテル氏ノ萬國史唐ノ李澣氏ノ蒙求ニ倣ヒ一切理論ヲ去リ記事ヲ主トシ且ツ治亂興敗ノ沿革ヲ詳明ニシ以テ中等教育諸子ヲシテ背誦ニ便ナラシメタリ已ニ東京府立城北尋常中學日本中學校ニモ教科書トシテ採用セラレタレハ中等教育諸子一讀シ其益スル所蓋シ鮮少ナラザルナリ

發兌書肆 東京神田區裏神保町一番地（電話番號二百五十八番） 敬業社

東洋學藝雜誌 第百五十一號

明治廿七年四月廿五日發兌 一冊金拾錢郵稅金一錢 六冊前金五十四錢

◎論說○統計活論藤澤利喜太郎○雷及避雷針ノ說（承前）水野敏之丞○貝塚土器に於て見る所の廢物利用の數例坪井正五郎◎雜錄○地震起源點ノ遠近ヲ知ル一法○物理學隨筆錄第三鶴田賢次◎雜報○鳥の卵一個の價三千圓○へつける教授六十の賀○大不列顛理學奬勵會○大學通俗講談會○東京化學會第十六年會○學位授與○蘭化先生○東洋哲學○添田氏と木村氏○俗論の宗教談○植物雜編○貝塚の縱斷面を示す裝置○金屬のエレキ抵抗○ガタベルカ○數學の新雜誌外に數件◎應問○數學書に就て菊池大麓

◎發行所 東京神田裏神保町 東洋學藝社

動物學雜誌

第六拾七號明治二十七年五月十五日發兌

◎一冊金拾錢郵稅金壹錢◎六冊前金（郵稅共）六拾六錢

目次 房州根本村海邊ニテ得タル子安貝（承前）高倉卵三齊君◎相馬地方動物實驗雜記（前號ノ續き）酒井寅造君◎甲殼類の大さ丘淺次郎君◎原田採集紀行松村松年君◎天蠶蛾の話佐々木忠三郎君◎蠶兒內足內ニ在ル不審物ニ就テ池田作次郎君◎人體ノ由來（第五）ウヰデルシヤム著箕作佳吉意譯◎寄書◎紀州熊野浦之捕鯨高松榮太郎述◎雜錄◎動物學研究用藥劑便覽○膃肭獸及膃虎（承前）○裂頭條虫力○蛇○みちしるべ○飛彈ニモ普通○やつめうなぎ○飛彈兩棲類ノ二名物○飛彈ノ哺東魚○雉ノ變種？○人狐○札幌博物學會紀事○丘淺次郎氏の歸朝○弘田貞守氏の歸京○相州三浦三崎帝國大學臨海實驗所○東京動物學會

發賣所 東京神田區裏神保町一番地 敬業社

新刊廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄　全一册

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校ノ敎員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田裏神保町　敬業社
東京日本橋通三丁目　丸善書店

○本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌每月一回發兌一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢
○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セス○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セス○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御屆可申候

明治廿七年五月十九日印刷
明治廿七年五月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　熊田宜遜　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　植物學雜誌編輯所　東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所　敬業社　同所
同　丸善書店　東京日本橋區通三丁目

314179

THE BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] May 20, 1894. [No. 87.

明治廿六年六月三十日遞信省認可

明治廿一年二月三日內務省許可

CONTENTS.

On the Behaviour of the Nuclei during the Conjugation of Zygnema. **By S. Ikeno.** . . . 187

Short Biography of the late Mr. H. Kaku. **By K. Sawada.** . . . 193

Notes on Flowers. **By Prof. J. Matsumura.** . . . 194

On Sagittaria. **By S. Matsuda.** . . . 195

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœia. **By K. Sawada.** 202

Chemical Researches on the Aconitum and other Plants. (Continued from No. 73.) **By Prof. Dr. J. Shimoyama.** . . . 206

Botanical Excursions to Izu and Sagami. **By S. Matsuda and B. Yasui.** . . . 209

Revision of the Japanese Species of Andromeda, Pieris, and Enkianthus. **By T. Makino.** . . . 212

Miscellaneous:— . . . 216

Mr. Bean's Classification of Hardy Bamboos.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yōjōsho-oku."—Bacteria.—The late Mr. M. Nonoyama.—Query.—Proceedings of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the

TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.

No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

印刷所 東京市神田區錦町三丁目廿五番地 熊田活版所

植物學雜誌第八卷第八十八號 （明治二十七年六月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII June 20, 1894. NO. 88.]

○植物葉氣孔ノ個數幷ニ大小

池野成一郎

植物葉上ニ於ケル氣孔ハ植物ノ種類ニ應ジテ其數ト大小トニ大差異アルヿハ人ノ能ク知ル所ナリ而シテ之ヲ詳ニ研究シタルハ獨乙人アー、ワイス氏(A. Weiss)ニシテ氏ノ論文ハ千八百六十五年ニ始テ世ニ公ニセラレ而シテ千八百九十年ニ於テハ其追加論文公ニセラレタリ右ノ外氣孔ノ大小個數等ニ就テ詳ニ研究ヲ遂ゲタルモノアルヲ聞カズ殊ニ本邦植物ニ就テ之ヲ取調ベタル人アルヤ否余ガ未ダ知ラザル所ナリ蓋ワイス氏ノ調ベタル植物タルヤ百六十七種ノ多キニ亘リ其內クワ、エンドウ等ノ如キ本邦栽培植物ヲモ含ムト雖𪜈其大部ハ本邦ニ產セザルモノニ限レリサレバ本邦植物ニ就テ之ヲ新ニ研究調査スルヿ敢テ無用ノ業ニアラザルベシ

余嘗テ常綠葉ノ解剖ヲ研究スルニ當リ凡六十種許ノ氣孔ノ大小個數トヲ測定シタリ今之ヲ表ニ製シテ本誌ニ投ズ無味淡白妄リニ雜誌ノ余白ヲ汚スヲ尤ムルヿ勿レ但常綠ナラザル葉ノ氣孔數ハ後日ノ研究ニ讓ル

植物名		一平方「ミリメートル」ノ葉面ニ於ケル氣孔數		氣孔ノ大小（μヲ以テ示ス）	
和名	學名	葉ノ上面	同下面	長	幅
オモト	Rhodea japonica *Roth.*	○	四九	五一	五一

セキコク	Dendrobium moniliforme *Sw.*	〇	六〇	三三	二七
ムギラン	Bolbophyllum ussuriense *Max.*	〇	七四	四五	三九
ボウラン	Luisia teres *Bl.*	〇	七五	四五	三六
カヤラン	Sarcochilus japonicus *Miq.*	〇	一二五	二七	二七
スナゴセウ	Peperomia portulacoides *A. Dietr.*	〇	二八	四二	三〇
ヤマモヽ	Myrica rubra *S. Z.*	〇	四〇〇	二七	二四
シヒノキ	Pasania cuspidata *Oerst.*	〇	五三〇	二一	一八
ヤドリキ	Viscum album *L.*	四五	（上下面ノ差ナシ）	六六	二七
オホバヤドリキ	Loranthus Kaempferi *Max.*	一〇四	二七二	三三	一八
ヲガタマノキ	Michelia compressa *Max.*	〇	二八二	二四	二一
シキミ	Illicium religiosum *S. Z.*	〇	二一八	三九	一九
ムベ	Stauntonia hexaphylla *Decne.*	〇	五三三	二三	一九
ヒラギナンテン	Berberis japonica *R. Br.*	〇	二二五	二四	二七
ナンテン	Nandina domestica *Thunb.*	〇	四〇二	二七	二一
イヌグス	Machilus Thunbergii *S. Z.* var. major *Bl.*	〇	五四五	二一	一五
カゴノキ	Actinodaphne lancifolia *Meisn.*	〇	四四八	二一	一五
トベラ	Pittosporum Tobira *Ait.*	〇	三三七	二一	一二

シマトベラ	P. undulatum *Vent.*	○	三五〇	二七	二一
シヤリンバイ	Rhaphiolepis japonica *S. Z.*	○	五八七	二七	二一
ビハ	Eriobotrya japonica *Lindl.*	○	二六〇	二四	一八
カナメモチ	Photinia glabra *Max.*	○	三〇〇	二一	一八
ミヤマシキミ	Skimmia japonica *Thunb.*	○	二五八	二一	一五
ユヅリハ	Daphniphyllum macropodium *Miq.*	○	三〇〇	二四	一八
ヒメツゲ	Buxus japonica *Müll.* var. microphylla *Müll.*	○	二一五	三九	三〇
イヌツゲ	Ilex crenata *Thunb.*	○	三五七	一五	一二
タラヤウ	I. latifolia *Thunb.*	○	三〇一	三六	二七
モチノキ	I. integra *Thunb.*	○	二一一	三三	三〇
マサキ	Evonymus japonicus *Thunb.*	○	二九七	二七	二一
ホルトノキ	Elaeocarpus decipiens *Hemsl.*	○	六三八	二一	一八
チヤ	Thea sinensis *L.*	○	一九五	三六	二七
サヾンクワ	T. Sasanqua *Nois.*	○	一二九	三六	三三
ツバキ	T. japonica *Nois.*	○	二九三	二七	一五
モクコク	Taonabo japonica (*Thunb.*) *Szysz.*	○	三一七	三六	三〇
サカキ	Eurya ochnacea (*DC.*) *Szysz.*	○	一八三	三三	三〇

植物葉氣孔ノ個數幷ニ大小

ヒサカキ	Eurya japonica *Thunb.*	〇	五九一	二四	二四
クスドイゲ	Xylosma racemosa *Miq.*	〇	八三三	二一	一五
リウキウカウガイ	Kandelia Rheedii *Hook.*	〇	一三三	四五	三九
バンジラウ	Psidium Guyava *L.*	〇	一二八一	二一	一五
ヤツデ	Fatsia japonica *Decne. et Planch.*	〇	一八二	二四	一八
カクレミノ	Dendropanax japonicus *Seem.*	〇	八三三	二四	二一
キヅタ	Hedera Helix *L.*	〇	二四八	三〇	二七
アヲキ	Aucuba japonica *Thunb.*	〇	一四四	三六	三三
イチヤクサウ	Pirola rotundifolia *L.*	〇	一六八	四二	三三
ウメガサヽウ	Chimaphila japonica *Miq.*	〇	二七〇	三〇	二七
イハウチハ	Shortia uniflora *Max.*	一四五	一九七	二七	二四
イハカヾミ	Schizocodon soldanelloides *S. Z.*	一〇	六七〇	二七	二四
タイミンタチバナ	Myrsine neriifolia *S. Z.*	〇	一九七	三三	二一
マンリヤウ	Ardisia crispa *DC.*	〇	一六〇	三〇	二一
ヤブカウジ	A. japonica *Bl.*	〇	二三〇	二四	二一
アカテツ	Sideroxylon ferrugineum *Hook. et Arn.*	〇	三五五	二一	一五
タマツバキ	Ligustrum japonicum *Thunb.*	〇	二八八	三三	二七

ヒラギ	Osmanthus Aquifolium *B. H.*	○	五〇〇	二一	一五
サカキカヅラ	Anodendron laeve *Max.*	○	二五五	二七	二一
テイカカヅラ	Trachelospermum jasminoides *Lem.*	○	二七六	二七	二一
サクラヽン	Hoya carnosa *R. Br.*	○	二〇三	二四	一八
サンゴジユ	Viburnum odoratissimum *Ker.*	○	三七六	三六	二四

以上ノ表ニ照シテ考フレババンジラウノ葉ニハ氣孔最モ多ク（一平方「ミリメートル」ニツキ千二百八十一個）スナゴセウノ葉ニハ最モ少シ（同廿八個）又研究セル植物五十七種ノ内僅ニ六種ニ於テハ氣孔數百以下ニ位シ十一種ニ於テハ百乃至二百個ノ間ニ位シ十六種ニ於テハ二百乃至三百個ノ間ニ位シ九種ニ於テハ三百乃至四百個ノ間ニ位シ三種ニ於テハ四百乃至五百個ノ間ニ位シ五種ニ於テハ五百乃至六百個ノ間ニ位シ二種ニ於テハ六百乃至七百個ノ間ニ位シ二種ニ於テハ百乃至九百個ノ間ニ位シ唯一種ニ於テハ一千個以上ニ及ベルヲ見ルベシ

* * *

○日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

醫治効用　古魯聖篤實ハ有効ノ利水性瀉劑ニシテ過量ニ用フルトキハ内臓ニ焮衝ヲ起シ終ニ斃死ス小量ニ在テハ腹痛ヲ生ス故ニ本藥一品ヲ用フルコト少レナリ然レトモ他ノ瀉劑及ヒ驅風劑ニ伍用シ用ヒテ効驗アリ

本品ハ古魯聖篤非沃斯丸ト爲シ用ヒテ偉効アリ

本品ハ頑固性便秘、習慣性便秘、水腫病、月經不調、子宮閉塞等ニ特効アリ時トシテハ有効成分ナル「コロ

シチン」(Colocythin) ヲ用フト雖モ其作用極メテ峻烈ナルニ因リ禁戒シテ用フベシ

種子ハ亞弗利加殊ニ撒哈拉ニ於テ食品トス Nachtigal 氏ノ說ニ據レバ先ヅ果實ヲ丈夫ナル嚢ニ入レ苦味ノ果肉ヲ除去シ種子ヲ摩擦シテ胎盤ヲ去リ之ヲ煮沸シ冷水ニテ洗滌シ乾燥シテ粉末ト爲シ食シ或ハ調理シテ用フ Flückiger 氏ノ說ニ據レバ胎盤ニハ苦味質及ヒ粘液質ヲ含ミ種子ニハ脂肪油大約四十八「ペルセント」蛋白質十八「ペルセント」ヲ有ス」ト本品ヲ食用トスルハ主トシテ蛋白質ヲ含有スルニ基因ス

栽培法

苗圃　四月十二日油滓乾鰮ノ二品ヲ人糞ニ混和シテ施シ薄ク土ヲ覆ヒ種子ヲ播下シ土ヲ其上ニ被覆ス

但シ苗ノ發生シテ眞葉ヲ出サヽル前ニ移植ス故ニ發生後補肥ヲ用ヒズ

移植　五月十四日ヨリ同二十八日マテニ漸次苗ヲ移植ス其方法ハ輕鬆ノ壚土ヲ耕耘シ土塊ヲ碎キテ之ヲ均ラシ畦ハ幅四尺ニ作リ二尺五寸ヲ隔テヽ穴ヲ掘リ糠、乾鰮、馬糞ノ三品ヲ混和セシモノ四荷ヲ原肥ト爲シ薄ク土ヲ覆ヒ苗貳株宛移植スルコト地積參百步本植物ハ子葉發生後直チニ移植スルヲ良トス

耕耘　六月一日乾鰮壹斗ヲ人糞五荷ニ混和シテ補肥ト爲シ草ヲ除キテ中耕シ七月八日人糞五荷半同二十七日堆積糞七荷ヲ施シ中耕ス

景況　苗ノ生長宜シク八月中旬ヨリ開花結實ス

收穫　九月二十五日果實二十五貫四百目ヲ採收シ之ヲ調製シテ乾燥ス但シ果肉菲薄ニシテ藥用ニ適應セス

（十八年東京衛生試驗所藥草試植園試植ニ係ル）

四十六　クレノヲモ　茴香

羅甸名 Foeniculum capillaceum, Gilib.

Syn. Foeniculum vulgare, Gaertn.

繖形科

歐羅巴南部等ニ自生スル宿根草ニシテ莖圓柱形ヲ爲シ高サ五六尺乃至八九尺縱條ヲ有シ綠色ヲ呈ス其下部ノ葉ハ其柄長ク其半バヨリ下部ハ擴脹シテ鞘狀ヲ爲シ莖ヲ抱擁ス而シテ邊緣膜質ヲ有ス葉面ハ重複翼狀ニシテ缺裂シ其裂片鈹鍼形ヲ爲シ下垂ス莖ノ上部ノ葉ハ稍々細小ニシテ缺裂少ナク莖葉ハ擴張シテ鞘狀ヲ爲シ共ニ綠色ヲ呈ス夏月莖ヨリ數椏ヲ分チ重繖形花ヲ綴ル花梗長ク抱花小葉ヲ有セス而シテ一繖大約十五個乃至二十個ノ花ヲ有ス蕚ハ缺如ス花瓣五片廣濶卵圓形ニシテ黃色ヲ呈シ上部狹隘頂端缺刻シテ類心臟形ヲ爲シ內面凹陷シ其上部內方ニ彎曲ス雄蘂五個花絲糸狀ニシテ黃色ヲ呈シ其葯橢圓形ヲ爲シ二房ヲ有シ其背部ニ於テ花絲ノ頂端ト附着シ稔熟スレハ分綻シテ花粉ヲ吐出ス雌蘂ニ個實礎ハ比較的肥大ニシテ長圓形ヲ爲シ單房ヲ有シ房中一個ノ卵子ヲ有シ花柱矮短柱頭膨脹シテ外方ニ鉤曲ス花後分裂果ヲ結ヒ秋月ニ至リ稔熟ス長圓形ニシテ長サ一分四五厘乃至二分七八厘淡褐色ヲ呈シ數條ノ隆起線ヲ存シ芳芬タル香氣ヲ有ス

本植物ハ高加索山地方ヨリ地中海沿岸諸國歐羅巴西部ノ諸地ニ產シ現今露西亞南部ノ諸地、小亞細亞、波斯、印度等ニ繁殖ス英倫ニテハ海濱ノ砂地或ハ白堊質ノ地ニ多ク產スト目下ウュルテンブルク、ガリチエン、佛蘭西伊太利等ニ於テ多ク栽培シ果實ヲ收メテ年々合衆國ヘ向ケ之ヲ輸出スルコト多量ナリ

本植物ヲ本邦ヘ移植セシ年月等ハ詳ナラズト雖モ倭名鈔曰懷香和名久禮乃於毛、躬恒集曰くれのおもいつしかもまつ夕くれのおもかけに見につゝみにぬことのわひしき」トアルヲ以テ考フレハ往時ヨリ栽植セシモノ

ナラン目下信濃國ニ於テ栽培ス又沖繩ニテハ多ク栽植シ其葉及ヒ子實ヲ採集スト云フ

本植物ハ栽培等ニ因リ種々ノ變種ヲ生シ子實ニ大小等アリ生藥學ニ云小茴香ハ產地ノ異ナルニ由リ其大小ニ不同アルノミナラス亦助線羽狀ニ發育シ大ニ其形狀ヲ異ニス」トアリ

羅馬茴香一名甘茴香ト稱スルモノハ佛蘭西南部ノ諸地ニ栽培スル Foeniculum dulce, DC. ノ果實ニシテ尋常ノ茴香ヨリ遙ニ肥大ニシテ淡類黃色ノ廣濶ナル助線ヲ有シ味ハ甘美ニシテ世人之ヲ貴重ス

本品ハ香氣强クシテ五乃至七「ペルセント」ノ揮發油ヲ有ス

藥品

第一　茴香（一名）小茴香　Fructus Foeniculi

茴香ハ本植物ノ果實ニシテ日本藥局方ニハ藥用ニ供ス

性狀　茴香ハ其形狀種々ニシテ均等ナラス帶褐綠色ヲ呈シ長サ四乃至八「ミリメートル」太サ三「ミリメートル」ニシテ毛茸ヲ有セズ其頂端ニハ雌蘂ノ基礎部ヲ帶ブ之ヲ乾燥スレバ其兩分果輙ク分離シ各分果ハ其背部ニ三條ノ助線ヲ具ヘ兩端ニ各々一條ノ助線ヲ有ス此兩端ノ助線ハ特ニ著シク隆起ス之ヲ横斷シ顯微鏡下ニ照シ檢スレバ六個ノ油腺ヲ有シ其四個ハ背部ノ果谷部ニ存シ他ノ二個ハ腹部ニ在リ而シテ腹部ノ接觸面ハ稍々凸出ス日本藥局方ニ曰茴香ハ長圓柱形ヲナシ長サ四乃至八「ミリメートル」太サ三「ミリメートル」ニ至ル其兩分果ハ大低分離ス各分果ハ淡色ノ助線五條ヲ有シ其兩邊ニ位スル者ハ著シク隆起ス各助線ノ中間ニハ油脈アリ本品ハ氣味特異芳香性ニシテ微甘ナリ」トアリ

（以下次號）

○はぶさうニ就テ

醫科大學教授ドクトル　下山順一郎

抑モはぶさうトゑびすぐさ(決明)トハ共ニ之ヲはぶさうト通稱シ昆蟲ノ刺傷、毒蛇ノ咬傷其他腹痛、咳嗽等諸般ノ疾病ニ偉効アリトシ俗間常ニ保貯シテ不時ノ用ニ供スルノ慣習アリ然リ而メ該草ノ俗間ニ賞賛セラルヽ近時靈藥ノ位置ヲ占ムルニ至リシ古加乙涅ニ於ケルガ如シ該草果シテ是ノ如キ効驗アルモノトスルトキハ須ク吾人ノ注意ヲ要ス可キモノタリ余偶々阪府友人某ヨリ該草ノ種子ヲ得タルヲ以テ之ガ檢査ヲ施セリ余先ヅ聊カ前述二種植物ノ形狀ヲ略記シ以テ讀者ノ參考ニ供セントス

はぶさう(望江南)即チ Cassia occidentalis, L. ハ其葉大低五對ノ翼葉ヲナシ各葉片卵圓形ヲ有シ末端尖レリ莖ノ下部ニハ葉腋ニ花ヲ出シ其上部ニハ葉腋ニ華本ヲ抽出シテ花ヲ開ク莢果ハ長サ大約三寸ニ至リ少シク壓扁セラレ中ニ多數ノ種子横列ヲ爲シテ存在ス種子ハ略ホ扁卵形ヲナシ末端一方ニ彎曲シテ嘴狀ヲナス

ゑびすぐさ(決明)ハ學名ヲ Cassia obtusifolia, L. ト稱シ主トシテ其はぶさうト異ナル點ハ二對乃至三對ノ翼葉ヲ帶ビ各葉片倒卵圓形ヲナシ葉腋ニ一花乃至二花ヲ出ダシ莢ハ扁方形ヲナシ長サ五六寸種子ハ縱列ヲナシテ存在シ略ホ小豆ニ似タレ圧基礎部斜面ヲナシ上部モ亦基礎面ト平行ニ斜面ヲナシ末端尖鋭ニ走レルニ在リ右ニ掲クル所ハはぶさうトゑびすぐさトノ區別ノ大要ヲ記載スルニ止ル讀者幸ニ兩植物周到ノ記述トナス勿レ而メ此兩種ノ植物ハ全ク異種ノ植物ナレ圧世俗往々之ヲ錯誤シ人家ニはぶさうト稱シテ栽培スルモノハ概シテゑびすぐさトス次ニ化學的試驗成績ヲ報道スルコト左ノ如シ

先ヅはぶさうノ種子ヲ取リ搗碎壓搾シテ脂肪油分ヲ除去シ其殘渣ニ酒精(比量○•九三)ヲ加ヘテ數時間温浸シ其浸液ヲ取リテ濾過シ蒸餾シテ酒精分ヲ再收シ玆ニ得タル殘渣ニ水ヲ加ヘテ稀釋シ那篤倫滷液ヲ添加シテ

亞爾加里性トナシ依的兒ヲ注加シテ振盪シ依的兒ヲ分取シ爾後玆ニ殘レル水液分ヲ鹽酸ニテ酸性トナシ更ニ反覆依的兒ヲ加ヘテ振盪シ其依的兒分ヲ取リテ自然ノ蒸發ニ任セシニ深褐色ノ物質ヲ殘留セリ之ヲ那篤倫滷液ヲ含有スル水ニ溶解シ依的兒ヲ以テ振盪シ依的兒分ヲ除去シテ得タル水液分ヲ初メノ如ク鹽酸ニテ酸性トナスノ後依的兒ヲ加ヘテ振盪シ依的兒分ヲ取リテ放置セシニ深黄色粉末性ノ物質ヲ殘留セリ更ニ之ヲ無水酒精ニ溶解シテ放置セシニ帶赤黄色ノ結晶ヲ生セリ

此結晶ハ水ニハ溶解セサレトモ酒精、依的兒、偏蘇兒、氷醋酸等ニハ能ク溶解シ亞爾加里ニハ櫻實紅色ヲ現シテ溶解シ又炭酸亞爾加里ニハ血赤色ヲ呈シテ溶解ス其熔融點ハ二百五十度ニ在リ余未ダ之ガ原素分析ヲ施行セザレトモ右ノ性質ニ據ルトキハ玆ニ得タル物質ハ大黄「フラングラ」皮等ニ含メル「エモジン」即チ「トリヲキシメチールアントラヒノーン」($C_{14}H_4,CH_3(OH)_3,O_2$)ナル化合体ナルヤ疑ヒナシ

余亦帝國大學植物園ニ於テ培植セルゑびすぐさノ種子ヲ得テ右ノ試驗ヲ施セシニ全ク同一ノ物質ヲ得タリ

抑モ「エモジン」ナル化合体ハ其化學的ノ本性ヨリ見レバ「フエノール」屬及ヒ「ヒノーン」屬化合体ノ本性ヲ兼有シ其性又彼ノ苦利沙羅並ニ類スルヲ以テ昆蟲ノ刺傷、毒蛇ノ咬傷ニ効驗アルヤ夫レ或ハ然ラン同寮醫學博士高橋順太郎氏目下專ラ「エモジン」藥効學的ノ檢査ニ從事セリ同氏ハ他日其成績ヲ報道スルノ勞ヲ執ルベシ

白井光太郎

○九州採集土産

薩摩富士

八月廿七日十町ノ旅宿ヲ出テヽ開聞嶽ニ登ル此日炎熱燬クガ如ク殆ンド耐ヘ難シ辛フシテ山巓ニ達シタルハ午後二時頃ナリ山ノ模樣ハ櫻島ノ御岳ニ似タリ雜木生ヒ茂リ奇ラシキ草木ナシ中腹ニテやまもがしヲ採ル此木ハ此行此山ニテ始メテ採ル山麓ニテくわくわつがゆヲ見ル方ニ花アリ此山殆ンド道ナシ山人ガ鉈ニテ樹幹ニ切リ付ケ置ク道標ヲ目當テニ辿リ行ナリ頂上ハ大石積ミ累ナリ全ク道ナシ岩角ヲ傳ヒテ登ル絶頂ニハかや、(芒)つゝじ、いたどり、いぬつげ、ひさかき、ひめゆづりは、なゝめのき、はいのき、等ノ小木隙ナク生茂リ身ヲ容ルヽノ餘地ナシ導者亦方向ヲ辨ズル能ハズ屢大石ノ上ニ登リ四方ヲ望ミ以テ進行ノ道ヲ求ムルナリ聞ク舊藩時代ニハ此山亦樟樹ノ巨木空ヲ覆ヒテ立タリト今ハ全ク伐リ盡シ其根痕ダニ止メズ但シ往時ノ壯觀ハ山麓ニ鎭座シ玉フ枚聞（ヒラキ、）皇太神宮境內ニアル巨樹ヲ見レバ容易ニ想像シ得ベキナリ

曾テ聞ク此山中野生ノみかんアリト登山ノ際注意シタレド見ルヲ得ザリシ

開聞嶽ハ一ニ海門嶽トモ書ス鹿兒島ノ町ヨリ南十五里許ノ處ニアリ其形駿河ノ富士山ニ似タルヲ以テ薩摩富士又筑紫富士ノ名アリ山ノ北麓ニ十町ト云フ村アリ此處ニ枚聞皇太神宮ノ社アリ延喜式神名帳ニハ枚聞（ヒラキ、）神社ト書シ三代實錄、和名抄ナドニハ開聞（ヒラキ、）ト書タリ此ニ由リテ之ヲ見ルニ開聞嶽ハ古クハ枚聞嶽ト書シひらきゝだけト訓シタルコト著シ後世音讀シテかいもんだけト呼ビ其字音ヨリ誤リテ遂ニハ海門嶽ト書スルニ至レリ

海門嶽ノ解釋ハ植物學ニ用ナケレ𪜈何レモ雜報ノ塡草ナレバ差支ナシト愚考ス如何

頂上ヨリ東北ヲ望メバ眼下ニ鏡ケ池、池田湖アリ海ヲ距テヽ向フニ櫻島遠ク煙波ノ間ニ屹立シ右ニ高隈ノ諸山雲表ニ聳出セルノ狀佳景ナリ

十町ノ旅宿

喜入ヨリ十町迄六里餘アリ此間今和泉村ト池田湖トノ間ニテはどのき、及しやうべんのき、ヲ採ルしやうべんノ樹ハ葉稍たらやうニ似テ三葉一帯ノ掌狀複葉ナリ子實ハ圓錐花穗ヲナシ當時尚綠色ナリはどのきハいはがね(蕁麻科植物)屬ノ種類ニ〆高サ八九尺ニ至ル小木ナリ葉形いはがねニ似テ質厚ク鋸齒深ク葉背白毛ナキヲ異トス蓋シ新種ナリ池田湖ハ周圍三里許モアラン湖ヲ隔テヽ開聞嶽ヲ望ムノ景色實ニ奇觀ナリ始メテ前面ニ此湖水ト山トヲ見タル時ハ絶景ノ爲ニ暑中ノ苦ヲ忘レ覺ヘズ快ト呼ベリ山ト云ヒ湖ト云ヒ斯ル僻遼ノ地ニハ目ヅラシキ物ナリ筑紫富士ノ名ニ負カズト云フベシ

十町ニハ旅宿ノ招牌ヲ揭ケ置ク家一軒アリ余輩ハ初メ喜入ノ旅宿ノ主人ノ注意ニヨリ枚聞神社ノ神官ノ家ニ宿泊ヲ依賴スル筈ナリシモ神官ノ家トテモ隘クシテ余輩ヲ容ルヽコト能ハザル樣子ナレバ强テモ賴マズ矢張其旅店ニ宿泊スル事トセリ九州ノ旅行中此處ノ旅宿程余輩ノ難澁セルコトナシ第一困難セルハ寢具ノナキコトナリ敷キ呉坐一枚ヲ貸シ與ヘタルノミニテ夜具蒲團ナシ固ヨリ蚊帳ノアルベキ理ナシ夜中蚊ト蚤ニ襲ハレ殆ンド一目モ寢ルコト能ハズシテ二晩ヲ過セリ夜間戶ヲ閉ツルヿナシ又客間ト臺所家族ノ居間相接シ障子ニテ隔ツルノミ一夜障子ヲ開キタルマヽ寢ニ就キシニ夜中臺所ノ邊ニテ物ヲ吸フ音頻リナリ驚キテ起キ出テヽ見ルニ大ナル犬椽端ニ臥シタル主人ノ枕元ヨリ入リ來リテ臺所ノ鍋ニアル所ノ汁ヲ吸フナリ犬ハ余ノ起キタルヲ見テ一散ニ飛出シ逃レ去レリ急ギ障子ヲ閉ヂ稍ク安堵セリ此家ノ主人ハ十年ノ亂ニ賊ニ與ミシ戰死シ今ハ女主ナリ此邊後家多シ皆戰爭ニテ其良人ヲ失ヒタルナリト云フ、此邊日常ノ物ヲ貯フルニ多ク陶器ノ壷ヲ用ユ先ヅいろり(爐)ノ側ニ高サ二尺五寸餘ノ大壺アリ是ハ茶ヲ納レ置ク者ナリ戶棚ノ側ニハ泡盛ノ壷アリ是亦三四尺ノ高サアリ其側ニ一尺許ノ高サノ壷アリ是ハ醬油ヲ納レ置ク者ナリ家ノ外ニハ大ナル水壷アリ此等

ノ齒ハ其形肩張リ尻窄ク皆古代ノ齋瓶ニ類セリ古代ノ風俗ハ此邊ニ遺リ居ルカト思ハル其他庖厨ノ模様便所ノ構造等一々異様ナリ考古家ノ探討ヲ經バ面白キ事實ノ顯ハルヽ事アラン歟

此隣家ノ藩籬ハかうしゆうやくニテ作レリ立サ八九尺ニ伸ビ盛ニ生長セリ此邊ノ野生ニヤ他所ヨリ持來リシニヤ聞漏セリ

利右衛ノ祠

十町ヨリ二里半許行キテ山川ノ港アリ舊時ハ繁華ノ一都會ナリシモ今ハ寂寥トシテ見ル影モナシ余輩ハ廿八日十町ノ宿ヲ出テヽ開聞嶽ノ南麓ヲ回リテ山川ニ向ヘリ二里許迂路ナリ脇村ノ海岸ニテ大そなれむぐらヲ取ル南麓ヲ一週シタレ𪜈奇ラシキ樹木ナシ川尻ニテ晝飯ヲ食ヒ二時頃兒（チゴ）ケ水ヲ過キ路傍涌出ノ温泉ニ浴ス此村ニ利右衛門ノ祠アリト云フ後ニテ聞キ探訪セザルヲ憾メリ利右衛門ハ寶永中琉球ヨリ始メテ甘藷ヲ傳ヘ栽培セル百姓ノ名ナリ村人其功勞ヲ懷ヒ祠ヲ建テヽ奉祀セル者是此祠ナリ

指宿神社

指宿神社ハ指宿鄉ニアリ境内大樟樹アルヲ以テ有名ナリ九州巡遊中最大ノ樟樹ヲ見タルハ此社ノ境内ナリ舊時ハ周圍十六尋ノ大樹アリシト記セル者アレ𪜈今アル者ハ十尋許ナラント臆測セリ境内又ふかのきノ大木アリふかのきハ葉掌狀複葉ニシテとちノ葉ニ似テ小葉ノ數多シ五加科ノ種類ナリト云フ花實ヲ索メタレ𪜈得ズ此木ハ大隅佐多ニ多シ

寄生二種

八月廿五日鹿兒島ヨリ喜入鄉ニ至ル途中ニテ二種ノ寄生植物ヲ得タリ一ハ大ばのやどりきニシテさどんくは

ニ寄生シ一ハねはいたびニシテねすみもちニ寄生セリ兩種共ニ寄家上ニ蔓延シ其枝ヲ纒ヒ己レ却テ寄家ノ本體ノ如キ狀ヲ呈シ頗ル肥大ノ成長ヲナセリ之ニ反シ寄家ノ枝葉ハ成長衰ヘ枝上ノ葉多ク離落シ枝ニ葉ナキ物多シ大葉やどりきノ寄生生活ハ嘗テ見聞スル所ナレ圧大いたびノ寄生植物ナルハ今度始メテ實見セリ

ぎやうぎしばのをはぐろ

ぎやうきしば(禾本科ノ草名)ハ Ustilago ノ寄生ヲ受ケ其花穗黑粉ニ變シ病狀ヲ呈スルコトアリ曲直瀨楓窻氏ノ雜穎寫眞ニハ之ヲぎやうぎしばのをはぐろト稱シ圖ヲ出セリ東京近傍ニテハ余輩未ダ之ヲ見ザレ圧今度ノ旅行ニテ之ヲ豐前國金田ヨリ彥山ニ至ル途中ニテ多ク見タリ此日亦路傍ニテまめだをしノ野生ヲ採集セリ

象皮病

八月廿九日朝山川港ヲ出帆順風ニ眞帆ヲ揚ケテ大隅國島迫間（シマトマ）ニ着船此處ヨリ船頭ニ荷物ヲ負ハセ同國尾波瀨ニ至リ中飯ヲナシ此處ヨリ船頭ヲ返ヘシ人夫ヲ換ヘ大泊、田尻ヲ經テ二里半佐多ニ至ル此邊植物帶大ニ異リ奇草異木追々出現足ノ勞ルヽヲ知ラズシテ此日終ニ佐田岬ヲ究メ燈明臺ノ邊ニ至リ佐多神社ヲ拜シ晩ニ大泊ニ還リ辨刺某ノ家ニ投宿ス此日雇ヒタル人夫ノ片足ノ先象皮病ヲ患ヘ著シク太シ土人ハ唐芋燒酎ヲ飲ムヨリ起ル病ナリト云ヘド然ラズ實ハ一種ノフイラリヤノ寄生ヨリ起ル者ナリト云フフイラリヤハ飲水中ニ交リ居リテ人躰ニ寄生スル虫ナリ當時ハ別ニ注意セザリシガ後ニテ聞キ其邊ニテ渴スルガ儘ニ水ヲ飲ミタルヲ悔イタリ此地ニ採集ヲ企ツルノ學士ハ注意スベキノ事ナリ此病ハ八丈島、八丈小島等ニモアリ先年七島ヲ巡回セル時八丈島ニテ此類ノ患者ヲ多ク見タリ肥大部ハ時ニ疼痛ヲ發シ發熱シ大ニ苦シムト云ヘリ恐ルベキナリ

○蕎麥ノ研究一斑

市村塘

緒言

吾嘗テ是ヲ我師松村博士ニ聞ク「抑モ吾人理學者ノ目的ハ大範圍ヲ淺ク探ランヨリモ寧ロ小範圍ヲ深ク窮ムルニアリ今日所謂獨逸流ノ學者ト稱ヘラルヽ人物ヲ見ルニ皆識博カラズト雖モ學深シ余亦是ヲ賛ス理學者タル者宜シク此點ニ注意シテ可ナリ」ト予乃チ此主義ヲ以テ一植物ニ就キ着々其生理的、組織的及ビ發生的研究ヲ試ミント思フコ茲ニ久シ然レドモ果シテ如何ナル植物カ最モ適當ナルヤニ至テハ予甚ダ惑ヘリ終ニ蕎麥ハ此目的ヲ達スルノ好材料タルヲ確信スルニ至リタリ其故何ゾヤ曰ク他ナシ唯此植物ハ(1)其種子ヲ一日若クハ二日間水中ニ浸シ更ニ濕氣ヲ含メル鋸屑中ニ移蒔セバ大抵時期ヲ擇バス速ニ幼根ヲ萌發スルコ(2)一年生草本ナレドモ一年間ニ概ヲ三回花ヲ開キ實ヲ結ビ必竟早春蒔キタル一種子ハ晩秋數十種子ト爲ル割合ナレバ直接ニ病的遺傳ノコ自花授精ノコモ吟味シ得ルト信ズルノミナラズ屢〻實驗ヲ反覆シ得テ過失ヲ少ナカラシムル機會アルコ(3)種子萌發シテ嫩植物ヲ生ジ漸々成長シ結實ヲ終リテ枯死スルニ至ルノ生涯史（ライフヒストレー）ハ數月ヲ費セバ悉皆觀察シ得ルコ(4)藥液培養ニ最モ適好シ從フテ根、莖葉ノ生理機能ヲ見ルニ宜シキコ等ノ便宜アレバナリ今ヤ植物學界ニ於テ一屬中各種ノ根、莖、葉ノ比較解剖學ガ盛ナルノ時ニ遭遇シ自ラ淺學狹識ヲ顧ミズ率先鼓勇シテ先ツ槐ヨリ一新機軸ヲ始ム是ヨリ追次述ベント欲スル事實ハ總テ余ノ實驗ニ係ルト雖モ殊ニ生理學上ニ關シタル研究結果ノ如キハ立案器械ノ不完備ナル余ノ輕噪ナル强ヲ過失ナシト謂ヒ難シ大方卓識諸君幸ニ訓示ノ勞ヲ惜ム勿レ

先ヅ便利ノ爲ニ左ノ四章ニ分チ順次各章ニ就テ論辨スルトコロアラントス因ニ曰フ第一章ニ於テハ先ツ蕎麥

ニ關スル一般ノ事ヲ考覈シ第二章ニ於テハ該植物ノ部分即チ種々ノ効用ヲナスノ具タル機關ヲ考覈シ第三章ニ於テ專ラ發生狀態及生殖ニ關スルヿヲ考覈シ第四章ニ於テ植物ノ生活、生長及ビ作爲ノ摸樣ヲ考覈セントス

第一章　蕎麥概論

(1)植物分類上ニ於ケル位置　(2)世界中ニ存在スル種類
(3)我邦ノ蕎麥由來　(4)種子ノ形狀
(5)根ノ概論　(6)莖ノ概論
(7)葉ノ概論　(8)花ノ概論
(9)生活ノ狀態　(10)根ノ機能大略
(11)葉ノ機能大略　(12)莖ノ機能大略
(13)花ノ機能大略　(14)枯死

第二章　蕎麥ノ組織如何

(1)莖ノ組織詳論　(2)葉ノ組織詳論
(3)頂芽　(4)根ノ組織詳論
(5)花ノ組織詳論　(6)幼花

第三章　蕎麥ノ發生狀態如何(付受胎作用)

(1)授精作用　(2)受胎ノ結果
(3)胚珠ノ發生　(4)種子ノ搆造及ビ萠發

(5)第一期發生狀態　(6)第二期發生狀態
(7)第三期發生狀態　(8)第四期發生狀態
(9)發生狀態結論
第四章　蕎麥ノ生理作用如何
(1)光線ノ關係　(2)呼吸作用
(3)同化作用　(4)藥液培養ト土壤培養
(5)溫度ノ關係

蕎麥ノ研究緒言畢

第一章　蕎麥概論

余ノ實驗シタル蕎麥ハ學名ヲ Fagopyrum esculentum, Moench ト謂ヒ一見莖其高サ殆ンド三十四五セ、メ、アリテ莖ハ根ニ近クニ從ヒ頗ル美麗ナル鮮紅色ヲ帶ビ葉ハ心臟形ヲ呈シ花ハ白色ニシテ花瓣ノ先端稍〻薔薇色ヲ染メル一個ノ双子葉植物ナリ

(1)蕎麥ハ植物分類上ニ於ケル位置ハ皆人ノ知ル如ク顯花植物ノ被子類中双子葉門ニアル中央子群ノ蓼科ニアリ而シテ蓼科中如何ナル位置ヲ占ムルヤハ左ヲ見テ知ルベシ

Order. cxix Polygonaceeae　蓼科
Tribe. I. Eupolygoneae　蓼亞科
A 灌木…………………

B　草本或ハ下生灌木…………

(1)雄蘂八個若クハ少數ニシテ子葉平坦ナリ……Polygonum　蓼屬

(2)雄蘂八個ニシテ子葉ハ褶襞ス……………Fagopyrum　蕎麥屬

Fagopyrum esculentum, Moench.………蕎麥

是ハHooker氏ノ分類法ニ從ヒシモノナルガ實際蕎麥ノ花ヲ見ルニ大抵上子房的（エピジナス）雄蘂三本ニシテ底花瓣的（ペリジナス）雄蘂五本都合八本アリ然レ𪜈稀ニハ七本或ハ九本ヲ有スルモノアルナリ其以前林娜斯氏ハ蕎麥ヲ以テ蓼屬ノ一種トシPolygonum Fagopyrum, Linnトダロケシカ後Moench氏ハ此植物ヲシテ蓼屬ノ範圍ヲ脫セシメ相對シテFagopyrum蕎麥屬ヲ設ケテ此中ニ編入セリ又Engler及ビPrantl兩氏ノ分類法ヲ示セバ次ノ如シ

Familie Polygonaceae　蓼科

A.花ハ輪生シ且ツ胚乳糜爛狀ヲナサズ　I. Rumicoideae　羊蹄亞科

B.花ハ輪生セズ………………II. Polygonoideae

a.胚乳ハ糜爛狀ヲナサズ……………蓼亞科

α.灌木…………Atraphaxideae　アトラフアキス小科

β.草木稀ニ半灌木…………Polygoneae　蓼小科

(i)閉筒花ヲ開ク…………Oxygonum　オキシゴヌム屬

(ii)細筒花ニアラズ…………

(1)花蓋ハ熟果ニ沿フテ上向ス

1. 子葉狹ク摺マズ……………… Polygonum 蓼屬
2. 子葉廣ク摺ム……………………Fagopyrum 蕎麥屬

Fagopyrum esculentum, Moench……………… 蕎麥

(2) 世界中ニ存在スル蕎麥屬ノ種類ニ就テ述ブル前ニ蕎麥屬ノ特有性ヲ單簡ニ云ハンニ凡ソ此屬ノ植物ハ雌雄兩全花ヲ開キ輪生セズ花蓋五出ニ〆熟果スレハ前者ハ後者ヨリ短ナリ胚乳中ニ胎子アリテ子葉ハ廣ク且ツ摺ム凡テ直立セル一年生草木或ハ小灌木ニシテ互生、有柄、ノ心藏葉或ハ三角葉ヲ有シ之ニ三乃至五條ノ葉脈アル（Pflanzenfamilien.）ヿ是ナリ扨テ其種類ニ至ツテハ未ダ確定セザレ𪜈大凡ソ八種アリ皆温帶亞細亞ニ産ス歐米諸邦ニ於テ今日見ルトコロノ蕎麥ハ唯其二三種ノ輸入サレシモノニ過ギザルナリ左ニ其各種ノ特徴ニ就キ聊カ陳ブル所アラントス

一、Fagopyrum rotundatum, Gaertn ——莖ハ直立空筒ニシテ葉ハ結節部ノ直上ニ付着シ之ニ對スル鱗葉ノ下部ニ柔毛ヲ叢生ス葉ハ鎗頭形ヲ呈シ縱ハ横ニ比シテ長シ先角鋭ク葉柄アリ然レ𪜈莖ノ上方ニ行クニ從ヒ葉柄ヲ失フ葉脈ハ兩側ニ柔毛ヲ具ヘ托葉ハ短カクシテ單葉脈數多走レリ其先端二裂ス花ハ互生軸ノ複總狀花ニシテ花梗ニ結節ナシ種子ハ長卵形ニシテ三角錐ノ傾向アレ𪜈基底ノ角殆ンド圓ク上部ニ進ムニ從ヒ龍骨トナレリ一体ニ皺多ク各面ノ中央ニ縱走條線アリ長サ蕚片ノ四五倍モアランカ現今 Kunawur 地方ニ多ク培養ス

二、Fagopyrum esculentum, Moench. ——此種ハ我邦ニ多ク培養セラレ余ノ將ニ大ニ論セント欲スルモノナルヲ以テ敢テ詳論セズ

三、Fagopyrum emerginatum, Roth ——莖ハ直立空筒ニシテ條線アリ且ツ一面ニ柔毛ヲ具フ一呎乃至三呎ニ達ス葉ハ三角形ニシテ底邊ノ兩角圓ク先端長ク延ビ鋭角ヲナス托葉ニ葉脉ナク鈍端ヲ有ス花ハ互生軸複總頂花ニシテ長花梗アリ萼ノ截刻鈍シ種子ハ三角錐ニシテ其角ハ翅狀隆起ヲ出ス面ハ卵様平滑ニシテ其頂點ニ截刻アリ此種類ハ印度ノ東北ノ高地ニ生ジ土人呼デ Phaphra ト云フ尙支那ニモアリテ食物ニ供スレドモ (Roth.) 支那自生ノ植物ニアラザルベシ (Don) 日本及ビアムル谷ニハ之ナシ推察スルニ多分、東比馬頁耶地方及ビ支那ノ西北部ニ自生スルモノナラン

四、Fagopyrum Tataricum, Gaertner. ——莖二三呎アリ葉ハ頗ル廣ク直徑一二吋アリテ心藏形ヲ呈ス花ハ白色或ハ石竹色ノ複總花ニシテ種子ハ卵様三角錐ノ瘦果ニシテ長サ〇、一六吋アリ其面ニ三條ノ深溝其角ニ多少ノ缺刻アリテ頂點ノ方ニ龍骨狀隆起ヲ見ル其他前種ト大同小異ノミ此種類ハ支那及ビ日本ニ生ゼズ (De Candolle) 韃靼及ビペルシヤニハ自生スルコト疑ヒナシ其以東ニ於テ一モ之ヲ見タルヿナシ元來此種類ガ韃靼ヨリシテ東方ノ歐羅巴ニ輸入シタルハ吾人ノ所謂蕎麥 (Fagopyrum esculentum.) ヨリモ後ニシテ奴隷呼デ Tatrika ト稱スルモノ即チ是ナリ左レバアリアン人種ハ此種ノ蕎麥ヲ知ルハ明ラカナルニ古代ノ印度歐羅巴國語ニ毫モ其記載ヲ見サルハ奇ト云フベシ現今比馬頁耶連山ノ三千呎ノ土地ニハ一斑ニ培養盛ニシテ北歐羅巴幷ニ北亞細亞ニ分布スレトモ瑞西、サボイニハ未ダ其形跡ヲ留メザルガ如シ

五、Fagopyrum cymosum, Meissr. ——直立空筒ノ莖ニ條線及ビ柔毛アリ又葉柄ヲ有スル葉アリ莖ノ下方ニ位スルモノハ心藏形ニシテ兩耳少シク尖ル如キモ角點ハ其實圓ク上方ニ位スルモノハ葉柄極短ク且ツ葉ハ三角形ヲ呈シ角ハ鋭キ細尖狀若クハ箭狀ノ抱莖葉ナリ又托葉ハ長クシテ鈍端ヲ有シ柔毛アリ花ハ複總頂花

ニシテ長柄二叉或ハ三叉ス花序ハ穗狀花ニ似タレトモ其實多少彎曲スル總狀花ナリ瘦果ハ頂點銳角ヲナシ其面ハ卵形三角トス此種類ハ多ク Mussooree 及ビ Cashmere 邊ニ生ジ概シテ溫帶比馬良耶地方ニ多シ

六、Fagopyrum triangulare, Meiss ——葉ハ心藏樣三角形或ハ鎗頭狀ヲ呈シ一体ニ長シ花柄長ク二分枝シ可ナリ彎曲セル總狀花ヲナス殼果ハ三角錐ニシテ角端隆突、頗ル著シ面ハ卵形トス主ニ Nepalia, Kumaon, Sirmove 及ビ支那ニ自生スト云フ

猶他ノ二種ハ未ダ詳ナラズ以上六種中 F. esculentum ヲ除キ他ハ皆我邦ニ見サル外國產ナルガ故ニ其實物ニ接セズ從フテ記錄モ必ズヤ誤謬ナシトハ保シ難ケレドモ唯余輩ハ余輩ノ所謂蕎麥ヲ詳論スルニ當リ比較ノ爲メニ一寸引合ニ出シタルノミ幸ニ牧野富太郞君先頃余ノ爲メニ右數種ヲ外國ヘ注文セラレタレバ不日到着スベシ其曉ニハ之ヲ蒔キ花ヲ開カシメ以テ庶幾クハ前記ノ性質ヲ確ムルヲ得ンソハ兎ニ角後日ノ報告ニ讓リ玆ニ先ヅ同君ノ厚意ヲ謝セザルベカラズ

（未完）

○チコノメサウ檢索表譯述

徳淵永治郎

佛國植物學者 A. Franchet 氏ハ "Monographie du genre Chrysosplenium Tourn." ト題シタル書ヲ Nouvelles Archivés du Muséum d'histoire naturelle. Série III. Tome II. p. 78-114. av. 4 planches. et Tome III. p. 1.-avec planches. ニ載セテ著ハセリ其初卷ニ於テ先總論ヲ叙シ次ニチコノメサウ屬植物ノ種類檢索表及其性徵即チ本文ヲ掲載シテ卷尾ニ圖ヲ添タリ第貳卷ニハ同ジク其性徵ヲ述ベ卷尾亦圖ヲ附セリ而シテ總論ニハ本屬植物ノ小歷史、地理分布幷ニ概性等ヲ略述シ本文ニハ五拾四種ヲ集錄シテ每種其下ニ性徵ヲ說キ又屢意

見ヲ附記セリ圖ハ Ch. macrophyllum Oliv.; nudicaule, Bunge.; alternifolium, L.; lanuginosum, Hook. et Thomps.; valdivicum, Hook. fil.; macranthum. Hook. fil.; oppositifolium, L.; sulcatum, Maxim. ノ八種ヲ除クノ外他ハ悉ク掲ゲタリ其彩色セザルモ恰モ眞形ヲ見ルガ如キ感アリテ分類上必要ノ點ハ漏スコトナシ殊ニ緊要ナル種子表面斑紋ノ狀態ニ於テハ一層放大詳細ニ畫ケリ是 Monographs 中ノ一頁書ナリト信ジ故ニ該書ハ讀者諸君ヲメ既ニ了知セル哉否ヤニ關セズ茲ニ檢索表及產地而已ヲ務メテ其儘譯述シテ仝好ノ士ニ報ゼントス幸ニ咎ムルナカレ

吾人今我日本帝國內ニ產スル本屬植物ニ就キ曩ニ Franchet 及 Savatier 兩氏ノ編述ニ係カル Enumeratio Plantarum Japonicarum 第壹第貳卷及露國植物學者 Maximowicz 氏ノ著ハセシトコロノ Diagnoses Plant. nov. Asiaticarum. 第九第十一卷ヲ觀シミレバ其數多クトモ十五種ニ過キズ然ルニ今又此書出ヅルニ據レバ更ニ六新種ノ增加アリテ本邦ニ產スルモノハ全數廿一種ノ多キニ達セリ內所謂互生葉類ニ屬スルモノハ纔ニ Ch alternifolium, Ch fragelliferum ノ二種ニシテ他ハ悉皆對生葉類ニ隷ス

チコノメサウ屬植物種類檢索表

(I)互生葉 （種子ハ其面ニ變シテ溝紋ヲ呈セズ）

(A)葉ハ花莖ノ基脚ニ無シ若シ存在スレバ特異ノ芽ヨリ生ジタル密集葉ニメ而シテ特殊ノ鱗片ニ依リテ支持セラル

(a)鱗片ハ膜質黃褐色或ハ蒼白色ニメ莖幷ニ葉ノ密集束ヲ抱擁ス植物体ハ强剛ナリ

1. Chrysosplenium macrophyllum Oliv.

葉ハ濶倒卵形ニシテ縁邊不明ニ細小ナル鈍齒ヲナシ花柱ハ蕚ノ上ニ伸長ス　支那

2. Ch. Griffithii, Hook. et Thomps.

花序ハ緩縵ナル分枝ヲナシ葉ハ腎臟形縁邊深ク缺刻シテ纖維根ハ蕪菁根狀ヲナス　ヒマラヤ東部、支那

3. Ch. nudicaule, Bunge.

花序ハ密集シテ葉ハ腎臟形縁邊ノ缺刻深シ纖維根ハ圓筒狀ヲナス　西比利亞

(b) 鱗片ハ肉質ニシテ或ハ總テ花莖基脚ニ相集生シ或ハ其下部ニ散生ス而シテ漸々上部ノ扁開セル眞葉ニ變遷ス

4. Ch. uniflorum, Maxim.

全体矮小ニシテ腎臟形ノ葉ハ花莖ノ頂端ニ於テノミ在リテ稍輪生シ鱗片ハ總テ基脚ニ存ス　支那西部

5. Ch. axilare, Maxim.

花莖ノ下部ハ無葉ニシテ中間以上ニ唯枝葉ヲ出シ葉ハ倒卵狀披鍼形ニシテ長キ花梗上ニ單生シテ種子面ハ平滑ナリ　支那西部

6. Ch. ovalifolium M. Bieb.

花莖單立シ下部ニハ散生セル鱗片アリテ中間以上ニ葉ヲ生ジ葉濶倒卵形ニシテ大ナリ花多數擬撒房狀ニシテ稍座生ス種子面ニハ細隆起様ノ短柔毛ヲ滿布シ　西比利亞

7. Ch. carnulosum, Hook. fil. et Thomps.

枝ハ中間以上ニ鱗片ヲ生ジ鱗片ハ卵形ニシテ漸々扁開セル倒卵形ノ小葉ニ變ジ花多數擬撒房狀ヲナシテ稍座生

シ種子面平滑ナリ　スキム　ヒマラヤ

(B)葉ハ花莖ノ基脚ニアリテ扁開ス

(a)嫩枝ハ地下生

8. Ch. peltatum, Turcz.

根葉圓形楯形ニ〆葉面平滑ナリ　西比利亞バイカレンシ

9. Ch. alternifolium, L.

根葉圓形深キ心臟狀ヲナシ平滑或ハ白毛ヲ散生ス　歐洲、亞細亞、亞米利加北部

○ var. β. japonicum, Maxim.

チコノメサウ

日本々土、北海道　蒙古

10. Ch. Wrightii Fr. et Sav.

根葉圓形基低截斷少シク楔形ヲナシ莖葉ハ扇形ニシテ長楔狀ヲナシ全体帶褐淡赤色ノ縮レタル長柔毛ヲ以テ被ハレ

11. Ch. ciliatum, Franchet.

全体白毛ヲ以テ散布セラレ蕚ニ細毛アリ葉圓形ナリ　支那

(b)嫩枝ハ地上生

十蕚草本様緑色或ハ帶緑淡黃色ニ〆花時斜立ス

*全体平滑

12. Ch. Sedakovii, Turcz.

下葉深ク三片ニ分裂シ雄蕋四個、聚繖花ハ稍一花ヨリ成リ花梗長伸シ全長一寸許　西比利亞

13. Ch. tenellum, Hook. fil. et Thoms.

下葉腎臓形稍五個ノ波形緣邊ヲナシ雄蕋八個、聚繖花稍單花ヲ有シ花長花梗上ニ座シ種子平滑

ヒマラヤ西部

14. Ch. microspermum, Franchet.

下葉卵圓形或ハ稍圓形ヲナシ緣邊五乃至七個ノ純齒アリ、雄蕋八個、側生ノ花梗ハ莖ヨリ少シク長シ種ハ極メテ微細ナル毛茸ヲ以テ被ハレ　支那西部

**嫩枝ノ葉ハ他部ノ葉ヨリ大ナリ兩面毛茸ヲ散生シ花莖葉ハ平滑ナリ

○ 15. Ch. fragelliferum, Fr. Schmidt.

ツルネコノメサウ

嫩枝葉及莖ノ基脚葉ノ腎臓形ニ〆基低深ク心臓形ニ缺刻シ莖ノ下部平滑ナリ

石狩、膽振、渡島、南部津輕、九州

16. Ch. gracile, Franchet.

嫩枝及莖基ノ葉ハ濶卵圓形若クハ稍圓形ニ〆基低截斷シ莖ノ下部及嫩枝ハ（殊ニ其上部ニ）帶褐淡赤色ノ縺縮セル柔長毛ヲ以テ被ハレ　支那

***莖及嫩枝倶ニ毛茸アリ或ハ多少縺縮セル柔長毛アリテ混生ス

17. Ch. lanuginosum, Hook. et Thomps.

根葉ノ葉片（Lamina）ハ長サ凡一寸綠邊鈍齒ヲナシ莖上ノ葉ハ小數ニシテ鱗片狀ヲナサズ總テ扁開ス種子平滑ナリ　ヒマラヤ東部

18. Ch. Henryi, Franchet

根葉ノ葉片ハ長サ一寸若クハ二寸ニ及ブ鈍齒ヲナシ莖ノ中間以上ニ在ルモノハ鱗片ニシテ漸々上部ノ扁開セル眞葉ニ變遷ス種子面ニ微突起アリ　支那

19. Ch. Davidi, Decaisne.

廿萼花瓣樣黃色ニシテ花時直立鐘狀ヲナス

全体帶褐淡赤色ノ綿樣ノ毛茸ヲ以テ被ハレ葉ハ卵圓形鈍齒緣邊ニシテ盤ハ不明ナリ　支那西部

○富士山ノ雪及植物分布ニ就テ

藤井健次郎

本年一月二十五日及二月十三日滊車ニテ富士山麓ヲ過グ佐野ニ於テ雪景最モ好シ佐野ハ富士山ノ東南麓ニ方レルガ故ニ此處ヨリ富士ノ南面ト東面トヲ望ムヿヲ得ベシ而シテ此處ヨリ眺ムトキハ山ノ南面及東南、東北ノ間ノ一面トニ於ケル雪ノ分布ノ狀判然異ナリテ富士ノ頂上東南ノ肩ヨリ寶永山ノ窪（一ニ寶永山ノ噴火口ナルベシト云フケ所）ノ周邊ヲ連テテ二子山ノ頂上以下此一聯ハ地面ヲ露出シ此レヨリ東面ハ丘ヲナス所ヲ除キ其他ハ一面白クシテ少シモ地面ヲ殘スヿナシ然ルニ南面ハ雪ノ蓋フ所ト露出セル地面ト相交リテ斑紋ヲナシ而モ露出セル面積ハ遙カ

ニ雪下ノ面積ヨリモ多シ共丘陵ノ如キ角點ニ於テ地面ノ露出セルヲ以テ見レハ此兩面ニ於ケル積雪ノ差ハ或ハ風ノ爲メナルベキカ又南面ハ東面ヨリモ樹木多ク繁茂スルカ故カ或ハ南面ハ東面ヨリモ早ク雪ノ融解スルニ由ルカ或ハ此等諸源因ノ共同ノ結果ナルカ未ダ確定シ難シトイヘ圧兎ニ角實際ニ於テ雪ノ分布ノ狀此兩面ニ於テ如此差アルヲ以テ見レバ此兩面ガ全一年間ニ受クベキ熱ノ全量ニ於テ大差ナカルベカラズ隨テ植物生育及ヒ分布ノ狀ニ於テモ大ニ異ナル處アルベシ況シテ寶永山ノ噴火ハ此東面ニ於テ最モ激烈ナリシト云フニ於テヲヤ此故ニ東面ニ於テハ植物ノ生育著シク惡ク南面ニ於テハ大樹繁茂セリ即チ中畑村口（御殿場口）登山道ヨリ富士ニ登ル圧ハ路傍樹木ノ繁茂スル處殆ド之レ無ク大ナルモノハ唯松ノミニシテ而モ目通リ直徑一尺ヲ越ユルモノ稀ナリ故ニ單ニ此口ヨリ登リタル圧ハ富士山ニ山林アルヿハ想像ノ外ニシテ頂ヨリ麓迄唯禿山トノミ思フベシ然ルニ村山口（大宮口）ヨリ登山スル圧ハ樹木ノ繁茂著シクシテ殊ニ馬返シヨリ一合目迄ノ如キハ深キ山林ニシテ攀ヅベカラザル樹木ノミ多シ又余ガ昨年中畑口（御殿場）ヨリ登山ノ折リ人足ノ者ニ聞キタルトコロニ依レバ三十年（確實ナル年間ハ知リ難シ四十五六才ノ人足ノ者ノ幼年ノ頃ト云フ）前ハ此路今日雜草繁茂スル處ハ大概 Gnaphalium ノ類ノミ地ニ布ケリト云フ然ルニ今ハ一面他ノ雜草ノ占領スル所トナリ前ニ繁茂セシモノハ此登山道ノ一合メノ邊リニ於テ僅ニ生存スルノミト云フ（登山ノ歸途既ニ御殿場ニ近キトコロニテ聞キタルヲ以テ其 species ヲ知ルヿ能ハザリシ）寶永ノ噴火ハ大凡百八十年前ニアリテ今ヨリ三十年前迄ハ Gnaphalium ノ類ノミ多ク繁茂シテ僅々三十年程ノ間ニ今日ノ如キ雜草繁茂ノ狀況ヲ呈セシモ亦面白キヿナリ

今日寶永山頂ハ尙一莖ノ草ダモ無キガ如シ唯をんたでノ所々ニ秣ヲナシテ寶永ノ中腹以下大概麓ノ邊ニ散在

スルヲ見ルノミナリ今ヨリモ此周邊ノ地形積雪ノ狀及植物ニ就キ其分布ノ狀ヲ調査シ置キ毎年之ヲ比較シ見ルトキハ他日此ノ如キ地質氣候ニ於テハ植物ハ如何ナル逕路ニ依リ如何ナル速度ヲ以テ如何ニ年ヲ追フテ播殖スルモノナルヤ叉如何ナル植物ヨリ初メテ遂ニ如何ニ變ズルモノナルヤ其生存競走ノ狀態等ノ問題ノ一斑ニ答ヘ得ベシ今日ニ於テモをんたで、いたどり、ふじあざみノ如キハ敢テ窪所ノ風靜カナル所ヲ擇フヿノ著シキヲ見ズシテ太郎坊（地名）以上隨處ニ生ズレドモからまつノ如キハ之レヨリ以上ハ决シテ丘上ニ生ズルガ如キヿナク此登山道ニ於テハ唯二子山ノ南面ニ近キ窪ニ沿フテ生ズルモノ一聯アルノミ而モ皆老木ニアラズ叉此からまつハ村山口（大宮口）ニテハ一號目ノ上下に多クシテ中畑村口ニテハ多ク一號メ以下ナリ而モ村山口ノ一號メハ御殿場口ノ一號メト比較スレバ著シク高キガ如シ（二萬分一地形圖ノ二塚ノ分當今絶版ニシテ此高低比較ノ詳細ヲ知リ若シ此地ノ地理ニ詳ナル諸君ノ教示ヲ乞フ）是等ノ分布ノ差異モ亦寶永噴火ノ影響ナランカ

余ハ村山口（大宮口）ノ登山道ト中畑村口登山道ノ他ハ是ヲ知ラザルガ故ニ少シモ他ト其比較ヲナシ難シ是等ノ他ノ口ヨリ登山セラレタル諸君ノ御報道ヲ待ツノミ又村山口ニ於ケル馬返シヨリ一合メ迄ノ間各種松柏科植物ノ分布ノ狀況ハ土地ノ高低ニ隨ヒ正然トシテ秩序アリ左レドモ之レ等ハ他ノ口ト比較シテ多少ノ概觀ヲ得ルノ後更ニ記スヿアラン

如此富士山植物分布ノ狀ニハ見ルベキモノ無キニアラザレバ此ニ植物採集ヲ試ミラルヽ學友諸君ニハ單ニ其採集地名ヲ富士山トセズ其何合メ或ハ何地方ト小區分ノ地名ヲ記サレンヿヲ希望ス殊ニ其何口登山道ヲ記スルヿ肝要ナリ

◎雜　錄

植物ノ數

の、さ、

左ノ一篇ハ有名ナル P.A. Saccardo 氏ガ Atti. Cong. Bot. Int. 1892 ニモノセラレタルヲ最近ノ American Naturalist vol. XXVIII. No. 326 p. 173 ニ英譯シアリタレバ更ニ之ヲ譯出シテ以テ諸氏ニ紹介セントスルノ微衷ニ出デタルナリ請フ文ノ拙ナルヲ咎ムルナカレ

吾人ノ住居スル此地球上ニ生活スル植物ハ其數若干ナルヤヲ推算スルヿハ理學ノ一大問題ニシテ又理學的ノ好奇心ト云フベシ實ニ一般植物學ニ關スル書籍ハ凡ソ此問題ニ注意セルモノ、如シ尤モ其種 species ナルモノ、定義ハ全植物學者間ニ同一ナラザルハ實ニ明ニシテ或ハ現存セル數ヲ減ゼントスルモノアリ或ハ極微ノ差異ヲ認メテ以テ之ヲ增加セントスルモノアリ然レ𪜈林娜氏ノ中庸ナル定義ハ今日大ニ世人ノ用フル所ニシテ之ヲ稍改良シタルモノハデカンドル、ベンサム、フーカア、グレニエル、ゴドロン、コツホ、アサ、グレーパルラトール、カルエル氏等ノ書ニ見ル所ナリ假シ此定義ニ於テ各學者其解釋ヲ異ニスルトスルモ無算ナル植物ノ數ト比較スルニ當リテ其結果ノ實ニ寥々タルヤ知ルベキナリ茲ニ先ヅ此等學者ノ研究セル結果ヲ年代ニ隨テ數フレバ左ノ如シ

紀元前五百年—四百年	ヒポクラテス氏ノ調ベタルモノ	二百三十四個
仝　三百十年—二百二十五年	セチフラスタス氏ノ調ベタルモノ	五百　個
紀元　七十七年	ディチスコリデス氏ノ調ベタルモノ	六百　個

仝　二十三年—七十九年　プリニー氏ノ調ベタルモノ　八百　個

仝　一千六百五十年　カスパルバウヒン氏ノ調ベタルモノ　五千二百六十六個

一千七百四年　レー氏ノ調査シタルモノ　一万八千六百五十五個

以上ハ種ト變種トヲ混ズ

一千七百七十一年　リンナ氏ハ八千五百五十一種ヲ調査ス内七千七百二十八種ハ有花植物ニシテ八百二十三種ハ隱花植物ナリ

一千八百七年　パルソン氏ハ有花植物二万種ヲ調査セリ

一千八百十九年　デカンドル氏ハ有花植物三万種ヲ調査セリ

一千八百二十四年　スチウデル氏ハ有花並ニ隱花植物七万種ヲ調ベタリ

一千八百四十一年　スチウデル氏ハ有花植物七万八千種ヲ調査セリ

一千八百四十五年　リンドレー氏ハ有花植物七万九千八百三十七種ヲ調査セリ

一千八百八十五年　ドュシヤアテ氏ハ十二万五千種ヲ調査セリ内十万種ハ有花植物ニシテ二万五千ハ隱花植物ナリ

今最近ノ分類書ノ分チニ隨テ主ナル部門ニ分ツ時ハ左ノ如シ

双子葉類　七万八千二百種
裸子類　二千六百種
單子葉類　一万九千六百種

一千八百八十八年ノ Durand Index Gen. Phan. ヲ參考スベシ此書ニ掲グル所ハベンサム及フーカア氏ノゼネラプランタルム（一千八百六十二年—八十三年）ニ依ル

羊齒類	二千六百八十五種	一千八百六十八年—七十四年ノ Hook. and Bak. syn. Filic. ヲ見ヨ
木賊、蘋、石松類	五百六十五種	一千八百八十七年ノ Baker Fern Allies ヲ見ヨ
蘚類	二千三百三種	一千八百四十九年—五十一年 Mueller Syn. Musc. ヲ見ヨ
苔類	一千六百四十一種	一千八百四十四年ノ Gott. Lind. Nees. Syn. Hep. ヲ見ヨ
地衣類	五千六百種	一千八百七十年ノ Krempelhuber Gesch. Lich. ヲ見ヨ
菌類	一萬一千八百九十種	一千八百六十二年 Strienz Nom. Fung. ヲ見ヨ
藻類	六千二百種	一千八百四十九年 Kützing spec. Alg. ヲ見ヨ

合計十三萬一千百四種

然レ𪜈此數（十三萬一千百四）ハ近來顯微鏡ノ改良ト研究者ノ增加トニ依リ殊ニ隱花植物ノ廣大ナル區域內ニ爲サレタル近來ノ駸々乎タル研究ニヨリ大ニ增加セラレタリ實ニ米ノ苔學者 Underwood 氏ノ說ニ依レバ（一千八百九十二年ノ Bot. Gag.）一千八百四十四年ヨリ今日迄苔類ノ數ハ世界ノ各部ニテ爲サレタル研究ニヨリテ殆ト二倍トナレリト又藻類ニ就テハ余ト同學ナルジーピー、デトニー氏ノ說ニ依ルニ氏ノ蒐集シタル書類並ニ氏ノ貴重ナルシロジーアルガアラムニ一部分出版シタルモノニヨリ今日迄記載セラレタル植類ノ數ハ左

ノ如シ

綠藻類	二千七百九十八種（シロジアルガラム第一卷一千八百八十九年）
藍藻類	凡ソ八百種
褐藻類	凡ソ一千一百種
紅藻類	凡ソ二千一百種
硅藻類	五千種　（仝上第二卷）
車軸藻類	二百種
合計	一萬二千百七十八種

之ニ依テ此大ナル一類モ亦一千八百四十九年以來殆二倍トナレリ

偖菌類ニ就テハ此二十年間ノ活潑ナル研究ノ結果ハ實ニ豫想ノ外ニ出タリ余ノシロジーフンゴラムノ第十卷ニ記シタル種類ノ數及ビ一千八百九十二年ノ五月迄ノ數ハ三萬九千六百六十三ノ大數ニ昇リ是ニ依テ今前記ノ〆高ニ他類ノ增加數ヲ加レバ左ノ如シ

前記ノ總計	十三萬千百〇四種
苔類	千四百種
菌類	二萬七千七百七十三種
藻類	五千九百七十八種
合計	十六萬六千二百五十五種

以上ノ數ハ確實ナル據ル所アリテ之ヨリ算ヲ起シタルモノナリ而シテ他ノ植物ノ類ニ關シテハ最近ノ增加數ヲ計算セル報告ナキヲ以テ知ルニ由ナシト雖モ Bot. Jahresbericht Botan. Centralblatt, Monographiae phanerogarum 等ノ如キ最近ノ雜誌ニ依リテ察スルニ一千八百五十一年以來蘚類ノ數ニ二倍ノ增加ヲ見又有花植物及ビ羊齒類ノ如キモ殆ド五ペルセント增加シタルヿハ何人モ疑フモノアラザルベシ

之ニ依テ

前記ノ總計	十六萬六千二百五十五種
有花植物ノ增加	五千十一種
羊齒ノ增加	百三十四種
蘚類ノ增加	二千三百〇六種
合計	十七萬三千七百〇六種

此數ハ今日迄知ラレタル植物ノ種類ノ最モ實ニ近キ類ヲ示スニ足ル即チ有花植物十萬五千二百三十一ニシテ隱花植物六萬八千四百七十五種ナリ之ヲ各類ニ分算スレバ

有花植物	十萬五千二百三十一種
羊齒類	二千八百十九種
木賊、蘋、石松類	五百六十五種
蘚類	四千六百九種
苔類	三千〇四十一種

地衣類	五千六百種
菌類	三萬九千六百〇三種
藻類	一萬二千百七十八種
合計	十七萬三千七百〇六種

今若シ地球上尙ホ探究ヲ要スベキ若クハ從來探究ノ不充分ナル地方アルヿヲ思ヒナバ植物ノ數ノ爾後尙ホ益々大ニ増加スルヤ明ニシテ此増加ハ高等植物ニ比シテ殊ニ下等簡單ナル隱花植物ニアルヤ明カナリ回顧スレバ此等極微ノ生物ヲ研究スルノ利器タル顯微鏡ノ改良ハ實ニ昨日ノ如クナレド而カモ此等數年ヲ出デザル短日月ノ間ニ功績赫々タル大勝利ノ就中隱花植物ノ區域內ニ得ラレタルハ實ニ此餘澤ニシテ又之ガ證明ト云フヲ得ベシ

然レ𪜈余ノ此短文ヲ草セントシタル本意ハ實ニ菌類ノ數ニ關スルヿニシテ當世紀ノ初ニ當リテ知ラレタル數百ノ種類ヨリ一躍シテ一千八百六十二年ニハ殆一萬二千種ノ多キニ達シ今日ニ至リテハ凡ソ四萬ニ達セリ此驚クベキ増加ハ啻ニ研究ノ増加ニ歸スベカラズシテ又菌類ノ種々變化セル形ヲ存スルヿヲ示スニ足ル植物學者中或ハ難ズルモノアリ曰ク多數ノ菌類中ニハ確固タル基礎ヲ有セザル種類アリテ此等ハ寧ロ其繁殖スル場所ニ依テ起ル所ノ一ノ形トシテ考フベキモノナリ即チ其成長スル場所ノ異ナルヨリ起ル一種ノ變形ナリト余ハ今日既ニ確固タル種類ト見做レタル種類ニシテ決シテ此ノ如キヿアラズト云フヲ欲セズ然レ𪜈凡ソ下等簡單ニシテ極微ナル菌類ノ如キモノニアリテハ其形質ノ異ナレルノミヲ以テ種ヲ定ムルノ唯一法トナスベカラズ故ニ其種類ノ果シテ種トスベキカ種トスベカラザルカハ深ク熟慮ヲ要スル所ナリ

茲ニ菌類ノ成長スル位置ニ關スル疑ヲ解カンニハ最屈竟ノ事實コソアレ夫ハ即チ吾人ガ往々同一ノ生物体ニ同一層中ノ數種ガ生活スルヿヲ目擊スルヿ之ナリ此種類ハ勿論近緣ノモノニハ相違ナキモ全ク別ノ種類ナリ例ヘバ Sphœrella, Diaporthe, Leptosphaeria, Pleospora, Phoma 等ノ如キ之ナリ若シ菌類ノ依テ以テ生活スル生物体ニシテ其菌類ノ生質ヲ左右スルノ力アルモノナリセバ如何ニシテ同一枝上否同一葉上ニ全ク異ナリタル二種ノ Diaporthes 二個ノ Sphaerellas ヲ見ルヿヲ得ベキヤ大ニ疑ナキ能ハズ故ニ種類ノ或ハ滅セラレンヿハ元ヨリ思ハザルニハ非レ𪜈然レ𪜈之デ爲スニハ須ラク Melius est distinguere quam confundere ナル金言ヲ服膺シテ充分戒心ノ上行ハレンヿヲ切望ス

菌類中ニハ叉所謂不完全ナル種類 (Sphaeropsideae, Melanconieae, Hyphomyceteae) ヲモ含ミテ其數凡ソ一萬種ニ達ス此等ニ就テ或菌學者ハ宜シク種類ノ戸籍中ヨリ除去スベキモノナリト論ズルモノアリ然レ𪜈決シテ然ラズ何トナレバ若シ此等中ノ或僅少ノ種類ニ就テ其者ハ或一定セル種類ノ種々ニ變遷スル間ノ一部分ヲナスモノナリトノヿヲ確知スルハ却テ此等ノ種類ノ大半ニ就テ吾人ハ夫等ノ變遷ノ形ニ就テ全ク知ラザルナリト云フヿハ明カニシテ此等ハ確定セル種類ニシテ其充分ナル形態ハ或ハ消滅シタルカ或ハ缺亡セルカ否ラザレバ甚ダ稀ナルニアラザルヤヲ疑ハシム然レバ如何ニシテ此判然確定セル種類ヲ菌類ノ戸籍中ヨリ取除クヿヲ得ベケンヤ

余ハ前段ニ菌類ノ數ハ僅々三十年間ニ凡ソ二萬八千種ヲ增加シタルヿヲ説ケリ余ハ之ニ加フルニ一千八百八十二年ヨリ九十年ニ至ル短年月ノ間ニ正ニ八千百種ノ增加セルヿヲ附加セザル可ラズ菌類ノ增加スルヿ夫レ斯ノ如シ若シ全世界ニ菌類ノ研究ヲ及ボシ且ツ凡ユル菌類ノ寄生スル寄主タル植物ノ搜索ヲ遂ゲタランニハ

如何ナル成績ニ至ルベキカ茲ニ一二ノ例ヲ擧ゲテ以テ此研究ノ旅路ヲ照サントス彼ノベニス地方ハ隱花植物ヨリハ寧ロ顯花植物ニ就テ最能ク知ラレタル地方ノ一ナリ（勿論充分トニハアラネド）一千八百六十九年ノ出版ニ係ルプロフェッソル、デ、ビシアニ氏ノ書ニ記サレタル數ニ從ヘバ此地方ニハ二千九百三十九種ノ有花植物アリ此數ハ今日ニ至ルモ左シタル變化ナシ否ナ殆同一ナリ隱花植物ニ就テハ一千八百八十五年ニジービゾゼロー氏ノ精細ナル書ニ依ルニベニスノ隱花植物ハ總數凡ソ六千種ニシテ其内四千二百種ハ菌類ニ屬ス今日ニ至リテハプロフェッソルA、N、ベルレース、Cマスサロンゴ等諸氏ノ研究ニ依リテ殆ト四千八百種ニ達セリ今若シベニスノ有花植物ノ數今日ニ至ル迄一世紀以上ノ間出精ナル研究ニ依ルモ僅々少數ノ種類ノ外左シタル增加ヲ見ザルヲ以テ菌類ノ數ノ之ヨリ非常ニ增加スルヤ期シテ待ツベキナリ實ニベニスノヒメノミセテス菌ノ如キハ近來迄殆ド人ノ之ヲ研究スルモノナキ有樣ニシテベネチア、ロビゴー、ビセンツア、ベルノー、ウディン等ノ如キアルプス近傍ノ內地ハ嘗テ研究セラレザリシヲ以テ之ヨリ新種ノ大ナル增加ヲ見ルヤ疑ナシ故ニ余ハベニスノ領內ノ充分ニ探明セラレタル曉ニハ少ナクモ其地ノフロラニ七千ノ菌ノ增加ヲ見ルナラント思考ス之ヲ二千九百三十九種有花植物ニ比スレバ實ニ四分ノ三ノ超加ナリ此比例ニ準ジテ今日若シ全世界ニ十萬五千以上ノ有花植物アリトスレバ此四分ノ三ヲ超加センニハ菌類ノ數殆ド廿四萬五千ノ大數ニ騰ルベシ此計算ヤ決シテ大ニ過グルト云フヲ得ザルベシ何トナレハ菌類ノ大半ハ概ネ寄生ニシテ之ト寄主トノ關係ハ必ズシモ存セザルベカラザレバナリ

茲ニ亦一例アリ菌類ト寄主トノコトニ就テ叙述シタル書ニハ世界全体ノモノニ就テウェステンドロップ氏ノ書アリベニス地方ノモノニ關シテクボニニー及ビマンシニー氏ノ書アリ北米ノ最近ノモノニハフアロー及ビセーモ

アー氏ノ書アリ今此等ノ書ニ就テ一見スルニ専ラ菌類ノ寄主トナル有花植物ノ數ハ實ニ夥多ニシテ能ク百ヲ以テ數フベシ且ツぶどう (Pirotta, Thuemen) レモン及オレンジ (Penzig) 桑 (Berlese) 等ニ寄生スル菌類ニ就テ書ケル此等諸氏ノ書ヲ參考スルニぶどうニ寄生スル菌ハ一千八百九十二年出版ノ Thuemen 氏ノ調ベニ依レバ五百九十五ニシテレモン及ビオレンジニ於ケルモノ百九十桑ニアルモノ二百ナリ今此等寄主タル植物ヲ其屬ニ從テ分チ各屬（即チ Vitis, Citrus, Morus）ニ平均四十ペルセントノ寄生菌固有ナリトセバ

ぶどう屬ニ固有ノ菌ノ種類	二百三十八
レモン屬	七十六
くわ屬	八十

ニシテ各屬平均百三十一ノ寄生種ヲ有ス偖有花植物ノ屬ハベンサム及ビフーカア氏ニ依ルニ八千四百十七アリ故ニ今此等ノ各屬ニ平均百三十一ノ寄生菌アルト見ル𪜈ハ其數百十萬二千六百二十七ノ大數トナル之ニ陸上ノモノ及ビ寄生ナラザル種類(凡ソ一萬千)ヲ加フレバ總計百十一萬三千六百二十七ナリ此數ヤ實ニ大ナリト雖モ決シテ實際ニ適セズト云フヲ得ザルベシ何トナレバ今此計算ノ準標ト立テタルモノハぶだう屬レモン屬くわ屬等ノ如キ各屬僅少ノ種類ヲ含メルモノニ依リタルモノナレバ之ヲなすび屬げんげ屬大戟屬等各固有ノ寄生菌ヲ有スル屬ニシテ且ツ各數多ノ種類ヲ有スルモノト比スレバ同日ノ談ニアラザルベケレバナリ然レ圧又却リテ考フルニ植物ノ數屬若クハ數種ハ大ニ菌害ヲ蒙ラザルモノアリ或ハ地方ニヨリ其地ノ乾燥ナルヨリ若クハ植物ノ稀少ナル等ヨリ寄生菌類ノ多カラザル所アリ或ハ曩キニ標準トシテ示シタル三屬ノ如キ木本植物ハ草本ノモノト比スルニ害ヲ蒙ルヿ多シ故ニ之等ノ理由ヲ察スレバ有花植物ノ各屬ニ平均僅ニ三十種ノ

寄生菌アリトセバ大ナル誤謬ナカルベシト信ズ此ニテ算スルニ二十五萬二千五百十種ノ寄生菌アリ之ニ從來知ラレタル寄生ナラザル類ヲ加フレバ總計二十六萬三千五百十種ナリ今二十五萬二千五百十種ノ寄生菌ヲ有花植物ノ從來知ラレタル十萬五千ノ種類ニ分算スルトキハ寄主植物一ニ就キ二種餘ノ寄生菌ヲ有スルノ割ナリ羊齒、蘚苔若クハ大ナル菌蕈類ノ如キモ少ナカラザル寄生菌ヲ有スレドモ此算中ニ數ヘズ

此計算ハ有花植物ノ各屬ニ於ケル菌ノ數ニ依リテ起算シタルモノナレバ曩キニ能ク知ラレタル一地方ノ有花植物ノ種類ト菌類トノ關係トヨリ爲シタル計算ヨリモ尚一層實際ニ近シ之ニ依テ考フルニ菌類ノ總數ハ其完全ナルト不完全ナルトヲ問ハズ全世界ニ於テ少ナクモ二十五萬內外ニ昇ルベシ即チ吾人ガ今日知ル所ノ數ノ六倍以上ナリ

之ヲ要スルニ今日迄記載セラレタル植物ノ種類ハ凡ソ十七萬四千ニシテ有花植物十萬五千隱花植物六萬九千ナリ即チ大積ニシテ近來ノ書ニ記サレタル數ヨリ多キコト凡ソ五萬ナリ之ニ依リ考フルニ菌ニ就キテ前陳セル如キ計算法ニヨリテ吾ガ全地球上ヲ蔽ヘル種類ノ數ヲ計ルニ若シ全世界ノフロラノ充分ニ知ラレタル曉ニハ少ナクモ三十八萬五千種（即チ二十五萬ノ菌類及ビ十三萬五千ノ他類）ヨリ成ルトスルモ大差ナカルベシト信ズ人若シ菌類以外ノ他類ノ數ヲ只一萬五千ニ減ゼントセバ植物ノ總數ハ少ナクモ四十萬種ニ昇ルベシ

鳴呼何レノ時カ吾人ハ此無數ナル種類ヲ熟知スルニ至ランカ若シスチユーデル氏ノ說ノ如ク一千八百二十四年以來植物ノ數七千ヨリ十七萬四千ノ數ニ達シタリトスレバ即チ六十八年間ニ二十萬四千ノ種類ヲ發見シタル割ナルユヘ此割ヲ以テスルトキハ四十萬ノ種類ヲ知ランニハ此先殆ド百五十年ノ研究ヲ要スルナリ吾人ノ遠孫ノ時代ニ至リ此豫言ノ當レルヲ見ルカ或ハ余等ノ大ニ誤レルヲ知ルニ至ランノミ

○人躰ノ輪癬

○ Sabouraud 氏ハ輪癬一百件ヲ調査シ該疾病ハ二種ノ寄生物ニ起因セルヿヲ決定セリ其甲ハ胞子小ナリ即チ其大サ 3μ ニシテ相聚合シ菌絲欠如スルヲ以テ其徵候トス又乙ハ胞子7若クハ 8μ ニシテ菌絲ヲ存ス而シテ甲ハ啻ニ毛中ニ滿ツルノミナラズ一種ノ鞘中ニアリテ乙ハ常ニ毛ノ內側ニ生長シ鞘ヲ形成セズ且ツ甲ノ Tinea ハ殆ンド頭髮ニ限リ乙 Tinea ハ通常皮膚及ヒ鬚ニ生ズトイフ

大、三、

○零余子

やまのいも、なかいも、まるばどころ等ノ葉腋ニ小珠塊アリ人呼テ之レヲ零余子若クハやまのいものみト稱ス、成形圖說二十二卷やまのいも條ノ中ニ「中夏の頃葉間に細花さく云々實なりて中秋に至りて熟り圓篇大小乙からず色梨子に似て是亦味佳しく…即ち糠子なり」トアリ以テ當時ハ之レヲ果實トセシナラン然レ𪜈果實ハ果實ニテ存スルヤ明ラカナリ珠塊ハ珠芽ナリ C. Queva 氏ハ Dioscorea Batatas 及ビ Helmia bulbifera ノ珠塊ノ構造ヲ調ベテ曰珠塊ハ液芽ノ非常ニ養分ノ增加セシモノニシテ往々二芽ノ合着ヨリナルモ有リトイフ

大、三、

○いしもちさう

姬路麻生山ニ產ス、山ハ市川鐵橋ノ畔ニ位シ、其南北兩側ニ殊ニ北方ニ多ク、土地ハ左程濕地ニ非ス、方言一名ゑったのいしもちト稱スト、同地道澤恒猪君ヨリ該標本ヲ添テ報道アリタリ

○海苔ニ付着セル硅藻ノ數

戯レニ食用海苔ノ薄片ヲ顯微鏡下ニ窺ヒタルニ大凡ノ一ミ、メ、平方ノ面ニ平均四十五個ノ硅藻付着シ居タリ

之ヲ以テ推セハ一枚ノ海苔（通常十八セ、メ、平方アリテ五層ノ藻葉ヨリ成ルト假定ス）ヲ食フ毎ニ廿萬二百五十一個ノ硅藻遺骸ヲ口ニスルモノト謂ハサル可カラズ豈亦驚クベキ數ナラズヤ

○硅藻の着色

ミクエー氏近頃硅藻原形質着色法ヲ研究シテ曰クメセリン、フルコハ最モ硅藻ノ着色ニ適スルガ如シ而メ此液ハ極稀薄ナルヲ要シ硅藻培養水ガ纔ニ青色ヲ帶ブルニ至レバ足レリト殊ニ其着色漸ク進ミ毫モ扭歪セザレバ誠ニ都合宜シト云フヘシ

○ほろふあいとトひすてろふぁいと

エーワード、ヘッセー氏ハ含草綠植物ニシテ活物寄生及ビ死物寄生ヲナサズシテ獨立榮養ヲナセル植物ヲほろふあいと（Holophyte）ト稱シ活物或ハ死物ニ寄生シ榮養ヲ他ノ植物ニ仰ク缺草綠植物ヲひすてろふぁいと（Histerophyte）ト唱フ蓋シ近來ノ新名稱ト云フベキ歟

（以上三件不如長生報）

○冬木常盤木の事

俗にいふ樹木冬に至て落葉せざるを冬木といへるは謬なり藝種の者冬落葉せさるを誤り呼て冬木とする故に皆人誤り傳へり冬木とはすへて冬葉のおつるものをいふなり冬も葉のおちさるものは常盤木なり貝原翁の大和本草にも上の事を辨せり今こゝに萬葉集の歌を引て證とす吾屋前之冬木乃上爾零雪乎梅花香常打見都流香裳右巨勢朝宿奈麻呂雪歌今日零之雪爾競而我屋前之冬木梅者花開二家里右大辨伴宿稱家持雪梅歌上の二首ともに巻の八に出す橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉樹左大臣葛城王等賜姓橘氏之時御制歌上の一首巻の六に出す

（新井白石著骨董雜談）

○バクテリアノ說

K. D. 山人纂譯

ニシテ之ヲリーコサイットト稱シ普通ノ場合ニ在リテハ赤血細胞ト共ニ血管中ヲ循環シ或ハ血管ヨリ出テヽ更ニ組織間ニ於ケル狹小ナル空隙ノ周圍ヲ通行スルモノナリ而シテ此等場合ニ於テ果シテ如何ナル作用ヲナスモノナルヤ未タ確知スルコト能ハズト雖モ是等ノ細胞カ身体ノ或ル部分ヲ淸淨ニスベキ作用ヲ有スルモノナルコトハ全ク道理ナキコトニアラズ即チ組織間ニ於テ不用ナル物質アル時ハ恰モアメバノ如ク之ヲ取リテ消化シ若クハ体中ニ於テ不用ナル物質ヲ齊整スル場處ニ運搬スルトイヘリシコト是レナリ

故ニモシ身体ニ切創ノ如キ損傷アランカ白血細胞ノ位置作用ハ全ク變化スベシ斯ル場合ニ在リテハ多數又ハ少數ノ白血細胞ハ速カニ血管ヨリ出テ來リテ創口ニ集合シ暫時ニシテ創口ニ於ケル細胞ト共ニ其形狀ト性質トヲ變ジ其邊（ホトリ）ニアル血管ノ助ヲ得テ新組織ヲ成ス而シテ此新組織ハ損傷セラレタル組織ニ代リ以テ永ク創口ヲ結合ス時トシテ白血細胞ハ必要以外ノ多量ヲ以テ創口ニ集ルカ故ニ其不用ナル分量ハ放出セラル所謂膿（パス）是ナリ

抑徽菌カ身体ノ組織中ニ入ルヤ其生育ヲ始ルニ方リテプトメーント稱スル毒物ノ少量ヲ發出シ以テ組織ヲ害スル作用ヲナスモノナリ而シテ是時白血細胞ハ猶ホソノ創口ニ集ルカ如ク亦直ニ其毒物ニ來リ集ルカ故ニモシ徽菌ガ此處ニ於テイヨ々々發育シ增加スルニ至レバ白血細胞ハイヨ々々集リ來リテ竟ニ死スルニ至ル是ニ於テ組織ハ破レテ潰裂ヲ生ズサレバ又時トシテ徽菌ハ血中ニ混ジ身体ノ各部ニ連搬セラレ其止宿スル各處ニ潰裂ヲ生シ遂ニ畏ルベキ破傷風トナルモノナリ

是等ノ場合ニ在リテ白血細胞ハ實際如何ナルコトヲ成スヤ未タ確定セラレザレトモ多クノ學者ノ信ズル所ニ

由レバ黴菌ノ組織中ニ入リテ成育スルニ當リ白血細胞ノ其場處ニ來ルハ正ニ黴菌ト細胞ト生死ノ爭端ヲ開カンガ爲メニシテ細胞ハ直ニ黴菌ヲ呑ミテ之ヲ消化シ滅殺シ若シクハ其周圍ニ集リテ酸素ト食物ノ供給ヲ遮リ止メテ之ヲ失ハシメント試ミ黴菌ハ其成育シ蕃殖スル間白血細胞ヲ殺シ且其四邊ノ組織ヲ破損スベキ毒物ヲ出スナリト

サレド右ニ述ベタル說ヨリモ尚ホ實際ニ於テヤヽ信スベキ一說アリ黴菌ノ体中ニ侵入スル時ニ抵抗スル力ヲ有スルモノハ多ク白血細胞ナリ是等ノ細胞ハ唯單純ナル細胞作用ヲ行ヒテ以テ攻擊隊タル黴菌ニ對シテ細胞ノ爲ニ宜シキヲ得タランニハ盡ク黴菌ヲ攻メ亡シテ以テ身躰ノ危難ヲ避クルヲ得ベシ叉モシ之ニ反シテ細胞ガ黴菌ヨリ發出スル毒物ニ抵抗スルノ力十分ナラサレバ止ヲ得ズ黴菌ノ力ニ服セサルヲ得ズ而シテ竟ニ其毒害ヲ逞ウスルノ道ヲ開クモノナリ

時トシテ黴菌ハ身体ノ一部ニ廣ガリテ生育シ而シテ其毒物ノ溶解セラレタルモノ甚ダ多ク存在スルガ故ニ黴菌ハ其物廣ク分布セラルヽコトナキモ毒物ハ血管中ニ進入シテ身体中ノ各部分ニ甚シテ害ヲ生ジ或ハ之ガ爲メニ死ニ至ルコトアリ

然（サ）レハ黴菌ハソノ毀傷セラレザル身体ノ表面ニ在リテハ縱令之ニ附着スルモ敢ヘテ害ヲ釀スコトナケレドモスデニ毀損セラレタル組織中ニ入ルカ若シクハ已ニ病ノ場處トナリシ呼吸機消化機等ノ表面ニ止マル時ハ忽チ害ヲ生ズルモノナリ

以上說ク所ハ黴菌カ普通組織上ニ害ヲ釀シテ創痍ノ快癒ヲ混亂シ輕重ニ拘ハラズ多少ノ破傷風ヲ生スル一斑ヲ示シタルモノナリ而シテ膿ハ其分量ノ多少ニ拘ハラズ以上述ベタル如キ狀況場合ニ於テ發生セラルヽカ故

ニ是等ノ黴菌ヲ稱シテ釀膿黴菌トイフ其他ノ黴菌モ時ニヨリテハ同樣ナル結果ヲ生スレドモ上來述ベシ所ノ二種ノ黴菌ノ如キハ最モ普通ニシテ且ツ主要ナルモノナリ

是等二種ノ黴菌若シクハ他ノ有毒ナル黴菌ガ人体ニ及ボセル惡果ハソノ場合狀況ノ種々異ナレルニ因リテ著シキ差違アリ時ニヨリテハ身体一般ニ於ケル狀況ハ恰モ黴菌ノ蕃殖ニ適シタル良地ヲ供スルニヤト思ハルヽコトアリ或ハ黴菌ノ動作ニ對シテ殊ニ損傷ヲ受ケ易キ場合ヲ生スルコトアリ時トシテハ体中ニ入リタル一種ノ黴菌ガ甚シク害毒ヲ恣ニスルコトアリ是レ果シテ其固有ノ力ヨリ生スルモノナルカ或ハ他ノ狀況ニ由レルモノナルカハ未タ知ルコトヲ得サレドモ吾人ハ渾テ是等ノ病ヲ見テ以テ黴菌ガ人体ニ及ボセル荼毒トナスモノアリ然レドモ其毒タルヤ其初ニ當リテハ最少最微ニシテ想像スルコト能ハサルホドナルカ漸次ニ生育滋蔓シ終ニ全ク人体ヲ亡滅セシムルニ至ル豈ニ懼レテモ倘ホ畏レサルベケンヤ

第七章　肺病ヲ發生スル黴菌

人類死亡者ノ七分一以上ハ大抵勞症（コンサムプシヨン）即チ肺病（タベークユセジス）ニ因レリ而シテ此疾病ノ原因ニ就キ判然之ヲ知リ得タルハ僅カニ十年以內ニ屬ス抑醫師ガ積年間此病ニ就キ驗知セシ所頗ル多ク隨テ其發病ノ前兆ヲモ預知シ又其病勢ノ如何ニ進ミ何レニ移リ行クヤモ知リシホド既ニ經驗ヲ重ネタリ而ルニ一般ニ此病ヲ不治ノ症トナシ之ニ藥ヲ與フルハ則チ全治ノ望アルニ非ズシテ唯病者ノ心ヲ安ンゼシムルニ過キサリシナリ然ルニ今日ニ至リテハ此病ニ關スル事業一變シ肺病ハ唯体中ニ入リ來レル極メテ微小ナル管狀ノ黴菌ニ起因スルモノナルコトヲ知ルヲ得タリ而シテモシ渾テノ狀況ニシテ黴菌ニ適シタランニハ直ニ成育シテ其四近ニ新組織ノ小塊ヲ造出ス之ヲ名ケテ結核トイフ而シテ此病ノ起レル場所ハ通例肺部ニ在レドモ身体ノ他ノ部分ニモマタ發生スル

コトアリ

今此病ノ發達ヲ詳細ニ述フルハ固ト本書ノ目的ニ非サルガ故ニ唯如何ニシテ此病カ發生セラルヽヤヲ知ルヲ以テ足レリトスベシ

誰彼ノ區別ナク此疾ニ侵サルヽモノニ非ズ固ヨリ之ヲ生ズルニ適シタル細胞ノ狀況ニ因レルコト勿論ニシテ多クハ遺傳ニ因リテ其病性ヲ固有スルモノナリ然レドモ其固有ノ病性ハ果シテ何ニヨリテ成立ツヤノ疑問ニ至リテハ尙未ク之ヲ釋解スルコト能ハズ吾人ハ唯結核黴菌ガ健康体ニ入ル時其止マレル部分ニ於ケル細胞ハ倏チ其成育ヲ妨ケラレ若シクハ其發達ニ對シテ不利ナル狀號ヲ呈スルモノナリト信ズルニ止マルナリ更ニ此想像ヲ根據トシテ考フル時ハ肺病ヲ受クルニ適シタル身体ニ在リテハ必ス黴菌ノ侵入ニ對シテ細胞ノ固有セル抵抗力ガ何等カノ方法ニ因リテ滅セラレタルモノナリト思ハルヽナリ而シテ此說タル固ヨリ確然敢テ動カス可カラストイフニハ非レトモ現在吾人ノ知リ得タル中ニ在リテハ最モ信スヘキ說ナリトスソハ兎ニ角肺病ハ黴菌ノ外決シテ他物ニ因リテ生セラルヽモノニ非ズ遺傳或ハ他ノ原因ニヨリテ此病性ヲ固有スル人ニ在リテモ黴菌ガ外部ヨリ其体中ニ入リ來ルニ非レバ必ス此病ヲ生セサルモノナリ而シテ萬一之レアリト假定スルモ黴菌ガ遺傳ニヨリテ直ニ生セラルヽコトハ至テ稀ニシテ殆ント皆無トイフモ可ナリサレバ此黴菌ニシテ人体中ニ入レサルニ於テハタトヒ遺傳ニヨリテ其病性ヲ有スルトモ發シテ病トナルコト決シテ之レアラサルナリ

サテ是ヨリ結核黴菌カ病ヲ惹起スル原因ニ就キ今日マテ吾人ノ知リ得タルコトヲ述フベシ併シ之ヲ先チ讀者ニ一言スヘキ事アリソハ肺病ノ勢未タ微ナル時ニ當リテハ多クハ其進步變遷ヲ知ルコト能ハサルモノニシテ

或人ニアリテハ其身体ニ敢テ些ノ變動ヲ呈セザル内ニ早ク已ニ肺病ニ罹ルモノアリ而シテ黴菌ハ人口稠密ナル土地ニハ其數ニ多少ノ差コソアレ必ズヤ廣ク散亂スルガ故ニ何如ナル特殊ノ場合ニ在リテモ其病ヲ發スルノ原因如何ハ普通一般ニ解スベカラザルモノタルコトヲ記憶セラレンコト是ナリ

（未完）

○遊離窒素ヲ同化スル植物ニ就テ

フランク氏ハ遊離窒素ヲ同化スル植物ニ就テ再説シテ曰ク(一)荳科植物ハ根瘤菌共生セザルモ尚能ク遊離窒素ヲ同化ス(二)荳科植物ノ共生菌ハ之ヲ寄主ヨリ採移シテ別ニ培養スルニ當リ窒素ヲ含有スル有機化合物ヲ給與セバ盛ニ成育ス然レ𪜈單純ナル窒素ヲ供給スルトキハ生育甚微々タリ(三)荳科植物ニ於テ其根瘤菌ノミノ聚收セシ窒素化合物ノ全量ハ以テ充分發育セシ該植物ハ勿論更ニ窒素ノ存在セザル土壤中ニ培養シタル者ニ在テモ其種子及ビ他諸機關ノ含蓄セル量ヲ補フニ足ラザルナリ(四)荳科植物ニ非サルモノモ亦能ク遊離窒素ヲ同化ス其一ヲ菌類トシ其二ヲ或ル水藻（殊ニ Oscillatoria, Nostoc, Ulothrix.）トシ其三ヲ或ル土馬騣トシ其四ヲ或ル顯花植物即チからすむぎ。そば。Spergula arvensis, Brassica Napus。しろがらし。じやがたらいも。Acer platanoid. トス(六)肥料トシテノ硝酸鹽類ノ價値ハ植物ノ幼穉時代ニ於テ未タ遊離窒素ヲ同化スル力ノ甚タ微弱ナル時ニ在リ

又 A. Petermann 氏ノ説ニ由レハ氏ハ寧ロ Hellriegel, Wilfarth, Schlœsing 及ビ Laurent 氏等ノ説ヲ確實ナラシメテ云ク遊離窒素ヲ吸收スル力ハ荳科植物ノミニ限リ他科植物ニハ其能力ナシト云フ

T. Schlœsing 及ビ E. Laurent 氏ハ荳科外ノ顯花植物ニハ遊離窒素ヲ聚收スル力ナシ然レ𪜈下等ノ藻類ニシテ通常地面上ニ存在スルモノ即チ Nostoc, Phormidium, Cylindrospermum 等ノ如キニ在リテハ其能力ヲ具

ス但シ此場合ニアリテハ藻類ト「バクテリア」トノ共生ノ關係ニ由ルナラント云フ

Prove 氏云ク根瘤菌ハ遺傳ニ由リテ之ヲ生スルモノアリ或ハ然ラザル者モアリ

○二三植物ノ枝條ノ北向　大、三、

藤井健次郎報

上リ列車ニテ東海道沼津停車場ヲ出テヽ數分時ナル所列車ノ右側ノ窓ヨリ人家ノ垣根ノ内ニまきノ木數本アルヲ見ル其樹ノ高サ三四間其枝概北向ナリ

佐野停車場ヨリ沼津ノ間柿木ノ枝著ク北向スルモノ多シ柿ノ木ノ枝ノ如キ不規則ナル枝ニシテ北向トイハヾ奇異ナルガ如クナレ𪜈落葉ノ後遠クヨリ觀察スルトキハ其枝ノ傾斜著シキヲ見ルベシ

遠州御前崎ノ燈臺ヲ去ルヿ數丁ニシテ大竹屋ト云フ旅宿アリ此旅宿ヲ去ル二町斗ノ所ニ一公孫樹アリ（生存年間二百年以上ノ木カ）其枝ノ方向ハ確實ナル調査ヲ爲シ得ザレ𪜈一段ノ公孫樹ニ於ケルト大ニ其趣ヲ異ニセルガ如シ

沼津ノ海岸離宮ノアル所一面松林アリ此松林ノ松樹ノ幹ハ悉ク北ヘ傾ケリ然レ𪜈此北向ノ主ナルモノハ細少ナル枝條ニアラズシテ全幹斜ナルナリ去レバ此北向ハ公孫樹ニ於ケル如キ枝條ノ生長ニ伴ナフ現象ニアラズシテ海ヨリ吹來ル南風ノ爲メニ機械的ニ押シ仆サルヽモノナリ海濱ニハ往々此ノ如キ現象アリ鎌倉海岸ノ旅宿三橋ノ左リ數丁ナル所松林アリ此ニ於テモ沼津牛伏ニ於ケルト共樣ノ觀ヲ呈ス

東京植物學會錄事

明治廿七年五月廿六日午後二時ヨリ植物學講義室ニ於テ月次例會ヲ開キ會員藤井健次郎君ハ

本邦ノ曲尺ヲ利用シテ樹木ノ高サヲ測ル簡便法

志州及ビ遠州地方ニ於テ採集セラレタル海藻

右二題ニ就テ懇切ニ演說セラレタリ次テ其標品幷ニ會員諸君ノ出品ニ係ル顯微鏡的標品、書籍、腊葉、寄贈書籍等ヲ會員ノ閱覽ニ供シタリ當日出席ノ會員二十名ニ達シ午後五時ヲ過キテ散會ス

當日出品ノ顯微鏡的標品ハ Lithothamnion.（大久保氏出品）、にはやなぎノ莖ノ點紋導管、（離散液ニテ解体ス）（松平氏出品）、とべらノ葉（「ミクロトーム」ニテ截斷、「アルコホル」ニテ固定、「グラム」氏ノ法ニテ染メ且ツ「エオシン」ニテ染ム）（池野氏出品） Cladophora.（多核細胞）（「クローム」酸ニテ固定、「ヘマトキシリン」ニテ染色）（池野氏出品）、Vaucheria sessilia. ノ遊走子（安井氏出品）腊葉ハ防已科、小蘗科

寄贈書目

地質學雜誌　第一卷第八號　東京地質會○動物學雜誌　第六十七號　動物學會○軍醫學會雜誌（第六十八號第六十九號）陸軍軍醫學會○東京醫學會雜誌第八卷（第九號第十號）東京醫學會○牧畜雜誌（第百二十八號第百二十九號）牧畜雜誌社○家禽雜誌　第四十六號　東京家禽雜誌社○釀造雜誌（第百四十八號第百四十九號）釀造雜誌社○大日本山林會報　第百三十七號　大日本山林會事務所○水產雜誌（第九號第十號）北水協會事務所○農科大學學術報告　第二卷第一號　農科大學○地學雜誌　第六十五卷　東京地學協會○東洋學藝雜誌　第百五拾貳號　東洋學藝雜社○國家醫學會雜誌　第八十五號　國家醫學會○日本蠶業雜誌　第七十貳號　日本蠶業雜誌社○日本園藝會雜誌　第五十四號　日本園藝會○大日本農會報　第百五拾貳號　大日本農會事務所○日本藥業新誌　第貳百五十六號　衛生社

The Gardeners Chronicle. No. 379—383.—Vol. XV.

The Journal of Botany British and Foreign. No. 376. Vol. XXXII.

Boletin da Sociedade Broteriana. XI.

植物學雜誌現在部號（明治廿七年五月末日調） 第五、九ヨリ十一、十三、十四、十六、卅、卅二ヨリ四十九、五十二ヨリ五十八、六十、六十二ヨリ八十七號迄

廣告

今回獨國現代ノ植物學大家「ペッフハー」氏ノ寫眞幷ニ米國植物學ノ泰斗故「アサーグレー」氏晩年ノ寫眞ヲ得之ヲ複寫シタルニ付先ニ複寫シタル八名家ノ寫眞ヲ合セテ左表ノ代價ヲ以テ廣ク同好ノ諸士ニ頒タントス御所望ノ向ハ至急御申込アレ

「ペッフハー」氏幷ニ「アサーグレー」氏ノ分各金九錢

「ダーウヰン」「ネゲリー」、「ピッツアー」「シエンク」「シーボルド」「ドパリー」氏ノ分各金六錢○以上十枚一組ニテハ金六十錢○外ニ壹枚ヨリ十枚迄郵税貳錢ヲ要ス○爲換ハ駒込郵便局○代價ハ前金ニ限ル

明治廿七年六月

東京本郷區駒込東片町

野村彦太郎

東洋學藝雜誌

第百五十二號

明治廿七年五月廿五日發兌石版圖入

●論説○文字と敎育の關係（承前）井上哲次郎○ポーランド亡滅の話箕作元八○アイノの話小金井良精○餘震ニ就キテ大森房吉○化學歷史上醫學ノ關係三宅秀●雜録○將門兵亂記（承前）三浦周行●雜報○島か湖か○帝國大學紀要理科○人名醫語字典○圓錐曲線論敎科書○新刊初等三角法敎科書○長岡理學博士○消毒の効能○印度の敎育○郵便局及鐵道局に於ける婦女○ハーバード大學の天象臺○枸櫞酸製造法の一大發明○レモン油○液狀鹽素等●批評○矢津昌永氏の朝鮮西伯利紀行●應問○數學書中誤謬の件DK●定價十錢

發行所 東京神田區裏神保町 **東洋學藝社**

動物學雜誌

第六十八號

明治廿七年六月十五日發行一册金十錢

郵税金一錢○六册前金六十六錢

目次

○小笠原島動物界（前篇）弘田貞守君稿○イスのアプラムシの話名和靖君○本邦ニ産スルあはび類ノ貝岸上鎌吉君○甲殼類の大さ（續き）丘淺次郎君○わくちにや保存法に就き大森千藏君

雜錄

●動物學研究用藥劑便覽（前號ノ續）●膃肭獸及膃虎（承前）●季氏日本及朝鮮產鱗翅類（承前）●偕老同穴●さんせうのうを●わみながくらげ●蕊●所謂正覺坊●敢テ石川博士ニ望ム●東京動物學會

發賣所 東京神田區裏神保町一 **敬業社**

◉夏期講習用書籍發賣廣告◉

理化之部

レムセン氏原著　理學博士久原躬弦　理學士織田顯次郎　合譯

◉改正增補 小化學書　全二册

上卷（七版）定價七拾五錢郵稅金八錢
下卷（五版）定價七拾五錢郵稅金八錢

理學士宮崎道正君著

◉中等教育 無機化學教科書

全一册定價金六十錢郵稅金八錢

敬業社編輯所編纂

◉中等教育 有機化學教科書

全一册定價金六拾錢郵稅金八錢

英國ファールオ氏原著　敬業社譯補

◉布氏小化學書　全一册

定價金七拾五錢郵稅金六錢（訂正三版）

農學士菊池熊太郎君編

◉訂正增補 物理學教科書

上卷（八版）定價金七拾五錢郵稅金八錢
下卷（六版）定價金六拾錢郵稅金六錢（訂正十版）

敬業社編纂

◉小物理學　全一册定價三拾五錢郵稅金四錢（訂正三版）

同社編纂

◉理化示教　全一册定價三拾五錢郵稅金四錢

數學之部

理學博士寺尾壽君編纂

◉中等教育 算術教科書　上製（全二册）並製（全三册）

（上製）上卷（訂正廿一版）定價金壹圓二拾五錢郵稅金八錢
下卷（訂正十四版）定價金壹圓郵稅金六錢
（並製）一卷（八版）定價五拾錢
二卷（七版）定價金五拾錢
三卷（五版）定價金四拾錢郵稅金各四錢

理學博士菊池大麓君閲　理學士高橋豐夫君編

◉幾何學初步　全三册

上卷定價三拾錢郵稅四錢（四版）中卷定價三拾錢郵稅四錢（三版）下卷定價二拾錢郵稅二錢（再版）

博物學之部

理學博士飯島魁君編

◉中等教育 動物學教科書　全二册

一卷（十版）定價金六拾錢郵稅金六錢
二卷（九版）定價金七拾五錢郵稅六錢

理學博士松村任三君閲　理學士三好學君編

◉中等教育 植物學教科書　全二册

上卷（九版）定價金壹圓郵稅金八錢
下卷（六版）定價金壹圓郵稅金八錢

故理學博士菊池安君編

◉中等教育 鑛物學教科書　全二册

上卷發兌定價金七拾五錢郵稅金八錢紙數三百四十二ページ木板數百個挿入（下卷印刷中）

其他東京大阪以下各地方書林ニ於テ販賣セリ

發兌書肆
東京市神田區裏神保町一
電話番號（二百五十八番）
敬業社

年中無休刊

小日本

日本』は記事の精確を以て鳴り議い公平を以て鳴り小說の優美を以鳴り繪畫の奇警を以て鳴り俳諧發句の高雅を以て鳴り冊子附錄の斬新を以て鳴る今や天下多事報道殊に迅速を要するの時に際し每月曜日に休刊するは實に讀者諸君に負く所多し依て『小日本』は大に業務を擴張して本月十五日以後**年中無休刊**と爲し益〻日刊新聞たるの實を盡さんとす大方の君子請ふ愛讀を給へ

◉改正定價（一ケ月前金三十錢 地方郵稅共四十錢）

小日本新聞社
東京神田淡路町一丁目一番地

明治廿七年六月十五日發兌 **第壹卷第九號**

地質學雜誌

一册金拾錢郵稅金壹錢◉六册前金五拾五錢

目次

卷首圖第十三版◉樺太島地圖◉論說及報文◉濃尾震災概報（圖入）理學士大森房吉君◉函根火山研究錄石井八萬次郎君◉明治二十七年三月阿蘇山の噴出に就て（圖入）山崎直方君◉雜錄◉ダサツン氏の地震の一年周期及半年周期論岩崎重三君◉（樺太）島に就て（第十三版參照）清水賓隆君◉金屬及其鑛物山田邦彥君◉菫青石を有する噴出岩に就て小川琢治君◉鐵の成因千野營次君◉質問及應答◉チルド鐵鑄造法菅谷熊一郎君◉雜報◉梅花石◉所謂奇石◉地球の平均密度◉一火山岩◉石神山の岩石に就て◉信州米子の瀑布◉肥後產出藍鐵鑛◉信州松代皆神山◉容羅母鐵鑛◉黃玉の物理學的性質と化學的性質◉ニッケルを含有せる黃鐵鑛◉サルフォボライト◉「コンヅロダイト」「ヒユマイト」「クリノヒユマイト」三鑛物の化學成分◉旅中見聞瑣談◉三浦技師西山技手追悼會◉東京地質學會第十月次會

發賣所 東京神田裏神保町 **敬業社**

新刊廣告

理科大學敎授博士松村任三先生著

日光山植物目錄　全一冊

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校ノ敎員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田裏神保町　敬業社
東京日本橋通三丁目　丸善書店

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候

○本誌每月一回發兌一冊金拾貳錢○六冊前金七拾貳錢

○拾二冊前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セス○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セス○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御届可申候

明治廿七年六月十九日印刷
明治廿七年六月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷者　熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所　熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

發行所　植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京日本橋區通三丁目

明治廿一年二月三日内務省許可

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] June 20, 1894. [No. 88.

CONTENTS.

Number and Size of Stomates in Various Leaves. **By S. Ikeno.** 231
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. **By K. Sawada.** 235
Cassia occidentalis, L. **By Prof. Dr. J. Shimoyama.** 239
Plants collected in Kyūshū. **By M. Shirai.** 240
Studies on the Buckwheat **By T. Ichimura.** 245
Conspectus of Chrysosplenium. **By E. Tekubuchi.** 251
Disturbution of Plants and Snow areas on Mt. Fuji. **By K. Fujii.** . . . 256
Miscellaneous:— 259

Number of Plants.—Ringworm.—Bulbils of Dioscoreaceæ.—Drosera peltata, sm var. lunata, Clark.—Diatoms on Porphyra and Enteromorpha.—Holophte and Histerophyte.—Meaning of the Terms "Fuyuki" and "Tokiwagi."—Bacteria.—Assimilation of Free Nitrogen by Plants.—Northward inclination of Branches of some Plants.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

植物學雜誌第八卷第八十九號（明治二十七年七月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII　July 20, 1894.　NO. 89.]

二三植物ノ化學的實驗（第八十七號ノ續キ）

醫科大學教授 ドクトル 下山順一郎口演
澤田駒次郎筆記

化學的撿査

草烏頭ト白川附子ノ二種ハ前條解剖學的撿査ニ由テ始メテ同種植物ニ基原スルコトヲ詳ニスルヲ得タリ草烏頭ノ化學的性質ニ關シテハ已ニランガールト(Langgard)氏ノ實驗アリ次テ英人ライト(Wright)氏其ノ他ポール(Paul)及ヒキングツェット(Kingzett)ノ兩氏之レヲ實驗ニ徵シライト氏ハ草烏頭ヨリ製出セル亞爾嘉魯乙度ヲ「ヤプアコニチン」japaconitinト名ケ其ノ化學的集成ヲ標示スルニ$C_{66}H_{88}N_2O_{21}$ナル記號ヲ以テシポール及ビキングツェットノ兩氏ハ其集成ヲ$C_{29}H_{45}NO_9$トナセリ今此二種ノ記號中何レカ正當ナルヤヲ明ニセンガ爲メ左ノ方法ニ由リ草烏頭ヨリ「ヤプアコニチン」ヲ製出シ其白金複鹽ニ就キ白金ノ量ヲ測定シタリ

草烏頭ヲ取リ細切シ八十「ペルセント」ノ酒精ヲ注加シ酒石酸ヲ添加シ數日間放置シテ冷浸シ更ニ一回此技倆ヲ反復シ前後ノ兩度ニ得タル酒精液ヲ可及的低度ノ温ニ於テ蒸餾シテ酒精分ヲ除去シ茲ニ殘留セル水溶液ヲ稀釋スルノ後脂肪、樹脂等ヲ濾過シ依的兒ヲ以テ振盪シ可成的汚物ヲ除去シ安母尼亞水ヲ以テ其酸性水溶

液分チ亞爾加里性トナシ更ニ反復依的兒チ注加シテ振盪シ其依的兒チ蒸餾シテ得タル亞爾加魯乙度チ反復依的兒ニ溶解結晶セシメテ精製セリ是ノ如クシテ得タル「ヤプアコニチン」ハ無色ノ結晶チ爲シ其熔點チ撿セシニ百八十五度乃至百八十六度ノ溫ニ於テ溶化セリ是レ「ヤプアコニチン」ニ固有スル熔點トス（Husemann und Hilger, Pflanzenstoffe, 2te Auflage〔ヤプアコニチン〕ノ條チ見ヨ）次ニ之ヨリ白金複鹽チ製出シ硫酸上ニ於テ充分ニ乾燥シタル後紅熾セシニ左ノ成績チ得タリ

第一回ニ於テハ其 0,2146 瓦ヨリ白金 0,02775 瓦チ得タリ之チ百分算ニ變ズレバ 12,93 トナル

第二回ニ於テハ其 0,1141 瓦ヨリ白金 0,014 瓦チ得タリ之チ百分算ニ變ズレバ 12,88 トナル

此第二回ノ撿査ニ於テ得タル百分算白金ノ量チ平均スレバ 12,90 トナル今 $(C_{29}H_{45}O_9.HCl)_2$ Pt Cl$)_2$ Pt Cl_4 ニ當該スル百分算白金ノ量チ算出スルトキハ 13,06 チ得ル故ニ前條ノ成績ニ因レバ「ヤプアコニチン」ノ集成ハ $C_{29}H_{45}NO_9$ ナル記號ニ適應シポール及ヒキングツェット兩氏ノ記號果シテ其當チ得タルモノトス

草烏頭及ヒ白川附子ハ同種ノ植物ニ基原スルガ故ニ白川附子モ亦「ヤプアコニチン」チ含有スルヤ自ラ明瞭ニシテ之ガ化學的撿査チ行フハ敢テ無用ニ屬スルガ如シト雖モ之チ確證センガ爲メ上文ニ掲クル方法ニ因リ白川附子ヨリ亞爾加魯乙度チ製出シ之ガ熔點チ撿セシニ全ク「ヤプアコニチン」ト同等ノ溫ニ於テ熔融シ又白金複鹽ニ就キ白金ノ量チ測定セシニ二回ノ撿査ニ於テ

平均數　一三。〇八八「ペルセント」

チ得タリ是レ此數ハ上文「ヤプアコニチン」白金複鹽ヨリ得タル計算數 13,06% ニ的中スルチ以テ白川附子ノ亞爾嘉魯乙度モ亦「ヤプアコニチン」ニ外ナラザルヤ愈〻明瞭トナレリ

草烏頭ハ稚根ニシテ白川附子ハ老根ナルヲ以テ其亞爾嘉魯乙度ノ含量ニ關シテハ自ラ著キ不同ナキヲ得ス況ヤ白川附子ハ之レヲ鹽水ニ浸シ其有効成分ノ一部分ヲ浸出調製スルニ於テヲヤ抑モ球根類ハ植物生理學上ヨリ論スルトキハ所謂豫備營養物貯蓄器ニ屬シ夥シク澱粉、脂肪、蛋白質等ノ如キ豫備ノ營養物トナル可キ物質ヲ蓄藏シ植物發育期ニ際シ幼稚ナル植物ヲ營養スルノ糧トナスモノナリ而メ白川附子ハ老根ニ屬シ上記ノ目的ニ對シ已ニ其任ヲ全フシ營養物ヲ消費シ將ニ腐朽ニ歸セントスルノ期ニ臨メルヲ以テ亞爾嘉魯乙度ヲ含有スルモ其量甚ダ些少ナルベキヤ理ノ正ニ觀易キモノナリ今此二種球根中ニ含有スル「ヤプアコニチン」ノ量ヲ比較センガ爲メ先ツ草烏頭ヲ細粉シ每回其十瓦ヲ秤取シ之ニ煆製麻偶涅矢亞四瓦ヲ加ヘ且水ヲ注キ混攪シテ糜粥狀トナシ重湯煎上ニ乾燥スルノ後還流冷却管ヲ裝シ依的兒ヲ以テ三時間浸出シ其依的兒浸出液ヲ餾取シテ得タル殘渣ニ酒石酸含有ノ水ヲ注和シ濾過シテ汚物ヲ去リ其水液分ニ再ヒ煆製麻偶涅矢亞四瓦ヲ加ヘ蒸發シテ乾涸シ無水依的兒ヲ以テ復タ二時間浸出シ其依的兒浸出液ヲ自發ノ蒸發ニ放任シ百度ノ温ヲ以テ充分ニ乾燥シ茲ニ得タル殘渣即チ亞爾嘉魯乙度分ヲ秤量セシニ其三回定量成積ノ平均數左ノ如シ

〇。三二〇〇「ペルセント」

次ニ右ノ定量法ニ因リ又白川附子ノ亞爾嘉魯乙度含量ヲ三回撿定セシニ其平均含量トシテ左ノ成績ヲ得タリ

〇。〇〇六八「ペルセント」

故ニ草烏頭中ノ亞爾嘉魯乙度ノ含量ハ白川附子ニ比シ四十七倍ノ多キニ居ル是ヲ以テ已ニ要處ニ於テ再三痛論セシ如ク草烏頭ト白川附子トハ斯ノ如ク其極メテ危險ナル有効成分ノ含量ニ最モ顯著ナル不同ヲ現ハスヲ以テ決シテ處方上ノ混用ヲ許ス可カラサルモノトス

（完結）

○日本羊齒科屬徵（承第八十六號）

牧野富太郎

（十三）あついた族　Acrosticheæ.

囊堆ハ葉ノ裏面ニ平布シテ一面ノ層ヲ成シ或ハ間〻其表裏兩面ニ平布スルモノアリテ獨ニ脈上ニ限テ之ヲ生ズルノミニ非ザルナリ

(32)　あついた屬　Acrostichum L.

囊堆ハ葉或ハ梢部羽片ノ全裏面ニ廣布シ偶マ其表裏兩面ニ平布スルモノアリ

第三　ぜんまい亞科　OSMUNDACEAE.

子囊ハ兩片ヲ具ヘ平互セル短環ヲ其頂端ニ有シテ横開ス葉襞ハ拳曲式ナリ

(33)　ぜんまい屬　Osmunda L.

囊堆ハ全ク葉狀部ト分立シテ群朶相密集セル穗狀ヲ成ス

第四　ふさしだ亞科　SCHIZÆACEÆ.

子囊ハ兩片ヲ具ヘ完全ナル蓋狀ノ彈環ヲ戴キ囊ノ一側裂ケ下ル葉襞ハ拳曲式ナリ

(34)　ふさしだ屬　Schizæa Sm.

子囊ハ無柄ニシテ二行ヨリ四行ヲ成シ兩々密列セル穗側ノ上ニ排列シ其穗ハ葉ノ頂端ニ位シ分裂シタル有性部ヲ成セリ

(35)　つるしのぶ屬　Lygodium Sw.

子囊ハ獨生（或ハ偶マ對生）シ覆瓦樣ニ相擁シタル大苞ノ腋中ニ在リ而シテ其苞膜ハ相並ンデ小穗ヲナシ葉

ト分立シテ別ニ羽狀ヲ成スアリ或ハ葉ノ羽片ノ邊側ニ沿フテ疎列ヲナスアリ

第五　りうびんたい亞科　MARATTIACEAE.

子嚢ハ其一側ニ沿フテ裂下シ或ハ嚢頂ノ一孔ニ由テ開裂ス而シテ彈環無ク數嚢多クハ一處ニ節合シテ聚成團ヲ成セリ葉發ハ拳曲式ナリ

(36)　りうびんたい屬　Angiopteris Hoffm.

子嚢ハ側方ノ裂縫ニ由テ開裂シ無柄ニシテ個々甚ダ密ニ相接シ葉緣ニ近キ處ニ於テ線狀長楕圓形或ハ舟形ノ嚢堆ヲ成形ス然レモ各嚢互ニ癒着スルヿナシ

第六　はなやすり亞科　OPHIOGLOSSACEÆ.

子嚢ハ深裂セル二片ヲ具ヘ其裂痕殆ンド嚢底ニ迨ブ而メ彈環ヲ具ヘズ葉發ハ直生式ナリ

(37)　はなやすり屬　Ophioglossum L.

子嚢ニ柄ナク二行ニ密列シテ狹穗ヲ成セリ

(38)　はなわらび屬　Botrychium Sw.

子嚢ニ柄ナク小穗面ニ二列シ此小穗相集テ重複セル圓錐狀ヲ成ス

（完）

日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

成分　茴香ハ揮發油五乃至七「ペルセント」ヲ有ス其他砂糖等ヲ傍有ス本果實ノ佳快ノ香氣ヲ有スルハ此揮發油ニ基因ス生藥學ニ云茴香油ノ成分ハ略ボ過泥子油ニ均シト雖モ其「アチトール」ノ含量遙ニ少シ」トア

り

第二　茴香油　Olium Foeniculi.

茴香油ハ本植物ノ果實ヨリ水ヲ和シ蒸餾シテ得タル揮發油ニシテ日本藥局方ニハ藥用ニ供ス

製造法　茴香ノ子實ハ搗碎シ水ヲ以テ之ヲ蒸餾スルトキハ其種類ノ異ナルニ從ヒ三・五乃至四「ペルセント」ノ揮發油ヲ生ス明治十九年東京試驗所藥草試植園ニ於テ栽培ノ三田育種場ヨリ購求セシ種類ハ四・二「ペルセント」獨逸國ヨリ購求セシ種類ハ四・四「ペルセント」ノ揮發油ヲ產出セリ

性狀　茴香油ハ無色澄明若クハ淡黃色ヲ帶プル稀薄中性ノ液体ニシテ芳芬タル香味ヲ有シ比重ハ〇・九六乃至〇・九七ノ間ニ位ス藥草試植園ニ於テ栽培ノ子實ヨリ得タルモノハ二十度ノ温ニ於テ比重〇・九八二五分極光線ノ平面ヲ右旋ス（長サ十「センチメートル」ノ管ヲ用ヒテ獨逸種ハ六度三田育種場種ハ六度半ナリ）熔融點ハ十三度乃至十四度寒冷ニ遇ヘバ白色ノ結晶ヲ生ジ七度ニ至リ全ク凝結ス然レドモ間マ冷度以下ニ至ルマテ凝結セザルモノアリト云フ日本藥局方注解ニ云茴香油ハ微ニ黃色ヲ帶フルモノナレトモ間ゝ無色ナルモノアリ比重ハ〇・九六ト〇・九七ノ間ニ居ル零度以下ノ温ニ於テハ無色ノ結晶（アネトールAnetholニ係ル下文ヲ見ヨ）ヲ析出スレ𪜈全ク凝固スルコト無シ（過泥子油トノ區別）一乃至二倍ノ藥用酒精ニハ澄明ニ溶解シ其一「グラム」ヲ十倍量ノ無水酒精ニ溶解セシモノハ水四立方「センチメートル」ヲ加フルニ及テ始メテ溷濁ヲ徵ス」トアリ

本品ハ依的兒、呵囉仿謨ニハ隨意ノ比例ニ於テ溶解ス

成分　茴香油ノ主成分ハ「アネトール」(Anethol) ニシテ此油ヲ强ク冷却スレハ結晶ト爲リテ析出ス其他少量ノ的列並底ヲ含有ス日本藥局方注解ニ云茴香油ハ主トシテ Anethol ($C_6H_4{<}\begin{smallmatrix}OCH_3\\C_3H_5\end{smallmatrix}$) ナル固形揮發油ヨリ

成リ少量ノ Terpen ($C_{10}H_{16}$) ヲ傍有ス

撿査法　日本藥局方注解ニ云本品ヲ購求スルニ當リテハ左ノ諸件ヲ試驗スヘシ（第一）他ノ揮發油類ノ混有ハ其氣味ニ由テ最モ確實ニ之ヲ鑑別スルヲ得ヘシ此目的ニハ本品一滴ヲ水五百「グラム」中ニ點滴シ強ク振盪シテ其氣味ヲ試ムヘシ（第二）茴香糠ヨリ製出セル茴香油ハ暗色ヲ帶ビ本條ノ茴香油ニ比スレバ其香氣佳良ナラズ少シク苛辣ノ味ヲ有ス（第三）酒精ヲ夾雜スルモノハ其比重上文ニ掲クル所（〇。九六）ヨリ低シ最モ簡便ニ之ヲ撿査スルニハ本品一二滴ヲ藥用安母尼亞水（比重〇。九六）中ニ滴下スヘシ純粹ノ茴香油ニ在テハ其油滴安母尼亞中ニ漂搖スレ𪜈酒精ヲ混有スル者ハ靜置スルトキハ液面ニ浮游シ來タルヘシ又酒精ヲ混有スルモノハ本品一二滴ヲ水中ニ滴下スルトキハ其油滴ノ周圍ニ乳樣ノ溷濁ヲ呈シ且其油滴ノ澄明ナラサルニ由テ略ミ酒精ノ存在ヲ判知スルヲ得ヘシ其他酒精ヲ混有スルモノハ本品ノ少量ヲ試驗管ニ注入シ白綿ニ「フクシン」（唐紅）ノ少許ヲ包ミ之ヲ以テ右ノ試驗管ヲ閉鎖シ重湯煎ニ浸シテ加熱スヘシ若シ酒精ノ存在スルトキハ揮發シテ「フクシン」ニ接觸シ之ヲ溶解セシムルニ由リ白綿ニ紅色ヲ呈スヘシ、（第四）本品ニ二倍量ノ酒精ヲ加ヘテ振盪スレバ澄明ノ混和液ヲ呈セザル可カラズ其混和液ノ澄明ナラサルモノハ他ノ揮發油、脂肪油等ヲ夾雜スト」

製劑

第三　茴香水　Aqua Foeniculi.

日本藥局方ニ據レハ其製法左ノ如シ

茴香水ハ

茴香油　二分　温蒸餾水　千分

ヲ取リ混和シ強ク振盪シ冷後濕潤セル濾紙ヲ用ヒテ濾過シ製スヘシ

第四　茴香精　Spiritus Foeniculi.

日本藥局方ニ據レハ其製法左ノ如シ

茴香精ハ

茴香油　五分　酒精　九十五分

ヲ取リ混和シテ製スヘシ

本品ハ澄明無色ノ液ニシテ比重大約〇・八四ナリ

壜中ニ容レ密栓シテ貯フヘシ

第五　安母尼亞茴香精　Spiritus Ammoniæ foeniculatus.

日本藥局方ニ據レハ其製法左ノ如シ

安母尼亞茴香精ハ

茴香油　三分

酒精　八十分

ヲ取リ

ニ溶解シ之ニ

安母尼亞水　十七分

ヲ混和シ製スヘシ

本品ハ澄明微黄色或ハ黄色ノ液ニシテ比重〇・八五ナリ

本品十立方「センチメートル」ニ定規酸液ヲ加ヘテ之ヲ中和スルニハ其酸液八・五立方「センチメートル」ヲ費サヽル可カラス是レ本品百分中大約一・七分ノ安母尼亞（NH_3）ヲ徵スルモノトス

壜中ニ容レ密栓シテ貯フヘシ

醫治効用　茴香及ヒ其製劑ハ驅風、消化ノ良藥ニシテ痞氣鬱蓄ノ諸症ニ用ヒテ効驗アリ〇粘稠液ヲ稀釋シ汗ヲ發シ小便ヲ利シ胃ヲ强壯ニシ消化ヲ助ケ乳汁ノ分泌ヲ增進ス〇調經ノ一良藥トス〇胸病疝痛ニハ通常單ニ之ヲ浸劑トシ子宮充血的閉經ニハ温浸劑トシ用フ

茴香油ハ破氣驅風ノ良藥ニシテ風氣痞滯シテ腹脹スルニ効アリ下利滯澁ヲ緩和シ閉經ヲ調フル等ノ効驗アリ〇此藥大量ニ在テハ麻痺ヲ生スルコトアリト云フ

茴香根ハ往時醫藥ニ供セシコトアリト雖モ其効驗稍々劣レルヲ以テ目下之ヲ用フル者少レナリ

茴香ハ藥用ノ他之ヲ蔔料（ヤクミ）トス又歐羅巴南部ニテハ嫩苗ヲ食用トス

栽培法

播種　明治十七年四月二日輕鬆ナル壚土ヲ耕耘シ土塊ヲ碎キテ之ヲ均ラシ畦ハ幅二尺ニ作リ人糞ヲ原肥ト爲シ種子ヲ播下シ足ニテ薄ク土ヲ其上ニ被覆ス（地積拾五歩ニ人糞半荷ヲ用フ）

耕耘及移植　五月十五日七月十八日ノ二度ニ人糞半荷宛補肥トナシ草ヲ除キテ中耕シ十一月二十日苗ヲ堀取リ假植シ置キ翌十八年三月九日之ヲ移植スルヿ地積三百歩苗數千二百株其方法ハ土地ヲ耕耘シ土塊ヲ碎キ

畦ハ幅三尺ニ作リ三尺每ニ苗壹株宛移植シ五月十三日六月七日ノ二度ニ人糞九荷宛補肥ト爲シ草ヲ除キテ中耕ス收穫　八月十日ヨリ十月九日迄ニ種子五斗五升（拾壹貫目）ヲ採收ス

以上記載セシ所ノモノハ東京衛生試驗所藥草試植園ニ於テ栽培ノ成蹟ナリ

茴香ハ一度栽植スルトキハ年々苗ヲ抽キ開花結實スルニ因リ年ニ一回肥料ヲ施スヲ以テ足トス

(以下次號)

蕎麥ノ研究一班　（承前）

市村塘

(3)我邦ノ蕎麥由來　中秋ノ候吾人試ニ筇ヲ郊外ニ曳ケバ見渡ス圃面駁斑白紗ヲ敷クノ觀ヲ呈スルモノアラン是レ疑フベクモアラズ蕎麥ノ花正ニ滿開ノ砌ニ達セルナリ何人モ此ノ光景ヲ一瞥スレバ以テ我邦蕎麥培養ノ可也盛ナルヲ認識スルニ足ルベシ誠ヤ培養的蕎麥ハ本邦北ハ北海道ヨリ南ハ九州ニ到ルノ間ハ土地ヲ擇バス大抵之アリト雖モ野生的蕎麥ノ確カナル者ハ未ダ嘗テ之ヲ見タル人ナシ稀ニ山林泥溝ノ中ニ於テ自生ノ如ク見ユルモノアルモ其實眞ノ野生ニアラズシテ全ク培養的蕎麥ト同性質ノモノニ外ナラズ是レ偶然ニ或ハ動物ノ爲メ或ハ風雨ノ爲メニ或ハ又人工的ニ分布セシモノト考ヘ得ベキナリ一体現今我邦ニ蕎麥ノ野生ナキ以上ハ我邦ノ蕎麥ハ昔一度野生アリシガ其培養ノ盛ナルニ從ヒ次第ニ消滅シタルモノナルカ將タ又我邦固有ノ產ニアラズシテ外國ヨリ輸入シタルモノナルカ此二問題ノ何レカ一ニ決着セズンバアラズ是ニ於テ熟〻我邦ノ風土ノ如何ヲ見、東西ノ古書ヲ按ズルニ毫モ野生ノ痕迹ヲ見出サズト雖𪜈輸入ノ遺證歴々乎タリ我邦ニアル蕎麥ノ外國產植物タル亦知ルベキ而已、然ラバ本產地ハ果シテ何處ニアルヤ盖シ印度ノ北部近傍ナラント云

フ現ニ今尚まんちゅりあ、あむる河邊だふりあ及ビばいかる湖縁ニ其野生ヲ見ルナリ左レバ我邦ノ蕎麥(Fagopyrum esculentum, Moench) ハ其起源ヲ該地方ニ執リシ者ニテ歐米諸邦ノモ皆其起源ヲ同フス則チ反言スレバ此點ヲ中心トシ外力ノ助ヲ得テ早晩廣ク世界ニ播布セシモノヽ如シ而メ支那ハ隣邦ノヿナレバ其輸入ハ極テ早カルベキモ蕎麥ノ培養ヲナスト云フ記錄ノ創メテ存スルハ第十世紀若クハ第十一世紀頃ナリ又我邦ニ入込ミタルハ多分印度及ビ支那ト交通ヲ開キシ以來ノヿニシテ食用ノ爲メニ培養シタル最舊記錄時ハ神武帝（即位紀元）千六百年代ナラン又歐羅巴諸國ヘハ耶蘇紀元千九十九年漸ク入込ミシト傳フ兎ニ角蕎麥ニ「方結實最畏霜此得雨則於結實尤宜且不成霜農家呼爲解霜雨」又「若種遲恐花經霜不結子」ノ性質アルハ暖地起源ノ植物タルヲ證スルトシテ大過ナカルベシ其他詳細ナル蕎麥史ハ既ニ野村彥太郎君が本誌第五卷ニ載セラレタレバ余ハ敢テ冗言ヲ弄セザルベシ

是ヨリ聊カ我國ニアル蕎麥 (F. esculentum, Moench) ハ外國ニ於テ如何ニ知ラルヽカニ就テ述ブルトコロアラントス

蕎麥ノ該種ハ比馬艮耶地方ニ培養セラレ Ogal 或ハ Ogla 又 Konton ト呼ヘリ此種ニ梵語ナキヲ以テ中央亞細亞ノ山嶺ニハ果シテ培養サレシカ疑ナキ能ハズ又全ク希臘人及ビ羅馬人ニハ知ラレサルモノト見ユ、元來 Fagopyrum ナル名稱ハ近代植物學者ガ其種子頗ル山毛欅ノモノニ彷彿タルヨリシテ命名シタルモノニテ日耳曼ノ Buchweizen 以多利ノ Faggind 皆是ヨリ來リシモノトス

アリアン起源ノ歐洲語ニテ云フトコロノ此植物ノ名稱タルヤ其根元來未ダ明ラカナラズ而シテアリアン人種ハ梵語ヲ用ヰタル東洋人種ヨリモ此種ノ植物ヲ多ク知ラザリキ是レ中央亞細亞ノ山嶺ニ此植物ノナキヲ證ス

ルモノナリ尚現今ト雖モペルシヤ土耳古ノ地方ニ於テハ全ク蕎麥ノ何タルヲ知ラザルガ如シ何トナレバ同地方ノ植物雜誌ニハ其記載ヲ見ザレバナリ Bosc 氏ノ著述セシ農業字典 Dictionaire d' Agriculture) 中ニ Oliver 氏ハペルシヤニ於テ其野生ヲ見タリト陳述シアレ𪜈 De Candolle 氏ハ Oliver ノ旅行雜錄中ニ之ナキヲ怪メリ

此種ノ韃靼、魯西亞ヲ經テ歐洲ニ入リタルハ實ニ中代ノ事ニシテ日耳曼國ニテ培養セシ最舊記錄ハ千四百三十六年發兌ノ Mecklenburg register ニ載セアルナリ十六世紀ニ至リ漸ク歐羅巴ノ中央部ニ漫延シ終ニ英國ノ如キ瘦土ニ對シテハ隨分肝要ノ植物トナリタリ夫ノ緻密學者ノ Reynier 氏ハ佛語ノ sarrasin ハケルト語ナラント考ヘタリ又 M. le Galle 氏ハブレトン人カ黑麥或ハ黑穀物（蕎麥ヲ意味ス）ヲ ed-du 又 gwinis-du ト唱フト云ヘリ要スルニ此種ノ起源既ニ明ラカナルノ今日ニ於テモ猶當然ナリト思ハルヽトコロノケルト語ノ原稱ニ至テハ未ダ判然タラザルハ遺憾トス

此ノ植物ガベルジアム、佛蘭西若クハ以多利ニ輸入サレ漸ク人ノ注意ヲ引クニ至リシハ十六世紀ナリ此ノ頃 Ble sarrasin ナル名稱ハ極普通ニ用ヰラレタリ尤モ普通ノ名稱ハ往々輕卒ニ使フヿアリテ背理ノヿ亦少ナカラズ而メ吾輩ハ此名稱ハ果シテ種子ノ色ガサラセン人ノ如ク黑キ故ニ命名セシモノナルカ或ハ亞剌比亞人、亞武亞人ノ生國ヨリ輸入シタルガ故ニ斯ク名ケシト考フベキモノナルカ甚ダ判斷ニ苦ムモノナリ當時此種ガ地中海ノ南方諸邦ハ勿論シリア、日留斯亞ニモ生セザルモノナルヿハ知ラレザリキ蓋シ此種ノ南方起源ナルヿノ思想ハ Sarrasin ト云フ色ニ關シタル語ヨリ浮ビシモノナラン此起源說ハ前世紀ノ終迄否現世紀ニ於テサヘモ信ヲ措キタルモノナリシガ Reynier 氏ハ今ヲ去ル五十年ニ此說ノ非ナル點ヲ駁撃シ始メタリ

蕎麥ハ時ニ培養處ヨリ免レ出デ（機械的作用）類似野生トナルモノニテ本產地ニ近クニ從ヒ斯ヽル場合愈多キカ如シ故ニ歐羅巴、及ビ亞細亞、比馬亘耶支那ノ境圍內ニ於テ野生若クハ類似野生ノ限界ハ如何ニアルカヲ知ルヿ難シ De Candolle 氏ハ我日本國ニハ是等半外國產甚ダ稀ニシテ大抵皆培養ニ係ル外國種ナリト云ヘトモ容易ニ信ズ可カラズ我國ニハソバ（種子三稜形ヲ爲ス）カクソバ（四稜）大カクソバ（前者ニ比シテ大ナリ）コメソバ（種子ニ稜ナク米粒ノ如シ）信濃ソバ、尾タネソバ、コンソバ、ヒメソバ、オニソバ、大ソバ、小ソバ等ノ品類アレトモ皆此種 F. esculentum, Moench ノ外ニ出デズ其元ヲ尋ヌレバ孰レモ同性質ノモノナルベケレトモ土地ノ瘠沃ニ外界情態ノ變化等ニヨリ多少ノ差違ヲ來スハ是亦免カレザルヿト謂フベシ

終ニ臨ミ一言スベキヿアリ則チ他ニアラズ元來我邦蕎麥ナルモノハ吾人ノ目擊シタル所ニテハ右ノ一種ニ過キサレトモ決シテ斷然只一種ノミナリトハ云ヒ難シ一体是トテモ元ハ外國產ナリト爲シタル以上ハ他ノF. rotundatum, Gærtn., F. emerginatum, Roth., F. Tataricum, Gærtn., F. cymosum Meissr.,（前者ニ比シテ大ナリ）又コメソバ（稜ナク米粒ノ如シ）信濃ソバ 尾タネソバ コンソバ ヒメソバ オニソバ 大ソバ 小ソバ等ノ品類アレ圧皆ノ此種 Fagopyrum esculentum, Moench ノ外ニ出デズ元ハ同種ト雖モ土地ノ瘠沃外界情態ノ變化ニヨリ多少ノ差違ヲ來スルハ亦免レザルヿト謂フ可シ

（未完）

○土佐國產地錢科植物

高知縣　井上虎馬

昨年ノ夏予ハ在獨乙國理學士三好學君ヲ介シテ同國人ステファン氏（F. Stephani）ニ約スルニ我四國島產地錢科（HEPATICÆ）植物ヲ送附センヿヲ以テシ且ツ其名稱ヲ確定セラレンヿヲ請ヘリ爾後同氏ハ書ヲ予ニ寄

セテ未ダ日本産地錢類ヲ撿定セシコトナキコト幷ニ四國島ノ我南部地方ヲ占メ亞熱帶的氣候ヲ有スルガ故ニ殊ニ其種類ニ稀有ノモノヲ出シ他日此學ノ爲メ益スル所鮮少ニアラザルヲ告ゲタリキ予亦謂ラク我地方ニ於ケル顯花植物及ビ高等隱花植物ノ如キ既ニ已ニ我畏友牧野富太郎君其他先輩諸氏ノ盡力ニヨリ我日本フロラノ國別調査ニ先鞭ヲ著ケ他ノ諸州ニ先ツテ今ヤ殆ンド其完成ヲ見ルニ至レルモ苔蘚類以下ノ植物ニ至ツテハ其名稱スラ明カナルモノ蓋シ寥々所謂此界ニ入レバ五里霧中ニ彷徨スルノ感ナクンバアラズ然レ𪜈今ヨリシテ務メテ此等植物ヲ採收シ其名稱ヲ尋ネ其所屬ヲ詳ニスルニ至レバ我學問上得ル所決シテ寡カラズト故ヲ以テ氏ノ書ハ直ニ予ヲ刺戟シ此ニ初メテ此等植物ヲ採收セントスルノ希圖ヲ企ツルニ至リシモ時恰モ兵役ニ服スルノ期ニ際セルヲ以テ暫時之ガ採收研究ヲ爲スノ機會ヲ得ザルニ至レリ歸郷後直ニ着手セントセシモ俗事纒綿意ノ如クナラズ漸ク十月下旬ヨリ十一月ノ間少閑ヲ得近傍各地ヲ跋渉シ僅ニ十餘種ヲ得タリキ然レ𪜈悉ク殖器ヲ缺クモノノミニ係ルヲ以テ一時之ヲ同氏ニ送ルヲ見合セタリシモ先約默シ難ク遂ニ其不完全ノ標品ナルヲ顧ミズ十二月ニ至リ之ヲ氏ニ送リ名稱ノ撿定ヲ求メタリキ越テ本年四月ニ至リ同氏ハ懇ニ之ガ撿定ノ勞ヲ執リ遠ク左ノ名稱ヲ報ジ越サレタリ總數十三内重複シタルモノ一種同氏ノ殊ニ命名ニ係ルモノ四種就中二種ハ新種ナルコトヲ明ニセリ是ニ由テ之ヲ觀レバ他日探索各地ニ遍キニ至レバ必ズ數十ノ新種ヲ見ルニ至ラン一科ノ植物ニ於テ此ノ如シ況ンヤ其他ヲヤ事些末ニ係リ之ヲ報ズルノ價値ナシト雖𪜈之ヲ隱蔽シテ公ニセザルニ比スレバ其優ル所アルヲ慮リ强テ雜誌ノ餘白ヲ借リ之ヲ同好諸君ニ報ズ若シ參考ニ資セラルレバ幸甚ナリ

附言　各種排列ノ順序ハ氏ヨリ回答ノ儘ニシテ決シテ學問上ノ排列ニアラズ且ツ漫ニ此ニ附シタル新和名

ハ是レ予ノ淺學寡聞ヲ顧ミズ敢テ自ラ命ゼシモノナレバ杜撰極メテ多カラン諸君幸ニ敎示ヲ吝ム勿レ

1. Blasia pusilla (L.) Dum.	うすばぜにごけ
2. Sandea japonica ? sterilis Stephani.	ひめぜにごけ
3. Riccia fluitans L.	ウキゴケ
4. Aneura pinguis (L.) Dum.	こばのみづぜにごけ
5. Pallavicinia spinosa Steph.	くものすぜにごけ
6. Pellia epiphylla (L.) Nees.	みづぜにごけ
7. Chiloscyphus argutus Nees.	ウロコゴケ
8. Dumortiera hirsuta (Sw.) Nees.	けぜにごけ
9. Anthoceros sp? sterilis.	ツノゴケ一種
10. Dumortiera hirsuta (Sw.) Nees.	けぜにごけ
11. Riccia japonica Steph. n. sp.	ひろはうきごけ
12. Grimaldia japonica Steph. n. sp. (kleine)	こばのぜにごけ
" Marchantia alato-capitulata Steph. n. sp. (grosse)	
13. Fegatella conica (L.) Radd.	ゼニゴケ

◎雜錄

○農科大學々術報告第二卷第一號

A B 生投

同報告ハ同大學敎師オスカール、レエプ氏ノ論文幷ニ同氏幷ニ塚本某氏合著ノ論文トヲ載ス共ニ英文ヲ以テ綴ル孰レモ化學的生理學上ノ論文ニシテ就中其第一論文ハ植物生理學上最モ解釋ニ苦ム所ノ原形質ニ關セリ今其大意ヲ左ニ摘譯シテ以テ「レフェラート」ト爲ス

此論文ハ題シテ生活原形質ノ力ト謂フ別テ四章ト爲ス（但以下ノ章ハ追々同報告ニ出ス由ナリ）第一章ハ生活的現象ノ原因ニ關スル古來ノ考案ト題シ第二章ハ近來ノ進歩ト題シ第三章ハ生活原形質幷ニ化學的動搖性ト題シ第四章ハ活働蛋白質ガ植物体中ニ於ケル貯蓄養料タルヿト題ス

第一章ハアナキサゴラス、ソクラテス、アリストートル、プラトー、ピサゴラス派ノ學者、ベーコン、デッカルト、ガルバニー等ガ生活ノ原因ニ就キ懷抱セル意見ヲ叙述シ次キニ夫ノ有名ナルユスツース、リービッヒガ所謂生物ニハ生活力ナル一種不可思議ノ力アリトノ説ヲ陳ベ幷セテシユライデン、マツーチー、モレシヨツト、ハックスレー、ロベルト、マイエル、ハイデンハイン、ハリバートン、ヒユツペ、等ガ此説ニ反對スルヿヲ陳ベタリ

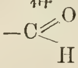
第二章ハ千八百三十三年ロベルド、プラウンガ細胞核ヲ發見シタル以來或ハジュジヤルダンガ下等動物ニ於ケル「サルコード」ノ發見アリ或ハフオン、モールガ植物細胞ニ於ケル原形質ノ發見アリシヿヲ陳ベ原形質ガ生活ノ基本物質タルヿヲ認知セラレタルヿヲ陳ベ又夫ノプフリユーゲルガ生活原形質幷ニ死亡原形質ノ間ニ差異アルヿノ説ヲ陳ベ最後ニデートメルガ「ジソチアチオン」説ヲ論ジテ其説ノ不當ナルヿヲ説キ是レ自殺ヲ

行フ所ノ原形質ニ應用スベシト論ゼリ

第三章以下ハ著者ガ漸ク本論ニ入ルモノナレバ稍ゝ詳ニ摘譯スベシ

第三章　抑ゝ生活物質ハ空氣中ノ分子的酸素ト化合スルノ力アリ其物死亡スレバ此力ヲ失ヒ生活物質ハ色素ノ作用ニ抗抵シテ之ニ染色セザルノ力アリ死物ハ之ニ抗スル能ハズシテ容易ニ染色シ又動物ノ神經系死シ其筋肉組織モ又死スルノ際溫度ノ上昇スルアリ是等ノ事實ニ照シテ以テ考フレバ生活原形質ト死亡原形質トノ間ニハ大差異アルヿ明ナリ凡ソ生活原形質ヲ構成スル所ノ蛋白質ハ斯クノ如ク既ニ死亡セル原形質ヲ構成スル所ノ蛋白質ト異ルヲ以テ之ヲ呼ンデ活働蛋白質ト謂フベシ活働蛋白質內機制的作用（「オルガニゼーション」）起リテ以テ茲ニ生活原形質ヲ生ズルモノトス

而ソ此活働蛋白質ナルモノハ化學上非常ニ動搖的ナル化合物ニシテ稍モスレバ變ジテ固定的ナル化合物ト爲ルノ傾向アリ盖活働蛋白質ガ動搖的ナルヿトハ實ニ生活原形質ガ其作用ヲ施行スルニ當テ最モ必須ナルヿトス他ナシ生活ハ運動ニ外ナラザレバナリ

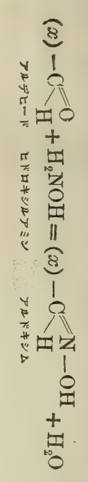
原子群ノ最モ動搖的ナルモノ「アルデヒード」群  $-\mathrm{C}\begin{smallmatrix}\diagup\!\!\diagup\mathrm{O}\\ \diagdown\mathrm{H}\end{smallmatrix}$ トス卽H原子ハ絶エズC原子トO原子トノ間ヲ往復振動スベシ

扨蛋白質ノ化學的構造タルヤ頗ル複雜ニシテ今日ノ學問上未ダ明ナラズト雖𪜈ボロヂン、プフェファー、ケルネル、シユルツエ等ノ硏究ニ徵シ又著者自身ノ考案ヲ以テスレバ蛋白質ハ少クモ十二個ノ「アルデヒード」群ト十八個ノ「アミード」群トヲ保持スベシ故ニ其動搖性ヤ頗ル盛ナリ

以上ハ唯理論上蛋白質ニ「アルデヒード」群ト「アミード」群ト存在セザルベカラザルト謂フニ過ギズ然レ𪜈生

活原形質ニハ此二群存在スルト謂フヿヲ實驗上果シテ證明シ得ベキヤ否ヤ蓋若シ果シテ生活運動ナルモノガ夫ノ動搖的ナル「アルデヒード」並ニ「アミード」群ノ爲ニ起ルモノナリト謂ヘル著者ノ理論ヲシテ信ナラシメバ此等「アミード」若クハ「アルデヒード」群ニ反應スル所ノ物質ハ假令稀薄タリ𪜈生活物ニ對シテ有毒ナルヤ明ナリ

而シテ毒物作用ナルモノハ多クハ其物質ガ生活細胞ノ蛋白質ニ對セル化學的反應ノ結果ナリトス著者此事ニ就キ數多ノ例證ヲ掲ケタリ今其二三ヲ摘記スルニ例ヘバ夫ノ「アンモニア」NH_3ハ稀薄ナル時ハ絶エテ毒物ノ作用無シト雖モ其H一原子ニ代ユルニOHヲ以テスレバ「ヒドロキシルアミン」即NH_2OHト爲ル此物ハ其濃厚ノ度「アンモニア」ニ同キ時ト雖モ頗ル强力ナル毒物ナリ即例ヘバ「バクテリア」及ビ黴ハ中性「アンモニア」鹽類ノ濃厚溶液ニ逢フモ絶エテ害ヲ受クルヿ無シト雖モ「ヒドロキシルアミン」ニ逢ヘバ水一萬部中僅ニ一部アルモ容易ニ害ヲ受クベシ又硅藻ハ水十萬部ニツキ僅一部ノ「ヒドロキシルアミン」アルモ二十四時間内ニ死シ滴虫ニハ水二萬部中一部アルモ其毒作用ノ盛ナルヿ「ストリキニン」ヨリモ劇烈ナリ抑々「ヒドロキシルアミン」ガ斯クノ如ク「アンモニア」ニ比シテ有毒ナル所以ノモノ蓋其「アルデヒード」或ハ「ケトーン」ニ對セル作用ノ異レルニ因ル何トナレバ「アンモニア」ハ遊離セル時若クハ炭酸鹽類タルノ際ニ非ザレバ「アルデヒード」ニ作用スルヿ無ク且其力モ微弱ナリ然ルニ「ヒドロキシルアミン」ノ鹽類ハ頗ル稀薄ノ際ト雖𪜈容易ニ作用スベシ是レ「ヒドロキシルアミン」ニ於テハ其水素原子非常ニ動搖的ニシテ能ク「アルデヒード」幷ニ「ケトーン」ノ動搖的酸素ニ作用スルガ故ナリ即「ヒドロキシルアミン」ト「アルデヒード」トノ反應ヲ示セバ次ノ如シ



$$(x)-\mathrm{C}\overset{\textstyle O}{\underset{\textstyle H}{\lessgtr}}+\mathrm{H_2NOH}=(x)-\mathrm{C}\overset{\textstyle N-OH}{\underset{\textstyle H}{\lessgtr}}+\mathrm{H_2O}$$

右ノ外動搖的「アミード」群ニ容易ニ作用スル所ノモノモ「ヒドロキシルアミン」ト同樣有毒ナリ例ヘバ蟻酸「アルデヒード」、青素、亞硝酸ノ如キ是レナリ即蟻酸「アルデヒード」ハ水一萬分中一分アルモ能ク微生物幷ニ藻類ヲ滅殺シ二千分中一分アルモ二時間內ニ能ク甲殼類、蠕虫幷ニ軟体動物ヲ滅殺スベシ顯花植物ハ水千分中一分アルモ其水ヲ注ゲバ二日乃至六日ニシテ枯死スベシ青素、亞硝酸ノ如キ又各々有毒ナリ

以上論述スル所ノ有毒作用ニ徵シテ以テ考フレバ生活原形質ニハ「アルデヒード」幷ニ「アミード」群アルヤ明ナリ蓋「アルデヒード」幷ニ「アミード」ノ二群アルガ故ニ動植物ニ施スニ此ノ動搖性ノ盛ナル二群ヲ化シテ固定的ナル原子群ト爲ス所ノ物質ヲ以テスレバ此二群ノ運動止ミ爲ニ生物ハ死スルモノトス、サレバ生活現象ナルモノハ生活原形質ノ動搖性「アルデヒード」的性狀ニ關スルモノニシテ此性狀ニ藉リテ以テ呼吸起リ呼吸ハ熱ヲ生ジ熱ハ動搖的原子群ノ振動ヲ增大セシメ又熱ハ變ジテ化學的作用ト爲ル即生活運動ハ生活的官能ヲ起スナリ此力ヲ呼ンデ從來生活力ト稱セリ然レ𪜈宜ク原形質力ト改稱スベシサレバ此原形質力ナルモノハ動搖的ナル原子群ガ生活原形質ノ蛋白質內ニ起セル一種ノ運動ニシテ呼吸作用之ヲ强大ニシ動搖性之ヲ惹起シタルモノナリ

（以下次號）

ベシヱレール氏日本產土馬騣類

Em. Bescherelle 氏ハ本邦ニ產スル土馬騣類錄ヲ昨年出版ノ Annales des Sciences Naturelles (Bot.) T. XVII（三百二十六頁ヨリ三百九十三頁）ニ出シ題シテ Nouveaux documents pour la flore bryologique du Japon ト云フ種數一百七十

六内新稱五十六種ニシテ屬ノ新ナルモ Fauriella, Myuroclada ノ二アリ左ニ新稱ノ分ヲ擧ケン

Anœctangium ferrugineum, Besch.
Dicranum eurydictyon, Besch.
Dicranum nipponense, Besch.
Fissidens adelphinus, Besch.
Fissidens planicaulis, Besch.
Barbula (Tortula) leptotheca, Sch.
Barbula himantina, Besch.
Barbula subunguilata, Sch.
Physcomitrium Savatieri, Besch.
Webera subcarnea, Sch.
Webera Iwozanica, Besch.
Mnium decrescens, Sch.
Mnium sapporense, Besch.
Mnium vesicatum, Besch.
Mnium minutulum, Besch.
Bartramia crispata, Sch.
Philonotula Savatieriana, Besch.
Pogonatum pellucens, Besch.
Pogonatum sphærothecium, Besch.
Pogonatum avitense, Besch.
Pogonatum otaruense, Besch.
Pogonatum rhopalophorum, Besch.
Pogonatum asperrimum, Besch.
Lasia japonica, Besch.
Leucodon sapporensis, Besch.
Pterygophyllum nipponense, Besch.
Fauriella (新屬) lepidoziarcea, Besch.
Anomodon ovicarpus, Besch.
Pylaisia Brotheri, Besch.
Brachythecium kuroishicum, Besch.

Brachythecium moriense, Besch.

Brachythecium Noesicum, Besch.

Brachythecium truncatum, Besch.

Brachythecium eustegium, Besch.

Myuroclada (新屬) concinna, (Wils), Besch.

　一名 Hypnum concinnum, Wils.

　　Hyp. (Illecebrina) concinnum, C. Muell.

　　Myurella (s. g. Achrolepis) cocinna, Lindl.

Plagiothecium lævigatum, Sch.

Plagiothecium homaliaceum, Besch.

Plagiothecium aomoriense, Besch.

Hypnum rufochryseum, Sch.

Hypnum circinatulum, Sch.

Hypnum longipes, Besch.

Hypnum ctenium, Sch.

Hylocomium japonicum, Sch.

Andræa Fauriei, Besch.

Leucobryum retractum, Besch.

Ulota nipponensis, Besch.

Brachymenium japonense, Besch.

Philonotula japonica, Sch.

Atrichum crispulum, Sch.

Neckera yezoana, Besch.

Endotrichum japonicum, Besch.

Schwetschkea japonica, Besch.

Thuidium micropteris, Besch.

Isothecium hakkodense, Besch.

Isopterygium yokoskæ, Besch.

Hypopterygium Fauriei, Besch.

○繇條書屋植物雜記（其十）

牧野富太郎

●*Æsculus chinensis Bunge* 果シテ本邦ニ產スルヤ

予ハ*Æsculus chinensis Bunge*ノ我邦ニ產スルヲ知ラザルナリ然レ圧北海道渡島國箱館ニ於テ曩ニMaximowicz氏ノ採集シタル植物ハ即是ナリト唱フル者アリト雖圧是レ恐クハ是ニ非ズ幸ニH. F. Hance氏著Exiguitates Carpologicæ(in Journ. Bot. VIII. p. 312 (1870).)中*Æ.* chinensisノ條下ニ於テ此採品ニ就テ記述シタル形狀アリ其狀全ク本邦普通ノとちのき即チ*Æ*sculus turbinatus *Blume*タルヲ失ハズシテ決シテ*Æ.* chinensis *Bunge*ニ非ラズ*Æ.* chinensis *Bunge*ハ英國Kew植物園ヨリ先キニ我大學ニ寄贈シ來リタルDr. Aug. Henry氏採支那四川省產標品ニ就テ之ヲ驗スルニ花葉ノ狀我邦ノとちのき(支那亦之ヲ產ス)ヨリ小ニシテ掌狀ヲ成セル小葉ニハ皆各々明カニ小葉柄ヲ具ヘ花穗ハ瘦長ナル圓柱狀圓錐形ヲ成シ花体小ニシテ花瓣ハ其瓣面ノ花爪ニ連ル處漸殺シ爲メニ決シテ心臟狀耳形ヲ成サヾルノミナラズ瓣面モ亦圓形ナラズシテ長楕圓形ヲ成セリ即チ此等ノ諸點ハ之ヲとちのきト分別ス可キ主要ナル標徵ト謂フ可クシテHance氏ノ記セル箱館產ノ植物トハ著シク其形狀ヲ異ニセリ

●きづたノ學名

きづたハうこぎ科ノ攀援本ニシテ隨在之ヲ見ザルハ鮮シ今其學名ヲ考驗スルニ之ヲ極メテ精覈ニ言フトキハ則チHedera Helix *Linn.* var. colchica *C. Koch.* (=*H. colchica* C. Koch; *H. Helix* Don; *H. Helix* Thbg.; *H. rhombea* Sieb. et Zucc.) トナサヾル可カラズ是レ即チ亞細亞產きづたニシテ主トシテ其花梗幷ニ萼ニ着生セル鱗毛ノ形狀ニ由テ之ヲ歐羅巴產きづたナルHedera Helix *Linn.*ト區別ス即チ歐產ノモノハ其鱗毛白色ニシテ

六七八肢ノ射狀ヲ成スト雖モ亞產ノ者ニ在テハ黄色ヲ帶ビテ兩裂シ裂片更ニ七－十片ニ條裂スルヲ見ルナリ

●むさしあぶみ幷ニむらさきむさしあぶみ(新稱)

むさしあぶみノ莖幷ニ莖本ノ鞘膜綠色ナルモノ是其普通ノ品ニ係ル之ヲ Arisæma ringens *Schott* α. Sieboldii *Engl.* (=*A. Sieboldii* de Vriese) ト云フ今別ニ一品アリ即チ草木圖說卷十九むさしあぶみノ條下ニ「丹後ノ產ニ草微大ニシテ花苞幷ニ莖尤紫黑色ナルアリ」ト云フ是ナリ之ヲ Arisæma ringens *Schott* var. β. præcox *Engl.* (=*A. præcox* de Vriese) ト云フ此品和名ナシ故ニ予ハ今むらさきむさしあぶみノ新稱ヲ之ニ與ヘ以テ其稱呼ニ便ニス

●こいけま(新稱)

こいけまナル和名ハ新稱ニシテ其學名ヲ Cynanchum Wilfordi *Hemsl.* ト云フ又 *Vincetoxicum Wilfordi* Fr. et Sav. *Cynoctonum Wilfordi* Maxim. *Endotropis auriculata* Fr. et Sav. non Decne. nec Miq. ノ異名アリ其狀能クいけま即チ Cynanchum caudatum *Maxim.* ニ類似シ之ト混同シ易シト雖モ其花梗ハ葉柄ヨリ短ク或ハ長キモ之ト同長許ナルヲ以テ之ニ異ナリ而シテ其梗頂ニハ一團若クハ二團ノ繖形小花ヲ簇生シ花瓣反曲セズ葉ハいけまヨリ小形ナルヲ常トシ葉裏ノ脈上ニハ毛ヲ帶ビ根莖ハ地下ニ橫走シ所々ニ苗ヲ出セリ大學所藏ノ標品中和州大峯山幷ニ紀州鹿ケ瀨峠ヨリ採集シ來リタルモノハ即チ此種ニ係ルナリ

●まるばあきぐみ(新變種)

明治廿年五月三日伊豆七島中三宅島ニ於テ助教授大久保三郎氏ノ採集セラレタル一ノ標品アリ予モ亦昨年十一月相州石橋近傍ノ海岸岩上ニ於テ此ト同品ヲ採集シタリ而シテ予ノモノニハ果實ヲ有シ大久保氏ノモノニ

ハ花ヲ着ケタリ故ニ其形狀ヲ稽査スルニ最モ便ヲ得タルナリ

其形狀ヲ稽査セル結果ハ之ヲあきぐみノ一變種トスルノ正當ナルヲ認ムルニ至ル故ニ予ハ今之レガ學名ヲ制定シテ Elæagnus umbellata Thbg. var. β. rotundifolia Makino トナシ又之レガ新和名ヲ製シテまるばあきぐみトナス

之ヲ原種あきぐみト區別スベキ至要ノ點ハ其葉ノ圓形幷ニ廣楕圓形ヲ成スニ在リ而シテ其詳狀ハ後日之ヲ公ニスベキ機アルヲ信ズ

●おやりはぐま（新稱）

おやりはぐまハきく科ニ屬セル多年生本ニシテ磐城岩代邊ノ山足地ニ生ズ其葉ハ薄シト雖トモ硬質ニシテ三岐シ形ヲ略〻大ナリ花序ハ圓錐狀ヲナシ小頭花ハ唯〻一花ヨリ成ル是レ何ノ屬ニ屬スルカ之ヲ一見セバ宛モ Ainsliæa 屬ニ屬スルガ如シ故ニ予ハ之ヲ Ainsliæa triloba Makino ト新定セシコトアリト雖ドモ是レ蓋シ正當ナル考按ニ非ザルヲ知ル而シテ予ハ今之ヲ Macroclinidium 屬ニ配スルノ更ニ穩當ナルヲ見ルヲ以テ斷然其學名ヲ更メテ M. trilobatum Makino トナスニ躊躇セザルベシ本邦ニ在テ嘗テ此屬ニ屬セル植物二種アリト雖トモ此等ハ皆ナ各小花頭中ニ數小花ヲ收メ容レ此おやりはぐまノ唯一小花ナルトハ大ニ其狀態ヲ異ニセリ

●こんろんさうノ學名

こんろんさうハ十字花科ニ屬シ其學名ヲ Cardamine macrophylla *Willd.* (=*Dentaria macrophylla* Maxim.) var. *albiflora* *Maxim.* (=*Dentaria dasyloba* Turcz.) ト云フ其花必ズ白色ナルニヨリテ紫花ヲ有スル原種ト異ナレ

リ紫花ヲ有スル原種ハ未ダ本邦ニ產スルヲ詳ニセズ

●九州產きけまんノ新種

本年五月十日ノ日附ヲ以テ鹿兒島高等中學造士館伊藤篤太郎氏ヨリ一書ヲ得タリ書中薩州ノ東南部大隅トノ境ナル蒲生（カモウ）手前ノ山中ニテ一種ノきけまんヲ得ラレタルヿヲ報セリ其狀宛モひめふうろノ体アリト云フ同氏ハ乃チ之ニ命ズルニ Corydalis satsumensis *Ito, nov. sp.* ノ學名ヲ以テセリ其形狀ノ詳細ハ早晚吾人之ヲ見ルヲ得ルニ至ルナラン

●まひづるさう西霧嶋山上ニ滿ツ

同上伊藤氏ノ書信中ニ云フ「此頃好機會ヲ得テ霧島山ニ跋涉ヲ試ミ申候東嶽即チ高千穗ノ方ハ追々植物ヲ採集セシ人有之依テ今回ハ西霧島即チ韓國嶽ヘ登リ申候山腹ニ大波池アリ池水藍ノ如シ是レ舊噴火孔ナリ是ヨリ頂上迄壹里アリト云山嶺ハまひづるさうヲ以テ被ハレタリト謂フモ過言ニ非ラズ實ニ斯ノ如クまひづるさうノ多キ山ハ小生是迄登リタルヿナシ是レ恰モ開聞嶽ノ Helionopsis ニ於ケルガ如シ開聞嶽ノ Helionopsis ハ矮生ニシテ高サ一二寸ニ過ギズ Maximowicz 氏ノ H. breviscapa ノ種名ニ的中ス併シ H. breviscapa ハ隨分怪シキ種ナリ韓國嶽ノまひづるさうモ同ジク矮生ナリ蓋シ Miquel 氏ノ所謂 Convallaria Keiskei 歟未ダ精撿スルニ遑アラズ嶺ヲ踰ヘ更ニ深ク進行スレバ人跡稀ナル仙境アリ硫黃ノ焰々トシテ燃ユル山ヲ登リ或ハ明礬ノ流水滾々トシテ落ツルノ谷ヲ涉リ風色實ニ奇絕怪絕ナリ多ク奇品ヲ採集シ四五日前鹿兒島ニ歸リ申候」云々

●つちとりもち極北ノ產地

つちとりもち一ニつちやまもちト稱ス土佐幡多郡ニ於テ之ヲやまでらト呼ブ即チ山寺坊子ノ略ナリ是レ Balanophora dioica *Wall.* ナリヤ否ヤ未ダ疑問ヲ免カレズ

本邦ニ在テ、否ナ、世界ニ在テ其最北ノ產地ヲ越中立山トス嘉永六年富山藩出版ノ本草通串證圖第四卷ニ圖ヲ出シ且ツ其產地ヲ附記シタリ

●うけゆりノ學名

うけゆり一千八百九十二年（明治廿五年）ノ頃英國ニ入ル時ニ Lilium Ukeyuri 並ニ L. Alexandræ ノ二名ヲ有シタリ花時ニ及ンデJ. G. Baker氏之ヲ鑑定シテさゝゆり即チL. japonicum *Thunb.* ノ變種トナシ園藝師Wallace氏所命ノ L. Alexandræ ノ種名ヲ其變種名ト定メ以テ其學名ヲ Lilium japonicum *Thunb.* var. Alexandræ (*Hort. Wallace*) *Baker.* トナセリ而シテ其原種ト異ナル點ハ主トシテ長花柱並ニ廣濶ナル葉ヲ有スルニ在リ The Gardeners' Chronicle vol. XIV (3rd. Ser.) nos. 343, 348 (1893). ニ詳細ナル記述アリ又明晰ナル寫生圖アリ就テ看ルヲ要スルナリ

●帝國大學植物園ノひなげしニ兩品アリ

ひなげしノ植物園裏ニ培植セラルヽモノニ二品アリテ相共ニ花壇內ニ雜生ス一ハ花梗上ノ粗毛外ニ向ヒテ開出ス是レ普通ノひなげしニシテ即チ Papaver Rhœas *Linn.* α. genuinum *Daveau.* 是レナリ一ハ花梗上ノ粗毛ハ梗面ニ臥布ス之ヲめひなげし（新稱）ト云フ Papaver Rhœas *Linn.* β. strigosum *Bœnn.* ハ之レガ學名ナリ

●日本產のぼたん科植物

Osbeckia chinensis *L.* (=*O. japonica* Naud.) ひめのぼたん一名くさのぼたん

Melastoma candidum *Don* (=*M. macrocarpum* Don; ? *M. Nobotan* Bl.) のぼたん

Blastus cochinchinensis *Lour.* (= *Anplectrum parviflorum* Benth.; *B. parviflorus* Triana.)

Bredia hirsuta *Blume.* はしかん

日本產ノ本科植物ハ琉球諸島ノ探撿ニ由テ尙ホ之レヨリ其數ヲ增サン

●琉球產食用ノ念珠藻

田代安定氏曩ニ琉球ニ入ラレタルノ日一ノ念珠藻即チ Nostoc ノ一種ヲ得テ歸リ調查ノ資トシテ之ヲ予ニ惠與セラル且ツ同氏ノ之ニ就テノ所說ヲ聽クヲ得タレバ考證ノ爲メ今之ヲ左ニ錄ス可シ而シテ此モノ Nostoc タルニ相違ナシト雖𪜈其種名ハ今尙ホ未決ノ下ニ在リ

田代氏曰ク

はたけあさ（はたけノあをさノ意味）波照間島方言

又ちのり（地のりノ意）

ちーふくら（地膨レノ意）

右ハ八重山島所屬ノ各島草原間ニ生シ平日ハ乾燥シテ能ク分明ナラザレ𪜈一タビ雨降レバ直ニ膨脹シテ木耳ノ如ク粒々地上ニ滿ツ土民之ヲ採テ米ト共ニ炊ギ食ス

生ノ時ハ淺綠色ニシテ至テ多肉柔脆ナリ生ニテモ食ス毒ナシ

ト他日其種名ヲ得バ再ビ之ヲ同好ノ士ニ報知セン

○みこでるまトハ何ゾヤ

此編ハベゐ氏ノ調查ニ係ル黴菌學者ニ對シ趣味亦尠ナカラザルベシ不顧拙文聊カ抄譯シテ

以テ江湖ニ紹介スト云爾　　市、塘、

余輩ハ夫ノ發芽菌ナル所謂みこでるまガ果シテ形態學上ヨリ論スルモ分類學上ヨリ論ズルモ酒母菌類ニ伯仲スルモノナルヤ否ヤヲ疑フテ止マザルナリ蓋シ前者ハ高度ノ屈折力ヲ具フルヿ、細胞ノ直方形ナルヿ、内ニ胞子ナキヿ及ビ大抵塊狀或ハ膜態ニ群集スルヿ等ノ性質ヲ有スルヲ以テ明ラカニ後者ト區別シ得レバナリ吾人若シ麥酒葡萄酒或ハ含砂糖溶液ヲシテ暫時空氣中ニ放棄セシメナバ忽チみこでるまハ灰白色、脂粘液ノ不齊膜ヲ其表面ニ生ズルヲ見ルベシ昔ハ該黴菌ヲ以テアルコールヲ造ラザルモノト爲セシガらせ氏出デシ以來始メテアルコールノ $\frac{1}{4}$—$2\frac{1}{2}$vol% ヲ造ル力ヲ有スル四種ノ黴菌アルヿ確實トナレリ倘うゐのぐらどすきい氏モ說ヲ爲シテ曰ク凡テ黴菌細胞ノ形態學上ノ關係如何ハ無機營養物ノ一定溶液中ニ含マルヽ有機物ノ多寡ニ因テ變ズルモノナリト又近來らふある氏ハらせ氏ノ所謂四種ノみこでるま中少クモ一種ハ醋酸ヲ釀スノ力ヲ有スルモノナルヿヲ證セリ

ぱすとる氏ノ說ニ從ヘバみこでるまニ二種アリトセリ曰ク Mycoderma Cervisiæ 曰ク M. vini 是ナリ然ルニはんせん氏ハ猶是ヨリ多カルベシト唱フ尤モ此二種ハ共ニ互ニ區別シ難キノミナラズ今日知ラルヽ凡テ七種ノモノト同物異名ナリトシテ不可ナカラン

みこでるまナル名稱ハ是レぱすとる氏ガ醋酸醱酵ノ黴菌ニ與ヘシモノニテ遙ニ千八百三十四年代ニ於テ業ニくっちんぐ氏ハ此醱酵素ノ植物的性質ヲ研究シ名ケテ Ulvina aceti ト稱シタリ後はすとる及ビとるびん兩氏ハ再ビ此問題ニ着手シ專ラ該黴菌ノ形態學ヲ吟味セリ千八百七十九年ニ至リ更ニ一新種ヲ發見ス蓋シ通常ノ種類ハ沃土或ハ沃土加利ヲ加フレバ黃色ニ變スレトモ之ニ限リ青色トナルヲ以テ異リトス同氏又近來他新種

ヲ見出シ名ケテ Kützingianum ト謂フ然レ𪜈爾來此名稱ハつおぷ丶氏ノ教示ニヨリ Bacterium ト改名セラル左レバ今日世上ニ知ラル丶醋酸醱酵黴菌ハ都合三種アリ同ク(一) Bacterium aceti (Kütz) Zopf 曰ク (二) Bacterium Pasteurianum, Hansen 曰ク (三) Bacterinum Kützingianum, Hansen 是ナリ今是等黴菌生息狀態ニ就キ温度ノ關係ヲ撿スルニ(一)種ノ最低温度攝氏ハ四乃至五度ニシテ(二)種ノハ仝五乃至六度ナリ以上三種共ニ最高温度ハ仝四十二乃至仝四十三度ニテ極適温ハ仝三十四度ナリトス

形態學上ヨリ論ズレバ亦各差違ノ點ヲ有ス(一)種ハ長細胞(二)種ハ膨細胞(三)種ハ短棒狀細胞ノ連鎖ヨリ成リ孰レモ攝氏四十乃至仝四十度、五ノ温ガ最モ培養ニ宜シ或連鎖ハ長ク發達シテ廿四時間内ニ於テ最初ヨリモ著シク長細胞ノ增殖ヲ爲スナリ此新培養菌ヲシテ一旦攝氏三十四度ニ遭ハシムレバ再ビ原形ノ連鎖細胞ヲ造ルベシ夫ノ長細胞ハ攝氏三十四度ノ際ニ其長サ二百μ或ハ二百μ以上アルヲ常トス然レ𪜈其始メヤ長細胞ガ一箇處或ハ數箇處ニ於テ膨脹ヲ生ジ時ニ直徑十一μノ球狀ト成リ其後創メテ著明ノ連鎖細胞ニ分裂スルニ外ナラザルナリ又ねげりゐ氏ハ斯丶ル長クシテ且ツ膨脹セル細胞ヲ以テ普通ノモノデナク全ク異狀細胞ナリト鑑定セリ

以上ハ單ニ外界勢力ガ一小生体ノ生活力ニ及ボス影響如何ヲ概論シタルニ過ギズ抑モ醱酵ニ適スル温度ナルモノハ必ズシモ酒母菌ノ生活、或ハ細胞分裂或ハ胞子造成ニ適スル温度ト一樣視スベキモノニアラズシテ恰モ高等植物ノ萠發性、蒸散作用、呼吸作用、同化作用、向地性、向光性、向濕性、傾電性等ニ適スル温度モ亦常ニ各一樣ナラサルガ如シ要スルニ黴菌ノ細胞分裂ヲ促カスニハ適當ノ温度肝心ナリト云ハザル可カラズ猶吾輩ヲ以テ百尺竿頭一歩ヲ進ムヲ許セバ吾輩ハ夫ノ黴菌ガ吾輩ノ想像以外ニ多形的ノモノニメ之ノ研究ハ

大範圍ナル生物學界ニ新路ヲ開キ該學ノ智識ヲ擴ムルノ好階級タルヲ斷ジテ疑ハザルモノナリ

○Nitella Japonica, Allen.

昨年出版ノ Bulletin of the Torrey Botanical Club (vol. XX. p. 119-20) ニ於テ T. A. Allen 氏ハ Nitella oligospira ニ近キ一種ノ Nitella ヲ日本ヨリ得タリトテ N. Japonica ナル名稱ヲ附セリ而シテ其卵球房（ウーゴニウム）ハ單一其卵子ノ大サハ長サ .340mm. 幅 .285mm. アリテ其膜ハ圓錐狀ノ凸出ニテ覆ハルトアリ而シテ本年出版ノ同誌 Plate 188 ニ其圖ヲ示セリ然ルニ圖ニハ卵球房二個アリ圖ノ誤リカ

○荳科植物ノ根瘤ヲ論ズ

安田篤

凡ソ荳科植物ノ根瘤ハ「りぞびあ」ト稱スル黴菌ノ局部的刺戟ニ由リ根ノ破格生長ヲ爲スニ起因スル者ナリ病根學上ヨリ觀レバ根瘤ハ「へてろどら」嚢等ノ如キ動物ノ刺戟ニ由テ生シタル破格ノ生長ニ髣髴タリト雖形態學上ヨリ觀レバ兩者ノ差蓋シ霄壤モ啻ナラザルナリ

根瘤ノ發生スルヤ或ハ植物ノ萠芽後久シカラザル時ニ於テスルアリ或ハ植物ノ花期若クハ花後ニ於テスルアリ而シテ時ニ全ク根瘤ノ生ゼザルヿ無キニアラズ想フニ此等ノ現象ノ其土壤ノ性質ニ關スルヿハ曾テ「フランク」氏等ノ論セシ所ニ外ナラザルベシ抑根瘤ハ植物ノ種類ニ由テ全ク其形狀ヲ同フシ「ゐんげんまめ」及ビ Amphicarpæa comosa ニ於テハ球狀ヲ呈シ「にんどう」、「しろつめくさ」、「むらさきつめくさ」及ビ Meliotus alba ニ於テハ帶長細頸ニシテ時ニ少シク叉裂スルヿアリ或ハ心臟形ヲ呈シ或ハ梨實狀ヲ呈スルヿモアリ根瘤ハ通常獨生スレ𪜈稀ニハ大ナル房狀ヲ呈スルヿアリ Meliotus alba ニ於ケルガ如シ而シテ一般ニ根枝ノ如ク先進ノ發育ヲ爲スト雖亦數多ノ例外ナキニアラズ其發生スルヤ多クハ地面ニ近キ根ニ於テシ時ニ地面ヲ去

ルヿ甚淺カラザル根ニ於テス根瘤ハ決シテ根ノ生長點ニ近ク生ズルヿナク主根或ハ枝根ニ生ズル者ナリ根瘤ハ常ニ外生ノ發育ヲ爲ス者ノ如シ其發生ノ直接ノ原因ヲ爲ス者ハ「りぞびあ」ニシテ間接ノ原因ヲ爲ス者ハ土壤ノ性質、溫度及ビ濕氣等ニ關スル大氣ノ狀態ナリ凡ソ「りぞびあ」ニハ數種アリ是等ハ通常ノ土壤中ニハ多少存在スル者ニシテ若シ或種類ノ「りぞびあ」ニシテ根面ノ適處ヲ得ルアランカ忽チ增殖シ以テ該部ニ於ケル表面細胞ノ一個若クハ數個ニ接シ玆ニ感染ノ作用ヲ完フス其如何ニシテ感染作用ノ起ルヤハ明ナラズ或人ハ「りぞびあ」ハ寄主ノ細胞膜ヲ溶解スル力ヲ有スルガ爲ナリト云ヒ「フランク」氏及ビ「ミユルレル」氏等ハ感染糸（Infectionsfäden）ナル者ノ爲ニ生ズルト云フ然レ𪜈實際感染糸ハ常ニ存在スル者ニアラズシテ「むらさきつめくさ」ニハ時ニ之ヲ見出スヿ難カラズト雖「ゐんげんまめ」ノ如キハ其痕跡ヲダニ留メズ且ツ「ミユルレル」氏ハ「はりゑんじゆ」ニモ之アリト主張スレ𪜈未ダ俄カニ之ニ服スル能ハザルナリ而シテ感染糸ノ存在セル何レノ場合ヲ見テモ之ト「りぞびあ」トノ間ニ相互ノ關係アリトモ思ハレズ何トナレバ時ニ感染糸ハ根瘤ノ外組織中ニアリテ全ク之ト關係ナケレバナリ化學作用上並ニ顯微鏡的ノ撿究ニ由レバ感染糸ハ「りぞびあ」ト大ニ其趣ヲ異ニシ「りぞびあ」ヨリ更ニ屈折力ヲ有スル蛋白質ヨリ成リ容易ニ着色セズ屢「むらさきつめくさ」ノ古根瘤中ニ此感染糸ヲ見出スヿアルモ此場合ニハ「りぞびあ」及ビ細胞內ノ原形質ハ殆全ク除去セラル盖シ感染糸ノ生力ノ遙ニ前二者ヨリ大ナル者アレバナリ是迄何人モ感染糸ノ細胞膜ヲ見出ス者ナカリシガ近來「ミユルレル」氏ハ纎維素ヨリ成レル細胞膜ヲ發見セリ氏曰ク此膜ハ侵入シ來レル「りぞびあ」ヲ防ガンガ爲ニ細胞內ノ原形質ヨリ分泌セラルヽ者ニシテ「りぞびあ」ナル黴菌ハ纎維素ヲ溶解スルノ力ヲ有スト予（「アルベルト、シユナイデル」氏ヲ指ス以下皆同ジ）ヲ以テ觀レバ此說ハ少

シク失當ナラザルナキカ何トナレバ纖維素ハ「りぞびあ」ニ由テ溶解セラルヽト同時ニ其侵入ヲ防グノ被護物トナルノ理ナケレバナリ彼ノ寄生虫ノ卵、休眠セル仔虫、蓚酸石灰ノ結晶等ニ於テモ植物組織內ニアル場合ニハ其周圍ニ纖維素ノ被護物ヲ分泌スルモ外物ガ同時ニ纖維素ヲ溶解スル能力ヲ有セザルナリ

以上ノ議論ハ姑ク舍キ「りぞびあ」ナル者ハ根ノ表面細胞ノ內部ニ接シ玆ニ其增殖ヲ逞フス此ニ於テカ此黴菌ノ刺戟ニ由リ原形質作用ハ增加シ感染ヲ受ケタル細胞モ生長シ速ニ繁殖スルノミナラズ比隣ノ細胞モ亦同ジク增殖作用ノ枉盛ヲ極ム顯微鏡下ニ窺ヘバ僅少ナル突起ノ根表皮層ニ由テ被ハレタルヲ見ルベシ此初發ノ腫起ハ「めりすてむ」ヨリ成リ內部ハ感染細胞、外部ハ不感染細胞ヲ以テ充タサル此組織ハ盛ニ分裂シ母感染細胞ヨリ數多ノ子感染細胞ヲ生ズ外側ニ於テハ「こるく」組織ガ明ニ一二ノ細胞ヨリ成レル「ふえろーげん」層ヨリ生ズ此等ノ細胞ハ接線的ニ分裂シ屡澱粉粒及ビ蓚酸石灰結晶ヲ藏ム中央部ノ感染細胞ノ分裂スルヤ初ハ甚速ナラズ而シテ終ニハ根ノ「ぺりかむびうむ」ニ達シ之ヲシテ變狀セシム又維管束ハ根ノ維管束ヨリ生ジ感染面ニ周圍的ニ擴進シ甚接近スルニ及ンデ四枝乃至七枝ニ分レ根ニ關シテハ遠心的ニ「めりすてむ」ノ外部ヲ通過シテ其頂上ニ達ス是等ノ維管束ハ根ニ於ケル如ク鞘皮細胞ニテ圍繞セラレタル導管ヨリ成リ全体ハ外膜ノ甚厚キ細胞鞘ニ由テ包マル

（未　完）

○バクテリアノ説

K. D. 山人　纂譯

何レノ國ニ在リテモ家畜カ肺病ノ爲メニ斃ルヽコトアルハ通例ナリ而シテ人類ニ於ケルカ如クコモマタ黴菌ニヨリテ發生セラルヽモノニシテ其黴菌カ此病ニ罹レル牝牛ノ乳ノ中ニ含有セラレ或ハ其他既ニ感染セル家畜ノ肉中ニ於テ之ヲ見ルヲ以テ其重ナル病源ノ是等ノ中ニ存スルモノナルヲ知ルベキナリ

苟クモ人類ニシテ未タ全ク魔道ニ陷ラズ其心ニシテ左マデ邪惡ナラサル限リハ黴菌病ニ罹レル家畜ノ肉ヲ市ニ鬻ギ以テ利ヲ獲ルモノアリトハ決シテ信ジ得ベキ所ニアラズサレド斯ノ如キ家畜ノ肉ノ多量ハ年々市街ニ上リ而シテ貧民無智ノ徒ガ通例食スル所トナルハ復タ疑フベカラサル事實トス而シテ能ク之ヲ煮炙スレバ以テ其中ニ在ル黴菌ヲ殺スヲ得ヘケレトモ多量ノ肉ハ何レノ所ニ於テモ善ク煮炙スルコト罕レニシテ或ハ少シク煮炙ヲ加ヘ消費スルコトヲ通例トス即チ臘腸（ソーセージ）或ハ截片（マインスドメッス）トナシテ之ヲ食フコト多シ病性ヲ固有スル人ニ在リテモ腸内ニ於テハ結核黴菌ノ害ニ感スルコト身体ノ他ノ部分ニ於ケルガ如キモノニ非ズサレド結核黴菌ヲ有スル乳若クハ肉ヨリ發スル危難ハ頗ル多ク且ツ尤モ重キモノナリ

凡ソ結核黴菌ニ最モ感シ易キモノヲ肺臓トス而シテ其呼吸機管ニ入ル普通ノ方法ハ結核黴菌ノ存スル室内若クハ室外ノ空氣中ニ浮游スル塵埃ヲ呼吸スル時ニ因ル之ヲ約言スレバ肺病ハ空氣中ニ於ケル塵埃ニヨリテ人ヨリ人ニ結核黴菌ヲ間接ニ移スニ因リテ起レルモノナリ

サテ又結核黴ガ病者ノ体中ヨリ更ニ空氣中ニ出ツル方法ハ下ノ如シ即チ肺臓中ニ在リテ結核黴菌ガ造リ出セル新組織ノ小塊ハ十分血液ヲ供給セラレザルヿアリ是カ爲メ其小塊ハ或ル他ノ原因ニ由リテ粉碎セラレテ細微トナリ竟ニ咳嗽ノ爲メニ拂ヒ出サレ唾ト共ニ吐キ出サル然ルニ此粉碎セラレタル極微ノ分子中ニモマタ多量ノ黴菌ヲ混スルコトアリ而シテ病者ノ吐出セル是等ノ物質ハ直ニ燒失セラルヽカ或ハ石炭酸或ハ効力アル消毒劑（テスインフエクタント）ニヨリテ之ヲ消滅シ以テ其蔓衍ノ危難ヲ防クコト常ナレドモ不幸ニシテ其實消滅セラルヽコト稀レニシテ無數ノ病者ハ常ニ街上ヲ步行シ或ハ多人數麕集ノ場處ニ到リ途上若シクハ床上ニ有害ナル物質ヲ吐出スルコトアリ斯クテ此等ノ物質漸々乾燥シ直ニ地上或ハ床上ヨリ浮ヒ出デ再ビ空氣中ニ亂散スル塵埃ト相混

ズサレバ病者ガソノ室中ニ於テ吐出スル物質ヲ消滅シ若シクハ運ヒ去ル時ニ當リテモ十分ノ注意ヲナサヾル時ハ右ト同ジク蔓衍ノ危難ヲ生ズルモノナリ無數ノ黴菌カ十分注意ノ行屆カザル病室ノ壁上ニ塵埃ト共ニ附着スルコトハ間々アルコトニシテ是ハ全ク塵埃ノ如ク唯空氣ニヨリテ壁上ニ運ビ去ラレタルモノナルコト既ニ吾人ノ實驗スル所ナリ又病者ノ吐出物ガ手中ニ附着シ而シテ乾燥セル時ハマタ均シク危難ノ根源タルヲ免カレズ此クノ如キハ獨リ他人ニ傳染スルノミナラズ新ニ病者自身ニ害ヲ及ボスモノナリ

病者ノ吐出セル物質ガ普通ノ場合ニ於テ空氣ノ中ニ在リテ病毒ノ根源トナルハ其物質ガ乾燥スルニ因ルモノナルコトヲ記憶スベシ黴菌ノ濕ヒタル時ハ決シテ空氣中ニ飛散スルモノニ非ズ故ニモシ如何ナル有害ノ黴菌ナルニモ拘ラズ十分濕ヒクルモノヲ地上ニ堆積シ而シテ其表面ヲ强ク吹キ來レル空氣ヲ呼吸スルトモ必ズ害ヲ及ボスコトナシ而レドモ其濕ヒタル吐出物ノ表面ヲ横リ來レル空氣ニシテ十分分子（パーチクル）ヲ其塊ヨリ分離スベキホドニ强ク吹ク時ハ其害ヲ及ボスコト無論ナリ唯來前論ジタル要點ハ則チ肺病患者ノ呼吸ハ決シテ害ヲ及ボスモノニアラズトイフニ在リ即チ換言スレバ呼吸機管或ハ口中ヲ通シテ來レル空氣ハ黴菌ヲ含マサルナリサレト接吻スレバ必ズ能ク其毒ヲ傳フルモノナリ

肺癆ニ就キ是等ノ事實ヲ語ルモ聞クモ實ニ快カラヌモノニテ更ニ患者及其家族並ニ朋友ヲシテ無上ノ苦ヲ感セシムルモノナリ若シ十分ノ用心注意ナクバ患者ハ啻ニ患者ニ接スル人々ニ害毒ノ根源ヲ與フルノミナラズ又患者ガ現ニ居住スル室内若シクハ曾テ居住セシ室内ニ於テ塵埃ヲ含メル空氣ヲ呼吸スル人々ニマデ感染セシムルモノナリ故ニ能ク此事ヲ了解シテ注意スレバ注意スルホド善ク防クコトヲ得ルナリ

サレバトテ以上述ベ來リタル事實ヨリ推シテ街上ヲ歩スル人病院ニ赴ク人劇場ニ遊フ人ハ必ズ肺癆ヲ感スル

モノナリ受クルモノナリト思惟スルハ不可ナリ何トナレハ第一有害ナル物質ハ如何ナル場合ニ在リテモ浮動スル空氣ノ爲メニ散亂セラレテ多量ノ黴菌一處ニ止マルコトナキヲ以テ人ノ之ニ觸ルヽノ機會亦甚タ少シ第二普通健康體ヲ有スルノ人々ハ固ヨリ此病ヲ感スルノ性ナシ唯一種特別ノ場合ニ於テ其害ヲ受クルコトアルノミ第三有害ナル物質ノ分量ハ毎ニ空氣ノ爲メニ散ゼラレテ甚タ僅少トナルガ故ニ其空氣中ニ散布セルヨリ生ズル危難ハ甚ダ減スルモノナリ第四人々ノ呼吸機管ニハ微小ノ細胞アリ而シテ其表面ニハ顫毛ト稱スル毛髮狀ノ突起物アリテ斷エズ前後左右ニ搖動シテ空氣ト共ニ呼吸セラレ以テ入リ來ル分子（パーチクル）ヲ肺臟ヨリ放出スルモノナリ以上ノ如キ事情ニ因リテ人身ヲ保護シ以テ十分有毒ナル黴菌ノ危難ヲ防グガ故ニ實際病ヲ感シタル人類或ハ動物ヨリ直ニ其黴菌ヲ体中ニ移シ入ルヽニ非レバ一般ノ人々ハ决シテ肺痰ヲ患フルコトナシ

結核黴菌ハ馬鈴薯或ハ其他ノ物体ニ耕植スルコトヲ得但シ其物質ノ表面ハ常ニ濕潤ナラシメ且其温度ノ如キハ体温ト殆ンド同一ナルヲ要ス而シテ此黴菌ハ人体或ハ動物ノ体中ヲ離レテ外界ニ生育スルコトナシサレトモ全ク乾燥スルニ至ルモ能ク長ク其生ヲ失フコトナクシテ場合ノ宜シキヲ得タランニハ更ニ体中ニ入リテ發育スルモノナリ

肺痰ニ感シタル家畜ハ其痰ヲ發見シタルト同時ニ直ニ之ヲ殺シ其肉ハ燒失スルカ或ハ他ノ方法ニ因リテ其害ヲ防クベキハ勿論决シテ市場ニ鬻クコトヲ許スベカラズ故ニ是等ノ家畜ヲ有スルモノヽ金錢上ニ於ケル損害タルヤ固ヨリ大ナリト雖モ若シ之ヲ放棄スルニ於テハ其害毒ノ及フ所實ニ尠少ナラサルコトヲ知ラバ何ゾ其損失ノ多少ヲ考フルノ暇アラムヤ而シテ是等ノ目的ヲ達スルニハ先ツ官吏ガ嚴重ニ其家畜ト肉トヲ撿査シ次ニ法律ヲ發シテソノ知リツヽ肺痰ニ罹レル家畜ノ肉及ビ乳ヲ食品トシテ賣却スルモノハ謀故殺誤殺ト同一ナ

ル刑罰ニ處スルコトヲ規定スヘキナリ

空氣ノ媒介ヲ以テ人ヨリ人ニ傳染スル肺痨ノ蔓衍ヲ法律ノ規定ニヨリテ防カントスルハ極メテ至難ノ事ナレトモ若シ人々ニシテ十分ノ注意ヲナサヽル時ハ更ニ肺病患者カ根源トナリテ四邊ノ人ニ害ヲ及ボスモノタルコトヲ能ク心ニ意得スル時ハ其害惡ヲ減退スル上ニ於テ大ナル助トナルベシ又滊船會社及鐵道會社ナドニテハ肺病患者ノ爲メニ別室ヲ設ケ以テ健康ナル人々カ旅行ニ際シテ感染ナカランヤウスベキモノナリ

以上述ベタル規律區別ノ如キハ固ヨリ其患者其朋友及ビ患者ニ關係ヲ有スルモノヽ身ニ取リテハ至リテ苦惱ヲ覺エシムルモノナリサリナガラ此畏ルヘキ病ニ罹リ必要モナキニ自ラ好ンテ死ナンコトヲ欲スルニ非サル以上ハ人々ハ當サニ其理ヲ解スベキナリ

肺病患者ノ唾液（スパタム）ハ既ニ述ヘシ如ク其乾燥スルニ當リテ患者自身並ニ他人ニマテ甚シキ害ヲ及ボス根源タルモノナレバ能ク之ヲ始末スベシ而シテ其最良法ハ燒失スルニ在リ

而シテ其之ヲ燒失スル方法ハ藥種屋ナトニテ廉價ニ發賣スル木若クハ厚紙ニテ造レル小函ニ入レテ再々之ヲ煖爐若クハ火爐ノ裡ニテ燒盡クスヲ宜シトスモシ又手中或ハ布片ニテ吐出セル物質ヲ裹ム時ハ速カニ之ヲ燒クカ又ハ五ペルセントノ石炭酸ヲ溶解シ數時間之ニ浸シ置キ然ル後沸騰シテ洗濯スベシサレド成ルベク此方法ヲ用ヰサルヲ可ナリトス何トナレバ手中布片ハ有害ナル物質ヲ乾燥シ且ツ蔓衍セシムルニ最モ適シタルモノナレバナリ

吾人ハ結核黴菌ニ就キ爰ニ知リ得タル所ニヨリテ其蔓衍ヲ防遏スルニ適切ナル方法ヲ明カニスルヲ得タリ而シテ如何ナル方法ニヨリテ既ニ此病ニ陷レル人々ヲシテ失望スルコトナカラシメ以テ之ヲ慰ムルノ智識ヲ得

タルヤトイフニ第一醫師ハ患者ノ吐出セル物質中ニ結核黴菌ノ存スルヲ見テ肺臟ニ病アルコトヲ明言スルヲ得ルニ至レルコト是レナリ何トナレバ肺病ハ昔時ノ如ク到底治療スベカラザルモノニアラザルコトヲ知レバナリ殊ニ其初發ノ時ニ發見セラルヽニ於テハ大ニ治療ノ望アルガ故ニ若シ体中ノ細胞ニシテソノ勢力活潑ニ且ツ强健ナランニハ更ニ黴菌ヲ滅殺スルニ難カラス故ニ叉機敏ナル醫師ハ氣候ノ變化ヲ説キ健康運動及ビ食物ノ漸次改良シタルヲ述ベ或ハ患者ノ身体ヲ保持强健ナラシムル藥劑ヲ與ヘテ以テ患者ニ全快ノ望アルヲ語ル生命ヲ長ク保持シ得ベキコトヲ請合ヒ以テ患者ヲ慰ムルコトヲ得

兎ニ角今日ニ至リテハ敵カ何タルヲ知リテ之ト戰フノ觀アリ故ニ從前ニ於ケルガ如ク復タ不可思議ナル敵ノ後ニ在リテ何ノ辨別モナク畏レ戰クカ如キ愚ヲ學フニ及バサルナリ俊秀ナル醫師ハ人体ニ於ケル黴菌ヲ直接ニ消滅スルニ最モ効力アル手段ヲ知ラント欲シテ時ニ刻々其腦漿ヲ惱スカ故ニ早晩人体ガ固有スル治療ノ方法ヲ助クルコトヲ得ルハ決シテ困難ノ事ニ非サルベシトスルニ至レリ

○松竹梅

松竹梅を、わが邦には慶賀のものとす、唐土にては歳寒三友といふこと、月令廣義に見えたり、葛原詩話に、世俗の恒言にして賦詠に顯ること稀なり、高士奇が金鼇退食筆記に、五龍亭舊爲㆓大素殿㆒、創㆓于明天順年㆒、在㆓大液池西南㆒、向後有㆓草亭㆒畫㆓松竹梅于上㆒、曰㆓歳寒門㆒、また元張伯淳題㆓皇甫松竹梅圖㆒詩あり、曰、三友亭々歳晩時、政緣㆓冷澹㆒易㆓相知㆒、何須近舍今皇甫、却向㆓圖中㆒覓㆑補㆑之、元詩二集養蒙先生集に出づといへり、猶ふるく見えたるは、元次山丐論に、古人鄕無㆓君子㆒則與㆓山水㆒爲㆑友、里無㆓君子㆒則以㆓松竹㆒爲㆑友、坐無㆓君子㆒則以㆓琴酒㆒爲㆑友、東坡詩に、風泉兩部樂松竹三益友といへること、陔餘叢考歳寒三友の條にいへり、唐

の李笠か題畫の詩に、對レ雪寒窗酌レ酒、敲レ水暖閣烹レ茶、醉裏呼レ童展レ畫、咲題ニ松竹梅花一とあり（世事百談）

◎寄贈書目

釀造雜誌（第百五十號第百五十一號）　釀造雜誌社○水產雜誌（第十號第十一號）　北水協會事務所○東京醫學會雜誌第八卷（第十一號第十二號）　東京醫學會○牧畜雜誌（第百三十號第百三十一號）　牧畜雜誌社○國家醫學會雜誌　第八十六號　國家醫學會○大日本山林會報　第百三十八號　大日本山林會事務所○動物學雜誌　第六十八號　動物學會○地質學雜誌　第九號○大日本農會報　第百五十三號　大日本農會事務所○日本藥業新誌　第貳百五十七號　衞生社○東洋學藝雜誌　第百五十三號　東洋學藝社○地學雜誌　第六十六號　地學協會○日本蠶業雜誌　第七十三號　日本蠶業雜誌社

Bulletin of Miscellaneous Information. No. 84—6. 及ビ No. 88. Royal Gardens, Kew.

The Journal of Botany. No. 377.

The Gardeners' Chronicle. No. 384—386.

Bulletin de l'Herbier Boissier. Tome II. 1894. No. 3. 4.

◎東京植物學會錄事

明治廿七年六月廿三日午後二時ヨリ植物學講義室ニ於テ月次例會ヲ開キ幹事大久保君ノ報告アリ次テ堀正太郎君ハ二三有要植物ノ害菌ニ就テ氏ガ實驗ノ結果ヲ演說セラレテ其標品ヲ示サレタリ又當日會員諸君ノ出品ニ係ル顯微鏡的標品「チグネマ」一ノ接合（ピクロニグロシン」一ニテ染色シ「バルサム」一ニテ封裝ス（池野君出品）即チ本會雜誌第八十八號第五版ニ掲載シタルモノ及ビ淡水藻「パンドリナ」一（オスミツク酸ニテ固定シ「グレセリン」一ニテ封裝ス幷ニ其活潑ニ游泳スルモノ（大久保君出品）等ヲ縱覽ニ供シテ散會セシハ四時半ナリシ

菊池熊太郎君著

中程地文學

本書ハ文部省規定ノ師範學校及中學校學科程ニ適テ編纂シ專ラ中等教育程度ノ教科書トスルヲ目的トシタルモノニシテ其編纂ノ順序大綱ニ於テハ「ガイキー」氏ノ地文學ニ據リタレドモ書中ノ記事ニ至リテハ數多ノ地文書ヲ參酌シテ編者又別ニ一新體ヲ成ス所アリタレバ中學校及師範學校中學教育ノ學課ニ恰當スル諸學校教科書トシテ最モ適切ナル編著ナリト信ズ巻中挿入スル所ノ圖書ハ極メテ鮮明ニメ殊ニ精巧ナル地文的地圖拾四葉ヲ加ヘタリ又タ日本地文ノ概論ハ別ニ編ヲ更メテ下巻ノ巻尾ニ附シ紙數ハ上下通ジテ二百四十餘頁ナリ本書ハ地文教科書トシテ實ニ近來ノ好書ナルコトハ出版以來僅ニ四箇月ニシテ上巻ノ初版ヲ賣リ盡クセルヲ以テ證トスベシ今ヤ上巻ノ再版成リ且下巻ノ刻ヲ卒ヘタリ大方教育家諸君陸續需用アランコトヲ

全二冊

上下（合本）出版

定價（金七拾錢郵税金拾錢紙數二百四十餘ページ精密木版數十個石版十四葉入上巻定價金四拾五錢郵税四錢下巻定價三拾錢郵税四錢）

菊池熊太郎君著

新撰小地文學

全一冊定價金貳拾五錢郵税金四錢

頁數百四十餘木版三十五精密石版圖二葉挿入

◉發兌書肆　東京市神田區裏神保町一番地
電話番號（二百五十八番）
敬業社◉

其他東京大阪以下各地方書林ニ於テ販賣ス

動物學雜誌

第六拾八號

明治廿七年六月十五日發行一册金十錢郵税金一錢〇六册前金六十六錢（郵税共）

目次〇小笠原島動物界（前篇）弘田貞守稿〇イスのアブラムシの話名和靖君〇本邦ニ產スルあはび類の貝岸上鎌吉君〇甲殼類の大さ（つゞき）丘淺次郎君〇わくちにや保存法に就き大森千藏君**雜錄**◎動物學研究用藥劑便覽（前號ノ續）◎膃肭獸及臘虎（承前）◎季氏日本及朝鮮產鱗翅類（承前）◎偕老同穴◎さんせうのうを◎わみながくらげ◎鯊◎所謂正覺坊◎敢テ石川博士ニ望ム◎東京動物學會

發賣所 東京神田裏神保町 **敬業社**

東洋學藝雜誌

第百五十三號
明治廿七年六月廿五日發兌

一册金十錢郵税一錢六册前金五十四錢

論說〇再び統計を論ず藤澤利喜太郎〇横山君に答ふ藤澤利喜太郎〇ポーランド亡滅ノ話箕作元八〇英語學ノ研究神田乃武〇支那畫史概論末松謙澄〇落雷ニ付テ（挿圖數個）水野敏之丞◎雜錄〇蚊帳ニ付テ水野敏之丞◎雜報〇ガウスとは何人ぞ〇角の三等分〇フェルマー〇トムソン研究資金〇クライン教授の數學講義〇印度地質調査〇農業雜誌記者に質す〇强震の振幅〇太陽中酸素の存否〇水銀蒸氣の壓力〇ポン大學物理學教授〇再び熱の仕事當量に就て〇植物の最大葉〇埋れ木の棺〇博物學上名所名物案內等◎應問〇撿視力表三宅秀

發行所 東京神田 **東洋學藝社**

地質學雜誌

第十號
明治廿七年
七月十五日
發兌

一册金十錢郵税一錢六册前金五十四錢（郵税共）

一卷首圖第十四版◎論說及報文〇函根火山研究錄（前號ノ續き）石井八萬次郎君◎雜錄〇明治二十七年六月廿日地震驗測報告關谷清景〇サカリン（樺太）島（承前）清水實隆君〇菫青石を有する噴出岩に就て（承前）小川琢治君〇ダヰソン氏の地震の一年周期及半年周期論（承前）岩崎重三君〇蚶瀉盛時の景況管谷惣一郎君◎雜報〇旅中見聞鎖談の續き〇淺間山又噴出す〇又〇稀有の大鉑〇八幡避暑講習會〇抉提島の砂鉄〇女化原（オナバケバラ）〇硅化木第一報〇新地質學士

發賣所 東京神田裏神保町 **敬業社**

新刊廣告

理科大學敎授博士松村任三先生著

日光山植物目錄

全一冊

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校ノ敎員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田裏神保町　敬業社
東京日本橋通三丁目　丸善書店

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌每月一回發兌一冊金拾貳錢○六冊前金七拾貳錢
○拾二冊前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹冊拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セス○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セス○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御屆可申候

明治廿七年七月十九日印刷
明治廿七年七月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所　敬業社
同　同所　丸善書店
東京日本橋區通三丁目

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] July 20, 1894. [No. 89.

明治廿六年六月三十日遞信省認可

明治廿一年二月三日内務省許可

CONTENTS.

Chemical Researches on the Aconitum and other Plants. (Continued from No. 87.) By **Prof. Dr. J. Shimoyama.** 279

Generic Characters of Japanese Ferns. By **T. Makino.** 282

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. By **K. Sawada.** 283

Studies on the Buckwheat. By **T. Ichimura.** 288

Hepaticeæ of Tosa. By **T. Inoue.** 291

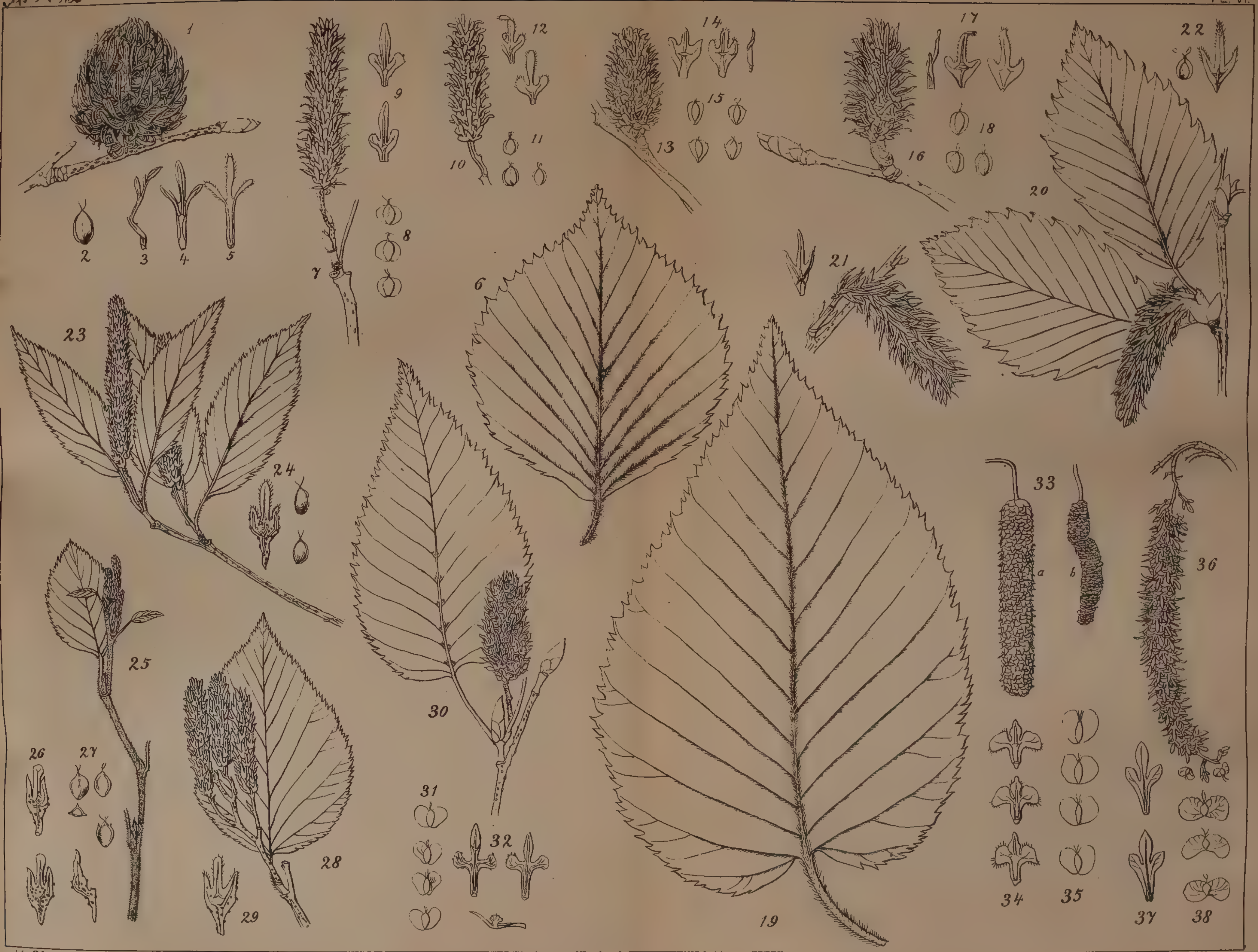
Miscellaneous:— 294

Bulletin of the Agricultural College, Imp. Univ. Vol. II, No 1.—E. Bescherelle's Japanese Bryology.—Miscellaneous. Notes on the Plants of "Yojōsho-oku."—Mycoderma.—Nitella japonica, Allen.—Root-tubercles of Leguminous Plants.—Bacteria.—Pine tree.—Proceedings of the Tokyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

印刷所 東京市神田區錦町三丁目廿五番地 熊田活版所

第六版 PL. VI.



M. Shirai del.

植物學雜誌第八卷第九拾號 (明治廿七年八月二十日)

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII. August 20, 1894. NO. 90.]

JAPANESE SPECIES OF BETULA.

By Mitsutarō Shirai.

There are mentioned in Franchet et Savatier's "Enumeratio Plantarum" 7 species and 2 varieties of Betula, and in the Catalogue of Plants in the Herbarium of the Science College of the Imperial University, 5 species and 2 varieties. Later in 1888 M. J. Maximowicz described a species (i. e. Betula Ermani, Cham.) and a new variety (i. e. Betula Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim.) as occuring in Japan. Since that time, as far as I know, nothing has been heared about the discovery of any new Japanese species of Betula. In the winter of 1893, I had the opportunity to discover an entirely new species and a variety new to the Japanese flora, on Mount Mitsumine in the province of Musashi. Besides, through the kindness of Mr. T. Makino of the Imperial University I was able to examine a specimen of Betula from Yamagata district, in the province of Uzen, which seems to be Betula Bhojpattra, Wall. var. Jacquimontii, Regel, also new to our flora. Adding these newly found Betulae to the already known species, we can now count 9 species and 5 varieties in the Japanese flora.

I shall here describe the newly found species and add some notes on others.

1. **Betula globispica** (new sp.) (**Fig 1—5.**)

Jap. Jizōkamba. (newly named).

I first discovered this species on 17th October 1893 at Katsuradaira Forest situated near the summit of a peak in the Mitsumine mountain at a distance of about 24 chō from the Mitsumine temple. I found the same species for the second time on 3rd April of this year in Nikkō, near the tea-house in front of the Kegon-waterfall. Different from all the other species of Betula, the form of the strobile of this species is almost globular and very characteristic. I have therefore named my species globispica.

Description :—A large tree attaining to the height of 20 meters or more. Bark,—grayish-brown, hard and thick, not papyrous, at first smooth, cracked and falling off in patches when old. Wood,—white with light brown tinge, harder and heavier than that of B. alba, var. vulgaris. Leaves,—round-rhombic, serrate, cuneate at the base, pointed at the apex, hairy on the midrib and veins of the under surface, petiole also hairy. Strobile,—globular or oval; scale loosely arranged, persistant, with a long foot, deeply 3-lobed; lobes spatulate, at first ciliate at the margin, afterwards smooth; median lobe longer than the lateral, almost as long as the foot. Nutlet,—oval, lenticular, wingless.

2. Betula alba, L. var. communis Regel. (**Fig 30–32.**)

Jap. Makamba, Nagahano-shirakamba.

Ainu. Datchini, Pettat.

This variety is not mentiond in Franchet and Savatier's Euumeratio and also in the Catalogue of the Herbarium of the Science College of the Imperial University. On 17th October 1893 I collected the fruit of this species for the first time, and from this fruit I determined the species. This species is widely distributed in our country from Yamato in the south to Hokkaido in the north. It is curious that the plant having so wide a range of distribution in Japan has not been hitherto mentioned by the authors of its flora. The bark of this variety is of a slightly red color compared with that of B. alba, var. vulgaris.

3. Betula, alba, L. var. vulgaris, Regel. (**Fig. 33–35.**)

Jap. Shirakamba ; Shirozakura.

The specimen. (a) figured was collected by S. Ikeno in Niiyasu, Shinano.

4. Betula alba, L. var. Tauschii, Regel.

Jap. Ōba-no-shirakamba.

Very common.

5. Betula Bhojpattra, Wall. var. typica, Regel. (**Fig. 25–29.**)

Jap. Onoore ; Minebari ; Onnore ; Onnoren.

The specimen figured was collected at Chūzenji in Nikko.

6. Betula Bhojpattra, Wall. var. subcordata, Maxim.

7. Betula Bhojpattra, Wall. var. Jacquimontii, Regel. (Fig. 23,24.)

Jap. Nagaba-no-onore.

Of the 3 varieties of this species, var. subcordata has not yet been collected by us, and the var. Jacquimontii is the newly found variety. Not yet mentioned in European works on the Japanese flora.

In Regel's "Monograph of Betula" it is stated that the bark of this species is papyrous and is used by the Hindoos as a substitute for paper, which character, in spite of the close coinsidence of the other characters does not agree with the bark of our plant, which is like that of Betula globiscipca, I venture to say it is not impossible that there was some error on this point in Wallich's original remark.

8. Betula grossa, S. et Z. (Fig. 13—15.)

Jap. Midzume; Koppada-minebari; Itaya-minebari; Midzune.

The specimen figured was collected by me in Nikkō near Yumoto.

9. Betula ulmifolia, S. et Z. (Fig. 16—19.)

Jap. Ōba-minebari; Yoguso-minebari.

The specimen figured was collected at Chūzenji in Nikkō.

10. Betula Ermani, Cham. (Fig. 7—9.)

Jap. Yezo-no-takekamba ; Sōshi-kamba ; Kurokamba ; Dosugampi.

The specimen figured was collected at Yumoto in Nikkō. The occurrance of this species south of Hokkaido is not yet mentioned by European authors.

11. Betula Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim. (Fig. 10—12.)

Jap. Take-kamba.

The specimen figured was collected at Nyohōzan in Nikkō.

12. Betula corylifolia, Regel. (Fig. 20—22.)

Jap. Urashiro-kamba ; Nekoshide ; Makamba.

The specimen figured was collected at the Mount Shirane in Nikkō.

13. Betula Maximowicziana, Regel. (Fig. 36—38.)

Jap. Udai-kamba ; Saihada-kamba.

The specimen figured was collected at the Mt. Mitsumine.

EXPLANATION OF THE PLATE VI.

Betula globispica, Shirai.

Fig. 1, Strobile; 2, nutlet; 3, 4, and 5, scales of strobile; 6, leaf.—*Figs.* 2-6 *enlarged.*

Betula Ermani, Cham.

Fig. 7, Strobile; 8, nutlets; 9, scales of strobile.—*Fig.* 9 *enlarged.*

Betula Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim.

Fig. 10, Strobile; 11, nutlets; 12, scale of strobile.—*Fig.* 11 *and* 12 *enlarged.*

Betula grossa, S. et Z.

Fig. 13, Strobile; 14, scales of strobile; 15, nutlets.—*Figs.* 14 *and* 15 *enlarged.*

Betula ulmifolia, S. et Z.

Fig. 16, Strobile; 17, scales of strobile; 18, nutlets; 19, leaf.—*Figs.* 17 *and* 18 *enlarged.*

Betula corylifolia, Regel.

Fig. 20, Leaf and young strobile; 21, strobile and a scale; 22, scale and nutlet of fig. 20.—*Fig.* 22 *enlarged.*

Betula Bhojpattra, Wall. var. Jacquimnotii, Regel.

Fig. 23, Branch; 24, scale and nutlets.—*Fig.* 24. *enlarged.*

Betula Bhojpattra Wall. var. typica, Regel.

Fig. 25, Young branch; 26, 29, scales; 27, nutlets; 28, strobile.—*Figs.* 26, 27, *and* 29 *enlarged.*

Betula alba, L. var. communis, Regel.

Fig. 30, Strobile; 31, nutlets; 32, scales.—*Figs.* 31 *and* 32 *enlarged.*

Betula alba, L. var. vulgaris, Regel.

Fig. 33. Strobile; 34, scales; 35, nutlets.—*Figs* 34 *and* 35 *enlarged.*

Betula Maximowicziana, Regel.

Fig. 36, Strobile; 37, scales; 38, nutlets.—*Figs.* 37 *and* 38 *enlarged.*

日本樺屬ノ說

日本樺屬ノ種類ニ就テハ佛國フランシー。サバチエー兩氏選述日本植物目錄ニ六種二變種ヲ擧ゲ帝國大學植物標品目錄ニ五種二變種ヲ記載セリ其後セントピータースバーグノマキシモウイクツ氏ハ Melanges biologue 第十二冊九百二十三枚ニ一種 Betula Ermani, Cham. 及一變種 Betula Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim. ヲ記載シ日本ニ產スル事ヲ云ヘリ

予ノ知ル所ニテハ此他日本樺屬ノ種類ニ就キ新見ノ說ヲ記述セル者アルヲ聞カズ

予頃年此屬ニ就キ少シク探究スル所アリ一ノ全ク新奇ナル種類及二ノ稍新シキ變種トヲ發見セリ此ニ已知ノ種類七種三變種ヲ加フルトキハ日本樺屬ノ種類總計八種五變種トナル依テ玆ニ此等新撿出ノ種類ヲ記述シ併セテ從來已知ノ種類ニ就キ講究セル事項ヲ附錄スベシ

我邦樺屬ノ種類ニ就テハ日本植物學上ノ三大著述ト稱セラルヽ草木圖說、本草啓蒙、本草圖譜ノ三書共ニ唯白樺ノ一種ヲ記述セルノミニシテ他ノ種類ハ悉ク省略セリ是我邦植物分類學講究上ノ一大欠典ト云フベシ予ガ固陋ヲ顧ミズ此說ヲ作ル所以ノ者ハ聊カ此不足ヲ補ハンガ爲ノミ

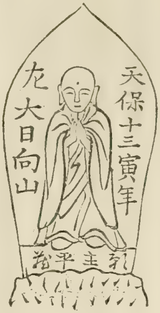
此說ヲ記述スルニ當リ大ニ鳴謝スベキハ理科大學敎授松村先生ガ大學植物標品及參考書類ヲ自由ニ撿閱スルノ便宜ヲ與ヘラレタルト友人牧野富太郎氏ガ二種ノ標品ヲ惠與セラレタルノ事ナリ

(一)地藏かんば　（新種新稱）(第六版一圖ヨリ六圖ニ至ル)

Betula globispica Shirai. (sp. nov.)

此種ハ西書及本邦ノ諸書ニ未ダ嘗テ其記載ヲ見ザル者ニシテ明治廿六年十月十七日武州秩父郡三峰山中

かつらだいら官林ノ上部ニ於テ初メテ撿出セリ鱗果ノ形狀大ニ尋常品ト異リ球形ヲナスニヨリ羅丁名ヲ B. globispica ト命ゼリ又此種ヲ撿出セル場處ハ三峰山神社ヨリ大日向山ニ至ル通路ニシテかつらだいら官林上部ノ峠ヨリ壹丁許下ナリ然シテ峠ノ頂上ニハ地藏像ヲ彫刻セル小キ道しるべノ石碑アリ圖ノ如シ


天保十三寅年
左大日向山
施主平治

此石碑ヨリ大日向山エ下リ道一里アリ又右ノ方雲取峠エ四里アリ

依テ紀念ノ爲和名ヲ地藏かんばトナセリ其後本年四月三日日光山中華嚴ノ瀧前面ノ茶店ヨリ少シク下リタル懸崖即チ瀧ノ正面ヲ望ム場所ノ路傍ニ於テ同行學生白澤保美氏ト共ニ二拱餘ノ大木ヲ撿出セリ予日光ニ遊ブコト前後五回毎回此樹下ヲ過キリ而シテ之ヲ撿出スル能ハザリシハ瀧ノ壯觀ニ眩目セルガ爲ノミ今回ハ樺屬柳屬ノ探究ヲ目的トシテ來リシノミナラズ瀧ノ落口氷雪ニ埋マリ居タレバ只管植物ニノミ注意セルカラ遂ニ之ヲ撿出スルニ至レリ近時外國植物家ノ此地ニ遊ブ者亦尠カラズ而シテ此樹能ク彼等ノ鋭眼ヲ免レタルハ奇ト云フベシ予輩外國人ニ先ツテ之ヲ撿出シ同胞ニ告知スルヲ得タルハ衷心窃ニ喜悦ニ堪ヘザル所ナリ

形狀 大木ニシテ十間若クハ其餘ニ達ス○樹皮灰白褐色堅厚ニシテ初メ平滑老スルニ及ビ鱗甲狀ヲナシ剝脫ス紙狀ヲナスコトナシ材質緻密堅重ニシテ微淡茶色ヲ帶ビしらかんば材ヨリ堅重ナリ葉ハ中央最濶ク似圓斜方形ニシテ末微凸頭ヲナシ本楔形ナリ周邊不齊ノ細鋸齒アリ葉背ノ中肋及橫脉上ニ細長毛アリ葉柄ニモ細長毛アリ葉片長二寸餘幅一寸七分餘葉柄長四分餘鱗果球形粗大鱗片冬ヲ凌ヒテ落チズ各片ノ脚部細長ニシテ頭三分ス其分片各箆形ヲナシ初メ緣邊ニ纖毛ヲ具ヘ後無毛トナル中央ノ分片最長ク二分餘兩側ノ者稍短ク一分餘アリ子實卵圓扁平ニシテ稍厚ク恰ンド翅ナシ

(二)まかんば（新稱）(第六版三十圖ヨリ三十二圖ニ至)

B. alba, L. var. communis, Regel.（學名新考）フランシエー、サバチエー兩氏日本植物目錄、大學標品目錄ニ此種ヲ載セズ

按ズルニ蝦夷草木譜ニ此種ヲ圖說シタツニト記名セリ畔田翠山翁ノ古名錄樺木ノ條ニ此種ヲ圖說シ和名ヲしらかんばトセリ其他小野蘭山翁ノ日光採藥記ニしらかんば一種長葉ノ者ト云フ者恐クハ是ナラン近時ノ著述ニテハ杉山氏ノ北海道樹木志料ニまかば土人名ダッチニト記セル者是ナレ𪜈其記載ハさいはだかんばト混同シ書セリ故ニ氏ガ記セル方名、學名及記載ハ取ル可ラズ又植物學雜誌第六十二號ニ記載セル宮部金吾神保小虎兩氏合著北海道植物ノアイヌ名ト題スル說ノ中ニしらかんばノ一種ニシテ白皮厚ク赤味ヲ帶ブル者アイヌ名 Pettat (十、沙、等)ト記ス者此種ニ外ナラザルベシ此木ハ內地ニテまかばト稱スル處アルノミナラズ北海道ニテモ之ヲまかばト稱スルハ近時法學士山田喜之助氏ガ農科大學ニ獻納セ

ル北海道木材標品ニ徵シテ之ヲ知ルベシ故ニ和名ヲまかんばトセリ

予ハ明治廿六年十月十七日武州秩父郡三峰山中ニテ初メテ此種ノ鱗果ヲ採收シ此ニヨリテ羅丁名ヲ考索セリ又本年四月三日日光山中中禪寺湖邊華嚴瀧邊及大だいら邊ニテ此種ヲ多ク撿出シ採收セリ大だいらハ實ニ此樺ノ名所トモ稱スベキ所ニシテ路ノ左右ニ白ク見ユルハ皆此種ナリ多數ノ立木ニ就テ比較研究スルニ皮ノ赤ミヲ帶ブルハ直徑一尺內外ノ者ニ限リ老大ノ者ニ至リテハ銀灰色ヲ呈スルヲ常トス又小木ノ時ヨリ銀灰色ナルモノアリ又其赤ミニモ濃淡ノ差別アリ日光山民ノ中ニハ此木ノ樹皮赤味多キ者ヲあかかんばト稱スル者アレ𪜈此名ハ前記ノ例外アルガ爲適當ナラズト考フ

形狀

大木ニシテ十間餘ニ達ス樹皮薄層相重ナリ紙狀ヲナシ剝脫ス白色ニシテ赤味ヲ帶ブルナリ銀灰白色ニシテ赤味ナキアリ赤味勝ニテ白色ナキアリ材質緻密白色ニ〆前種ヨリ輕シ葉形卵圓銳尖頭若クハ卵圓心臟狀銳尖頭ニシテ周邊ニ不齊ノ細鋸齒アリ新枝及葉ノ裡面ニ脂點多シ葉裡ノ中肋ト橫脉トノ腋ニ鬚毛アリ葉片長二寸二分餘幅一寸二分餘アリ葉柄長六分許無毛ナリ鱗果圓壔形ニシテ直立ス長七八分許有柄柄長四分許鱗片山字形ニシテ長脚アリ果實ニ潤キ翅アリ實身ノ二倍餘ニ及ブ

應用

日光山ニテハ山民往々此種ノ樹皮及普通ノしらかんば大ばしらかんばノ樹皮ヲ以テ茅屋根ノ下葺ヲナス者アリ數十年ヲ經テ朽チズト云フ近時此種ノ直徑一尺內外アル者ヲ伐リ橫濱ニ輸送ス其用途ヲ問フニ紡績器械ノ車ヲ作ルニ用ユルナリト云フ信州木曾邊ニテハ赤ミアル樹皮ヲ以テ短册狀袋ノ類ヲ製シ販賣ス

ル者アリ又此樹皮ハ油氣ヲ含ムコト多ク能ク燃ルガ故ニ松明ヲ作ルニ用ユルナリ

(三)しらかんば　(第六版三十三圖ヨリ三十五圖)

B. alba, var. vulgaris, Regel.

一名かんば（信州方言）一名しろざくら（日光）がんぴ（箱舘方言）キタツト（北海道土人稱呼）

此種ハフ、サ、兩氏日本植物目錄及帝國大學植物標品目錄ニモアリ鱗果ノ形狀及葉形大ニ前種ト異レリ鱗果ハ前種ノ如ク直立セズシテ下垂ス葉形ハ斜方形ニシテ蟹甲ノ狀ニ似タリ

(四)大ばしらかんば　（新稱）(圖欠)

B. alba, var. Tauschii, Regel.

此種ハフ、サ、兩氏日本植物目錄及帝國大學標品目錄ニアリ大學標品目錄ニハ此和名ヲうだいかんばトセリ然レドモ予ノ探究スル據ニ所レバうだいかんばハ是ト異ル故ニ此種ニハおほばしらかんばノ新稱ヲ附セリ普通ノしらかんばニ似テ葉形ノ粗大ニシテ欠刻及鋸齒粗ラク且其葉底ニ凹ミアルヲ異リトス

(五)さいはだかんば　(第六版三十六圖ヨリ三十八圖)

B. Maximowicziana, Regel.

一名うだいかんば

小野蘭山日光採藥記云サイハダ葉形圓大ニシテ細鋸齒アリ本ニ一劃アリしなのきノ葉ノ如クニシテ厚シ皮ハ樺ト同クシテ微赤ヲ帶ブ是樺ノ一種ナリ」小野蘭山紀州採藥記信州ノ條ニ云ウダイカンバ方言即野州ノサイハダ皮ヲ鵜ダイマツニ用ユト云フ

此種武州秩父三峯山ヨリ大日向山ニ至ル途中ニ多シ同所ノ山民亦之ヲウダイト呼ベリ又曾テ或山林家ノ木曾大瀧邊ニテ採收セル腊葉ヲ見タルニ之ニモウダイカンバノ方言ヲ記セリ此レ等ヲ合セ考フレバ通例うだいかんばト稱スルハしらかんばノ變種ニアラズシテ此さいはだナルコト明ナリ

(六)さうしかんば　（第六版七圖ヨリ九圖）

B. Ermani, Cham. (?)

一名ドスガンピ（北海道方言）

此種ハフ、サ兩氏日本植物目錄ニナシ魯國マキシモウイクツ氏ノ書ニアリ大學標品中加州白山、越後清水峠、北海道根室、信州戸隱等ノ產地ヲ記スル者是ナリ此種日光湯本御澤ノ邊ニアリ樹皮しらかんばニ似テ黑褐色ヲ呈スルユヘ方言ヲくろかんばト云フ鱗果ノ形ハ長短一ナラズ第九圖ニ示ス者ハ最長キ者ナリ短キ者ハ楕圓形ヲナセリ新枝、葉柄及葉脈上脂點アリ苞鱗ニモ二三ノ脂點アリ帝國大學標品目錄ニハ此種トたけかんばトヲ混同シ一物トセリ此種ハ葉ノ裡面ノ横脈ノ中肋ニ合スル所ニ鬚毛アリ

(七)たけかんば　（第六版十圖ヨリ十二圖）

B. Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim.

予ハ日光如寶山上ニテ此種ヲ採收セリ前種ニ似テ芽及新梢ニ毛ナク葉ノ裡面、新枝、苞鱗等ニ脂點ナキヲ異トス又鱗苞頭外反シ緣邊ニ纖毛アリ葉裡ノ脈上及葉柄ニ長毛アリ

(八)みずめ（木曾方言）（第六版十三圖ヨリ十五圖）

B. grossa, S. et Z.

一名こつぱだみねばり日光方言一名みずめあずさ秩父三峯山方言一名みずね日光方言

小野蘭山日光採藥記云コツパタ日光方言ナリ又コツパタミ子バリ𪜈云長葉ノ樺ニ似テ鋸齒ニ異アリテ枝モロシ

此木日光中禪寺湖邊フルナギノ押出シノ上ニ多シ亦日光湯本湯湖ノ傍ニ一大樹アリ其他豐前彦山ニモアリ予昨年夏同所ニテ採集ス又土佐ニモアリ牧野氏惠贈ノ腊葉ニ徵シテ知ルベシ此樹よぐそみねばりニ似テ樹皮ニ臭氣アリ鱗果ノ形狀ハ相似テ苞鱗ノ分岐中央ノ者短キヲ異リトス

（九）おほばみねばり　（第六版十六圖ヨリ十九圖）

B. ulmifolia, S. et Z.

一名よぐそみねばり日光一名よぐそあづさ秩父

小野蘭山日光採藥記云おほばみねばり日光方言ナリ又よぐそみねばり𪜈云葉厚ク硬クシテ紋脉アラシミ子バリヨリ大ニシテ木微シククボメリ枝ヲ折テ嗅ケバソノ心ニ臭氣アリ

明治廿六年十一月四日予日光山中禪寺湖邊ニテ初メテ此樹ノ鱗果ヲ採收シ之ニ依リ B. ulmifolia ト B. grossa トノ區別ヲ確證スルヲ得タリ

（十）をのをれ　（第六版二十五圖ヨリ二十九圖）

B. Bhojpattra, Wall. var. typica, Regel.

一名をんのうれん日光一名みねばり日光一名をんのれ日光

小野蘭山日光採藥記云みねばり一名をんのうれん葉ハ赤楊（マルバノハンノキ）ニ似テ小クメ厚ク互生スやしやぶしノ葉ニ似

タリ長二寸許其木堅シ是ヲ斫ニ斧モ折ルヽト云意ヲ以テをのをれト云轉〆をんのうれん或ハをののれ或をんのれいト言ヘリ燒テ炭トナシ上品トス又朽木ノ心ヲ硯材ト爲スベシ石ニ劣ラズト云フ

此種ハ日光中禪寺湖畔獅子ガ淵ノ邊ニ多シ又秩父三峯山奥院及大日向山道ニ多シ新枝ニ浮毛及脂點アリ後無毛トナル鱗果獨生スル者ハ總梗ナク叢生スル者ハ短キ總梗ヲ具フ

Regel 氏ノ樺科植物ノ「モノグラフ」ヲ按スルニ此種ノ果實、葉形、等ノ形狀ハ全ク B. Bhojpattra ニ符合スレ𪜈其樹皮ノ記載ニ至テ一致セザル所アリ姑ク疑ヲ存シテ識者ノ敎示ヲ俟ツ

Regel 氏ノ樺科植物「モノグラフ」ニ云

此種ハ東印度カムーン、グルワール、カシミール、シツキム邊ノ山地ヨリ Wallich, Jacquemont, Hooker. fil. 及他ノ諸氏ノ採收シタル種類ニ〆ワリッヒ氏ニ據レバ此木ハ大喬木ニシテ其黃褐色ノ外皮ハ薄片ヲナシ剝離ス土人之ヲ以テ煙草ヲ包ミ遠キニ輸ビ又ハ紙ノ代用トシテ文字ヲ寫シ又ハ Hooka ト名付ル吸烟器ヲ裝飾スルニ用ユ梵語ニテ此樹ヲ Bhoorja ト云ヒ印度スタン語ニテハ之ヲ Bhojpattra ト云フ

我邦ノをのをれノ樹皮ハ堅硬ニ〆鱗甲狀ヲナシ決シテ紙樣薄片ヲナスコトナシ是一ノ疑問ナリワリッヒ氏或ハ他樹ノ樹皮効用ヲ聞キ誤リテ此處ニ記入セルニ非ザルカ(?)

(十一)はそばをのをれ（新稱）(第六版二十三圖ヨリ二十四圖)

B. Bhojpattra, Wall. var. Jacquemontii, Regel.

此種ハ牧野富太郎氏ノ惠贈ニ係ル者ニシテ山形縣下ノ產ナリト云フ Regel 氏ノ樺科「モノグラフ」ヲ按スルニ var. Jacquemontii ノ圖說ト吻合ス是亦未ダ西書ニ我邦ニ產スルヿヲ記セザルノ種類ナリ

(十二)一種をのをれ　(圖欠)

B. Bhojpattra, Wall. var. subcordata, Regel. 此種ハ已ニフ、サ、兩氏日本植物目錄ニ出ヅ須川長之助始メテ採集シ之ヲ魯國ニ送リ彼邦人ノ知ル所トナル然レ𪜈予未ダ此種ノ標本ニ接セズ故ニ姑ラク和名ヲ欠キ後日ヲ俟テ考究スベシ

(十三)うらじろかんば（新稱）(第六版二十圖ヨリ二十二圖)

B. corylifolia, Regel.

うらじろ（日光方言）ねこしで（木曾御嶽方言）

此種ハ日光白根山麓ニ多クアリ新葉ノ裏面脉上ニ長白色ヲ滿布ス故ニ日光ノ山民ハ之ヲうらじろト呼ブ依テうらじろかんばノ新稱ヲ命セリ

第六版圖解

第一圖 Betula globispica, Shirai. ノ鱗果(二)小果(三—五)苞鱗(六)葉

第七圖 B. Ermani, Cham. ノ鱗果(八)小果(九)苞鱗

第十圖 B. Ermani, Cham. var. nipponica, Maxim. ノ鱗果(十一)小果(十二)苞鱗

第十三圖 B. grossa, S. et Z. ノ鱗果(十四)苞鱗(十五)小果

第十六圖 B. ulmifolia, S. et Z. ノ鱗果(十七)苞鱗(十八)小果(十九)葉

第二十圖 B. corylifolia, Regel. ノ葉及花穗(二十一)鱗果(二十二)苞鱗

第廿三圖 B. Bhojpattra, Wall. var. Jacquemontii, Regel. ノ葉及鱗果(二十四)小果及苞鱗

第廿五圖　B. Bhojpattra, Wall. var. typica, Regel. ノ花穗及嫩枝（二十六）苞鱗（二十七）小果（二十八）鱗果（二十九）苞鱗

第三十圖　B. alba, L. var. communis, Regel. ノ鱗果（三十一）小果（三十二）苞鱗

第卅三圖　B. alba, L. var. vulgaris, Regel. ノ鱗果（三十四）苞果（三十五）小果

第卅六圖　B. Maximowicziana, Regel. ノ鱗果（三十七）苞鱗（三十八）小果

Three Japanese Plagiogyriae.

（日本產 Plagiogyria 屬三種）

By Tomitarō Makino.

牧野富太郎

PLAGIOGYRIA Mettenius.

（きじのをしだ屬）

Analytical Key.

1 { Frond pinnate, lower pinnæ largest. 2
  { Frond pinnatipartite, middle segments largest. . . . . *P. Matsumureana m.*

2 {Lower pinnæ sessile or slightly adnate to the rachis, upper ones quite adnate....... *P. adnata Bedd.*
Lower pinnæ distinctly petiolulate, upper ones sessile.......................... *P. euphlebia Mett.*

1. **Plagiogyria Matsumureana Makino.**

Lomaria Matsumureana Makino in Bot. Mag., Tōkyō Bot. Soc. VIII. no. 84, p. 90.

Caudex short, robust. Fronds dimorphous. Stipes fasciculate, rather stout, naked, 7-10 c.m. long, but those of fertile ones longer, the base triquetrous, dilated, subcarnose, and furnished with a few minute glands. Sterile fronds pinnatipartite almost to the rachis, oblong-lanceolate, 30-50 c.m. long, 10-17 c.m. broad; segments numerous, approximate, horizontally patent, linear-lanceolate, acuminate, acutely duplicato-serrate, membranaceous; middle segments the largest, 5-8 c.m. long, 7-14 m.m. broad. Veins forked, erect-patent; venules free, fine, sometimes forked, Fertile fronds pinnate, lanceolate; pinnæ distant, mostly alternate, patent, contracted into elongated narrow-linear with acutely obtuse apex, the base dilated and adnate to the rachis. Sori linear. Indusium narrow, membranaceous.

Jap. name.—*Yamasotetsu.* ヤマソテツ

SHINANO: Mt. Komagadake; SHIMOTSUKE: Mt. Nikkō; IWASHIRO: Aidu; UZEN: Hondōzi, Mt. Rokuzyūrigoe; ECHIZEN: Mt. Tochikitōge (Herb. Imp. Univ.); ECHIGO: Mt. Shimidutōge (Herb. Imp. Univ.; *T. Makino*). TOSA: Mt. Tebako (*T. Makino*).

2. **Plagiogyria adnata Bedd.** Ferns of British India t. 51; Kuhn in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. IV.

p. 291; Luerssen in Engler's Bot. Jahrb. IV. p. 365.

Lomaria adnata Bl. Enum. Fil. Jav. p. 205; Hook. Spec. Fil. III. p. 19, t. 147; Hook. et Baker Syn. Fil. ed. 2, p. 182.

Lomaria euphlebia Hook. Second Cent. of Ferns t. 89 non Kunze (ex Luerssen).

Lomaria euphlebia Franch. et Sav. Enum. Pl. Jap. II. p. 216 ?

Jap. name.—*Kizinowoshida.* キジノヲシダ

Yamato: Yugawa, Muro, Mt. Kasuga; Ōmi: Miidera; Idu: Yugashima; Awa (Bōsyū); Awa (Asyū): Nishiumura; Hizen: Takeo; Buzen: Mt. Inugadake, Mt. Iwagadake; Ōsumi: Mt. Kirishima (Herb. Imp. Univ.) Tosa: Sakawa, Ogawa (*T. Makino*).

3. **Plagiogyria euphlebia Metten.** Plagiog. p. 10; Bedd Ferns of Brit. Ind. t. 165; Miq. Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. III. p. 172, et Prol. Fl. Jap. p. 336.

Lomaria euphlebia Kunze Pterid. Jap. in Bot. Zeit. VI. p. 521, et Schkh. Fil. Suppl. p. 61, t. 125; Hook. Spec. Fil. III. p. 20; Hook. et Baker Synops. Fil. ed. 2, p. 183.

Acrostichum triquetrum Wall. Cat. n. 23, partim.

Plagiogyria triquetra Metten. l. c. p. 10.

Lomaria triquetra Wall.

Olfersia triquetra Presl Tent. Pterid. p. 234.

Stenochlæna triquetra J. Sm. in Hook. Journ. Bot. IV. p. 143.

New Jap. name.—*Ōkizinowo.* ヲホキジノヲ（新稱）

YAMASHIRO: Mt. Kurama; ŌMI: Miidera; IDU: Yugashima, Mt. Amagi; AWA (ASYŪ): Nishiumura (Herb. Imp. Univ). TOSA: Sakawa, Ogawa (*T. Makino*).

今更ニ上文ヲ約説セバ則チ下ノ如シ

○ PLAGIOGYRIA Metten. (きじのをしだ屬)

索射表

一 {葉ハ羽狀ヲナシ下部ノ羽片ハ他ヨリ大ナリ（二）
一 {葉ハ羽狀深裂ヲナシ中部ノ羽裂片ハ他ヨリ大ナリ……P. Matsumureana mihi

二 {下部ノ羽片ハ無柄ナリ又或ハ微ニ軸梗ニ底着スルモノアリ然レ𪜈上部ノ羽片ハ皆全然底着ス……P. adnata Bedd.
二 {下部ノ羽片ニハ明カニ小柄ヲ具ヘ上部ノ羽片ハ無柄ナリ……P. euphlebia Mett.

(1) **Plagiogyria Matsumureana Makino.**

=*Lomaria Matsumureana* Makino.

和名 やまそてつ

（形狀） 本莖ハ短矮ニシテ且ツ强壯粗大ナリ。葉ハ其形狀ニ兩般アリ。葉柄ハ叢生シ稍粗大ニシテ鱗片ヲ有

スルヿナシ長サ七—十「セ、メ」アリ然レ𪜈有性葉ノモノニ在テハ更ニ之ヨリ長シ其基部ハ肥大シテ且ツ三尖稜ヲ成シ數個ノ細腺ヲ其面ニ有セリ○無性葉ハ羽狀深裂ヲ成シテ裂痕殆ンド中軸梗ニ迨ビ全体ノ狀長楕圓狀披針形ヲ成シ三十—五十「セ、メ」長十—十七「セ、メ」幅アリ、羽裂片ハ其數夥多ニシテ互ニ相接邇シ水平ノ方向ニ開出ス各片ノ狀ハ線狀披針形ヲ成シ鋭尖頭ヲ有シ邊縁ハ鋭キ重鋸齒ヲ連ヌ而シテ膜質ナリ、其中部ノ羽裂片ハ他片ヨリ大形ニシテ五—八「セ、メ」長及ビ七—十四「ミ、メ」幅ヲ有セリ、葉脈ハ叉岐シテ斜開シ、細脈ハ離在シテ互ニ合着セズ細密ニシテ時ニ亦叉狀ヲ成ス○有性葉ハ披針形ニシテ全ク羽狀ヲ成シ、羽片ハ疎々相隔離シ多クハ互生シテ開出シ縮形シテ延長セル狹瘦線形ヲ成シ鈍端ヲ成セル鋭頭ヲ有ス○囊堆ハ線形ヲ成シ○苞膜ハ狹長ニシテ且ツ膜質ナリ

(產地) 信濃駒ヶ岳、下野日光山、岩代會津、羽前本道寺村幷ニ六十里越、越前栃木峠(共ニ大學標品) 越後清水峠(大學標品幷ニ予) 土佐手筥山(予)

(2) **Plagiogyria adnata Bedd.**

= *Lomaria adnata* Bl.

= *Lomaria euphlebia* Hook. Second Cent. of Ferns t. 89 non Kunze (ex Luerssen).

= *Lomaria euphlebia* Franch. et Sav. ?

和名 きじのをしだ

(產地) 大和湯川、室幷ニ春日山、近江三井寺、伊豆湯ヶ島、安房、阿波西宇村、肥前武雄、豐前犬ヶ岳、岩ヶ嶽、大隅霧島山(共ニ大學標品) 土佐佐川村幷ニ尾川村(予)

(3) **Plagiogyria euphlebia Metten.**

=*Lomaria euphlebia* Kunze.

=*Acrostichum triquetrum* Wall.

=*Plagiogyria triquetra* Metten.

=*Lomaria triquetra* Wall.

=*Olfersia triquetra* Presl.

=*Stenochlæna triquetra* J. Sm.

和名　おほきじのを(新稱)

(產地)　山城鞍馬山、近江三井寺、伊豆湯ヶ島、天城山、阿波西宇村(共ニ大學標品)土佐佐川村幷ニ尾川村(予)

螲蟷（つちぐも）ニ寄生スル冬虫夏草ニ就テ

理科大學　安田篤

抑冬虫夏草ナル者ハ既ニ古クヨリ支那ニ於テ知ラレ傳ヘテ以テ虫類ノ草類ニ變ズル者ト爲セリ然レ𪜈其實ハ決シテ虫類ノ草類ニ化スル者ニアラズシテ虫類ニ寄生スル一種ノ菌類ニ過ギザルヿハ嘗テ本雜誌十一號ニ於テ三好學君ガ冬虫夏草ノ辨ト題シテ論ゼラレシヲ見給ヒシ人ノ記臆ニ存スル所ナルベシ又少シク考フレバ動物ノ植物ニ變化スルト云フハ笑フベキ謬見ナルヿモ照々タルベシ冬虫夏草ノ種類ハ一二ニ止マラズシテ頗ル多ク死亡シタル蛹、蜈蚣、蟬ノ幼虫、蜂、甲虫、螲蟷等ニ寄生ス七月初旬ノ候余偶中根岸ニ於ケル學友松平齊君

ヲ訪ヒ邸内ニ於テ螳螂ニ寄生スル冬虫夏草（予ハ暫ク之ヲ「くもたけ」ト名クベシ）ヲ得タレバ左ニ其大要ヲ叙シ以テ讀者諸君ニ紹介スト云爾

發生地　椽ノ近傍ニ於ケル乾燥セル地面ニ螳螂ノ巣孔散在セルヲ見タリ其各孔ヨリ一個宛棍棒狀ノ「くもたけ」突出ス其長キ者ハ地上ヨリ一「センチメートル」ノ高サニ達セリ而シテ地中ニアリテ外ニ顯ハレザル部分ハ凡ソ三「センチメートル」乃至四「センチメートル」アリ其長サハ必竟螳螂ノ作レル巣孔ノ長サニ比例スル者ナリ故ニ菌糸並ニ寄主ヲ傷ケズシテ之ヲ得ント欲スレバ勢ヒ深堀ノ勞ニ甘ンゼザル可ラズ其地上ニ出ヅル部分ヲ地下ニ埋沒スル部分ニ比スレバ啻ニ後者ノ Fraction ニ過ギザルヲ以テ觀レバ轉タ余ヲシテ渺茫タル大洋ニ浮ベル氷山ヲ回想セシムルニ足ル者ナリ聞ラク齊君ノ邸内ニ於テハ此菌ノ由來古クシテ每夏必之ヲ發生スト云余ノ敝庭ニモ亦螳螂ノ巣孔數多アリト雖如何セン此菌ノ胞子ナキヲ以テ螳螂ハ徒ニ共生ヲ貪リ未ダ曾テ「くもたけ」ノ發生スルヲ見ズ

形狀　子實体（Stroma）ハ棍棒狀ヲ呈シ單獨ニシテ基底白ク頂ニ至ルニ從ヒ少シク赤紫色ヲ帶ブ此部絨毛樣ニシテ無被ノ子糸相密結シ乾燥セル粉樣ノ「こにぢや」（Conidien）ヲ戴ク又子實体ハ螳螂ノ頭部ヨリ突出ス蓋シ体内ニ蔓延シタル菌糸ノ熟シタル爲實ヲ結ビシニ外ナラザルナリ

構造　余ハ顯微鏡下ニテ窺ハン爲ニ子實体ノ三部ニ於ケル横斷面ヲ作レリ第一斷面ハ頂上ニ近キ部分ニシテ之ヲ檢スルニ周圍ニアル絨毛樣ノ者ハ實ハ「こにぢや」ヲ荷ヘル子糸ニシテ其各節ニ胞子珠數狀ヲ爲シテ叢生シ全体ハ樹枝形寧ロ高キ「すぎな」ノ形狀ヲ呈セリ胞子ハ繁殖速ニシテ甚落チ易ク其形ハ圓柱狀ナリ子實体ノ內部ハ實シテ密結シ恰モ膜菌門ニ於ケル如キ觀アリ第二斷面ハ淡紫色ノ將ニ消失セントスル部分ニシテ此部

ハ周圍ニ猶「こにぢや」アレ𪜈其數甚少ナク內部ハ菌糸ガ實セズシテ中心ニ空處ヲ殘ス第三斷面ハ更ニ下方ニ於ケル白色ノ部分ニシテ之ヲ見ルニ最早胞子ナク內部ハ大ナル空洞トナリ周圍ニ於テ菌糸相聚マリ以テ密結セル環輪ヲ作ル

此菌ノ寄主ニ及ボス影響　其胞子先ヅ生活セル螳蟷ノ体ニ落ツレバ萌芽シ菌糸漸ク發育シ始ムレバ寄主ハ爲ニ病ヲ釀シ終ニ死亡ス是ニ於テ菌糸ハ死体ノ內外至ル所ニ充分ノ發達ヲ爲シテ蔓延シ白色ヲ呈スル綿毛樣ノ被覆物ヲ作ル成熟スレバ之ヨリ子實体ヲ出ス甞テ「ドバリー」氏ハ「Isaria farinosa ノ胞子ヲ取リ之ヲ健全ナル蜈蚣ニ蒔種セシニ胞子ハ萌芽シ菌糸ハ其氣孔ヨリ氣道中ニ侵入シ之ヨリ血中ニ入リ至ル處ニ圓柱狀ノ「こにぢや」ヲ作リ之ヨリ体中ニ菌糸充滿シ終ニ子實体ノ突出スルヲ見タリト云我邦ニ於テハ曩ニ渡邊君螳蟷ヲ捕ヘテ同法ヲ施シタルニ其効果ヲ奏セリト聞ク余モ亦實驗ノ結果幸ニ其功ヲ奏セバ他日報道スル所アルベシ

分類上ノ位置

Abtheilung Thallophyten.
Classe Pilze.
Subclasse Mycomyceten.
Ordnung Ascomyceten.
Familie Gymnoasci.
Subfamilie Isariacei.

右ノ英文及ヒ附圖ハ次號ニ掲載スベシ

Isaria arachnophila, Ditm.（くもたけ）

松ノみどりノ運動ニ就テ（八十六號ノ續キ）

藤井健次郎

A.　五月九日午前五時三十分霧淺ク大陽上リツヽアリ温度攝氏十一、五四隣靜ナリみどりノ先端ハ少シク南、南西ニ屈ス然レ𪜈みどりノ全長ノ過半ハ稍北、北東ノ傾アリ全体ハ直立ニ近シ左レバみどりの先端ハ前夕ノ狀ヲ保チ其下過半ニ於テハ屈垂ヲ戻セリト知ルベシ

此時全園ノ模様ハ略直立ナリ

B.　仝日仝時仝ジ外園ニテみどりノ全長方向南、南東先端稍北、北東ナリ左レバみどりノ全長ハ前夕ノ狀ヲ保チ其先端ニ於テノミ方向轉ジテ正反對トナレリト知ルベシ此時西、南西ヨリ寫眞ス

A.　五月九日午後五時三十九分曇天、温度攝氏十八、風微、大陽西、西、北西、屈垂ノ狀みどりノ全長一様ニシテ其度稍増加シ方向南、南、南西ナリ

全園ノ模様直立カ若クハ屈垂ノ度甚小ナリ

B.　五月九日午後五時二十分少シク曇レリ温度攝氏十八、五南風強シ大陽西、西、北西みどりノ先端北、北東ニ傾ケリ

昨年五月ニ於ケル是ヨリ以下ノ日記ヲ紛失セリ去レ𪜈以上記シ來リシノミニテモみどりノ運動ノ狀及ヒ性質外園ノ關係等ノ一端ヲ推測スルニ足ルモノアリ又日記紛失シタレ𪜈其記事ヨリ得タル結果ノ大体ハ記臆的ノ

モノニアラズシテ推理的ノモノナレバ左ニ之レヲ記スベシ（可成丈前記載シ來リシ材料ニ就キ）且今年五月ニ於テ（故アリテ日々定時數回ノ觀察ヲナスヿヲ得ザリシモ）十五日ヨリ十八日ニ至ルB樹ニ於ケル時々ノ觀察モアレバ左ニ之ヲ記シ以テ推理ノ助トナスベシ

明治廿七年五月十五日前數日間日々注意シタレ𪜈屈垂ノ狀先年ニ於ケルガ如ク著シカラズ十五日前ハ數日間北風微カニ吹キ續キ氣候寒キ方ナリシガ十五日後ニ至リ暖氣ヲ催シ風力著シク增加シ是ヨリ以後みどりハ著シキ運動ヲ初メタリ五月十五日午後六時南風强シみどりハ南風ノ爲メニ北ニ押サル去レ𪜈先端ハ直立若クハ南向ノモノ多シ

五月十六日午後六時北風甚强クみどり南ニ屈スルヿ又甚シ風間斷ナキカ爲メみどりハ吹キ仆サレテ常ニ傾斜ノ位置ヲ保テリ

五月十七日午後三時南風强シみどりハ概シテ北向ニシテ其屈垂ノ度强シ去レ𪜈大低其先端ニ於テノミ屈シ或ハ直立ノモノモアリ

左レバ十六日ト十七日トハみどりハ正反對ノ方向ニ屈垂セリ而メ全園ノ模樣モ亦十六日ニハ南向ニシテ十七日ニハ北向ナリ

五月十八日午後六時雨天風稀ニ且ツ弱シ雨少量ナリみどりノ方向一定セルヿナク直立ナルアリ亦不規則ニ屈垂セルモアリ

十八日以後著シキ異樣ノ變化ニ際シタルヿナク又遂ニみどりモ其短枝伸長メ其屈垂著シカラザルニ至レリ

今年モ昨年モ緣日ノ植木ノ松ヲ見ルニ大ナル樹ニ於テモ亦至小ナル植木鉢ニアルモノモ何レモ其みどりノ先

端ハ多小一方ニ屈垂シタルヲ見受ケタリ又全株ノみどりハ大概一様ノ方向ヲ呈スルモノ多シ左レ𪜈其東西南北ノ方向ハ植木屋ノ鉢ノ置キ方ニヨレバ之レヲ參考スルハ無用ナリ

余ハ昨年及今年みどりノ觀察ノ時期朝ニ大學構内ノ松樹ヲ見テ仝日午前東京牛込見附ヨリ市ケ谷見附ノ間ノ土手通ノ松ヲ見若クハ正午十二時頃ニ此土手通ノ松ヲ見午后ニ大學構内ノ松ヲ見ルヿ屢ナリシガ大學構内ノ松全園ノ模様一致スル時ノ如キハ此土手通ノ松モ亦其方向ヲ大學ノモノト仝フスルヿ屢ナリシ

又多クノ松樹ノ中ニモ若木ニシテ勢好キ木ニ於テハ老木ニシテ其枝不規則ナル木ニ於ケルヨリモ屈垂ヲ見ルヿ大概ネ著シ

余嘗テ茶梅ノ花瓣ノ運動ヲ見タルトキ其花瓣一枚ヲ採リテ之レヲ小瓶ノ口ニ水面ニ浮バセ置キタルニ尚其一瓣ガ運動スルヿヲ見タルガ故ニ松ニ於ケルみどりノ屈垂ノ運動モ或ハみどりノ附着セル枝ヲ以テ實驗如何ト思ヒ今年五月六日ノ夕生長盛ナル松樹ノ一枝みどり數本ヲ有スルモノヲ大學構内ヨリ折リ來リテ室内ニ於テ瓶ニ挿シ水ヲ盛リ置キタリ然ルニ松ノみどりハ其附着スル枝ノ方向如何ニ係ラズ何レモ天ニ向フテ直立スルモノナレバ之レヲ折リ來リテ瓶ニ挿スルトキニ其平均ヲ失シ轉倒シテみどりハ下方ニ向ヒテ垂レ幾度起スモ直スモ無効ナリシガ故ニ余ハ其轉倒ノ儘ニシテ置ケリ然ルニ明七日朝（九時頃ナリシカ）ニ至リテ意外ニモみどりハ其顔ヲ上ゲ全長ノ半ヨリ甚ダシク屈シテ先端ハ直立シ正シク平均ヲ保テリ依テ此日午後之ヲ寫眞ス其後數日間異狀ノ變動無ク唯其先端ノ彎曲ノ度ヲ增シ直立線ヨリ更ニ進ンデ下半ノ部分ト銳角ヲナスニ至レリ十日午後三時又寫眞ス

此事實亦大ニ注意ヲ要スルヿニシテ是迄戸外ニ於テ觀察シ來リシみどりノ屈垂現象ノ一部ハ以テ大ヒニ解ス

ベキモノアリ之レヨリ主トシテ是迄記シ來リシ事實ニ基ツキ其運動ノ性質源因ニ就テ論ズベシ　（未完）

正誤　八十六號ノ第百四十九頁ノ正午十二時ハ二ツ共正子十二時ノ誤植ナリ

日本藥局方植物篇　（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

四十七　ドレマ、アムモニアクム

羅甸名　Dorema Ammoniacum, Don.

Syn. Diserneston gummiferum, Jaub. et Spach.

繖形科

波斯等ニ自生スル大ナル草本植物ニシテ莖直立高サ六七尺圓柱形ニシテ其質硬強縱溝線ヲ有シ暗綠色ヲ呈シ莖節深紅色若クハ紫赤色ヲ帶ブ莖ノ下部ハ肥大ニシテ其周圍二寸五分餘乃至三寸三分餘上部漸次ニ狹小ト爲ル而シテ莖ノ幼稚ナル部分ハ白色ノ軟毛ヲ帶ブト雖トモ直チニ脫離シテ平滑ト爲リ光輝ヲ有ス莖ヨリ枝ヲ分ツコト十二乃至十六長サ一尺許直立シ其半バヨリ上部ニ於テ更ニ數椏ヲ分チ漸ク矮短ト爲リ圓錐形ヲ爲ス葉ハ其數多カラズ基立葉大約四個其柄長ク類圓柱形ニシテ白色ノ軟毛ヲ密生シ下部膨脹シテ葉鞘ヲ殆ンド莖ヲ抱擁ス葉体ハ重翼狀若クハ三重翼狀ニシテ長サ一尺五寸乃至二尺餘小葉ハ長卵圓形ニシテ平緣先頂鈍ク底部狹隘ト爲リ葉柄ニ沿フテ多少附着ス莖葉三四片葉鞘著大ニシテ莖ヲ抱擁シ先頂延長シテ返卷ス花ハ極メテ細小ニシテ殆ント花梗ヲ缺如シ或ハ頭狀花或ハ單繖形花ヲ綴リ白色綿絮樣ノ毛茸ヲ有ス此華本ハ許多ノ花ヨリ成ルト雖トモ其直徑四分二厘ニ至ルモノ少レナリ花梗椎ハ矮短ニシテ長サ大約二分其基部ニ抱花小葉ヲ有ス

而シテ各頭狀花枝杪及ヒ莖ノ上端ニ不整ニ附着シ宛モ總狀花ノ觀ヲ呈シ總苞ハ或ハ缺如シ或ハ一乃至二個ノ鍼狀ノ小片ヲ有ス萼ハ發育不完全ニシテ痕跡ヲ存ス花瓣五片白色卵圓形ニシテ平緣先頂狹隘ト爲リ內方ニ屈曲シ背部ノ中央ヲ通過シテ毛茸ヲ有ス雄蘂五個花瓣ヨリ稍々長ク花絲糸狀ニシテ開展シ葯ハ楕圓形ヲ爲シ二房ヲ有シ花時分綻シテ花粉ヲ吐出ス雌蘂二個實礎ハ單房ニシテ一個ノ卵子ヲ懸生シ外面毛茸ヲ密生ス花盤ハ圓錐形ニシテ微ニ缺刻シ花柱矮短直立柱頭微ニ膨脹シテ球形ヲ爲ス花後分裂果ヲ結ブ卵圓形ニシテ强ク壓扁セラレ長サ大約二分八厘脫離シ易キ毛茸ヲ有ス然レドモ間〻平滑ナルモノアリ其頂端ニハ矮短彎曲シタル花柱ノ殘餘ヲ存シ各分果ハ間〻捩轉シ暗褐色ヲ呈シ之ヲ連繫スル擔柱ハ矮短ニシテ背部ノ肋線ハ糸狀ヲ爲シ兩側ノ二線ハ狹隘ナル緣狀ト爲リ黃色ヲ呈ス油腺ハ各果谷ニ一個宛及ヒ兩分果ノ接觸部ニ二個ヲ有ス根ハ肥大ニシテ紡錘形ヲ爲シ下部分岐ス

本植物ハ波斯中央部及ヒ東部ヨリ西伯利南部ニ至ル諸地ニ產シ第五月ヨリ開花シ第七月ニ至ル其葉黃色ヲ呈シ乾涸シタル後果實稔熟ス而シテ其莖凋萎枯死シタル後久時存在ス

（以下次號）

◎雜錄

○荳科植物ノ根瘤ヲ論ス（承前）

安田篤

球狀根瘤ニ在テハ「かむびうむ」ハ何レノ部分ニ於テモ同厚ヲ有スレ𪜈帶長不齊ノ者ニ在テハ廣部ニ於テ更ニ其發達ノ多キヲ見ル「かむびうむ」細胞ハ通常ノ場合ノ如ク小ニシテ尖角アリ密合シテ薄壁ヲ具フ而シテ何レノ平面ニモ分裂ス「こるく」層ハ主トシテ薄壁ヲ具ヘタル矩形細胞ヨリ成リ屢細胞間ニ氣道ヲ有ス然ル

ニ「ゐんげんまめ」ニ於テハ「てるく」細胞ハ圓ク「はりゑんじゆ」ニ於テハ寧ロ不齊ノ觀アリ全体ノ「てるく」層ハ根ノ變化ヲ受ケザルニ先ダチ皮層ト連續ス又全体ノ根瘤ハ根ト相連續セル表皮細胞層ニ由テ被ハル根毛ハ存在セズ是レ根瘤發達ノ際夙ニ萎縮シ早晩消失スルヲ以テナリ此ニ於テ植物自身ハ最早吸收器トシテ之ヲ使用スルヿヲ得ズ若シ假リニ根毛ノ存スルヿアリトスルモ不通ノ「てるく」層アルガ爲ニ全ク其用ヲ爲スヿ能ハザルナリ根瘤ハ維管束及ビ己レト連續セル根ノ「ぱれんきま」維管束組織ニ由テ養ハル次ニ感染面ノ劃線ハ波狀ヲ呈ス其横斷面ヲ見レハ各維管束ノ前ニ陷落アルヲ以テ知ルベシ不感染細胞ノ一個若クハ一群ハ一般ニ感染面ニ分布セラル試ニ「はりゑんじゆ」ヲ撿スレバ中央部ニ於テ大ナル不感染面ヲ見ルヿヲ得ベシ感染細胞ハ細胞間隙ナキガ爲ニ尖角ヲ有シ互ニ密合スル點ニ於テハ不感染面ノ「かむびうむ」細胞ニ似タリ更ニ大ニシテ特殊ノ原形質ヲ有シ核ノ變化ヲ受クル點ニ於テハ前者ト異ナレリ此細胞ハ全ク「りぞびあ」及ビ原形質ヲ以テ充タサレ「りぞびあ」ハ原形質ヨリ滋養ヲ取リ之ガ報酬トシテ寄主ニ空氣中ノ遊離窒素ヲ與ヘ以テ其用ニ供ス Rhizobium mutabile ニ於テハ多量ノ食品ノ供給アルガ爲ニ膨大シ隨テ種々ノ形狀ヲ呈ス是レ“Mutabile”（變化ノ意）ノ名アル所以ナリ然レ𪜈他ノ種ノ「りぞびあ」ニ於テハ此ノ如キ甚シキ變化ヲ受ケザル者ノ如シ「りぞびあ」ノ細胞内ニアル位置ニ就テハ特殊ノヿアリ Meliotus alba ニ於ケル團群ニテハ其長軸常ニ核ノ方ニ向フ然ルニ同ジク此種ノ黴菌ヲ有スル「むらさきつめくさ」ニ於テハ前者ノ如キ排置ヲ示サズシテ凡テノ方向ニ並列ス如何ニシテ前者ハ此ノ如キ排列ヲ有スルヤハ明ナラザルナリ「ゐんげんまめ」及ビ「にんどう」ニ於テハ屢團群ヲ形クル

○植物体中水ノ上昇ニ就テ

CD生投

植物体中水ノ上昇スルモノ必ズヤ生活細胞ノ助ケニ是レ依ラザルベカラズトハベルリン大學教授シュエンデーネル氏ノ議論ナリ否生活細胞ノ助ケヲ要セズトハボン大學教授ストラスブルゲル氏ノ議論ナリストラスブルゲル氏ガ此事ニ於ケル試驗ノ一ヲ左ニ摘記セン

此試驗ニ供シタルハ一種ノかしはノ樹ニシテ樹ノ高サ二十一「メートル」九、地上十「サンチメートル」ノ所ニテ太サ十「サンチメートル」、年齡ハ七十五年ナリ

六月廿八日（昨年）午後四時此樹ヲ地上十「サンチメートル」ノ所ニテ斜ニ伐採シ直ニ其切リ口ヲ水桶中ニ浸シ且其後鋭利ナル小刀ヲ以テ其切リ口ヲ滑ニス扨此樹ヲ「ピクリン」酸ノ飽和液ヲ貯ヘタル器中ニ浸ス但其器中ニ入ルノ深サハ二十「サンチメートル」ナリ後毎日朝夕其樹ガ吸收セル「ピクリン」酸溶液ノ量ヲ測定セリ

試驗ハ六月廿八日ニ始リ七月五日ニ終リ其時間ハ總計八日ト十六時間ナリ而メ其間吸收シタル液ノ總量ハ六十八「リートル」四ニ至レリ六月廿九日ノ朝之ヲ見ルニ液ハ既ニ切リ口ヲ距ルヿ三「メートル」ニ及ベル所ヨリ生ゼル傍枝ノ葉ニモ上昇シ即此葉ノ維管束ハ其木管部並ニ篩管部ノ「スクレヽンキマ」纖維モ黄色ニ染色セリ

六月卅日ノ午前ニ至レバ液ハ既ニ十「メートル」三ノ所ニ迄上昇シ七月一日午前九時ニハ十五「メートル」ノ所迄上昇セリ而メ此時ニ當テハ三「メートル」並ニ五「メートル」ノ所ヨリ生ゼル傍枝ノ葉ハ既ニ「ピクリン」酸ノ毒ニ感ジ將ニ枯死セントスルノ狀アリ八「メートル」ノ高サニ於テハ葉ハ未ダ枯死スルニ至ラズト雖𪜈其所ノ傍枝ハ勿論十「メートル」五ノ所ノモノト雖𪜈全然「ピクリン」酸ニ染色スルヲ見ル且又莖ノ先端ニ於ケル葉モ之ヲ地上ヨリ望遠鏡ヲ以テ覗フニ既ニ其外見ノ變化セルヿ明ナリ

七月一日正午十二時器中ノ「ピクリン」酸溶液ニ加フルニ酸性「フクシン」（紅色ナル染料）ヲ以テシ液ヲシテ

濃厚ナル赤葡萄酒ノ色ヲ呈セシムサレバ此染料ノ溶液ヲ樹ニ給與セルハ「ピクリン」酸ガ業ニ既ニ莖中ノ維管束ヲ十五「メートル」上昇シタルノ後ナリ然ルモ此染料ハ其レニモ拘ハラズ之ニ昇ルノ證アリ

七月七日午前八時莖ヲ「ピクリン」酸溶液ヨリ取リ出シ之ヲ横臥セシメ片々ニ截斷シ之ヲ觀察スルニ莖ノ先端即「ピクリン」酸溶液ニ浸入セル所ヲ去ルヿ廿一「メートル」八ノ部モ全然此「フクシン」ノ色ニ染マレルヲ見ル

今片々截斷セル莖ニ因テ以テ考フルニ莖ノ下部ニ於テハ白木質ハ全部染色シ地上一「メートル」ノ所ニテハ其染色セラル丶年輪ノ數十六、太サ十五「ミリメートル」、而メ其內部絕エテ染色セザル部ニ於テハ木管ニ「チーレン」(Thyllen)アリ之レヲ充塞セリ五「メートル」ノ高サニ於テハ莖ノ直徑十九「サンチメートル」ニシテ染色セルハ年輪ノ數僅ニ六個、總直徑四「ミリメートル」ナリ十「メートル」ノ所ニテハ莖ノ直徑十五「サンチメートル」ニシテ染マレル部ハ直徑ハ五「ミリメートル」ナリ又十五「メートル」ノ高サニテハ染マレル部大凡七「ミリメートル」ナリ而メ其レヨリ上部ニ及ベバ染マラザル部漸次減少シ廿「メートル」ノ所ニ於テハ枝ハ大抵皆其中央部迄殆ト全ク染色ス莖ノ最高枝ハ其直徑十三「ミリメートル」アリ其髓ヲ除クノ外ハ全然染色スルヲ見ル

以上ノ試驗ニ因テ以テ考フレバ「ピクリン」酸ヲ以テ殺シ既ニ三日ヲ經タルモノニ於テモ「フクシン」溶液ガ二十二「メートル」ノ高サニ上昇スルヲ知ル蓋夫ノ「ピクリン」酸ナルモノハ一種ノ毒藥ニシテ動植物學上原形質固定(固定ハ即急ニ殺スヲ目的トス)ノ爲ニ用フル所ノ藥劑ナリ然レバ此試驗ニ於テ「ピクリン」酸ノ至ル所其所ノ細胞ハ爲ニ直ニ死亡スルヤ明ナリ然ルニ其既ニ十五「メートル」ニ迄昇リタルヿ明ナルニ及デ「フクシン」溶液ヲ以テスルニ此液モ又明ニ莖端ニ上昇ス即細胞ノ死シタル後ナルニモ拘ハラズ上昇ス然レバ液ノ上昇ニハ生活細胞立チ入ラザルヤ明ナリ

シュヱンデール氏ノ說可乎ストスブルゲル氏ノ說可乎曲直是非ハ後來ノ研究ヲ待テ知ル可キ而已

○繇條書屋植物雜記（其十一）

牧野富太郎

◎やまとぐさ筑波山ニ產ス

やまとぐさ即チ Theligonum japonicum *Okubo et Makino* ハやまとぐさ科 CYNOCRAMBEÆ（＝THELIGONACEÆ）ニ屬セル小草ナリ現今世界ニ於テ該屬ノ植物唯ヾ三種アリテ本邦產ノモノ即チ其一ニ居リ他ノ一ハ中部亞細亞ニ產シ又他ノ一ハ歐洲南部地中海地方ニ產ス本植物ノ日本ニ於テ發見セラレタル事實ハ之ヲ世界ノ植物學者ニ通報スベキ充分ナル價値ヲ具備セリ予ハ他日之ヲ詳密ニ圖說スベキ時ノ來ルニ會セバ直ニ之ヲ世ニ問ハンヿヲ期セリ而シテ今予ハ先ヅ其學名ヲ改メテ之ヲ

Cynocrambe japonica Makino.

トナスノ必要アルヲ見ル

此植物ハ元ト明治十七年十一月土佐吾川郡名野川村ノ山地樹下ニ於テ予始メテ之ヲ發見シ且ツ採集シタリ而シテ其後土佐ノ各所ニ於テ亦之ヲ產スルヲ知リシト雖𪜈然𪜈未ダ一モ他ノ國ニ於テ之ヲ採集シタルモノアルヲ聞カザリシナリ

本年四月初旬池野成一郎安井伴一兩氏ト共ニ常陸筑波山ニ植物採集ヲ試ミシトキ同山ニ於テ予亦之ヲ見出シタリ是レ本植物第二ノ產地ナリ西ハ土佐ノ諸山ニ產シ東ハ筑波ノ山中ニ見ル東西相距ル極メテ遠ク南海畿內東海ノ諸州相連テ其間ニ在リ植物ヲ採集スルノ士綿密ニ此等諸州ノ山地ニ注意セバ庶幾クハ更ニ之レガ新產地ヲ得ルニ至ラン

●琉球産ノ一草

黒岩恒氏採集琉球植物（遠カラズ本誌上ニ於テ之ヲ報告ス可シ）中沖繩島恩納岳ニ於テ得ラレタル一品アリ草本ニシテ莖ハ纖長ナリ葉ハ對生シ短キ葉柄アリ葉面ハ略〻圓形ヲナス而シテ標品ニハ花ヲ有セズ田代安定氏之ヲ見テ曰ク「從來採集ノ時每ニ不幸ニシテ花ヲ見ズト雖是レ恐クハなでしこ科ニ屬セル Drymaria cordata *Willd.* ナラン」ト乃チ書ニ就テ之ヲ比較スルニ莖葉ノ狀ハ極メテ相符合スト雖𪜈タヾ花ナキヲ以テ之ヲ確定スル能ハズ然レ𪜈是レ中ラズト雖𪜈遠カラザルナリ D. cordata *Willd.* 一ニ *Holosteum cordatum* Linn. ト云ヒ新舊兩世界熱帶地ノ普通品ニシテ香港、廣東幷ニ臺灣モ亦之レガ産地ノ一ナリ又之ト極メテ肖似セル一種アリ D. divaricata *H. B. et Kunth.* ト云フ太平洋洲ノ一地海邊ニ産ス

●植物象牙

「ニュー、グレナダ」幷ニ「中部アメリカ」ノ諸地ニ産スルしゅろ科ノ一樹ニ Phytelephas macrocarpa *Ruiz et Pavon.* ト稱スルアリ大約四十顆ノ硬果各顆ノ大サ胡桃大ノ如キモノ一團ヲ成シテ其葉腋ニ出デ大サ恰モ人頭ノ如シ此果肉極メテ堅實ニシテ以テ種々ノ器物ニ製ス可シ世ニ呼ンデ植物象牙ト稱スル者即チ是ナリ植物象牙ト稱スル者更ニ別ニ一品アリ即チ Sagus amicarum. ノ種子ヲ云フ此樹ハ頗ル西穀米樹即チ Metroxylon Sagus *Rottb.* (＝*Sagus lævis* Rumph.) ニ類似シ種子ノ用尙ホ Phytelephas macrocarpa *R. et P.* ニ於ケルガ如シ然レ𪜈タヾ硬度少シク劣ルノミ Metroxylon Rumphii *Mart.* (＝*Sagus Rumphii* Willd.) モ亦時ニ西穀米樹ト稱ス

●つくししはがま

つくししほがまハ伊藤篤太郎氏ノ Pedicularis refracta *Maxim.*（＝*P. verticillata* var. *refracta* Maxim.）ニ命ゼラレタル和名ナリ然レ𪜈此植物標品ノ我邦人ノ手ニ在ルモノハ予ガ知ル所ヲ以テセバ唯一個ニシテ此一個ノ標本ハ今予ガ所藏ノ Herbarium 中ニ在リテ存ス

此標品ハ豐後國由布嶽ノ中腹以上ノ地ニ於テ昨明治廿六年六月十七日現時農科大學在學中ナル上田榮次郎氏ノ採集セラレタルモノニシテ實ニ本邦人ノ此植物ヲ採集シタルハ今日ニ至ルマデハ唯同氏一人アルノミ同氏ハ此稀有ナル標品ナルニ係ハラズ學問ノ資料トナサンガ爲メニ之ヲ予ニ惠與セラル予ハ此ニ其厚意ニ對シテ謝意ヲ表セズンバアラザルナリ

◉Woodsia insularis *Hance.*

J. G. Baker 氏著 A Summary of the new Ferns which have been discovered or described since 1874 (Annals of Botany, V. (1890-91)). 中ニ下ノ如ク云ヘリ曰ク "Woodsia insularis, Hance, must also be omitted. It is made up of a mixture of W. ilvensis and manchuriensis, as is shown by the type specimens, now at the British Museum." ト本邦植物ニ觀ルノ士ハ此數語ヲ徒ニ看過セザルベシ何トナレバ所謂 Woodsia insularis ハ本邦ノ「フロラ」ニモ亦關係ヲ有スレバナリ

○バクテリアノ説

K. D. 山人纂譯

第八章　黴菌及ヒ窒扶斯熱

窒扶斯熱ハ劇烈ナル病ニシテ老幼強弱ノ別ナク忽チ其侵ス所トナル而シテ其發生ノ原因ハ矢張黴菌ニ在ルヿハ明カナリ其黴菌ハ管狀ヲナセルモノニシテ肺疾ニ於ケル黴菌ヨリモ極メテ大ナリ

熱病ニハ種々アリテ其發生スル原因モ亦種々ニ分レリ然ルニ其病症能ク窒扶斯ニ類スルガ故ニ往々誤リテ同視セラルヽコトアリサレド窒扶斯ニ在リテハ此一種ノ黴菌ニヨリテ發生セラレ決シテ他ノ原因ニヨリテ起ルモノニ非ズ

窒扶斯黴菌ハ研究ノ爲メ特ニ生物學者ニヨリテ耕植セラルヽニ非ル以上ハ須臾モ人体以外ニ生育スルモノニ非ズサレド水中ニ在ルカ或ハ他ノ場合ニ於テハ暫時其生ヲ維持スルコトヲ得

普通ノ場合ニ於テ窒扶斯黴菌ハ大概腸ヨリ人体ヲ侵害スルモノナリ故ニ若シ多數ノ黴菌ガ腸ニ入リ其狀況ニシテ果シテ生育ニ適シタランニハ大ニ蕃殖增加スベシ而シテ其一部分ハ身体內部ノ機關中ニ進入スレドモ多クハ腸內ニ在リテ其生存ヲ維持スルカ又ハ此病ニ伴ヘル下痢ニヨリ放出セラルヽナリ

此病ニ於ケル黴菌ノ動作ヨリ推考スル時ハ其腸內ニ在リテ生育セントスルニ當リテハプトメントイフ溶液ヲ出シ其溶液ハ食物ニヨリテ吸收セラレ更ニ身体ノ各部ニ送ラレ以テ此病ノ徵候トシテ認ムベキ結果ヲ生ズルモノナラント思ハル而シテ黴菌ノ多クハ腸內ニ止マリテ下痢物ト共ニ出ヅルナリ

此病毒ノ最大ナル根源ハ腸ヨリ瀉出スル物質ニシテ極メテ有毒ナル黴菌ヲ含有スルニ因ル通常窒扶斯熱ヲ蔓衍セシムルハ是ガ爲メナリ窒扶斯熱ト肺疾ト其蔓衍消滅ノ方法ニ於テ稍々同一ノ有樣ヲ呈ス即チ窒扶斯熱ニ於テモ肺疾ニ於テモ黴菌之カ原因トナリテ病ヲ發生シ而シテ其ノ傳染スルヤ既ニ此病ニ罹レル人々ヨリ有毒ナル黴菌ヲ吐出スルニ因ル肺疾ノ蔓衍ヲ防ガントスルニハ患者ノ吐出セル物質ヲバ石炭酸（カーボリツク、アシツト）若クハ猛汞ヲ以テ直ニ之ヲ消滅スレバ蔓延ノ危難ヲ排除スルヲ得ベシ之ト等シク窒扶斯ニ於テモ亦此方法ニヨリテ之ヲ預防スルコトヲ得ルナリ

吾人ノ知ル所ニ據レバ窒扶斯ハ唯人類ニノミ感染シ又人類ガ此病ノ原因トナルモノナリ而シテ不幸ニモ其徽菌ハ消滅スルコト能ハザルガ故ニ其病者ノ家族ハイフモ更ナリ同ジ井水ヲ用ヰル人ニ及其食物ノ出所ヲ同ウセル人ニ或ハ病家ト相通シテ而カモ不完全ナル下水ヲ共有スル人々ハ食物水若クハ空氣ニ因リテ其徽菌ヲ腸內ニ吸收スルモノナリ而シテ其徽菌ハ至小至微ニシテソノ大サハ日光中ニ現ハルル塵埃ヨリ大ナラズト雖モ實ニ病毒若シクハ死毒ヲモ含蓄スル有害物タリ

窒扶斯徽菌ハ多クノ場合ニ於テ多少患者ノ排泄物ヲ混合セラレタル水中ニ存在スルモノナラントハ殆ト明確ニシテ疑フベカラサルナリソモ〳〵窒扶斯熱ハ徽菌ニ因リテ生ゼラレ、又其徽菌ハ消滅セズシテ人体ヨリ吐出セラレ更ニ下水ヲ通シテ川流若シクハ湖水ニ注入セルモノナルコトハ既ニ人々ノ了解スル所ナリ然ルニ普通ノ道理ヲ解スル人々ニシテ下水ノ口ニ近キ川水湖水ヲ汲ミ取リテ更ニ蒸溜スルコトモナク之ヲ飲料トナシ使用スルモノアルハ實ニ信スベカラザルコトニシテ此等ノ所爲ノ如キハ眞ニ人類タル責任ヲ盡シタルモノト謂フ可カラズ而シテ是等ノ不注意ナル人々若シクハ是等ノ人々ノ不注意ヨリシテ他ノ無心ナル人々カ此疾ニ罹ル時ハ忽チ之ヲ天命ニ歸スルニ至ル愚モ亦甚シト謂フベシ

窒扶斯徽菌ガ下水管ニ於ケル排水口ノ不完全ナルガ爲メニ其管ニ因リテ時トシテ直ニ人々ノ家ニ入リ込ムコトアリ下水ノ瓦斯ノ人家ニ入ルハ固ヨリ忌ムベキモノニシテ人々ノ健康ヲ害スルニ最モ甚シ而シテ其害ニ因リテハ實ニ言フベカラザルモノアリ然レドモ瓦斯ノミニテハ未タ以テ窒扶斯熱ヲ導クコトアルナシ其之レヲ生ズルハ必ズ窒扶斯徽菌ノ存スルカ爲メナリ下水ノ排水口ノ乾燥スルコトアルハ多クハ夏時避暑或ハ旅行ノ爲メ閉鎖シテ人ノ住マザル家々ニ起ル所ナリ而シテ管中ヲ拂ヒ來レル瓦斯ハ其管側ニシテ乾燥スル時ハ其處

ニ附着スル黴菌ヲ吹キ落シテ室中ニ送リ黴菌ハ之ニ止リ遲カレ速カレ遂ニ飲料或ハ食物中ニ侵入スルモノナリ尤モ此事タル未ダ其明證ヲ得タルニ非ザレドモ秋冷ノ時節ニ至リテ人々市府ニ歸リ來リタル後窒扶斯熱ノ發生スルコト屡ナル事實ヨリ推ス時ハ全ク其理ナキ假説ニモアラザルベシ

能ク觀察シタル實驗ニヨレバ窒扶斯黴菌ハ氷塊ノ中ニ在リテ而モ長キ時間ヲ經過スルモ其生ヲ維持スルモノナリトノ證ヲ得タルコト屡ナリキ而シテ有毒ナル黴菌カ不潔ナル水ノ凍合セル中ニ在リテ更ニ人体中ニ侵入スルコトハ乞フ之ヲ次章ニ述ベン

（未完）

○臘葉ノ萎縮度

市、塘、生

凡ソ生葉ハ之ヲ臘葉ニスレハ必ズ多少萎縮スルコトハ人ノ能ク承認スルトコロナリ然レ𪜈植物葉ハ其全面積ノ幾分ノ一萎縮スルヤニ至テハ好事植物學者ノ外ニ知ル者蓋シ稀ナルベシ余此頃閑ニ乘ジ蕎麥ノ生葉數枚ヲ壓臘シオキ其乾クヲ待チ原葉面積ノ幾%萎縮シタル度ヲ測リシニ概ネ平均21.9%ナリキ左ニ比較ノ爲メはるすてつど氏ノ調査ニ係レル植物ノ葉ノ萎縮度表ヲ掲ゲン（予ハプラニメートルヲ用ヰズシテ單ニ罫度紙ニテ概測シタルノミ）

ぽんてどりあ	11%	谷百合	14%	内長植物
蘭	19%	黍ノ一種	27%	
秋葵	21%	槭樹	22%	外長植物
蓼	23%	日向葵	27%	
馬齒莧（スベリヒユ）	35%	車前	44%	
かたるぱ	45%			

則チ換言スレバ內長植物ノ葉ノ萎縮度ハ平均僅カニ18%ニ過ギザレ𪜈外長植物ノ全萎縮度ハ平均31%ニ達スルナリ左レバ前者ハ後者ニ比シテ其萎縮度ノ小ナルハ言ヲ待タズ殊ニ內長植物ノ葉ハ其長サノ萎縮度極メテ小ナルガ如シ此表ニ因リ百合ノ葉ト車前ノ葉ハ萎縮度ニ於テ大差アルハ一目瞭然ナル可シ

○農科大學々術報告第二巻第一號（前號ノ續）

A B 生 投

第四章　活働蛋白質ノ未ダ機制作用ヲ受ケザルモノハ植物細胞內ニ存在スルヤ、若シ存在セリト爲セバ機制作用ヲ受ケタルモノ即生活原形質ト同樣ニ動搖的ナルヤ又化學的反應ニ因リ其「アルデヒード」的性狀ヲ認知スルヲ得ルヤ否ヤ此等ノ疑問タルヤトーマス、ボコルニー幷ニ著者ガ深ク硏究シタル所ニシテ其成蹟大凡左ノ如シ第一諸種ノ植物ニハ普通ノモノト全ク相違セル一種ノ蛋白質アリテ溶解ノ狀ヲ爲ス第二此物質ハ生活原形質、死亡原形質其他今マデ知ラレタル總テノ溶解蛋白質ガ呈セザル所ノ反應ヲ呈ス第三此物質ハ細胞ノ生長シ增殖スルニ當テ使用セラルヽガ故ニ是レ一種ノ貯蓄養料タリ

今藻類ノ如キ或ハ高等植物ノ体部ノ如キ之ヲ處スルニ微弱ナル鹽基即例ヘバ「コフェイン」（〇、一乃至〇、五「ペルセント」）或ハ「アンチピリン」（〇、一乃至〇、五「ペルセント」）ヲ以テスレバ細胞內多數ノ微細ニシテ透明無色ナル球体ヲ生ジ此等ノ球体漸ク合着シテ大トナルベシ而シテ此等球体ハ細胞內ノ液胞若クハ緣邊ノ原形質內ニアリ此試驗ニ最モ能ク適スルハ Spirogyra ニシテ此藻ヲ處スルニ夫ノ「コフェイン」ヲ以テシ後此藻ヲ「コフェイン」ノ溶液ヨリ取リ出シ純水中ニ置ケバ此等球体ハ漸次消滅スベシ又再ビ之ヲ「コフェイン」ノ溶液中ニ入ルヽニ再ビ之ヲ生ズ然レトモ藻類ヲ「コフェイン」中ニ置クヿ長キニ過ギ若クハ細胞ニ施スニ稀薄ナル酸ヲ以テシ若クハ蟻酸「アルデヒード」、「ヒドロキシルアミン」、銅ノ鹽類ヲ以テシ若クハ「エーテル」ノ蒸氣

ヲ以テシ以テ之ヲ殺セバ細胞ノ死亡スルヤ此等球体モ叉大ニ其性質ヲ變ジ球体內數多ノ微細ナル液胞ヲ生ジ球体ハ凝固シテ以テ不溶解性トナリ液胞ハ往々數多相合着シテ大ナル一個ノ液胞トナリ隨テ球体ハ一個ノ內空ナル球ト爲ルヿアリ其外醋酸、硫酸、「アルコール」等ヲ以テ處シ、或ハ熱スルモ此等球体ハ其性質ヲ變ズ其凝固シタル後ニハ其化學的反應絕エテ普通ノ凝固蛋白質ト異ルヿ無シ此等ノ事情ニ因テ以テ考フレバ此等球体ガ原形質ト密ニ相類似スルヤ明ナリ此等球体ヲ稱シテ「プロテオゾーム」ト云フ

而メ此等「プロテオゾーム」ヲ處スルニ稀薄ノ「アンモニア」ヲ以テスレバ「プロテオゾーム」ハ變ジテ固形トナル是レ普通ノ蛋白質ト大ニ異レル一條ナリ而メ此時ニ當テハ「アンモニア」ハ「プロテオゾーム」ト化學的化合ヲ爲セルモノタリ凡ソ「プロテオゾーム」ノ一度「アンモニア」ト化合シタルモノハ稀薄鹽酸ヲ以テ攝氏四十度ニ温ムルモ溶解スルヿ無ク十「ペルセント」ノ鹽酸ヲ以テ八十度ニ熱スルニ辛フジテ溶解スベシ斯クノ如ク「プロテオゾーム」ガ「アンモニア」ト化合シテ以テ固狀ト爲ルヿハ「プロテオゾーム」內「アルデヒード」群アリト爲セバ其理容易ニ理解スベシ而メ夫ノ「アルデヒード」ハ既ニ其「アンモニア」ト化合シタル後ト雖𪜈能ク硝酸銀液ヲ還元スルノ力アリ故ニ若シ「プロテオゾーム」ニモ「アルデヒード」群アレバ其「アンモニア」ト化合シタル後ト雖𪜈硝酸銀液ヲ還元スルノ力存在セザルベカラザルヤ明々タリ

然リ而メ今植物細胞ニ就キ其「プロテオゾーム」ガ果シテ此力アルヤ否ヤヲ試ムルニハ大ニ注意スベキヿアリ何ゾヤ植物細胞ニハ葡萄糖或ハ「タンニン」ノ如キ硝酸銀液ヲ還元スルノ力アル物質往々存在スレバ先ヅ豫メ此等物質ヲ除却セザルベカラズトス著者ハ夫ノSpirogyra藻ヲ一種ノ養液內ニ栽培シ二三週間內ニ其細胞內ニ於ケル「タンニン」ヲ悉ク消滅セシメタリ其後ニ至リ常ノ如ク「コフエイン」ヲ以テ細胞內ニ「プロテオゾー

ム」ヲ生ゼシメ之ヲ處スルニ「アンモニア」ヲ以テシタルニ共「プロテオゾーム」ハ能ク極テ稀薄ナル「アルカリ」性銀液ヲ還元シ爲ニ自ラ黒變シタリ又 Symphoricarpus racemosus ノ漿果ハ絕エテ「タンニン」其他類似ノ物質ヲ含マズ故ニ其組織ヲ處スルニ先ヅ「コフェイン」ヲ以テシ後稀薄「アンモニア」内ニ置キ後水ヲ以テ能ク洗滌シテ以テ糖分ヲ除却シ銀液ヲ施スニ「プロテオゾーム」ハ同ク黒變スベシ

而シテ此等「プロテオゾーム」ナル球体ガ果シテ前論述スル所ノ活働蛋白質ナルヤ然ラザルヤ之ヲ決セザルベカラズ今例ヘバ「スピロギラ」藻ヲ硫酸石灰、重炭酸石灰、硫酸「マグネシア」、燐酸加里、幷ニ鹽化鐵ヲ含メル溶液ニ栽培スルニ藻ハ能ク繁茂スベシト雖モ獨リ窒素ヲ供給スルノ源無キヲ以テ藻ハ勢貯蓄セル活働蛋白質ヲ使用セザルベカラズ加之又新ニ蛋白質ヲ造成スルヿ能ハズ故ニ斯クノ如キ養液ニ栽培スルヿ二三週ニ及ベバ此等藻ニ施スニ「コフェイン」ヲ以テスルモ絕エテ「プロテオゾーム」体ヲ生ズルヿ無シ然レモ之ヲ硝酸加里、硝酸石灰、硫酸「マグネシア」、燐酸加里幷ニ鹽化鐵ヲ含メル溶液内ニ栽培スレバ三週日ニシテ再ビ「コフェイン」ニ逢テ「プロテオゾーム」ヲ生ズルニ至ルベシ

活働蛋白質ハ高等ト劣等トヲ問ハズ種々ナル植物ニアリ食虫草ノ葉ニハたぬきもヲ除クノ外常ニ是アリまうせんごけニハ葉、莖、花共ニアリ其外べんけいさう科葉ノ表皮下細胞、かんざくらノ表皮細胞、しうかいどう屬ノ莖毛、さんしゆゆ、うこんかうノ花瓣、れんぎやうノ葯、さふらん、やなぎ、つゝじ、とうだいぐさノ雌蕊、ひまわりノ子葉、等ナリ

菌類ニハ活働蛋白質アリヤ否ヤ疑ハシ藻類ニハ之ヲ具スルモノ尠少ナラズトス

以上論述スル所ヲ約スルニ植物細胞ニハ往々極テ動搖的ナル蛋白質貯蓄セラレ植物ハ此等物質ヲ使用シテ以

テ其細胞ヲ增殖生長セシメ又此蛋白質ノ「アンモニア」幷ニ硝酸鐵液ニ對スルヤ其反應「アルデヒード」ニ同シ又繙テ毒物學上ノ事ヲ攻究スルニ生活原形質ノ蛋白質ニハ「アルデヒード」群アリ因是觀之此等活働蛋白質內機制的ノ作用起リ因テ以テ生活原形質ヲ生ズルヤ明ナリトス

活働蛋白質ト普通ノ死亡蛋白質トヲ比較スルニ其差異左ノ如シ

(一)水ト化合スルノ力ハ死亡蛋白質ニ於ケルヨリモ活働蛋白質ニ於テ强シ

(二)「コフェイン」幷ニ「アンチピリン」ハ活働蛋白質ニ其作用ヲ及ボスト雖モ死亡蛋白質ニハ及ボサズ

(三)十乃至廿「ペルセント」ノ「アルコール」、「エーテル」ノ蒸氣稀薄醋酸ハ活働蛋白質ヲ變化スト雖モ死亡蛋白質ヲ變化セズ

(四)活働蛋白質ハ「アンモニア」ヲ吸收シテ不溶解性ト爲ルト雖モ死亡蛋白質ハ「アンモニア」ニ逢フモ絕エテ影響ヲ蒙ルヿ無シ

(五)活働蛋白質ハ稀薄「アルカリ」溶液ヲ還元スト雖モ死亡蛋白質ハ然ラズ

(完)

○正誤

前號二百九十一頁ノ十行 Meisser 後ハ「又 E. triangulare, Meiss ナドノ種類モ或ハ何時ノ間ニカ日本ノ或知ラレザル地方ニ入込ミオルカモ知ルベカラズ或ハ亦已ニ知ラレタル地方ニアリテモ此植物ニ注意セザル如キヿナキヲ保セザレバ必ズシモ他ノ種類ハ日本ニナシト斷言スル能ハザルナリ」ノ誤

○寄贈書目錄

日本園藝會雜誌	第五拾五號	日本園藝會
農科大學桑園	一册	佐々木忠二郎君
東京醫學會雜誌	第八卷（第十三號第十四號）	東京醫學會
牧畜雜誌	（第百三十二號第百三十三號）	牧畜雜誌社
東洋學藝雜誌	第百五十四號	東洋學藝社
日本蠶業新誌	第七十四號	日本蠶學雜誌社
日本藥業雜誌	第貳百五十八號	衛生社
國家醫學會雜誌	第八十七號	國家醫學會
大日本山林會報	第百三十九號	大日本山林會事務所
大日本農會報	第百五十四號	大日本農會事務所
動物學雜誌	第六十九號	動物學會
地質學雜誌	第十號	
Bulletin de L'Herbier Boissier.	Tome II. No. 5.	
La Nuova Notarisia, Serie V.	Aprile, 1894.	
The Gardeners' Chronicle,	No. 387—391.	
The Journal of Botany.	No. 378.	
Kansas State Agricultural College.	一册	
Bulletin of Miscellaneous Information,	No. 90.	

廣告

第二回園藝品評會開設

本會第二回園藝品評會左ノ通開設スルニ付會員ノ内外ヲ論セス有志者ノ成ルヘク出品並ニ來觀アラムヿヲ希望ス

○會場位置　東京上野公園內第五號館（博覽會跡）

○出品種類　花卉、果實、蔬菜並ニ其貯藏食品

○出品受入　十一月一日ヨリ十三日マテ

○同受付所　東京本鄉區金助町七十二番地田中方

○開會期日　十一月十五日ヨリ廿一日マテ

東京京橋區新富町
五丁目十七番地　日本園藝會

追テ品評會規則書要望ノ方ハ郵便切手貳錢ヲ添ヘテ其旨本會ニ御申込アリタシ

理學士 西松二郎君校閱 敬業社編纂

普通鑛物學教科書

全壹册定價金三拾錢
郵税金四錢
紙數二百八十三頁精密木板百四十七個挿入

越溪 西村豐君著
●支那史綱 全二册（東京府立城北尋常中學校日本中學校教科用書）（上卷定價金三拾五錢郵税金八錢 下卷定價金四拾錢郵税金十錢）

佐村八郎君編纂
●井上博士講論集 第壹編發兌 第二編近刻
定價金二拾錢 郵税金四錢 紙數百八十餘頁

醫學士 杉田盛君纂譯
醫 石濱㭊三君校正
●通俗海水浴論 全壹册
定價金拾五錢郵税金二錢 紙數八十餘ページ

敬業社編纂
●英文佛國革命史 全壹册
定價金二拾錢郵税金四錢 紙數百七十ページ

發兌書肆 東京市神田區裏神保町一番地（電話番號二百五十八番） 敬業社 ●東京大阪各地方書林ニ於テ販賣セリ

菊池熊太郎君著
●中程地文學
全一册（合本）定價金七拾錢郵税拾錢
全二册（分本）一卷定價金四拾五錢 郵税金四錢
二卷定價金三拾錢●郵税金四錢紙數二百四拾頁

同君著
●新撰小地文學
全一册定價金廿五錢郵税金二錢

地學協會編纂
●朝鮮全圖
全一册定價金二拾五錢 郵税金二錢

●支那全圖
附日本。朝鮮全圖（附錄支那帝國地理大意）
全壹册定價金二拾錢 郵税金二錢

東洋學藝雜誌

第百五十四號明治廿七年七月廿五日發行
一册金十錢郵稅金一錢六册前金五十四錢

◉目次◉六月廿日強震波線圖◉論說○支那書史概論（承前）末松謙澄○ポーランド亡滅ノ話下箕作元八○蜜蜂ノ性質及利用法（圖入）王利喜造○本邦ノ森林及林學志賀泰山○原始ノ生物石川千代松◉雜錄○本年六月廿日ノ強震及其餘震大森房吉○東京府下震災被害表大森房吉○雜報○強震波線圖○地震驗測報告○探天堂の地震豫知○黑死病○黑死病調査員派出○青山博士石神軍醫罹病○慰問醫員派出○大學紀要理科○彈性論書○近世幾何學敎科書○ヘルッ氏著述ノ英譯○數學雜誌○人間の死亡數○健康なる一醫師の運動業作を測定せる成績○工業敎員養成所○牛乳學校○露國の駱駝○輻射熱を遮る物◉大學卒業證書授與式○海上の奇音◉外ニ學會記事應問等數件

◉發行所 東京神田 東洋學藝社

地質學雜誌

第十一號明治廿七年八月十五日發兌

◉壹册金九錢郵稅金壹錢◉六册前金（郵稅共）五十四錢

目錄◉卷首圖第十五版卷首 **論說及報文**◉六月二十日強震波線圖理科大學地震學敎室報告◉地震波の長さ及び傳達の速度に就て大森房吉君 **雜錄** 地貌の分類下村成典君◉噴口岩變質論（承前）佐藤傳藏君◉火山內部の構造石井八萬次郎君 **史傳**◉司馬江漢山崎直方君 **雜報**◉學者の移動雜報◉一日の行程十數火山の應接◉大田切、小田切の險◉妙高山の鑛泉◉旅行用麻嚢◉旅行見聞鎖談の續き◉二十有六の墜道通ずる所皆是凝灰岩◉籠岩◉Sand-dune bars & lagoon◉洒水の瀧◉愛鷹山◉長石の結晶新產地◉三島平原◉火山岩中に於ける斜方輝石と橄欖石◉理科大學地質敎室彙報◉地震學敎室彙報

發賣所 東京神田區裏神保町一番地 **敬業社**

動物學雜誌

第六十九號明治廿七年七月十五日發兌◉壹册金十錢郵稅一錢◉六册前金（郵稅共）六十六錢

目次◉小笠原島動物界（後篇）弘田貞守君稿◉イギリスにて人類學の祖と稱せらるゝプリッチャアドの人類論（第六十六號の續き）坪井正五郎君◉蛙の發生マーシャル氏著坂藤順策譯 **◉雜錄**◉動物學研究用藥劑便覧（前號の續き）◉相馬地方動物實驗雜記◉田舍ノ動物觀察記第一◉帝國大學紀要理科第六卷第四號◉龜鼈「がすとるら」ニ成ル方法ニ就キテ◉とりがひノ眼◉くもノ腹腔◉生殖素ノ研究第二夜光蟲ノ分體及胞子生殖◉鷄仔羊膜及外膜間ノ結合及胚膜◉一新人體條蟲ニ附キテ◉河豚毒素發見◉帝國博物館ノ參考室◉蜘蛛ニ就テ觀察◉わんつるし蜂ノ熱心◉東京動物學會

發賣所 東京神田區裏神保町壹番地 **敬業社**

新刊廣告

理科大學敎授博士松村任三先生著

日光山植物目錄 全一册

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル**九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄**ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ**修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校**ノ敎員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田區裏神保町　**敬業社**

東京日本橋通三丁目　**丸善書店**

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候

○本誌每月一回發兌一册金拾貳錢○六冊前金七拾貳錢○拾二冊前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹冊拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マテ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレハ御届可申候

明治廿七年八月十九日印刷
明治廿七年八月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所　同所　敬業社
同　東京市日本橋區通三丁目　丸善書店

QK

314179

明治廿一年二月三日內務省許可

明治廿六年六月三十日遞信省認可

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] August 20, 1894. [No. 90.

CONTENTS.

Japanese Species of Betula. By **Mitsutaro Shirai.** 317

Three Japanese Plagiogyriæ. By **Tomitaro Makino.** 323

Isaria arachenophila Parasitic on the Trap-door Spider. By **Atsushi Yasuda.** . 337

Movements of Young Shoots of Pinus. (Continued from No. 86.) By **Kenjiro Fujii.** 340

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. By **Komajiro Sawada.** 343

Miscellaneous:— 344

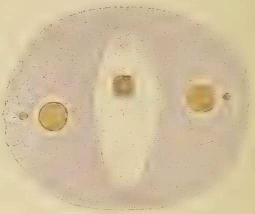
Root-tubercles of Leguminous Plants.—Ascent of Water in Plants.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yojō sho-oku."—Bacteria.—Shrinkage of Dried Leaves.—Bulletin of the Agricultural College, Imperial University. Vol. II. No. 1.

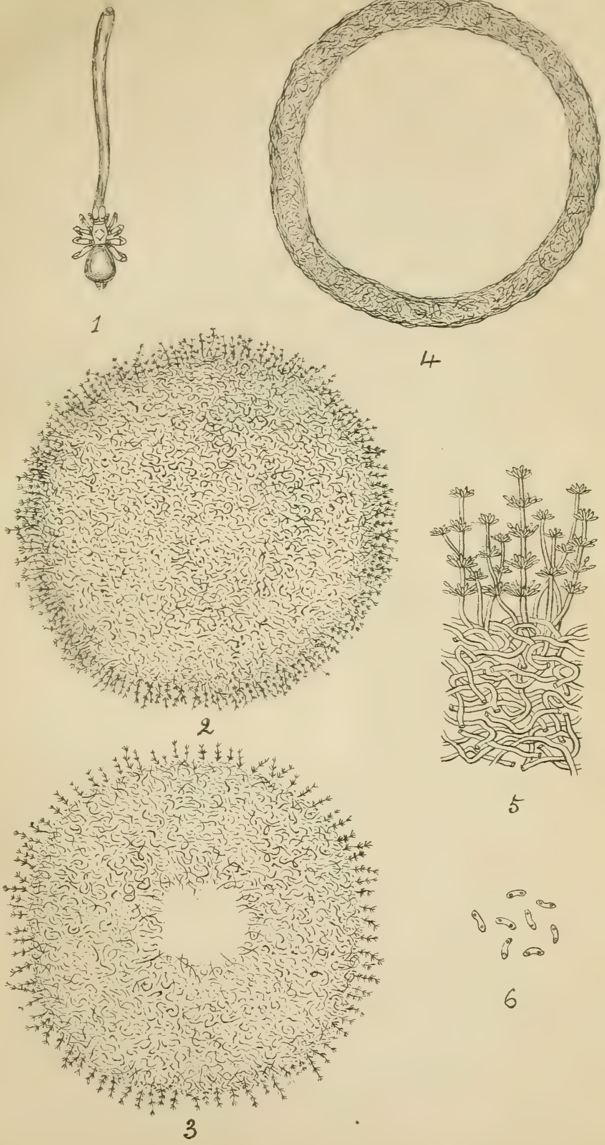
All letters and communications to be addressed to the

TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.

No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

印刷所 東京市神田區錦町三丁目廿五番地 熊田活版所





ISARIA ARACHNOPHILA, DITM.
KUMOTAKE.
BY ATSUSHI YASUDA.

植物學雜誌第八卷第九十一號　（明治廿七年九月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII.　September 20, 1894.　No. 91.]

Notes on the Attraction-Spheres in the Pollen-Cells of Ginkgo biloba.

By

Sakugorō Hirase.

Since **Léon Guignard's** discovery of attraction-spheres in plant-cells(1), several workers, such as **Bütschli**(2), **Paul Schottländer**(3), **E. de Wildeman**(4), **Strasburger**(5), **Karsten**(6), also observed these minute bodies in various plants.

In the course of investigation of fertilization of Ginkgo biloba, I met with pretty large attraction-spheres in the pollen-cells of this plant. The following is a brief description of these bodies.

The figure represents a stage of pollen-cell, about two weeks before fertilizing season and suspended in the so-called "*pollen-chamber*" of the ovule. The pollen-cell is elliptical and 84 μ by 100 μ in size. The nucleus lying in its central part is round, long-elliptical, or sometimes very irregularly shaped, much less dense in its consistence than the surrounding cytoplasm, and is provided with a large nucleolus. The cell has two attraction-spheres, each of which is found in the marginal part of the cell along its major axis and not close to the nucleus. These attraction-spheres are of considerable size and are recognizable even by means of low magnifying power (e. g. Zeiss BB + 2). Each sphere consists of a spherical body and striae radiating from it; the body is much clearer in its marginal part than in its inner part, which represents the centrosome. Between the nucleus and the sphere and nearer the latter lies a roundish body, compact in its nature and looking like a nucleolus.(1)

---

(1) Sur l'existence des "sphères attractives" dans les cellules végétales. (*Compt.-rend. de l'Acad. des Sc.*, 1891).

(2) Ueb. d. sog. Centralköper d. Zelle u. ihre Bedeutung. (*Verhandlgn. d. Naturh.-Med. Ver. z. Heidelberg.* N. F. Bd. IV, Heft 5).

(3) Beiträge z. Kenntniss d. Zellkerns u. d. Sexualzellen b. Kryptogamen. (*Cohn's Beitr. z. Biol. d. Pflanz.* Bd. VI, 1892).

(4) Sur les sphères attractives dans quelques cellules végétales. (*Bulletin de l'Acad. royale de Belgique.* T. XXI, 1891.—Sur les sphères attractives dans les cellules végétales. (Do., 1892).

(5) Histol. Beitr. Heft IV, 1892.

(6) Ueb. Bezichgn. d. Nucleolen z. d. Centrosomen b. Psilotum triquetrum. (*Ber. d. Deuts. Bot. Ges.* Jahrg. XII, 1893).

The figure was drawn under the magnification by Zeiss DD + 4 from the preparation made by fixing the materials by Flemming's stronger solution, cutting by means of microtome, staining by Böhmer's hæmatoxylin, and imbedding in Canada-balsam.(2) The centrosomes are, however, observable even in *living cells* under water, but this method of observation is not to be recommended, because the pollen-cells swell up in water and after a few seconds no trace of the spheres, the nucleolus, and the nucleolus-like bodies remains at all. Treated with Merkel's liquid, the attraction-spheres are fixed instantaneously and we can observe not only their body but also their rays even without staining.

Science College, Imperial University, Tōkyō.

---

(1) As to the nature of this nucleolus-like body, my views will be published at some future occasion.

(2) The nucleolus, the nucleolus-like bodies, as well as the centrosomes are stained dark yellowish brown. Though my preparations were made about ten months ago they remain perfectly good in colours etc.

公孫樹ノ受胎期前ニ於ル花粉細胞ノ「アットラクションスフィヤ」（圖ハ英文中ニ出ス）

平瀬作五郎

帝國大學植物園ノ中央ニ聳立スル公孫樹ハ結實每ニ豐饒ナリ、予昨年七月以來材料ヲ該樹ニ採リ、其受胎ニ就テ小實驗ヲ企テタリ、而シテ其受胎期ハ凡ソ九月中旬頃ニ在ルヿハ已ニ本誌第八十三號ニ於テ報告セリ、然ルニ其花粉ハ四月下旬ニ於テ早ク已ニ飛散シ、胚珠ノ頂端ニ送達シ、更ニ珠孔ヨリ沈降シテ花粉室ニ安居シ、以テ受胎期ノ到ルヲ俟ツナリ、其所謂花粉室ハぎんなんノ肉即チ胚乳ヲ被フ處ノ褐色ナル薄皮ノ中ニ設ケラレタリ、然レ𪜈花粉細胞ハ徒ラニ此永時日ヲ消費スルニハ非スシテ間斷ナク徐々肥太成育シ將ニ受胎期ニ接セントスル前二週日頃ニ到レハ玆ニ描寫セルガ如キ奇形ヲ呈出スル者ナリ、八月末日ヨリ九月初メニ當リテ採集セル材料ニ在リテハ個々皆同形ナラサルハナシ、是生果實ニテモ撿出スベシ、即チ褐色ナル薄皮ノ小凸起ヲ具スル部分ヲ採リ、其裏面ヲ窺ヘハ凸起ノ下部ノ組織破損シタル中ニ頗ル巨大ニシテ無色ナル一嚢或ハ二、稀ニ三嚢ノ存在スルヲ見ルベシ、若シ此嚢ヲ薄皮ヨリ離脱セント欲セハ解剖顯微鏡下ニ於テ能ク之ヲ爲スヿヲ得ベシ、斯ク爲セル者ハ頗ル觀察ニ便アリ、玆ニ於テ之ニ水ヲ施セハ嚢ハ忽チ伸脹シテ嚢裏ニ一大楕圓体ノ悠然靜座スルヲ點撿シ得ベシ、其内容大概本圖ニ示スモノト一致スベシ、但シ本圖ニ示ス處ノ黃染セル五個ノ球体ハ皆無色ナレ𪜈其特異ナル光輝ニヨリテ之ヲ鮮明ニ認ムルヿヲ得、星芒狀ノ線條ハ之ヲ認ムルヿヲ得ス、而シテ水ノ嚢膜ヲ浸透スルヤ否ヤ花粉細胞ハ漸ク膨脹變形シ、同時ニ光輝体ハ忽チ消滅ス、其間僅カニ十秒ヲ保持シ得可キノミ、試ニ水ニ代フルニ數「ペルセント」ノ葡萄糖水ヲ以テセシニ數分間ハ保存スルヿヲ得タレ𪜈光輝体ノ溶解ヲ全ク防止スルヿ能ハザリシ、更ニ易フルニ鹽化白金ト「クロミック」酸トノ

混和水溶液ヲ以テセハ能ク長時間保存スルヿヲ得ベシト雖𪜈之カ爲メニ忽チ染色シテ透明ヲ失シ、隨テ觀察ニ便ナラス、故ニ完全ナル「プレパラート」ヲ得ント欲セハ煩累ヲ忍ヒテ次ニ記スル所ノ處方ニ從フノ外未タ良策ナキガ如シ

昨年八月卄一日材料ヲ植物園ニ需メ、之ヲ小截シテ「フレミング」液ニ投シ（或ハ鹽化白金「クロミック」酸ノ混和液ヲ以テスルモ可ナリ）、二十四時間以上浸置シテ、之ヲ流水ニテ洗フヿ亦二十四時間ノ后、直チニ無水酒精中ニ投入シテ數日間安置ス、次テ之ヲ「セロイデン」液ヘ移シ浸スヿ五日間、之ヲ「クロロホルム」ニヨリテ凝固セシメ、更ニ之ヲ「パラフィン」中ヘ移シテ文火ニテ蒸ルヿ數時、而シテ「ミクロトーム」ニテ七片ニ截斷シ、之ヲ過酸化水素ニテ晒シタル后、「ブォエメル」氏ノ「ヘマトキシリン」液ニテ染色シ、終ニ「カナダバルサム」ニテ封裝シタリ、此ノ處方ニテ製シタル「プレパラート」十五六枚ニシテ併モ完全ナルモノハ只一枚ノミ、本圖ハ此「プレパラート」ヨリ描寫セリ（四百倍）、餘ハ皆斜斷セラレタレバ其各片ヲ順次點撿スルニ非サレバ其全豹ヲ知了スベカラス、然レ𪜈是等皆幸ヒ參照品タル價値ヲ失フニハ至ラサルナリ

偖テ是等ノ「プレパラート」ヲ點撿スルニ花粉細胞ノ全体ハ楕圓ニシテ其短徑ハ八十四「ミクロミリメートル」、長徑ハ百「ミ、ミ、メ」アリ、原形質ハ紫染ス、而シテ其核ハ中央ニ占居シ、形狀ハ或ハ圓或ハ長楕圓或ハ本圖ニ於ルガ如ク稍不定形ナレ𪜈皆其膜ヲ有シ、之ヲ圍繞スル原形質ノ如ク緻密ナラズシテ中ニ細粒子ノ斷續散布セルヲ認ム、又或ハ全ク其膜ヲ失ヒテ只細粒子ノ狀况他部原形質ト區別スベキモノヲ以テ一帶ノ環狀ヲ作レルモアリ、要スルニ是等ノ變形ハ皆其階級ノ程度ヲ表スルニ過ザルナリ、而シテ皆裏ニ暗黃染セル一團塊ヲ收ムルヲ常トス、是其仁ナルベシ、更ニ楕圓ノ長徑上殆ト其兩端ニ接近セル處ヲ諦視セハ暗黃染セル小圓

塊ノ兩個正對シテ恰モ光芒ヲ放射セル星ニ似タルモノヲ認ムベシ、若シ一回其所在ヲ覺ラバ低度ナル顯微鏡（凡ソ百五十倍斗リ）ヲ用ヒテモ優ニ之ヲ撿出スルヿヲ得ベシ、以テ其甚大ナルヲ推知スベシ

抑モ「アットラクションスフィヤ」ハ細胞核ノ分裂ニ際シ現出スル小体ニシテ是其分裂ニ於ル主働者ナルベシトハ專ラ學者間ニ行ハル處ノ說ナリ、而シテ生殖細胞核ノ分裂ノ際ニ現出スルモノヲ以テ觀察ニ最モ便ナリト云フ、殊ニ動物ニ多ク且ツ其圖說モ亦詳明ナルカ如シ、而シテ植物ニ在リテハ佛國ノ植物學家「ギギヤール」氏百合及ビむらさきつゆくさ等ニ就テ之ヲ發見セラレ其圖說頗ル詳細且ツ鮮明ナリ、而シテ是等ノ諸書ヲ閱覽シタル處ニ由レハ其形狀ハ夥多ノ星芒狀ノ線條相集合スル處ニ於テ此等ノ線端ヲ以テ一個ノ明圓ヲ畫キ、其圓心ニ當リテ一小黑點（比較的ニ）ヲ印セリ、是所謂「セントロゾーム」ト名ケラレタル者ナリ、或ハ全ク此小黑點ヲ缺ケルモノモ見受タリ、而シテ予カ「プレパラート」ニ在テハ暗黃染セル小圓体ヲ中心トシ、殆ト其周邊ニ接近セル處ヨリ星芒線ヲ射出シテ其周邊ニ僅カニ淡明ナル環ヲ見ル、是前ノ諸書ニ畫ケルモノト少シク異ナル點ナリトス、然レ𪜈諸書ニ記スル處ニヨレハ皆最良好ナル「オイルインメルジョン」ヲ以テ視察セシ者ニ非サルハナシ、而シテ予ハ未タ此ノ如キ寶鏡ヲ使用スル幸運ニ際會セズ、或ハ此ノ如キ寶鏡ヲ以テセバ更ニ異彩ヲ發見シ得ルヤ否ヤ豫知ス可ラス

各「アットラクションスフィヤ」ノ內側ニ當リテ更ニ一層巨大（比較的ニ）シテ暗黃染セル圓体ノ占居スルヲ見ル、此体ハ全ク圓滿平滑ナリ、或ハ此大圓体ヲ見スシテ同位置ニ卵形狀ノ液胞ノ存在スルヿアリ、而シテ此階級ニ於テハ別ニ核外、楕圓短徑ノ一端ニ相當スル位置ニ必ス暗黃染セル大圓塊ノ現存スルヲ認ム、其形ハ二個ノ大圓相抱擁シタランガ如キ瓢狀ナリ、而シテ本圖ニ於ル如ク大圓体「アットラクションスフィヤ」ノ下ニ占居

スルモノニ在リテ別ニ此ノ如キ瓢狀ノ大團塊ヲ見ルヿナシ、又本圖ニ示ス如ク大圓体ノ周邊ニ沿ヒテ少シク淡明ナル餘地ノ存スルヲ見ル、是其圓体ト液胞トノ積ノ差ナリト認メハ液胞ノ大サヲ推知スルニ足ルベシ且ツ亦染色ノ點ニ於テモ核內ノ仁、大圓体、瓢狀團塊及ビ「アットラクションスフィヤ」皆同一色ナルヲ見ル、是等ノ標徵ヲ以テ此大圓体ノ行爲ヲ按スレハ略了得スル處ナキニシモ非ス、然レ𪜈尙ホ二三ノ階級ヲ見ルニ非サレバ未タ俄ニ之ヲ斷定ス可ラサルナリ、即チ本年更ニ標品ヲ採集シタレハ其結果ハ後日ニ讓リ、今ハ只公孫樹ノ花粉細胞ハ其授精準備トシテ此ノ如キ奇形ヲ呈出シ、且ツ其「アットラクションスフィヤ」ハ能ク低度ノ顯微鏡ヲ用ヒテ撿出シ得ルヿヲ報告スルニ止ム

日本藥局方植物篇　（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

本植物ノ果實ハ頭狀ヲ爲シテ攢簇シ其中央ニ位スルモノハ細小ニシテ卵圓形ヲ爲シ其質硬固二房ヲ有シ扁平ナラス外面白色ノ軟毛ヲ密生シ其稔熟完全ナラスト又Robert Bentley 及ヒ Henry Trimen 兩氏合著藥用植物學ニ云本植物ハ一千八百三十三年前ニ於テ學名ヲ附シ其形狀ヲ記載シ之ヲ報告セシコト無シト雖𪜈植物家中ニハ已ニ知ラレタルモノトス一千八百十七年ニ於テコロ子ル Johnson 氏ハイスパァンノ南大約四十五哩ナル波斯南西部ノ一小都府エズクハストノ近傍ニ於テ本植物ノ蕃殖スルヲ目擊スト云フ然レドモ氏ノ旅行記中ニハ毫モ植物學的記載ヲ掲ケス又一千八百二十二年ニ於テ J. Dow 氏ノエズクハスト近傍ニテ採集セシ標本ハ葉及ヒ幼稚ナル果實ヲ有ス此標本ハ英國博物館ニ陳列セリ Robert Brown 氏ノ本植物ヲ調査セシハ此標本ノ存在スルト一千八百二十四年ニ於テ Merat 及ヒ De Lens 兩氏ノ出版ニ係ル百科字典ヲ基トス氏ハ本植物ヲ

新種トセリ然レドモ新タニ之ニ屬名ヲ命ゼザリシコロヲル Wright 氏モ亦前同所ニテ本植物ヲ採集ス氏ノ説ニ據レバ乾燥ナル荒野ニシテ砂礫ノ陽地ニ蕃殖スト一千八百三十年林嘶嘶敎會 D. Don 氏ノ記載ハ Wright 氏採集ノ此標本ニ因ルモノトス其他ノ遊歷家 Aucer Eloy 氏モ亦之ヲ採集ス一千八百四十二年ニ於テ Janbert 及ヒ Spach 兩氏ニ因テ Disernecton gummiferum ト命名シ其圖ヲ製セシハ此標本ヨリスト然レドモ本植物ハ此地ニ限リ産スルモノニアラズ波斯北部ニテハ古義斯丹、哥剌森ヲ經テサーラットニ亘リ東部ハヘラット迄分布ス一千八百三十九年ニ於テ J. Mc Meill 氏ハコリアンニ於テ本植物ヲ採集ス此地ニテハ海上四千尺ノ高嶺ニ産ス但シエズクハストヨリ南西ノ地ニハ産セズト

本植物ハザルザテス河ノ近傍北緯四十五度アラル海ノ南岸ナル乾燥ノ荒野ニ産ス此地ヨリ花ヲ有シタル標本ヲ得ルニ至レリ Borzsczow 氏ノ記載ヲ爲シ其圖ヲ製セシハ此標本ニ基スト云々トアリ

藥品　安母尼亞屈謨一名護謨安母尼亞幾 Ammoniacum.

安母尼亞屈謨ハ本植物ノ果實稔熟ノ時期ニ昆蟲ノ刺傷セシ部位ヨリ自然ニ滲出シタル乳液ノ乾燥凝固シタル護謨樹脂ニシテ日本藥局方ニハ藥用トス生藥學ニ云往古ノ安母尼亞屈謨ハ亞弗利加ノ北部ニ産スル Ferula tingitana, L. ナル植物ノ産生物ニシテ現今ノ生藥即チ次ニ掲クル Dorema（ドレマ）屬ノ植物ヨリ採集セルモノト化學的成分ヲ異ニセリ而シテ此「ドレマ」ニ基原セル方今ノ生藥ニ九百年紀ト千年紀ノ間ニ於テ亞拉毘亞人叉安母尼亞屈謨ナル名稱ヲ附セリ」トアリ

收穫　本植物ハ極メテ奇異ニシテ葉ヲ有セズ根ニ接近シタル莖ニ果實ヲ生シ其稔熟スル時期ニ至リ昆蟲ノ刺傷ヲ受ケ夥シク乳液ヲ滲出シ大氣ニ觸レテ凝結シ顆粒狀若クハ淚狀ノ塊ヲ爲ス之ヲ採收シテ莖及枝杪ヲ混淆

スルマヽ孟買港ニ輸シ同港ニテ莖、枝杪及ヒ果實等ヲ除去シ亞母尼亞屈謨ヲ類別スルヲ通常トス或云本植物ハ或時期ニ於テ其全部乳液ヲ以テ充盈ス此際微ニ疵傷ヲ施スモ夥シク乳液ヲ滲出シ大氣ニ觸レテ凝固スト

性狀　亞母尼亞屈謨ハ大小種々ノ顆粒ヲ爲シ間マ胡桃大ニ至ル者アリ上等品ハ顆粒狀ヲ爲ス之ヲ Ammoniacum in granis ト稱ス此モノハ帶黃白色ニシテ蠟樣ノ光輝ヲ帶ヒ其破碎面ハ貝殼狀ニシテ蠟樣ノ光輝ヲ有シ內部ハ白色若クハ帶藍白色ヲ呈シ決シテ綠色ノ光輝ヲ有セス此レ瓦爾抜奴謨ト異ナル點ナリ

本品ヲ指間ニ於テ揑（コネ）ルトキハ軟化シテ粘着性ヲ得ルニ至レリ

下等品ハ莖ノ下部根ノ上部ニ附着シタルモノニシテ大ナル不整ノ塊ヲ爲ス之ヲ Ammoniacum in Massis ト云フ

本品ハ多少顆粒狀安母尼亞屈謨ヲ雜在ス其他植物性ノ汚物及ヒ他ノ不潔物ヲ混和ス

安母尼亞屈謨ハ寒冷ニ在テハ其質脆ク熱ニ逢ヘハ軟化スレドモ澄明ニ熔融セズ水ト共ニ硏磨スレハ白色乳劑樣ノ溷濁液ヲ生シ水ニハ微ニ溶解シ酒精ニハ全量ノ大約四分三ヲ溶解ス改正日本藥局方ニ云安母尼亞屈謨ハ相粘合シ或ハ箇々分離セル顆粒ヨリ成リ又ハ稍々巨大ナル塊片ヲナシ帶黃褐色ヲ有ス其新破碎面ハ曇白色ヲ呈シ寒冷ノ時ハ脆ク熱ニ逢ヘハ軟化スレトモ澄明ニ熔融スルコトナシ臭氣ハ特異ニシテ味ハ苦ク且辛烈ナリ

本品五「グラム」ニ水十五「グラム」ヲ加ヘテ硏磨スレバ白色ノ乳樣液トナリ之ニ那篤倫滷液ヲ加フレバ黃色ヲ呈シ終ニ褐色トナル

本品ハ鹽酸ヲ注キ微溫ヲ與フルニ紅色或ハ紫色ヲ呈ス可カラズ又其粉末ヲ灰化スルモ百分ニ付キ六分以上ノ

固形物ヲ殘留ス可カラズ

本品ハ寒冷ニ依テ固結セシメ粉末トナシ篩過シテ不潔物ヲ除去シ用ニ供スヘシ」トアリ

實性反應　日本藥局方注解ニ云本條ニ安母尼亞屈謨五「グラム」ニ水十五「グラム」ヲ加ヘテ硏磨スレハ白色乳樣ノ液トナリ之ニ那篤倫液ヲ加フレハ黄色ヲ呈シ終ニ褐色トナル」トアルハ實性反應トス（但シ阿魏モ亦之ニ類スル反應ヲ徵ス）又安母尼亞屈謨ハ之ニ十倍量ノ水ヲ加ヘテ煑沸スレハ溷濁液トナリ更ニ過格魯兒鉄ヲ加フレハ紅紫色ヲ呈ス（瓦爾拔奴謨トノ區別）其他安母尼亞屈謨ハ强硫酸ニハ赤色ヲ呈シテ溶解シ水ヲ以テ之ヲ稀釋スルノ後加里滷液ヲ加フレハ螢石彩ヲ現ハス是レ又其阿魏及ヒ瓦爾拔奴謨ト異ナルノ點トス」トアリ

安母尼亞屈謨ノ臭氣ハ一種特異ニシテ味ハ苦ク苛辣不快芳香性ナリ

（以下次號）

奥州地方植物採集畧記

池野成一郎

余ハ本年七月十一日ヨリ八月十九日迄四十日間岩手、青森ノ諸山ヲ跋渉シ以テ植物ノ採集ヲ試ミタリ抑々奥州地方ハ從來本邦植物家ガ未ダ深ク採集ヲ試ミザルノ地ニシテ若シ詳ニ其植物ヲ探究スレバ必ズヤ奇種珍品ノアルベキヤ言ヲ待タズ余ガ今回ノ行タル日數僅ニ四十ヲ出デズ且其跋渉セル所モ人ノ普ク往復スル所ニシテ固ヨリ深山幽谷絶エテ人無キ所ニ至レルニ非ズ故ニ其採集モ敢エテ奇品無シ然レ𪜈余ハ今次ニ順ヲ追ヒテ余ガ跋渉セル山谷ノ狀況ヲ略述シ以テ後來彼地ニ採集ヲ試ムル人ノ便ニ供セントス

岩手山

岩手山ハ岩手縣陸中國盛岡ノ西北ニ聳立シ海面ヲ拔クヿ二千零五十「メートル」（農商務省地質局出版日本帝

國全圖ニ據ル）縣下第一ノ高山ナリ岩手山ハ之ヲガンジユザントモ讀ミ或ハイハテヤマトモ讀ム或ハ一ニ岩鷲山トモ書ス

岩手山ニ登ルニ三道アリ其一柳澤村ヨリスルモノ其二平笠村ヨリスルモノ其三大釋ヨリスルモノ是レナリ柳澤村ヨリスルハ最普通ニシテ村ハ盛岡ヲ去ルヿ凡ソ四里、極テ貧村ナレバ宿屋ト云フモ小屋同様ナリトカ聞ク果シテ然ルヤ否ヤ平笠村ハ盛岡ヲ去ルヿ凡ソ六里、其宿屋等ハ柳澤村ニ於ケルガ如シト而メ大釋ハ盛岡ヲ去ルヿ五里半、人力車ヲモ通ズ大釋ニ温泉アリ澤村ト云ヘル宿屋一軒アリ家屋ハ高壯ト云フニハ非ザレ𪜈頗ル廣ク客室凡八十ヲ有ス食物、夜具、坐敷等モ惡カラズ岩手山ニ採集セントスル人ハ此所ヨリ登リテ可ナリ

盛岡ヨリ大釋ニ至ルノ道ハ一面廣漠タル草原ニシテ茲ニ馬ヲ放牧ス此草原ニ生ズルモノニハうつぼぐさアリむしやりんどうアリをかとらのをアリはなしようぶアリぎぼうしアリやなぎらんアリおほいたどりアリのりのきアリききやうアリ木ハ矮小ニシテ唯所々ニ散在スルなら等ニ過ギズ

岩手山ハ之ヲ遠ク盛岡ヨリ臨ムベシ盛岡ヨリ西北ヲ眺ムルニ他ノ諸山ニ秀デヽ屹立シ其狀駿州富士ニ彷彿タルモノ即是レナリ故ニ一ニ南部富士ノ名アリ

大釋ヨリ岩手山ニ登ル二道アリ其一雫石をみ坂ト云フ採集ニ宜シ其一大地獄ヲ經ル道、竹木叢生シ登攀ニ難ク且採集ニ宜シカラズ採集者ハ宜ク其第一路ヲ取ルベシ

岩手山ハ一日ニテ往復スルヿヲ得ベク其レニテモ隨分夥多ノ植物ヲ採集スベシ然レ𪜈精密ニ採集セントスル人ハ山ノ絶頂近キ所ニ小屋アレバ茲ニ一夜ヲ明カスモ可ナラン但大釋ヨリ絶頂迄登リ三里半ト云フ

岩手山ノ雫石をみ阪ハ先ヅ其初メ半里許ハ草原ナリ其ヲ過ギ去リテ灌木ノ叢生スル所ニ出ヅ木根岩角ヲ踏ミ登ル之ヲ過グル丶凡一里半ニシテ所謂偃松帶ニ達スはひまつアリ所々ニ散在シ巨巖屹立、ふきづめさう、がんかうらん等其間ニ繁茂シ恰モ氈ヲ敷キタルガ如シ偃松帶ニ至レバ許多ノ高山的植物ヲ見ルみやまからまつさうノ如キもみぢからまつノ如キしらねわふひノ如キさんかえふノ如キきばなのこまのつめノ如キおほばきすみれノ如キおがらばなノ如キいはぐるまノ如キづたやくしゆノ如キしらねにんじんノ如キまるばきんれいくわノ如キうすゆきさうノ如キこけもゝノ如キいそつゝじノ如キえぞつゝじノ如キいはかゞみノ如キよつばしほがまぎくノ如キいはちどりノ如キゆきざゝノ如キくるまゆりノ如キねばりのぎらんノ如キ是レナリ而メ夫ノ有名ナルむしとりすみれ即 Pinguicula vulgaris ハ甚ダ多シ從來其産地越中立山（富山侯採集、余モ一昨年採集ス）甲州八ヶ岳（英人サトウ氏採集）信州戸隠山（矢田部博士松村博士採集、余モ一昨年採集ス）、越後清水峠（矢田部博士、大久保助教授其他同行理科大學々生諸氏）陸中栗駒山（宮城農學校教員某氏、明治廿三年八月余モ牧野氏ト共ニ採集）ナリシガ今之ニ岩手山ヲ加フルニ至レリ絶頂ヨリ凡ソ十丁程ノ所舊噴火孔ノ底共覺シキ所ニ小屋アリ信者ノ宿泊ニ便ス其レヨリ凡一丁程手前ニハうこんうつぎ（Diervilla Middendorffiana var. Maximowiczii）アリ盛ニ繁茂開花セリ小屋ヨリ登ルヿ大凡五六丁ノ所諸種ノ草花盛リニシテ中ニ高山ニ御定リノいはぎゝやう抔モアリ其ヨリ上ハ道ザク〳〵ニシテ恰モ富士山ノ七八合目以上ノ如シ其間ニハいはぶくろ（Pentastemon frutescens）トこまくさ（方言センニンサウ）トアリいはぶくろハ北海道幷ニ羽後鳥海山ニ産スルヿハ從來人ノ知ル所ナリ而メこまくさハ所々ノ高山ニアリ殊ニ信州ノ御嶽ノ如キ從來之ヲ産スルヿ多カリシモ信徒ノ妄ニ拔去ルヲ以テ今ハ殆ド根絶ヤシノ狀ヲ爲セリト然ルニ此山ニ於テハ信徒ハ之ヲ拔去ルヿ

無ク却テ之ヲ拔去レバ神罰ヲ蒙ルト稱スト聞ク斯クノ如キ妄想ハ植物採集者ニ取テ極テ都合宜シ山ノ絕頂ニハ又々舊噴火孔アリ直徑大凡六七丁周圍凡ソ半里アリ之ヲ廻ルヲ御鉢マハリト云フヿ富士山ニ同ジ御鉢マハリノ途中岩手山ノ最高峯ニ登ル之ヲ藥師ケ天井ト云フ富士ノ劍ノ峯ニ相當ス峰上藥師ノ石像ヲ安置ス噴火孔ノ內部ニモ道アリ步行スベシ此噴火孔ハ富士山絕頂ノモノヽ如ク深カラズ且孔中圓錐山屹立スルヲ以テ異レリトス噴火孔ノ內面又緣邊ニハ前述ノこまくさ幷ニいはぶくろ所々ニ盛ニ繁茂シ他ニハいははたざは及ビいはやなぎ少々ヲ見ルノミ他ノ植物ハ絕エテ之ヲ見ルヿ無シ

附言聞ク所ニ因レバ札幌農學校敎授宮部金吾氏ハ昨年此山ニ採集ヲ試ミラレタリト氏ノ採集ニ老練ナル必ズヤ許多ノ奇品ヲ收聚セラレタルヤ疑無シ

又聞ク在理科大學松平齊氏モ余ニ後ルヽヿ凡ソ一ケ月此山ニ採集ヲ試ミラレタリト氏ノ採集植物果〆如何余ガ聞カント欲スル所ナリ

（以下次號）

黑岩恒氏採集琉球植物

牧野富太郎

琉球植物ノ世ニ明カナルモノ之ヲ其土產ノ全數ニ比スレバ實ニ僅々ノミ是レ未ダ洽ネク同島ノ植物ヲ採集シ其數ヲ盡シ其品ヲ極メ以テ之ヲ一部完成ノ書トナシ世ニ公ニセシモノ之レ無キガ爲メナリ然レ𪜈其一部ヲ記シテ以テ之ヲ世ニ問ヒタルモノハ洋ノ東西ヲ論ゼズ前後既ニ數氏ノ著アリ此等ノ書編ヲ繙クモノハ略其土植物ノ一斑ヲ知ルヲ得ベシト雖𪜈然レ𪜈未ダ以テ其全豹ヲ窺フニ足ラザルナリ

同島ノ植物採集上且ツ其名稱ノ攷定上多年ノ間夙ニ最モ力ヲ此間ニ傾注セラレシハ田代安定氏ヲ措テ他ニ其

人ヲ見ズ實ニ同氏ノ力ヲ此ニ効セシヿハ時ノ前後ヲ問ハズ苟モ同島植物ノ上ニ覽ルモノ誰カ其功績ヲ稱揚セザランヤ然ルニ只惜ムラクハ同氏ハ同島植物ニ通曉セルヿ此ノ如ク其レ深シト雖𪜈之ヲ世ニ公ニセラル、ノ極メテ遲々タルニ在リ然レ𪜈同氏ハ今日尙琉球植物最上ノ知識ヲ藴畜セラル予ハタヾ切望ス同氏蓄フル所ヲ公ニシ以テ帝國「フロラ」ノ闡明ヲ助長セラレンヿヲ

同氏ノ採集セラレタル琉球植物標品ノ帝國理科大學植物學室ニ藏セルモノ其數實ニ寡キニ非ザルナリ此等ハ即チ時臻リ機熟セバ則チ必ズ教授松村博士ノ著述ニ依リテ早晩他ノ琉球植物ト共ニ世ニ明カナルニ至ラントス同博士ノ同島植物ノ著ニ就テハ今ヲ距ルヿ十年既ニ先驅アリ題シテ「琉球植物說」ト云フ（明治十七年五月刋行學藝志林第八十二冊）吾人ハ今日尙此篇アルヿヲ忘レザルナリ燁々タル紫電ニ次グモノハ轟々タル殷雷是ナリ

黒岩恒君ハ理學ノ士ナリ土佐國佐川驛ノ人、予ト郷里ヲ同クス故ニ交ヲ訂スル最モ舊シ明治廿五年將ニ郷國ヲ去リ遠ク邊疆ノ琉球ニ入リ慘憺タル瘴烟蠻雨ヲ犯シテ探幽闡微大ニ同島ノ博物學ヲ振作セラレントスルヤ相約スルニ採集セル植物公布ノ事ヲ以テス已ニシテ君故山ヲ辭シ一去杳然帆影忽チ空シク南海ノ波濤タヾ天ニ連ナルヲ見ルノミ孕門ノ花、桂濱ノ月、花晨月夕、君ガ心ハ遂ニ奪フ可カラズ壯圖ノ人今ヤ乃チ白雲ノ外ニ在リ

幾モナク天外信書ヲ傳フ曰ク

牧野君貴下琉球植物ヲ世ニ公ニセンヿヲ約セシ以來殆一周年予今球陽ニ客タリ前約ヲ履ム蓋易々タルノミ是ヲ以テ業務ノ餘暇專ニ採集ニ從ヒ勉テ琉球植物界ノ闡明ヲ期セントス彼ビーチー、エングレル、ヘムズ

レー諸氏ノ書ニ載スル所ノ如キハ琉球植物ノ一斑ヲモ伺フニ足ラザルナリ貴下ノ植物分類學ニ深キ必ズヤ進ンデ新採集ノ琉球植物ヲ分類記述スルノ人タルベク敢テ望ヲ貴下ニ屬ス帝國版圖ノ植界豈外人ノ鼾睡ヲ容ルベケンヤ貴下幸ニ勉旃予ハ喜デ貴下ノ採集人タランコトヲ期スルモノナリ

明治二十五年十二月九日　　琉球首里ノ客舍ニ於テ　辱交　黒岩　恒

牧野君　貴下

ト予ハ我親友ノ採品ニ就テ送致ノ順序ニ之ヲ記述シ以テ一ハ君ガ友誼ノ厚キニ酬ヒ一ハ他日松村博士ノ著述ニ向フテ強テ少補アランコトヲ冀ヒ且ツ延テ帝國「フロラ」ノ闡明ニ闘シ豫メ聊カ希望スル所アリ

●第一回送致標品

學名ノ頭上括弧内ニ數字アリ是レ標品ノ番號ニシテ黒岩君所藏ノ標品ト其號數相符合ス是ヲ以テ彼此相照合スルニ極メテ便ナリ

(1) Davallia tenuifolia *Sw.* var. β. chinensis *Hook.* (=*Davallia chinensis* Sw.; *Trichomanes chinense* Osb.)

はまほらしのぶ　(しだ科)

莖ハ匍匐ス然レ𪜈短シ黒褐色ノ毛鱗ヲ生ズ、葉ハ卵狀披斜形ニ〆長葉柄ヲ有ス三羽裂狀ニ〆羽片ハ卵狀披針形、下部ノモノハ多クハ略ゞ對出ス卵狀楔形ヲナセル小羽片ハ稍ゞ離在シテ深ク羽裂シ裂片ハ倒卵狀楔形ニシテ單形若クハ二三耳ヲナシ頂端嚙截セラレ囊堆ハ各裂片ノ頂端ニ一個若クハ二個アリ、葉質ハ革質ニ〆兩面裸出ス

八重山列島中小濱島(明治二十五年八月十一日黒岩恒氏採)

(未完)

螲蟷圖解

安田篤

本號ニ「くもたけ」ノ英文並ニ附圖ヲ掲載スル樣前號ニ於テ讀者諸君ニ御約束致セシガ近頃本雜誌論說ノ數大ニ增加シ復之ヲ掲グル餘白ナケレバ附圖ノミヲ載セ該英文ハ見合セタリ讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

Explanation of the plate VII.

Fig. 1. Isaria arachnophila, Ditm. (Kumotake) from a trap-door spider.

Fig 2. A cross-section of the stroma made near the apical portion.

Fig. 3. A cross-section of the stroma made at the portion where the light purplish colour is about to disappear.

Fig. 4. A cross-section made from the lower white portion.

Fig. 5. The mycelium and the conidiferous basidia.

Fig. 6. The conidia.

◎雜錄

○植物雜俎

松村任三

▲正保以後舶來ノ植物曰、琉球躑躅、曰茶蘭、曰椶櫚竹、曰カザグルマ、曰レダマ、曰アンジヤベル

▲散丹花ハ正保ノ初年、小倉仙翁ト蠟梅トハ正保年中

▲寛文年中舶來ノ者曰アラセイトウ、曰オランダセキチク、曰クロフネツヽジ、曰佛桑花、曰鐵線花

▲延寳年中舶來ノ者曰エニシタ、曰タウツバキ、曰頳桐（ヒギリ）

▲天和、貞享年間舶來ノ者曰ルカウ、曰ヒラギナンテン、曰コウワウサウ、曰美人蕉、曰千日紅

▲元祿年中舶來ノ者曰欒樹（モクケンジ）、曰椿（チヤンチン）、曰落花生（ナンキンマメ）、曰甘藷（サツマイモ）

▲寳永正德年間舶來ノ者曰立泉花、曰珊瑚菜（サンゴナ）、曰諸葛菜

▲享保年中舶來ノ者曰ナンキンザクロ、曰タウカヘデ、曰甘蔗、曰土茯苓、曰白斂、曰使君子、曰百部、曰呉茱萸、曰酸棗（サチブトナツメ）、曰山茱萸、曰牡荊（ニンジンボク）、曰木瓜、曰ウコン、曰時計草、曰テウセンアサガホ

▲天正年中舶來ノ者曰アリダサウ、曰玉蜀黍（ナンバンキビ）

▲寛永年中舶來ノ者曰秋海棠、曰榲桲（マルメロ）、曰西瓜（スヰクワ）、曰カボチヤアサガホ

▲慶長年中舶來ノ者曰モウリンクワ、曰煙草、曰蕃椒

▲嘉永年間舶來ノ者曰ジヤガタラズヰセン、曰マルバルカウ、曰クワエンサウ、曰玉枕菜（シラクキナ）曰、マツヨヒグサ、曰ツキミグサ

▲天保年間舶來ノ者曰オランダセンニチ

▲弘化年間舶來ノ者曰サフランモドキ

▲七草ノ歌ニ曰せり、なづな、でぎやう、はこべら、みゝなぐさ、すゞな、すゞしろ、これや七草（寛平年中ノ歌）

▲又曰せり、なづな、でぎやう、たびらこ、佛のざ、あしな、みゝなし、これを七草

▲梅ノ歌ニ曰春さればまづさく宿の梅の花、ひとり見つゝや春日くらさん（萬葉集）

▲ユヅリハノ歌ニ曰春ごとに色もかはらぬユヅリハのゆつるときはも君がためとぞ（新撰六帖有家）

▲松ノ花ノ歌ニ曰をしなへて木のめも春の淺みどり松にぞ千代の色はこもれる（新古）

▲鼠麴草（ハヽコグサ）ノ歌曰母子草花のさく心もしらす春の野にはら〳〵つめるはゝこもちゐに（藻鹽草）

▲天青地白（チヽコグサ）ノ歌曰ちゝこぐさ花の色はちゝこぐさにてみゆれどひとつも枝にあるへきはなし（躬恒集）

▲紫花地丁（スミレ）ノ歌曰すみれつむ野邊は霞の袖はへてうすむらさきの色そにほへる（千首和歌）

▲狗尾草（エノコログサ）ノ歌曰ゑのこ草種はをのれとあるものを粟のなるとは誰かいひけん（言塵集）

▲藜（アカザ）ノ歌曰いかてかは此よのやみもてらさましひかりあかさの杖なかりせば（散木集）

（鈴木棟一）

▲ヤマドウシン上州榛名山ニ產ス

▲Secale cereale L. ナツコムギ（新稱）外國ヨリ來レル一種ノ麥ナリ六月中旬盛ニ花アリ梢頭毛茸アリ一個ノ小穗ハ二花ノ並列ニ成ル小穗ノ左右ニ細苞二片アリ之ヲ護ス外穎ニ芒アリ穎粉白ニシテ著キ三條ノ綠線アリ共背ニ剛毛ヲ生ス花ニ三雄蕊アリ葯ハ黃色ニシテ長シ東京廢荒ノ地ニ生スルヲ見タリ

○あかかんば及ほざきやどりき

頃日林學士白澤保美氏本年八月信州戸隱山採集植物標品數種ヲ示サル中ニ二種ノ奇品アリ一ハ方言あかかんばト稱スル者ニシテ前號余ノ日本樺屬說ニ記載セザリシ品ナリ此標品ハ理科大學植物標品中ニモアレドモ未ダ學名ノ記入ナシ蓋シ Betula alba, var. cordifolia, Regel ナラン一種ハなら樹上ニ普通ノやどりきト共ニ寄生セ

ル寄生植物ニシテフ、サ兩氏日本植物目錄ニほざきのやどりき Loranthus (?) Tanakae Fr. et Sav. ト記載セル者ナリ葉形普通ノやどりきニ似テ薄ク花ハ穗狀ヲナシ一寸餘ノ軸ノ兩側ニ子實ヲ排生ス花ヲ得テ其所屬ヲ確定シマホシキナリ

○ながはのいぬしで

此種ハ予本年八月上州南甘樂郡萬場村近傍ニ於テ撿出採集ス未ダ諸書ニ記載セザルノ品ナリ葉形いぬしでニ似テ長ク側脈ノ數多キヲ異リトス常品ハ側脈ノ數十二以下ナレ𪜈此品ハ十七八ニ至レリ且花穗モ亦常品ノ二倍ニ餘レリ Carpinus yedoensis, Maxim. var. multinervis ト稱スベキ歟

○にれゑのき

同月予同處近傍ニ於テ一種ノ異木ヲ採集ス葉形ゑのきニ似テゑのきニ非ズむくのきニ似テむくのきニ非ス一種ノ異品ナリマキス氏ノ著書ヲ按スルニ Pteroceltis ノ圖アリ此ト吻口ス恐クハ是ナラン

○唐崎ノ松ノ病源

唐崎ノ松ハ近時漸ク翠色ヲ失ヒ枯枝ヲ生スルノ傾アリト聞キ其病源ヲ探ラント欲シ去月卅一日同處ニ到リ一見スルニ病源ハ昆虫ノ寄生ニ非ズシテ害菌ノ寄生ニアルガ如シ松ハ往々昆虫ガ枝心ヲ蠹食スルヨリ漸次枯枝ヲ生スルコトアレ𪜈唐崎ノ松ニハ此昆虫ヲ見ズ且其病狀昆虫ノ爲ニ非ザルハ枯枝ノ模樣ニヨリ明ナリ因テ害菌ノ所爲ニ非ズヤト思ヒ枯枝ヲ熟視スルニ果セル哉一種ノ Polyporus ノ寄生スルヲ發見セリ「ホリポーラス」ノ傷痍寄生害菌ナルハ世既ニ定說アリ然ラハ則チ枯死ノ原因ハ此害菌ニアルヤ疑ナシ

松樹下ノ茶店ノ老人ノ說ニ此松ノ幹ハ元ト二本ニ分レ上方ニ聳エシガ一本ハ三十餘年前ニ折損シ一本ハ近年

迄アリシガ漸ク枯死シ其大半ヲ昨年切取リタリ近頃此稀有ノ名木ノ衰弱シ枯枝ヲ生スルヲ患ヘ縣廳其他有志者ハ病原ヲ根盤ノ狹小ニアリトナシ今度新ニ周圍五尺ノ築出シヲ爲スニ議決シ計畫中ナリト云ヘリ此築出シハ舊藩ノ頃モ一度行ヒシヿアリシ由其石垣ノ殘リ近年迄三尺許內ノ方ニアリシガ根ニ害アリトナシ近年盡ク掘出セリ又此松ニハ根邊ニ二百餘ノ孔ヲ掘リ年々酒粕ヲ肥料トシテ與フル由ヲ云フ根盤ノ狹小ナルモ多少病原ヲナスヤモ知レザレ𪜈是ハ些細ノヿナラン害菌ニ至リテハ其害同日ノ論ニアラズ早ク害菌アル枝ヲ切リ取リ他處ニ持行キ燒キ捨テザレバ其芽胞ハ又傷痍ヲ求メテ健全ノ枝ニ寄生スルノ恐アリ實地ニ就テ見ルニ松ノ舊容ヲ人ニ示サンガ爲ニ枯枝ハ成可ク切去ラズ健全ノ者ト並ベ存スルノ風アリ此害菌ノ蔓延及傳播ヲ助クルノ一原因ヲナシ大害アリ枯枝ハ成可ク惜マズ根本ノ健全ナル處ヨリ切リ取ルヲ良トス聊カ所見ヲ記シテ參考ニ供ス當路者ノ一讀ヲ得バ予ノ幸ノミナラズ松モ大ニ喜ブ所ナラン

（以上四件白井光太郎報）

○繇條書屋植物雜記　（其十二）

牧野富太郎

●日本植物學名一斑

Thalictrum minus *L.* var. elatum *Lecoyer.* あきらかまつ

Trautvetteria palmata *Fisch. et Mey.* var. japonica *Huth.* もみぢからまつ

Aquilegia flabellate *Sieb. et Zucc.* をだまき　むらさきをだまき

Actaea spicata *L.* var. nigra *Willd.* るゐえふしようま

Nuphar japonicum *DC.* var. crenatum *Casp.* subvar. luteum *Casp.* かはほね

——　——　——subvar. rubrotinctrum *Casp.* べにかははね

——　——-var. subintegerrimum *Casp.* ひめかははね

Nymphaea tetragona *Georgi* var. angusta *Casp.* subvar. orientalis *Casp.* ひつじぐさ

Papaver somniferum *L.* var. glabrum *Boiss.* (=*P. hortense* Huss.; *P. somniferum* L. β. *hortense*) けし（原外國產）本邦ニ培養スル品ハ皆スベテ無毛ニメ葉緣ノ齒端ニ尖刺ヲ有セズ花色ニ種々アリ今別ニ葉緣ノ齒端尖刺ヲ成シ花梗幷ニ蕚片ニ粗毛アルアリ本邦ニ之ヲ見ズ之ヲ α. setigerum Boiss. (=*P. setigerum* DC.) ト稱ス

Draba nemorosa *L.* β. hebecarpa *Ledeb.* いぬなづな 本邦隨處ニ生ズルモノハ皆角面ニ毛アリ然ルニ Hance 氏本邦產ノモノヲ α. leiocarpa *Ledeb.* トスルハ非ナリ Franchet et Savatier 兩氏合著ノ日本植物目錄ニ此變種ヲ擧グ然レ𪜈予ハ未ダ一モ之ヲ邦內ニ見ズ Maximowicz 氏ハ邦產トシテ Var. β. hebecarpa *Ledeb.* ヲ擧グレ𪜈 Var. leiocarpa *Ledeb.* ハ本邦ニ產スルヲ見ズト云ヘリ

Malva sylvestris *L.* β. mauritiana *Boiss.* (= *M. mauritiana* L.) ぜにあふひ（原外國產）五裂葉緣ノ齒鈍圓ナルト葉柄花梗共ニ無毛ナルトヲ以テ其 typica 品ナル葉五―七裂、尖頭、葉柄花梗ニ毛アルモノト異ナレリ

Elæocarpus decipiens *Hemsl.* はるゝのき E. photiniæfolia *Hook. et Arn.* ニ酷肖ス然レ𪜈其花体之ヨリ小ナリ

Aruncus sylvester *Kostel.* β. americana *Maxim.* やまぶきしようま

Sorbaria sorbifolia *A. Br.* β. stellipila *Maxim.* ほざきなゝかまど

Penthorum sedoides *L.* var. chinense *Maxim.* (=*P. chinense* Pursh.) たこのあし

Galium verum *L.* α. typica *Maxim.* きばなのかはらまつば(新稱)本邦中部以北ノ地方ニ之ヲ見ル

Var. leiocarpum *Ledeb.* ト云ヒ Var. β. lasiocarpum *Ledeb.* ト云フ必竟此黄花品中ノモノナリ然ルニ此種名ヲ以テ之ヲ本邦普通ノ乳白花品即チかはらまつばノ上ニ適用スルハ不可ナリ此乳白花品ナルかはらまつばニハ別ニ名アリ即チ

―― ――var. β. lacteum *Maxim.* ト云フ

Eupatorium Lindleyanum *DC.* ふぢばかま Hensley氏曰ク是レ或ハ E. chinense *L.* ? 然レ𪜈 Linné氏ノ標品今ヤ即チ無シ記述亦粗略ニシテ今此ニ其植物ヲ的辨スルヿ難シト

Buddleia japonica *Hemsl.* ふぢうつぎ B. curviflora *Hook.* et *Arn.* ハ琉球ニ産ス是レふぢうつぎト異ナリ今帝國産ノ該屬諸種ヲ擧グレバ實ニ左ノ如シ

(1) B. curviflora *Hook.* et *Arn.* しまやまふぢうつぎ(新稱)琉球ニ産ス

(2) B. japonica *Hemsl.* ふぢうつぎ 本邦諸處ニ産ス

(3) B. Lindleyana *Fortune.* こふぢうつぎ りうきうふぢうつぎ 琉球ニ産ス又土佐國幡多郡ニ之ヲ見ル

Plantago major *L.* var. asiatica *Decne.* (=*P. asiatica* L.) おほばこ

―― ――var. japonica *Miyabe* (=*P. japonica* Fr. et Sav.) たうおほばこ

Aspidistra elatior *Bl.* (=*Plectogyne variegata* Link et Kunth.) はらん

Alisma Plantago *L.* var parviflorum (*Beck.*) *Torr.* さじおもだか

——var. angustifolium *Kunth.* へらおもだか

Alisma reniforme *Don.* まるばおもだか　本誌八十六號ニ略說アリ

Cyperus amuricus *Maxim.* var. japonica *Maxim.* かやつりぐさ

Cyperus Iria *L.* こごめがやつり

——var. β. paniciformis *Clarke* (=*C. paniciformis* Fr. et Sav.) こゝごめがやつり(新稱)

Scirpus lineolatus *Fr. et Sav.* ひめはたるゐ(新稱)尾州ニ產ス又常總兩州ノ間ニ橫ハレル霞浦ノ湖邊ニ在リ

Scirpus triqueter *L.* さんかくゐ　Franch. et Sav. 兩氏合著ノ日本植物目錄ニハ之ヲ S. Pollichi *Gren. et Godr.* var. coriacea *Fr. et Sav.* トナス是レ之ヲ *S.* triqueter *L.* ノ異名トナシテ可ナリ

Scirpus lacustris *L.* var. β. Tabernæmontani *Trautv.* (=*S. Tabernæmontani* Gmel.; *S. lacustris β. digynus* Gren. et Godr.) ふとゐ　S. lacustris *L.* α. typicus *Regel.* ニハ三花柱ヲ有ス本邦果シテ之レヲ產スルヤ否ヤ未ダ詳ナラズふとゐニ在テハ皆二花柱ナリ

Eleocharis palustris *R. Br.* (=*Scirpus palustris* L.) ぬまはりゐ　本邦ノ「フロラ」ヲ記セル書中一モ本植物ノ我邦內ニ產スルヲ言フニ及バズ然レ圧之ヲ邦內諸處ニ見ル敢テ稀ナラズ

武州多摩川砂洲(池野成一郞氏幷ニ予)北海道箱館(大學)陸中栗駒山(予)幷ニ土佐岩戶邊(土居磯之助氏)ハ既ニ吾人ノ知悉セル產地ト知ル可シ

Eleocharis mitrata *Franch. et Sav.* (=*Scirpus mitratus* Fr. et Sav.) くろはりゐ (大學標品ニ於テ松村博士所命) 武州志村原(大學幷ニ予)幷ニ同小岩村(予)ニ之ヲ產ス又伊豆七島中大島岡田ニ於テ大久保助敎授

ノ採集セラレタルモノハ即チ之ト同種ナリ

Phragmites communis *Trin.* きたよし(新稱)我邦ニ在テハ北海道ニ之ヲ產ス

――――var. β. longivalvis *Miq.* (=*Ph. longivalvis* Steud.) よし　隨在之ヲ見ザルハ鮮シ

●たうねずみもち(新稱)

是レ今回ひゝらぎ科ニ屬セル清國產冬青即チ Ligustrum lucidum *Ait.* (五六ノ異名ヲ有ス今之ヲ省ス) ニ命ジテ其稱呼ニ便セシナリ本樹ニ就テハ本誌第八十號中ニ略說セシヿアリシガ本年始メテ田中芳男先生邸內ノモノニ花ヲ開キ予ハ同先生ノ好意ニヨリテ之レガ一枝ヲ得以テ詳ニ之ヲ驗閱スルノ機ヲ得タリ

Curtis's Botanical Magazine t. 2565. 及ビ Wight 氏著 Icones plantarum indiæ orientalis t. 736. 幷ニ Regel's Gartenflora, 1880, p. 22. ノ一圖ハ即チ本品ノ圖ニ係ル今本邦ニ於テ開花セルモノ正ニ之ト同一ナリ先キニハ未ダ花無キヲ以テ之ヲ L. lucidum *Ait.* トナスニ當テ全ク釋然タル能ハザリシガ今ヤ全ク其學名ヲ以テ此渡來ノ植物ヲ呼ブノ敢テ誤謬ナラザルヲ見ルニ至レリ

●からたちばなノ學名

予ハ日本植物報知第十五(本誌第六十號)ニ於テからたちばな(やぶかうじ科ニ屬ス)ノ學名ヲ Ardisia Tachibana *Makino.* ト新定シ之ヲ公ニシタリ然ルニ今回料ラズモ Maximowicz 氏ガ既ニ一千八百六十五年ニ出版セル Regel's Gartenflora 中ニ之ヲ圖說シ其學名ヲ世ニ公ニシタリシコトヲ見出セリ即チ Ardisia hortorum *Maxim.* 是レナリ既ニ此名アリ更ニ學名ヲ製スルノ必用ナシ A. Tachibana *Makino.* ノ名ハ徒ニ之レガ異名タルニ過ギザルニ至レリ

●ちやんばぎくノ學名

ちやんばぎく一ニたけにぐさト呼ビけし科ノ野生草ナリ C. Bouché 氏ハ本邦產ノモノヲ以テ支那產ノ原品ト異ナリトナシ之ヲ其變種ト考定シ以テ Bocconia (Macleya *R. Br.*) cordata *Willd.* var. japonica *Bouché* (Regel's Gartenflora, 1865, p. 230, t. 480.) ト呼ベリ

●Sueda asparagoides *Makino.*

本邦所產わかざ科植物ニまつなアリ從來 Schoberia maritima *C.A. Mey.* var.? asparagoides *Franch. et Sav.* (Enum. pl. jap. II. p. 470.) ノ名ヲ以テ之ヲ呼ベリ然レ𪜈此品ハ花ハ多クハ單獨若クハ二個相伴フテ小梗ヲ有シ花柱ハ長ク花蓋ヨリ超出シ種子ハ其徑殆ンド二半「ミリメートル」ヲ計ル等其切要ナル諸點大ニ Schoberia maritima *C.A. Mey.* 即チ Sueda maritima *Dumort.* ト異ニシテ之ヲ特立セル一種トナスヲ以テ殊ニ其正鵠ヲ得タルモノトス故ニ予ハ今其學名ヲ訂正シテ以テ **Sueda asparagoides Makino.** トナス

●Sueda maritima *Dumort.* β. angustifolia *Ledeb.* 橫濱附近ノ地ニ產ス

Sueda maritima *Dumort.* (=*Chenopodium maritimum* L.; *Chenopodina maritima* Moq.; *Schoberia maritima* C. A. Mey.) var. β. angustifolia *Ledeb.* (=*Chenopodina maritima* β. *erecta* Moq.) 武州橫濱港附近ノ地ニ產スルヲ知ル而シテ本年九月三日松平齊氏ト共ニ植物ヲ其地ニ採集セル時之ヲ其處ニ見出シタリはままつな（新稱）ヲ之レガ和名トス全草高サ一尺五寸許以內多クハ枝椏ヲ分ツテ葉々繁密ナリ花ハ細小ニシテ葉腋ニ三—五個團簇シテ無柄ナリ雄蕊花蓋ノ外ニ超出シ花柱ハ二個ニシテ花蓋ノ外ニ出デズ平在セル種子ハ其徑約ソ一半「ミリメートル」許アリ之ヲまつなニ比シテ大ニ細シ

●にしきゞノ學名公布ノ年代

西暦一千七百八十四年 Celastrus alatus *Thunb.* (Fl. Jap. p. 98.) ノ學名始メテ出ヅ

一千八百二十五－六年 Euonymus Thunbergianus *Blume* (Bijdr. p. 1147.) ノ學名出ヅ之ヲ Euonymus 屬ト改ム大ニ善シ然レ𪜈原トノ種名 alatus ハ遂ニ此ニ見ル能ハズ

一千八百二十七年 Evonimus alatus *Sieb.* (Syn. pl. œcon. p. 47.) ノ名公トナル原トノ種名 alatus 之ヲ Evonimus屬ナル好位地ノ下ニ復活セラル

一千八百五十八年 Melanocarya alata *Turcz.* (in Bull. Mosc. 1858, I. p. 453.) Turczaninow 氏ハ此名ヲ用ウ

年代ノ上ヨリ見レバ Euonymus Thunbergianus *Bl.* ノ學名ヲ採用ス可ク原トノ種名ヲ存スル上ヨリ見レバ Euonymus alatus *Sieb.* ノ學名ヲ採用ス可シ

○三好學氏ノ研究二件 （第八十六號ノ續キ）

(二)花粉管ノ刺撃運動

（此論文ノ大意ハ第八十七號ニ出スベキ所大ニ遲延シテ今日ニ至レリサレバ其間ニ既ニ原文ヲ讀了セラレタル人モ多カラン故ニ茲ニハ唯氏ガ研究ノ成蹟ノミヲ掲載スルヿト爲セリ） 池野誌ス

柱頭、花柱体部並ニ胚珠ハ液ヲ分泌シ以テ花粉管ヲ誘導ス

刺撃的物質ハ糖分ヲ以テ主トス然レ𪜈他ノ物質モ亦是レ無キニハ非ズ

一種植物ノ花粉管ハ通常種、屬若クハ科ヲ異ニセル植物雌蕋ノ分泌物ニテモ誘導セラルヽモノトス

花粉管ノ向化的刺撃性ハウエーバー氏ノ法則ニ準據ス

花粉管ハ通常多少向水的ナリ而シテ是性質ハ花粉管ヲシテ柱頭以外ニ生長セザラシムルノ一助タリ

花粉管ハ往々陰性ニ向氣的ナリ即酸素ニ富メル空氣ヲ避クルノ傾キアリ

花粉管ガ花柱ヨリ子房ニ至ルモノハ實際器械的ナリ

花粉管ハ細胞膜壁ヲ貫穿スルノ力ヲ具フ

（完）

○細胞分裂ト外界トノ關係

E、F、生　投

ドモール氏ガ研究次ノ如シ

むらさきおもとノ雄蕋毛ヲ取リテ之ヲ水素、炭酸或ハ眞空中ニ移スニ原形質ハ直ニ其運動ヲ止メ而シテ細胞核ノ分裂シツヽアルモノハ其分裂ヲ止ムルヿ無クシテ顆粒（ミクロゾーメン）ガ赤道面ニ排列スルノ作用ニ迄進ムベシ而シテ此時ニ至レバ兩個ノ娘細胞核ハ常ノ如ク相距リテ各々普通ノ靜止核ノ如キ外觀ヲ呈シ其間ニハ不染色体（アクロマチン）ノ糸アリテ之ヲ連結スベシ此時ニ當リ再ビ之ヲ大氣中ニ置ケバ兩細胞核ハ殆ド相接觸スルニ至リ又再ビ相距リ遂ニ赤道面上細胞膜ヲ生出スベシ

酸素ヲ除カザルモ之ニ施スニ「クロヽホルム」ニ「パラルデヒード」或ハ「アンモニア」ヲ以テスレバ細胞分裂ハ其狀、酸素ヲ除キタル時ニ同ジ

又雄蕋毛ヲ酸素中ニ置ケバ核分裂ハ大ニ其速力ヲ進ムベシ

是ニ因テ之ヲ觀レバ原形質ト細胞核トハ官能上大差異アリ即原形質ガ其感應ヲ有スルモノ酸素ノ存在スルヲ必要トスト雖𪜈細胞核ハ遊離酸素是無キモ能ク生活的現象ヲ呈スベシ

然レバ細胞核ハ實ニ「アンアエロープ」的（Anaerob）ノ生活ヲ營ムモノト云フベシ

○好雨的器官ト嫌雨的器官　　同

サーズチル氏ノ研究次ノ如シ

植物ガ雨或ハ水ノ作用ニ抗スルニ差アリ（陸生植物ニ就テ云フ）或ハ水中ニ入ルレバ時ナラズシテ腐敗シ或ハ長ク其内ニアルモ腐敗スルヿ無シ此研究ハ種々ノ植物ニ就テ其水ノ作用ニ抗スル力ノ大小ヲ測定スルニアリ其研究法ハ植物ノ枝ヲ伐採シ之ヲ篩上ニ置キ晝夜ノ別無ク絶エズ其上ニ水ヲ注瀉スルニアリ而メ其水ノ温度ハ十六度乃至廿度トス

此法ニ因テ試ムルニぢやがたらいもノ莖ハ僅ニ數日ニシテ枯槁スト雖モむらさきおもと及ビをかとらのをノ枝ハ能ク四週間ノ久キニ堪ヘいはひば屬ハ八週間ヲ經ルモ其狀依然變ズルヿ無シ

成熟セル葉ノ枯落スルモ又植物ニ因リテ差アリぢやがたらいもニ於テハ葉ハ三日ニシテ落チ、はりなすびニ於テハ五日ニシテ落チ、にはやなぎニテハ七日、もみぢニテハ十日、ゑでニテハ三十三日ニシテ落チタリ而シテ某種植物ニ於テ葉ハ落ツルコト無ク腐敗シタルモノモアリ且最モ腐敗シ易キハ通常最モ幼稚ナルモノニテ次ニ腐敗スルモノハ最モ老成セルモノ而シテ最モ長ク新鮮ノ狀ヲ呈スルモノハ生長ノ最モ盛ナル葉トス

溜水中ニアリテハ植物体部ノ枯死スルヿ流水中ニ於ケルヨリモ頗ル速ナリ例ヘバぢやがたらいもノ葉ハ三日ニシテ腐敗シきつりふねハ四日、わかざハ五日、すみれハ五日、いらくさハ八日、「ホツプ」ハ十日ニシテ腐敗スベシ

溜水中ニ在ルモ根ハ根幷ニ莖ニ比スレバ久シキニ堪フベシ例ヘバわかざ、すみれ、おほいぬふぐり、たんぽ

ぽ等ノ莖葉ノ溜水中ニ在ルモノハ其腐敗スルヿ甚速ナリト雖𪜈其根ハ其中ニアルヿ十八日乃至廿四日ノ久キニ及ブモ絶エテ腐敗スルヿ無シ

ヰヽズ子ル氏ハ植物器官ノ永ク雨ニ逢フモ害ヲ受クルヿ無キモノヲ好雨的器官(*Ombrophile*)ト稱シ續キタル雨ニ逢ヒ時ナラズシテ死亡スルモノヲ嫌雨的器官(*Ombrophobe*)ト稱セリ

抑々器官ニ好雨、嫌雨ノ別アルモノ其原因ニ二種アルベシ其第一ハ其器官ノ成分ニ因ルベク即好雨的器官ノ成分ハ嫌雨的器官ノ成分ニ比スレバ分解スルヿ難キニ因ルベシ而シテ其第二ハ（而シテ最モ有効ノ原因ナリト思ハル）好雨的器官ニハ防腐的物質アルヿ是レナリ

好雨的器官ニ防腐的ノ物質アルヿハ次ノ試驗ニ徵シテ明ナリ成熟セルちやがたらいもノ葉(嫌雨的器官)ニ水ヲ注ギ溫度ハ十八度乃至廿度ニシテ廿四時間其儘ニ放置スレバ葉ハ腐敗シ劇シキ臭氣ヲ發スルニ至ルベシ然レ𪜈むめばちも、うきくさノ如キ水草、にんじん、あかざ等ノ根或ハをかとらのを、「ベゴニア」等ノ如キ好雨的葉ヲ細末ニ爲シテ以テ之ニ入レタルモノハ腐敗スルヿ頗ル遲延ス

肉ノ煎汁ハ其儘ニテハ腐敗スルヿ速ナリト雖𪜈之ニ入ルヽニ好雨的器官ヲ以テシタルモノハ腐敗スルヿ大ニ晩シ

然レバ好雨的器官ノ防腐的作用アルヤ明ニシテ好雨的性質ハ主トシテ其器官ニ防腐的物質ノ存在スルニ因ルヤ又明ナリ

○「シユニペルス」之結實

J. G. Jack 氏ハ昨年出版ノ Botanical Gazette ニ「シユニペルス」之結實ニ就キ氏ノ研究ヲ公ニセリトテ其拔萃

ヲ Journ. of Royal Mioro. Soc.（本年六月出版ノ）ニ載セタリ依リテ左ニ譯出ス

ジアク氏ノ說ニ米國ニテハ Juniperus communis ノ果實ノ結實ノ完成ニ至ルハ三年ヲ要ス然ルニ J. virginiana ハ一ケ年ニテ成熟シ J. Sabina, var. procumbens ハ其果實ノ成熟ハ二年ヲ要スト J. communis ハ第二期ノ秋ノ末ニ至リ成熟果實ノ四分ノ三若クハ五分ノ四ノ大サニ達シ種子ハ柔軟ナル乳汁樣ノ胚乳ヲ以テ充滿ス而〆第三期ノ春及ビ夏ニ至リテ內乳固定シ其秋ニ至リテ果實ノ成熟完全ストト

本邦ニモ本屬植物數種アリ（杜松、はいねず、よれねず、びやくしん、しまむろ等ノ如キ）其ノ果實ノ成熟期等ハ一樣ナリヤ調査セハ面白カラン又已ニ研究ナセシ人アラバ報道セラレンコトヲ乞フ

○衛矛屬ノ托葉

衛矛屬植物ニ存スル細微脫落生ノ托葉ハ其位置葉ノ造搆ノ處ニ存スト雖モ全ク上皮ヨリ起因シ且「パレンキマ」ノミニテ成リ管類ヲ有セズ此機關ハ Phyllomes 及ビ Trichomes 中間ノ造搆變移ヲ示スノ一例タリ此物躰ハ芽ノ鱗片ニモ存ス而〆何レノ場合ニ在リテモ別ニ功用ナキモノヽ如シトハ L. Linsbauer 氏ノ說ク處ナリ

○砒石ニ生ズルかび

S. Caspodi 氏ノ研究ニ由レバ數種ノかび特ニ Mucor Mucedo ハ固形砒素化合物ニ盛ニ生育シ且ツ其物ヲ溶解シ以テ砒氣ヲ發散ストイフ

以上三件大、三、報

○荳科植物ノ根瘤ヲ論ス （承前）

安田篤

「ゐんげんまめ」及ビ Amphicarpaea comosa ニ於テハ根瘤ニ常ニ能ク發達セル「れんず」孔アリ是ハ明ナル境

壁ヲ有スル「れんず」狀ノ「ふぇろーげん」ヨリ生シ接線的ニ分裂ス「れんず」孔及ビ「こるく」層ノ「ふぇろーげん」ハ「かむびうむ」層上ニ於ケル「ぱれんきま」組織ヨリ生ズ「れんず」狀ノ「ふぇろーげん」ハ通常ノ場合ニ於ケル如ク其下ニアル組織中ニ陷沒セズシテ稍其上方ニ隆起セリ「れんず」孔ハ通常疎合セル圓形「こるく」細胞ヨリ成リ常ニ維管束ノ上ニ其位置ヲ占ム是等ハ維管束內外ノ瓦斯交換作用ヲ營ム者タルヿハ毫モ疑ヲ容レザルナリ「フランク」氏ハこるく層並ニ感染面ハ瓦斯交換作用ヲ全フセンガ爲ニ細胞間ニ空處ヲ具フト云ヘリ然レ𪜈既ニ述ベタル如ク感染面ハ通常「めりすてむ」組織ニ於テ見ル如キ密合セル堅壁細胞ヨリ成リ剩ヘ感染面ハ細胞間隙ノ通路ヲ有セザル「かむびうむ」ニ由テ「こるく」層ヨリ全ク杜絕セラルヽガ故ニ細胞間ノ空處ガ感染面ニ如何ナル作用ヲ及ボスヤヲ知ルハ頗ル難シトス「れんず」孔ヲ有スル根瘤ハ多量ノ瓦斯ヲ排出スルヿハ疑ナキ事實ナリ試ニ生長シツヽアル「そらまめ」ノ根瘤ヲ水中ニ置ケバ燦然タル狀ヲ呈スルヲ見ル是レ水ト根瘤トノ間ニアル空氣或ハ他ノ瓦斯ノ薄層ニ起因スル者ナリ暫時ノ後ニ至レバ其細微ナル瓦斯泡沫ガ根瘤ノ表面ニ生ズ此瓦斯ノ原因及ビ性質ニ就テハ充分ノ說明ヲ與フル能ハズト雖蓋シ根瘤中ニ於テ起レル隆盛ノ變化作用ニ基ク者ナランカ

澱粉ハ通常多少根瘤中ニ存ス殊ニ Rhizobium mutabile ニ由テ感染セラレタル根瘤中ニハ澱粉ノ多量ヲ見ル Amphicarpaea comosa ニ於テハ幾分カ存在シ「ゐんげんまめ」及ビ「はりゑんじゆ」ニ於テハ少量ノ存スルヿアリ或ハ全ク存セザルヿアリ澱粉ハ常ニ不感染ノ「めりすてむ」組織殊ニ「こるくふぇろーげん」及ビ感染面ノ近傍ニアリ是等ハ根ノ他ノ部分ニ見ル者ト同ジク單ニ貯藏澱粉ノ類ナルノミ

「フランク」氏ハ「ゑんどう」ノ二種ノ根瘤中ニ常ニ「りぞびあ」ノ二種アルヿヲ主唱シ其一種ハ花蘂亞門中ノ或

植物ニ見ヘ「あみろ、でくすとりん」ニ甚類似シ且大ナル屈折力ヲ有スル澱粉質ヲ製出スル力アリトセリ「ミュルレル」氏モ「フランク」氏ト同ジク或「りずびあ」ニ甚シキ屈折体ノ存在スルヿヲ説ケ圧是ハ「これすてりん」ノ如キ脂肪ヨリ導カレタル物質ナリト主張セリ此物質ハ沃土溶液ニ由テ容易ニ着色スルトノ説ハ兩氏共ニ一致スル所ナレ圧「フランク」氏ハ赤褐色ヲ呈スルト云ヒ「ミュルレル」氏ハ黒褐色ヲ帶ブト云此ノ如キ屈折体ハ「しろつめくさ」、「むらさきつめくさ」、Meliotus alba, Lathyrus odoratus ノ「りずびあ」中ニハ之アレ圧「ゐんげんまめ」及ビ「にんどう」ニハ之ナシ屈折体ハ一般ニ圓ク通常多少變化セル「りずびあ」ノ中央部若クハ周圍ニアリ予ハ二氏ノ翬ニ效ヒ沃土ヲ用ヒシニ全ク着色ノ効ヲ奏セズ次ニ「ふっしん」ヲ以テセシニ纔ニ着色シ「あにりん」ハ毫モ結果ヲ得ル能ハザリキ予ヲ以テ觀レバ此屈折体ハ澱粉ニアラズシテ「ミュルレル」氏ノ説ノ如ク不充分ニ養ハレタル「りずびあ」内ニ於ケル原形質ノ脂肪的退化ナランカ此事ハ殊ニ成熟シタル退化根瘤ニ於テ望ミ得ベシ何トナレバ是レハ屈折体ヲ有スル「りずびあ」ヲ含メル唯一ノ場合ナレバナリ脂肪潰壞ハ動物性原形質ニ於テハ普通ノ現象ナリトス時ニハ澱粉粒ガ「りずびあ」ノ一部或ハ全部ノ空虛内ニ蓄積セラルヽヿアリ然レ圧此事タル偶然ニ出デタル者ニシテ屢起ル現象ニハアラズ

根瘤ノ感染面ニ於テ最大ノ變化ヲ生ズ該處ニテハ何レモ盛ナル原形質的作用ヲ受ケ細胞ハ生長シテ速ニ增殖シ以テ「りずびあ」、原形質、時ニ感染糸ノ混合物ヲ以テ全ク充タサルヽニ至ル核ハ非常ニ大ニシテ小核ハ明瞭トナル而シテ總テノ細胞元素ハ通常細胞ノヨリモ着色シ難シ「ゐんげんまめ」ニテハ核ガ甚シク變狀シ其大サ增加シ核壁ハ厚クナリ早晩壁ノ弱點破裂シ以テ Nucleoplasm ヲシテ外ニ出デシメ全体ハ「あみーば」狀ヲ呈ス而シテ Nucleoplasm ノ逃出シタル者ハ細胞原形質即 Cytoplasm ト相混ズ然ルニ小核ハ前ノ大サ及ビ元形

ヲ保持シ或ハ核壁ニ近ヅキ或ハ「フランク」氏ノ所謂 Mycoplasm ノ方ニ逃ル予ハ此ノ如キ核ノ變化ハ「ゐんげんまめ」ニ於テ目撃シタルノミ

之ヨリ感染細胞ノ含有物ニ就テ說明センニ根瘤ハ通常ノ腐敗作用ニ由テ崩壞セラレ以テ「りぞびあ」ヲシテ遊離セシムルヿハ論ヲ俟タズ嘗テ十二月ノ候氷結シタル地中ヨリ「むらさきつめくさ」及ビ Meliotus alba ヲ切出シタルニ根瘤中ニ「りぞびあ」ノ普通ノ有樣ノ者アリシ又「ゐんげんまめ」ノ成熟枯死シタル根瘤中ニモ黴菌ノ能ク充ツルヲ見タリ「りぞびあ」ハ此ノ如ク休眠シテ以テ遊離セラルヽヲ待ツ者ノ如シ時ニハ根瘤ガ發生期ノ終カ若クハ之ニ先ダチ空虛トナルヿアリ思フニ此場合ニ於テモ其含有物ハ寄主ニ由テ吸收セラレタルニ非ズシテ植物並ニ土壤ヨリ充分ノ滋養ヲ取ラザリシ爲ニ根瘤自身ノ枯死腐敗セルニ原因セル者ナラン

根瘤ハ形態學上如何ナル位置ヲ有スルヤハ趣味アル問題ナリ根冠ノ根毛ヲ有セザルヿ及ビ外生的ニ生長スルヿハ其根枝ニ似ザルヿヲ示スニ足レリ又多クハ地面ニ近キ根面ニ生ズルニモ關ラズ積極的或ハ消極的ノ向地性ヲ示サズ是レ根瘤ハ直接ニ濕氣ニ觸レザル爲ニ空氣ノ被護ヲ要スレバナリ然レ𪜈根瘤ハ寄主ニ由テ養ハレ空氣ノ被護ハ根瘤ヨリ逃去ルヲ以テ觀レバ何故ニ根瘤ハ深地ニモ生ゼザルヤハ少シク了解ニ苦ム所ナリ根瘤ハ或ハ消極的向地性ヲ有スル傾アルヤモ計ラレズ何トナレバ根及ビ其枝ノ外ハ之ヲ見出スヿ能ハザレバナリ「フランク」氏ハ莖、葉、胚ニモ同ジク「りぞびあ」ヲ發見シタリト說ケドモ予ノ搜索シタル結果ハ全ク之ト反對ナリキ根瘤ハ蛋白質抱合物ノ多量ヲ含有スル點ニ於テハ生長シツヽアル組織ニ髣髴セリ蓚酸石灰結晶ハ不感染「かむびうむ」殊ニ「こるくぷろーげん」ニ於テ通常見ル所ニシテ結晶中ニハ其周圍ニ細胞原形質ヨリ分泌セラレタル纖維素ノ被物ヲ有スル者アリ凡ソ如何ナル破格ノ成長モ組織學上其生ズル所ノ組織ニ似タルヨリ

或ハ根瘤モ解剖學上其生ズル所ノ根ニ類似スル如ク想像スル人モアラン然レ𪜈根瘤ハ全ク此推察ニ反シ解剖上ノ性質ハ根ヨリモ寧ロ莖ニ似タルヿ既ニ前ニ述ベタルガ如シ

左ノ一篇ハ「クラーク」氏ノ論述ニ係ル者ナルガ太古植物ノ現今植物ニ於ケル關係及ビ進化ノ狀態ヲ知ルニ便ナレバ左ニ其要ヲ摘譯スルヿトセリ餘白ヲ割與セラルレバ幸甚　安田篤

○樹木生活ノ起原

凡ソ人トシテ少シク植物學ニ志アル者ハ炎々タル熱地ノ椰子林ヲ逍遙シ若クハ凛々タル極地ノ松林ヲ彷徨スレバ樹木ノ生ズルヤ決シテ偶然ニアラザルヿヲ感知スベシ抑樹木生活ハ少クモ二大元素即チ生殖力及ビ發生力ノ中何レカニ由テ生シタル結果タルヿヲ思ハザル可ラズ生殖力トハ生殖ノ方法ヲ改良革進シ以テ已レノ種族ヲ後世ニ傳ヘントスル者ニシテ發生力トハ自護ノ爲ニ發達繁茂スル者ヲ云フ前者ノ最能ク發達シタル例ハ單子葉門ニテハ蘭科、双子葉門ニテハ菊科ニシテ後者ノ最盛ナル者ハ木狀羊齒類及ビ椰子類ナリ

遙ニ地質學時代ヲ回顧スレバ如何ナル植物ガ果シテ最初ニ顯ハレシヤ之ヲ知ルニ由ナシト雖古植物學ノ吾人ニ敎フル範圍內ニ於テ考フルモ原始ノ植物界ガ如何ニ其生活ヲ保持セシヤノ狀態ヲ知ルニ難カラズ試ニ寒武里亞紀及ビ志留里亞紀ノ光景ヲ想像セヨ當時地球上ニ始メテ現出セシ植物ハ水住ニシテ海中並ニ湖中ニ生活シ陸地ノ漸ク冷却スルト植物自身ノ構造ノ堅固トナルニ伴ヒ是等水住植物ハ逐次ニ沼澤ニ出デ更ニ進ンデ高地ニ轉位セシヤ疑ヲ容レズ志留里亞紀ニハ恐クハ北極ヨリ南極ニ至ルマデ熱帶ナリシナラン當時大氣ハ水蒸氣ヲ以テ過裝セラレタルガ故ニ隨テ過度ノ沈澱アリ而〆島嶼近傍ノ水ノ淺キト是等島嶼ノ低カリシヿハ共ニ巨廣ナル沼澤ヲ作ルニ便益ヲ與ヘタルナルベシ此ノ如キ原始ノ沼澤ニ生シタル植物ハ勢ヒ生存競爭ヲ爲スノ

已ヲ得ザルニ至ル何トナレバ高地ハ以テ熱キニ過ギ湖海ハ以テ濕フニ過キルモ獨リ沼澤ニ在テハ濕熱度ニ適ヒ剩ヘ炭酸ヲ含メル大氣アリテ植物ノ生活ニハ最屈强ノ位置タレバナリ是ヲ以テ此地ヲ先占セシ者ハ驚クベキ速力ヲ以テ繁殖シ隨テ曩ニハ一株ノ蔓延スルダニモ充分ノ餘地アリシガ今ハ各其一平方尺ヲ爭フニ至リ終ニハ密集セル無數ノ植物中最高莖ヲ有スル少數ノ植物ノミガ陰曇タル太陽ノ弱光ヲ專占スルニ至ル此時ニ當テヤ日光ノ恩澤ニ浴セントスルノ競爭起リ强ハ弱ヲ倒サントシ古ハ新ヲ覆ヘサントス其結果タル益高莖ノ植物ヲ輩出シ啻ニ日光ノミナラズ新鮮ノ空氣ヲ得ンヿヲ勉ム吾人ハ當時此ノ如クシテ生ジタル巨大ノ石松類中ニ今日ノ樹木生活ノ濫觴ヲ見ルナリ

（未完）

○菫菜ノ香液

獨逸ノテーマン及ビクリユゲル兩氏ハ菫菜ノ花部及ビ鳶尾屬ノ根莖ニ含有スル一種ノ香液ヲ分拆シテ是ハ$C_{13}H_{20}O$ナル化學形式ヲ具フルトコロノキートンニ外ナラズト見做シ名テいろねト呼ビタリ

○澱粉粒ノ構造

ブツチエリー氏ハ精細ナル觀察ヲ遂ゲタル後ニ澱粉粒ノ成層縱線ハ蜂巢樣ノ構造ヲ以テ互ニ連結スルモノナリト斷言セリ其所說ヲ聞クニ曰ク一體該層ノ整成狀態ハ殊ニ稍膨脹セル曇華ノ澱粉粒ニ於テ能ク見得ルナリ而シテ各層別ニ分明ナル方射線アレ𪜈或一層ノ方射線ト其前後ニ排列スル層ノ方射線トハ常ニ相適應セズ此蜂巢的構造ハ吾人日用ノ澱粉粒ニ於テモ尙能ク見認ムヲ得ベシ蓋シ此現象ノ原因ハIntussusception（イントススツセプチヨン）ヨリモ寧ロApposition（アツポシチヨン）ニヨリ生長增層セシニ歸セズンバアラザルナラント

○蓮ノ唉花音

余先頃一日曉霧ヲ冒シテ不忍池邊ヲ逍遙ス、于時池面未ダ明朗ナラズ蓮花猶閉ヅ、會見ル老若男女馳セ集ヒ柵欄ニ倚リ欹ツヲ、余モ亦其群ニ加ハリ、靜止スルヿ須臾ニシテ、東天漸ク茜光ヲ吐キ、日輪輝々トシテ將ニ現ハレントスルヤ俄然「ポン」ノ響音ヲ聞ク是ニ於テ光景一變池水ハ湛々トシテ鏡ヲ開キ蓮花紅白相亂レ芬芳人ヲ襲フ衆各安堵ノ思ヲ爲シ悠々歸路ニ就ク俗人此音ヲ聞キ得ルヲ以テ身ニ幸福アリト傳フ植物學者ヲシテ云ハシメハ唯是日光トトルゴルノ關係ニ過ギザルノミト然レ圧微音相合シ日出ト共ニ一整ニ集合響音ヲ發スルハ亦面白キヿト謂フベシ　（市、塘、）

左ニ揭クル處ノ二項ハ理學士藤井健二郎君當夏期中養痾ノ爲メ神戸ニ遊ヒ摩耶ニ登山ヲ試ミラレ其觀察ノ一斑ナリトテ氏カ學友ノ元ヘ寄セラレタル書翰ノ一節ナリ今乞テ之ヲ摘載ス　編者記ス

○摩耶山ノ松柏科植物ノ光景

昨日（八月九日）當地附近有名ナル摩耶ニ登山セリ固ヨリ左バカリノ高山ニモ非サレバ何ノ風情モナク、何分芝草一ツダモ知ラサル小生ニハ別ニ報告スル程ノ事モ見當ラス只松柏ニ就テハ一寸眼ヲ止メタリ、先ツ摩耶登山ヲ東口ヨリセバ麓ヨリ半里程ノ間ハ路傍ニ赤松ノミ多ク、黒松ハ殆ト無シ、間々杉ヲ交ヘタリ更ニ登ルヿ八丁ニシテ所謂頂上ニ達ス此間道路急ナリ、頂上ニ達スル間ニハ杉アレ圧老木ト稱スベキハ稀ナリ、又此八丁間ニハ杉及ヒ松ヲ除ケバ檜、栂樅榧（ツガモミカヤ）ト下ヨリ上ヘ順次ニ生立シ、頂上ニハ寺院アリテ其周邊ニハ諸種ノ栽培ニ係ル樹木アリ、又此處ヨリ上ハ通常人ノ登攀セサル個所ナレ圧尚二丁斗急坂ヲ攀レハ此處ニ栂多ク且ツ其登口ニハ一大栂樹アリ、其莖三尺ヲ超ヘタル稀有ノ老木ナリ枝多分ハ山ノ傾斜ニ背キテ繁茂ス（余ハ曾テ乘鞍、如峯、男体、白山等ヲ攀渉シタレ圧此ノ如キ大栂ヲ見受ケサリシ、但富士山村山口ニ於テ類似ノモノヲ見タルノミナリ）庭園等ニテ見タルモノハ其莖一寸ヨリ五、六寸ヲ常トス、

此處以上又栂、赤松、檜ノ木、杉ノ木順次ニ生育ス、是ヨリ山ヲ降ルニハ道ヲ轉シテ西口（布引ノ方）ヘ下リシニ其間松栢類ニテハ赤松多ク、黒松モ亦之アリ

松栢類ノ分布右ノ如クナルハ實ニ異狀ニシテ栂 Tsuga Sieboldii ノ赤松ヨリモ低下ニアリ、杉ノ木ノ最高所ニアルガ如キハ實ニ規律ヲ脱逸セルモノナリ然レ圧此山ハ海面ヲ拔クコト僅少ニシテ且ツ人工モ加ハレルナルベク又一ハ富士山以北ニ於ケルトハ其緯度ヲ異ニスルト此地特有ノ地勢温度トニ依リ、之ヲ要スルニ氣候温暖ニシテ松、杉ノ能ク生育スルト此地ノ屬スル植物帶ノ低キト昔日人工ヲ以テ栽植シタルトノ爲メニ此ノ如キ雜生ヲ來シタルナランカ

○栗果ノ位置ニ就テ

道ニシテ栗ノ果實多ク實レルヲ見受ケタリ、大方ハ果實ノミ成熟シテ柔荑花序ノ果實以上ノ部ハ脱落スルヲ常トスルガ如クナル中ニ只一ツノミ果實（即チ雌花ノ熟シタルモノ）ハ彼ノ花軸ノ基底ニ生育シテ且ツ此ヨリ以上ノ雄花ヲ附シタル部分モ枯レタルマヽ脱落セズシテ立派ニ附着シタルヲ見タリ、而シテ此果實以下ノ花軸ハ花後盛ニ發育シ、此ヨリ以上ハ枯死シタリ、是素ヨリ當然ノ事ナリト雖圧果實モ亦我儘ナルモノナリト云フベシ、此ヲ以テ少シク推考セバ栗ノ雌花ガ花軸ノ尖端ニアラスシテ基底ニ占居スルハ偶然ニアラズシテ該樹ノ生育上ノ經濟ニ於テ且ツ細長キ花軸ヨリモ太ク短キ花軸ガ能ク大ナル果實ヲ支持スルノ便ニモ（柿ノ果實ニ於テモ亦全シ）深キ關係アルモノナルベシ凡テ柔荑花序ニシテ雌雄花ヲ一花軸ニ交ユル場合ニ於テ雌花ガ必ズ其基底ニ位スルハ一ニ此理ニ依ルナランカ云々

○ドウタウ草

肥後國山中に方言ドウタウといふ草あり煙草に似たり甚毒草にて是を食へは發狂して三日許はさめずといふドウタウとは莨菪の事にや(北窓瑣談)

○バクテリアの說（承前）

K. D. 山人纂譯

第九章　黴菌ト虎列刺病トノ關係

抑モ慘毒ナル疾病俄然トシテ發生シ其傳染スルコト恰モ大火ノ延燒スルガ如ク言フ可カラザルノ悲痛ヲ呈シ且ツ無數ノ人ヲ死ニ效サシメタルコトハ歷史ノ記スル所ナリ昔時ニ在リテハ是等ノ畏ルベキ疾病ノ旋風ハ神ガ人間ヲ罰スル爲メニ下シタルモノナリトナシ大ニ驚キ懼テ、其性質ヲ研究シ且ツ其蔓衍ヲ止メントカメタリ

然レドモ爾後科學ニヨリテ此等ノ迷信ノ覆面ヲ取去リ以テソノ觀察實驗シタル所ニ據レバ是等ノ慘毒アル多クハ流行病ニシテ中ニ就キ其最タル者ヲ虎列刺病トス

世界ノ或部分ニ於テ虎拉刺ハ絕ヘズ流行シ年々之ガ爲メニ死スルモノ其數幾許ナルヲ知ラズ然レドモ歐羅巴或ハ亞米利加ニ在テハ一般ニ此疾病ナク唯時々其發生地ナル東方ヨリ來リテ海岸或ハ地方ニ流行シ罕レニハ昔時ノ如ク多少ノ恐慌、悲痛、若クハ死亡ヲ呈シ時ニ或ハ我英國ノ海岸ニモ移リ來リテ竟ニソノ害毒ヲ內地ニ及ボスコトモアリ

數年前迄ハ虎拉刺病ノ原因ハ殆ンド其何タルヤヲ知ラサリキ而シテ只何物カ船舶ニヨリテ運搬セラレ衣服ノ中ニ包藏シ而シテ人ヨリ人ニ相通ジタリシナラント思ハレタリ、サルガユヱニ病者ヲ間離シテ其傳染ヲ防遏スルノ方法、經驗上最モ効力アリトテ大ニ採用セラレ又食物衣服ノ制限等ハ當時既ニ確定セラレ且之ヲ實行

シタリ然レドモ其感染ノ原因ニ至リテハ明カニ之ヲ知ルコト能ハザリシガ故ニ之ヲ說クモノハ徒ニ辯ヲ好ムモノトセラレ他ノ人々ヲシテマス〳〵不安ノ心ヲ盛ナラシメタリ

今日ニ至リテ始メテ虎列剌病ヲ發生スルハ微小ナル波狀ノ黴菌之ガ原因ヲ爲スモノナルコトヲ知レリ而シテ此黴菌ハ人体ノ腸中ニ入リ其蕃殖スルコト實ニ速ニシテ數日或ハ數時間ニテ其發生セル慘毒ノ爲メニ人体ハ其活力ヲ失フニ至ルサレバ此病ニ罹レル人ハ始終黴菌ヲ吐瀉スルモノナルカ故ニ若シ其時濕氣存在シタランニハ黴菌ハ其生ヲ維持スルコト長ク且增殖スルモノニシテ水中、若クハ濕ヒタル蔬菜、菓物、衣類ノ表面ニ附着シテ生存スルコトヲ得ルナリ

虎列剌病ノ原因ニ限リ波狀ノ黴菌ニ非ズシテ他ノ黴菌若クハ有機体ナラズバ其他ノ原因ニヨリテ發生スルモノナリト信ズルノ道理決シテ之レアラザルナリ此病ノ人ヨリ人ニ傳染スルハ飲料水若シクハ食物等ニ因リテ既ニ此病ニ罹リシ人々ヨリ直接或ハ間接ニ傳ハレル黴菌ヲ更ニ腸中ニ吸收スルニ因ルモノナリ

虎列剌黴菌ハ之ヲ乾燥スルニ非ラサレハ永時間生存スルコトヲ得ルモノナレバ其附着セル衣類ナドヲ束ネテ遠隔ノ地ニ送ルモ尙死セズシテ其荼毒ヲ逞ウスルコトヲ得故ニ十分之ヲ乾燥スルカ蒸發スルカ或ハ石炭酸（カーボリツクアシツド）、猛汞ノ如キ消毒劑ヲ加フルニアラサレバ容易ニ之ヲ消滅スルヲ得ザルモノナリ

黴菌ニ因リテ發生スル他ノ疾病ニ於ケルト同ジク虎列剌病ニ於テモ亦人ニ由リテハ此病ニ感ジ易キモノアリソハ他ナラズ其人ノ身体ヲ組織スル細胞ノ狀態ニ因リテ黴菌ノ如キ有機物ノ侵入ニ抵抗スル能ハサルカ或ハ其生育增殖ヲナスニ最モ適セル狀態ヲ具フルコト是ナリ

肺疾ニ在リテ之ヲ感受シ易キ性ヲ有スル人々ハ則チ遺傳ニ因レルモノナルコトヲ論ゼリ然ルニ虎列剌病ニ在

リテハ食物消化ノ不規則ニヨリテ其侵擊ヲ來スモノナリ窒扶斯熱ニ在リテモマタ感受シ易キ狀態ヲ具フルモノト具ヘザルモノト共ニ均シク其傳染ノ危險ニ遭遇スルモ前者ハ之ニ侵サレ後者ハ侵サルヽコトナキコト判然タリ然レドモ黴菌ヨリ發生スルスベテノ疾病ニ在リテハ其感受シ易キ性質狀態ハ兎ニ角モ各特種ノ黴菌ノ存セザル時ニ在リテハ其病ヲ發スルコトナキナリ

窒扶斯及虎列刺病ヲ稱シテ不潔病ト謂ヒ又之ヲ惡食、汚水下水瓦斯並ニ多人數集合セルヨリ起ルモノトセリ是言タル一應ノ理アルニ似タリ何トナレバ是等ノ物タル人体ヲシテソノ有毒ナル有機物ニ抵抗シテ之ガ侵入ヲ防止スルノ力ヲ減退セシムルモノナレバナリ然レドモ如何ニ不潔ナルモ未タ曾テ各種ノ黴菌ノ存在スルコトナクシテ肺疾窒扶斯及ヒ虎列刺病等ヲ發生シタルコトナキナリ外界ヨリ是等特種ノ黴菌ヲ導クニ非レバ富貴ナル人々ノ中ニモ決シテ發生シタルコトナキナリ

以上述ベタル如ク近年ニ至リテ虎列刺病ノ原因ヲ發明シタレドモ已ニ此病ニ罹リタル人々ヲ治療スルニ就キテハ未ダソノ効驗ヲ奏セシモノナシ然レドモ既ニ其原因ヲ知リ其蔓延ノ方法狀態ヲ知リ加フルニ其黴菌撲滅ノ物質ヲ知ルガ故ニ豫防規則ニ因リテ之ガ實行ヲ怠ラズバ其疾ノ侵入ヲ防ギ或ハ其初發ノ時ニ其蔓延ヲ止メ以テ恐慌ヲ鎭靜スベキヤ明カナリ

○農科大學桑園

農科大學敎授理學博士佐々木忠二郎氏ハ農科大學桑園ナル書ヲ編シ本年六月出版セラレタリ本書ハ農科大學ノ未ダ東京農林學校ト稱セシ時ニ創設シタル同大學ノ桑園ニ就キ詳細ニ論述セラレタルモノニシテ栽桑家、養蠶家ハ勿論植物學專門家ニモ亦頗ル有益ナル良書ナリ

本書ノ目次ハ左ノ如シ

一、沿革及目的　二、桑園　三、見本園　四、同物異名　五、桑樹ノ特種（附桑樹代用植物）　六、善良桑種
七、桑園收穫

又卷尾ニ數多桑葉ノ圖ヲ附セリ

◎寄贈書目錄

東京醫學會雜誌　第八卷第拾五、六號二冊　東京醫學會○動物學雜誌　第七十號　動物學會○地學雜誌　第六十八卷　東京地學協會○水產雜誌　（第十二號第十三號）　北水協會○國家醫學會雜誌　第八十八號　國家醫學會○軍醫學會雜誌　號外一冊　陸軍々醫學會○大日本山林會報　第百四十號　大日本山林會○日本園藝會雜誌　（第五十六號第五十七號）　日本園藝會○牧畜雜誌　第百三十四、五號二冊　牧畜雜誌社○北海之殖產　第四十七、八、九號（三冊）　北海道農會○日本蠶業雜誌　第七十五號　日本蠶業雜誌社

The Journal of Botany. No. 379

Kansas State Agricultural College, Bulletin No. 46.

Bulletin de L'herbier Boissier. Tome II. 1894. No. 6.

●中學校師範學校教科用書發賣廣告●

（物理化學之部）

レムセン氏原著理學博士久原躬弦
理學士織田顯次郎合譯

●（改正增補）**小化學書** 全二冊

上卷（七版）定價金七拾五錢郵稅金六錢●下卷（五版）定價七拾五錢郵稅金六錢總紙數四百九十四頁

理學士宮崎道正君著

●（中等教育）**無機化學教科書** 全一冊

定價金七拾五錢郵稅金八錢頁數三百八十頁木版六三個

敬業社編輯所編纂

●（中等教育）**有機化學教科書** 全一冊

定價金六拾錢郵稅金八錢頁數二百七十九木版數個

英國ファルノー氏原著 敬業社譯補

●**布氏小化學書** 全一冊

定價金七拾五錢郵稅六錢（三版）紙數二百五十四頁

農學士菊池熊太郎君編（目下訂正中）

●（訂正增補）**物理學教科書** 全二冊

上卷（八版）定價金七拾五錢郵稅金八錢
下卷（六版）定價金七拾錢郵稅金六錢

敬業社編纂

●**小物理學** （訂正十一版）全一冊定價三、拾五錢郵稅金四錢

同社編纂

●**理化示教** （訂正三版）全一冊定價三拾五錢郵稅金四錢

（數學之部）

理學博士寺尾壽君編纂

●（中等教育）**算術教科書** 上製（全二冊）並製（全三冊）

（上製）上卷（廿一版）定價金壹圓貳拾五錢郵稅八錢
下卷（十四版）定價金壹圓 郵稅金六錢

（並製）一卷（八版）定價金五拾錢二卷（七版）定價金五拾錢三卷（五版）定價金四拾錢郵稅各四錢

●**幾何學初步** 全三冊

理學博士菊池大麓君閱理學士高橋豐夫君編

上卷定價三拾錢郵稅四錢（四版）中卷定價三拾錢郵稅四錢（三版）下卷定價貳拾錢郵稅貳錢（再版）

（博物學之部）

理學博士飯島魁君編

●（中等教育）**動物學教科書** 全二冊

一卷（訂正十版）定價金六拾錢郵稅金六錢
二卷（訂正九版）定價金七拾五錢郵稅六錢

理學博士松村任三君閱理學士三好學君編

●（中等教育）**植物學教科書** 全二冊

上卷（訂正九版）定價金壹圓郵稅金八錢
下卷（訂正六版）定價金壹圓郵稅金八錢

故理學博士菊池安君編

●（中等教育）**鑛物學教科書** 全二冊

上卷發兌定價金七拾五錢郵稅金八錢紙數三百四十二ページ精密木版二百六十九個挿入（下卷近刻）

發兌書肆 東京市神田區裏神保町一
電話番號（二二百五十八番）

敬業社

●其他東京大阪以下各地方書林ニ於テ販賣セリ

地質學雜誌

第拾貳號明治二十七年九月十五日發行

◉壹册金九錢郵稅金壹錢◎六册前金（郵稅共）五拾四錢

目錄◉論說及**報告** 明治廿七年一月十日地震の記大森房吉君 **雜錄** 岩石の出來方（八號の續）小藤文次郎君◉地貌の分類下村成典君 **雜報** 樽前山降灰○久留米市地震の報告○火山頂上の火○新火山岩中の橄欖石○鐵砂○萬古不滅の雪○寒谷○地獄谷の噴瀛○發補温泉○岩菅山○楷子澤の水晶○澁嶺近邊の池沼○大沼池○高山山○星川と角間川の峽流○雜魚川峽流○樽川の瀑布○小菅權現と萬佛山○苗場山○昨年の苗場山鳴動に就て○野澤温泉○毛無山○饑歲の年數及ひ氣候の考○黄錫鑛の發見に就て○地學雜誌日本の鑛物產地の評○新鑛物○故菊地博士の名譽○黄水晶○紅寶石○角閃石○出雲國意宇郡内山銅山の鑛物○越後に於ける輝石の新產地○「ミルン」氏の功績○「ベネケ」氏懸賞論文○神保學士北海道白堊系化石に關する論文○新刊地震學雜誌○震災調查會報告第二號○ウヰリヤム敎授死す

發賣所 東京市神田區裏神保町 **敬業社**

動物學雜誌

第七拾號明治二十七年八月十五日發兌

◉壹册金拾錢郵稅金壹錢○六册前金（郵稅共）六拾六錢

目次 昆蟲ノ話（十）石川千代松君◉千島ノ動物野澤俊次郎君◉相馬地方動物實驗雜記酒井寅造君◉日本產ノ陸蛭丘淺治郎君◉蛙ノ卵（前號ノ續）坂藤順策君◉八重山龜採獲紀事黑岩恒君 **雜錄** 動物學研究用藥劑便覽（前號ノ續）○臨海實驗の話○海綿類科名撿索表○ぐみ○海綿ノ骨骼ヲ見ル法○琉球ノ家猫○琉球諸島ノ野獸○ヤマカマスの鳴聲○カブトムシの發生地○直翅類の新種○直翅類の翅に就て○三崎通知○Rhodosoma○蛙ノ解剖ニ用ユル魔醉劑○敢テ諸先生ニ望ム○相州三崎帝國大學臨海實驗所○動物學雜誌索引

發賣所 東京市神田區裏神保町 **敬業社**

東洋學藝雜誌

第百五拾五號明治廿七年八月廿五日發兌

一册金拾錢郵稅金壹錢六册前金五拾四錢（郵稅共）

◉論說○ポーランド亡滅ノ話（下）附銅版圖（承前）箕作元八○本邦ノ森林及林學（承前）志賀泰山○法典ハ果シテ改良スルヲ得ザルカ梅謙次郎○地震波ノ長サ及傳達ノ速度（圖入）大森房吉○溶液論（圖入）櫻井錠二◉雜錄○筆硯を送ることば中邨秋香○謀故殺及放火犯罪ノ起源 I.K.◉雜報○東鳳翩山々頂氣象○磁力計据付○震災豫防調查會○ペスト病源の發見○帝國大學臨海實驗場○鎌倉の温度○互の疑惑の英譯○相州植物所見○百花隨筆○ライプチヒの大椰子園外數件◉應問○蟬ノ發音器箕作佳吉○梅花ノ變狀石川千代松○喑處ニテ視得ル動物同

發行所 東京神田裏神保町 **東洋學藝社**

新刊廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄　全一册

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校ノ教員、生徒諸君ハ各ミ一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田區裏神保町　敬業社
東京日本橋通三丁目　丸善書店

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌毎月一回發兊一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢
○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兊迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マデ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿七年九月十九日印刷
明治廿七年九月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷者　熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所　熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

發行所　植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京市日本橋區通三丁目

9K1
233

314170

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

明治廿一年二月三日内務省許可

Vol. 8.] September 20, 1894. [No. 91.

CONTENTS.

Notes on the Attraction-Spheres in the Pollen-Cells of Ginkgo biloba. By **Sakugorō Hirase.** 359

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœia. By **Komajirō Sawada.** 364

Botanical Excursion to the Northern Part of Japan By **Seiichirō Ikeno.** . . . 367

Mr. Hisashi Kuroiwa's Collections of Liuchoo Plants. By **Tomitarō Makino.** . 370

Explanation to the Plate VII. By **A. Yasuda.** 373

Miscellaneous:— 373

Short Notes.—Betula alba, var cordifolia, Regel ? and Loranthus (?) Tanakae, Fr. et Sav.—" Nagabano-inushide."—Pteroceltis.—Cause of the Desease of the Celebrated Pine tree of Karasaki.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yōjōsho-oku."—Dr. Miyoshi's Investigations.—Cell-division and its Relation to External Influence.—Ombrophile and Ombrophobe.—Fructification of Juniperus.—Stipules of Euonymus.—Root-tubercles of Leguminous Plants.—Orgin of Tree-Life.—Perfumes of Violet.—Structure of Starch-grain.—Sound produced at the Anthesis of Nelumbium.—Coniferæ of Mt. Maya.—Castanea vulgaris.—Bacteria.—New Literature.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

植物學雜誌第八卷第九十二號 （明治廿七年十月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII. October 20, 1894. No. 92.]

にれもみノ說

理學士 白井光太郎

にれもみト云フモノ我邦植物學上ノ著書ニ散見スレ𪜈能ク其形狀ヲ知悉セル人ナシ此木ハシーボルド氏曾テ我小野蘭山著花彙ノ圖說ヲ見テ之ヲ其著日本植物譜ニ引用記載セルヨリ夙ニ外邦植物家ノ知ル所トナリ英國アンドリユー、マルレー氏獨逸ハインリツヒ、マイル氏等亦其著述中ニ之ヲ評論記載セリ然レ𪜈諸氏亦皆之ヲ疑種ノ中ニ置キ未ダ其何物タルヲ尋究シ之ヲ世ニ公セル者アラズ予頃年本邦樹木ノ種類ヲ探究スルノツイデ此種ニ注意シ一度實物ヲ得テ此疑問ヲ審明セント欲スルコト此ニ年アリ本年九月始メテ比叡山ニ登リ此樹ノ果實ヲ採集シ遂ニ其形狀ヲ詳悉スルヲ得タリ

今此樹ノ何物タルヲ述ブルニ際シ先ヅ此樹ニ關スル先人ノ所說ヲ蒐錄シ以テ疑問ノ由テ來ル所ヲ知ラシム

詩經小識 （稻若水著）曰

檉 （俗名 爾禮貌密）

按、檉木赤莖細葉、排生兩邊、如鳳尾松鬣、花穗長三四寸、形如青葙花、深紅如燕脂、尤可觀也、比叡山中堂前、有一株、他處稀見、世間相承、以垂柳爲檉、大誤也、云云

にれもみノ説

「本草一家言」松岡恕菴著樅ノ條ニ曰

又別、有仁禮茂美者、一名日光茂美、狀似伽羅木、而葉極細短小、背白、花如松、而上半紅如胭脂、長三四寸、略似紅藉子穗、可以供美觀、此乃檉也、非樅屬、辨檉條可併按、

又曰

檉　今洛北天台山文殊樓前、有一株、土人呼楡樅、又野州日光山中、多生、因名日光樅、云云

又曰

虎尾茂美、但葉極細密排生、如八重茂美、稻彰信云非是眞虎尾茂美、乃藝圃家所稱虎尾茂美也、眞虎尾茂美者、一枝三椏枝條直出、左右分岐密排、如鳳張翅狀然、此即眞鳳尾松也、

「花彙」小野蘭山著曰

檉（テイ）ニレモミ　（圖アリ）

大和下野地方山中ニ多シ京師天台山ニ一株アリ高聳直身葉鳳尾松ニ似テ短小背白シ夏紅花ヲ若鉄色草（ウツボグサ）穗狀ノ如シ後チ毬ヲ結ブ形チ落葉松毬ニ類シテ稍長シ諸家説トコロノ檉ハコレニ同ジカラズ既ニ別ニ圖ス其河柳トイヘルハ乃說ノ誤ナリ

「大和本草辨正」喜多村安正著曰

「裏白」ハ「日光モミ」又「ニレモミ」又「ウラジロモミ」ト云モノ也葉樅ニ似テ背白ク夏月花サクハヾ五分長一寸許ニテ赤色ナリ恕菴ハ此ヲ檉ニ充ツ檉ハ御柳ナリ其後舶來アリ

「藥名備考和訓鈔」丹波賴理著曰

「ニツクワウモミ」縦一種（ニレモミ）

又曰

「ニレモミ」縦一種「トラノヲモミ」ノ葉背白キヲ云フナリ四明山中堂前ニアリ

「物品識名拾遺」水谷助六著曰

ニレモミ　ニツクワウモミ

「みやまのしをり」曰

檉（テイ）ノ木（在經藏ノ前）

開山大師在唐ノ時天台山香爐峯ノ神人ノ送ル所ノ木ト云フ又河柳ト云フ木ナリ

「都名所圖繪」所載比叡山名所圖中ニハ唐木ト記セリ

「用藥須知」松岡恕菴著曰

檉　和名「ニレモミ」一名日光モミ一名「虎尾モミ」日光山ニ多シ又山城比叡山中堂ノ前ニ一株アリ云云

「マルレー氏 Pines and Firs of Japan 五十九枚縦ノ條ニ曰」

Siebold further informs us that the botanists of Japan distinguish several varieties of it. The most recognizable are the *Tomomi* of the north of China, the *Jezo momi*, introduced from Jezo, and the *Nire momi*. The last is known by its leaves being shorter and more deeply emarginate at their tip, and its cones being shorter, and he thinks may prove a distinct species. He adds "the celebrated botanist *Onolanzan* describes it in his work 'Kwai.' as a straight and lofty tree, which should be found common on the mountains of Yamato and Yamasiro as well as at Simotsuke. The learned botanist *Mitsutani Sukeroku* cites it under the name of *Nikko momi*, a fir in the mountains of Nikwo." We have not yet materials to say whether the suppositions of the "celebrated and learned" Japanese botanists are founded on fact or not.

以上ノ諸書ニ據リニレモミナル樹木ノ形狀ヲ考フルニ葉形花穗ノ長短ニ於テ互ニ相一致セザル所アリ或ハ樅屬ノ如ク或ハトウヒ屬ノ如ク何物トモ考定シガタシ

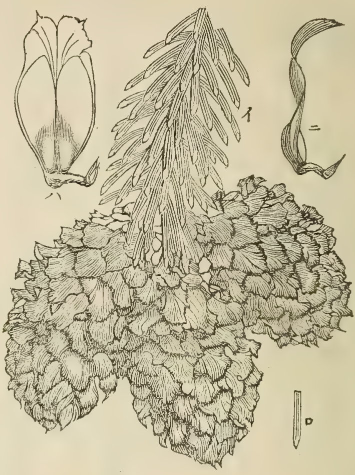
例ヘバ詩經小識ノ文及花彙ノ圖ニ據レバ葉形ハモミノ如クニ〆葉頭ニ二尖アル者ノ如クナレ𪜈一家言ニハ葉ハ伽羅木ニ似テ極細短小トアリ然レバ一尖ニシテトウヒ屬ナルガ如シ花穗ノ長短モ一家言、詩經小識等ニテハ三四寸ノ如クナレ𪜈花彙ノ圖及大和本草辨正ノ説ニテハ一寸許ニ過キザルガ如シ又

其和名モ詩經小識ニハ單ニニレモミト記シ一家言ニハニレモミ一名日光モミト記シ大和本草辨正ニハニレモミ一名日光モミ一名ウラジロ又ウラジロモミト記シ花彙ニハテイ一名ニレモミト記シ用藥須知ニハニレモミ一名日光モミ一名トラノヲモミト記セリ

其産地ニ至リテモ一家言花彙等ノ諸書ニヨレバ本邦ノ諸州ニ産スル如クナレ𪜈都名所圖繪、みやまのしほりノ二書ニ據レバ叡山ノ檉樹ハ正シク唐土ヨリ移植セル者也

斯ノ如ク諸説紛然トシテ其歸着スル所ヲ知ラザルガ故ニ其正僞ヲ判セント欲セバ先ヅ此疑問ノ根本タル叡山中堂前ノ檉樹ニ就テ其形狀ヲ審査シ其果シテ何物タルヤヲ探究セザル可ラズ

予ガ今回ノ探究ニ於テ得タル所ノ成蹟ヲ列擧スレバ左ノ如シ



第一圖

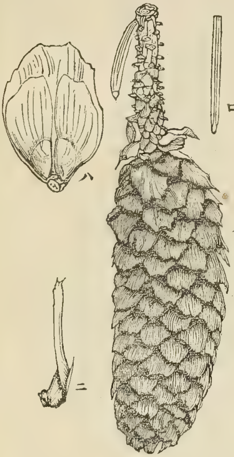
にれもみ

(イ)ハ球果三個ノ全形

(ロ)ハ葉(自然大)

(ハ)ハ實鱗ノ正面圖(倍大)

(ニ)ハ實鱗ノ側面圖(倍大)



第二圖

さうひ

(イ)ハ球果ノ全形

(ロ)ハ葉(自然大)

(ハ)ハ實鱗(倍大)

(ニ)ハ實鱗ノ側面圖(倍大)

にれもみノ説

(一)本草書ニ記載スル所ノニレモミ一名テイ(檉)樹ナル者ハ本邦ノ所産ニ非ズシテ全ク支那ノ原産ニ係ル一種ノトウヒ屬ナリ

(二)花彙ニ記載スル檉（テイ）一名ニレモミノ圖説ハ其圖及説文ニ甚シキ誤謬アリ則其葉形ノ二尖ナルハ一尖ノ誤ニメ其大和下野等ニ産スルト云フ者ハ自ラ是同屬ノ別種ニシテ之ヲ同物トセルモ亦誤ナリ

(三)ニレモミトニツクワウモミトハ其葉形果實ノ大体ハ相似タル所多シト雖モ仔細ニ比較スレバ其形狀大小ニ於テ互ニ著シキ相違アリ則ニレモミノ葉ハニツクワウモミヨリ細短ニメ其果實ハ太クシテ短シ其實鱗モニレモミノ者ハ襞多クシテ外面ノ平ナラザルヿ大ニニツクワウモミニ異レリ其狀附圖ニ詳ナリ而メ其日光モミ一名ウラジロ一名ウラジロモミト云フハ樅屬ノ種類ニ非ズシテトウヒ屬ノ一種 Picea Hondoensis Mayr. ニシテ今時トウヒト稱スル者トセザルヲ得ズ

(四)ニレモミノ羅甸名ハ今尚考索中ニテ詳ナラズ

(五)用藥須知ニ日光モミトトラノヲモミトヲ一物トセルハ藥名備考一家言等ノ説ニヨリ其誤謬タルヤ明ナリ

百花雜記

松村任三

クサギ　桐葉ニ類スルノ葉腋長梗ヲ抽キ朶ヲ分叉シテ五裂ノ白花ヲ開ク紅色ノ萼ハ膨脹シテ酸漿ノ如ク但五稜アリテ頭五裂ス花冠ニ細長ノ筒アリ紅色ヲ帶ビテ美ナリ筒内四雄蕋ヲ生ス紅色ノ喉口ヨリ長ク挺出ス花糸白色葯ハ蕾時早ク既ニ紫色ノ粉ヲ吐ク花底一雌蕋アリ長柱ヲ具ス其長サ雄蕋ト均シ子房ハ緑色ニシテ其頭微ニ四裂ノ狀ヲ呈ス此花其葉ノ不佳ナル氣アルニ似ズ頗ル芳香ナリ互生ノ葉ハ卵圓形ニシテ長柄ヲ有シ

基底ハ心臟形ヲ爲サズ芽ハ紫色ナルヲ以テ顯著ナリ

（サクラタデ）葉ハ柳葉ノ如ク細長、莖頭長梗ヲ生シ毎節鞘アリ鞘毎ニ二個ノ花ヲ生ス蓼中頗ル觀ル可キノ花ヲ開ク此種ニ若クハナシ其色淡紅或ハ殆ト白、八雄蕋アリ花糸白色、葯淡紅ニシテ花外ニ見ハル子房ニ三柱アリ

（オホケタデ）莖長大ヲ致シ毛茸多キヲ以テ著ハル然レ𪜈其毛ニ粘リナシ長穗ハ鞘毎ニ四五花ヲ簇生スルカ故ニ頗ル大ニシテ且密ナリ五裂ノ花蓋ハ淡紅色ニシテ美ナリ七雄蕋アリ花蓋片ヨリモ長シ白糸白葯、花底一雌蕋アリ短小ニシテ二柱ヲ具ス黑色ノ實ハ宛然栗ノ如シ

（ニホヒタデ）葉ハオホケタデニ似テ稍〻細シ莖ハ長大ヲ致シ頗ル毛茸ニ富ムト雖モ腺毛ヲ密生スルヲ以テ粘リト香氣トアリ故ニニホヒタデノ名アリ穗ハ鞘毎ニ三四花ヲ簇生シテ密ナリ淡紅色五裂ノ花ハオホケタデヨリモ小ニシテ八雄蕋アリ短クシテ瓣外ニ挺出セズ雌蕋ニ三柱アリ花閉チテ益〻紅色ヲ加フ實ハ三稜ニシテ黑色、光澤深カラズ

（ノゲイトウ）莖頭葉腋眞正ノ穗ヲナシテ圓錐形ニ花ヲ綴ル花蓋ハ白色或ハ水紅色膜樣ノ五片ニ成ル片基綠暈アリ五雄蕋アリ花片ト對生ス白色ノ花糸ハ淡紅色ノ葯ヲ着ケ本相合シテ淡綠色ノ一子房ヲ圍ム花外ニ三片ノ苞アリ花蓋片ト同色ニシテ形小ク頭尖銳ナリ花心一雌蕋アリ長柱ヲ具ス頭分レズ紅色ヲ帶ブ子房熟シテ數子ヲ藏ム

（センニチサウ）莖頭球形ノ穗ヲナシテ花ヲ綴ル鮮紅愛スベシ五裂ノ花蓋ハ剛固細尖ノ五片ニ成ル外面ニ絮毛アリ內面ハ頭紅色ヲ帶ブ五雄蕋アリ長筒狀ヲナシテ中央ニ雌蕋ヲ圍ム黃葯アリ筒內ノ喉口ニ生ス花蓋ヲ護スルニ紅色膜樣ノ苞三片アリ其左右ナル二片ハ大ニシテ舟狀ヲ呈シ其下ナル一片ハ小ナリ花ノ美觀ヲ呈ス

ルハ此苞ニ在リテ花蓋ニ在ラズ花心一雌蕋アリ一柱ヲ具シ其頭二分ス子房熟シテ一子ヲ藏ム

日本藥局方植物篇（前號ノ續）

澤田駒次郎

成分　亞母尼亞屈謨ノ主成分ハ樹脂大約七十「ペルセント」護謨大約二十「ペルセント」ニシテ揮發油ノ含量ハ一「ペルセント」以下トス此揮發油中ニハ硫黃ヲ含有セス

本品ニ苛性加里ヲ加ヘテ熔融スレバ Resoltin ヲ生ス之ヲ乾餾スルモ Umbelliferon ヲ生ズルコト無シ故ニ本品中ニ含有スル護謨ハ亞拉毘亞護謨ト異ナリ

樹脂ハ赤色ヲ呈シ無味ニシテ護謨樣樹脂ノ臭氣ヲ有スト云フ

試驗　日本藥局方注解ニ云（第一）本品ハ鹽酸ヲ注キ微温ヲ與フルニ黃色或ハ紫色ヲ呈ス可ラス」黃色或ハ紫色ヲ呈スル時ハ瓦爾抜奴謨ヲ混有ス（第二）又其粉末ヲ灰化スルモ百分ニ付キ六分以上ノ固性物ヲ殘留ス可ラス」

凡ソ良好ノ安母尼屈謨ハ其十「グラム」ヲ豫メ秤量セル白金皿中ニ秤取シ充分ニ灰化スルノ後秤量シテ得ル灰分ノ量ハ著ク〇・六「グラム」ヲ超ヘザル可シ石膏或ハ之ニ類スル物質ヲ以テ贋造セルモノハ遙ニ多量ノ灰分ヲ留ムヘシ、其他本品ヲ撿査スルニ當リ宜ク上文ニ掲クル諸質性反應ヲ比較參照スヘシ」トアリ

醫治効用　亞母尼亞屈謨ハ衝動性祛痰藥トシ喘息閉經等ニ用ヒテ特効アリト云フ然レドモ目下之ヲ用フル者少レナリ又刺戟性硬膏トナシ外敷ス

本植物ノ根ハ薰料トス Dymock 氏ノ説ニ據レバ此根ハ孟買ニ於テ一ノ貿易品ニシテ「ボーイ」（Boi）ト稱シ波斯ヨリ多量ニ產出ス

本品ハ大サ均等ナラス其最モ大ナルモノハ根莖二寸五六分ニシテ多少分岐スルヲ通常トス

本品ハ其皮部菲薄紙質ニシテ「ザムブール」根ニ類似スト雖モ其質緻密ニシテ樹脂樣ノ截面ヲ有スルヲ以テ異ナリトス

本品ヲ剉切シ麝香ヲ抱和セシメ之ヲ孟買產「ザムブール」根ト稱シ嘗テ歐羅巴ヘ輸入セシコトアリ此品時ヲ經テ昆蟲ノ蝕害ヲ受ルトキハ海綿組織狀ト爲リ其外觀「ザムブール」根ニ類似スルニ因リ之レト誤認スルニ至ルト云フ

印度產「ザムブール」根ハ Ferula Sumbul, Hook. ニ基因ス

四十八　フイルラ、スコロドスマ

羅甸名　Ferula Scorodosma, Bentham et Hooker.

Syn.　Scorodosma faetidum, Bunge.

繖形科

亞細亞ニ自生スル草本植物ニシテ數年間基立葉ノミヲ生ス其葉ハ長サ半「メートル」ニ至リ直立シ帶青綠色ヲ呈シ矮短灰色ノ絨毛ヲ帶ビ五重翼狀ヲ爲ス小葉ハ鈹鍼形ニシテ頂端ノ小葉ハ其太サ均等ナラズ數年ノ後第三月下旬ニ至リ莖ヲ抽クコト二「ミリメートル」ニ至リ直立圓筒形ニシテ縱條ヲ有シ綠色ヲ呈シ單一ニシテ分枝セス其下部ノ大サ十「センチメートル」ニ至リ髓部ハ海綿狀組織ヨリ構成セラル莖葉ハ細小ニシテ葉柄椎ノ下部膨脹シテ鞘狀ヲ爲シ莖ニ附着ス更ニ上部ニ至ルニ從ヒ稍々簡單細小ナル莖葉ヲ有シ終ニ苞葉ニ移ル而シテ苞葉ノ腋ヨリ花梗椎ヲ抽キ重繖形花ヲ綴ル花梗二十條乃至三十條花梗椎ノ頂端ヨリ叢生シ各項一花ヲ著ク抱

花小葉ハ缺如ス花ニ不全ト兩全ノ二種アリ兩全花ハ萼五出ニシテ綠色ヲ呈シ外面毛茸ヲ帶ブ花瓣五片類倒卵圓形ニシテ鈍頂ヲ有シ或ハ微ニ凹陷シ鮮黃色ヲ呈ス雄蘂五個花瓣ヨリ延長シ花絲糸狀ニシテ葯ハ楕圓形ヲ爲シ二房ヲ有シ花時分綻シテ花粉ヲ吐出ス雌蘂二個實礎ハ半圓形ニシテ單房ヲ有シ一個ノ卵子ヲ懸生ス花柱矮短柱頭微ニ膨脹ス雄花ハ萼五出綠色ニシテ外面毛茸ヲ帶フ花瓣五片長倒卵圓形ニシテ鮮黃色ヲ呈シ其先頂鈍ク下部狹隘ト爲ル雄蘂五個花絲白色糸狀ニシテ稍々內方ニ傾向シ葯ハ黃色楕圓形ニシテ二房ヲ有シ其背部ニ於テ花絲ノ頂端ト附着ス雌蘂二個其發育完全ナラス雌花ハ花瓣五片卵圓形ニシテ鈍頂ヲ有シ類白色ヲ呈ス雄蘂ハ發育完全ナラスシテ五個ノ鱗片直立シ環輪狀ヲナシ或ハ延長シ或ハ缺刻狀ヲ爲スモノアリ雌蘂二個實礎ハ單房ヲ有シ花柱延長シテ外方ニ屈曲シ柱頭微ニ膨脹シテ球形ヲ爲ス花後分裂果ヲ結フ扁平ニシテ其背面壓扁セラレ毛茸ヲ帶ヒ卵圓形乃至長卵圓形ニシテ淡褐色ヲ呈シ邊緣廣濶ナル翼狀ヲ爲シ十條ノ助線ヲ有フ兩分果ハ擔柱ニ因テ連繫セラル助線ハ背部ニ於テ隆起シ果谷及ヒ兩分果ノ接觸面ニ於テ顯著ナラス而シテ其接觸面ハ稍々凹陷ス種子ハ果皮ト癒合シ胚子ハ細小ニシテ胚乳中ニ位シ根芽ハ上方ニ轉向ス根ハ肥大ニシテ圓錐形ヲ爲シ肉叉狀ニ分岐セル枝根ヲ分チ殆ント水平ヲ爲シ橫走シ外面帶灰褐色或ハ微ニ紫色ヲ帶ヒ其內部ハ帶灰白色ヲ呈ス

本植物ハ波斯灣トアラール海ニ至ル諸國沼澤地ニ產シ第四月中旬ニ至リ果實稔熟シ第五月ニハ凋萎枯死シ其枯莖ノ周圍ニ新植物ヲ發生スト云フ或云開花ノ候其莖葉悉ク脫落シ果實ハ無葉ノ莖ニ附着スト

藥品　阿魏　Asa foetida.

阿魏ノ原植物トシテ信ヲ措クヘキモノハ本植物及ヒ Ferula Narthex, Boissier. ノ二種トス

本品ハ此等二種ノ植物ヨリ滲出セシ液汁ノ凝固セシモノニシテ日本藥局方ニハ藥用トス

本植物及ヒ Ferula Narthex, Boissier. ハ其樹脂管中ニ液汁ヲ含有ス此管ハ繖形科植物ニ存スル隔離性分泌物貯藏器ニシテ細胞ノ隔離ニ因リ生スルモノナリ莖ヲ横斷シテ顯微鏡下ニ檢スレバ此管ヲ認視スヘシ此管中ニ存在スル液汁ハ周圍ノ分泌細胞中ニ產シ貯藏器中ヘ流出スルモノトス殊ニ根ニ於テ多ク貯藏器ヲ簇在ス

採收法　阿魏ヲ採集スル方法ハ詳ナラス一千六百八十九年 Kampfer 氏（亞細亞諸國ヲ遊歷シ嘗テ本邦ヘモ來歷セシ人ナリ）ノ報告ニ據レハ其法左ノ如シ

第四月中旬其葉ノ凋萎スル時期ヲ竢ヒ莖ヲ截切シ其株ノ周圍ヲ掘リテ土ヲ除去シ風雨ヲ防ク爲メニ葉若クハ莖ヲ以テ其上ヲ覆ヒ第五月下旬ニ至リ覆ヲ除キ根ノ上端ヲ截切ス然ルトキハ直チニ液汁ヲ滲出ス之ヲ覆フコト二日間ニシテ其凝固シタル液汁即チ阿魏ヲ採集シ然ル後再ヒ之ヲ覆ヒ二三日ヲ經テ阿魏ヲ採集ス爾後二回根ノ上端ヲ截切シテ阿魏ヲ收ム此モノハ稀薄ノ液ニシテ品質下劣ナリ之ニ石膏、澱粉及ヒ穀類ノ粉末ヲ加ヘテ販賣ス此下等品ヲ採集セシ後八日乃至十日間其業ヲ休止シ爾後二日毎ニ阿魏ヲ採集スルコト二箇月乃至三箇月間繼續ス此品ハ濃稠ニシテ最上品ニ屬ス

一說ニアフガニスタン（亞細亞洲）ニテハ根ノ上部ニ疵傷ヲ附シ其滲出セシ液汁ノ根ニ附着シ凝固セシモノヲ採リ或ハ根ノ周圍ニ穴ヲ掘リ敷キ物ヲ置キ其流出下垂シテ凝固スルモノヲ集ムト云フ

阿魏ノ問屋（Stapelplat）ハ孟買港ニシテ波斯及ヒアフガニスタンヨリ此所ヘ輸致ス

上等品ハ其量多カラス之ヲ野羊皮製囊ニ納メテ輸出ス

（以下次號）

「きさなぎたけ」(冬虫夏草ノ一種)　Torrubia militaris, Fr.

安田篤

余本年七月下旬富士へ植物採集ニ赴キ村山口ヨリ登山セシニ馬返最寄ニ於テ冬虫夏草ノ一種ナル「きさなぎたけ」(新稱)ヲ得タレバ左ニ之ヲ掲載シ以テ同好ノ諸君ニ告グ

此「きさなぎたけ」ハ鱗翅類(Lepidoptera)中黒褐色ヲ呈スル蛹ニ寄生シ体ノ二處ニ於テ子實体ヲ出セリ其一ハ稍大ニシテ三、三「センチメートル」ノ長サニ達シ腹部ニ於ケル第七關節ト第八關節ノ間ヨリ出ツ其二ハ稍小ニシテ其長サ二、八「センチメートル」アリ是ハ体ノ左側ニ於テ第五關節ト第六關節ノ間ヨリ出ヅ子實体ハ單獨ニシテ分枝セズ直立シテ棍棒狀ヲ呈シ橙黄色ヲ帶ビテ美麗ナリ子實体ノ上部ハ「くもたけ」(Isaria arachnophila, Ditm.)ニ於ケル如ク絨毛樣ニハアラズシテ甚粗ナルヲ見ル是レ「ぺりてしあ」(Perithecia)ノ存在スルニ由ルナリ

「ぺりてしあ」ハ長キ方ノ子實体ニ於テハ上端ノ一、六「センチメートル」ヲ充タシ即チ子實体全部ノ殆二分ノ一ヲ占ム而シテ短キ方ノ子實体ニ於テハ上部ノ〇、九「センチメートル」ヲ充タシ即チ子實体全部ノ殆三分ノ一ヲ占ム是等ノ「ぺりてしあ」ハ表面ヨリ隆起シテ疣狀ヲ呈シ Clavipes 屬ノ者ニ於テ見ル如ク表面下ニ陥沒セズ是レハ Torrubia 屬ト Clavipes 屬トノ間ノ著シキ區別ノ點ナリ今其各「ぺりてしうむ」ヲ撿スルニ圓椎狀ヲ呈シ表面上ニ突起スルノ故ヲ以テ「ピンセット」ニテ容易ニ之ヲ剝取スルヿヲ得ベシ之ヲ縱斷スレバ甚長キ直線狀ノ絲ノ無數ニ充滿スルヲ見ル是ハ Sporidia ニシテ四「ミクロミリメートル」ノ太サヲ有シ數多ノ極メテ小ナル胞子ガ關節連絡シ漸ク先端ヨリ切レ稍圓柱狀ノ胞子トナリテ離落ス胞子ハ透明ニシテ其長サ三

「ミクロミリメートル」アリ嘗テ「ドバリー」氏ハ「くもたけ」ノ場合ニ於ケル如ク其八裂子（Ascospore）ヲ健全ナル螟蛉ニ蒔キシニ菌糸ノ漸ク蔓延スルニ從ヒ寄主ハ疾病ヲ釀シテ死亡シ終ニ成熟ノ結果トシテ該死体ヨリ子實体ノ突出セルヿヲ實驗セリ抑此ノ菌ハ蛹ニモ螟蛉ニモ寄生スル者ニシテ余ノ採集セシ者ハ前者ニ屬シ「ドバリー」氏ノ實驗セシ者ハ後者ニ屬シ寄主ノ相違セルニモ關ラズ全ク同一物ナリ

此菌ノ發生地ハ欝蒼タル森林間ニ於ケル晝猶暗クシテ濕潤セル狹路ノ傍ナリ蛹ハ蘚苔類ニ被ハレテ埋沒シ該菌ノ子實体ノミ挺然顯出セリ又其分類上ノ位置ハ如何ト云フニ大体ハ「くもたけ」ト同ジク Pyrenomycetes 科ニ屬シ唯 Nectriaceæ 亞科ニ屬スルヲ異ナレリトス

終ニ臨ンデ此 Torrubia 屬ノ歷史的起源ヲ附述センニ西暦千七百五十四年西班牙ノ僧ナル Torrubia ト名クル博物學者ガ一種ノ蜂ニ寄生スル冬虫夏草（Torrubia entomorhiza, Fr.）ヲ發見シ之ヲ奇トシテ "Musca vegetabilis" (Zoophytic fly) ト名ケタリ爾來氏ノ姓ヲ取テ Torrubia ナル屬ノ名トセリ

黒岩恒氏採集琉球植物（承前）

牧野富太郎

(2) Alsophila podophylla Hook.

おにへご方言（田代安定氏） くろへご（同上） （しだ科）

挺幹七八尺葉柄幷ニ葉ノ中央大軸ニハ尖點アリテ人膚ヲ鉤ス其色紫褐而〆柄本ニハ鱗片密生ス葉ハ八九尺長アリテ再羽狀式ヲ成シ葉質略ホ硬ク〆羽片ハ一尺以上二尺ニ超ヘ頂片ハ羽裂ス小羽片ハ小葉柄ヲ具ヘ四―七八寸長、四五分―一寸幅アリテ鋭尖頭劍狀披針形ヲ成シ底部ハ略ホ截形ナリ淺キ鈍齒緣或ハ裂

縁ヲナス葉脈ハ羽狀、支脈ノ基部ニ近ク各一ノ囊堆ヲ着ク故ニ此等ノ囊堆ハ小羽片中脈ノ兩側ニ一列ヲナシ而〆小羽片中脈ヨリ葉緣ニ至ル大抵四分三ノ間ヲ占領シ空地ヲ葉緣ノ方ニ殘セリ囊堆ハ球形、囊床ハ著シク高起シ子囊密迫シ苞膜ヲ具ヘズ

入表島仲間（ナカマ）村（明治廿五年八月十四日黒岩恒氏採）

本品ハ其葉ノ形狀大小ニ變態多シト云ヘリ而シテ苞膜ヲ囊堆ニ具ヘザルニヨリ直ニ其近屬 *Hemitelia* 幷ニ *Cyathea* 兩屬トノ混同ヲ避クルヲ得可シ

又此種ハ Chusan 幷ニ香港ニ產シ殊ニ香港「ヴィクトリア」峯山麓ノ洞中ニ多シ

(3) **Trichomanes apiifolium Presl.** (= *Trichomanes meifolium* Bory; *T. ericoides* Hedw.; *T. lanceolatum* Poiret; *T. geminatum* J. Sm.; *T. Bauerianum* Endl.; *T. meifolium* β *Bauerianum* Hook.; *T. exaltatum* Brack.)

かんしのぶほらごけ（田代安定氏）（しだ科）

根莖短ク黒褐色ノ細毛鱗ヲ被リ黒色ノ根ヲ以テ硬結ス葉柄ハ五六寸長アリテ叢生シ強堅ニ〆直立ス葉ハ六―十八寸長三―八寸幅ヲ算スベク廣卵狀披針形ニ〆四羽裂式ヲ成シ略硬質ニ〆表面裸出シ中軸ハ唯屢ニ頂邊ニ至テ狹翼ヲ有スルノミ羽片ハ下部ノモノハ廣卵狀披針形、上部ノモノハ披針形ニシテ鋭尖頭ヲナシ下部ノモノハ三―六寸長一―一半寸幅ヲ計ル可シ小羽片ハ數多ノ裂片ヲ有シ此裂片ハ更ニ復タ深裂シ其終末ノ細裂片ハ約ソ一分長アリテ幅狹ク鈍頭ニ〆一道ノ脈之ヲ串通ス囊堆ハ細小、分立、苞膜ハ短筒形ニ〆口緣ハ微ニ凹截セリ囊床柱ハ苞外ニ斗出シ子囊ハ無柄ニ〆彈環ハ大ナリ

入表島仲間村（明治廿五年八月十四日黒岩恒氏採）

此種ハ又「フィリッピン」群島、爪哇、大洋洲諸島幷ニ「ノーフォルク」島ニ産スルヲ知ル

(4) **Dicksonia** (Cibotium) **Barometz Link.** (=*Cibotium Barometz* J. Sm.; *Aspidium Barometz* Hort.; *Cibotium glaucescens* Kunze; *Cibotium glaucophyllum* Hort.; *Cibotium glaucum* J. Sm.; *Cibotium Cumingii* Kunze; *Cibotium assamicum* Hook.; *Cibotium glaucum* Bedd.)

たかわらび（沖繩方言）（田代安定氏）　（しだ科）

亞喬木ニシテ葉ハ三羽狀式ヲ成シ下部ノ羽片ハ卵狀披針形、鋭尖頭、一二尺長六―十二寸幅ヲ算ス小羽片ハ線狀披針形、鋭尖頭ヲナシ其裂痕殆ンド羽片中軸ノ近點ニ及ビ或ハ小羽片ノ基部ニ在テハ時ニ中軸ニマデ裂下シ了ス裂片ハ整列シ長楕圓狀披針形ニシテ叉劍狀ノ態アリ極メテ鋭頭ニシテ葉緣微鋸齒ヲ成シ略〻革質ニシテ上面裸出シ光澤アリ下面ハ帶霜色（粉白色）ニシテ糠狀毛アリ羽狀葉脈ハ高起シ支脈ハ更ニ叉岐スルモノアリ囊堆ハ一裂片中ニ二―六數アリテ中央ヨリ内部ニ相連リ苞膜ハ葉緣ト相連リ横ニ長楕圓形ヲ成シテ截然兩裂シ其外片ハ革質ニシテ葉ト全ク其質ヲ異ニセリ

入表島仲間村（明治廿五年八月十四日黒岩恒氏採）

此種ハ又「アッサム」、南支那、馬來半島幷ニ馬來群島ニ産ス

(5) **Graminearum genus novum?**

やへがや（新稱）　（禾本科）

屬種未詳蓋シ新屬ナラン精究ノ下更ニ之レガ名稱ヲ確定シ以テ再ビ之ヲ報告セン其雄花ト兩全花トヲ交

互ニ穗上ニ坐セシメ兩全花ノ外顈奇形ヲ呈スルノ狀最モ吾人ノ注意ヲ惹起セリ花穗ハ十個許束在シ葉ハ散毛ヲ被リ葉面ノ葉鞘ニ連ル所圓鈍ニシテ殆ンド耳形ヲ成スニ至ルモノナリ一年生ニシテ高サ一尺許（標品ニ據ル）アリ本ヨリ分枝シテ直立ス

石垣島四箇（シカ）村（明治廿五年八月九日黒岩恒氏採）

(6) **Clematis** (Sect. Flammula DC.) **apiifolia DC.** (=*Clematis virginiana* Lour.)

ぼたんづる　（うまのあしがた科）

落葉藤蔓本ニシテ莖ハ緊強、其面ニ縱溝ヲ印ス葉ハ對生、三出式ニシテ毛ヲ帶ビタル長柄アリ小葉亦小柄ヲ有シ卵形ニシテ鋭尖頭、圓底或ハ心臟狀底、邊緣略〻三裂シ裂片ハ全邊或ハ尖裂ス葉面ノ表裏散毛アリ殊ニ葉裏面ニ隆起セル脈上ニ多シ花序ハ腋生複聚繖花ニシテ苞ハ細小、花梗ハ絲狀ニシテ強硬且ツ毛ヲ帶ブ萼ハ四片ニシテ平開シ箆狀長楕圓形、全邊、鈍頭、外面ニハ軟毛ヲ被リ內面ノ上部モ亦稍〻然リ雄蕋ハ多數、萼ヨリ短ク花絲ハ鑢形ナリ葯ハ凡ソ花絲ノ三分一長アリテ瘦小ナリ雌蕋ハ二十數ニ出入シ雄蕋ヨリ微ニ短ク細小ナル子房幷ニ花柱ノ下半ハ長白毛ヲ密生シ花柱ハ此白毛ヨリ上ニ抽キタリ、嫩芽ニハ密ニ毛ヲ帶ブ

石垣島四箇村（明治廿五年八月九日黒岩恒氏採）

本品ハ本邦本土ノ普通品ナリ又朝鮮諸島幷ニ支那廈門（アモイ）邊ニ產スルヲ知ル

(7) **Piper Hancei Maxim.** (=*Chavica leptostachya* Hance.)

ひはつ土名　（こせう科）

藤本ニシテ總テ無毛、分枝、枝ニハ細縱溝ヲ印ス(乾腊標品ニ就テ言フ)葉ハ互生、長楕圓形或ハ長楕圓狀披針形、短葉柄ヲ有ス葉底ハ楔形或ハ鈍形、葉頭ハ鈍端ナル鋭尖頭、全邊ニシテ緣端ハ一帶ニ狹ク薄シ、羽狀脈ニシテ兩側ニ七條許ヲ斜メニ上方ニ曳ク花穗ハ葉ト對生シ花梗ハ葉柄ヨリ稍長クシテ穗体ハ約ソ一寸許ノ圓柱形ヲ成セリ

石垣島四箇村(明治廿五年八月九日黒岩恒氏採)

田代安定氏曰ク本種ハ元ト支那ヨリ移植セシモノニ係レリト又黒岩恒氏標品ニ附記シテ曰ク實ヲ支那ニ輸出スト本品ハ元來支那南部ノ產ニシテ廣東邊ニ之ヲ生ズ

蓽撥ハ本來 Piper longum *Linn.* ノ名ナリ支那南部ニ栽植ス而シテ Piper Hancei *Maxim.* 即チ本品トハ全ク別物ニ屬セリ

(8) **Cardiospermum Halicacabum Linn. var. microcarpum Benth.** (=*Cardiospermum microcarpum* H. B. et Kunth; *C. Halicacabum* Webb.; *C. acuminatum* Miq.; *C. microspermum* E. Meyer; *C. truncatum* A. Rich.)

こふうせんかづら(新稱) (むくろじ科)

一年生、蔓莖、纖長、草質ニシテ縱溝アリ而シテ微々毛ヲ帶ブ葉ハ互生、葉柄ハ纖長ナリ葉面ハ再三出式ニシテ分葉ハ亦葉柄ヲ具フ小葉ハ卵形或ハ卵狀披針形ニシテ中者ハ側者ヨリ大形ナリ粗裂齒或ハ裂片ヲナシ膜質ニシテ略ボ裸出ス而シテ梢部ノ葉ハ下部ノモノヨリ瘦小ニシテ分裂少シ花序ハ腋生ニシテ二三寸ノ長柄ヲ有シ葉ヨリ長シ上部ニ二個ノ卷鬚對出シ絲狀ニシテ下方ニ卷曲ス花ハ三出セル短小梗上ニ更ニ短細梗ヲ出シテ

其端ニ在リ苞ハ細形ナリ花ハ偏形ニメ雜居二家花ヲナシ蕚片四個アリ二個ノ外者ハ形チ小シ花瓣四片白色ニメ各〻對ヲ成シ其大形ナル一對ニハ平匾ナル大內鱗ヲ有シ他ノ小形ナル一對ニハ帽狀ノ內鱗ヲ有ス花盤ノ腺体兩個外瓣ニ對生シ、雄蕋八數、子房一個、三胞、各胞胚珠各〻一顆アリ蒴ハ皮薄ク膨起シテ毛ヲ帶ビ多少頭大三角形ヲ成シ縱橫共ニ五六分許ヲ算スベク而メ頂ハ平匾ナリ種子ハ球形、黑色、堅硬ニメ一分許ノ徑アリ臍痕大ニメ色白シ

石垣島四箇村(明治廿五年八月九日黑岩恒氏採)

此種ハ廣ク熱帶地ニ散布シ踏ダ能ク C. Halicacabum *Linn.* 即チふうせんかづらニ肖似ス然レ𪜈蒴果ハ其大サ五六分ヲ出ヅルヿ無ク且ツ頭大ノ三角形ヲ成シ頂邊平匾ナルニヨリテ之ヲ圓緣ヲ有シテ圓ク其大サ約ソ一寸許ナル蒴ヲ有スル後者ト識別スルヿ敢テ難キニ非ザルナリ

(9) **Polygonum barbatum Linn.** (= *Polygonum rivulare* Kœn.; *P. Hornemanni* Meisn.; *P. Marmoranœ* Ham.; *P. fluviatile* Ham.) α. **vulgare Meisn.**

りうきういぬたで(新稱)　(たで科)

莖ハ上昇若クハ直立シ毛ナシ葉ハ互生シ披針形ニメ下底ハ狹殺シ以テ葉柄ト成ル略〻銳尖頭ニメ全体無毛タヾ全邊緣ト中脈上ニ散毛ヲ有シ殊ニ裏面ノ中脈上ニ多シ而メ全面ニ微細腺點ヲ滿布ス托葉鞘ハ毛ヲ散布シ口緣ニ長鬚毛ヲ駢列ス

石垣島四箇村(明治廿五年八月九日黑岩恒氏採)

該品ハ Persicaria 區ニ屬シ甚ダ能ク本土普通ノいぬたでニ類似ス而メ其散布頗ル廣クメ亞細亞、亞非利

加ノ熱帶地ヲ包括シ加之倚ホ之ヲ澳太利亞洲ニ見ルナリ蓋シ其土ノ極メテ普通品ナランナリ

（未　完）

蕎麥ノ研究一斑

市村塘

(4)蕎麥ノ外形的觀察　熟々蕎麥ノ土壤ニ生育スル外形如何ヲ觀察スルニ先ツ吾人ノ眼中ニ映スルモノハ直立多枝ニシテ而モ鮮紅色ヲ帶ブル莖ト之ニ附着スル心臟形ヲ有スル數多ノ葉ナラン然レ𪜈試ニ手ヲ以テ其根ヲ引拔ク𬼀ハ地中ニ根ナル部分アリテ直接ニ莖ト連絡スルヿヲモ知ルヘシ抑モ根及ビ莖ノ内部構造ハ甚タ相齊シキモノナリト雖𪜈外形的相違ノ點亦少ナカラス要スルニ前者ハ(1)無色或ハ殆ンド無色ナルヿ(2)葉綠ヲ缺クヿ(3)葉ヲ有セズ其代ニ細根ヲ多ク分枝スルヿ是ナリ以テ後者ト區別シ得ベシ然レ𪜈本根ト細根トヲ比較スルニ其内部ノ構造毫モ異ナルヲ見ズ啻大小ノ差ノミ一体莖根共ニ推シナベテ該植物ノ原軸ト稱スベキトコロニシテ原軸ハ在大氣部ノ葉ヲ有スル莖ト在地中部ノ細根ヲ有スル根トヨリ成立スト反言シ得ベキモノトス其他葉脚ト莖ト相接スル處ノ上部即チ葉腋ニ於テ芽ヲ生ジ遂ニ生長シテ枝ト成ルハ恰モ種子ノ萌發スル時ニ當リ胚ノ幼芽生長シテ莖ト成ルガ如シ則チ枝ハ莖ノ構造ヲ反覆スルモノニテ葉ヲ具ヘ花ヲ開クヿ本莖ト同シ因テ原軸ニ對シテ副軸ノ稱ヲ負ハシムルモ可ナリ時ニ原軸勢盛ナレハ副軸トナル能ハズシテ久シク腋芽ノ有樣ニ止マルヿ亦ナキニアラズ副軸ナル枝ハ植物ノ頂上若シクハ頂上ニ近クニ從ヒ短縮細幹トナリ最早葉ニ代フルニ花ヲ以テスルニ至ルベシ蕎麥ノ外形ニ就テ以上述ベタル模形式ヲ示ス𬼀ハ

原軸
- 根……細根
- 莖
  - 葉
  - 枝…副軸
    - 葉
    - 花……種子

件ノ如シ請フ余輩ヲシテ尚百尺竿頭一歩ヲ進メテ其各部ニツキ稍詳細ニ考覈セシメンコヲ

(5)根ノ概論　肇メ根ノ將ニ種子ヨリ萌發セントスルヤ其取ル方向一定セズト雖モ早晩必ズ下方即チ地心ニ向フテ進ミ其狀如何ニモ日光ヲ避ケント力ムルモノニ似タリ故ニ葉綠ヲ生ゼズ從フテ常ニ白色或ハ稍薄褐色ヲ帶ブ形狀ハ原軸ノ下端ヨリ次第ニ尖リ終ルヲ以テ多少圓錐体ヲ呈スル如キモ漸ク自然ニ分根スルモノト知ルベシ今蕎麥ノ根ヲ能ク水ニテ洗ヒ熟覽スレバ所々ニ縱裂孔ノ散在シ之ヨリ各一細根ヲ露出スルヲ見ン蓋シ細根ハ本根ノ內皮ヨリ起發スルモノナレバナリ而シテ本根ト細根トヲ問ハズ多少其尖端膨脹スルノ觀アルハ根鞘ノ搆造如何ニ歸因セズンバアラズ是ヨリ又一種ノ根冠ヲ形成スルナリ斯ル現象ハ凡テ濕氣ヲ含メル鋸屑中ニ萌發スル蕎麥ヲ能ク觀察スルヲ以テ最モ便利トス

試ニ根ヲ橫斷スレバ其三大部ヨリ成ルヲ注意スベシ先ツ外方ニアル柔軟組織ハ表皮部ニシテ中央ニハ髓部アリテ其間ニ緯管束部アリテ堅固ナル木質其內ニ位置ヲ占ム若シ細根ヲ橫斷スル場合ニ於テモ本根ト毫モ其搆造ノ異ナルヲ見ズ前者ノ緯管束ハ後者ヨリ起ルニ基ケバナリ

通常根或ハ莖ノ搆造ヲ吟味セントセバ必ズヤ次ノ四種類ノ截片ヲ作ラザルベカラズ

(一)橫斷ハ本軸ニ對シ直角ニ切斷ス

(二)縱斷ハ本軸ニ沿テ並行ニ切斷ス

(イ)放射斷＝本軸ノ中心ヲ通ジ周圍ニ切斷ヲ及ボス

(ロ)觸線斷＝本軸ノ中心ヲ通ゼズシテ切斷ス

(三)斜斷＝本軸ニ傾斜シテ切斷ス

然レドモ余輩若シ根或ハ細根ノ先端ヲ横斷スルモ其處ニハ維管束ヲ欠キ全ク原柔組織ノメリステムノミヨリ成立スルコトヲ認識スベシ

(6)莖ノ概論　莖ハ地上ニ直立シ日光ニ曝露スル部ナリ從フテ葉綠ヲ有スルニ相違ナキモ一種ノ色素ガ殊ニ表皮ニ普及シ以テ綠色ヲ隱蔽ス是莖ノ赤色ニ見ユル所以ナリ莖モ末端ハ花叢ニ終リ基端ハ根ト連續ス其横斷面ハ殆ンド圓形ナレドモ維管束先ツ四箇所ニ發生スルヲ以テ多少四角ノ傾向アリ而シテ葉ノ莖ニ附着スル狀態ヲ見ルニ大抵四列ノ位置ニシテ第五葉ハ第一葉ノ直上ニ位シ互ニ相隣接スル二葉ノ距離ハ必ス葉ノ周圍ノ$\frac{1}{4}$ナリ尤モ以前ノ子葉タル初生葉ハ常ニ例外ニシテ對生ヲナスト雖モ其他ノ後生葉ハ順次互生排列ヲナスガ如シ元來蕎麥ノ莖ニハ判然結節ト節間トアリテ葉ノ着生スル莖ノ部分ヲ結節ト謂ヒ二箇結節ノ間ヲ節間ト謂フ此一結節ト一節間ト相合シ始メテ一節片ヲナスモノニテ換言スレバ蕎麥ハ有連節莖双子葉植物ニ外ナラザルナリ其節片タルヤ漸ク莖基ヨリ莖頂ニ至ルニ從ヒ節間ノ短縮ト共ニ短縮ス是ヲ以テ頂端部ニハ數葉一緒ニ相累積スルノ觀アルハ亦免カレザルコト云フベシ未ダ花芽ヲ出サヾル時ハ勿論頂端部ノ葉莖ハ稠密ノ度ト共ニ小トナリ終ニ頂芽ニ終ルベシ今頂芽ヲ縱斷シテ顯微鏡下ニ窺ヘバ該頂點即チ生長點ハ數細胞分殖速度ノ摸樣ニヨリ鈍圓錐ヲ呈スルヲ知ラン是全ク根ノ根鞘ト同性質ノモノニアラザルナキ歟

余輩若シ蕎麥莖節間部ノ横斷面ヲ見レバ其中央ニ大空髓室アリ之ヲ圍繞スルニ柔軟ノ內部原本組織ヲ以テシ

極表皮ニアリテハ外部原本組織ヲ以テス其間ニ位スルハ所謂木質ノ一帶ナレ𪜈若キ時ハ根ノ木質ノ如ク連綿タラズシテ所々ニ分離シ楕圓形ノ塊ヲナセ𪜈生長後ハ木質丈ハ圓ク相連續スルニ至ルナリ其横斷面ハ前記ノ如キモ縱斷スレバ木纖維束ノ縱走スル如キヲ見ルナラン是即チ所謂緯管束ニシテ各束ノ間ニ射出木髓アリ以テ內外ノ原本組織ヲシテ相通セシムルノ用ヲ爲ス左レバ莖ナルモノハ厚壁ノ圓筒ト見成シ得ベクシテ一樣ニ柔軟原本組織ヨリ成リ其中ヲ緯管束ガ數多ノ棒ヲ排列スルガ如クニ縱走スルト考フモ強チ誤謬ニハアラザルベシ

凡ソ緯管束ハ二異質部ヨリ構成スルモノナリ其果シテ然ルヤ否ヤヲ確實ナラシメント欲セバ懷中小刀ニテモ可ナリ宜シク厚皮部ヲ手際能ク剝去シ各部ノ横截片ヲ作リ廓大シテ見ルベシ然ルトキハ緯管束筒ノ外半ハ外部原本組織ト共ニ厚皮部ニ入リ其內半ハ木髓ト共ニ殘留シタルヲ確認スルヲ得ン即チ緯管束ハ明カニ內外二部ヲ區別シ得ベク其內部ハ木質本部則チ管部ニシテ外部ハ厚皮中ノ木質部則チ靭皮細胞ヲ有スル篩部ナリ此二部間ニ一種柔軟粘弱質ノ部アリ名テ岡比安層ト云フ厚皮ノ剝去ヲナシ得ルハ全ク此層ノ破壞容易ナレバナリ此層亦緯管束ノ中ニアリテ共ニ圓筒狀ヲ形成ス

莖ノ最外層ナル殊ニ赤液ヲ含メル表皮ハ剝去スルヿ難カラズ然ナストキハ含草綠表皮部組織ハ直ニ外氣ニ接スルナリ故ニ綠色ニ見ユベキ筈ナレ𪜈多少尙赤液ノ入ルアリ依テ微赤綠色ヲ帶ブ一体莖ニハ比較的草綠極メテ少ナキモノナリ因ニ曰フ莖ノ中空ト云ヒシハ莖ノ節間ニ限ルモノニシテ結節部ハ特ニ塡充セラレ養分ガ偏ク葉枝等ヘモ通交シ得ル樣ナレルモノトス前述ノ組織ヲ示スニ形式ヲ以テセバ

(一)表皮　一

(二)外部原本組織
　篩部
(三)緯管束　岡比安層　厚皮
　管部――木質
(四)內部原本組織――木髓

ノ如シ元來莖ノ頂點即チ生長點ハ根ノ如ク緯管束幷ニ髓空ヲ有セズシテ完ク原生柔嫩組織ヨリ成ルモノナリ而シテ枝ノ頂芽、腋芽ニ論ナク皆莖ノ頂芽ト同搆造ノモノタルハ言ヲ待タズシテ明ラカナリ

記者白ス第八十八號ニ(4)種子ハ形狀トアリシハ(4)蕎麥ハ外形的觀察ノ誤植ニ付キ茲ニ正誤ス

奧州地方植物採集畧記　（前號ノ續）

池野成一郎

恐山

抑々陸奧國タルヤ其形狀頗ル奇ニシテ其最北部ハ半島ヲ爲シ其狀斧ニ彷彿タリ之ヲ斗南（トナミ）半島ト稱ス其斧ノ刃ニ相當スル所山嶽起伏シ就中恐山ハ此地方ニ最モ有名ナル靈山ニシテ釜臥山ハ其奥社タリ凡ソ此等諸山ニ登ラントスルモノハ其東京ノ方ヨリ來ルト青森ノ方ヨリ來ルトヲ問ハズ先ヅ野邊地ニテ滊車ヲ降リ夫ノ斧ノ柄ニ相當スル所凡ソ十三里ヲ經テ田名部町ニ至ルヿヲ要ス其間馬ト馬車トノ便ヲ假レバ一日ニシテ達スベシ其道一方左ハ野邊地灣ニシテ通路ハ海岸ヲ距ルヿ或ハ一二丁或ハ十丁弱ニシテ全体廣漠タル平原ナリ牛馬羊ヲ放牧ス此間ニ生育スル植物大凡次ノ如シ但草原ナレバ木トテハ矮小ノならノ木アルト其沿岸ノ砂上ニハはひ

ねずノ匍匐スルアルヲ認ムルノミ

○わらび○すぎな○はまひゑがへり○さるとりいばら○はなしやうぶ○おほいたどり○かはらなでしこ○きつねのぼたん○きりんさう○とりあししようま○だいこんさう○はまなす○みやこぐさ○つるふぢばかま○のぶだう○おとぎりさう○みそはぎ○をかとらのを○いわうさう○ひるがほ○はまひるがほ○うつぼぐさ○むしやりんどう○なみきさう○かはらまつば○そくづ○おみなへし○きゝやう○つりがねにんじん○さはぎきやう○ふき○かせんさう○のこぎりさう

右ハ余ガ旅行ノ途、馬上ヨリ覗フテ筆記シタルモノナレバ其植物名ノ誤レル又植物ノ遺漏セルモノ頗ル多キハ言ヲ待タズ唯余ハ讀者ニ此所ニ生育セル植物ノ概況ヲ告知スル而已

恐山（オソレザン）ハ田名部ヲ去ルヿ百十三丁ト云フ山頂ニ寺院アリ之ヲ起點トシテ田名部ニ至ル迄一丁毎ニ石標ヲ建立シ一丁二丁等ト銘記ス恐山ハ其名ヲ聞ケバ頗ル畏怖ス可キガ如キモ登リテ見レバ絶エテ恐ロシキヿ無シ此山一ニ宇曾利山ト云フ宇曾利轉訛シテ恐ト爲リシモノカ道平易ニシテ山頂迄馬ヲ通ズ毎年舊曆六月廿四日山上ノ寺院ニ於テ祭禮ヲ執行シ近郷ノ善男善女幾萬ト無ク輻湊スト云フ斯クノ如キ山ナレバ植物採集者ニハ絶エテ面白カラズ奇品トテハ殆ド是無シサレバ日本々土最北ノ靈山へ登リタリトノ愉快ヲ得ントスル人若クハ恐山ガ如何ナル火山タルヤヲ學バントスル人ハ宜ク之ニ登ルベシ只管植物採集ヲ以テ目的トスル人ハ登ルモ敢テ益ナキナリ

今其山ノ狀態一斑ヲ記スルニ田名部ヨリ六十丁ノ石標アル所迄ハ草原ニシテ幾町歩モ知レザル所わらび一面ニ繁茂シ茲ニ牛ヲ放牧ス六十丁目以上あすなろノ林ト爲ル土人之ヲ呼ンデひのきト云フ凡ソ此邊ヨリ青森ノ

西北部一帶幾十里ガ間わすなろ盛ニ繁茂シ日本三大林ノ一タルヿ山林家ノ唱フル所ナリ登リ極マレバ湖水アリ大ナル硫噴洞（ソルフアタラ）アリ硫噴洞ニハ所々ニ湯アリ沸々沸騰ス山上ニハ硫黄ノ採掘工場アリ寺院アリ寺院ニハ温泉小屋ヲ設ケ人ノ隨意ニ入浴スルヲ許ス硫噴洞近傍ニ生育スル植物ヲ撿スルニ最モ盛ナルノヲいそつゝじ（Ledum palustre）トス其繁茂スルノ狀恰モ毛氈ヲ敷詰メタルガ如シ憶ヒ起ス昨年白井光太郎君ト共ニ九州地方旅行ノ際八月十日肥前温泉嶽ニ登山シ其硫噴洞ヲ見タルニ其狀今日ニ彷彿タリシヿヲ但彼ニ於テハ硫噴洞近傍盛ニ生育セルハうんぜんつゝじ（Rhododendron serpyllifolium）ニシテ是ニ於テハいそつゝじナルヲ以テ異ナレリト爲ス而已

（以下次號）

陸中岩手山採集顯花植物

松平齊
池野成一郎

松平、池野二人ノ内池野ハ本年七月十五日大釋ヨリ岩手山ニ登リテ再ビ大釋ニ降リ松平ハ之ニ後ルヽヿ凡ソ一ケ月即八月廿日柳澤ヨリ岩手山ニ登リテ大釋ニ降リ孰レモ植物ヲ採集シタリ今兩人ノ採集顯花植物ヲ合算スルニ大約二百種許ヲ得タリ今之ヲ左ニ掲ゲテ以テ岩手山植物ノ一斑ヲ示ス

Siphonogams collected in Mt. Iwate, province Rikuchū (Nambu).

By **H. Matsudaira** and **S. Ikeno.**

(*Coniferæ*).　Pinus pumila Reg.　ハヒマツ

(*Alismaceæ*).　Alisma Plantago L.　サジオモダカ

(*Gramineæ*). **Miscanthus sinensis** Anders. スゝキ—**Spodiopogon sibiricus** Trin. オホアブラスゝキ—**Zoysia pungens** Willd. シバ—**Stipa pekinensis** Hance. ハ子ガヤ—**Muehlenbergia japonica** Steud. ネズミガヤ—**Calamagrostis hakonensis** F.S. ヒメノガリヤス

(*Cyperaceæ*). **Cyperus Haspan** L. コアゼガヤツリ—**Scirpus Wichurai** Böck. アブラガヤ— **S. fuirenoides** Mx. マツカサスゝキ—**Heleocharis tetraquetra** Nees. シカクヰ—**Rhynchospora fusca** Lindl. イヌノハナヒゲ—**Carex Onoei** F. S. ハリスゲ

(*Eriocaulaceæ*). **Eriocaulon desemflorum** Mx.

(*Juncaceæ*). **Juncus papillosus** F. S. ホソバノカウガイゼキシヤウ

(*Liliaceæ*). **Tofieldia nuda** Mx. チヤボゼキシヤウ—**Narthecium asiaticum** Mx. キンカウクワ—**Heloniopsis brevicapsa** Mx. シヤウジヤウバカマ—**Metanarthecium foliatum** Mx. 子バリノギラン—**Tricyrtis latifolia** Mx. タマガハホトゝギス—**Hosta coerulea** Tratt. ギバウシ— **Allium odorum** L. ニラ—**Asparagus schoberioides** Kunth. キジカクシ—**Smilacina japonica** A. Gr. ユキザゝ— **Majanthemum bifolium** DC. マヒヅルサウ—**Streptopus ajanensis** Tiling. タケシマラン—**Convallaria majalis** L. キミカゲサウ—**Trillium Tschonoskii** Mx. エンレイサウ

(*Iridaceæ*). **Iris laevigata** Fisch. var. **Kaempferi** Sieb. ハナシヤウブ

(*Orchidaceæ*). **Orchis aristata** Fisch. イハチドリ—**Platanthera decipiens** Lindl. ノビ子チドリ—**P. sachalinensis** Fr. Schm. オホヤマサギサウ—**Chondradenia Yatabei** Mx. カモメラン

(*Salicaceæ*). **Salix Sieboldiana** Blume. イハヤナギ—**S. multinervis** F. S. コリヤナギ—**S. sp.**

(*Betulaceæ*). **Carpinus yedoensis** Mx. イヌシデ—**Corylus rostrata** Ait. **var. Sieboldiana** Mx. ツノハシバミ—**Betula Ermanni** Cham. **var. nipponica** Mx. タケカバ—**Alnus firma** S. Z. ヤシヤブシ—**A. maritima** Nutt. **var. japonica** Regel. ハンノキ—**A. viridis** DC. **var. sibirica** Regel. ヤマハンノキ

(*Fagaceæ*). **Quercus grossesserata** Bl. ミヅナラ—**Q. dentata** Thbg. カシハ

(*Moraceæ*). **Humulus Lupulus** L. **var. cordifolius** Mx. カラハナサウ

(*Urticaceæ*). **Elatostema sessile** Forst. **var. cuspidatum** Wedd. ムカゴミヅ—**Boehmeria spicata** Thbg. コアカソ

(*Polygonaceæ*). **Polygonum sachalinense** Fr. Schm. オホイタドリ—**P. aviculare** L. ニハヤナギ—**P. cespitosum** Bl. **var. laxiflorum** Meisn. ハナタデ—**P. nodcsum** Pers. オホイヌタデ—**P. Thunbergii** S.Z. ミゾヽバ—**P. Blumei** Meisn. イヌタデ—**P. japonicum** Meisn. サクラタデ—**P. sagittatum.** L. **var. Sieboldi** Mx. ウナギツカミ—**P. polymorphum** Ledeb. **var. undulatum** Ledeb. オヤマタデ

(*Caryophyllaceæ*). **Silene aprica** Turcz. **var. firma** Rohr. カハラゴマ

(*Magnoliaceæ*). **Magnolia Kobus** DC. コブシ

(*Ranunculaceæ*). **Glaucidium palmatum** S.Z. シラチアフヒ—**Aquilegia Buergeriana** S.Z. ヤマヲダマキ—**Clematis alpina** Mill. ミヤマハンシヤウヅル—**C. apiifolia** DC. ボタンヅル—**C. heracleaefolia** DC. クサボタン—**Trautvetteria palmata** Fisch. et Mey. モミヂカラマツ—**Ranunculus acer** L. **var. japonicus** Mx. ウ

マノマツガター Thalictrum aquilegifolium L. カラマツサウ—T. tuberiferum Mx. ミヤマカラマツ—T. minus L. アキカラマツ

(*Berberidaceæ*). Diphylleia cymosa Michx. var. Grayi Mx. サンカエフ—Leontice thalictroides L. ルヰエフボタン—Berberis vulgaris L. var. japonica Regel. ヘビノボラズ

(*Papaveraceæ*). Dicentra pusilla S.Z. コマクサ

(*Cruciferæ*). Arabis amplexicaulis Edgew. イハハタザホ

(*Droseraceæ*). Drosera rotundifolia L. モウセングサ

(*Crassulaceæ*). Sedum Rhodiola DC. var. Tashiroi Mx.

(*Saxifragaceæ*). Astilbe Thunbergii Miq. トリアシシヨウマ—Rodgersia podophylla A. Gr. ヤグルマサウ—Saxifraga cortusaefolia S.Z. ダイモンヂサウ—Tiarella polyphylla Don. ヅダヤクシユ—Parnassia palustris Sieb. ウメバチサウ—Hydrangea paniculata Sieb. ノリノキ—H. hortensis Sm. var. angustata F.S. アマチヤ

(*Hamamelidaceæ*). Hamamelis japonica S.Z. マンサク

(*Rosaceæ*). Spiraea betulifolia Pursh. マルバシモツケ—S. kamtschatica Pahl. シモツケサウ—Pirus alnifolia Koch. アヅキナシ—P. sambucifolia Cham. et. Schlecht. ナヽカマド—Rubus spectabilis Pursh. ベニバナイチゴ—R. parvifolius L. ナハシロイチゴ—R. palmatus Thbg. モミヂイチゴ—Potentilla Dickinsii F. S. イハキンバイ—P. gelida C. A. Mey. コキンバイ—Geum japonicum Thbg. ダイコンサウ—

G. strictum Ait. オホダイコンサウ—G. dryadoides S. Z. チングルマ—Agrimonia pilosa Ledeb. キンミヅヒキ—Sanguisorba obtusa Mx. トウチサウ—S. tenuifolia Fisch. var. album Traut. et Mey. ナガボノシロワレモカウ—Rosa multiflora Thbg. ノイバラ—Prunus incisa Thbg. マメザクラ—P. Ssiori Fr. Schm. ウハミヅザクラ

(*Leguminosæ*). Cassia mimosoides L. カハラケツメイ—Aeschynomene indica L. クサネム—Lespedeza bicolor Turcz. var. intermedia Mx. ハギ—L. tomentosa Sieb. イヌハギ—Vicia pseudo-orobus Fisch. et Mey. オホバクサフヂ—Amphicarpa Edgeworthii Benth. var. japonica Oliv. ヤブマメ

(To be continued).

（以下次號）

しりふかゞし(Quercus thalassica)及松ノ雌花ノ位置ニ就テ

理學士　藤井健次郎

余ハ前ニ栗ノ果實ノ位置及其生育ノ狀ヨリ推考スレバ凡テ柔荑花序ニシテ雌花ト雄花トヲ一花軸ニ交ユル場合ニ於テ雌花ガ必ズ其基底ニ位スルハ主トシテ其樹ノ生育上ノ經濟ニ又一ハ細長キ花軸ヨリモ太ク短キ花軸ガ能ク大ナル果實ヲ支持スルノ便ニ由ルモノナラント云ヘリ（其詳細ハ前號雜誌ニアリ）然ルニ此頃學友白澤保美君ノ好意ニヨリ一種面白キ花序ヲしりふかゞし（一名あらかし、又くろかし）ノ開花セル數本ノ枝ニ於テ見ルヿヲ得タリ此樹ニハ雄花ノミヨリ成レル柔荑花序ヲ具フル花軸ト雌花ノミヨリ成レル柔荑花序ヲ有スル

しりふかゞし及松ノ雌花ノ位置ニ就テ

花軸トアリテ一花軸ニシテ雌花ト雄花トヲ具フルモノナシ然レ圧雄花ノミノ柔荑花序ノ花軸數多聚リテ一枝ヨリ生ズルアリ亦雌花ノミノ柔荑花序ノ數本ノ花軸ト雄花ノミノ柔荑花序ノ數本ノ花軸ト共ニ聚リテ仝一枝ヨリ生ズルモアリ而メ此第二ノ場合ニハ雌花ノミノ柔荑花序ハ枝ノ頂端ニ近ク位シ雄花ノミノ柔荑花序ハ悉ヲ其レヨリ下ニ位ス而メ皆如此群生スルガ故ニ何レモ之レヲ一見シタル所ニテハ全体ガ復柔荑花序ヲ爲スモノヽ如シ左レハ余ガ前ニ述ベタル所ニ反スル者ノ如ク見エ第一、一ツノ柔荑花序（此場合ニハ復柔荑花序）中ニモ雌花カ雄花ヨリ上ニアルヿアリ（Abnormal development ニアラズシテ）第二此故ニ其位置生育上ノ經濟ニ反シ又柔荑花序ノ雌花ヨリ成熟シタル果實ヲ支フルモノ太キ短キ軸ニアラズシテ細長キ軸ナリト云ハザルヲ得ス

然レ圧之レハ眞ノ復柔荑花序ヲ爲スモノニアラズシテ上ニ記セル如ク一枝（花軸ニアラズ通常ノ枝ナリ）ヨリ柔荑花序ヲ具フル數多ノ花軸ガ群生セルノミナリソハ此復柔荑花序ノ主軸ト覺シキ枝ノ其頂端ニ注意スル時ハ他日（來年春暖ノ候ナルベシ）伸長スベキ明確ナル頂芽ヲ見出スノ一事ニテ知ルベシ左レバ此ニ一ツノ柔荑花序中ニ雌花カ雄花ノ上ニアルヿナシ從テ生育上ノ經濟ニ反シ又ハ細長キ花軸ガ大ナル實（かしノ實ハ大ナラザレ圧三ツ四ツ群生スルヿアリ）ヲ支フルヿモナシ

左レ圧尚此ニ此等ノヿニ注意スル人アリテ此花ヲ採リテ此理ヲ考フルニ當リテ疑惑ヲ生シ易キヿアリソハ他ナラズ此ニ述ベタル如ク雌雄花ガ一ツノ花序中ニアラズトセバ余ノ前ニ述ベタル所ノ文句ニハ差支ナシトイヘ圧兎ニ角雌花ガ雄花ノ上ニ位スルガ故ニ此樹ハ果實ノ成熟ニ至ル迄ハ比較的ニ長キ（雌花ガ雄花ヨリ下ニアリテ枝ノ基底ニ位スル場合ニ於ケルヨリモ）軸ヲ養ハザルベカラズ去レバ其位置ノ上ニアルガ爲メニ樹ノ生育ノ經濟ニ於テ損失アルヿナキヤトノヿナリ

去レ圧此疑點ハ少シク考フレバ了解スベシ何トナレバえりふかどしニテハ枝ノ果實以下ノ比較的長キ部分ハ

果實成熟期迄ハ絶エズ養料ヲ要スルハ無論ナレ𪜈斯クシテ生育シタル枝（眞ノ花軸以外ノ部分）ハ花軸ニアラザルガ故ニ固ヨリ他日果實ト共ニ脱落シ若クハ枯死スルモノニアラズ他日其頂端ハ伸長シテ來年ノ嫩條トナルモノナリ而シテ果實ト共ニ脱落スルカ若シクハ枯死スベキハ只此枝ノ頂端ニ近ク生ズル比較的ニ短キ花軸（後ニ果柄ト成ル部分）ノミナリ左レバ多量ノ養料ヲ採テ生育シタル部分ガ枯死脱落スル等ノヿナキガ故ニ其樹全体ノ生育ノ經濟ニ於テ毫モ損失アルヿナシ

之レニ反シしりふかどしノ場合ハ又一種面白キ自然ノ仕組ヲ表スルモノナリ何トナレバ栗ニ於ケル如ク柔荑花序ニシテ雌雄兩花ヲ交ユル場合ニ於テハ其各花軸ノ雌花（花軸ノ基底ニアリ）以上ノ雄花ヲ附シタル部分ハ受精期後脱落シ以下ノ部分ハ果實ノ柄トシテ殘存シ後ニ果實脱落ト共ニ枯死スルモノナリ然ルニしりふかどしノ此場合ニテハ雄花ノミノ柔荑花序ヲ具フル花軸ハ受精期後悉ク脱落シ雌花ノミノ柔荑花序ヲ具フル花軸ハ各々其全部生存スルナリ故ニ一花軸ノ一部分脱落シテ一部分殘生スルノヿナシ只雌花ノミヲ附ケタル花序ノ上部ニ受胎ヲ遂ゲザリシ雌花アル場合ニ於テ其花序ノ上部ハ脱落若シクハ枯死シ下部ノミ殘存スベシ之レヲ要スルニ栗ニ於ケルガ如キ場合ニテハ一花序中ニ早ク脱落スベキ部分（雄花ヲ附ケタル部分）ト果實成熟迄生存スベキ部分トアリしりふかどしノ場合ニテハ多クノ花序中ニ早ク全然脱落スベキ花序（雄花ノミヲ附ケタルモノ）ト果實成熟迄生存スベキ花序トアルナリ之レモ亦一種巧妙ナル細工ト謂フベシ

尚此ニ之レト類似ノ狀ヲ有シ誤認シ易キモノアリソハ赤松黒松等ノ花ニシテ雌花ト雄花ト一ツノみどりニ開クヿアルナリ而シテ此場合ニハ雄花ハみどりノ基底ニ近ク又ハ中間部ニ叢生シ雌花ハみどりノ頂端ニ開クヲ常トシ恰モ雌花ガ頂芽ヨリ生ゼルノ觀アリ之レ固ヨリ皮相ノ觀ニシテ其雌花三ツ四ツ一所ニ生ズルヿ常ナルヲ

以テモ知リ得ベキヿニシテ是等ノ雌花ハ固ヨリ頂芽ニアラズ皆明カナル腋芽ナリ翌年春期ニ至レバ眞ノ頂芽ハ二三ノ腋芽ト共ニ發生シ高ク聳エテ其年ノみどりトナリ若キ果實（前年ノ雌花ノ熟シタルモノ）ハ其基底ニ倒生スルヲ見ルベシ左レバ松ノ場合ハしりふかゞしノ場合ト殆ンド等シクシテみどりハ固ヨリ脫落スベキニアラズ而〆雄花ヲ附ケタル花軸（松ノ雄花ヲ柔荑花ト見做シタル𪜈）ハ悉ク脫落スルモノナリ故ニ此場合ニ於テモ毫モ生育ノ經濟ニ於テ損失ヲ來スモノニアラズ而〆松ノ如キハ其受精期ニ於テ雌花ガ直立シタルみどりノ頂端ニ開クハ他ヨリ風ニ飛散シ來ル花粉ニ對シ途ニ妨ゲ少キ地位ニ立ツモノナレバ其位置ハ其受精作用ヲ完カラシムル一助トナルベク其花ノ配置實ニ宜ヲ得タルモノト云フノ外ナシ

尙凡テ雌花ノ位置ニ就テハ他日再記スルヿアルベシ

◎雜錄

○接合藻ノ新器官

バラ氏一種ノ固定染色法ヲ按出シテ以テ之ヲ Spirogyra, Zygnema, Mesocarpus, Cosmarium 等ノ細胞ニ施シ此等ノ葉綠体ニ接セル微細ノ器官ヲ發見セリ新稱ヲ Karyoide ト云フ近着ノ伯林植物學會々誌ニ出デタリ詳ハ就テ見ルベシ

池野報

○樹木生活ノ起原（承前）

安田篤

志留里亞紀ニ於テ植物生活ノ元氣正ニ盛ナル時ニ當リ新生ノ植物ハ四面楚歌ノ境遇ニアリテ自已ノ外圍ニ蝟

集セル古強者ニ敵セザルガ故ニ空シク枯死スルカ或ハ圍ヲ突テ沼澤ノ緣邊ニ出デザル可ラズ此ニ於テカ此沼緣ハ未住ノ高地ト既住ノ低地トノ境界トナリ此境端ニ居ヲ移シタル植物ハ無經驗ノ新地ニアルヲ以テ自ラ特殊ノ性質ヲ得テ其狀態ニ適合センヿヲ勉メタリ凡ソ此ノ如キ無經驗地ハ決シテ繁茂ノ力ヲ以テ打勝タルベキ者ニアラズ必ズヤ此變ニ應ジ古組織ヲ改良進化セシメ更ニ新組織ヲ作ラザル可ラズ吾人ハ玆ニ草本植物ノ胚胎スルヲ知ル也飜テ境線ノ內部ヲ見レバ旺盛ノ繁茂アリ而シテ其境緣植物ニ由テ被ハレタル處ニ於テハ新高等植物ヲ生ジ以テ樹木生活ノ先驅ヲ爲シ隨テ下志留里亞世ニテモ既ニ石炭紀及ビ中古代ニ於テ榮ユル木狀羊齒類、化石木賊類、松柏類ノ祖先ノ存在セシヿハ毫モ疑フ可ラザルナリ

上志留里亞紀及ビ泥盆紀ニ於ケル植物生活史ヲ按ズレバ中古代ニ至テ勢ヲ得ル眞正ノ乾地植物ノ基礎ハ當時ニ於テ既ニ定マレリ是レ勿論地文上ノ變化ニ伴ヒ發達シタルノ結果タリ然リ而シテ泥盆紀ノ乾地植物中ニハ原始沼澤ノ消失スル曉ニハ蹶起セントスル窃ニ時機ヲ窺フ者モアリテ乾地ハ漸ク新城廓ノ築カレントスル時ニ當リ古沼植物ハ已レヲ抑壓スベキ何等ノ障害ナキヿト石炭紀ニ於ケル地文ノ變化ニ伴ヒ未曾有ノ發生力ガ喚起セラレ是等植物ハ驚クベキ生長ノ度ニ達セリ中古代ニ至レバ植物界ニ一大變遷アリテ植物ノ性質ハ大ニ今日ノ者ニ近似スルニ至レリ當時ノ森林中ニハ泥盆紀ヨリ來レル一位族アリ化石蘇鐵科ヨリハ新ニ蘇鐵科ヲ生ジ石炭紀ノ沼林ヨリ發達シタル高等ノ石松類、木狀羊齒類、巨大木賊類モアリ之ヨリ推セバ石炭紀中ニモ沼澤植物ノ外ニ泥盆紀ト中古代トヲ連續スル轉移乾地植物モ數多アリシヿヲ知ルベシ此ノ如ク泥盆紀ニテハ後世ニ至テ榮エントスル乾地植物ノ用意調整セル間ニ嘗テ生長ノ極ニ達シタル沼澤植物ハ太古代ノ終ニ漸ク衰滅ニ趣ケリ此ニ於テ中古代ノ初ハ裸子類ノ世トナレリ是レ亦其故無クンバアラズ當時ノ植物ハ陸地テフ新戰場

ニ臨マザル可ラザルヲ以テ前代植物ノ中組織ノ最高等ナル者ノミ勝ヲ制シ隨テ猶前代ヨリ連續セル木狀羊齒類、化石木賊類ノ勢力侮ル可ラザルニモ關ラズ其主權ハ漸ク松柏科及ビ蘇鐵科植物ニ移ラントセリ又松柏類ノ森林ニハ下生植物及ビ境緣植物アリテ是等新植物ノ發達ハ往古ノ境緣植物ノ勢力ヨリモ遙ニ大ナリシ加之陸上植物ノ境遇ハ沼澤植物ヨリ更ニ複雜ナル者アルヲ以テ自ラ其巧妙ナル特性ヲ得ルハ免ル可ラザルノ數ナリ此ニ於テカ當代ニ於テ更ニ高等ナル被子類ノ新生ヲ見ル即チ白堊紀ノ初ニ至リ樹木生活ヲ爲セル二新種類ノ植物ガ裸子類ノ敵手トシテ顯出セリ其一ハ單子葉類ノ棕櫚科、其二ハ双子葉類ノ葇荑亞門ニシテ之ヲ被子類ノ嚆矢ト爲ス

前ニ述ベタル如ク中古代ニ於ケル森林ノ内部ハ松柏科植物ニテ占有セラレシヤ疑ナシ其中殊ニ勢力ヲ逞フセシ者ハ松族、樅族、垂柳櫸族、及ビ「タクソヂウム」族ナリ同時ニ境緣ノ外ヲ見レバ一位族、蘇鐵科、木狀羊齒類繁茂群生シ棕櫚科ノ先驅者タル榮蘭科モアリ抑榮蘭科ハ高等裸子類ト棕櫚科トノ轉移狀態ヲ示セル者ニシテ其氣根ノ懸々タルハ初メ森林ノ緣邊ニ其位置ヲ占メタル紀念標ト謂フベシ又棕櫚科植物ノ性質ヲ察スルニ最初ノ敵手ハ木狀羊齒類及ビ蘇鐵科ニシテ其高ク空ヲ突ケル莖幹ト頂ニ密集セル掌狀葉トハ能ク敵手ヲ抑壓シテ勝ヲ制スルヿヲ得タリ今榮蘭科及ビ棕櫚科ヲ裸子類ト比較スルニ前者ニ於ケル肉穗狀ノ花序ハ蘇鐵若クハ松柏ノ果實ヨリ漸ク進化セルヿヲ示セル者ノ如シ假令然ラザルモ肉穗花單子葉植物ハ非肉穗花單子葉植物ヨリモ遙ニ裸子類ニ近キハ爭フ可ラザルノ事實ナリ

○植物雜爼

松村任三

▲千六百四十七年稻始テ米國ニ入ル

▲錫蘭ニアル米ノ變種百六十一品

▲金盞花瓣ノ赤黃色ヲ呈スルハ Carotin ノ存在ニ由ル

▲菜豆（インゲンマメ）ノ病源ヲナス菌類アリ曰ク Colletotrichum Lindemuthianum 曰ク Uromyces Phaseoli

▲菌類アリ穀類ヲ襲フ者曰ク Cladosporium herbarum 胡瓜（キウリ）ヲ襲フ者曰ク Cladosporium Cucumeris

▲人畜ノ糞ニ寄生スル菌屬ニ十五アリ曰ク Pilobolus 曰ク Mucor 曰ク Thamnidium 曰ク Chaetocladium 曰ク Piptocephalus 曰ク Syncephalus 曰ク Arthrobotrys 曰ク Sordaria 曰ク Podospora 曰ク Sporormia 曰ク Ascobolus 曰ク Isuria 曰ク Lasiolobus 曰ク Coprinus 曰ク Botrytis

▲赤松、黑松等ヲ侵ス菌類アリ曰ク Aecidium giganteum 曰ク Caeoma 曰ク Peziza

▲武州高尾山谷樹下陰濕ノ地ニ秋海棠多ク生ス

▲「シウカイドウ」「シウブンサウ」「ジヤカウサウ」「フクワウサウ」「オホヤマハコベ」ヲ高尾山初秋ノ名産トス

○野外植物筆記

松村任三

「ツルリンダウ」淡紅色ヲ帶ベル筒狀花ハ五尖シテ其間亦平坦ナラズ綠蕚モ五尖ス五雄蕋アリ二裂ノ柱ハ左右ニ捲ク

「オホヤマハコベ」小白花、五瓣アリ、頭一缺ス、蕚モ亦五裂、五雄蕋三柱アリ、花梗及蕚片ノ裏面ニ線毛アリ

「イボクサ」小花六瓣アリ外位ノ三者ハ狀蕚ノ如ク內位ノ三者ハ質柔軟、色淡紅ニシテ花冠ニ彷彿タリ六雄蕋アリ三莖ハ長ク三莖ハ短シ其葯碧色

「ザクロサウ」小花、五瓣ニシテ三雄蕋、三柱、子房モ三裂ノ狀ヲ呈ス

「井ノコヅチ」花蕚五片、片末尖鋭、內ニ白色ノ五雄蕋アリ片ニ對生、花糸ハ本ニ於テ相合シテ白色平滑ノ一雌蕋ヲ包圍ス、一柱アリ短シ花蕚ヲ擁スルニ三片ノ苞アリ花下ノ者大、花上ノ者細クシテ二片、花蕚ハ熟シテ脫落セズ實ヲ包ミテ下ニ向フ

「ツリフネサウ」花冠奇形ヲナス四瓣ニ成ル上位ノ者小ニシテ蓋ノ狀ヲナシ下位ノ者大ニシテ囊狀ヲ呈ス尾アリ內ニ卷ク左右ニ二瓣アリ形狀相均シク其本ニ黃斑ヲ印ス五雄蕋アリ甚短、白糸、本ニ離レ末ニ相合ス白葯アリ亦相合シテ綠色平滑ノ一雌蕋ヲ包圍ス雌蕋ニ短柱アリ花梗ノ本ニ紅色ノ粗毛ヲ散布ス

「ヌルデ」細微ノ白花、五蕚、五瓣アリ、花心一雌蕋アリ三柱ニ分ル黃色ノ花盤アリ雌蕋下ヲ圍繞ス莖ヲ斷テバ白汁ヲ出ス幼實ハ紅色ニシテ美、其形扁平

「ハダカホヽヅキ」小花鐘狀ニシテ黃白色、綠蕚アリ邊緣殆ト平坦ニシテ其尖裂ヲ辨シ難シ五雄蕋アリ花筒ニ生シテ片ニ互生ス、花糸ハ本ニ至テ幅漸ク廣シ

「カリガネサウ」蕚平等形ニシテ五尖アリ碧紫色ノ花冠ハ昂然トシテ立チ上ニ二裂左右ニ二裂ノ狀ヲ呈ス下ニ在ルノ一片ハ其形最大ナリ四雄蕋アリ長ク花外ニ抽出シテ前ニカヾム花心一柱アリ頭微ニ二裂ス

「カハミドリ」紅花唇形ヲナス其上唇ハ短小ニシテ頭一缺シ其下唇ハ濶大ナリ四雄蕋アリ二莖ハ短ク二莖ハ長シ葯紅、糸紫、多ク線條アル蕚ハ五裂ニシテ上位ノ三片ハ大、下位ノ二片ハ小

○白山ノ植物

先頃理學士比企忠君予ニ臘葉標品數十種ヲ贈テ曰ク是ハ去八月廿日ヨリ全卅日ニ至ル十日間ニ於テ一友ガ病

氣保養旁避暑ノ爲加州白山地方ニ滯留中徒然ナルマヽ見當リ次第採集シタルモノナリト同君ノ厚意難棄一々點檢スルニ畢竟ハ余ヲシテ何處ノ高山モ植物ハ大抵相似オルモノトイフ觀念ヲ起サシメタルニ過ギズ今其特徵ト云フベキ數種ヲ摘萃スレバ概ネ次ノ如シ

くろゆり百合科くるまゆり全科まひづるさう全科いはくるま薔薇科なんきんこざくら櫻草科いはかゞみ岩梅科
るゐえふしやうま毛茛科みやまかたばみ牻牛兒科いはつめくさ石竹科あかもの石南科いぶきとらのを蓼科
うすゆきさう菊科きつりふね牻牛兒科みやまはんしよづる毛茛科あきのきりんさう菊科きやうがのこ薔薇科
ひかげかづら石松科みやまめしだ羊齒科きりも地衣科はいねず松柏科等

（市、塘、）

○繇條書屋植物雜記　（其十三）

牧野富太郎

●根本莞爾氏 Swertopsis umbellata *Makino* ヲ伊豆ニ採ル

Swertopsis umbellata *Makino* ハりんだう科ノ一年草ニシテ和名ヲしのゝめさうト稱シ始メ之ヲ土佐ノ山地ニ發見ス爾後幾年未ダ之ヲ他ノ地ニ採集セシモノアルヲ聞カザリシガ本年八月廿七日福島縣尋常師範學校教諭根本莞爾氏之ヲ伊豆國天城山ニ採收セラル即チ本品第二ノ産地ニ〆同氏ノ採收ハ之ヲ世ノ同學ノ士ニ報道スベキ價値アルモノト謂フ可シ何トナレバ是レ本品産地ノ決シテ四國一隅ニ限ラレタルニ非ザルヲ證明スルニ足レバナリ

本品ハ拙著日本植物志圖篇第十一集ニ詳圖ヲ載ス而シテ其 Swertopsis ナル屬名ハ當時予ノ新ニ命ジタル名稱ニシテ全体各部ノ形狀能ク Swertia（あけぼのさう屬）ニ似タリト雖𪜈其花冠鐘形ヲ成シ且ツ繖形花序ヲ有スルニ由テ之ト異ナレリ故ニ予ハ彼此查定シテ別ニ之ヲ一新屬ト成シ以テ前書ニヨリ之ヲ世ニ公ニシタリ然レ

𪜈共兩屬天然ノ類似甚ダシキニヨリ此ニ Swertia 屬從前ノ屬徵ヲ擴張シ以テ本品ノ藉ヲ該屬內ニ定ムルニ足ル可キ度ニ進メ乃チ之ヲ Swertia umbellata トナスモ亦敢テ其不可ヲ見ザルナリ

◎ひがんばな科諸屬ノ撿索表

左ニひがんばな科(石蒜科) AMARYLLIDEÆ. ニ屬セル全屬ノ撿索表ヲ揭ゲントス是レ J. G. Baker 氏著 *Handbook of the Amaryllideæ.* ヨリ譯出スル所ニ係ルきんばいざゝ幷ニこきんばいざゝヲ除キテ本邦產ノ該科植物僅ニ六種若クハ七種アルノミ其他園裏ニ培養スルモノハ皆一トメ外國產ナラザルハナシ此等ノ諸種其學名ノ我邦人ノ間ニ明カナルモノ亦尠少ナラズト雖𪜈然レ𪜈亦尚考察查問ヲ要ス可キモノ多シ今園藝者ノ爲メニ之ヲ譯出ス庶幾クハ其屬名撿出ノ指鍼タラン乎屬名已ニ得レバ種名亦從フテ明カナルニ至ラントス兩名等シク鉤出シ得バ呼稱從フテ全シ是レ以テ我望ミヲ滿スニ足ル矣而メ予ノ本書ヲ閱スルヲ得シハ大久保助教授ノ高誼ニヨル依テ此ニ其厚意ヲ謝スト云爾

○ひがんばな科石蒜科 AMARYLLIDEÆ.

◎第一 ひがんばな亞科 AMARYLLEÆ. 根莖ハ襲重鱗莖、葉ハ悉ク根生、花梗ハ無葉ノ莛ヲ成ス

▲第一 戴冕族 *Coronatæ.* 花ハ花蓋ト雄蕊トノ間ニ一ノ花冕（コロナ）ヲ具フ

(1) Cryptostephanus *Welw.* 花蓋漏斗狀ニメ管部長シ、花冕ハ十二ノ細線鱗ヲ成ス(アンゴラ、一種)

(2) Narcissus *Linn.* すゐせん屬、花蓋盆狀ニメ管部長シ、花冕ハ一ノ顯著ナル瓣狀盃ヲ成ス(歐洲、西亞細亞、北亞非利加、二十七種)

(3) Tapeinanthus *Herb.* (*Tapeinaegle* Herb.; *Carregnoa* Boiss.) 花蓋ノ管部極メテ短シ、花冕ハ六ノ細鱗ヲ成ス(西班牙、コロッコ、一種)

(4) Placea *Miers.* 花蓋ハ漏斗狀ニメ管部ハ極メテ短シ、花冕細小膜質ニメ深ク六裂ス(智利、五種)

▲第二 ひがんばな本族 *Amaryllеæ genuinæ.* 花冕無ク雄蕊ハ離生ス

（甲）葯ハ直立シ其底部若クハ其近點ヲ以テ花絲ニ連ル

（イ）雄蕋ハ雌蕋上位ニ乄花絲ハ短シ

(5) Galanthus *Linn.* ゆきのはな屬、花蓋ノ內列片ハ其外列片ト異ニ乄相抱合シ開展セズ(南歐、西亞細亞、六種)

(6) Leucojum *Linn.* 花蓋片ハ皆同形ニ乄花絲ハ短シ(南歐、北亞非利加、九種)

(7) Lapiedra *Lagas.* 花蓋片ハ皆同形ニ乄花絲ハ長シ(西班牙、一種)

（ロ）雄蕋ハ雌蕋周位ニ乄葯ハ細小且ツ球狀ヲ成ス

(8) Hassea *Herb.* 花蓋ノ管部無シ或ハ極メテ短シ(喜望峰、八種)

(9) Carpolyza *Salisb.* 花蓋ノ管部ハ顯著ナリ(喜望峰、一種)

（ハ）雄蕋ハ雌蕋周位ニ乄葯ハ長楕圓形或ハ線狀長楕圓形ヲ成ス

［い］花ハ獨在ス

(10) Gethyllis *Linn.* 花梗ハ短ク花蓋ハ盆狀、雄蕋一列ニ乄往々多數ナリ(喜望峰、九種)

(11) Apodolirion *Baker.* 花梗ハ短ク花蓋ハ漏斗狀、雄蕋二列ヲナス(喜望峰、六種)

(12) Cooperia *Herb.* 花梗ハ延長シテ長シ(テキサス幷ニ北メキシコ、二種)

［ろ］花ハ繖形ヲ成ス

(13) Anoiganthus *Baker.* 花蓋ノ管部ハ極メテ短ク花絲ハ絲狀ヲナシテ長シ(喜望峰、一種)

(14) Chlidanthus *Herb.* (*Coleophyllum* Klotzsch.) 花蓋ノ管部ハ長ク花絲ハ短ク乄基部展張ス(アンデス、一種)

（乙）葯ハ背着シ丁字狀ヲ成ス

（イ）胚珠多數ニ乄縱ニ相層リテ排列シ種殼ハ黑シ

［い］花ハ獨在シ佛焰苞ノ下半ハ管狀ヲ成ス

(15) Sternbergia *W. et K.* 花梗ハ短ク或ハ延長スルヿアリ花蓋ハ正形、直立、鮮黃色、種子ハ球形ナリ(南歐、西亞細亞、四種)

(16) Haylockia *Herb.*　花梗ハ短ク花蓋ハ正形、直立、淡白色、種子ハ平匾ナリ（モンテヴィデオ、ブエノスアイレス、一種）

(17) Zephyranthes *Herb.*　さふらんもどき屬、花梗ハ延長シ花蓋ハ正形、直立或ハ略直立、種子ハ平匾ナリ（亞米利加、三十四種）

(18) Sprekelia *Heist.*　花蓋ハ開口狀、水平、鮮紅色ニシテ下列ノ三片ハ回旋シ雄蕊幷ニ花柱ハ斜傾ス（メキシコ及ビ、グアテマラ、一種）

[ろ]花ハ繖形ナリ佛燄苞ハ二—四片ト成リ亞梗ハ絲狀小苞ヲ伴ヘリ

(19) Ungernia *Bunge.*　花蓋管ハ短ク種子ハ胞室中ニ多數ニシテ平匾且ツ翅翼ヲ有ス花梗ハ中實ス（亞細亞、三種）屬中ニ U.? Oldhami *Maxim.* アリ Maximowicz 氏唯ヾ一個ノ標品ヲ日本ニ得テ之ヲ記述セリ然レ𪜈 Oldham 氏ノ植物ハ是レニ非ズシテ別種ニ屬ス即チ Lycoris sanguinea（きつねのかみそり）是レナリ

(20) Lycoris *Herb.*　ひがんばな屬、花蓋管ハ短ク種子ハ胞室中ニ寡數ニシテ脹肥シ花梗ハ中實ス（日本幷ニ支那、五種）

(21) Hippeastrum *Herb.*　花蓋管ハ一般ニ短シト雖𪜈偶マ長キ者アリ種子ハ胞室中ニ多數ニシテ一般ニ平匾シ花梗ハ中空ナリ（亞米利加、三十八種）

(22) Vallota *Herb.*　花ハ直立シ花蓋管ハ長ク廣ク漏斗狀ヲ成シ喉口枕形ヲ成形ス種子ハ基部ニ翅翼ヲ具フ（喜望峰、一種）

(23) Cyrtanthus *Ait.*　花蓋管ハ長倚圓形ヲ成セル花蓋片ヨリ二—三倍長ク喉口ニ物ナシ佛燄苞ハ二—四片ヲ成ス（喜望峰、アンゴラ、二十種）

(ロ)胚珠二個底部ニ占居シテ並在シ種殼死白色ナリ

(24) Griffinia *Ker.*　花ハ淡紅紫色ニシテ繖形ヲ成シ葉ハ廣ク薄ク而シテ葉柄ヲ具フ（ブラジル、七種）

(ハ)二胚珠ハ二個或ハ少數ニシテ胎座ノ中央ニ並在シ若クハ聚在ス

(25) Clivia *Lindl.*　漿果ヲ結ブ胚珠數個ニシテ鱗莖ハ不全ナリ（喜望峰、三種）

(26) Hæmanthus *Linn.*　漿果ヲ結ブ胚珠ハ二個ニシテ襲重鱗莖ハ巨大ナリ花極メテ多數ニシテ花蓋片ハ其幅狹シ（喜望峰、熱帶亞非利加、ソコトラ、三十八種）

(27) Buphane *Herb.*　蒴果ヲ結ブ佛燄苞ハ二片ヲ成ス（喜望峰、熱帶亞非利加、二種）

(ニ)胚珠少數或ハ多數ニシテ縱ニ相層リテ排列ス種子ハ寡數ニシテ綠色且ツ脹肥ス

[い]果實ハ不開裂或ハ不齊ニ開裂ス

(28) Crinum *Linn.* はまゆう屬（即チはまおもと屬）、花蓋管ハ長ク花ハ白色ナリト雖ﾓ亦時ニ潮紅若クハ片脊ニ紅線ヲ曳クアリ（世界一般、七十九種）

(29) Amaryllis *Linn. ex parte.* 花蓋管ハ短ク花蓋片ハ廣シ（喜望峰、一種）

(30) Ammocharis *Herb.* 花蓋管ハ短ク花蓋片ハ狹クシテ鋭頭ナリ（喜望峰、一種）

［ろ］果實ハ三殼片蒴ノナリ

(31) Brunsvigia *Heist.* 花柱絲狀、蒴果ハ陀螺形ニメ鋭稜ヲ有ス（喜望峰、十種）

(32) Nerine *Herb.* 花柱絲狀 蒴果ハ球形ニメ鈍稜ヲ有ス（喜望峰、十種）

(33) Strumaria *Jacq.* 花柱膨脹シ基部ニ至ルニ從ヒ三稜ヲ成ス（喜望峰、四種）

▲第三 パンクラチウム族 *Pancratieæ.* 花冕無シ、雄蕋ハ基部ニ至ルニ從ヒ副器ヲ成シ而メ往々相合シテ一ノ顯著ナル花盃ヲ成形ス

（甲）胚球多數或ハ少數ニメ縱ニ相層リテ排列ス

（イ）葉ハ廣クメ柄アリ、悉ク皆アンデス山ノ產ナリ

(34) Eucrosia *Ker.* 花蓋ハ漏斗狀、有色ニメ管部短シ雄蕋斜傾シ超出シ基部不正ニ合体シ且ツ疣瘤ヲ成ス（一種）

(35) Stricklandia *Baker.* 花蓋ハ漏斗狀、有色ナリ雄蕋ハ眞直ニメ少シク（ヂヤスト）超出シ下半部合体シテ基部ハ疣瘤ヲ成ス（一種）

(36) Callipsyche *Herb.* 花蓋ハ漏斗狀、有色ニメ管部ハ短シ雄蕋ハ斜傾シ著シク超出シ且ツ分生シテ基部ハ疣瘤ヲ成ス（三種）

(37) Phædranassa *Herb.* 花蓋有色ニメ略〜圓柱形ヲ成シ裂片（管部ノ誤ナラン）或ハ長ク或ハ短シ花絲ハ極メテ微々ニ其基部ニ至ルニ從ヒ副器ヲ成ス（五種）

(38) Urceolina *Reich.* 花蓋有色、管部圓柱形ヲ成シテ突然張大セリ花絲ハ基部ニ至ルニ從ヒ極メテ微々ニ副器ヲ成ス（三種）

(39) Eucharis *Planchon.* 花蓋白色、正形、略〜輻狀ヲ成シ管部ハ略〜圓柱形ヲ成シテ突然張大ス花絲ハ方形ニメ合体シ以テ一ノ顯著ナル花盃ヲ成ス（五種）

(40 Plagiolirion *Baker.* 花蓋白色、管部ハ短クシテ圓柱形ヲ成シ緣邊頗ル不齊ナリ花絲ハ合体シテ一ノ有齒花盃ヲ成ス（一種）

(41) Calliphruria *Herb.* 花蓋白色、管部ハ漏斗狀、裂片ハ長楕圓形ニシテ管部ト其長サヲ同クス花絲ハ方形ヲナシ葯ノ兩側ニ各〻一ノ巨齒ヲ具備セリ(二種)

ロ)葉ハ線形或ハ紐狀ヲ成シ葉柄無シ

(42) Eustephia *Cav.* 花蓋ハ有色、略〻圓柱形、管部ハ短シ花絲ハ兩側ニ各〻一道ノ狹翼ヲ有シ其末齒ヲ成ス（秘魯アンデス、一種）

(43) Stenomesson *Herb.* 花蓋有色、略〻圓柱形、管部ハ長シ花絲ハ合体シテ一ノ平縁或ハ有齒ノ花盃ヲ成ス(アンデス、十一種)

(44) Hyline *Herb.* 花蓋白色ニシテ管部無ク裂片線形ナリ雄蕋盃ハ極メテ短シ(ブラジル、一種)

(45) Pancratium *Linn.* 花蓋白色ニシテ管部漏斗狀ヲ成ス雄蕋盃ハ形チ大ナリ(舊世界、十二種)

乙))胚珠二―六數、底部ニ占居シテ並在ス

(46) Hymenocallis *Salisb.* 花蓋管ハ長ク雄蕋盃ハ直立ス(熱帶及ビ西熱帶亞米利加、三十一種)

(47) Elisena *Herb.* 花蓋管ハ短ク雄蕋盃ハ偏向ス(アンデス、三種)

丙))胚珠二―三數、中部ニ占居ス

(48) Vagaria *Herb.* 花蓋ハ漏斗狀、裂片ハ其幅狹シ葉ハ紐狀ニシテ子房ハ三胞ナリ(シリア、一種)

(49) Eurycles *Salisb.* 花蓋ハ纖長ナル管部ト廣幅ナル裂片ヲ有ス葉ハ廣クシテ葉柄アリ子房三胞(マラヤ、アウストラリア、二種)

(50) Calostemma *R. Br.* 花蓋ハ漏斗狀ニシテ子房ハ一胞ノミ而シテ葉ハ各般ナリ(アウストラリア、三種)

◎◎第二 ゆりずゐせん亞科 ALSTRŒMERIEÆ. 多肉ノ纖維根ヲ有シ根莖無シ(Iriolirion 屬ハ例外トス)花序ハ單繖形或ハ複繖形ヲ成シ花莖ニハ葉ヲ有ス

甲))鱗莖ナル根莖ヲ有ス

(51) Ixiolirion *Fisch.* 花蓋片ハ略〻同狀ナリ莖ハ直立ス(西亞細亞、一種)

乙)根莖無シ

(52) Alstrœmeria *Linn.* ゆりずゐせん屬、花蓋ノ外列三片ハ其內列三片ト異ニシテ且ツ此內片ハ不同ナリ莖ハ直立シ子房ハ三胞ナリ (ブラジル、

チリ、四十四種）

(53) Bomarea *Mirb.* 花蓋ノ外列三片ハ其内列三片ト異ニ〆且ツ此内片ハ同狀ナリ莖ハ一般ニ延長シテ蔓ヲ成シ子房ハ三胞ナリ（メキシコ、南亞米利加、七十五種）

(54) Leontochir *Phil.* 花蓋片ハ皆略〻同狀ニ〆子房ハ單胞ナリ（チリ、一種）

第三 りうぜつらん亞科 AGAVEÆ.

花序ハ總狀花、穗狀花或ハ圓錐花ニ〆決〆繖形ノモノ無シ葉ハ多クハ堅クシ肉厚ク緣邊ニ刺ヲ有シ而〆花梗ノ本ニ葉々密ニ聚簇ス

（甲）葉ハ比較的ニ薄ク決シテ刺緣若クハ刺尖項ヲ成スコトナシ

(55) Polianthes *Linn.* げつかかう屬、花序ハ疎ナル單穗狀花ヲ成シ花蓋ハ白色ニ〆管部ハ彎曲シ略〻圓柱形ヲ成シテ長ク裂片ハ短シ（メキシコ、一種）

(56) Prochnyanthes *S. Wats.* 花序ハ疎ナル總狀花ヲ成シ花蓋ハ綠褐色ニ〆裂片短ク管部ハ中部ニ於テ急ニ彎曲シ且ツ張大セリ（メキシコ、一種）

(57) Bravoa *Llav. et Lex.* 花序ハ疎ナル穗狀花若クハ總狀花ヲ成シ花蓋ハ紅色或ハ白色ニ〆略〻圓柱形ヲ成セル管部ハ彎曲シ裂片ハ極メテ短シ（メキシコ、四種）

(58) Beschorneria *Kunth.* 花序ハ單總狀花若クハ圓錐總狀花ヲ成シ花蓋ハ綠紅色ニ〆管部漸ク成立シ（即チ極メテ短シ）裂片ハ長ク且ツ倒披針形ヲ成ス（メキシコ、五種）

(59) Doryanthes *Correa.* 花序ハ小頭狀若クハ密錐花ヲ成シ花ハ鮮紅色ニ〆管部ハ漸ク之ヲ見ル可ク（即チ極メテ短ク）裂片ハ長ク狹キ鎌身形ヲ成ス（東アウストラリア、二種）

（乙）葉ハ肥厚、多肉ニ〆一般ニ刺緣及ビ刺尖項ヲ有ス

(60) Agave *Linn.* りうぜつらん屬、花蓋ハ漏斗狀ヲ成シ管部短シ花絲ハ長クシテ絲狀ナリ（熱帶亞米利加殊ニ、メキシコ、南合衆國、百三十八種）

(61) Furcræa *Vent.* (*Fourcroya* R. et S.) 花蓋ハ白色ニ〆輻狀ヲ成シ花絲ハ基部贅瘤ヲ成ス（熱帶亞米利加、十七種）

◎東京植物學會錄事

九月廿九日植物學教室ニ於テ例刻ヨリ月次會ヲ開キ、市村塘君ハ數葉ノ寫景圖幷ニ數多ノ腊葉ヲ示シテ氏ノ日光及ヒ富士山旅行談ヲ演説セラレタリ、次テ寄贈書籍幷ニ顯微鏡的標品ヲ閲覧ニ供シテ散會セシハ午後四時半ナリシ　當日出品ノ顯微鏡標品ハたでノ腺毛（「マゼンタ」ニテ染色ス）松平君　いてふノ花粉細胞ノ「アットラクションスフイヤ」（雜誌第九十一號ニ掲載セル者ノ標品）平瀬君　にがよもぎ及ビよもぎノ毛（兩者ノ異點ヲ示ス）市村君　杉ノ隆起有縁紋（横斷、「ヘマトキシリン」ニテ染色「バルサム」ニテ封裝）池野君　さかきノ髓內石細胞（「マゼンタ」ニテ染色）安井君　羊齒ノ「プロサリユム」、安田君　せんにんさうニ寄生セルねなしかづらノ吸根（「サフラニン」ニテ染色、「バルサム」ニテ封裝）大森順造君　とれにやノ花粉管ノ卵球ニ達セル景状、大久保君

◎寄贈書目錄

（十月十五日迄分）

東京醫學會雜誌　第八卷（第十七號 第十八號）　東京醫學會○牧畜雜誌　第（百三十六號 百三十七號）　牧畜雜誌社○東洋學藝雜誌　（第百五十五號 第百五十六號）　東洋學藝社○地質學雜誌　第十二號　○動物學雜誌　第七十一號　動物學會○國家醫學會雜誌　第八十九號　國家醫學會○大日本山林會報　第百四十一號　大日本山林會○北海道水產雜誌　第十四號　北水協會○日本園藝會雜誌　第五十八號　日本園藝會○地學雜誌　第六十九號　東京地學協會

農科大學々術報告　第二卷第二號　農科大學

帝國博物館天產部動物標本目錄（比較骨格標本ノ部）一册（明治廿七年刊行）　帝國博物館

Boletim da Sociedade Broteriana. X. 1892 (Gardeners' Chronicle. No. 392-394. 1894.

Bulletin de L'Herbier Boissier, Tome II. 1894. No. 7, 8.

Fr. Schmitz, Neue japonische Florideen v. K. Okamura.　理學士　岡村金太郎君

博物標本開業廣告

弊社ハ多年教科書類ヲ始メトシ教育參考書類ノ出版販賣ニ從事シ業務日ニ繁忙ヲ極メ新著ノ藏版月ニ加ハルノ盛況ヲ呈スルニ至レルハ偏ニ江湖諸彥誘掖愛顧ノ致ス所深ク感銘ノ至リニ堪ヘズト雖而モ弊社ノ責務ナヲ苟且ニセズ愼重精勵勉メテ有數大家ノ良著ヲ發刊シ以テ聊我ガ教育社會ヲ裨補シ來レル餘慶ノ致ス所ナルハ敢テ自讃ヲ憚ラズ今般更ニ步足ヲ進メテ弊社ノ教育社會ニ對スル使命ヲ彰著ニシ益江湖ノ希望ニ酬フル爲メ神田錦町三丁目一番地ニ分店ヲ設ケ廣ク博物學研究上必須ノ標本模型等ヲ製造販賣セントシ經營數月事業漸其緒ニ就キ今ヤ世間ニ告白スルノ機運ニ際セリ而メ弊社ノ發賣セントスルハ**動物、植物及ビ鑛物ノ標本、比較解剖用標本、蠟、石膏等ノ模型、顯微鏡用「プレパラート」**等ニシテ精作敢テ舶來品ニ讓ラズ極メテ迅速極メテ廉價ニ調進可仕倘海外其外諸學會ノ需求ニモ應シ本邦特有ノ博物標本ヲ調製可仕計畫ニ候間弊社積年ノ信用ヲ御諒知アリテ多少ニ係ハラズ御下命ノ程希望ノ至リニ堪ヘズ

因ニ云フ多年職ヲ**帝國大學**ニ奉ジテ**博物學標本**ノ製作ニハ獨得ノ技倆ヲ有スルノ聲譽ヲ得タル**菊池松太郎**君ハ今般辭職ノ上弊社ノ招聘ニ應ジ專監督ノ任ニ當ルコトト成リタリ又**飯島博士**弊社ノ此擧ヲ贊成セラレ學術上助力ノ必要アルニ當リテハ其需ニ應ズベシト約セラレタレバ弊社ノ標本ニハ尋常一般ノ侶伴ヲ離レテ殊種特色ノ意匠アリ購求諸君ハ在來品ト比較ノ上自出色ノ妙趣ヲ了得セラルベシ

東京市神田區裏神保町
一番地（電話二一五八番）　**敬業社**

東京市神田區錦町
三丁目一番地　**敬業社博物標本店**

東洋學藝雜誌

第百五十六號

明治廿七年九月廿五日發兌
一冊金十錢郵稅金一錢
六冊前金五十四錢郵稅共

◉論說○溶液論（圖入）承前櫻井錠二○餘震ニ就テ（附圖一面）承前大森房吉○工業教育ニ就テ手島精一○豐公征韓ノ話星野恒○落雷ニ付テ（圖入）水野敏之丞◉雜錄○物理學隨筆錄第四鶴田賢次○當夏ノ落雷表水野敏之丞○皇國の旗中郁秋香◉雜報○新刊地震學雜誌○新初等數學雜誌○幾何學教授法改良會○震災豫防調查會報告○デシヤネル物理學書○デーナ氏○印紙○ソールスベリー侯の演說○壹億萬○英國の工業と獨乙の工業○應用理學○チルデン教授○ボルツマン○ホフマン○クント略傳○光學的物指○水及水溶液ノ壓縮率等◉應問二件

發行所 東京神田裏神保町 **東洋學藝社**

（記事精選）**速記彙報**（紙數増加）

定價郵稅共金十錢◎六冊前金郵稅共五十七錢

速記彙報第五十七冊出づ、日本速記倶樂部常集會速記錄、**中根**貴族院書記官長及**河田**貴族院速記課長の演說速記、石黑五十二田尻稻次郎成瀨隆藏井上毅山根正次江原素六菊池武夫澁澤榮一末松謙澄杉亭二十君の演說抄、講談家の泰斗**桃川如燕**翁の江戸時代の寄席の話、貴衆兩院速記者試驗に關する彙聞、萬國速記術の景況、其他速記彙報特有の記事數十件

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

動物學雜誌

第七拾壹號
明治廿七年九月十五日發兌

◎壹册金拾錢郵稅金壹錢◎六册前金（郵稅共）六拾六錢

目次◎熊本近傍ニ産スル多足類ニ就テ中川久知君◎ハマクリムシニ就テ名和靖君◎やんまノ交尾ニ就テ佐々木忠二郎君◎イギリスにて人類學の祖と稱せらるゝプリッチヤアドの人類論（第六十九號續）坪井正五郎君**雜錄**田舍ノ動物觀察記||第二○くもノ巣ノ發達ニ就テ○陰陽並有ノおはび○大かつを○はやノ脱皮○ハナセセリの移轉に就て◎キマダラセセリの食物○果してイナゴ群生す○上野動物園○本年地方ニ喧スシキ害虫○拂子介○靜岡市ノ蝸牛○三保ノ松原ノ聞見一、二○靜岡縣ニ於ケル Attacus Cynthia, Drury. ノ産地ニ就テ○動物雜誌索引

發賣所 東京神田區裏神保町一番地 **敬業社**

地質學雜誌

第十二號

明治二十七年九月十五日發行一册金十錢
六册前金五十四錢十二册前金一圓○八錢

目次◎論說及報文◎明治廿七年一月十日地震の記理學士大森房吉君**雜錄**◎岩石の出來方（八號の續）小藤文次郎君◎地貌の分類下村成典君**雜報**◎樽前山降灰◎久留米市地震の報告◎火山頂上の火◎新火山岩中の橄欖石◎鐵砂◎萬古不滅の雪◎寒谷◎地獄谷の噴瀛◎發補温泉◎岩菅山◎楷子澤の水晶◎澁嶺近邊の池沼◎大沼池◎高社山◎星川と角間川の峽流◎雜魚川の峽流◎樽川の瀑布◎小菅權現と萬佛山◎苗場山◎昨年の苗場山鳴動に就て◎野澤温泉◎毛無山◎饑歲の年數及び氣候の考◎黃錫鑛の發見に就て◎地學雜誌日本の鑛物産地の評◎新鑛物◎故菊地博士の名譽◎黄水晶◎紅寶石◎角閃石◎出雲國意宇郡內山銅山の鑛物◎越後に於ける輝石の新産地◎「ミルン」氏の功績◎「ベネケ」氏懸賞論文◎神保學士北海道白堊系化石に關する論文◎新刊地震學雜誌◎震災調査會報告第二號◎ウヰリヤム教授死す

發賣所 東京神田區裏神保町一番地 **敬業社**

新刊廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄

全一冊

學名及和名索引附　定價六拾錢

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル**九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄**ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ**修學旅行ヲ企圖スル師範、中學各種學校**ノ教員、生徒諸君ハ各〻一本ヲ購求シテ植物採集ノ案內トセラルベシ

東京神田區裏神保町　**敬業社**
東京日本橋通三丁目　**丸善書店**

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌每月一回發兌一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢
○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マデ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレバ御屆可申候

明治廿七年十月十九日印刷
明治廿七年十月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　植物學雜誌編輯所
東京市神田區裏神保町一番地
賣捌所　敬業社
同所
同　丸善書店
東京市日本橋區通三丁目

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

明治廿一年二月三日内務省許可

Vol. 8.] October 20, 1894. [No. 92.

CONTENTS.

Notes on "Niremomi." By **Mitsutarō Shirai.** 399

Notes on Flowers. By Prof. **Jinzō Matsumura.** 404

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. By **Komajirō Sawada.** 406

Torrubia militaris, Fr. By **Atsushi Yasuda.** 410

Mr. Hisashi Kuroiwa's Collections of Liukiu Plants. (Continued from No. 91). By **Tomitarō Makino.** 411

Studies on the Buckwheat. (Continued from No. 89). By **Tsutsumi Ichimura.** 417

Botanical Excursion to the Northern Part of Japan. By **Seiichirō Ikeno.** . 421

Siphonogams Collected in Mt. Iwate, Province Rikuchū. By **Hitoshi Matsudaira** and **Seiichirō Ikeno.** 423

On the Position of Female Flowers in Reference to Pinus and Quercus thalassica. By **Kenjirō Fujii.** 427

Miscellaneous:— 430

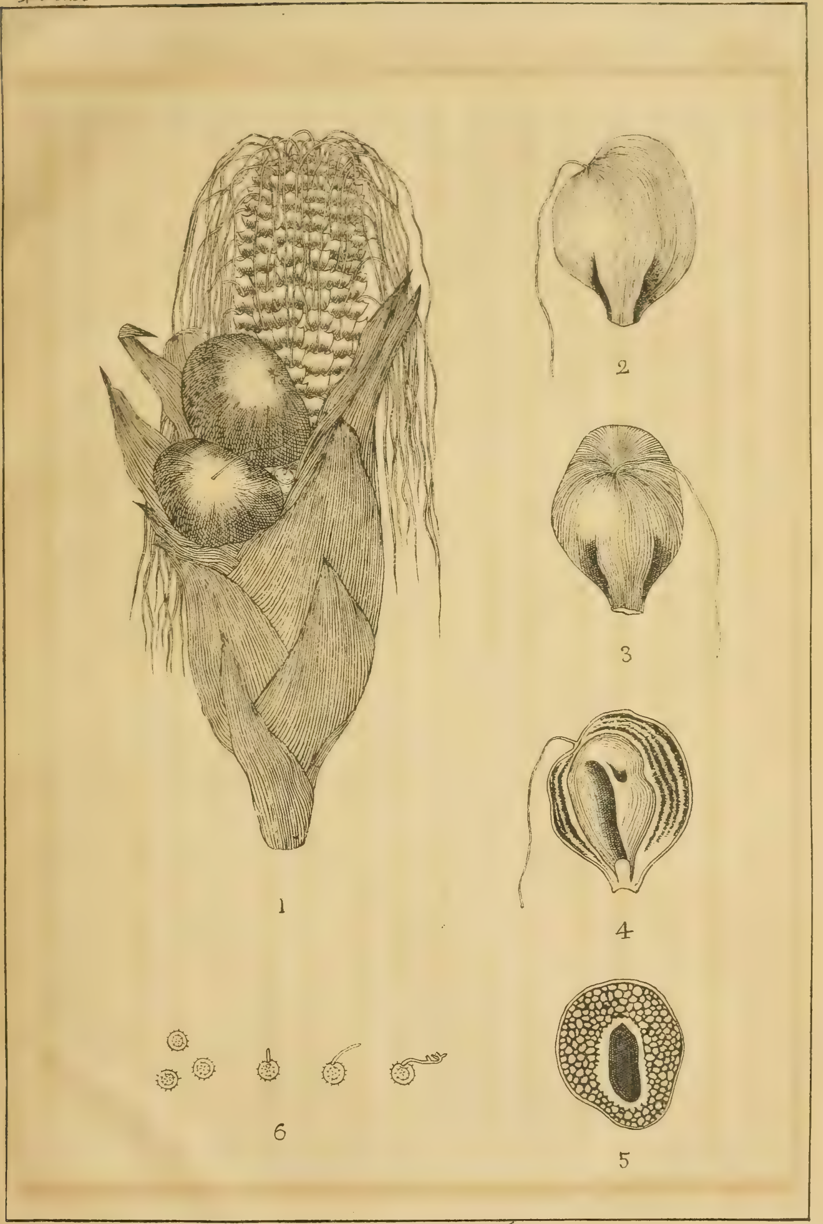
Karyoide.—Origin of Tree-Life.—Short Notes.—Plants of Mt. Hakusan.—Miscellaneous Notes on the Plants of "Yōjōsho-oku."—Proceedings of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the

TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.

No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

第八版 PL. VIII.



USTILAGO MAYDIS, LÉV.
BY ATSUSHI YASUDA.

植物學雜誌第八卷第九十三號 （明治廿七年十一月二十日）

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. VIII. November 20, 1894. No. 93.]

「たうもろこしのおばけ」ニ就テ

安田篤

本年弊園内ニ「たうもろこし」(Zea Mays, L.) ヲ培植セシガ偶九月六日ノ朝陰雨新ニ霽レ陽光樹間ヲ掠メテ來リ余ノ逍遙ヲ促ガスヤ或ハ鳥聲ヲ樹間ニ聞キ或ハ花ヲ指間ニ弄スル際圖ラズモ一本ノ「たうもろこし」ノ病害ニ罹リ其雌花中ニアル二個ノ子房ノ栗實大トナリ頴ヲ押開キテ露出スルヲ見タリ是レ所謂「たうもろこしのおばけ」ニシテ之ガ病害ノ源ヲ爲ス者ハ實ニ Ustilago maydis, Lév. ト名クル寄生菌ナリ

該菌ノ寄主ニ及ボシタル變狀　寄主ハ此病害ノ爲ニ枯死シ雌花ハ可ナリ大トナリシモ不登ニシテ其中央部ニ當リ頗ル膨大シ長サ三「センチメートル」幅二、五「センチメートル」ニ達シタル二個ノ子房ガ上下相並ビテ頴中ヨリ偸出セリ其狀一見子房タルヤ否ヤヲ疑ハシムルニ足ルベキ者アリト雖之ヲ細撿スレバ其怪異ノ變狀ニモ關ラズ長キ一花柱ノ存在スルニ由テ外觀上ヨリ其子房タルヿヲ了知シ得ベシ凡ソ花柱ハ健全ナル子房ニ在テハ其絕頂ヨリ出ヅル者ナルガ此病害ヲ受ケタル子房ニ於テハ外壁ノ成長遙ニ內壁ノ成長ヨリモ速ナルガ爲花柱ハ自ラ下方ニ轉移シタル觀ヲ呈シ內方ニ偏スルニ至レリ此子房ハ白色ヲ帶ビ菌ノ成熟スルヤ子房ノ表皮ハ遂ニ破裂シテ黑褐色ノ胞子ヲ吐ク

「たうもろこしのおばけ」ニ就テ

「たうもろこしのおばけ」ニ就テ

該子房ノ解剖　先ツ之ヲ縱斷スレバ其外壁ハ頗ル厚クシテ七「ミリメートル」ニ達スレ𪜈內壁ハ四「ミリメートル」ニ過ギズ基底ニハ同ジク膨大シタル胚珠アリテ其長サ三「ミリメートル」其幅二「ミリメートル」アリ而シテ其他ノ子房內ノ部分ハ大ナル空虛トナル該菌胞子ノ寄主ニ宿ルヤ子房ノ表面ニ平行シテ外壁ニハ四層內壁ニハ二層若クハ三層ヲ爲シ以テ宛然黑線ト見ユベキ塊列ヲ作ル次ニ子房ヲ橫斷スレバ中央ニ內外ニ長キ空處アリ左右ノ壁ハ寧ロ外壁ヨリ厚クシテ平均八、五「ミリメートル」ニ達セリ胞子ノ壁中ニアルヤ恰モ神經ノ橫斷面ニ髣髴シ軸索ヲ有スル神經纖維ハ子房壁內ノ組織ニ當リ之ヲ圍繞スル結締組織ハ胞子ノ團塊ニ當レリ此ノ如ク此菌ハ子房ノ組織ヲ弛緩セシメ隨テ破レ易カラシム

胞子　此胞子ハ Dauerspore ニシテ一細胞ヨリ成リ球狀ヲ呈シ全面ニ小ナル刺ヲ有シ黑褐色ヲ帶ブ共直徑ハ〇、〇一「ミリメートル」アリテ外皮甚厚シ此胞子ヲ取リテ水ニ浸シ或時間ノ後之ヲ顯微鏡下ニテ窺ヘバ胞子ノ外皮ハ破レテ發芽ス之ヲ前菌糸（Promycelium）ト名ク前菌糸ノ成長スルニ從ヒ發芽法ニ由テ數多ノ「こにぢわ」ヲ作ル之ヲ Sporidien ト名ク是ハ圓柱狀ヲ呈ス而シテ此 Sporidien ガ始メテ繁殖ノ用ヲ爲スナリ故ニ吾人ハ玆ニ世代交環ノ一例ヲ見ル Sporidien ガ寄主ニ達スレバ發芽シ菌糸ハ其表皮組織ヲ穿チテ入リ之ヨリ「ぱれんきま」組織內ニ蔓延ス菌糸ハ殆四「ミクロミリメートル」ノ太サヲ有ス此菌ハ通常若キ部分ヲ侵ス者ニシテ之ニ寄生セラルレバ寄主ハ早晚枯死スルヲ免レズ其子房壁中ニ胞子ヲ作ラントスルヤ菌糸ヨリ先ヅ粘糸ヲ生ジ其中ニ縱ニ一列ヲ爲シタル胞子ヲ排列スルナリ胞子ハ久シク乾燥ニ堪ユル者ニシテ「ホフマン」氏ノ實驗ニ依レバ二年ヲ經ルモ發芽シ加之七八年ヲ經ルモ猶能ク其發芽力ヲ失ハズト云ヘリ

該菌ハ菌類中 Mycomyceten 亞門ノ Ustilagineen科ニ屬ス凡ソ此科ノ菌ヲ總稱シテ獨逸ニテハ Brandpilze ト

云ヒ之ガ爲ニ引起サレタル病害ヲ Brandkrankheiten ト云フ十八世紀ノ終マデハ此病害ノ原因ヲ知ル者ナカリシガ千八百一年ニ至リ Persoon 氏ガ始メテ菌類ノ仕業ナルヿヲ唱ヘ千八百五十一年ニ至リ Tulasne 氏ノ撿究ノ結果終ニ Brandpilze ノ胞子ハ能ク發芽シ之ニテ繁殖スルヿヲ知ルニ至レリ

第八版圖解

(1) 「たうもろこし」ノ雌花ノ病害ニ罹レルモノ
(2) 「たうもろこしのおばけ」ノ側面
(3) 同上ヲ內側ヨリ見タルモノ
(4) 同上ノ縱斷面
(5) 同上ノ橫斷面
(6) 胞子並ニ其發芽セルモノ

松ノみどりノ運動ニ就テ（第九十號ノ續キ）

藤井健次郎

余ハ本雜誌第九十號ニ於テ昨年五月九日以後ノ松ノみどりノ運動觀察ノ日記ヲ紛失セリト云ヒ更ニ今年ノ觀察ヲ記セリ然ルニ其後前ニ紛失セシ日記ヲ見出シタルガ故ニ此運動ノ性質源因ニ論及スル前ニ此ニ再度昨年五月九日以後ノ記事ヲ繼續スベシ

A. 五月十日午前十一時三十分曇多シ温度攝氏二十二風弱シ風南、南西みどり全長稍北、北、北東ニ屈垂シタレモ概觀ハ直立ニ近シ

B.　仝午前十一時二十五分雲散在大陽輝キ温度攝氏二十二風南、南西みどり頂端少シク南、南、南西（風上ニ向フ）ニ屈垂シ全長風ノ爲メニ押サル即チ北、北西ニ傾ク

此時全園ノ模様Aト同様ナリ

A.　仝午後一時三十分天曇リ雨模様トナレリ風南、南西みどりニハ見ルベキ變動ナシ

B.　仝日仝時雨模様ニシテ風吹キ續キ風南、南西みどり屈垂ノ度僅カニ増加セリ

A.　仝日午後四時五十分曇天ニシテ暗ク雨模様温度攝氏十九・五風稍強クみどりノ曲度ハ著シク増加セリ

周圍ノ模様之レト一致ス

B.　仝日仝時外園ハAニ於ケルト等シクみどり屈垂ノ方向變動ナシトイヘ𪜈曲度著シク増加セリ

周圍ノ模様亦之レト一致ス

A.　五月十一日午後四時五分晴天ニシテ大陽輝ク然レ𪜈空氣ノ濕度ハ大ナルガ如シたんぽぽノ花皆閉鎖セリ

温度攝氏二十一風弱風北、北、北西、みどり曲度増加方向北、北、北西全園ノ模様多ク之レニ反セリ

B.　仝日午後四時温度攝氏二十四北風其他ノ外園ハAニ於ケルト等シみどりハ著シキ曲度ヲ呈シ其屈垂ノ方向南、南、南西

全園ノ模様亦其曲度及方向ニ於テ一致ス

A.　仝日午後六時四十分大陽既ニ沒シ温度攝氏十六微風北、北東、みどり屈垂ノ方向變動ナシ曲度著シク増加セリ

全園ノ模様亦多ク之レト一致ス

B. 全日午後六時四十五分温度攝氏十五。八其他ノ外圍ハAニ於ケルト等シみどり屈垂ノ方向南曲度少シク増加セリ

全圓ノ模樣之レト一致セズ

A. 五月十二日午前八時晴天空氣ハ多ク濕氣ヲ帶ビタルガ如シたんぽぽノ花開キ風ナシみどり屈垂ノ方向變ナ動シ曲度増加

全圓ノ模樣之レト一致セズ

B. 全日全時外圍ハAニ於ケルト等シみどり曲度大屈垂ノ方向南、南、南西頂端ハ北、北東ニ屈セリ

B. 樹ノ西、北西ヨリ右ノ狀ヲ寫眞ス

B.(?) 全日午後三時天少シク曇リ大陽明空氣濕氣ヲ帶ビ風吹キ續キたんぽぽ開キみどり全長ハ風ニ押サレ頂端ハ皆北、北、北東ニ屈垂セリ

A. 全日全時外圍ハ右ノ記事ニ等シクみどり屈垂ノ方向變動ナシ曲度ハ稍減ジタルモノヽ如シ

A. 全日午後十時十五分天晴レ星明ナリ温度攝氏十四風ナシみどり屈垂ノ方向前ニ正反シ曲度著シ日沒ノ頃殆ンド直立ナリシモノ今ハ前ト反對ノ方向ニ著シキ曲度ヲ呈セリ

B 全日全時外圍Aト等シみどり屈垂ノ方向ニモ曲度ニモ著シキ變動ナシ

A. 五月十三日午前十一時晴天風南たんぽぽノ花多クハ閉ザセリみどり屈垂ノ方向變動ナシ曲度減少

B. 全日全時外圍Aニ於ケルト等シみどり曲度減少其他變動ナシ

A.B. 全日午時温度攝氏二十五微風みどり屈垂ノ方向變動ナシ曲度著シク減少シ中ニハ直立セルモアリ

全圓ノ摸樣亦直立ニ近シ

A. 仝日午後六時三十五分太陽既ニ沒シ雲散在温度攝氏二十風ナシみどり屈垂ノ方向南東曲度小ナリ

B. 仝日午後六時三十分温度不詳其他ノ外圍Aニ於ケルト等シみどりノ全觀樹ノ中心ニ向ヘル傾キアリ去レ𪜈前ニ殆ンド直立ナリシモノハ南、南、南西ニ向ヒ其他ハ南ニ向ヘリ殊ニみどりノ頂端ニ於テ然リ全圍ノ觀ハ概シテ南方ノ傾向ヲ始メタリ去レ𪜈二三ノ樹ニ於テハ全ク直立ナリ

A. 五月十四日午前九時三十分太陽輝キ雲散在風殆ンドナシたんぽぽノ花皆開ケリみどり直立ナルアリ北方ニ屈垂セルアリ

B. 仝日仝時仝外圍凡テノみどりノ頂端ハ多少北方ニ傾ケリ然レトモ概觀ハみどり全長樹ノ中心（主幹）ニ向ヘリ

（未完）

百花雜記

松村任三

(一)イヌツゲ　此樹ニ雄本雌本アリテ相別ル雄本ハ葉腋ニ數梗ヲ叢生シ或ハ長梗ヲ抽キ分叉シテ四瓣四雄蕋ノ淡綠色ナル小花ヲ聚繖狀ニ綴ル黄葯アリ幼時內ニカヾム花心ニ一個ノ不發雌蕋アリ雌本ハ葉腋ニ一條ノ短梗ヲ抽テ枝ヲ分タス雄花ト同ク雌花モ淡綠色四瓣ナリ花心ニ上位ノ一雌蕋アリ子房綠色平滑ニシテ其狀卵圓、頭上柱ナク直ニ柱頭ヲ戴ク其狀微ニ四裂ノ樣ヲ呈ス雌蕋ヲ繞ラスニ短キ四雄蕋ヲ以テス白葯白糸皆花瓣ニ互生ナリ萼アリ四出ニシテ短、花ハ合瓣ニシテ離瓣ニアラズ綠枝ニ有柄鋸齒アル常綠ノ小葉ヲ互生ス其質厚剛六月上旬花アリ

一ウメモドキ　上ト同屬ノ落葉灌木ナリ亦雌雄幹ヲ異ニス雌本ハ細鋸齒アル中大ノ葉ヲ互生シ其腋ニ一條ノ

短梗ヲ抽キ或ハ之ヲ三叉シテ淡紅色四瓣或ハ五瓣ノ小花ヲ開ク四雄蕋或ハ五雄蕋アリ短クシテ花瓣ト互生ス白糸白葯ナリ萼アリ四出或ハ五出ニシテ短ク頭尖ル花心一雌蕋アリ卵圓狀ニシテ綠色平滑ナリ柱ヲ缺ク六月上旬花アリ

一シナノガキ　長梗ノ葉腋一花ヲ生スルアリ或ハ二花ヲ並生スルアリ無缺ノ大葉ハ其背粉綠色、花冠時ニ六裂ノモノアリト雖モ大抵ハ四裂ノ瓣ヲナス雄蕋十一莖アリ花心ニ一雌蕋ヲ居ス三裂乃至五裂ノ柱アリ然レ𪜈四裂ノモノヲ正体トス花色白ニ近クシテ黄色ヲ帶ブ花梗ハ尋常ノ柿ニ比スレバ差〻短ク殆ト之無キノ観アリ六月上旬花アリ

一カキ　一樹ニシテ雌雄ノ兩花ヲ雜居スルアリ或ハ兩花幹ヲ異ニスルアリテ一定セズ雌花ハ雄花ヨリモ差〻大ニシテ無缺ノ大葉腋ニ一個ヲ生ス萼綠色ニシテ四裂濶大、淡黄白色様ノ花冠モ亦四裂シ其瓣ハ熟シテ外反ス無効ノ雄蕋十二莖許アリ花冠ノ筒ニ生ス糸短ク葯長クシテ尖リ毛ヲ生ス花心ニ上位ノ一雌蕋ヲ居ス綠色平滑ニシテ四柱ヲ戴ク其頭各二三ニ分裂スルノ観ヲ呈ス雄花ハ梗ヲ分叉シテ三四花ヲ簇生ス其雄蕋ノ多キ二十一莖ヲ數フルニ至ルアリ花心ニ一個不發ノ雌蕋アリ甚小ニシテ四柱アルノ狀ヲ存ス五月下旬花アリ

一エゴノキ　短枝毎頭長梗ヲ分テ五六ノ白花ヲ下垂ス淡綠色ノ萼ハコップ狀ヲナシテ其邊縁ニ著キ裂片アルヲ見ズ合瓣ノ花冠ハ深ク五裂シ其基底ヨリ十雄蕋ヲ生ス白糸ハ黄色ノ長葯ヲ着ケ皆內ニ向テ開綻花粉ヲ吐ク花心一雌蕋アリ白色ノ一柱ヲ抽ク其頭分レス子房ハ半下位ナリ葉ハ卵圓形ニシテ鋸齒アリ五月下旬ニ花アリ

一ウツギ　粗糙ナル對生葉アルヲ以テ顯ハル其形長楕圓ニシテ邊緣ニ細刺アリ枝頭梗ヲ分テ五瓣ノ白花ヲ房狀ニ綴ル蕚鐘狀ニシテ銳尖ナラザル五裂片アリ花瓣モ五、其幅狹シ十雄蕋アリ長短均シカラズ五莖ハ長ク五莖ハ短シ白糸皆匾平ニシテ其末箭頭狀ヲナシ黃葯ヲ着ク子房ハ下位ニシテ頭ニ黃色ノ花盤ヲ戴キ其中央ニ長キ三柱ヲ抽ク五月下旬花アリ

一サツキツヽジ　常綠ノ灌木ナリ枝頭、葉ヲ簇生スルノ處新枝ト共ニ一梗一花ヲ開ク赤色「キリシマ」ヨリ淡クシテ花頗ル大ナリ蕚五裂鈍頭ニシテ緣毛アリ花梗ニモ亦毛アリ花冠鐘狀樣、上ノ三瓣ト下ノ二瓣ト彩色ノ濃淡缺刻ノ深淺自ラ趣ヲ異ニス上瓣ニハ赤點ヲ滿布スレ𪜈下瓣ハ然ラズ五雄蕋アリ糸紅色ニシテ葯暗紫色ナリ花心ニ紅色ノ一柱アリ雄蕋ヨリモ長シ上位ノ子房ハ白毛ヲ生ス五月下旬ヨリ花アリ

一アブラギリ　粗大ノ枝頭、三岐ヲ有シ心臟形ヲナセル長柄ノ大葉ヲ冠シ其末ニ花梗ヲ分チ大ナル五瓣ノ白花ヲ綴ル花衰ヒテ瓣本紅色ニ變ス頗ル美ナリ雄花ニハ八雄蕋或ハ十雄蕋アリ其長短均シカラズ外位ノ五莖ハ短ク內位ノ五莖或ハ三莖ハ長シ葯黃色ナリ蕚二裂ス淡綠色ニシテ平滑ナリ蕚ハ芽時ニ在テ其外面ニ著キ五線條アリ雌花ハ今之ヲ缺ク因テ記サズ六月上旬花アリ

一ニクケイ　梢頭葉腋ニ長梗ヲ抽キ淡綠色或ハ淡黃色樣六片ノ花ヲ聚繖狀ニ綴ル此類中花ノ大ナルモノトス瓣頭銳ナラズ九雄蕋アリ外位ノ六個ハ腺ヲ有セスト雖モ內位ノ三個ハ其糸ノ中央ニ於テ黃色ノ二腺ヲ附着ス葯ハ四室ニシテ有瓣裂開ナリ雌蕋ノ周圍ニ當テ更ニ三莖ノ有柄腺アリ花心ニ一雌蕋アリ其子房淡綠色平滑ニシテ扁平樣ノ一柱ヲ具ス頭分レスト雖モ著大ナリ六月上旬花アリ

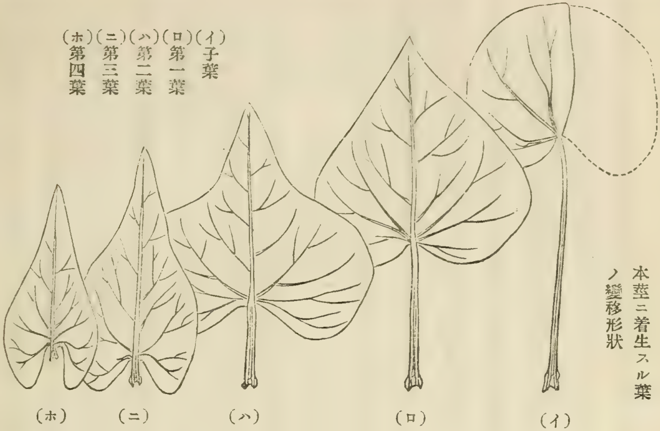
蕎麥ノ研究一斑（承前）

市村　塘

(7)葉ノ概論　開花正ニ酣ナル蕎麥ノ數株ヲ採リ先ツ其本莖ヨリ直出スルトコロノ葉ノ總數幾何アルヤヲ檢シタルニ何レモ大抵六葉ヲ有シ内最下ノ二葉ハ子葉ナリキ凡テ子葉ハ充分生長シタル後ト雖モ自ラ他ノ葉ニ比シテ其外形ヲ異ニスルハ顯花植物一般ノ通則ナルガ如シ而シテ蕎麥ニ於テ殊ニ著シキ變形子葉ヲ見ルナリ是果シテ何ニ原因スルカ予以爲ラク多分蛋白質澱粉等ノ養分ノ種子中ニ專占スル場所ヲシテ可成多カラシメンガ爲子葉ヲ扁小トナシ以テ所謂 Economy of Space ヲナシタルニ歸セザル可カラズト況ンヤ第一圖ノ（イ）ニ見ルガ如ク二子葉相合シ始メテ他ノ一葉ノ大サニ達スルノミナラズ其形狀モ頗ル後者ニ類似スルニ於テオヤ因テ余ハ蕎麥ノ二子葉ハ一葉ヲ割半シ之ヲ種子内ノ養分中ニ摺込ミ以テ場所ノ經濟ヲナシタルモノト見做スモ敢テ大過ニアラザルベシト信ズルナリ

加之葉ハ常ニ互生ナレ𪜈子葉ノミハ對生ナリ然リト雖𪜈甚ダ稀ニ第一葉第二葉ガ對生ヲナスヿアリ葉ハ葉柄葉片ノ二部ヨリ成リ其莖ニ付着スル柄部ヲ稱シテ葉柄ト云フ葉柄ハ莖ノ下方ヨリ上方ニ至ルニ從ヒ次第ニ短縮スルモノニテ第一葉ノ如キハ四、乃至六セ、メ、ノ長サアル葉柄ヲ有スレ𪜈最頂葉ノ第四葉ノ如キハ殆ンド無柄ニシテ葉片直ニ莖ニ抱着ス而シテ叉葉巾ト葉長ノ比及ビ葉ノ先端ノ角度ノ如キモ漸次ニ變移アルヿハ圖ヲ見テ知ルベシ如斯ク葉柄ニ漸次ノ短縮アルハ凡テノ葉片ヲシテ日光ニ對シ同等ノ恩惠ヲ蒙ラシメンガ爲ナラズンバアラズ

蕎麥ニアリテハ葉柄ノ莖ヨリ出ヅルトコロニ托葉ヲ具ヘズト雖モ別ニ鞘葉（チクリア）ト稱スルモノアリテ葉柄ヨリ起リ本莖幷ニ其間ヨリ出ヅル副莖ヲ被抱ス之ハ半透明ナル紙樣ノ苞ニシテルーペヲ以テ見レバ其基底ニ小毛腺ノ



本莖ニ着生スル葉ノ變移形狀

叢生スルヲ認知スベシ鞘葉ハ之ヲ發育上ヨリ考フル𪜈ハ葉柄ノ莖ニ接スル溝滔ノ兩邊ヨリ薄翅ヲ生ジ漸ク生長シテ遂ニ莖ノ後方ニ於テ相癒合シ以テ莖ヲ被抱シタルモノナラン歟然ラバ則チ托葉ノ變形ト見做スモ敢テ不可ナカラン

葉柄ハ莖ノ如ク稍〻紅色ヲ帶ブト雖モ葉片ハ完ク綠色トス唯葉脉ハ多少紅色ヲ含ムノ氣味アルニ過ギズ吾人今若シ莖葉柄葉片ヲ通シテ縱斷面ヲ作ル𪜈ハ葉片ノ原本組織中ニ入込メル緯管束ハ葉柄ヨリ來リ葉柄ノ緯管束ハ本莖ヨリ分枝スルモノナルヿ明確ナルベシ左レバ葉柄ト云ヒ葉脉ト云ヒ皆莖ノ分枝ニ外ナラザルガ故ニ莖ニ紅色素ヲ含ム以上ハ其分枝モ亦之ヲ含マザルノ理ナシ夫ノ葉面ヲ熟視セバ罔狀條線アルヲ注意セン是即チ葉脉ニシテ其中央ヲ縱走スル主葉脉ヲ中肋トナス中肋ヨリシテ葉脉ノ分枝狀態ハ表皮及ビ綠色原本組織部ヲ剝去スレバ頗ル精細ニ見ユルモノニテ一目其美妙ニ驚カザル人ナカルベシ

葉片ハ其形狀「形似蕎葉」典籍便覽「葉は三角」草木圖譜 "Leaves triangular cordate acute" (Flora of Brit. India.) "Leaves ivy shaped" (Morton.) "foliis cordatis lobis obtusis vel rotundatis"(De Cand.) 概シテ圖ニ示スガ如シ其表面ニ往々赤褐色ノ斑點ヲ見ルコトアリ其ノ斑點タルヤ圓形ニシテ數層ノ輪ヲ畫ク是ハ一種ノ寄生微菌パクシニア、(Puccinia Fagopyri, Bar.) ノ所爲ナランガ尙二三ノ種類モ寄生ヲナスヿ確實ナリ其他殊ニ葉ノ裏面ヨリシテ莖部花部ニ棲息スル小蟲アリ是一種ノあぶらむし (Aphides sp.) ヲシテ爲ニ植物ノ萎枯ヲ引起スヿアレ𪜈亦授精作用媒介ニ就テ多少ノ利益ヲナスト云フ一利一害ハ理ノ當然水能ク舟ヲ浮ベ亦能ク之ヲ覆ヘス酒能ク人ヲ樂マシメ亦能ク渠ヲ害ス何ゾ異ナルトコロアランヤ

(8)花ノ概論　蕎麥ノ花部ハ無限花序ノ總狀花ニシテ莖ノ頂上或ハ腋側ヨリ長花梗ヲ出シ分枝シテ各一花ヲ其頂端ニ付ス換言スレバ數多ノ花相密接シテ複總花ヲ形成スルモノトス而シテ其花梗ハ常ニ結節ヲ有スルヿナシ試ニ一花ヲ採リ熟〻見廻ハスニ其花梗ニ接着スル部分ヨリ綠色ノ蕚ヲ出サズシテ直ニ微赤色ヲ帶ベル花瓣樣ノモノヲ出ス其數五乃至七通常ハ五片アルヲ知ルベシ草木圖說ニ「花無蕚五瓣卵圓白色」トアレ𪜈其實花瓣ニアラズシテ花瓣ト、蕚トヲ兼帶シタル花蓋ト稱スルモノ或ハ單ニ蕚ト見做スベキモノトス色ハ花瓣ノ如キモ其發育ヲ見レバ蕚ノ位置ヨリ起ルモノタルヲ承認スルナリ其五片ハ基底ニ於テ相癒着シ裏面稍〻綠色ヲ呈シ尙幾何カ蕚ノ殊色ヲ遺存ス各片長サ概ネ六ミ、メ、巾三ミ、メ、アリ從フテ直徑十ミ、メ、位ノ小花ニ過ギズ玆ニ蕎麥ニハ他ノ植物ニ於テ餘リ見ザル面白キヿアリ何ゾヤ曰ク他ナシ該植物ハ落花セズシテ終始俗稱花瓣ガ種子ヲ結ブニ至ル迄モ依然着存スルヿ是ナリ先頃著名ナル歌人ガ此事ニ氣付カズシテ梅櫻ノ如ク落花スルモノト心得ラレタリケン秋時雨ト云フ歌題ニ對シ

「秋更けて蕎麥生花ちる朝風にしくれそめけり山のへの里」

ノ一句ヲ詠シ或老農ノ注意ヲ受ケ其誤謬ヲ悟リ厚ク謝辭ヲ述ベラレタリトナン一体農家植物家ハ御職掌丈ニ能ク其實地實情ヲ知ルモ門外漢ノ之ヲ知ラザルハ亦無理ナラヌコト謂フベシ

（未　完）

◆

日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

性狀　最上品即チ顆粒狀阿魏（Asa foetida in granis）ハ大小種々ノ不整圓形ノ顆粒ヲ爲シ脂肪樣ノ光澤ヲ帶ヒ直徑三「センチメートル」ニ至ルモノアリ其新鮮ナルモノハ類白色ヲ呈シ柔軟ニシテ搓揑性ヲ有スト雖𪜈時ヲ經ルニ從ヒ硬固ト爲リ類赤色ヲ呈シ紫色ト爲リ終ニ褐色ニ變ズ破碎面ハ白色ヲ呈スト雖𪜈大氣ニ觸ルヽトキハ直ニ鮮赤色ト爲リ終ニ褐色ニ變ズ改正日本藥局方ニ相粘合シ或ハ箇々分離シ」トアルハ此顆粒狀阿魏ヲ指スモノナリ

塊狀阿魏（Asa foetida in massis）ハ坊間ノ普通品ニシテ多少粘合セル不整ノ塊片ヲ爲シ暗色ヲ帶ヒ稍々淡明ナル顆粒狀阿魏ヲ包有スルコトアリ顆粒ノ含量愈々多ケレバ愈々上等品トス改正日本藥局方ニ或ハ暗色塊中ニ包藏セル顆粒ヨリ成レル護謨樹脂」トアルハ即チ之ヲ指示スルモノナリ又下等品ハ往々根ノ截片、莖、砂石等種々ノ不潔物ヲ混淆スルコト七十「ペルセント」ノ多量ニ至ルモノアリ

各種ノ阿魏ハ孟買港ニ輸シ更ニ歐羅巴諸國ニ輸出スト雖𪜈純粹ナル最上等品ハ其量些少ニシテ本國ニ於テ貴重ノ香味料トシテ賞用シ價ヒ極メテ貴ク富家ニアラザレバ之ヲ購フコト能ハズ曾テ他國ニ輸出セシコト無シト云フ而シテ孟買港ヨリ輸出スルモノハ波斯南部ノ產トス

阿魏ハ不快ノ蒜臭ヲ有シ其味ハ芳香性苛烈ニシテ苦ク久シク稽留ス而シテ此味ハ樹脂ニ基因シ臭氣ハ揮發油ニ係ルモノトス

阿魏ニ水ヲ加ヘ蒸餾シテ揮發油分ヲ除去スルトキハ其不快ナル蒜臭ヲ消失シ其殘渣ハ佳快安息香樣ノ芳香ヲ發出ス殊ニ之ヲ熱スレハ顯著ナリ Flückiger 氏ノ說ニ據レバ印度地方ニ於テ香味料トシ貴重スルモノハ樹脂ヲ含ムコト十、八「ペルセント」ニシテ護謨ヲ有スルコト四十七、八「ペルセント」ニ至ルト

阿魏ハ酒精ニ水ヨリモ稍々輙ク溶解ス改正日本藥局方ニ云阿魏ハ相粘合シ或ハ箇々分離シ或ハ暗色塊中ニ包藏セル顆粒ヨリ成レル護謨樹脂ニシテ蒜樣ノ臭味ヲ有シ其新破碎面ハ類白色ニシテ微ニ紅色ノ虹彩ヲ帶ビ外面ハ灰色、紫色或ハ類褐色ナリ

本品ニ水ヲ加ヘテ研磨スレバ白色ノ乳樣液トナリ之ニ那篤倫滷液ヲ加フレバ黃色ヲ呈ス

本品ニ鹽酸ヲ加フルニ泡沸セス數時間之ヲ放置スルニ類赤色ヲ呈ス可カラス又本品ヲ灰化スルモ百分ニ付キ十分以上ノ固性物ヲ殘留ス可カラス

本品ハ寒冷ニ依テ固結セシメ粉末トナシ篩過シテ不潔物ヲ除去シ用ニ供スヘシ」トアリ又遠西醫方名物考ニ云是レハ百兒西亞等ノ熱國ニ產スル草根ノ脂液ヲ取リ曝乾メ凝固シ大小ノ碎塊ヲ成ス者ナリ、上品ハ黃色ニメ赤色或ハ赭色ヲ帶ヒ是レニ白色若クハ帶赤色ニメ透亮光澤アル顆粒、間錯シ或ハ淡紫ノ斑アリ、乾ケ𪜈粘潤アリ嚼メバ齒ニ粘着ス暫ク手ニ握レバ軟ナルヿ蠟ノ如シ、然レ𪜈年ヲ經レハ稍固クメ赭黑色ヲ帶ブ其氣蒜ノ如ク甚タ竄透メ嘔噦スベキ烈臭アリ、火ニ投スレバ臭氣殊ニ甚タシ、其臭烈キホド愈〻上品トス固封シ貯レハ數年ヲ經レ𪜈臭氣及ヒ効力減セズ、味辛苦、舌ニ鑽透ス」此物黑色ニメ汚物ヲ雜ヘ或ハ軟ニメ脂膏ノ

如ク或ハ枯燥〆粘潤ナク臭氣微キハ藥用トセス○或ハ白色ノ華爾斯類ニ蒜ノ絞汁ヲ加ヘ搗テ乾シ下品ノ阿魏ニ雜ヘ僞ル者アリ是レハ疏脆ニ〆碎ケ易ク光滑多ク燒酒ニ浸セハ盡ク溶化スルヲ以テ知ルヘシ○此草ノ生汁ハ臭氣極メテ甚タシ生汁一錢ノ臭氣ハ乾固ノ者百北ヨリ甚タシト云○其質ハ護謨華爾斯ナリ、大約華爾斯二分護謨三分アリ、故ニ燒酒ニ浸セハ溶化スレ𪜈渣脚多シ、水ニハ其護謨質盡トク溶化ス、醱酢ニ浸セハ盡トク乳白色ノ液トナル、油ニ浸セハ少許溶化ス、此レ皆護謨質多キノ徵ナリ、又精微ノ油及ヒ揮發鹽アリ○此脂液ヲ取ル草ハ「ヘリユラ、アッサフーチタ」羅「ペルシアーン、ホルストック」蘭ト名ツク、百兒西亞、西里亞（共ニ亞細亞洲ノ國名）其他印度地方ニ產ス、初メ根ヨリ叢生シ長一尺五寸許粗糙ニ〆形、芍藥ノ如ク質ハ刺發斯（ラハス）葉ニ似タリ葉ノ梗大サ指ノ如ク殆ント圓ク是ヨリ小梗ヲ分チ小葉生ス、其後莖ヲ抽キ年ヲ經レバ高サ五六尺許、太サ腕ノ如シ、中實シテ髓充ツ、莖頭ニ大ナル繖花ヲ開キ子ヲ結フ、此草生〆四年ヲ經レハ根長五尺許太サ人脚ノ如ク或ハ椏ヲ爲ス、外面栗殼色、裏白色ニ〆蘿蔔ノ如シ、是ニ乳白色ノ汁多ク、蒜臭極メテ烈シ、根年ヲ經ルニ隨ヒ其汁多ク且ツ粘調ナリ、氣ニ觸テ自ラ凝固シ黃褐色トナル、此草多年枯レス、土人初夏ノ頃、莖葉ヲ截去リ、根ニ土ヲ被フヿ一月餘、復新芽ヲ生スルヲ候ヒ根ノ頂ヲ截斷スレハ白汁滿溢シ大陽ノ暖氣ニテ自カラ乾固ス、是ヲ取リ復其頂ヲ截斷〆其汁ヲ乾固セシメ取ル、斯ノ如ク逐次ニ截リ取テ終ニ少シモ其汁ナキニ至ル、是ヲ取リ曝乾〆凝固セシム、土人是ヲ飲膳調理ニ加ルヿ葱蒜ノ如シト云」トアリ

實性反應　日本藥局方注解ニ云阿魏ハ水ニ研和スレハ白色乳劑樣溷濁液トナリ之ニ那篤倫滷液或ハ安母尼亞ヲ加フレハ黃色ヲ呈ス是レ阿魏ニ稍々特異ト稱ス可キ反應トス

本品ヲ粉碎スルニハ安母尼亞屈謨ノ條ニ揭クル方法ニ由ルベシ」トアリ

成分　阿魏ヲ水ト共ニ蒸餾スレハ平均六乃至九「ペルセント」ノ揮發油ヲ生ス其新鮮ナルモノヨリハ一層多量ヲ製シ得ヘシ此揮發油ハ窒素ヲ含ムヿ無ク大約廿五「ペルセント」ノ硫黄ヲ有シ阿魏ニ固有ノ惡臭ヲ保有ス揮發油ニ酒精那篤留謨ヲ加ヘテ煑沸スレハ硫化那篤留謨ヲ生ス其殘滓ヲ水ニ溶解シ之ニ「ニトロプロシイド」那篤留謨（Natrium nitroprosid）ヲ加フレハ紫色ヲ呈ス

樹脂ハ七十乃至七十一、四「ペルセント」ヲ含有ス此樹脂ニ苛性加里ヲ加ヘテ溶解セシムルトキハ「レソルチン」（Resortin）ヲ生ス又樹脂ヲ乾餾スレハ綠色、藍色及ヒ褐色ナル三種ノ油ノ傍ラ「アムベロヘエロン」（Umbelliferon）ナル結晶性化合体ヲ生ス此化合体ハ繖形科植物ノ樹脂ヲ乾餾スレハ常ニ得ル所ノモノナリ

護謨ハ二十乃至三十「ペルセント」ヲ有ス此護謨ハ亞拉毘亞護謨ト其本性ヲ異ニシ水ニハ只僅ニ溶解ス其他「フエルラ」酸（Ferulasanre $C_6H_3(OCH_3)(OH)CH:CH-CooH$）ヲ含有ス此酸ヲ製スルニハ阿魏ニ酒精ヲ加ヘテ煑沸シテ濾過シ其濾液ニ鉛糖ノ酒精溶液ヲ加フルトキハ「フエルラ」酸ハ鉛ト抱合シテ一種ノ鹽類トナリテ沈澱ス此沈澱ヲ取リテ洗浣シ稀硫酸ヲ加ヘテ分解スレバ游離ノ「フエルラ」酸ヲ得ルナリ此酸ハ「オイゲチン」酸（Eugetinsaeure $C_6H_3(C_3H_5)(OH)(OCH_3)-CooH.$）ト同基ニシテ極メテ類似ス又此酸ハ桂皮酸（Zinntsaeure $C_6H_5-CH-CH-CooH$）ト親密ナル關係ヲ有ス

阿魏ヲ水ト共ニ蒸餾スレバ其惡臭ヲ消失シ芳香ナル殘滓ヲ止ム此香氣ハ「ワニリン」（Vanillin）ヲ含有スルニ基因ス即チ Methylcrotocatechualolehyd（$C_6H_3CHO-(OCH_3)(OH)$）トス

純良ノ阿魏ハ之ヲ燃燒スルモ灰分ヲ留ムルコト只僅ニ一「ペルセント」ニ過キスト雖𪜈坊間ニ鬻賣スルモノハ十「ペルセント」ノ灰分ヲ有ス或ハ猶ホ遙ニ多量ヲ有スルモノアリ又粗品ニ至リテハ多ク石膏ヲ含有ス

試驗　日本藥局方注解ニ云(第一)本品ニ鹽酸ヲ加フルニ泡沸セス數時間之ヲ放置スルニ類赤色ヲ呈ス可ラス」之ニ由テ沸騰スルハ炭酸加爾叟謨又類赤色ヲ呈スルハ瓦爾拔奴謨ヲ混有ス　(第二)又本品ヲ灰化スルモ百分ニ付キ十分以上ノ固性物ヲ殘留ス可ラス」良好ノ顆粒狀阿魏ハ灰分ヲ留ムルコト一「ペルセント」ニ下タル下等品ニハ灰分ノ量三十「ペルセント」ニ超ユルモノアリ此灰分ハ石膏、炭酸加爾叟謨等ヨリ成ルモノトス」トアリ

製劑　阿魏丁幾　Tinctura Asae foetidae

改正日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

阿魏丁幾ハ

阿魏粗末	一分
酒精	五分

ヲ取リ五日間冷浸シ濾過シ製スヘシ

本品ハ澄明帶黃褐赤色ノ液ニシテ比重〇、八四乃至〇、八六ナリ

(以下次號)

奥州地方植物採集略記　(前號ノ續)

池野成一郎

釜臥山

釜臥山ハ海面ヲ拔クヿ一千「メートル」(農商務省地質局出版日本帝國全圖ニ據ル)恐山社ノ奥社タリ每年舊曆七月一日山開キヲ爲シ信徒之ニ登ル故ニ其前ニハ之ニ登ルノ道無シ余ノ恐山ニ登ルヤ寺僧ニ問フニ釜臥山ノ

事ヲ以テス寺僧余ニ語テ曰凡ソ此山ニ登ラントスルモノハ廿日間祈誓齋戒シ先達ヲ依頼シ而カモ舊暦七月一日以後ニ非ザレバ登リ難ク且依頼スベキノ先達スラ是アラザルベシト而メ余ノ此山ニ登ラントシタルモノ恐山ニ登山ノ翌日即新暦七月廿三日ニシテ未ダ舊暦ノ七月一日ニ至ラザルナリ然レモ寺僧ノ言ヲ信ジテ舊七月一日迄待ツベキニ非ズ因テ此日登山ヲ企テタリ而メ案内者ヲ得ルニ苦ミ辛フジテ一人ヲ得タリ抑ゝ釜臥山頂ニ至ル種々ノ道アリ余ハ田名部ヲ去ルコ西方凡ソ二里「宇田ヨリセリ其道凡ソ半里ハ廣漠タル草原ニシテ馬ヲ放牧ス是レヨリ以上眞ノ釜臥山ト爲ル道無シ灌木ノ内ヲアチラニクヾリ、コチラニクヾリ或ハ巖石ノ上ヲ歩ミテ登ル登リ極テ一大富士岩ノ前ニ達ス此邊しろばなこめつゝじ盛ニ繁殖シ又 Sedum Aizoon アリ巖石ノ間ニ茂生ス是レヨリ僅ニシテ絶頂ニ達ス絶頂ヨリ臨ムニ西北恐山ノ硫噴洞眼下ニアリ西ニ大盡山アリ東、大湊眼下ニアリ而メ遠方ハ雲ノ被フ所ト爲リテ見難カリキ山頂ニハこけもゝ、のりのき、みづなら、いはやなぎ、まるばしもつけ等盛ニ繁殖シ岩石散在ス最絶頂ニハ藥師ヲ祭ルノ宮アリ宮ノ周圍ニ石堆積ス山ノ狀態大略以上ノ如シ植物採集ノ爲登ルノ價値是無シ後來此地方ヘ採集ニ來ル人ノ爲メ一言ス

淺虫海岸

淺虫ハ青森町ヲ去ルコ三里滊車ニテ凡ソ三十分間ノ地ナリ三方山ヲ以テ圍繞シ一方青森灣ニ面ス温泉アリ爲ニ一都會ノ狀ヲ爲ス余ハ此近傍海岸植物ノ一斑ヲ學バンガ爲メ此邊ノ海岸地ヲ逍遥シ以テ植物採集ヲ試ミタリ

此地近傍最モ多キハのこぎりさうニシテ啻ニ海岸ニ生育スルノミナラズ家屋ノ近傍、鐵道ノ「レール」近傍所ヲ嫌ハズ繁茂スルノ狀實ニ盛ナリト云フノ外ナシ此ノ近傍沿岸固ヨリ種々ノ植物繁茂スト雖モ眞ノ海岸植物

トモ云フベキハ其數眞ニ僅少ニシテ大凡次ニ載スルガ如シ

はまはこべ　Arenaria peploides L. var. oblongifolia A. Gray.
はまなす　Rosa rugosa Thbg.
はまゑんどう　Lathyrus maritimus Bigel.
はまひるがほ　Convolvulus Soldanella L.
はまむらさき　Tournefortia arguzia Roem. et Sch.
はまべんけいさう　Mertensia maritima G. Don.
うんらん　Linaria japonica Miq
なみきさう　Scutellaria scordifolia Fisch.
えぞおほばこ　Plantago kamtschatica Cham.
ぽれやなぎ　Senecio pseudo-arnica Less.
はまにがな　Lactuca repens Benth.

以上ノ表ニ徴シテ考フレバ青森沿岸ト北海道沿岸ト其植物ノ大ニ類似スルアルヲ知ルベシ抑余ガ跋渉セルハ淺虫ノ左右僅半里宛ニ過ギズ若シ夫レ東ハ夏泊崎若クハ野邊地ノ邊ニ至ル迄、西ハ龍飛岬ニ至ル迄モ詳ニ其植物ヲ探究シ以テ之ヲ北海道沿岸ノ植物ニ比較考究スレバ學術上珍奇ナル事實ヲ得ベキヤ敢テ疑ヲ容レズ余ハ再ビ彼ノ地ニ採集スルノ時アルヲ待テ之ニ從事セント欲スルモノナリ

（以下次號）

陸中岩手山採集顯花植物（前號ノ續）

松平齊
池野成一郎

Siphonogams collected in Mt. Iwate, province Rikuchū (Nambu).

(Continued).

By **H. Matsudaira** and **S. Ikeno.**

(*Geraniaceae*). **Geranium nepalense** Sweet. ゲンノシヨウコ

(*Linaceae*). **Linum stelleroides** Planch. マツバニンジン

(*Empetraceae*). **Empetrum nigrum** L. ガンカウラン

(*Anacardiaceae*). **Rhus trichocarpa** Miq. ヤマウルシ—**R. Toxicodendron** L. var. radicans Miq. ツタウルシ—**R. sylvestris** S.Z. ヤマハゼ

(*Aquifoliaceae*). **Ilex crenata** Thbg. イヌツゲ—**I. Sugeroki** Mx. クロソヨゴ

(*Aceraceae*). **Acer pictum** Thbg. ツタモミヂ—**A. japonicum** Thbg. ハウチハカヘデ—**A. spicatum** Lam. var. ukuruduense Mx. オガラバナ—**A. Tschonoskii** Mx. バンダイカヘデ

(*Balsaminaceae*). **Impatiens noli-tangere** L. キツリフネ

(*Rhamnaceae*). **Berchemia racemosa** S.Z. クマヤナギ

(*Vitaceae*). **Vitis Coignetiae** Pull. ヤマブダウ—**Ampelopsis hepterophylla** S.Z. ノブダウ

(*Tiliaceae*). Tilia cordata Mill. var. japonica Miq. シナノキ

(*Guttiferae*). Hypericum erectum Thbg. オトギリサウ—H. virginicum L. var. asiatica Mx. ミヅオトギリ

(*Violaceae*). Viola sylvestris Kit. var. grypoceras A. Gr. タチツボスミレ—V. biflora L. キバナノコマノツメ—V. glabella Nutt. オホバキスミレ—V. Selkirki Gold. forma major Mx. コミヤマスミレ

(*Thymeleaceae*). Daphne kiusiana Miq. コセウノキ

(*Lythraceae*). Lythrum Salicaria L. エゾミソハギ

(*Onagraceae*). Epilobium angustifolium L. ヤナギサウ—E. Hookeri C. B. Clark. アカバナ—E. dahuricum Fisch. ヒメアカバナ—E. sp.

(*Halorrhagidaceae*). Halorrhagis micrantha R. Br. アリノタウグサ—Myriophyllum ussuriense Mx. タチモ

(*Umbelliferae*). Carum holopetalum Mx. イブキゼリ—Pimpinella calicina Mx. ダケゼリ—Seseli Libanotis Koch. イブキバウフウ—Angelica ursina Mx.—A. Florenti F.S. シラチニンジン—Archangelica Gmelini DC. シヽウド

(*Pirolaceae*). Monotropa uniflora L. ユウレイサウ

(*Ericaceae*). Tripetaleia paniculata S.Z. ホツヽジ—T. bracteata Mx. ハコツヽジ—Ledum palustre L. イソツヽジ—Rhododendron brachycarpum Don. シヤクナゲ—R. kamtschatikum Pall. エゾツヽジ—R. Tschonoskii Mx. シロバナコメツヽジ—R. semibarbatum Mx. バイクワツヽジ—R. Schlippenbachi Mx. クロフネツヽジ—Menziesia ciliicalyx Mx. ツリガチツヽジ—M. pentandra Mx. コヤウラク—

Phyllodoce taxifolia Salisb. ツガザクラ—Cassiope lycopodioides Don. イハヒゲ—Leucothoe Grayana Mx. ハナヒリノキ—Andromeda nana Mx. コメバツガザクラ—Gaultheria adenothrix Mx. アカモノ—G. pyroloides Hk. f. et Thoms. シラタマノキ—Vaccinium japonicum Miq. アクシバ—V. Vitis-idaea L. コケモヽ—V. uliginosum L. クロマメノキ

(*Diapensiaceae*). Schizocodon soldanelloides S. Z. イハカヾミ—Diapensia lapponica L. イハウメ

(*Primulaceae*). Lysimachia clethroides Duby. チカトラノヲ

(*Oleaceae*). Fraxinus longicuspis S.Z. オホシダ—F. pubinervis Blume. トチリコ

(*Loganiaceae*). Buddleia japonica Hemsl. フヂウツギ

(*Gentianaceae*). Gentiana triflora Pall. オヤマリンドウ

(*Asclepiadaceae*). Metaplexis Stauntoni Roem et Schult. ガヽイモ—Cynanchum caudatum Mx. イケマ—Vincetoxicum sublanceolatum Mx. var. albidum F.S. シロバナカモメヅル

(*Borraginaceae*). Lithospermum Erythrorhizon S.Z. ムラサキ

(*Labiatae*). Brunella vulgaris L. ウツボグサ—Leonurus macranthus Mx. キセワタ—Dracocephalum Ruyschiana L. ムシヤリンドウ—Calamintha gracilis Benth. クルマバナ—Lycopus lucidus Turcz. コシロネ

(*Solanaceae*). Chamaesaracha japonica F. S. イガホヽヅキ

(*Scrophulariaceae*). Pentastemon frutescens Lam. イハブクロ—Pedicularis resupinata L. シホガマギク—P. japonica Mx. ヨツバシホガマギク—P. yezoensis Mx. エゾシホガマギク

(*Lentibulariaceae*). Pinguicula vulgaris L. ムシトリスミレ—Utricularia racemosa Wall. ホザキノミヽカキグサ

(*Plantaginaceae*). Plantago major L. オホバコ

(*Rubiaceae*). Galium verum L. typica Mx. キバナノカハラマツバ—G. verum L. var. lacteum Mx. カハラマツバ

(*Caprifoliaceae*). Sambucus Thunbergiana Bl. ツクヅ—Viburnum furcatum Bl. ムシカリ—Diervilla japonica DC. タニウツギ—D. Middendorfiana Carr. ウコンウツギ

(*Valerianaceae*). Patrinia scabiosaefolia Link. オミナヘシ—P. gibbosa Mx. マルバノキンレイクワ

(*Campanulaceae*). Campanula lasiocarpa Cham. イハギヽヤウ—Adenophora verticillata Fisch. var. verticillata F.S. ツリガネニンジン—A. vert. var. canescens F.S. シラゲシヤジン—Platycodon grandiflorum A. DC. var. glaucum S.Z. キヽヤウ—Lobelia sessilifolia Lam. サハギキヤウ

(*Compositae*). Eupatorium japonicum Thbg. ヒヨドリバナ—E. jap. var. sachalinensis Fr. Schm. ヨツバヒヨドリバナ—E. Kirilowii Turcz. サハヒヨドリ—Solidago virga-aurea L. アキノキリンサウ—Leontopodium japonicum Miq. ウスユキサウ—Anaphalis margaritacea Benth. ヤマハヽコ—Inula britanica DC. ヲグルマ—G. salicina L. カセンサウ—I. ciliaris Mx. var. linariaefolia Regel. ホソバヲグルマ—Achillea ptarmicoides Mx. シロバナノコギリサウ—Artemisia japonica Thbg. ヲトコヨモギ—A. jap. var. desertorum Mx. ホソバノヲトコヨモギ—A. Keiskeana Miq. イヌヨモギ—Senecio palmatus Pall. ハンゴンサウ—S. Schmidtiana Mx. ヤマタバコ—Ligularia sibirica Cass. ナタカラカウ—Cnicus oligophyllus F.S. ヒトツバアザミ—C. japonicus Mx. var. involucratus F.S. ツルマアザミ—Saussurea Tanakae F.S. var. [illegible] Mx. タウヒレン—S. sp.—Serratula coronata L. タムラサウ—Ainsliaea acerifolia Sch. Bip. モミヂハグマ—Hieracium japonicum F.S. ミヤマカウゾリナ—H. umbellatum L. ヤナギタンポポ—Sonchus arvensis L. var. uliginosus Bieb. ハチジヤウナ

（完）

(The End).

◎雜錄

○樹木生活ノ起原（承前）

安田篤

双子葉類中ニ自ラ他ノ双子葉植物ヨリ其範圍ヲ異ニシ嚴然一廓ヲ爲セル數科アリ即チ胡桃科、楊梅科、樺木科、山毛欅科、楡科、西洋楓科等是ナリ是等ヲ總稱シテ葇荑亞門（Amentaceæ or Diclinæ）ト云フ其中古代ノ裸子類トノ關係ハ頗ル面白キ者ニシテ生長ノ狀態及ビ材ノ性質ヨリ見レバ葇荑亞門植物ハ明ニ松柏科ニ類似シ其葇荑花序ハ大ニ松族、「サイプレス」族ノ毬果ニ近似セリ是ヲ以テ觀レバ葇荑亞門ハ中古代ノ森林中ニ松柏科ト相對峙シテ布營セシヤ論ヲ俟タザルナリ境緣ノ外ニハ木狀羊齒類、蘇鐵類、椰子類アリシガ是等ニ接シテ繁茂セル松柏科植物ハ一位族ナリシ然ルニ早晩此族ノ勢モ衰ヘ強勇ナル垂柳榍科及ビ樅族ノ爲ニ森端ニ追退セラルヽノ不幸ヲ見ルニ至リ隨テ敗走者ハ當時初生ノ葇荑亞門植物ニ邂逅セシナルベシ然ラバ葇荑亞

門ハ如何ニシテ其祖先タル松柏類ト全ク異ナリタル廣葉ヲ有スルニ至リシヤト問フ者アランカ吾輩之ニ答ヘテ曰ハン太古ノ一位族バ其葉羊齒類ノ性質ヲ帶ビテ廣シ之ガ多年ノ進化ヲ經テ茱萸亞門ノ葉ニ變ゼシヿ猶松族ノ葉ノ石炭紀ニ於ケル石松科植物ノ鱗葉ヨリ發達セシガ如シト白堊紀ニ至レバ松柏科ハ其勢力恰モ旭ノ昇ルガ如ク木狀羊齒類並ニ蘇鉄類ハ漸ク其影ヲ潛メ棕櫚科及茱萸亞門ハ近古代ノ第三紀ニ於テ蹶起セント潛ニ時機ノ到來スルヲ待テリ同時ニ樹下及ビ廣漠タル森林ノ緣邊ニ於テハ高等ナル單子葉並ニ双子葉植物ノ進化ガ行ハレ其強キ者ハ灌木トナリ草本ヨリハ木本ヲ生ジ以テ樹木ノ新團群ヲ作レリ是等ハ即チ木蘭科、槭樹科等ナリキ此ノ如ク世ノ降ルニ從ヒ漸ク複雜ナル事情ノ植物生活ニ增伴スルヲ見ルナリ

凡ソ古昔ニ於ケル化石森林ハ上古代及ビ下中古代共ニ普天ノ下何レモ同性質ヲ有シ其廣ク散布セル原因ヲ尋ヌレバ一部ハ古地質學時代ニ起リタル夥多ノ地文上ノ變化並ニ隆起ト陷落トノ爲ニ大陸表面ノ綿々タル轉位ニ由リ一部ハ上古代隱花植物ノ胞子ニ對スル風威ノ盛ナリシニ由ラズンバアラズ又太古ハ大陸モ低島ニ過ギザリシヿト隨テ大氣中ニ過分ノ濕氣アリシヿハ北極ヨリ南極ニ至ル迄殆亞熱帶氣候ヲ生作セシヲ以テ觀レバ彼ノ四季並ニ諸帶ノ製造者タル太陽ノ力ハ當時太陽自身ニシテ今日ヨリモ更ニ酷熱ナラザルヨリハ其影響スル所蓋シ鮮少ナリシヤ明ナリ然リ而シテ當時太陽ノ決シテ今日ト差異ナカリシヿハ之ヲ證明スルヿ難キニアラズ何トナレバ若シ果シテ斯カル事實アリトスレバ赤道地方ノ炎熱赫灼タル必ズヤ兩極地方ニ於ケル植物ノ交通ヲ遮斷スル墻壁タリシナラン然ルニ實際ハ全ク之ニ反シ兩半球ノ僻隅猶能ク同種ノ植物ヲ出スヲ以テ知ルベキナリ降テ現今ノ熱帶ノ有樣ヲ見ヨ恐クハ北温帶植物ノ百中九十九マデハ之ヲ遮斷シテ通移セシメザルニアラズヤ是ヲ以テ考フレバ昔ハ比較的純同ニ富メル狀態アリシモ後世ニ至ルニ從ヒ漸ク異雜ノ狀態ノ生ゼ

シヿ識者ヲ待テ後ニ知ラザルナリ抑植物界ニ須要ナル變化ヲ與ヘシ者ヲ數フレバ先ヅ指ヲ現今ノ廣濶ナル大陸面ノ發達及ビ之ニ伴ヘル大氣濕度ノ減少ト寒温熱三帶ノ成立ニ屈セザル可ラズ蓋シ上中古代及ビ下第三紀ニ於テハ此變化ハ特ニ大ナル影響ヲ與ヘ第三紀ヨリ今日ニ至ルニ從ヒ其結果ハ益〻明白トナレリ是レ大ニ特質ヲ帶ビタル中古代及ビ第三紀ノ植物ハ下等ナル上古代ノ者ヨリモ更ニ氣候ノ變遷ニ感ジ易キノ然ラシムル所カ

以上陳ベタル如ク太古ノ純同ノ狀態ヨリ現今ノ異雜ノ狀態ニ進化セル變化ニ伴ヒ植物界ニハ益〻煩雜ナル境系ヲ生ゼリ境系中最古キ者ハ各森林ニ屬スル者ニシテ何處ニ於テモ植物ノ繁茂セル處ニハ必此境系アリテ存セリ若シ之ヲシテ今日ノ森林ナラシメバ其種類ノ夥シキ蓋シ無限ノ觀ヲ呈スト雖モ太古代ノ當時ニ於テハ彼此殆ト相如ケル有樣ヲ示セリ是レ當時ハ氣候並ニ地形モ純同ナリシ結果ニ外ナラズ且ツ新生ノ植物ハ其郷土ヨリ速ニ散配セラレタルニモ關ラズ殖民地ニ於テモ其狀態ノ相似タル恰モ郷土ニアルガ如クナルヲ以テ比較的短時期間ニ同類ノ植物ガ頗ル遠隔シタル地方ニ擴散スルニ至レリ然ルニ此時ニ當リ一要素ノ此有樣ヲ攪亂スル者アリ何ゾヤ曰ク大陸表面ニ於ケル地形上ノ不規則ナルヿ是ナリ此影響ノ及ボス所遂ニ第二境系ノ發達ヲ促セリ而シテ其境緣トナルベキ者ハ沼澤乾原ノ間、平地丘地ノ間及ビ山谷ノ間ナリ此處ニテハ二異種ノ境緣植物相衝突シ其間ニ起リタル戰鬪最激烈ニシテ隨テ其進化最盛ナリキ

（未完）

○「カラゾガム」植物

ジヤバナルボイテンゾルグ植物學實驗所長「ドクトル」メルヒオール、トロイブ氏ガ數年前もくまわう屬ノ授

精ヲ研究シ此屬ニ於テハ授精ノ際花粉管ノ胚珠內ニ入ルヤ普通ノ如ク珠孔ヨリセズシテ其合點ヨリスルヿヲ發見シ斯クノ如キ植物ヲ呼ンデ「カラゾガム」植物ト呼べリ（本誌第六十四號第二百四十一頁被子植物分類法ノ一大變革ト題スル一項ヲ參照スベシ）其後一千八百九十三年露人ナワシン氏かば屬ノ授精ヲ研究シ其又もくまわう屬ト一般「カラゾガム」植物タルヿヲ發見セリ（本誌第七十八號第二百二十八頁十三行以下參照）然ルニナワシン氏ハ愈々其研究ヲ廣メテ他屬ニ及ボシ其「カラゾガム」的授精法ヲ爲スハ獨リかば屬ノミニ非ズシテ之ニ近似セルはしばみ屬幷ニはんのき屬モ又然ルヿヲ發見セリ氏其說ノ大意ヲ近着ノ伯林植物學會雜誌ニ出セリ其文簡單ニシテ能ク其詳ヲ覗フ能ハズト雖モ氏又別ニ詳細ナル論文ヲ世ニ公ニスル由ナレバ余輩ハ其出ルヲ待テ一讀、讀者ニ其詳ヲ報ズルニ吝ナラザルベシ

○植物蒸發作用ノ實驗法（一）

凡ソ植物ハ絕エズ水分ヲ蒸發シテ止マズ而メ其蒸發ノ最モ劇甚ナルモノヲ綠葉トス而シテ綠葉ノ蒸發作用ヲ行フヤ其上面ハ下面ニ比シテ其力頗ル弱シ其理由蓋二アリ

其一　下面ノ表皮上皮ハ上面ノモノニ比スレバ薄弱ナリ

其二　下面ニ氣孔多ク上面ニハ氣孔無ク或ハ之アルモ其數少シ

綠葉ノ上下面蒸發ノ差異ヲ證スル定性幷ニ定量的實驗夥多有リト雖モ次ノ實驗ハ本年初メエルンスト、スタール氏ガ「ボタニシエ、ツァイツング」紙上ニ公ニシタルモノニシテ講義ノ際說明的實驗ニ最モ能ク適ス余ハ農科大學々生ニ植物生理學ヲ授クルノ際此法ニ因テ以テ之ヲ證明セリ即其法ハ鹽酸「コバルト」ノ五「ペルセント」ノ水溶液ヲ造リ長サ五寸幅五寸其他隨意ノ大サニ切リタル濾紙ヲ此液內ニ浸シテ能ク溶液ヲ紙ニ浸入セ

シメ然ル後之ヲ取出シ火ニテアブル時ハ紙ノ乾燥スルニ隨ヒテ藍色ヲ呈スベシ此紙ハ頗ル水分ニ感ジ易ク若シ少シニテモ濕氣ノ來ルアレバ其部分ハ藍色忽變ジテ紅色トナル故ニ一枚ノ綠葉ヲ取リ充分乾燥セル例ノ「コバルト」紙一枚ヅヽヲ其上下面ニ載セ其上ニ硝子板一枚ヅヽヲ置キ全体ヲ日光ニ當ツベシ後二三分時ニシテ之ヲ取リ出シ見レバ葉ノ上面ニ載セタル「コバルト」紙ハ依然藍色ヲ變ズルヿ無キモ下面ニ載セタル紙ニハ其葉ノ當リタル部分ハ判然紅色ニ變色セルアルヲ認ムベシ

以上二件　池野報

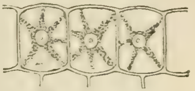
A. Y. 生摘譯

○細胞中ニ於ケル核ノ位置

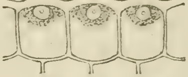
凡ソ植物界ニ於テ發達シツヽアル若細胞中ノ核ノ位置ヲ見レバ成長ノ最旺盛ナル場處ニ近ク或ハ成長ノ最保續スル場處ニ接ス而シテ若シ細胞成長ノ際該位置ヨリ追遠セラルヽヿアレバ核ハ成長部ヨリ等距離ヲ保テル中央ノ地位ヲ占ム既ニ成長ヲ終ヘタル細胞ニ於テハ一般ニ前ノ定位置ヲ轉移シテ不定ノ有樣トナル

以上ハ Haberlandt 氏ノ説ナルガ左ニ之ヲ顯花植物ノ表皮細胞、根毛、星狀毛及ビ隱花植物ノ菌類、藻類ニ就テ徵セントス

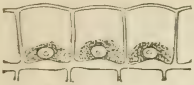
顯花植物ノ表皮細胞膜ハ往々內壁若クハ外壁ニ於テ Verdickung ヲ示ス此增厚ノ現象ハ核ノ內壁或ハ外壁ニ接シテ其位置ヲ占ムルニ起因スル者ナリ而シテ若シ核ガ細胞ノ中央ニアル場合ニハ細胞膜ノ何レノ方向ニモ增厚ハ起ラズシテ各部平等ニ發達ス第一ノ場合ハ莎草科中ノ Carex (「すげ」屬) ノ殼皮ニ於テ見ルヿヲ得第二ノ場合ハ蘭科中ノ Cypripedium (「くまがゑさう」屬) ノ葉之ヲ示シ第三ノ場合ハ燈心草科中 Luzula (「すゞめのひえ」屬) ニ之アリ讀者之ヲ左圖ニ質セ第一圖ハ Carex 第二圖ハ Cypripedium 第三圖ハ Luzula ノ表皮



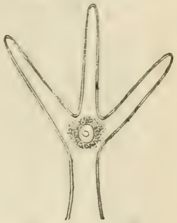
第三圖



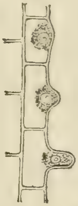
第二圖



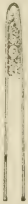
第一圖



第六圖



第五圖



第四圖

細胞ヲ示ス

根毛ハ其若キ時ハ明ニ頂端成長（Spitzenwachsthum）ヲ爲ス然リ而シテ成長ノ繼續スル間ハ核ハ不絶先端ニアリト雖モ既ニ成長ヲ終リタル古根毛ニ於テハ先端ヨリ離隔シテ復タ元位置ヲ保タズ第四圖ハ「あさ」ノ若根毛ヲ示セル者ナリ又根毛ノ表皮細胞ヨリ新ニ生ズルヤ核ニ接シタル外壁ノ突出ニ由リ之ガ漸ク成長シテ根毛トナルナリ第五圖ハ「ゑんどう」ノ根ノ表皮細胞ヨリ根毛ノ生ゼントスル所ヲ示ス根毛ノ細胞ハ時トシテ枝ヲ分ツヿアリ「はぼたん」ハ此一例ナリ此場合ニハ根毛中ニアル核ハ一枝中ニ侵入シ爲ニ核枝ハ忽チ原形質ニ富ミテ盛ニ成長シ同時ニ他枝ハ全ク其發育ヲ阻礙セラル

星狀毛（Sternhaar）ハ一細胞ナレ𪜈先端ヨリ數多ノ枝ヲ放射ス其成長シツヽアル間ハ核ハ放射枝ノ相會スル處ニアレ𪜈既ニ其成長ガ終レバ基底ニ近ク退却スルヲ見ル

次ニ隱花植物ニ就テ述ベンニ菌類中 Saprolegnia ニテハ菌糸ガ多核ヲ有シ核ノ最接近セル細胞膜壁ヨリ絶エズ側囊（Seitenschläuche）ヲ生ズ又藻類中 Vaucheria ハ同ジク多核ヲ有スル植物ナルガ是等ノ核ハ其形小ニシテ直接ニ細胞膜ノ内側ニ位シ次ニ葉綠粒アリ核ノ細胞膜ヲ作ルヿハ面白

キ者ニシテ此植物ガ傷ヲ蒙ムレバ忽チ核處ニ原形質集合シ其中ニ夥多ノ核ガ入込ミ葉綠粒ト共位置ヲ交換ス既ニ核ガ細胞膜ヲ作リ傷ガ癒ユレバ流動原形質ハ葉綠粒ヲ元位置ニ戻ス働ヲ有ス

○いそつゝじニ就テ

市村塘

抑モ亞米利加ニ於テひろばのいそつゝじノ葉ガ始メテ肺病治療藥トシテ用ヰラルヽニ至リシハ既ニ同大陸發見以前ノコトタルハ毫モ疑ヒナシ然ルニ近來ひるべると、ちかるど兩氏ノ研究ニ由レバいそつゝじモ前者ト同等ノ醫化學的作用ヲ有シ特ニ氣管枝加多兒ニ著効アリト云ヘリ倘詳細ハ（Memorobilien. Jahrg. XXXVII Heft 1. P. 13－17）ニ就テ閲覽アルベシ

いそつゝじノ葉ノ化學成分如何ヲ示サン爲左ニまいすねる氏ノ分拆表ヲ揭グ（但シ五百分中ノ量ヲ記載ス）

揮潑油	七、八	草綠	三七、〇
樹脂	三七、五	葡萄糖	一五、〇
丹寧（枸櫞酸加里、同石灰 醋酸加里、同石灰）	三四、〇		
褐色素	二二、〇	水	三〇、〇
分泌物	三四、〇	護謨	一八六、五
纖維質	五五、〇	居利古林 $C_{68}H_{56}O_{46}$	少許
連止（レドム）樟腦 $C_{28}H_{48}O$	少許	連出丹寧酸	少許

○食鹽ノ飽和溶液中ニアリテ生長スル黴菌

鹽化曹曳母（食鹽）ノ飽和溶液中ニ生長スル菌類ノ一例ハ Halobyssus moniliformis ナリ而シテ之ハ其境遇ニ

於テ能クコヽニデヤ或ハクラミドスポレンヲ結ブト云フ　(H・Z・生)

○蘚苔植物ノ呼吸並同化作用

B. Jönsson 氏ハ蘚苔植物ノ呼吸並同化作用ニ就キテノ研究ヲ公ニセリ(Competes Rendus tome CXIX. No. 8, p. 440―443, 1894)其大畧左ノ如シ

氏ハ此研究ノ爲メニ卅五種又ハ變種ヲ調査セリ而シテ蘚苔植物ノ最異ナル類ヲ代表セシメンガ爲メニ通常ノ「モツス」類水苔類地錢類ノ葉又ハ「フロンド」ノ如キヲ撰ベリ、試驗ハ往々卅六時間ニ達シ此間時々呼吸及ビ同化作用ニヨリテ生ズル「ガス」ノ量ヲハカレリ

同一ナル種類ニシテ其形狀大サ等總テ成ル可ク相似タル者ヲ同狀態ニ生存セシメバ其各自吐出セル處ノ炭酸ノ量ハ其等ノ植物ヲ乾燥シタル時ノ一「グラム」ノ量ニ就テ一樣ノ時間中ニ略同量ナリシ

如此試驗ヲ Sphagnum cuspidatum 三株(共ニ乾燥地ニ生ゼシモノ)ニ就キテ爲セシニ此ノ植物ヲ乾燥シタル時ノ量一グラムニ付キ十時間中ニ吐出シタル炭酸ノ容積ハ左ノ如シ

4cc,360　4cc,900　4cc,400

又同化作用ニヨリテ全植物ヨリ出ス處ノ酸素ノ量モ各〻相似タリ其容積ハ

9cc,690　9cc,960　9cc,830

然レモ若シ大ニ異ナリタル處ノ種類若クハ一種ニシテ發育ノ狀態ノ異ナリタル物ヲ比較セバ甚ダ異ナリタル結果ヲ得ベシ

蘚苔植物ハ外界ノ狀態ニ甚感シ易シ特ニ濕氣ニ感動シ易シ此類ノ植物ハ一方ニハ大ニ水ヲ吸收シ一方ニハ乾燥ニ堪フルヿ大ナリ而メ水ノ增減ノ比例ハ正ニ「ガス」ヲ吐出シ又ハ吸收スル容積ニ關セリ

一蘚苔植物ノ吸收スル增水ノ量ハ「ガス」ノ吐出スル容積ノ增加ニ由レルヿハ Mnium udunlatum ニ關シ左表ニ由リテ知ルヲ得ベシ

試驗中水中ニ在リシ時間	毎百ニ得タル水ノ分量	炭酸ヲ出セシ容積
一分間	40	0°°,750
半時間	59	1,350
二時間	65	3,900
自然ノ情態即チ暗陰且濕地	84	9,680

他種ノ大ニ異ナルモノニ在リテモ其結果ハ符合セリ

其生産地ニヨリ大差アリ例セバ Sphagnum cuspidatum ハ乾地ニ生ゼシモノヨリモ極メテ濕地或ハ水中ニ生セシモノハ炭酸ヲ出ス量ノ多キヿ殆ンド二倍ニ達セリ

外界ノ或ル形勢ニヨリ褐色又ハ赤褐色ヲ呈ス即チ特ニ日光ニ於テ著ルシ且之ニ因リテ呼吸及同化作用ニ甚シキ遲緩ヲ生ズ

大久保三郎報

○根毛ニ付テ

Jamieson 氏ノ研究ニヨレハ或植物ノ根毛ハ全ク閉塞セル細胞ヨリナルモノニアラデ其尖端ノ下部ニ一小孔ヲ具フルモノナルガソハ一見シテ明カナルモノニアラズ精細ニ探究シ顯微鏡ノ使用ニ大ニ注意ヲ加ヘザレハ觀ルコトヲ得ズト氏ハ蕪菁豌豆煙草大麥馬鈴薯ナドノ根毛ニ於テ之ヲ發見セリ初メ氏ハ燐ノ植物ニ必要ナルヿニ付テ研究シ植物ノ溶解シ易カラサル燐化合物ヲ消化スルヿヲ見植物ノ根ノ構造ヲ推究スルノ必要ヲ感シ遂ニ此ノ孔ヲ發見スルニ至リシナリ根毛ノ細胞内ニ存スル固形ノ小分子ハ此ノ孔ヲ通シテ入シモノナルヘク又根毛ニリトマス液ヲ注キ顯微鏡下ニ驗スレハ其細胞ノ内部ノミノ染色スルハ之レ色素ノ該孔ヲ通シテ入リタルモノニシテ細胞膜ヲ通過シタルモノニアラサルコトヲ知ルヲ得ヘシ

氏ハ又豌豆ノ根毛ノ孔ヲ一小固体ノ半ハ通過シツヽアリシヲ見タルヿアリト云フ

氏ハ植物ノ固形体ヲ消化スルニ付テ是迄ノ多クノ學者ノ說ハ充分ニソレヲ說明スルヿヲ得サルモノナリト述ヘ而シテ曰ク植物ハ酸ノ作用ニヨリテ固体ヲ細粉ニナシ其小粉ヲ根毛孔ヨリ取リ込ムモノナルヿヲ想像スヘキナリト

○植物ノ開花期ト分類上ノ位置トノ關係

Clarke 氏ハ北亞米利加ノ植物ノ一部分ニ付キ其開花期ト分類上ノ位置トノ關係ヲ研究シテ早春ヨリ晩秋ニ至ル間ニ概シテ顯花植物ハ下等ノモノヨリ漸次高等ノモノニ順ヲ追テ開花スルモノニシテ分類上相親近ナル植物ハ花期モ又相連續シ同位置ヲ占ルモノハ同時ニ開花スルモノナリトノ結果ヲ得タリ

氏ハ之ノ法則外ノ數多ノ異例ヲ種々ノ方法ヲ以テ說明セルカ其二三ヲ茲ニ擧クレハ温暖ナル候ニ莖ヲ生スル植物ハ暑季ニ開花スルハ明ナルヿナリ木本ノ主トシテ春或ハ初夏ニ開花スルハ冬季中ニ貯ヘタル生活力ヲ以テ時候ノ温暖トナリタルニ逢ヒ一時ニ有力ノ發育ヲナスニ歸スヘク又植物ノ生セル場所ニ關係ヲ有シ森林中ノモノハ多ク春ニ沼澤ニ生スルモノハ晩春ヨリ夏ニ水中ノモノハ夏ニ牧場砂地ノ植物ハ中夏ヨリ晩秋ニ開花スルモノナリ

○放光植物

Gadeau de Kerville, Henri 氏ハ放光動物及ヒ植物ナル論文中ニ放光植物ノ種類ヲ擧ケテ云ク

菌類ニテハ Agaricus, Trametes, Polyporus, Lenzites 放光バクテリヤ

蘚苔類ニテハ Schizostega osmundacea

顯花植物ニテハ印度ニ生スル禾本科ノ根 Pandanus 露兜樹科ノ根 Euphorbia phosphorea 大戟科ノ乳汁 Phytolacca decandra 商陸科ノ葉 Tropaeolum majus ノウゼンハレン Lilium bulbiferum 百合科 Polyanthes tuberosa ゲツカヽウ Papaver orientale 罌粟科 Oenothera macrocarpa Verbena sp. 馬鞭草科 Helianthus annus ヒマハリ Tagetis erecta センシユギク Tagetes patula コウワウサウ Matricaria inodora Calendula officinalis キンセンクワ Gazania favonia 等ノ花

是等ノ花ハ絶ヘズ光ヲ放ツニ非ズ暗夜ニ時々火花ヲ發スルナリ之ハ多分大氣ノ電氣ニ關係スルモノナラン菌類バクテリヤ等ニテハ之レニ反シテ原形質自身ニ於ル生活機能ニ基クモノナラント

（以上三件 Botanische Centralblatt ヨリ抄譯） D・A・生

○バクテリアの説（承前）

K・D・山人纂譯

第十章 黴菌ト實布的里亞 肺焮衝（ニーモニア） 猩紅熱（スカーレットフヒバー）等トノ關係

黴菌ガ体中ニ入ルヨリ發生セラルヽ肺疾窒扶斯（タイホイド）熱及ヒ虎列剌病ノ外尚ホ他ニ黴菌ニ因リテ發生セラルヽモノナリト信シ得ベキ疾病多シ然レドモ是等ノ病毒研究上未タ一ノ黴菌タモ發見セシコトナケレバ茲ニ黴菌ヲ以テ全クソノ病源ナリト確然明言スルコト能ハサルナリ

實布的里亞

實布的里亞ハ殊ニ小兒ノ間ニ起レル劇烈ナル疾病ニシテ是レ又黴菌ニ因リテ發生セラルヽモノトナス然レドモ必ズ常ニ一種ノ黴菌ニ因リテ發生セラルヽカ或ハ全ク特發ニ因ルモノナルカ或ハ土地ノ異ルニ因リテ異種ノ黴菌之ガ原因ヲナスモノナルカ等ノ諸疑問ニ至リテハ未タ全ク確定セラレサルナリ

新約克ノ養育院ニ於テ發生スル如ク實布的里亞ハ「ストレプトコツクス」（黴菌ノ一種ナリ）ガ氣管ノ粘膜中

ニ入リテ起スモノナリ殊ニ其膜ガ感受シ易キ狀態ニ陷ル時ハ常ニ此病ニ伴ヘル局部ノ變化ヲ起スモノトス

此黴菌ガ全ク乾燥スル時ハ更ニ永時間生存スルモノニシテ又此病ニ罹リシ小兒等ノ常ニ籠レル室內ノ空氣中ニ混ジテ浮游スルコトアリ嘗テ此病ニ感ジタル小兒ノ口中ニ於テ黴菌ヲ見出シタル後幾ナラズシテ重症ニ陷リ遂ニ死去セシコトアリキ此黴菌ヲ消滅スルニハ適度ノ石炭酸ト猛汞トヲ以テスレバ十分ソノ功ヲ奏スルモノトス

何トナレバ膜ヲ組成スル物質ハ已ニ有毒ナル多數ノ黴菌ヲ含有スルヲ以テナリ又咽喉嫉衝毒（ダイトヘリア）ハソノ發生スル室內ニ長ク止リテ散セズ且其病者ニ相接シタル人々ノ衣服ヨリ傳ハルモノナリ

猶ホ黴菌ガ原因トナリテ發生スル他ノ疾病ニ於ケルガ如ク實布的里亞ニ在リテモソノ患者ノ体中ヨリ放出セラレタル有害物質ニシテ果シテ消毒ヲ行ハルヽカ或ハ燒失セラルヽ時ハ其蔓延ヲ防クコトヲ得ルモノナリサレド普通ノ場合ニ在リテハ其放出セラレタル物質ノ分子（パーテクル）ガ手巾寢床衣類或ハ床上ニ附着シ遂ニ乾燥シテ塵埃ニ混ジ更ニ空氣中ニ上昇スルガ故ニ若シ是等ノ塵埃ヲ吸收スル人々ニシテ其身体ノ狀態其黴菌ノ發育ニ適シタランニハ忽チ此疾ヲ起スニ至ルモノナリ

乾燥セル實布的里亞黴菌ハ往々下水管ノ繼目不完全ナルヨリ或ハ乾燥セル排水口（トラツプ）ニヨリ瓦斯ト共ニ室內ニ吹込マルヽコトアルガ故ニ直接ニ病者ト相觸ルヽナキモ亦必スシモ此病ニ感染スルコトナシトイフベカラズ

肺炎（ニーモニヤ）

普通ノ肺炎ハ黴菌ニ因リテ發生セラルヽモノナリト信ジ得ヘキ疾病ノ一種類トス而シテ之ヲ發生スル黴菌ハ更ニ分離シテ研究シタルコト多シ之ヲ名ケテ「プニユーモコツクス」トイフ

此病ハ寒氣温氣ヲ受ケタル後ニ起レルモノニシテ且其病ヲ發スル時ニ當リテハ恰モ寒サニ因リテ戰慄スルカ如キ狀ヲ呈スルヲ以テ其原因ハ寒氣ニ曝サレ濕氣ヲ受クルニ因ルモノナリトハ一般人ノ說ク所ナリサレドモ近世科學ノ研究法ニ由リテ考察シタル人々ノ說ニ據レバ世人カ原因ナリトシテ曾テ主張シタル寒氣温氣モマタ此病ノ發生ニ必要ナリト雖モ此ハ唯之ヲ感受セシムル一方法タルニ過キズ而シテ此病ヲ患フル人々ガ寒氣ヲ感スルガ如ク戰慄スルハ蓋シ黴菌ガ口ヨリ肺臟中ニ進入スル時寒氣濕氣ハ肺臟ヲシテ黴菌ノ生育ヲ易カラシムル處トナスニ因レリト

抑肺炎ノ原因ナリト稱セラルヽ黴菌ハ身体以外果シテ何レノ處ニ存在スルヤ未タ能ク之ヲ知ル能ハズ然レドモ屢健康ナル人々ノ口中ニ在ルヲ以テ見レバ塵埃ト共ニ空氣中ニ散亂スルナラント思惟セラルヽナリ

實布的里亞ハ種々變症シテ竟ニ肺炎トナルコトアリ是ハ實布的里亞ヲ發生セル黴菌ガ肺臟ニ降リ漸次其毒ヲ發スルヨリ起ルモノトス

猩紅熱（スカーレット）　麻疹（シースル）　黄熱（スローフヒハー）等

猩紅熱　麻疹　痙攣咳及痘瘡ノ如キモ亦均シク黴菌病タルニ外ナラズ而シテ其傳染ノ性質順序及方法等亦隨テ之アルモノトスサレドモ是等ノ疾病ヲ發生スル特殊ノ黴菌ハ果シテ何ナルヤ今日尚未タ知ルコトヲ得サルナリサレハ是等ノ疾病ヲ豫防スルニハソノ既ニ研究ニ係レル黴菌病ニ就テ吾人ガ知レル事實ト多年多クノ醫師カ是等ノ疾病ヲ治スルニ當リテ誠實ニ觀察シタル所ノ經驗トニ據ラサルベカラス而シテ痘瘡ニ在リテハ種痘法ニ因リテ安全ニ豫防シ得ベキモ其何故ニ斯ノ如キ好果アルヤハ尚ホ未タ知ル能ハザルナリ

黄熱病（ユローフヒハー）

黄熱病ハ米國ノ或部分ニ於テ盛ニ流行スル疾病ナリ然レドモ其原因ニ在リテハ頗ル不明ニシテ唯此病ニ就キテ明カナル所ハ其病狀ト其發生蔓延ニ欠クベカラザル一般ノ狀態トノミ勿論多クノ點ニ於テハ既ニ黴菌病トシテ知ラレタルモノニ類スレドモ他ノ點ニ於テハ大ニ異レリ嘗テ此原因ヲ矢張黴菌ナラント懸賞ヲ以テ之ガ發見ヲ求メタレドモ事皆無功ニ歸セリ

瘴癘（マラリア）毒

瘴癘（マラリア）毒熱ハ其種々ナル狀態ニヨリテ黴菌ヨリ發生セラルヽモノナリトハ既ニ多數人ノ考フル所ナリ然レドモ信スヘキ觀察ニ據レバ此說却テ不可ナルニ似タリ瘴癘毒熱發生ノ或ル時期ニ在リテハ一種特別ナル微細ノ有機物ガ血中ニ存スルヲ見ル是全ク此病ノ原因ナリト證セラルヽモノナリサレド是トテ未タ判然一定シタルニ非ス且其原因ナリト稱スル是等ノ小有機物モ其實黴菌ニ非スシテプロトゾアト稱スル一種ノ下等動物ニ屬スルモノナレハ玆ニ論スル限リニアラズ

○ながはのいしもちさうノ新產地

高等師範學校博物科生徒佐藤氏ハ同校教授齋田氏ニ隨行シ本年八月一日常陸國海老ケ島近傍ニ於テながはのいしもちさうヲ採集セラレタリト云フ（海老ケ島ハ下館ト筑波山トノ殆ド中間ニ位スル村落ナリ）

編者記ス

◎東京植物學會錄事

十月廿七日午後二時ヨリ月次例會ヲ植物學教室ニ開キ藤井健次郎君ハ生活原形質ノ「エ子ルギー」ト題セル「レーヴ」先生ノ論説ニ就テノ私見テフ演題ニ就テ演説セラレ次テ顯微鏡的標品ヲ閲覽ニ供シテ散會セシハ午後四時半ナリシ

當日展列シタル顯微鏡的標品ハ　ぶなノ葉ノ「プロテオゾーメン」（「メチールグリユーン」染、〇・五「ペルセント」ノ「アンモニヤ」ニテ固定ス）　池野君　麥角「アルコール」漬　下山順一郎君　くはノ房狀結晶　岡君　やまくるまノ葉柄ノ「トリコプラスト」　大久保君　とくさノ氣孔（下面ヨリ觀察ス）　市村君　すつぽんたけノ胞子（該茸ノ發芽セル標品ヲ添テ）　安田君　ぶだうノ害菌ノ胞子二種　野村君　つるむらさきノ花ノ發生　松平君　外ニみやまはんのきノ根ニ寄生セルおにくノ發生次序ヲ備フル標品　松田君

◎寄贈書目錄　（十一月十五日迄ノ分）

日本蠶業雜誌（第七十六號第七十七號）　日本蠶業雜誌社〇東京醫學會雜誌　第八卷（第拾九號第貳拾號）　東京醫學會〇國家醫學會雜誌　第九十號　國家醫學會〇動物學雜誌　第七十二號　動物學會〇地質學雜誌　第二卷第十三號〇大日本山林會報　第四十二號　大日本山林會〇東洋學藝雜誌　第百五十七號　東洋學藝社〇地學雜誌　第七十卷　東京地學協會〇日本藥業新誌（第二百六十號第二百六十一號）　衞生社〇日本園藝會雜誌　第五十九號　日本園藝會

植物病理學　下卷　一冊　理學士　白井光太郎君

R. Pirotta, Annuario del R. Istituto Botanico di Roma, Anno I—V. 十冊

The Gardeners' Chronicle, Vol XVI. No. 395—399, 401—404.

The Journal of Botany. No. 380—382.

地質學雜誌

第二卷
第十四號

明治廿七年十一月十五日發行○一册金十錢郵税金一錢六册前金五十四錢(郵税共)

目錄

○論說及報文

北海道第三期動物化石略報…… 學士……神保小虎君
深井地質第一回報告(承前)……山崎直方君

雜錄

英國第三期火山岩噴出の順序に就て[ゲーキー][ヂヤッド]兩氏の衝突(承前)……小川琢治君
甲斐國金峯山四近地理及地質案內……石原初太郎君
櫻島……伊木常誠君
北極地方に於ける近世地質史……井上禧之助君

雜報

朝鮮大使義和宮殿下地質學教室を巡覽あらせらる○シベリア雜報一○飛驒產リーヴライトコバルト華○綠簾石○褐色のビエスビアナイト○自然明礬○越後天然瓦斯の利用○高山の殘雪○火山岩集塊岩と風致○長野町に於ける地震の現像○紀州湯淺の植物化石○筑後の銅山○布岩○石落○佐久間象山の鑛山○地名と地質○兩羽大地震○酒田近傍震害景況○地震より起れる種々の現象○九月全國氣象摘要○東京地質學會第十一月次會記事○地質談話會○正誤

發賣所 東京神田裏神保町 敬業社

理學士白井光太郎著
植物病理學 下編
紙數三百頁
定價金四十錢
郵稅金四錢

此書ハ分テ上下二卷トナシ上卷ニハ總論及各種ノ緊要ナル成長要件ノ過不足ヨリ起ル病患及突然來侵スル有害ナル無機勢力ノ作用ヨリ起ル病患及人爲ノ損害ヨリ起ル病患及其防除法ヲ說キ下卷ニハ顯花植物寄生、隱花植物寄生、雜草、虫癭等ヨリ起ル諸病及其防除法ヲ記載ス學校ノ敎科用ノミナラズ農稼。林園。樹藝ノ諸業ニ從事スル實業家ノ參考ニ適用スベキ有用無比ノ良書ナリ

賣捌所 京橋南傳馬町有隣堂○神田裏神保町敬業社○日本橋區通三丁目丸善書店

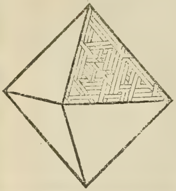
(記事精選)(速記彙報)(紙數増加)

定價郵稅共金十錢●六冊前金郵稅共五十七錢

速記彙報第五十七册出づ、日本速記俱樂部常集會速記錄、中根貴族院書記官長及河田貴族院速記課長の演說速記、石黒五十二田尻稲次郎成瀨隆藏井上毅山根正次江原素六菊池武夫澁澤榮一末松謙澄杉亨二十君の演說抄、講談家の泰斗桃川如燕翁の江戸時代の寄席の話、貴衆兩院速記者試驗に關する彙聞、萬國速記術の景況、其他速記彙報特有の記事數十件

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

◎博物標本店開業廣告◎



弊社ハ多年敎科書類ヲ始メトシ敎育參考書類ノ出版販賣ニ從事シ業務日ニ繁忙ヲ極メ新著ノ藏版月ニ加ハルノ盛況ヲ呈スルニ至レルハ偏ニ江湖諸彥誘掖愛顧ノ致ス所深ク感銘ノ至リニ堪ヘズト雖而モ弊社ノ責務ヲ苟且ニセズ愼重精勵勉メテ有數大家ノ良著ヲ發刊シ以テ聊我ガ敎育社會ヲ裨補シ來レル餘慶ノ致ス所ナルハ敢テ自讃ヲ憚ラズ今般更ニ步ヲ進メテ弊社ノ敎育社會ニ對スル使命ヲ彰著ニシ益江湖ノ希望ニ酬フル爲神田錦町三丁目一番地ニ分店ヲ設ケ廣ク博物學研究上必須ノ標本模型等ヲ製造販賣セントシ經營數月事業漸其ノ緒ニ就キ今ヤ世間ニ告白スルノ機運ニ際セリ而シテ弊社ノ發賣セントスルハ動物、植物及ビ鑛物ノ**標本、比較解剖用標本、蠟、石膏等ノ模型顯微鏡用「プレパラート」**等ニシテ精作敢テ舶來品ニ讓ラズ迅速極メテ廉價ニ調進可仕尚海外諸學會ノ需求ニモ應ジ本邦特有ノ博物標本ヲ調製可仕計畫ニ候間弊社積年ノ信用ヲ御諒知アリテ多少ニ係ハラズ御下命ノ程希望ノ至リニ堪ヘズ

因ニ云フ多年職ヲ**帝國大學**ニ奉ジテ**博物學標本**ノ製作ニハ獨得ノ技倆ヲ有スルノ聲譽ヲ得タル**菊地松太郎**君ハ今般辭職ノ上弊社ノ招聘ニ應ジ專ラ監督主務ノ任ニ當ルコト、成リタリ又タ**理科大學敎授理學博士ドクトル飯島魁先生**ハ弊社ノ此擧ヲ贊成セラレ學術上助力ノ心要アルニ當リテハ其需ニ應ズベシト約セラレタレバ弊社ノ標本ニハ尋常一般ノ侶伴ヲ離レテ殊種特色ノ意匠アリ購求諸君ハ在來品ト比較ノ上自出色ノ妙趣ヲ了得セラルベシ

東京神田裏神保町　**敬業社**

東京神田錦町三丁目一番地　**同社標本店**

東洋學藝雜誌

第百五十七號

明治二十七年十月二十五日發兌

一冊金十錢　郵稅金一錢
六冊前金五十四錢郵稅共

論說◉溶液論（圖入）（承前）櫻井錠二◉豐公征韓ノ話（承前）星野恒◉「重ね撮り寫眞」の術を利用したる觀相法（附アートタイプ一面）坪井正五郎◉渦環（Vortex Rings）（圖入）後藤牧太

雜錄◉物理學隨筆錄第五（圖入）鶴田賢次◉落雷表增補　水野敏之丞◉右ノ外◉雜報◉寄書◉學會記事◉應問等廿餘件

◉發行所　東洋學藝社　東京神田區裏神保町

動物學雜誌

第七拾貳號明治二拾七年十月十五日發行

◎壹册金拾壹錢郵稅金壹錢○六册前金郵稅共六拾六錢

目次　日光山採集記中川久知君○再びハマクリムシに就て名和靖君○蚕蛾雌虫ノ產卵器ニ就テ池田作次郎君○相馬地方動物實驗雜記酒井寅造君○一新石灰海綿ニ就テ原十太君

雜錄　動物學研究用藥劑便覽（前々號續）○章魚の習性丘淺次郎君◉ウラナミシジミの群生◉寄生蜂の群島◉クロボシオトシブミの學名◉南島雜話十件◉奇態なる正覺坊◉鮫の捕獲◉半野生のヤギ◉小笠原島の鷲◉小笠原島の Tridacna◉小笠原島の昆蟲◉父島の海岸採集地◉火島博物園◉三意外◉鳥と目白◉害虫驅除の效能及失策◉龜類ニ見ル鰓囊及ビ大動脈穹ノ發達◉菊池松太郎氏◉中川久知氏◉東京動物學會◉動物學雜誌索引

發賣所　東京神田區裏神保町一番地　敬業社

●廣告●

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄

全一冊
定價六拾錢
學名及和名索引附

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ鬱林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル内外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖セラル、教員、學生諸君ハ必ス一本ヲ備ヘサル可カラス

理科大學教授博士松村任三先生著

和漢洋對譯

本草字典

全一冊
定價六拾錢

本書ハ英語其他數十ケ國ノ語ニ於ケル植物及藥品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩樣ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレハ是亦坐右ニ缺クヘカラサル良辭書ナリ

池野成一郎譯

顯花植物分科撿索篇

全一冊
正價二拾錢
郵稅四錢

本書ハ嘗テ植物學雜誌ニ附錄トシテ連載セルモノヲ集メテ一册トナシ別ニ詳細ナル和洋科名ノ見出表ヲ附シタルモノ也殘部有之候ニ付御入用ノ方ハ至急申込アレ

賣捌所

東京神田表神保町 **敬業社**
東京日本橋通三丁目 **丸善書店**

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候
○本誌每月一回發兌一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢
○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マデ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿七年十一月十九日印刷
明治廿七年十一月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京市神田區錦町三丁目一番地　井上蘇吉
印刷者　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田宜遜
印刷所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田活版所
發行所　東京市神田區裏神保町一番地　植物學雜誌編輯所
賣捌所　同所　敬業社
同　東京市日本橋區通三丁目　丸善書店

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. 8.] November 20, 1894. [No. 93.

明治廿一年二月三日內務省許可

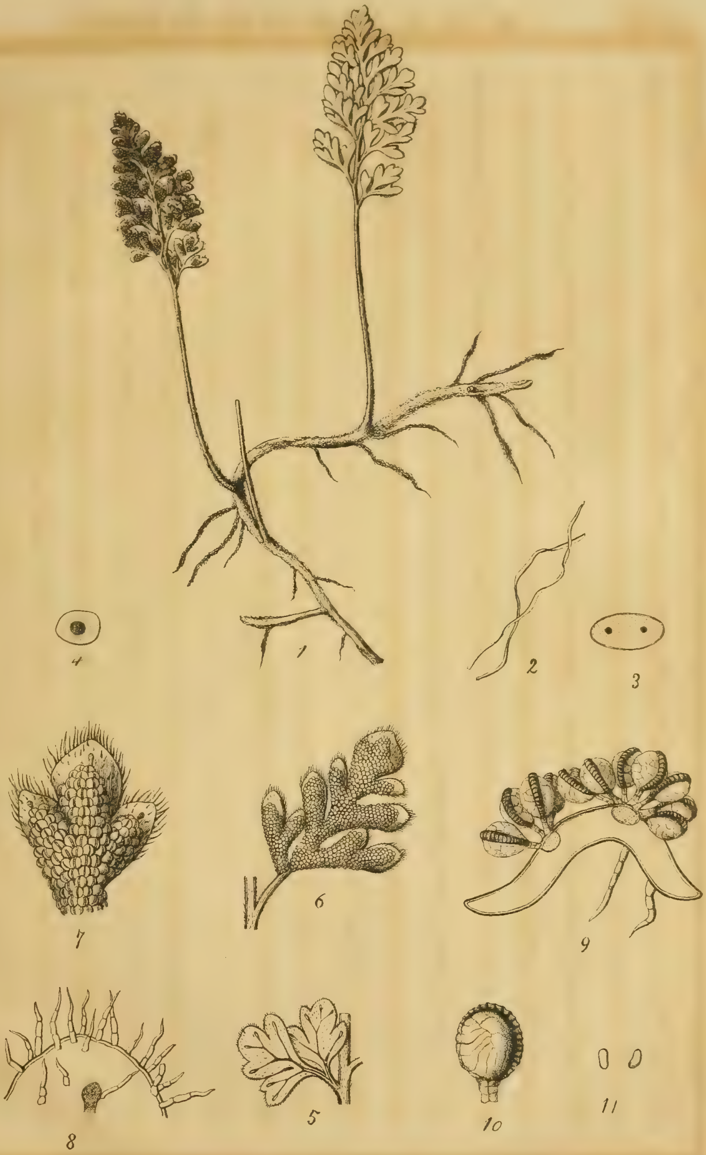
明治廿六年六月三十日遞信省認可

CONTENTS.

On Ustilago maydis, Lév. By **Atsushi Yasuda** 443
Movements of Shoots of Pinus. By **Kenjirō Fujii** 445
Notes on Flowers. By **Prof. Jinzō Matsumura** 448
Studies on Buckwheat. By **Tsutsumi Ichimura** 451
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. By **Komajirō Sawada** 454
Botanical Excursion to the Northern Part of Japan (Continued from No. 92). By **Seiichirō Ikeno** 458
Siphonogams Collected in Mt. Iwate Province Rikuchū. By **Hitoshi Matsudaira** and **Seiichirō Ikeno** 461
Miscellaneous:— 465
Origin of Tree-Life.—Chalazogamous Plants.—Method of Investigating the Transperation of Plants.—Position of the Nucleus in the Vegetable cell.—Ledum palustre, L.—Microscopical Fungi growing in satulated Solution of Common Salt.—Transpiration and Assimilation of Musineæ.—Root-hairs.—Philosophy of Flower Seasons.—Luminous Plants.—Bacteria.—Drosera indica in the Vicinity of Ebigashima, Prov. Hitachi.—Proceeding of the Tōkyō Botanical Society.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

印刷所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田活版所



T. Makino ad nat. del.

東京小石川香雅堂石印

Gymnogramme Makinoi Maxim.

植物學雜誌第八卷第九十四號 (明治廿七年十二月二十日)

THE BOTANICAL MAGAZINE.

[**Vol. VIII.** December 20, 1894. **No. 94.**]

Gymnogramme Makinoi Maxim.

By

Tomitarō Makino.

With Plate IX.

Gymnogramme Makinoi Maxim. in litt. Jap. *Karakusashida.* カラクサシダ

Roots fibrous. Rhizome creeping, simple or branching, slender, compressed, densely clothed with purple-brown hairs. Stipes distant, erect, slender, hairy, 2—5 c. m. long. Fronds delicate, herbaceous, ovate-oblong, bi-tripinnatifid, $1\frac{1}{2}-3\frac{1}{2}$ c. m. long, $1-1\frac{1}{2}$ c. m. broad, hairs scatterd on both sides but denser at the margins; pinnæ alternate, erect-patent, ovate, or deltoid-ovate, pinnatifid into 2—7 deep obtuse pinnules, of which lower ones are often again slightly lobed; the barren fronds with shorter stipes and broader pinnæ than that of the fertile ones. Rachis hairy, winged above. Vein free, one in each ultimate segment, with the clavate intramarginal tip. Sori naked, blackish, becoming brown when dry, oblong on veins and confluent to that of the midrib. Sporangia compressed globose, shortly pedicellate; ring vertical.

It is one of the most delicate kind of our species belonging to this genus. It was at first collected by me on mossy rocks of Nanokawa in the province of Tosa, Shikoku on November 6, 1887. Afterwards it was again collected by Mr. Y. Yoshinaga at Toyohara in the province of Echizen, the main island of ~~the~~ Japan on November 11, 1891.

Botanical Laboratory,
Science College, Imperial University, Tōkyō.

Explanation of Plate IX.

Fig. 1. *Gymnogramme Makinoi* Maximowicz.
Fig. 2. Hairs on the rhizome.
Fig. 3. Cross section of the rhizome.
Fig. 4. Cross section of the stipe.
Fig. 5. A pinna taken from the sterile frond.
Fig. 6. A fertile pinna.
Fig. 7. A portion of the fertile pinna.
Fig. 8. Apex of the segment of the pinna.
Fig. 9. Cross section of the fertile pinna.
Fig. 10. Sporangium.
Fig. 11. Spores.

All but fig. 1. magnified.

池野松平兩氏ノ南部岩手山顯花植物目錄追加

在札幌　宮部金吾

予昨明治廿六年九月四五兩日間岩手山及其山麓ニ於テ植物ヲ採集セリ其通路ハ柳澤村ヨリ登リ九合目邊ヨリ綱張道凡半里餘ヲ下リ夫ヨリ引キ返シ舊道ヲ經テ下ル此行採集セシ顯花植物二百二十三種隱花植物三十五種アリ本誌前々號ヨリ掲載ノ池野松平兩氏本年全山ニ於テ採集サレタル植物目錄ヲ通覽スルニ予カ採集セルモノニシテ記載サレザルモノ凡百三十種（隱花植物ヲ除キ）ニ及フ故ニ之ヲ追加スルノ價値アリト信シ茲ニ之ヲ掲載スルコトヽセリ

全山植物中ヤヽ珍ラシキ種類ヲ掲ケ他日全山ニ採集ヲ試ムル人ノ參考ニ供ス（本誌第八卷三百六十七頁池野氏ノ奥州地方植物採集略記ヲ參照スベシ）

Pinus pumila ハヒマツ○ Calamagrostis Matsumurae ミヤマガリヤス○ Poa sudetica ミヤマイチゴツナギ○ Rhynchospora Fauriae ○ Eriocaulon decemflorum イヌノヒゲ之一種○ Tofieldia nutans チシマゼキシヤウ○ Polygonum polymorphum var. undulatum オヤマソバ°ソバ(方言)○ Dicentra pusilla コマクサ°センニンサウ(方言)○ Sedum Rhodiola var. Tachiroi イハベンケイサウ○ Potentilla gelida ミヤマキンバイ○ Epilobium dahuricum ヒメアカバナ○ Ligusticum japonicum イハテタウキ○ Selinum Tillingia チシマニンジン○ Angelica edulis アマニウ○ Rhododendron kamtschaticum エゾツヽジ○ Pentstemon frutescens イハブクロ○ Pinguicula vulgaris ムシトリスミレ○ Patrinia gibbosa マルバノキンレイサウ○ Cnicus dipsacolepis ○ Cnicus nipponicus ナンブアザミ○ Saussurea nikoense シラネアザミ

Additions to Messrs. Matsudaira and Ikeno's, List of the Siphonogams of Mt. Iwate Nambu.

By **K. Miyabe**, Sapporo.

(*Coniferæ.*) Abies Veitchii *Lindl.* シラビソ

(*Alismaceæ.*) Aiisma Plantago *L. forma* angustifolia *Kunth.* ヘラオモダカ

(*Gramineæ.*) Agrostis canina *L.* ミヤマヌカボ—Deschampsia flexuosa *Trin.* コメスヽキ—Calamagrostis Matsumuræ *Maxim!* ミヤマガリヤス (新稱) コメクサ (方言)—Poa sudetica *Hke.* ミヤマイチゴツナギ—Brachypodium sylvaticum *Roem. et Sch.* ヤマカモジグサ—Bambusa senanensis *Fr. et Sav.* クマザヽ

(*Cyperaceæ.*) Cyperus globosus *All.* アゼガヤツリ—Cyperus truncatus *Turcz.* ウシクヾ—Kyllingia brevifolia *Rottb.* ヒメクヾ—Fimbristylis sub-ſpicata *Nees.* ヤマヰ—Fimbristylis Pierotii *Miq.* ノテンツキ—Scirpus acicularis *L.*— マツバヰ—Scirpus erectus *Poir.* ホタルヰ—Rhynchospora Fauriae *Franch.* ミカヅキグサ之一種—Carex rostrata *Michx.* ミタケスゲ—Carex macrochaeta *C. A. Mey.?*

(*Araceæ.*) Lysichiton kamts chatcensis *Schott.* ミヅバセウ

(*Juncaceæ.*) Juncus diastrophanthus *Fr. B.!* ミクリゼキシヤウ

(*Liliaceæ.*) Smilax Sieboldi *Miq.* ヤマカシウ—Streptopus amplexifolius *DC.* オホバタケシマラン—Funkia longipes *Fr. et Sav.* イハギバウシ—Lilium avenaceum *Fisch.* クルマユリ—Tofieldia nutans *Willd.!!* チシマゼキシヤウ—Clintonia udensis *Frantv. et Mey.* ツバメオモト—Trillium Smallii *Maxim.* エンレイサウ—Paris tetraphylla *A. Gray* ツクバネサウ—Veratrum Maximowiczii *Baker* アヲヤギサウ.

(*Dioscoreaceæ.*) Dioscorea Tokoro *Makino* オニドコロ

(*Orchidaceæ*) Habenaria sagittifera *Reinch. f.* ミヅトンボ—Platanthera tipuloides *Lindl. var.* sibirica *Reg. et Maack.* オホヤマサギサウ

(*Betulaceæ.*) Betula alba *L. var.* communis *Regel* マカンバ (內地ノ)—Alnus firma *Sieb. et Zucc. var.* multinervia *Regel* マシバ (方言)

(*Fagaceæ.*) Quercus glandulifera *Bl.* コナラ—Fagus sylvatica *L. var.* asiatica *DC.* ブナノキ

(*Polygonaceæ.*) Polygonum alatum *Hamilt.* タニソバ—Polygonum cuspidatum *Sieb. et Zucc.* イタドリ

(*Caryophyllaceæ.*) Dianthus superbus *L.* カハラナデシコ

(*Ranunculaceæ.*) Cimicifuga foetida *L. var.* simplex *Huth* サラシナショウマ—Cimicifuga japonica *Miq. var.* obtusiloba *Yatabe* オホバショウマ—Ranunculus japonicus *Langsd.* キツネノボタン—Anemone cernua *Thunb.* オキナグサ

(*Lardizabalaceæ.*) Akebia quinata *Decne.* アケビ

(*Berberidaceæ.*) Berberis Thunbergii *DC.* メギ—Epimedium macranthum *Morr. et Decne.* イカリサウ

(*Papaveraceæ.*) Macleya cordata *R. Br.* ケタニグサ

(*Saxifragaceæ.*) Astilbe chinensis *Maxim. var.* japonica *Maxim.* チダケサシ—Hydrangea Hortensia *DC. var.* acuminata *A. Gray* サハアヂサヰ—Deutzia scabra *Thunb.* ウツギ

(*Rosaceæ.*) Aruncus sylvester *Kost. var.* americana *Michx.* ヤマブキシヨウマ—Pyrus Aucuparia *Gœrtn. var.* japonica *Maxim.* ナヽカマド—Filipendula purpurea *Maxim.* キヤウガノコ〇アハヾナ (方言)—Prunus Ceraseidos *Maxim.* チヤウジザクラ—Prunus Grayana *Maxim.* ウハミズザクラ〇コンゴウ(方言)

(*Leguminosæ.*) Sophora flavescens *Ait. var.* galegoides *Hemsl.* クラヽ—Cladratis amurensis, *Benth. var.* Buergeri *Maxim.* イヌエンジユ—Lespedeza sericea *Miq.* メドハギ—Lespedeza striata *Hk. et Arn.* ヤハズサウ—Vicia unijuga *Al. Br.* タニワタシ—Vicia Cracca *L. var.* japonica *Miq.* クサフヂ—Pueraria Thunbergiana *Benth.* クズ

(*Rutaceæ.*) Zanthoxylum piperitum *DC.* サンセウ

(*Euphorbiaceæ.*) Euphorbia pekinensis *Rupr.* タカトウダイ—Daphniphyllum humile *Maxim?* ヒメユヅリハ

(*Coriariaceæ.*) Coriaria japonica *A. Gray* ドクウツギ

(*Aquifoliaceæ.*) Ilex macropoda *Miq.* アヲハダ

(*Celastraceæ.*) Evonymus alata *Thunb. var.* subtriflora *Fr. et Sav.* コマユミ—Evonymus macroptera *Rupr.* ヒロハノツリバナ—Celastrus articulata *Thunb.* ツルウメモドキ〇フヂグルミ (方言)

(*Staphyleaceæ.*) Staphylea Bumalda *Sieb. et Zucc.* ミツバウツギ

(*Aceraceæ.*) Acer rufinerve *Sieb. et Zucc.* ウリハダカヘデ

(*Rhamnaceæ.*) Rhamnus japonicus *Maxim.* クロウメモドキ

(*Vitaceæ.*) Vitis Thunbergii *Sieb. et Zucc.* エビヅル

(*Dilleniaceæ.*) Stachyurus præcox *Sieb. et Zucc.* キブシ

(*Onagraceæ.*) Epilobium pyrricholophum *Fr. et Sav.* アカバナ—Epilobium japonicum *Haussk.* イハアカバナ

(*Araliaceæ*). Aralia racemosa *L. var.* sachalinensis *Regel* ウド—Aralia chinensis *L.* タラノキ—Panax repens *Maxim.* トチバニンジン—Acanthopanax aculeatum *Seem.* ウコギ—Fatsia horrida *Smith* ハリブキ—Helwingia japonica Dietr.. ハナイカダ

(*Umbelliferæ.*) Hydrocotyle Wilfordi *Maxim.* ノチドメ○ヤマチドメ—Cryptotænia japonica Hassk. ミツバ—Ligusticum japonicum *Maxim!* イハテタウキ (新稱)—Ligusticum acutilobum *Sieb. et Zucc.* タウキ—Selinum Tilingia *Maxim!* チシマニンジン (新稱)—Angelica Miqueliana *Maxim.* ヤマゼリ—Angelica edulis *Miyabe* アマニウ—Angelica ursina *Maxim.* エゾニウ—Peucedanum decursivum *Maxim.* ノダケ

(*Cornaceæ.*) Cornus macrophylla *Wall.* ミヅキ—Cornus Kousa *Buerg.* ヤマボウシ

(*Pyrolaceæ.*) Pyrola media *L.* マルバノイチヤクサウ—Chimaphila japonica *Miq.* ウメガサヽウ

(*Ericaceæ.*) Vaccinium hirtum *Thunb.* スノキ—Rhododendron Albrechti *Maxim.* ムラサキヤシホツヽジ—

Rhododendron indicum *Sav. var.* Kæmpferi *Maxim.* ヤマツヽジ

(*Symplocaceæ.*) Symplocos paniculata *Wall.* ニシゴリ (方言)

(*Styracaceæ.*) Styrax japonica *Sieb. et Zucc.* エゴノキ

(*Oleaceæ.*) Ligustrum medium *Fr. et Sav.* オホバイボタ

(*Gentianaceæ.*) Swertia chinensis Franch. センブリ

(*Convolvulaceæ.*) Cuscuta japonica *Chois.* ネナシカヅラ

(*Verbenaceæ.*) Phryma Leptostachya *L.* ハヘドクサウ—Callicarpa japonica *Thunb.* ムラサキシキブ

(*Labiatæ.*) Plectranthus glaucocalyx *Maxim. var.* japonicus *Maxim.* ヒキヲコシ—Calamintha multicaulis *Maxim.* ミヤマタフバナ—Chelonopsis moschata *Miq.* ジヤカウサウ

(*Scrophulariaceæ.*) Siphonostegia chinensis *Benth.* ヒキヨモギ—Melampyrum roseum *Maxim. var.* japonicum *Maxim.* マヽコナ

(*Orobanchaceæ.*) Aeginetia indica *Roxb.* ナンバンギセル

(*Rubiaceæ.*) Galium. kamtschaticum *Steller.* オホバノヨツバムグラ

(*Caprifoliaceæ.*) Viburnum dilatatum *Thunb.* ガマズミ

(*Valerianaceæ.*) Patrinia villosa *Juss.* ヲトコヘシ

(*Dipsaceæ.*) Scabiosa japonica *Miq.* マツムシサウ

(*Campanulaceæ.*) Adenophora remotiflora *Miq.* ツバナ

(Compositæ.) Aster trinervius *Roxb var.* —Aster Glehni *Fr. Schm.* ゴマナ—Aster fastigiatus *Fisch. et Mey.* ヒメシヲン—Carpesium cernuum *L.* ガンクビサウ—Senecio sagittatus *Schultz. Bip. var.* glaber *Maxim.* ヨブスマサウ—Senecio bulbiferus *Maxim.* タマブキ—Atractylis ovata *Thunb.* オケラ—Cnicus dipsacolepis *Maxim.*—Cnicus nipponicus *Maxim.* ナンブアザミ—Cnicus suffultus *Maxim. var.* incomptus *Maxim.* ニツクワウアザミ—Saussurea japonica *DC.* ヒメヒゴタイ—Saussurea nikoense *Fr. et Sav.* シラネアザミ

土佐産ノ海藻

岡村金太郎

學友牧野富太郎君此頃土佐産ノ海藻標品數十種ヲ余ニ贈ラル此標品ハ氏ガ曩キニ去ル明治十八年四月氏ノ鄕里土佐ノ國須崎灣ニ於テ氏及ビ吉永悦卿氏等ト共ニ採集スル所ニ係ルモノニシテ數年前ヨリ余ニ與ヘンヿヲ約サレタルモノナリ其數凡ソ四十種ニシテ内二三種不明ニ屬スルモノアリ左ニ之ヲ列記シテ斯道ノ士ノ參考ニ資セントス

標品採集ノ期節春ニアルヲ以テ結實シタルモノ甚ダ少ナシ而シテ多數ノ種類ハ東京附近ノ地即チ房相豆總等ニ産スルモノト大差ナシ蓋シ其分布上ノ位置余ノ嘗テ本誌第六卷第六十號五十八頁ニ說明セル太平洋沿岸ノ第二帶ニアルヲ以テナリ而シテ此地方ハ第二帶ノ稍南端ニ位スルヲ以テ房總地方ノモノト少ク異ナレルモノナキニアラズ即チ LAMINARIA RADICOSA, KJELLM. ノ如キ之ナリ今回ノ標品中ニモ亦余ノ未ダ嘗テ研究セザリシモノ二種ヲ得タルハ實ニ余ノ喜悅措ク能ハザル所ナリ茲ニ之ヲ記シテ深ク氏ノ好意ヲ謝シ併セ

テ廣ク有志者ノ研究ヲ促ス

紅藻類　(FLORIDEÆ)

Porphyra laciniata (Lightf.) Ag.　あまのり　各地産セザルナシ

Grateloupia filicina (Wulf.) Ag　むかでのり　温暖ノ海ニ多ク日本海ニモアリ

G. affinis var. lata Okam.

(Bot. Mag. No 75 p. 101. pl. v. fig 5—10.)　こめのり

此種ハ余ガ曩キニ本誌第七十五號第百一頁第五版第五乃至十圖ヲ以テ記載シタルモノニシテ南ハ九州地方ヨリ北ハ常盤地方迄アリ其以北ニアルモノハ形稍小ニシテ細シ即チ余ノ G. affinis (Harv.) Okam. トナスモノナリ此種ハ未ダ日本海ニ之アルヲ見ズ

Gloiopeltis coliformis f. intricata Sur.　ふのり

此種ハ丁度結實シ居レリ未ダ日本海ニ之アルヲ知ラザレ𪜈朝鮮釜山ニアルヲ以テ多分長門邊ノ日本海沿岸ニハ之アラン然レ𪜈出雲ヨリ能州邊迄ハ之ヲ見ザルヲ以テ多分生産セザルナルベシ

Hypnea musciformis Lamour.　えごもどき　(新稱)

此種ハ房總邊ニ産スルモノト全ク同一ニシテ形大ナリ其枝ノ先端彼ノいぎす科ノえごのりニ似テ鈎狀ニ屈曲シ往々素人ノ見テ以テえごのりト誤ルヨリ此新稱ヲ與ヘタリ此種モ亦未ダ日本海ニ之アルヲ知ラズ

Gracilaria compressa Ag.　しらも

おごのりノ一種ニシテ形狀甚ダ能クおごのりニ類スレ𪜈枝ノ形狀ニ差アルヲ以テ別トス專ラ暖海ニ生シ

從來阿波三河等ニ產スルヲ知レリ然レ圧余ハ是迄之ヲおごのりト混ジ居タレ圧此頃其異ナレルヲ知リタルナレバ其分布上ノ位置未ダ之ヲ知ラズ然レ圧相州邊ニモ產スルコハ Hariot 氏ノ横須賀ノ海藻中ニ列記セルヲ以テ誤リナカラント思惟ス其日本海ノ產否ハ今茲ニ言フ能ハズ

G. Textori Sur.　　かばのり

之モ亦おごのり屬ノ一種ナレ圧形狀大ニ異ナリテ薄ク扁クシテ叉狀ニ分岐ス蓋シ Gracilia 屬中ノ Podeum 部中ニ入ルベキモノナリ本品ハ其幼ナルモノナレ圧實ハ体ノ兩面ニ密生ス日本海ニモ多ク產ス

Chylocladia parvula (Ag.) Hook.

太平洋並ニ日本海ニモ產ス温暖ノ部ニ多シ

Gelidium corneum Lamour.　　てんぐさ

各地普ク產ス

Suhria japonica Harv.　　むにくさ

九州ヨリ常盤地方邊ニ多ク日本海ニハ全ク之ヲ產セズ

Dudresnaya coccinea Crouan ?

此種ハ今回始メテ得ル所ナリ体ハ細圓柱狀ニシテ周圍ヨリ許多枝ヲ分チ枝亦小枝ヲ發スルコ數回高サ凡ソ十五セ、メニシテ淡紫紅色質柔滑ニシテ甚ダうみぞうめんニ似タレ圧其造構全ク之ト異ナレリ其ノ種名ノ如キハ余之ヲ比較スベキ標品ヲ有セザルヲ以テ暫ク疑ヲ存ス

褐藻類 (PHAEOPHYCEÆ)

Fucus Babingtonii Harv.　いしげ　太平洋沿岸中温暖ノ部ニ多シ

Sargassum hemiphyllum Turn.

はんだはらノ一種ニシテ葉ノ形狀恰モ小サキ薙刀ノ如ク其脊部ハ無鋸齒ナレ𪜈尖端部及ビ刄部ニ不規則ナル鋸齒アルヲ以テ容易ニ他ノ類ト區別スルヲ得此種ハ太平洋中第二區ニ多ク日本海ニテハ出雲邊ニ得タル外之ヲ知ラズ

S. tortile Ag.　兩海岸共ニ多シ

S. serratifolium Ag.　のこぎりもく　仝上ノモノト共ニ多シ

S. piluriferum Turn.　兩海岸共ニ之ヲ見ル北海道ニテハ往々極北部ニモ産スル由

S. patens Ag.　やつまたもく　兩海岸共ニ多ク專ラ温暖ノ海ニ産ス

Cystophyllum Thunbergii Mert.　とらのを　各地ニ普シ

Dictyota dichotoma (Huds) Lamour.　兩沿岸共ニ多シ

Padina Durvillaei Bory.　みゝのり

太平洋沿岸ニハ多ケレトモ日本海沿岸ニハ稀ナリ出雲ニ此産アルハ余ノ知ル所ナレ𪜈未ダ他ニ之ヲ得ズ其形狀團扇ノ如クナルヲ以テ容易ニ知ラル而シテ日本海ニハ之ト能ク類似シタルモノニテ一種 P. pavonia ト稱スルモノ多ク太平洋沿岸ニモ之ヲ産スレ𪜈日本海ノ如ク多カラズ

Dictyopterys polypodioides (Desf.) Lamour ?

此種ハ其形狀歐洲產ノ此種ノモノニ比スルニ少シク異ナル所アルモノヽ如ク特ニ中肋ノ太キヲ以テ異ナルガ如クナレ𪜈全体ニ於テハ大差ナシ未ダ其果シテ此種ナルヤ否ヤヲ確メズ

Leathesia difformis Aresch.

太平洋中温暖ノ部ニハ往々之ヲ產スレ𪜈日本海ニハ未ダ之ヲ見ズ

Mesogloea decipiens Sur. もづく

此類ノモノ多ク各地ニ產スレ𪜈未ダ悉ク之ヲ調査セズ故ニ其分布モ明言スル能ハザレ𪜈房總邊ニ多キハ余ノ知ル所ナリ

Sporochnus sp.

此類ノモノハ甚ダ稀ニ見ル所ニシテ我大學ニ一種駿州江ノ浦ニテ四月獲タルモノアルノ外余之ヲ知ラザリシニ今回ノ標品ニテ又其一ヲ土佐ニ獲タリ而ソ大學ノモノハ余ノ考フル所ニテハ Sp. Moorei Harv. ナラント思ヘ𪜈今回ノ種果シテ此ト同一ナルヤ否ヤヲ知ラズ今不幸ニシテ余ノ許ニ之ヲ調査スル書ナキヲ以テ暫ク不明ニ屬スレ𪜈他日再調査ノ上報スル所アルベシ其結實期節ハ春ニアルモノヽ如ク大學ノモノト云ヒ今回ノモノト云ヒ共ニ四月ニシテ共ニ實ヲ結ベハナリ

Scytosiphon lomentarius (Lyngb.) J. Ag. かやものり、 ふとめのかしら(紀州)

太平洋沿岸廣ク之ヲ產シ日本海ニモアリ体空筒單條ニシテ一二寸ノ距離ニ括（クビ）レアリ形狀頗ルトクサニ類ス

Hydroclathrus cancellatus Bory. かごめのり (新稱)

兩沿岸共ニ産スル所ニシテ岩石若クハ他ノ大ナル藻類ノ莖等ニ稀ニ付着ス体ハ嚢狀ニシテ不規則ナル塊ヲナシ共表面ニ大小不同ノ圓孔ヲ密ニ開ク其海底ニ横ハルトキハ恰モ海綿ノ如シかごめのりノ名ハ其孔ニ取ル寧ロ暖海ニ多ク小笠原島ヨリモ獲タリ

Chorda Filum (L.) Stackh.　　つるも

体ハ圓柱狀紐ノ如ク單條ニシテ往々三尺以上ニ及ブ兩沿岸共ニ之ヲ産シ寒温兩部ノ海ニ多シ

Laminaria radicosa Kjellm.　　あんとくめ

伊豫土佐邊ニ多ク産スルこんぶノ一ニシテ五島薩摩等專ラ九州四國ノ間ニ産スルコトハ余曩ニ本誌第七十二號三十二頁ニ之ヲ記セリ余ハ又曩ニ此種ヲ以テ Ecklonia radicosa トナシ之ヲ本誌第六卷第五十九號第一版ニ記シタレトモ其後ニ至リ余ノ認定ノ誤レルヲ知レリ故ニ元トノ學名即チこんぶノ一種トシテ Kjellman 氏ノ定メラレタルモノニ從服ス

Dictyosiphon chordaria Aresch.

此藻類ハ今回初メテ得ル所ナリ幸ニ在獨逸ノ知人 Reinbold 氏ヨリ曩キニ余ニ送ラレタル此種ノ標品アルヲ以テ之ヲ比スルニ差ノアル所ヲ見ズ而シテ之ヲ諸書ニ徵スルニ先輩ノ未ダ之ヲ本邦ニ獲タル由ヲ記シタルモノヲ見ズ其他所ノ産否ノ如キハ元トヨリ今ニ於テ知ル能ハザレドモ爾後必ズ之ヲ知ルベシ外國ニアリテハ獨逸國キール灣ニアル由ヲ記ス

綠藻類　(CHLOROPHYCEÆ)

Chaetomorpha Linum (Fl. Dan.) Kütz.　　ほそじゆずも　(新稱)

圓柱狀ノ短細胞一列ニ連リ海面ニ浮ビテ錯綜シ往々ほんだわら類ト纏絡ス其形狀ニ依リ他ノ此類ト比スルニ細キヲ以テ此新名ヲ付ス

Ulva Lactuca (L.) Le Jol. f. genuina.　あをさ

所トシテ産セザルナシ

Caulerpa sedoides Harv.?

此種ニ相違ナカルベシト思ヘ𪜈未ダ標品ノ信ズベキモノト比較シタルヿナケレバ暫ク疑ヲ付ス此ト同一種ニシテ駿州、佐渡等ニ得タルモノアリ此屬ハ元來溫暖ノ海ニ産スル所ナリ

Codium elongatum Ag.　ながみる

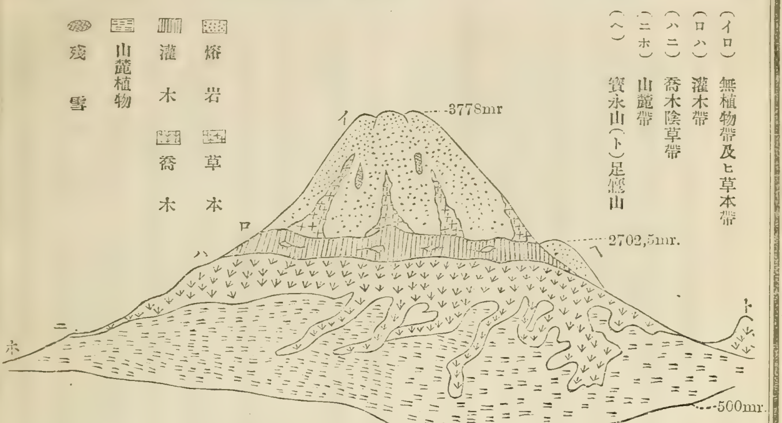
通常普通ニ見ル所ノみるト形狀ニ差異ナケレ𪜈叉狀ニ分岐セル所數少ナク且ツ其分岐ヲ生スル所稍扁平ナルト細胞ノ形狀トニ依リみるト區別ス此種モ亦暖海ノモノニシテ九州ヨリ相州房州等迄產スルヲ知ル日本海ニハ未ダ之ヲ見ズ

富士山植物分布ノ眞景

市村塘

今ヤ富岳積雪皚々最早其蒼姿ヲ窺フニ由ナシ夏期ト雖モ尙且ツ雲霞ノ蟠蹤スルアリテ藹然能ク其眞態ヲ全現スルヿ尠シ回顧スレバ本年七月廿六日余ハ大宮ヨリ人穴ニ至ルノ間ニ於テ實ニ快絶ナル實ニ明亮ナル渠ノ眞景ヲ見タリキ于時喬木陰草帶ノ植物分布ガ如何ニモ奇妙ナルヲ面白ク思ヒ不取敢寫生シ置キタレバ不顧拙畫未眺諸君ニ示ス圖中ハニ部ハ喬木陰草帶ニシテ黑藍色ニ見ヘタリ主ニからまつ、とうひ、しらべ、しらかんば、もみ、うつぎ、しで、やまはんのき、等ガ該色ヲ呈セシムルナリ其下方ニ位スルニホ部ハ所謂山麓帶ニシ

富士山植物分布ノ眞景



富岡村字青木ヨリ富士山ヲ望ム

テ草綠色ニ見ユおみなへし、をとこへし、よもぎ、きつねがや、わらび等數十種ノ草本相集マリ此ノ色ヲ與フルモノト知ラル、叉喬木帶ニ近キ上方ニ於テ綠藍色ニ見ユル狹キ灌木帶ロハ部アリ之ニへびいちご、いはしもつけ、こけもゝ、しやくなげ、いはやなぎ、はんくわいさう等生ズ其上方ノイロ部ノ下邊ニ於テ處々ニ綠色ヲ呈スルハ所謂草本帶ニシテ山麓帶ト同色ナリ是みやまはんしやうづる、いはつめくさ、ふじはたざを、いはわうぎ、いはひげ、おんたで、こたぬきらん、等ノ散生スルニヨルモノトス叉頂上イ邊ハ赤色ヲ呈セリ是不毛ノ地ニシテ唯燒石ノミ累積スル無植物帶ナレハナリ尙何帶ニ如何ナル植物ヲ生スルカノ詳細ニ至テハ本誌第二卷ニ三好君ノ「富士山植物採集ノ形況」第六卷渡邊松田兩君ノ「同山植物彙報」ニ載セアレバ余ハ反覆ノ勞ヲ取ラザル可シ偖テ喬木帶ガ何ガ故ニ埀脚スルヤ或ハ該山細谷中ノ植物ノミガ生存シテ其周邊ハ絶滅ニ歸セシモノナルカ或ハ風ノ方向、日光ノ射來度、積雪溶融ノ了等ニ關係アルカハ今日容易ニ判斷シ得ベカラサル一問題ナラント信ズ

日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）

澤田駒次郎

醫治効用　阿魏ハ衝動、鎭痛、祛痰、調經、驅蟲ノ一良藥トス此藥宣透シテ壅塞ヲ開達シ刺戟衝動ノ凝結ヲ疏解スルノ効驗アリ又善ク表發ノ蒸氣ヲ排泄シ子宮衝逆及ヒ痙攣ノ諸症ヲ治シ經閉及ヒ痔血壅滯ヲ通スルニ峻効アリ○此藥風氣疝、歇私的利亞、喘息、百日咳、虎列剌、癲癇其他諸〻神經病ニ効驗アリ又肺炎ノ末期、慢性氣管枝炎ニ用ヒテ特効アリ○驅蟲ノ一藥トシ內用或ハ灌腸用トス殊ニ交感神經ニ害アル場合ニ應用ス又直腸寄生蟲及ヒ鼓脹ニハ灌腸藥トス Garrod 氏ハ數回之ヲ試驗シ其成蹟ニ因リ極メテ効驗アル調經藥トシ其有効成分ハ硫黃ヲ含有スル所ノ揮發油ニ基因ス此樹脂ハ衝動性祛痰藥トシテ特効アリ」ト又北米合衆國ニテハ近來流行ノ疫病ニ用ヒ頗ル効驗アリト其他獸醫ニ於テモ多少之ヲ用フト云フ又遠西醫方名物考ニ曰（上略）此藥粘液ヲ疏解シ輕ク瀉下シ且ツ臭氣烈キニ由テ殺蟲ノ峻効アリ、其臭味ニ由テ蟲ヲ侵刺シ遂ニ其巢ヲ剿絕ス、此物三錢ニ藤黃二刄ヲ加ヘ三匁ヲ一丸トシ三丸宛日ニ四次、瀉下ノ多少ニ隨テ加減シ用フ」又是ヲ長服メヨク條蟲ヲ殺ス○或ハ一味、丸トシ亦ヨク蚘蟲ヲ殺ス、是ヲ用レハ蟲其藥氣ニ堪スメ騷擾シ腹痛、搐搦、神經ノ諸症ヲ發スルヿアリ、然レ𪜈蟲死スレバ其症頓ニ治ス、胃弱ノ者ハ苦味ノ越幾斯劑（健質亞那、珊篤里葛爾儒等ノ越幾斯劑ヲ云）或ハ鐵劑ニ加ヘ用フ」酸敗液ノ症ニハ制酸劑（蝲蛄石、麻偏涅失亞、過爾拔等）ニ加ヘ用フ腹部諸藏ノ壅塞硬腫ニハ其症ニ隨テ中和鹽（覇王鹽、礬酒石等）孕ニ加ヘ、蟲症ニハ驅蟲劑瀉下劑ニ加ヘ用ヒ或ハ吉利詞斧兒ヲ兼テ施スヘシ」又鼓脹ノ一良樂トス、毎日二錢許用ヒ時々大黃ノ丸樂ヲ用ヒ大便ヲ利メ治スル者多シ、此病粘液鬱積シ或ハ蟲アルニ因テ發スル者亦少ナカラス、此症ハ左ノ法殊効アリ

盧會驅蟲丸

阿魏　三錢　格失亞丸料（コッシア）　一錢半

右研和シ三瓦ヲ一丸トシ甘草末ヲ衣トシ三丸宛（ツヽ）用ルヿ日ニ三次瀉下多キトキハ服量ヲ減ス

○格失亞丸ノ方

蘆薈　蘇甘沒扭謨（スカムモニウム）各二瓦　格祿葦篤（コロキント）一瓦　覇王鹽、丁香油　各二錢

右細末トシ丁香油ヲ和シ亞刺比亞護謨漿ヲ加テ泥ト爲シ三瓦ヲ一丸トシ金箔或ハ甘草末ヲ衣トシ三丸宛用ルヿ日ニ三次ド、但シ大便ノ多少ニ隨テ加減ス」阿魏過服スレバ吐シ或ハ瀉下ス、寒粘液質ノ人ハ瞑眩少ナシ○腹部諸藏ノ壅塞、頑硬腫幷ニ是レヨリ起ル腹腫水腫ニ阿魏峻功アリ、但シ癌瘡痞滞ヲ散シ、風疝腹脹ヲ消ス、胃腸ノ運營（ハタラキ）衰弱ニ〆疝痛ヲ兼ル症ニ尤モ良○胃中ニ粘液、酸敗液鬱滞スル諸症及ヒ胃痙（心腹痛ニ嘔吐ヲ兼ル病）ヲ治ス○痛風脚痛ニ用ヒテ驗多シ○頑固ノ間歇熱及ヒ是レヨリ起ル水腫ニ阿魏一味丸トシ或ハ幾那ヲ加ヘ用ヒテ多ク治ス○痰欬及ヒ經久ノ痰欬喘急等ノ胸病ニ効多シ○腐骨疽其他惡厲ノ潰瘍ニ是ヲ内服シ或ハ外敷〆良驗アリ○服量二及マデ一服トシ用ヒテ害ナシ然レモ通例二瓦ヨリ十瓦マテヲ丸藥トシ用フ或ハ是ヲ適宜ノ舍利別ニ和シ或ハ芳香ノ露水ニ加ヘ或ハ雞子黄ニ研和シ用ヒ或ハ龍腦、護謨安沒尼亞幾、纈草等ニ加ヘ丸藥トシ用ヒテ良、但シ是ヲ用ヒテ四日毎ニ適宜ノ下劑ヲ與フベシ○諸ノ失血、其他脫泄ノ患アル人ニ此藥ヲ用レバ其症ヲ增長ス○癎ノ發作ニ此烟ヲ嗅（カヽ）シメテ醒復ス○外敷〆寒腫ヲ温散シ且ツ凝結ヲ疏解スル峻効アル故ニ瘰癧等諸ノ頑硬腫ヲ消散シ痛ヲ止ム、一味膏藥トシテ貼〆良○腐骨疽、汚穢潰爛ノ瘡瘍ニ此末ヲ摻（フリカ）ケテ腐壞ヲ祛（ノゾ）キ膿ヲ排（ハラ）ヒ淨刷ス

○阿魏丁幾丟爾

製法　阿魏（搗碎者一写）　燒酒（二十度者八写）

右潤キ格兒弗（コルフ）ノ半バニ充タシメ、厚紙ニテ其口ヲ蓋封シ、鍼ニテ其紙面ヲ穿チテ幾多ノ細孔ヲ作シ、格兒弗ヲ微温火上ニ置テ時々振盪シ浸スヿ六日ニシテ濾過シ滓ヲ去リ硝子壜ニ內（イ）レ固封シ貯フ

○又法　阿魏（二写）　硇砂加燒酒精（十二写）

右硝子壜ニ內レ蓋閉シ浸スヿ六日、濾テ滓ヲ去リ固封シ貯フ○服量十滴ヨリ十六滴許葡萄酒或ハ哶啶（メーダ）等ニ點服ス、或ハ阿芙蓉液ヲ等分ニ加ヘ十二滴或ハ十五滴許用ヒテ尤（モ）効アリ

主治　子宮衝逆及ヒ痙攣搐掣等葛私多僂（カストレウ）謨主治ノ諸症ニ奇効アリ」トアリ

阿魏ハ印度及ヒ波斯ニ於テ香味料トシ用フルコト多量ナリ

（以下次號）

◆

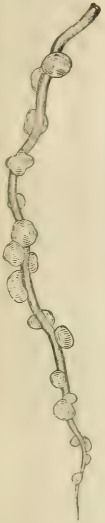
「つるれいし」ノ根ノ病害ニ就テ

安田篤

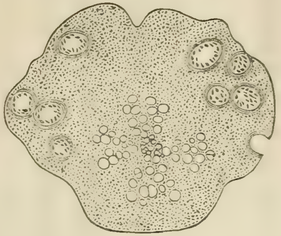
去月初旬植物園ヨリ「つるれいし」(Momordica charantia, L.) ヲ得シガ其根ヲ撿セシニ細大ノ別ナク數多ノ根疣ノ附着スルヲ見タリ此ニ於テ其病害ナルヲ知ルト同時ニ次ノ疑問ヲ生ゼリ曰ク此根疣ハ荳科植物ノ根瘤ノ如ク黴菌ノ所爲ナルヤ將タ菌類ノ所爲ナルヤ然ラザレバ或種類ノ動物ノ作ル所ナルヤ如何此外見上ノ疑惑ハ根疣ニ一刀ヲ加フレバ直ニ氷解スルヿヲ得ベシ

根疣ノ形狀及ビ解剖　根疣ハ不規則ナル球形若クハ楕圓狀ヲ呈シ表面ハ平滑ナラズシテ數多ノ小瘤アリ根疣ノ根ニ於ケル關係ハ根ノ中心ニ對シ放射平等狀ニ發達セズシテ其一側ノ不等ニ膨出シタル者ナルガ之ガ數個群生スル所アリ或ハ獨生スル所アリ余ハ八月頃植物園ニ赴キ同植物ニ就テ其根ヲ集メシヿアリシガ當時ハ未

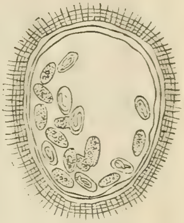
つるれいしノ根ノ病害ニ就テ



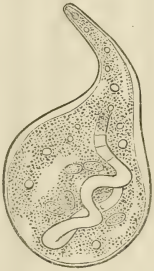
1



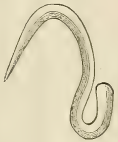
2



3

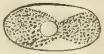


4



5

6



7

ダ病害ヲ被ラズ一個ノ根疣ダニ附着セザリシヲ以テ觀レバ蓋シ根疣ハ八月以降ニ發達セシモノナラン根疣ノ横斷面ヲ見レバ一方ニ偏シテ四孤ノ維管束アリ其對側ニ甚膨增シタル厚皮アリ此厚皮ノ內半ニ位シテ直徑凡ソ〇、四「ミリメートル」ノ圓孔數個ノ散在スルアリ此孔ノ周圍ニアル細胞ハ薄壁ニ變ジ扁小トナリ孔ニ向テ鳩聚セリ換言スレバ許多ノ細胞ガ圓孔ヨリ放射シ恰モ孔ノ周圍ニ「こるく」層ヲ作レルガ如キ觀アリ蓋シ根組織ノ刺戟ヲ受ケタルニ起因

スル者ナリ時ニハ維管束內ニモ孔ヲ作ルヿアリ此場合ニハ導管ハ擾亂壓迫セラル孔ノ內部ヲ見レバ無數ノ卵塊アリ故ニ一見此病害タル一種ノ動物ノ所爲ナルヿヲ知ル此卵塊ハ蠕虫動物 (Vermes) 中ノ線虫 (Nematodes) ニ屬スル Heterodera radicicola, C. Müll. ノ作ル所ニシテ獨乙ニテハ其菾菜（タウヂサ）ニ寄生スルヿ多キヲ以テ凡ソ此種ノ線虫ヲ總稱シテ菾菜線虫 (Rübennematode) ト云フ卵塊ハ二層ノ膜ヲ以テ被ハル外層ハ無色ノ膜囊 (Cyst) ニシテ內層ハ母虫ノ体壁ナリ母虫ハ其一端尖リテ細頸ヲ有シ他端ハ膨レテ圓シ試ニ針端ヲ以テ組織間ノ孔ヲ探レバ此膜囊全体ヲ傷ケズシテ取出スコトヲ得ベシ各卵ハ平均其長サ〇、〇八「ミリメートル」幅〇、〇四五「ミリメートル」アリ何レモ外壁ハ膜囊ニシテ其中ニ脂肪塊ヲ含ミ少シク發達セル者ニ於テハ蟠屈セル幼虫ヲ有ス母虫ハ通常組織ノ腐敗ヲ起ス者ニシテ之ガ爲メニ己レノ住メル外方ノ厚皮ハ早晩破裂ス既ニ根ノ組織ガ破裂スレバ幼虫ハ膜囊ヲ破リテ遊離シ以テ母屍ノ外ニ出デ組織ノ破隙ヨリ地中ニ達シテ擴散シ後ニ他ノ植物ノ根ニ到リ孔ヲ穿チテ之ニ寄ルナリ其他雄虫モアリテ根組織中ニ遊離ノ際數多ノ雌虫ヲ受精セシム此動物ニ就テノ詳細ハ本月ノ動物學雜誌(第七十四號)ヲ御參照アルベシ

玆ニ少シク不可思議ニ覺フルヿアリ即チ根疣ノ如何ナル斷面ヲ見ルモ動物ノ寄居セル外方ノ組織內ニ嘗テ侵入ノ際穿チタル傷痕ナキヿ是ナリ然レ𪜈再考スレバ之ヲ解說スルヿ難キニアラズ抑地中ニ漂出シタル幼虫ハ其形頗ル細キヲ以テ之ガ根ノ細胞間隙ニ穿チタル溝路ハ甚狹小ナルベシ而シテ該虫ノ組織內ニ入ルヤ組織ハ其刺戟ニ應ジテ膨大シ根疣ヲ作ルヲ以テ此ノ如キ狹小ノ通路ハ全ク閉塞シテ復タ些少ノ痕跡ヲダニ止メザルハ敢テ怪ムニ足ラザルナリ

該虫ノ發見及ビ其驅除法　此虫ノ始メテ發見セラレシハ千八百六十四年ノヿナリ此病害ヲ防禦スルニハ過滿

瓦酸加里ノ稀釋液ヲ用フベシ此液ハ寄主植物ヲ害セズシテ寄生虫ノミヲ驅除スルヿヲ得ベシ

右ノ外此虫ノ寄生スル主ナル植物「フランク」及ビ「ミュルレル」二氏ノ實驗ニ依レバ寄主植物ノ主ナル者ハ單子葉門ニテハいちごつなぎ、はまにんにく等ニシテ双子葉門ニテハむらさきむまごやし、でいこ、あかつめくさ、にんじん、かはぜんご、ちしや、たうちさ、をになべな、きうり、せいやうなし、ぶどう、やまぶどう、へらをほばこ等ナリ先月下旬藤井健次郎君ハ「つるむらさき」ノ根ニ於テ同虫ヲ發見セラレタリ

圖解

(1) 根ノ病害ニ罹リ根疣ノ生ジタル狀ヲ示ス

(2) 根疣ノ横斷面—下方ニアルハ維管束、周邊ニ近キ大孔ハ動物ノ蟄伏セル圓孔

(3) 厚皮內ニ於ケル圓孔ヲ廓大シタルモノ

(4) 妊娠セル母虫—尖頭ニ球狀ノ者ノ見ユルハ喉頭、屈曲セル管ハ卵巢、楕圓形ノ者ハ卵、球形ノ者ハ脂肪塊

(5) 遊離シタル幼虫

(6) 膜囊中ニ幼虫ノ蟠屈セルモノ

(7) 卵ノ脂肪塊ヲ有スルモノ

奥州地方植物採集畧記（前號ノ續）

池野成一郎

八甲田山

八甲田山ハ青森ノ東南ニ聳立シ其脈東北ニ走リテ高田大岳、大坪山、烏帽子岳等トナリ南ニ走リテ赤倉岳、

櫛ケ峯、十和田山等トナリ東北ニ走リテ乘鞍、八幡、戸來ノ諸山トナリ西ニ走リテ淺瀨、三ツ森等ノ諸山トナル以上之ヲ八甲田山脈トス（以上青森縣地誌ニ據ル）八甲田山ハ八甲田山脈ノ最俊ナルモノ其高サ海拔一千八百五十「メートル」（農商務省地質局出版日本帝國全圖ニ據ル）陸奥國第一ノ高山タリ

八甲田山ハ之ヲ青森町ヨリモ望ムベク叉弘前市ヨリモ望ムベシ凡ソ此山ニ登ラントスル者ハ先ヅ青森町ヨリ南行凡二里横內村ニ至ルヲ要ス横內村ハ八甲田山ノ麓タリ横內ヨリ登ルヤ其初メ凡三里ハ一面廣漠タル草原ニシテきゝやう、おみなへし、おにゆり、うつぼぐさ等、盛ニ茂生スル所トス進ンデ灌木帶ニ入ル道漸ク俊險然レ𪜈馬ハ此所ヲ通行シ之ヲ經ルヿ大凡三里酸ケ湯ニ至ル酸ケ湯ハ硫黃泉ニシテ粗末ナル小屋ヲ設ケ以テ夏時浴客ノ宿泊ニ便ス但其小屋ノ構造ハ先ヅ丸木ヲ以テ低キ小屋ノ骨格ヲ造リ藁吳坐ヲ以テ屋根トシ床ハ地上ニつが等ノ小枝ヲ敷詰メ上ニ吳坐ヲ敷ク一見田舍屋ノ雪隱ニ彷彿タリ浴場ハ小屋ノ近傍ニ設ク其造構頗ル粗ニシテ且屋根ノ設ケ無ケレバ浴中ニアルモ晴天ニハ頭ヲ日ニ曝ラサレ雨天ニハ頭ヨリ雨ヲ被ムルノ覺悟ナカルベカラズ固ヨリ都人士ノ入浴ニ適セザルナリ且米ノ如キモ小屋ニハ是無キ故山麓ヨリ必ズ持參スルヿヲ忘ルベカラズ

抑ゝ八甲田山ニハ八峰アリ酸ケ湯ヨリ八峰孰レヘモ登ルベシ然レ𪜈八峰悉皆登ランニハ夥多ノ時日ヲ要ス憾ムラクハ余時日ニ限アリ因テ其最高峰ニ登ル之ヲ大岳ト爲ス酸ケ湯ヨリ大岳山頂ニ至ル僅ニ二里弱ニ過ギズ其道初メ凡ソ一里ハくまざゝ人身ヨリ高ク叢生、僅ニ軀ヲ入レテ以テ進ムベシ之ヲ過グレバ硫噴洞ニ出ヅ硫臭紛々岩石散在乘リ越エ乘リ越エ登レバ灌木、はひまつ雜生スル所ニ至ル之レヨリ道漸ク險惡、暫時ニシテ山頂ニ達スはひまつトがんかうらんト盛ニ繁殖シ恰モ毛氈ヲ敷詰メタルガ如シ頂上ニハしらねにんじん、い

はぎゝやう、まるばしもつけ、きんかうくわ、うめばちさう等アリ盛ニ繁殖ス然𪜈植物ノ種類ハ極テ鮮シ要スルニ八甲田山（少クモ大岳）ニハ植物ノ種類多カラズ後ノ此山ニ採集ヲ試ムル人ハ其心得ニテ登山シテ可ナリ

岩木山

岩木山一ニ津輕富士ト云フ弘前市ノ西北ニ屹立シ其高サ海拔千五百八十「メートル」（日本帝國全圖）陸奥第二ノ高山タリ土人ハ呼ンデ御岩木山ト云フヿ恰モ東京人ノ富士山ヲ呼ンデ御富士山ト云フガ如シ岩木山ニ登ルニハ百澤（ヒヤクザハ）或ハ岳（ダケ）等ヨリスベシ而メ其最モ普通ナルモノ百澤ヨリ登ルニアリ百澤ハ弘前ヲ去ルヿ三里、人力車ヲ通ズ二時間ニシテ達スベシ百澤ニハ岩木山神社アリ岩木山ハ其奥社タリ百澤ヨリ登山スルニハ神社ノ左方ヨリス其初メ凡ソ半町ガ間ハ喬木灌木ノ叢生スル所ニシテ之ヲ過グレバ草原ニ出ヅ草原ニハわらび、きゝやう、つりがねにんじん、みやまゝこな等繁殖ス之ヲ登ルコト大凡一里、道稍々急ナリ草原盡ル所小屋アリ小屋ノ近傍ヨリシテうろじろたで（Polygonum Weyrichi）顯出ス頂ニ登ルニハ小屋ノ右方ナル澤ニ入ル是レヨリ植物ノ狀態頓ニ變ジ許多ノ高山的植物一時ニ映發スおほみぞほゝづきアリ、もみじからまつアリ、なんきんこざくらアリわがらばなアリ、おほはぎすみれアリ、いはおかばなアリ岩石ノ上ヲ登リ越ヘテ行クヿ凡ソ半里、舊噴火孔ノ傍側ニ出ヅ噴火孔ノ底ニハ一小池アリ濁水其內ニ溜止ス此邊ヨリシテ登ルヿ二回、岩木山ノ最頂ニ達ス之ヲ御殿ト云フ頂上ニハ小屋二ケ所アリ又宮アリテ內ニ銅像ヲ藏ム富士岩ノ大ナルモノ散在シ植物ニハまるばしもつけ、いはおかばな、やまがらし、はなひりのき、しろばなへびいちご、やまはゝこ等アリ又一種ノはこべアリしらをひはこべ Stellaria Yesoensis *Max* ト稱ス北海道白老（シラヲヒ）ニ產スルヲ

以テ此名アリ又最モ奇ト爲スベキハ路傍ニ普通ナルなづな、たかのつめ、幷ニみゝなぐさノ矮小ナルモノ此宮ノ傍側ニ開花セルヿ是レナリ之ヲ下リテ其北方ニ當レル一峰ニ至ルニはひまつ盛ニ繁殖シ其間ふきづめさう、がんかうらん幷ニこけもゝノ三種雜生シ恰モ毛氈ヲ敷詰メタルガ如シ

要スルニ岩木山ノ植物タルヤ多少ノ高山的種類無キニ非ズト雖𪜈其數少ク且奇品ハ希レナリト云フモ決テ誤ラザルベキカ但百澤ヨリセズシテ他ヨリ登ラバ其植物ノ狀態果シテ如何他日ノ探撿ヲ待ツベキ而已

余ガ今回ノ旅行ニ於テ岩木山ニ登リタルモノ實ニ前後二回、一回ハ頂ニ至ラズ一回ハ頂ニ至レリ其第一回ハ八月八日ニシテ農科大學々生足立丈次郎、木下義道二氏ト共ニ登ルヿ凡ソ達頂三分二、時ニ强雨登ルヿ能ハズシテ歸ル其第二回ハ同十日ニシテ單身登山、頂ニ達スルヿヲ得タリ

（奥州地方植物採集略記終）

◎雜　錄

○繇條書屋植物雜記（其十四）

牧野富太郎

●Deutzia hypoleuca *Maxim.* 山城ニ產ス

Deutzia hypoleuca *Maxim.* (= *D. discolor* Maxim. non Hemsl.; *D. Maximowicziana* Makino.) ハ呼ンデうらじろうつぎト云フ始メ土佐ノ山地ニ發見ス葉裏帶白自ラ他品ト標異ス明治廿六年晩秋再ビ之ヲ山城高雄山ニ採收シ本年更ニ之ヲ同州比叡山中ニ見ル是ニ由テ本州ノ地殊ニ畿甸ノ間別ニ之レガ產處アルヲ知ルニ至レリ

●帝國產 Eriocaulon 屬十二種

Maximowicz 氏ノ新ニ著ハス所 (Diag. pl. nov. Asiat. VIII.) ニ從ヘバ日本產ノ Eriocaulon 即チほしくさ屬ノ諸種左ノ如シ其品十二種是レ實ニ今日ニ知ラレタル數ヲ悉シタルナリ人アリ今後更ニ之レニ加フ可キ品種ヲ發見スルアレバ吾人ハ此ニ其功ヲシテ埋沒セザラシム可キナリ

(1) Eriocaulon decemflorum *Maxim.* こいぬのひげ(新稱)、日本中部ノ地ニ產ス須川長之助之ヲ採ル (2) Eriocaulon nipponicum *Maxim.* いといぬのひげ(新稱)、横濱附近ノ地幷ニ箱根ニ採ル (3) Eriocaulon sexangulare *Linn.* (= *E. Sieboldianum* Steud.) ほしくさ、長崎、島原、寶滿山、横濱、横須賀、東京幷ニ南部地方ニ採ル (4) Eriocaulon parvum *Koern.* くろほしくさ、土佐佐川村ニ採ル (5) Eriocaulon sikokianum *Maxim.* おほいぬのひげ一名しろいぬのひげ、土佐佐川村ニ採ル (6) Eriocaulon Miquelianum *Koern.* いぬのひげ、九州ノ地、土佐幷ニ北海道渡島國ニ採ル (7) Eriocaulon nudicuspe *Maxim.* しらたまほしくさ(新稱)、本邦內ニ產ス (8) Eriocaulon Buergerianum *Koern.* おほほしくさ、横須賀、土佐佐川村幷ニ九州等ニ得 (9) Eriocaulon dicline *Maxim.* いぬほしくさ(新稱)、本邦內ニ產ス (10) Eriocaulon kiusianum *Maxim.* さいこくほしくさ(新稱)、九州島原ニ採ル (11) Eriocaulon japonicum *Koern.* やまとほしくさ(新稱)、本邦ニ產ス (12) Eriocaulon alpestre *Hook. fil.* et *Thoms.* var. β. robustius *Maxim.* ひろはのいぬのひげ、土佐佐川村、相摸箱根、横須賀、武藏東京、横濱ニ採ル

●ほしくさ屬襍記

F. Koernicke 氏著 Monographiae Eriocaulacearum (Linnaea XXVII.) 中ほしくさ ヲ左ノ如ク記セリ曰ク

Eriocaulon sexangulare *Linn.* var. β. vulgaris; foliis trinerviis.　*Eriocaulon Sieboldianum* Sieb. et Zucc. Steudel Synops. 2, 272.　*Japan:* leg. Siebold (Hb. Steudel).

ト又 J. D. Hooker 氏ハ同氏著 Flora of British India VI (1893). 中ほしくさノ學名ヲ左ノ如ク記セリ曰ク

Eriocaulon Sieboldianum *Sieb. et Zucc. ex Steud.* Syn. Pl. Cyp. 272.

ト而シテ *E. sexangulare* Mart. (non Linn.) 及ビ *E. hexangulare* Kunth. ヲ以テ之レガ異名ニ充テ又Linnaeus 氏所命ノ E. sexangulare ナル一品ハ即チ Martius 氏所命ノ *E. Wallichianum* ニシテ固ヨリ本邦普通ノほしくさニ非ザルヲ見ル由是觀之 Maximowicz 氏ほしくさヲ以テ之ヲ Linnaeus 氏ノ E. sexangulare ニ配スルハ穩ナラズ宜シク其引用スル所ノ異名即チ E. Sieboldianum. ヲ擧シテ之レヲシテ正名ノ位置ニ立タシムヘキナリ

又 Hooker 氏ハ *E. kiusianum* Maxim. ヲ以テ之ヲ E. alpestre *Hook. f. et Thoms.* ノ異名ト爲シ之レニ合セリ

●きんとらのを(新稱)

Galphimia glauca *Cav.* ハきんとらのを科 (Malpighiaceæ) ニ屬セル外國植物ニシテ帝國大學植物園ニ之レ有リ年々秋ニ及ンデ花穗ヲ出シ金黄花ヲ綴ル瓣色頗ル美ナリ呼ンデきんとらのを(新稱)トナスハ之ヲシテ稱呼ニ便ナラシメンガ爲ナルノミ

●日本産みくり屬ニ三種アリ

みくり屬ノ植物本邦ニ産スルモノ唯一種ノミ世ニ知ラレタリ即チ普通ノみくりニシテ Sparganium longifolium *Turcz.* 是レナリ然レ𪜈尙他ニ二種ノ之レト異ナルモノアリテ東京近郊ニ產スルヲ知ル一ハ其高サ普通ノみくりト相伯仲シ花穗枝ヲ分チ葉ノ長大ナル等亦宛トシテみくりノ如シ然レ𪜈果實ノ形狀ハ忽チ之レガ混淆ヲ防グニ足ル即チみくりニ比スレバ其果粒瘠長ナリ之ヲこみくり（新稱）ト呼ブ學術上ノ種名未ダ詳カナラズ一ハ其苗小ニシテ葉モ亦瘦狹、花穗單一ナルアリ分枝スルアリ果實ノ狀ハみくりニ類似ス之ヲひめみくり（新稱）ト名ク是亦種名未詳ニ屬ス此二品尙後日ノ精驗ヲ待テ更ニ其詳狀ヲ世ニ明カニセンコトヲ期ス

●まるばのさはたうがらし東京近郊ニ產ス

まるばのさはたうがらし（新稱）トハ Gratiola adenocaula *Maxim.* ノ和名ニシテ始メ土佐ニ於テ發見セラル固ヨリ新種ナリシヲ以テ Maximowicz 氏先キニ新學名ヲ附スル此ノ如シ土佐以外其產地未詳ナリシガ昨年予ハ之ヲ東京ノ近郊ニ於テ採收シタリ其彼此ノ狀極メテ能クさはとうがらしニ肖似スト雖𪜈葉形圓クシテ之レニ異ナレリ又花ニ梗ヲ有シ瓣色紫ナルニ由テ容易ニ之ヲおほあぶのめ Gratiola japonica *Miq.* (= *G. micrantha* Fr. et Sav.) ト判ツヲ得ベシおほあぶのめハ其花ニ梗ナク瓣色ハ白シ亦東京ノ郭外ニ產ス

●Montia fontana *L.* 日本ニ產ス

Montia fontana *L.* ハすべりびゆ科ニ屬シぬまはこべ（松村博士所命）ト呼ブ下野日光山中地獄澤ニ產シ明治十八年八月一日始メテ松村博士ノ採集セラレシ所ニシテ實ニ同博士ノ發見ニ由テ本邦ノ「フロラ」中亦該品アルヲ知ルニ至レリ而シテ Miquel 氏ノ同氏著 Prolusio Floræ Japonicæ, p. 352. ニ載スル所ノ Montia fontana ハ即チ Dopatrium junceum *Hamilt.* (あぶのめ) ヲ誤認セルモノニシテ固ヨリ本然ノ品ニ非ラズ松村博士先キニ本誌上ニ於テ本品ノ我邦ニ產スルコトヲ報告セラレ近時復タ同博士著日光山植物目錄ニ收錄セラル乃チ本

邦「フロラ」ニ新ニ一稀種ヲ加フルニ及ビ本邦產すべりびゆ科ハ此ニ至テ正ニ三屬ヲ含ムニ至レリ

○黴菌ニ對スル光線ノ作用

安田篤

「マーシヤル、ウヮード」氏ハ日光ヲ組成セル光線ノ中何レガ最黴菌ヲ殺スニ効アルヤヲ實驗セシガ其結果タル啻ニ吾人植物學者間ニ面白ミヲ與フルノミナラズ實ニ人生ノ幸福上大ナル利益ヲ與フルモノト謂フベシ氏ハ「ばちるす」ヲ照スニ撲滅光線ヲ除去スル一種ノ色幕ヲ以テセシニ該黴菌ハ日光ノ全ク來ラザル場合ト同ジク容易ニ發芽セリ凡ソ植物ハ通常日光中ニアル青色及ビ紫色ノ二光線ヲ排除スルガ爲赤、橙、綠等ノ色幕ヲ具フル者ニシテ彼ノ葉綠ハ全ク此作用ヲ有スル者ナリ馬鈴薯病ノ曇陰ノ日ニ於テハ霽冷ノ日ヨリモ速ニ蔓延シ成熟シタル葡萄ノ外面ニ附着スル一種ノ黴菌モ日光ノ照スヿ烈シケレバ終ニ死スルヲ見レバ全ク其死生ノ光線ニ關スルヿヲ知ルベシ或場合ニハ日光ガ水中ニアル胞子ヲモ殺スヿアリ但シ是等ノ胞子ノ熱ノ爲ニ死スルニアラザルヿハ日光ニ依ラズンバ更ニ高キ熱度ニ曝スモ猶能ク死セザルヲ以テ疑ヲ解クベキナリ氏ハ膠質板上ニ五百萬個ノ微胞子ヲ置キ其一部ヲ日光ニ照サシメ他部ヲ膠質ニテ被ヒタルニ此被護セラレタル胞子ハ何レモ萠芽シタルガ直接ニ日光ヲ受ケタル者ハ悉ク死セリ氏ハ種々ノ撿究ノ結果終ニ黴菌ヲ撲殺スル光線ハ青色及ビ紫色ナルヲ知レリ是ヲ以テ考フレバ生体ノ冬日ヨリモ夏日ノ日光ノ爲ニ早ク死スルヿ晴天ハ曇空ヨリモ生体ノ繁殖ニ不利ナルヿ直接ノ日光ハ反射若クハ放散シタル日光ヨリモ遥ニ生体ヲ殺スニ効アルヿハ其理自ラ明白トナルベシ又電氣燈ノ病院或ハ滊車等ニ於テ消毒ノ功用アルヿモ以上ノ事實ト一致セリ「レグナード」氏等ハ青色及ビ紫色ノ光線ハ四百「メートル」ノ深水中ニモ入込ムト云ヘリ現ニ此說ヲ助クル事實ハ窒扶斯黴菌ノ夏日深泥ナル水中ニ落ツルヤ泥中ノ諸物質ハ之ニ榮養ヲ與ヘ且ツ侵入セル撲滅光線ヲ妨グル

ヲ以テ大ニ繁殖スルヿ是ナ

(The Gardeners' Chronicle. No. 402—Vol. XVI.)

○「バクテリヤ」ノ説　（承前）

K・D・山人纂譯

第十一章　不潔ノ水及食ハ黴菌病ノ源ナリ

上來章ヲ追フテ說キ來レル如ク英國ニ於テ普通感染スル黴菌病ニシテ既ニ吾人ノ明知シ得タルモノハ肺疾實布的里亞窒扶斯肺炎及ヒ破傷風即チ是レナリ

是等ノ黴菌病毒ハ患者ヨリ吐出セラレタル後速ニ消毒セラレサルヨリ若クハ他ノ方法ニヨリテ人々ニ傳染スルモノナルコト及ヒ是等有毒ナル黴菌ガ更ニ蔓延スルハ空氣食物及飲料水ニ因ルモノニシテ若シ是等ノ中ニ黴菌ヲ含有スル時ハ不健康ナル人並ニ感受シ易キ性ヲ有スルモノハ忽チ其侵ス所トナルヲ免レザルコトモ既ニ論ジタリ

以上ノ疾病ハ病者ト健康者トヲ問ハズ多クハ下等社會ノ人々カ團聚セル處ニ於テ一層其傳染ノ氣燄ヲ逞ウスルカ如シ是不潔不淨其物ガ有害ナルニ非サルモ常ニ病毒ヲ有スル黴菌ハ是等不潔物ト相混ジテ離ルベカラザル關係ナレバナリ之ヲ約言スレバ不潔ナル不潔物ト有毒ナル不潔物トハ各〻相異ナレドモ恒ニ相合シ易キモノナリ

不潔ナル瓦斯モ不潔物ノ堆積モ如何ニ滋養ナラザルモノモ如何ニ人々相群居スルモ共ニ決シテ有害ナル疾病ヲ發生スルモノニ非ス然レトモ疾病ヲ發生スベキ黴菌ハ常ニ何處如何ナル處ニモ生存スレバ不潔不健康ノ如キハ大ニ疾病ヲ起スノ機會タルニ力アルノミナラズ其病症ヲシテ重カラシメ或ハ遂ニ死ヲ效サシムルノ助ト

ナルモノナリサレド決シテ不潔ソレ自身ニ疾病ヲ生スルニハ非ラサルナリ抑〻黴菌病ノ蔓延ヲ防クニハ如何ナルコトヲ爲サヽルヘカラザルヤトイフニ其手段ニ二アリ第一ハ衛生局ノ官吏ノ如ク職務ヲ有スル人々ガ豫防手段ヲ實行スルコト第二ハ各個人自ラ注意シテ豫防スベキコト是ナリ而シテ政府カ傳染病ヲ撲滅シ清淨法ヲ行フニ當リテ取ルベキ手段方法等ヲ論スルハ本書ノ目的ニ非ラザルカ故ニ玆ニ之ヲ略ス

傳染病ハ其慘劇實ニ畏ルベシト雖モ其實多數ノ人命ヲ亡失セシムルコト潮ノ生スルガ如ク來ルモノニ非ス然レドモ其之ヲ致サシムルノ禍根ハ常ニ人々ノ間ニ存スル黴菌病是レナリトス然ルニ誰モ實際大ニ畏ルベキモノタルコトヲ常ニ心ニ思ハサルノミナラズ衛生ヲ掌ル肝腎ノ官吏ニ在リテモ常ニ之ニ注意スルコト鮮ナク只其病ノ發生スル時ノミ倉皇之カ撲滅法ヲ講究スルノ觀アルハ誠ニ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ人生ノ通路ニ於テ吾人ト相戰フベキ黴菌毒ハ既ニ設ケルガ如ク普通ノ場合ニ在リテハ食物空氣及水中ニ存在スルガ故ニ爰ニ食物空氣及水ニ就キテ少シク詳說スル所アラントス

○Alpen ノ植物ノ葉ノ構造ト其生理上ノ關係

Junsbruck ノ A. Wagner 氏ハ Alpen 山ノ植物ノ葉ノ構造ガ其周圍ノ狀況ヨリ如何ナル影響ヲ蒙ルカヲ研究セントシ此目的ヲ達センガ爲メニ凡ソ百種ノ植物ヲ撰ビテ材料ニ供シタリ此等ノ植物ノ一半ハ即チ Alpen 所々ノ高地ヨリ採集セルモノニメ高サハ二百八十米ヲ限トス一半ハ Junsbruck ノ植物園ニ採リ以テ比較研究ニ供シタリ最モ此等ノ材料ヲ採ルニ當リテハ孰レモ日光ニ能ク露出スル所ヲ擇ビタリ研究ノ結果ハ二回ニ分テ報告セラル

第一回ニ於テ氏ノ講ズル所ロハ解剖學上ノ發見ニアリ概メ Alpen 植物ハ Assimilation ノ作用ノ著シク發達

セル點ニ於テ一致セザルモノナシ一般ニ高地ニ產スル植物ノ Assimilation ノ組織ノ發達セルヿ之レヲ低地ニ產スル同一種ノ植物ニ比シテハ其差霄壤モ啻ナラザルナリ或ハ Pallisaden ノ延長ニ依リ或ハ其ノ數ノ增加ニ依リ或ハ兩方ヲ兼ヌルニ由リ畢竟 Pallisaden ノ組織ハ高地ニ於テ著ルシク發達スルモノタルヿ疑フ可カラズ氏ハ是レニ由テ亦完全ナル Dorsiventral 葉ノ完全ナル Isolateral 葉ニ移リ行クノ狀態ヲ觀察シ又完全ナル Isolateral 葉ヲ有スルモノモ少カラザリキ是等ノ關係ヲ說明スル例證ハ氏ノ示セル表ニ於テ明カナリ然レ𪜈又特ニ高地ニ於テ Pallisaden ノ減少スルモノナキニ非ズ是レ等ハ別ニ說明ヲ附セリ去レ𪜈全ク Pallisaden ヲ欠ケルモノハ一モアルヿナシ

Spaltöffnung ノ分配ニ就テハ往來世人ノ屢〻稱スル如キ專ラ葉ノ下面ニ多シト云フノ說ハ實ニ Dorsiventral ノ葉ニ於テモ此所ニテハ其ノ効力ヲ失フ者ノ如シ氏ノ研究シタル植物ノ百分中八十四分ハ Stomata ヲ葉ノ兩面ニ有シ三十九分ハ上面ニ於テ著シク多數ヲ有セリ又其二十五分ハ上下殆ント同數ヲ有シタリ今氏ノ示セル表ヲ取テ之レヲ Kareltschikoff 及 Weiss 著作中ニ揭ケタルモノニ比スル時ハ Alpen 植物ニハ此種ノ Stomata ノ分布ヲ見ルヿ低地ノ植物ニ見ルヨリハ遙カニ多キヲ知ル可シ氏ハ此ノ例ト〆毛茛科ノ植物ノ數種ニ就キ比較的解明ヲ與ヘタリ又 Schliesszellen ノ構造ノ簡單ナルヿ及其ノ位置ノ多クハ Epidermis ノ平面上ニ在リ若クハ屢〻平面外ニ出ヅルヿアルヲ見レバ過度ナル蒸發ノ危險ナキヤ明カナリ此ノ事ハ Epidermis ノ增厚ノ小ナルヿ Trichom ノ保護甚シカラザルヿニ由テモ知ラル可ク又 Mesophyll ノ結合ノ極メテ緩ニ〆甚ダ屢〻細胞間隙ノ構造ヲ Pallisaden ノ組織中ニ見ルヿニ由テモ明白ナリ特ニ Pallisaden 組織中ノ間隙ハ上面ニ Spaltöffnung ヲ有スル葉ニ於テ著ルシ

第二回ニ於テ氏ハ生理上ノ關係ヨリ及ボス影響ヲ論ジタリ其ノ結果ハ誠ニ次ノ如シ外界ヨリ Assimilation ノ機關ノ發達ヲ促ガスニ三種ノ因子アリ第一ハ高山ニ於テハ日光ノ强サ大ナルヿ是レナリ、之レ一ハ空氣ノ密度ノ減ズルニ由リ一ハ其ノ絶對ノ濕度ノ小ナルニ由リ屈折少ク從テ Assimilation ノ作用ニハ最モ有効ナル光線ガ吸收サルヽヿモ亦タ極メテ少ナキニ由ルモノトス例之ハ二千米ノ高地ニ於テハ既ニ二倍ノ Energie ヲ以テ Assimilation ノ作用ヲ起スガ如シ第二ハ空氣中ニアル炭酸瓦斯ガ地ノ上ルト共ニ大ニ其ノ量ヲ減スルヿ是レナリ、[illegible]空氣ハ益々稀薄トナルニ由リ同容積中ノ炭酸瓦斯ノ重量ノ減少スルヿ固ヨリナリ蓋シ容積上空氣ト炭酸瓦斯ノ割合ハ不變ナレバナリ氏ハ是事ニ關シテモ一表ヲ作レリ是レニ由テ觀レバ二千八百米ノ高地ニ在ル植物ガ一立方米ノ大氣中ヨリ攝取シ得ル炭酸瓦斯ノ重量ハ五百八十米ノ地ニ於テスルヨリモ〇、一一五瓦丈ケ少量ナリ故ニ甲地ニ於テ乙地ト同量ノ炭酸瓦斯ヲ攝取センガ爲メニハ二百七十一立丈ケ多量ノ空氣ヲ其ノ Assimilation ノ組織中ニ通ズルヲ要ス是レ單ニ Assimilation ノ細胞ノ增加スルノミナラズ實際細胞間隙及之レヲ導ク孔口ノ充分ニ備ハルアリテ大ニ空氣ノ流通ヲ便ナラシムル所以ナリ、第三ハ生長時ノ極メテ短縮セルヿナリ蓋シ生長ノ時季短カケレバ其レ丈ケ Assimilation ヲ盛ニナスノ必要アリ、氏ハ Pallisaden ノ減ズル僅少ノ場合ヲバ一ハ其氣候ガ一般ニ植物ヲ弱ムルト共土地ノ特性ノ影響ニ歸シ一ハ其植物ノ內部ニアル特別ノ條件ニ歸セリ、而メ上ニ陳タル因子ガ Pallisaden ノ形成ニ幾多ノ效力アルカハ種々ノ植物ガ自分ニ Pallisaden ヲ形成スルノ傾向ト其能力トヲ如何ナル程度ニ於テ遺傳的ニ固有スルカニ關シ又植物ノ各種類ノ適應性ノ如何ニ由ルモノトセリ即チ低地ニ於テモ既ニ Pallisaden ノ形成ニ充分ノ傾向ヲ有スルモノハ高地ニ於テ其完成ヲ來スヿ Pallisaden ノ形成ノ極メテ少ナキモノ或ハ更ニ之レ無キ

モノニ比シテハ遙カニ盛ナリ

通例蒸發ノ過度ヲ制スル爲メニ種々之レニ對スル防禦ノ機關發達スルモノナレ𪜈 Alpen 植物ノ葉ニハ通メ此等ノ保護機關ヲ見ザル原因ハ空氣ノ温度ノ大ナルト總メ土地ノ濕氣ヲ含ムヿ大ナルトニ由レリ然ルニ一二ノ常綠葉ニアリテハ雪融ノ節大地ノ温度大ニ下降シ同時ニ強キ日光ニ曝露スルニ由リ蒸發增進シテ過度ニ至ルノ懼アリ故ニ此樣ノ植物ニハ特別ニ著ルシキ保護機關ヲ見ルナリ

蒸發ノ減ズルニモ係ラズ Alpen 植物ノ葉ハ毫モ Palisaden 組織ノ退步ヲ來サズ反テ益々其ノ增進ヲ見ルノ事實ヲ以テ氏ハ Heinlicher 及 Volkens ノ研究ノ結果ニ參證シ Mesophyll ノ構造ヲ支配スルモノハ蒸發ノ作用ニアラズシテ主トメ Assimilation ノ作用ナルヿヲ確知セリ其ノ關係ヲ詳言セバ

Pallisaden ノ數ト其ノ大サトハ獨リ Assimilation ノ割合ニノミ關シ細胞間隙ノ構造ハ又蒸發ノ割合ニモ關スルモノナリ　(Botanisches Centralblatt 1894. Nr. 11)　わ、ひ

○合衆國ニ於ケル日本産李果ノ評判

市、塘

古クハ千八百七十年頃合衆國かりふおるにや州ばかびれい地方ニはうト云フ人アリテ日本駐在ノ合衆國領事ぶれっじ氏ノ手ヲ經、日本國ヨリ數種ノ李樹ヲ需メ得シガ後之はじおんけるしゐ氏ノ所有ニ歸セリ此內一種ハ千八百七十六年ニ至リ始テ豐熟ナル果實ヲ結ビタルニ由リ後人ハ同氏ノ名譽ヲ後世ニ傳フル爲メ該變種ニけるしゐノ名稱ヲ付セリ當時かりふおるにや州ノ種樹家ハ是ヲ以テ培養スルノ價値アリト確信シ大ニ舉テ日本産李樹植種事業ヲ擴張セントㇳ企テタルハ今ヨリ僅カ十來以前ノヿトス爾年るさ、ぱるばんく等諸氏ハ駸々乎トシテ日本國ノ數變種ヲ輸入シタルニ實ニ案外ニモ其多數ハ我北部地方ニ適合シタリキ是ヲ以テ過ヌル四

五年間ニ於テ日本種李果ハ近來輸入シタル他國產果實ヨリモ一層評判ヨクナリシハ敢テ怪ムニ足ラザルナリ尤モ其最良品ハ我國產ノ李果ト其性質殆ボ相似タレトモ概シテ前者ハ後者ノ最良品ニ劣レリト雖モ果實ノ堅固ナルコト豐ナルコト病害ニ罹ラザルコト形貌美麗ナルコト及ビ久ク貯蓄シ得ルコト等ハ殊ニ前者ノ歎美スベキ特性ト謂ツベシ

所謂日本種ノ李ナル植物ハ Prunus triflora ノ變種ニ屬シ野生ハ未ダ嘗テ之ヲ見タルヿナシ多分其原產地ハ支那ナラン今ヤ既ニ其變種三十有余ガ合衆國ノ諸處ニ散植セラルヽニ至レリ果實ノ形狀ハ如何ニト云ヿニ先ツ其頂端尖リ全体心臟形ヲ呈ス且ツ一方ニ深縫線ヲ具ヘ中央ノ種窩ハ翼狀隆起著シカラズ漿肉ハ熟後可ナリ久ク保存シ得ベキヲ以テ我國產ノモノト區別スルモノトス植物學上ヨリ論ズレバ此等ノ李樹ガ我通常培養ノ李樹ト異ナル點ハ淡色粗疎ナル樹皮ノ關節ニ於テ三箇或ハ四箇ノ冬芽ヲ出シ決シテ後者ノ如ク一冬芽ノヿナキニアリ從テ花ハ常ニ二三相叢生ス葉ハ長倒卵形若クハ楕圓形ニシテ細鈌刻アリ其他ノ性質ハ各相類似ス然レ𪜈此數十變種ノ輸入樹中ニモ寒暖ニ對シテハ隨分健康度ヲ異ニシ假令ヘバけるしゐ種ノ如キハびるじにやノ南方及ビ太平洋岸ノ暖地ニ於テノミ適生スト雖他ノ數變種ハこんねくてかつと、おんたりお、紐育及ビゐおうノ寒地ニ於テモ猶健全ナルガ如シ目下紐育ノ李園ニ於テ充分健全ナルハはるべつく、わばんだんす、うゐらわと、おでん、さつま、しやぼつと、よせふ、及ビびるがわノ諸變種トス此等ノ熟果期ハ七月中旬ヨリ九月中頃ニ至ルノ間ニシテ假令ヒ同變種ト雖モ毎年必ズシモ同時期ニ熟果セズけるしゐハ就中甚シク大丈夫三ケ月位ハ變更受合ナリ市場ニ持出スヲ見ルニ最モ早ク熟スルハういらわどニシテ次ニおでん、わばんだんす、べるくまん之ニ嗣クはるべつくハ稍遲クけるしゐハ最モ遲シ何レモ菓實ハ大抵數日乃至二週間モ貯蓄ニ堪ユ

特ニさつまハ北方種樹家ノ經驗ニヨレバ最モ貯蓄ニ適スト云フ多數ノ變種ハ赤色ノ果實ヲ結ビ漿肉ハ黄色ナリ只さつまノミハ深紅色ノ漿肉ヲ有ス又四變種ハ漿肉黄色ナレ𪜈離核スルヲ以テ異レリ尚現今日本國ニハ未ダ亞米利加ニ着達セザル數多ノ良變種アルヤ疑ヲ容レズ玆ニ聊カ惜ムベキ弱點ト云フベキハ日本李樹ノ開花期ノ早過ギルヿ及ビ果實ヲ腐敗セシムル菌類ノ附着シ易キヿナルガ是黒斑點葉凋或ハ米牛加害ノ爲ニアラザルヲ記憶スベシ

誠ヤ日本種李樹ハ果實トシテ我種李樹ヨリモ遙ニ佳良豐饒ナルモノヲ結ブト雖モ如何セン風土ノ異ナルアリ亞米利加中ニテモ或處ニ於テハ能ク其好點ヲ發達セシムルモ或處ニ於テハ寧ロ其弱點ヲノミ發達セシム因テ余ハ廣ク我種樹家ニ忠告セントス凡テ我種李樹培養ヲ中止セズシテ倦迄努力忍耐スベシ決シテ日本種李樹ヲ以テ之ニ代フルノ愚ヲ學ブ勿レト蓋シ吾人ハ專ラ收獲ノ點効用ノ點ニ於テ最モ卓越ナル好適種ヲ擇バザルベカラザレバナリ元來日本植物ノ輸入ハ吾人ヲ裨益スルヿ尠ナカラズト雖モ國家富源ノ基礎ヲ堅メントシテ李樹培養ヲ企ツルナラバ寧ロ風土ニ適合セル自國種李樹ヲ養成スルニ如カズト余ハ信ズルナリ

以上ハガルデン、エンド、フオレスト記者ノ持論ナリ誰シモ自負心愛國心ハアルモノナレバ此言ヲ做スハ左モアルベキヿナレド日本種ヲ內裏ニ賛賞シテ措カザルノ念焔ハ蔽ハント欲シテ却テ顯ハルヽモノアリ呵々以テ日本國種李果ノ良品タルハ此評判ニテモ知リ得ベシ

○樹木生活ノ起原（承前）

安田篤

此ノ如キ植物生活史上忽セニス可ラザル二大境系ハ上中古代ニ於テ大ニ吾人ノ注意ヲ惹クニ至リ白堊紀及ビ第三紀ニ於テハ其勢力ノ盛ナル忽チ亘遠ノ範圍ヲ占得シ近世ニ至テハ其極終ニ地球上ニ巨大ナル植物領園ヲ

作レリ彼ノ石炭紀ニ當リ濠洲、印度及ビ「ケープコロニー」ニ於テ氷原ノ存在セシヿハ蔽フ可ラザルノ事實ニシテ加之其前後ニモ同ジク氷原ヲ有スル寒地アリシヿモ亦頗ル信ヲ置クニ足ルベキガ如シ抑氷原ノ起源タルヤ大陸ノ發達及ビ海洋ノ廣袤ニ關スルハ論ヲ俟タズト雖亦唯一時地球行道ニ於ケル運行ノ擾動ニシテ氣候帶ノ發達ヲ妨障スベキ者ニアラズ隨テ全世界ノ純同ナル狀態ハ漸ク熱温寒ノ三帶ニ移リ爲ニ植物界ニ大影響ヲ與ヘタリ白堊紀ニハ北方ノ森林中ニ蘇鉄類、松柏類、椰子類、堅木類ノ互ニ比肩シテ並列スルアリ其團集ノ奇ナル蓋シ今日ノ植物學者ヲシテ一考セシムレバ則チ惑ナキヲ保セザル程ナリト雖此ノ如キ雜林ノ存在セシヲ觀レバ當時ノ比較的純同ナル氣候ヲ想像スルヿ難キニアラズ

人若シ氣候帶ノ發達ヲ見ント欲セバ須ラク樹木生活ノ如何ヲ檢セヨ當時熱帶ニハ植物ノ發育ニ最適應シタル温熱並ニ濕氣アリ寒帶ニハ凛烈タル冷氣アリ温帶ニハ二者ニ半バスル狀態アリ然リ而シテ是等ノ雜林ヨリハ其各地ニ適シ得ベキ樹木團群ノ撰擇行ハレシガ其理ノ存スル所ヲ尋ヌルニ單ニ椰子類ハ熱ヲ好ミ松柏類ハ寒ヲ嗜ミ堅木類ハ温ヲ欲スルガ爲ナリト説ク者アレ𪜈余ハ全ク之ニ服スル能ハズ論者試ニ思ヘ現今松柏類ハ熱地ニ繁茂シ堅木類及ビ椰子類ハ共ニ嘗テ「グリーンランド」ニ發生シタルニアラズヤ然ラバ此三群ヲ分離セシメシハ寒熱ノ嗜好ノ爲ニ非ズ〆生存競爭ノ結果タルヿ知ルベキ也三群中最古ク盛ニ權威ヲ弄セシ者ヲ松柏類トシ其性頗ル變潮ニ抗シ反情ニ贏スルニ適セリ之ニ次デ荳莢類アリ椰子類ハ三群中最孱弱ニ〆其基礎甚危殆ナルヲ免レズ唯其自ラ恃ンデ以テ前二者ニ對峙スル所ノ者ハ已レニ最適應シタル氣候ノ存在ニ由ルノミ故ニ一旦寒氣ノ極地ヨリ漸進スルヤ直ニ熱地ニ退陣シ此處ニ堅壘ヲ築キ威力能ク強敵ヲ壓シ其勢頗ル當ル可ラザル者アリ而シテ荳莢類及ビ松柏類ノ熱地ヲ退キシモ既ニ前ニ述ベタル如ク敢テ自ラ熱ヲ好マザリシニ非ズ〆

全ク自由ノ空氣ヲ呼吸センガ爲ナリ夫レ然リ故ニ其性ノ能ク非熱帶ノ寒氣ニ堪フルヲ利シ以テ競爭場裡ニ馳騁スルノ煩ヲ脫セリ今ヤ熱帶ハ主トシテ椰子類並ニ木狀羊齒類、蘇鐵類ノ遺裔ノ占ムル所トナリ松柏類ニ至テハ殆ト其足跡天下ニ普ネカラントス忍耐不拔巧ニ始原、太古、中古、近古ノ四代ヲ歷テ亞極地方ノ嚴寒ニ抗セシハ實ニ松柏類ノ長處也葇荑類ハ寒氣ノ向進ニ先チ其路ヲ溫帶ニ求メ全力ヲ盡シテ松柏類ト戰ヘリ凡ソ是等樹木ノ戰鬪タル今日ノ森林中ニ雄視スル者ノ容姿ヲ察スレバ思ヒ半バニ過グル者アラン輓近ノ一學者說ヲ爲シテ曰ク往古ノ「あーまぢろー」ノ体ヲ被ヘル鎧甲ヲ見レバ當時ニ於ル激戰ノ跡ハ歷々トシテ蔽フ可ラザルガ如ク今日ノ Sequoia gigantea ニ見ル聳天抱圍ノ莖幹ハ轉タ白堊紀及ビ第三紀ノ古森中ニ起レル爭鬪ヲ憶想セシムルニ足ル者アリト旨アル哉論者ノ言ノ如キハ能ク其肯綮ヲ得タル者ト謂ベシ　（未完）

○植物家ノ深海探撿

丁抹政府ハ曩キニ綠州（グリンランド）及ビ氷州（アイスランド）近傍ノ深海探撿問題ヲ議決シ愈〻來千八百九十五年ヨリ一ケ年間ノ見込ヲ以テ該事業ニ就事スルコトハナレリ同一行ニハ植物家モ加ハル由ナレバ吾人ハ其珍奇ナル報告ニ接スルヲ鶴首スルト同時ニ我國ニモ斯カル事業ノ盛大ニ趣クヲ希望シテ止マザルモノナリ　（T、I）

○煙草植物中ニコチンノ所在

ニコチンハ煙草ノ種子或ハ其嫩植物ニ存セズ然レ圧充分生育シタル根ニテハ厚皮組織ニアリ又枝、葉柄、葉片、蕚及ビ花冠ニアツテハ主ニ表皮細胞中ニ之レアリ特ニ毛ノ本ノ細胞中ニ存ス故ニ葉ノ含綠組織中ニハ之レナシ要スルニニコチンノ煙草植物中ニ存在スルハ防禦的ノ爲メニ貯フルニアラズシテ一種ノ排泄物トシテ入ルモノナリト　Jour. Micro. soc. 1894. Part. 3.　安井抄譯

◎東京植物學會錄事

十一月廿四日午後二時ヨリ植物學講義室ニ於テ月次例會ヲ開キ、先ツ大久保三郎君ハ「地生羊トハ何ツヤ」テフ演題ニテ Vegetative-lamb ノ來歷ヲ叙述シ畢竟旅客ガ羊齒科ノ Dicksonia Barometz Link.（雜誌第九十二號四一三頁ニ詳說アリ）ノ根莖ヲ用ヒテ戯造セルモノナリトノ說ヲ取リ地生葉トハ蓋シ此戯造物ノ被レル軟毛、其血液トモ紛フ液汁、葉柄ヲ程ヨク斷テ擬セル四肢等ノ狀態ニ眩目サレタル好奇家ノ名ケタルナラント斷案シ、其羊齒ノ腊葉（琉球產、田代氏採集）ヲ示サレタリ次テ安田篤君ハ「つるれいしノ根ノ病害ニ就テ」テフ演題ニテ君ノ實驗說ヲ詳述シ其病源ハ寄生蟲ナリト斷シテ其局部ノ標品ヲ示サレタリ終ニ會員諸君ヨリ展列サレタル數點ノ顯微鏡標品ヲ閲覽ニ供シ四時ニ至テ散會セリ

當日展列セラレタル顯微鏡的標品ハなつとうノ「バクテリヤ」（「メチールビオレット」染メ「バルサム」封裝）安井君出品　橙皮ノ油囊　市村君出品　赤松ノ根ノ生長點（「メルケル」氏液ニテ固定「デラフヒード」氏ノ「ヘマトキシリン」ニテ染メ「バルサム」ニテ封裝）池野君出品　大いぬたでノ髓ノ星狀細胞　松平君出品　紅葉ノ內容　岡君出品　つるれいしノ根ニ寄生セル害蟲　安田君出品

◎寄贈書目錄　（十二月十二日迄ニ領收ノ分）

地質學雜誌　第十四號○動物學雜誌　第七十三號　動物學會○大日本山林會報　第百四十三號　山林會○北海道水產雜誌　第拾五號　北水協會○東京醫學會雜誌　第八卷第二十一號　東京醫學會○國家醫學會雜誌　第九十一號　國家醫學會○東洋學藝雜誌　第百五十八號東洋學藝社○地學雜誌　第七十一卷　地學協會○大日本農業會報　第百五十八號　大日本農會

J. Dörfler' Jahres-Katalog pro. 1894 Des Wiener Botanischen Tauschvereins.　一冊　ヨット、デオルフレル君

Royal Gardens, Kew.—Bulletin of Miscellaneous Information. No. 89, 83.　二冊

Bulletin de L'Herbier Boissier, Tome II, No. 9, 1894.　一冊

Gardener's Chronicle, No. 405, 407.　二冊

ANZEIGE:

Im December diese Jahres erscheint der

Jahres-Katalog pro 1895

des

Wiener botanischen Tauschvereins.

(Gegründet 1845).

In diesem Kataloge werden **ca. 4000** Arten, Formen und Hybriden der interessantesten Herbarpflanzen zum *Tausche* und *Kaufe* angeboten.—Es dürfte diese Liste somit die **vollständigste** und **an Seltenheiten**, sowie **neuen Arten reichste** sein, die jemals publiciert wurde.

Der Katalog wird allen Interessanten auf Verlangen **gratis** *und* **franco** zugesandt.

J. Dörfler
Wien (Austria) I. Burgring 7.

理學士白井光太郎著

植物病理學 下編

紙數三百頁
定價金四拾錢
郵稅金四錢

此書ハ分テ上下二卷トナシ上卷ニハ總論及各種ノ緊要ナル成長要件ノ過不足ヨリ起ル病患及突然來侵スル有害ナル無機勢力ノ作用ヨリ起ル病患及人爲ノ損害ヨリ起ル病患及其防除法ヲ說キ下卷ニハ顯花植物寄生、隱花植物寄生、雜草、虫癭等ヨリ起ル諸病及其防除法ヲ記載ス學校ノ敎科用ノミナラズ農稼。林園。樹藝ノ諸業ニ從事スル實業家ノ參考ニ適用スベキ有用無比ノ良書ナリ

賣捌所 京橋南傳馬町有隣堂、神田裏神保町敬業社、日本橋區通三丁目丸善書店

東洋學藝雜誌

明治二十七年十一月廿五日發兌第百五十八號●
定價一冊金拾錢

論說●ヘルムホルツ先生小傳長岡半太郎○鮮明ナル**寫眞版**ヲ附ス●**溶液論**（承前）櫻井錠二●**浪人**ノ話三上參次●**神經**ニ就テ圖入三浦謹之助●**水雷**圖入水野敏之丞

雜錄●物理學隨筆錄第六圖入鶴田賢次●長野縣下ノ落雷水野敏之丞●東京府下肺病死亡者ニ就テノ統計I. K.

雜報●本邦理學の名●酸素の密度及其原子量●簡單なる物理實驗圖入●苛性曹達並に苛性加里溶液の比重●軍用電氣學校●コウラウシ氏●エクラージ、エレクトリック●ヘルムホルツ氏の葬儀等外數件●學會記事應問數件

發行所　東京市神田區裏神保町　**東洋學藝社**

（記事精選）**（速記彙報）**（紙數增加）

定價郵稅共金十錢●六冊前金郵稅共五十七錢

速記彙報第五十七冊出づ、日本速記倶樂部常集會速記錄、**中根**貴族院書記官長及**河田**貴族院速記課長の演說速記、石黑五十二田尻稻次郎成瀨隆藏井上毅山根正次江原素六菊池武夫澁澤榮一末松謙澄杉亨二十君の演說抄、講談家の泰斗**桃川如燕**翁の江戸時代の寄席の話、貴衆兩院速記者試驗に關する榮聞、萬國速記術の景況、其他速記彙報特有の記事數十件

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

動物學雜誌

第七拾參號明治廿七年十一月十五日發行

●壹冊金拾錢郵稅壹錢○六冊前金（郵稅共）六拾六錢●

目次生涯中ニ起ル神經細胞ノ變化高倉卯之麿君○哺乳獸の話丘淺次郎君**雜錄**動物學研究用藥劑便覽●ハマクリムシに就て●Polidontasp.●琉球このは蝶●動物分類ニ關スル目錄的書籍ノ目錄●斷●動物學小史●（アンフヰクテニダ）ノ習性ニ就テ●（サヂッタ）ノ食餌●（ノクチルーカ）ノirritability.●蟻ノ發育●有孔類ノ發生●わひすまん先生ノ新著●へるとういつひ先生ノ新著●單細胞動物ノ核ノ分裂ニ就キタル研究●日光山赤沼ノlimnadia.●採集實驗日記●廣ク諸君ノ敎授ヲ仰ク●東京動物學會●動物學雜誌索引

發賣所　東京神田區裏神保町一番地　**敬業社**

地學雜誌第六集第七十一卷目次

◉論說

●小坂鑛山（承前） 理學士 中島謙造君
●火球の話（承前） 理學博士 横山又次郎君
●筑豐煤田地質調査報文（承前） 理學士 鈴木敏君
●土壤の吸肥力と土壤の理化學的性質の關係（承前） 農學士 東條平二郎君

◉雜錄

●地質原論第十一回承前 理學博士 横山又次郎君
●上野帝國博物館地質鑛物室見物案內 理學士 神保小虎君
●地學通論（承前） 岐陽學士君
●黑龍江に關する地質地理上の書籍 神保小虎君

◉雜報

●東京地學協會の演說●地軸の變移●日本の黄錫鑛に就て●リブライトの新產地●Witherite の新產地●氣仙郡の天隕石博物館に入る●日本白堊下部植物化石一覽表●中小坂の始新石灰岩●秋田縣の地瀝青層中に土器を發見す●鹽原の溫泉●角閃の好產地●笏谷石●越後鎖談●頓野氏と高山氣象觀測●君府大地震の震域●南偕氏出迎船の難破●歐米聯絡の大鐵道●明治二十六年末の人口●山形縣下の大地震

◉批評

●矧川志賀君の日本風景論を讀む（理學士山上萬次郎）●雪嶺先生の「朝鮮に於ける蝦夷語」を評す（理學士神保小虎）●横山博士日本化石學上の新著（岐陽學人）●志賀重昂先生の日本風景論を讀む（崝南生）

◉質疑 九件 ◉應問 九件

發行所 東京々橋西紺屋町 **東京地學協會**

地質學雜誌

第十五號明治廿七年十二月十五日發行

一册金拾錢郵稅金一錢六册前金五拾四錢

目次◉論說●地震波傳達ノ速度（庄內地震につきて）理學士大森房吉君●出雲鵜峠鑛山黄鐵鑛につきて理學士比企忠君●鳥海山四近地質構造及び兩羽地震記石井八萬次郎君●吹上間歇泉岩崎重三君 **雜錄**●新曹達角閃石につきて西和田久學君●噴出岩變質論（第十一號の續）佐藤傳藏君●包藏晶体の消光方向及び二色性を驗する方法（ヴィオラ氏）小川琢治君●理學博士ドクトル原田豐吉氏逝く **質問**●一、黄王石の多色性二、烟水晶の一部の變色の理由 **雜報**●石の分壞、北海道來書一端最上川の河岸段丘、Mount Logan、地熱の利用、始新統に於ける大鳥、角閃石の重屈折と其曹達、豐後濱白の黑濱、肥前國北松浦郡江里村江里峠の第三紀砂岩上に印せる Paletherium magnum (?) の足痕、新鑛物、鹽基岩石內の「ニッケル」鑛床、肥前西の嶽輝石產地の狀態、菫青石の新產地、三斜硅石、豐後蛇紋岩の露出、肥前鼠島、御荷鉾統の別名ある輝岩、神保理學士、古生物學教科書、地質談話會記事、明治廿七年十月全國氣象摘要、各地の初雪初霜及高山の初雪、

發賣所 東京神田裏神保町 **敬業社**

廣告

理科大學教授博士松村任三先生著

日光山植物目錄

白根、男體ノ高峯、馬返ノ嶮峻、赤沼ノ曠原、金精ノ欝林其他鉢石、中禪寺、湯本等ノ勝區ニ野生スル九百有餘種ノ花卉草木ヲ盡ク網羅シタル目錄ナリ此名山勝地ヲ探撿スル內外ノ人士殊ニ修學旅行ヲ企圖セラル、教員、學生諸君ハ必ス一本ヲ備ヘサル可カラス

理科大學教授博士松村任三先生著

全一册
定價六拾錢
學名及和名索引附

和漢洋對譯 本草字典

本書ハ英語其他數十ケ國ノ語ニ於ケル植物及藥品等ノ名稱ヲ和漢兩名ニ對譯スルニ羅馬字ト假字トノ兩樣ヲ以テシ加之植物所屬ノ科名ヲモ記入シタルモノナレバ是亦坐右ニ缺クヘカラサル良辭書ナリ

池野成一郎譯

全一册
定價六拾錢

顯花植物分科撿索篇

全一册　正價二拾錢　郵稅四錢

本書ハ嘗テ植物學雜誌ニ附錄トシテ連載セルモノヲ集メテ一册トナシ別ニ詳細ナル和洋科名ノ見出表ヲ附シタルモノ也殘部有之候ニ付御入用ノ方ハ至急申込アレ

賣捌所
東京神田表神保町　**敬業社**
東京日本橋通三丁目　**丸善書店**

○本誌廣告料五號文字　一行（二十五字詰）一回金五錢
三回以上割引仕候

○本誌毎月一回發兌一册金拾貳錢○六册前金七拾貳錢

○拾二册前金壹圓四拾四錢○會員ニ限リ壹册拾錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送附相成マデ雜誌ヲ郵送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致ナレバ御屆可申候

明治廿七年十二月十九日印刷
明治廿七年十二月二十日發行

版權所有

編輯兼發行者　東京市神田區錦町三丁目一番地　井上蘇吉
印刷者　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田宜遜
印刷所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田活版所
發行所　東京市神田區裏神保町一番地　植物學雜誌編輯所
賣捌所　同所　敬業社
同　東京市日本橋區通三丁目　丸善書店

314179

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

明治廿一年二月三日内務省許可

Vol. 8.] December 20, 1894. [No. 94.

CONTENTS.

Gymnogramme Makinoi Maxim. By **T. Makino.** 481

Additions to Messrs. Matsudaira and Ikeno's List of the Siphogams of Mt. Iwate, Nambu. By **Prof. Dr. K. Miyabe.** 483

Marine Algæ of Tosa. By **Kintarō Okamura.** 489

Distribution of Plants of Mt. Fuji. By **Tsutsumi Ichimura.** 495

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæia. By **Komajirō Sawada.** 497

On a Root-Disease of Momordica charantia, L. By **Atsushi Yasuda.** 499

Botanical Excursion to the Northern Part of Japan. (Continued from No. 93). By **Seiichirō Ikeno.** 502

Miscellaneous:— 505

Miscellaneous Notes on the Plants of Yōjōsho-oku'.—Action of Light on Bacteria.—Bacteria.—Structure of the Leaves of Alpine Plants and its Physiological Significance.—Japanese-Plum.—Origin of Tree-Life.—Botanical Investigation of Deep-sea.—Localization of Nicotine in the Tobacco Plant.—Proceeding of the Tōkyō Botanical Society.—Publications Received.

All letters and communications to be addressed to the
TŌKYŌ BOTANICAL MAGAZINE.
No. 1. Urajimbōchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

明治廿六年六月三十日遞信省認可 印刷所 東京市神田區錦町三丁目十五番地 熊田活版所

THE LIBRARY OF CONGRESS
1800

Class QK1

Book B33

SMITHSONIAN DEPOSIT